

愛の調整は難しい

粗茶Returnees

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「思春期」「反抗期」「若気の至り」etc。

若さの特権または免罪符。それに甘えずに理性を働かせながら学生生活という名の青春を送る人たち。

それでも芽ばえた気持ちは止まらないのです。

目次

第1部

第1話

1

第1話(裏)

9

第2話

17

第3話

26

第4話

35

第5話

44

第6話

54

第7話

64

第8話

72

第9話

81

第10話

88

第11話

99

第12話

107

第13話

115

第14話

124

第15話

136

第2部

第16話

149

第17話

158

第18話

170

第19話

179

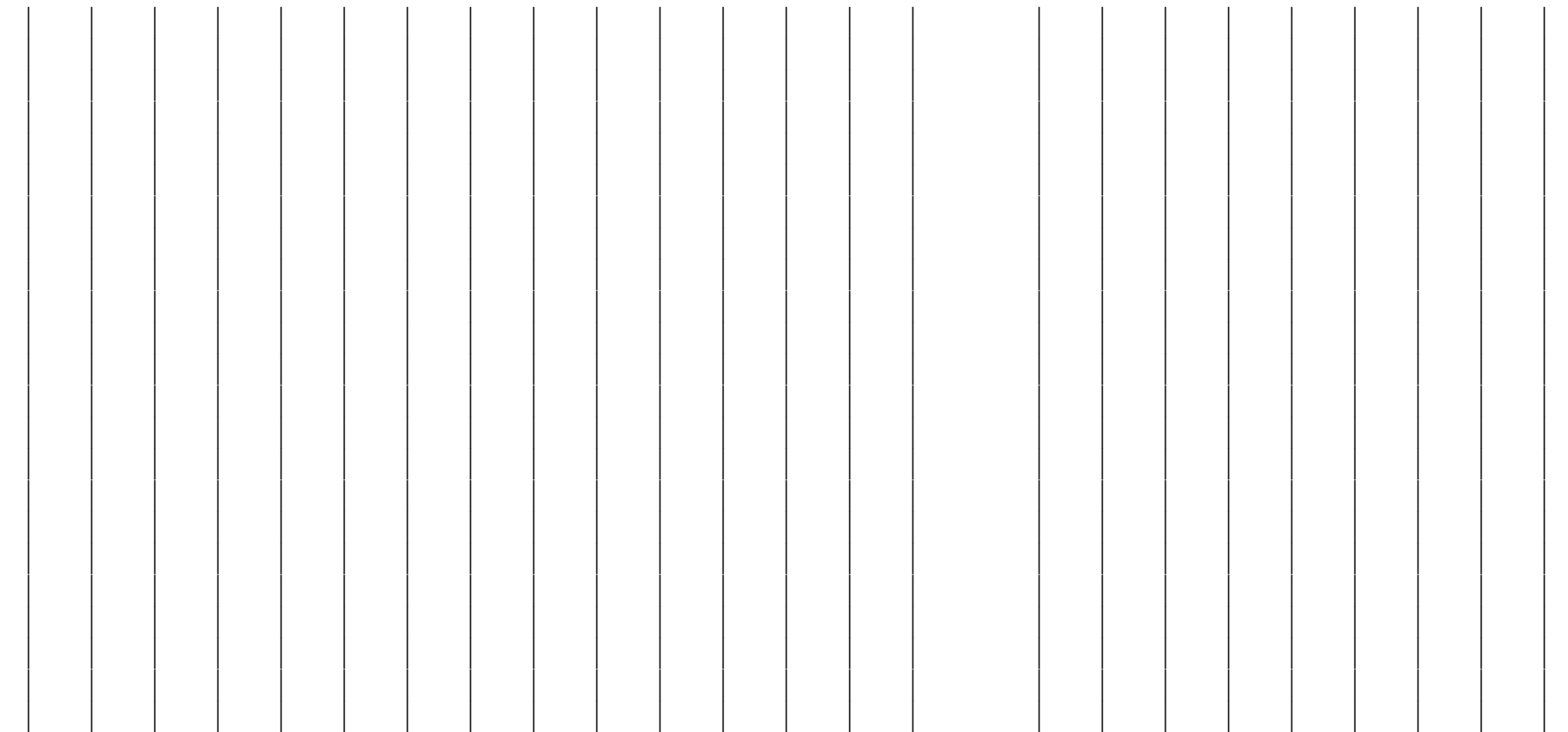
第20話

188

第21話

196

第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第3部 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話 第22話



442 433 424 412 403 394 382 373 364 352 342 334 323 313 303 291 278 265 254 245 234 222 213 204

白銀圭を祝いたい	519
早坂愛プレゼント「横浜デート」く理想と現実の狭間でく	506
断片	
第50話	492
第49話	482
第48話	473
第47話	461
第46話	450

## 第1部 第1話

早朝も早朝。季節によってはまだ日が昇っていないような時間帯。そんな時間でも働いている人達はある。たとえば24時間営業のお店。ネカフェ、カラオケ、コンビニなどなど。いわゆるサービス業の人たち。運送業者もこの時間にトラックを走らせている。漁業関係者エトセトラ。

挙げていけば本当に数多くの業種の人たちが働いている。その中の1つ、朝の楽しみとも言えるし、日課としているサラリーマンも多いだろう。

「新聞」だ。新聞配達の人もこの時間に働いている。

たいていはカブの荷台に新聞を積んで走っているのだが、免許がない人は自転車ですれを行っている。ギアがあるとはいえ、ほとんどハンドルを回すだけでいいカブと比べると、自転車の方が圧倒的に配達できる量が少ない。

決まった時間帯に決まった量を確実に配達しないとイケない仕事。必然的に自転車で配達する人は、近い範囲での配達がメインとなる。今自転車を走らせている彼女も、その仕事に従事している者の1人だ。

白銀圭。名門中の名門である秀知院学園の中等部に通っている少女。高等部にいる兄の白銀御行は生徒会長を務めており、彼女もまた中等部の生徒会で会計を担っている。

学年で1位を取り続ける生徒会長は、誰もが知る存在である。その妹である彼女も、中等部の生徒会会計を努めていることでそれなりに知られ、その整った容姿から男女問わず人気がある。

「まるでお人形さんみたい」という定番の表現があるが、その言葉は彼女のためにあったと言えてしまう。

「あと5件くらいかな。もう少しだね」

「はい」

そんな彼女だが、1人で新聞配達をしているわけじゃない。正確には1人で行っているのではあるが、彼女の側には1人の青少年が追従している。

みつがみあきら  
光上 晶。秀知院学園の高等部に通っており、会長の御行とは友人関係にあたる。

彼の日課は毎朝のランニングとなっていた。そこで、ほとんどの人が寝ている時間とはいえ、中学生の女の子が1人で新聞配達するのは危ないと判断し、彼女の配達ルートをランニングコースへと変えたのだ。そこに至るまでに紆余曲折あったものの、今ではこれが”いつもの朝”となっている。

「今日もありがとうございます」

「こちらもありがとう。ペースを作ってくれるからこつちもやりやすくてね」

日課というものは習慣だ。習慣として自分の毎日というものがそれに馴染んでしまえば、特にそれを苦と感じることはない。逆に、それが定着するまでが山場だと言える。体を鍛えてる人でない限り、自らしんどいことをしようとする人は少ない。配分もわからない内に始め、そして挫折する人もいるだろう。

しかし彼はそこには困らなかった。自分のことをきちんと把握できていた。徐々に距離を伸ばしていき、順調に体力を向上させた。

今度はマンネリ化が懸念材料だった。変化なく続く毎日望ましい。だからこそ、たとえ配達中の会話が限りなく少なくても、彼女の後ろを走る状態はありがたかった。

なによりも単純な話。女性の前だと頑張ってしまうのが男という生き物なのだ。

「ですけど、私途中何度も止まりますし……」

「その辺はいいんだよ。俺もその時は適当に走ってたりしてるし」

1件1件新聞を入れていくのだ。何度も自転車を止めて郵便受けに入れるし、時には自転車をそのままに数カ所を走り回って入れる。その間はどうしても彼のランニングは中断されるのだが、そこも対処

はしている。主に一定距離を往復で走ってる。

彼女は礼節を大切にしているし、とても丁寧な少女だ。彼のランニングに支障が出ることに申し訳無さを感じている。

何かお礼をと常日頃から思いはするも、「受け取るほどのことじゃない」と言われてしまう。

「あの。せめてこれを」

「タオル？」

「はい。体が冷えると体調を崩してしまいかねないので」

「……あはは、ありがとう」

新聞配達が終わればもちろん営業所へと戻る。そこで配達を終えたことを報告し、挨拶を済ませて家へと戻る。彼のランニングもその間は止まるわけで、汗で体が冷えることを心配した彼女は、用意しておいたタオルを渡した。

ランニングを終えると家でシャワーを浴び、朝食を取ってから支度をして学校へ。それが彼のルーティーンであり、だからこそタオルは持参していなかった。

報告は大した時間も要せず終わるのだが、それでも渡されたタオル。拒む理由などなく、一瞬面食らうも朗らかに笑って受け取った。彼女も受け取ってもらえたことに安堵にする。

「それでは少しだけお待ちください。すぐに終わりますから」

「急がなくていいよ。時間はあるから」

忙しなく営業所に入っていく彼女に言葉はちやんと届いたのか。どうやら届いてなさそうだなと思いつつ、渡されたタオルに目をやる。

彼には1つの疑問点が浮かんだ。とても大きな疑問点だ。

(本当に使っても大丈夫なのかなこれ……)

スポーツタオルだ。珍しくもない。特別なデザインがあるわけでもなく、高い品質の商品でもない。チェーン店で見かけるようなものだろうと、小さく書かれてるメーカーの名前を見ながら考える。

問題は、このタオルが女性ものである可能性が高いということ。別に彼女の名前が書かれてるわけじゃない。ただ、このタオルの色合い



が水色なだけだ。兄である御行は使わない可能性が高い。彼女は兄に対して反抗期に入ってもいる。同じものは使わないだろう。よって私物の可能性が高い。

(洗って返しはするけども……使わないのはそれはそれで気にするだろうし……)

わざわざ用意して渡してきたのだ。使わないほうが失礼だろう。だが、年頃の少女の私物と思わしきタオルでもある。彼女が気にしないと言うのであれば、顔や首周りくらいは拭かせてもらおうかなとは考えている。

「すみませんお待たせしました。……？ 光上さん？」

「あ、おかえり。えっと白銀さん。これ、本当に使つていいの？」

「はい。そのために持つてきたので。ご迷惑でなければですけど」

後半になるに連れてだんだんと言葉が小さくなった。かろうじて聞き取れたので、それならと顔と首周りを拭かせてもらう。新しい方なのだろうか。結構肌触りが心地よい。吸水性も悪くなく、軽く拭いただけでもわりかしスッキリできた。

「ありがとう。洗って返すね」

「大丈夫ですよ。自分で洗いますから」

「いやそれはさすがに悪いよ。他人の汗がついたタオルを洗わせるなんて」

「それがむしろ……こほん。可能ならすぐに洗いたい派ですし、これからもお渡ししたいですから」

(むしろって何……)

わりとボロを出しても誤魔化しが効くのは、お互いにボロを出し合っておきながら未だに進展がない君の兄とその想い人だけだよ。なんて言葉は胸中に仕舞い込み、気づかなかったフリをして白銀家へと彼女と向かう。家の方向が同じということもあり、彼女を送り届けてから帰宅するのが彼の毎朝の行動に含まれている。

白銀圭は誤魔化せたと思っている。そういうところとかお兄さんにそっくりだぞとか思われているのも気づかない。自分の想いには気づいてもらえていない。

誤魔化すために言ったことはブラフというわけでもない。学校で体育の後とかは諦めるしかないものの、極力洗い物はすぐに済ませたいと考えている。後半のも嘘じゃない。簡素なやり取りではあるものの、そのやり取り自体が嬉しかったりする。

「いつも思ってたんですけど、帰りは走らなくていいんですか?」

「白銀さんを走らせる羽目になるからね。それに十分走ってるし、送り届けたあとは再開するからインターバルみたいなものだよ」

「そうですか」

真つ先に自分への気遣いが出てきてくれたことが嬉しい。緩みそうになった頬を隠すために顔を軽く横に逸らす。

（それってつまり私と歩く時間を作ってくれてるわけで、その裏には私と話がしたいという意図があるってことでいいんだよね）

そこまでの意図はない。

恋する乙女にはそう思ってしまったのだが、悲しいことにそこまでは考えていないのだ。しかしこれがまた遠からずの推測なのだから困りもの。彼は彼女と会話をしながら歩く時間を楽しんでいるのも事実なのだから。そこに、彼女が期待しているような甘い感情が入ってこないだけで。

「生徒会の調子はどう? 中等部のも仕事がそれなりに多いって聞くと、大変じゃない?」

「その分やりがいがありますから。萌葉もいて、生徒会の人たちとも仲良くしてもらえてますし、楽しいですよ」

「そっか。それはよかった」

「高等部だともっと忙しくなるのでしょうか?」

「会長はいつもゾンビみたいになってるからね。忙しいと思うよ。あの人の場合は、学年一位を取り続けるための勉強とバイトも欠かさずにやってるからだろうけど。全力で取り組み続ける姿勢は尊敬するね」

「そうですか」

白銀圭は反抗期である。ただし、兄の白銀御行が嫌いなわけでもない。御行のことを褒められたら嬉しくなるのだから。特に、今回のよ

うに想いを寄せてる相手が御行を尊敬してるなんて聞いた日には――

(ふふっ、尊敬されるくらい頑張ってるんだ)

と、表情筋が吹っ飛ぶくらいの化学反応ミラクルが起きる。

素直になれないだけなのだ。それさえ解決すれば御行の心配事も1つ減るのだけど、それが叶う日はまだ遠いだろう。兄妹の関係もそこまで拗はたれているわけじゃない。これくらいなら可愛いものだとは彼

「白銀さんもすごいけどね」

「え?」

「中学生なのにこうしてバイトしてる。成績に支障をきたしてるわけでもないし、他校より明らかに激務な生徒会の一員で仕事をこなしてる。なかなかできることじゃないよ」

「あ、ありがとうございます……」

少し照れながらも素直に褒め言葉を受け取る。本心としては謙遜してるかもしれない。ただしそれを表に出さない。そうできるのも彼女の美点の1つだ。

そうして話してる間に白銀家のあるアパートの前に着く。圭は改めて丁寧にお礼を言ってお辞儀し、彼が油断してるところでサツとタオルを回収する。

「こうしないと持って帰って洗うつもりでしたよね?」

「あははー、なんのことやら〜」

くすくすと上品に笑いながらタオルを背に隠した。渡してやらないうという意思表示をされ、彼は誤魔化すように笑うしかなかった。決して長い付き合いでもないのに、もう考えを読まれるようになったことに若干の畏怖もあった。

彼は気づいていないが、答えはただ1つ。

――『恋する乙女は強いのだ』

「それじゃあ俺は帰るから。タオルありがとう」

「どういたしまして。また明日もお願いします光上さん」

「うん。また明日」

使わせてもらったのだから洗って返す。当たり前とされるそれができなかったことに後ろめたさがある。申し訳無さもある。これからは自分でタオルを用意しようかと思っただけのもの、彼女との会話を思い返すと彼女がこれからも持つてくることは明白だ。諦めるしかない。

そういつた考えはまったく読ませることなく、彼は手を振りながらランニングを再開する。圭はその姿が見えなくなるまで見送り続けた。見えなくなったところで背に隠していたタオルを前に持つてきて、じーつと視線を落とす。

「光上さんが……使ったタオル……」

ちよつとアブノーマルなことが頭をよぎる。

(これはつまり光上さんの匂いがここにあるわけで、光上さんがここにいるようなものよね)

目がぐるぐると泳ぎ始める。一度頭を左右に振り、そんな邪なことを考えては駄目だと理性が総動員で止めてくる。

(けど<sup>タオル</sup>ここには光上さんが！)

(駄目よ落ち着きなさい圭<sup>私</sup>。そんなことがバレたら嫌われてしまうわ！)

(っ！ それは嫌だけど……でも……！)

タオルを口元に近づけようとする左手<sup>欲望</sup>。それを必死に止める右手<sup>理性</sup>。

この瞬間、白銀圭は目覚めるか否かの瀬戸際に立っていた！

「あれ？ 圭ちゃんおかえり。そんなところで何してんの？」

家の前に佇む妹。左手にはスポーツタオル。その左手を何故か必死に抑えてる右手。泳ぎまくってる目。若干火照っている頬。興奮気味に荒れた呼吸。

「……………まじでなにしてんの？」

学年一位の学力を持つ白銀御行でもそれが何かはわからなかった。そしてちよつと怖かった。

「くっっ!! うっさい変な目で妹を見るな!!」

「なっ!?」 ぐ近所に誤解を招くようなことを大声で言わないでくれる!?

面白そうなことに混ざろうとした  
騒ぎにいち早く気づいた父の登場により、早朝の騒動は瞬時に終息  
するのだった。

「……今日も光上さんとうまく話せなかった」

## 第1話（裏）

秀知院学園は名門校であり、知名度も高い学校だ。その卒業生たちが各業界での中心人物となっていくし、日本の将来を背負っている者たちと言えてしまう。したがって偏差値も非常に高い学校であり、授業のレベルも高い。生徒たちは聞き逃すことなくノートを取るし、そのノートの取り方もそれぞれ個性が出る。

たとえば、極力授業中に内容を纏めながらシャープペンを走らせる人。または、メモ程度で纏めておいて後からノートを纏める人。極論で言えばこの二通りになるものの、先生の話のどこに重点を置くかは個々人でズレてくる。

教員もまた、どこが重要かは話さない。その判断は生徒たちに任せられる。これも社会で必要な力を養うためだ。

「光上（こうかみ）を答えてみる」

そんな授業で居眠りなど自殺行為である。そもそもそんな態度の生徒はこの学園にいないのだが、光上晶はその例外となる。

机に突っ伏して寝ているわけでもないし、肘をついて寝ているわけでもない。ただ、意識が半分ほど飛んでる状態で授業を受けてしまっているだけだ。

「えー、つと……。そこは——」

だから新任の教員にはよく当てられる。そして決まって光上はそれを正しく答える。本人にはその意識がないが、他の生徒に『光上の特技は？』と聞けば『半分寝ながら授業を聞いていること』と答えるだろう。

彼は望んでその特技を身に着けたわけじゃない。自然といつの間にかそれができるようになっただけだ。尚、彼は意識が半分飛んでるということを知っていない。あくまでも本人は「ちゃんと授業を聞いている」という意識だ。

そんな彼の様子に生徒たちは慣れているし、2年目以降の教員は狙って当てるようなこともしない。

「あれ？ 珍しいじゃん」

「なにが？」

休み時間になったところで、同じクラスである少女が彼に声をかけた。理由は言葉の通り、彼が珍しいことをしているから。周囲の生徒たちも声こそかけなかったが、その少女と同じことを思っていた。

「珍しいと言うなら、早坂が休み時間に俺に話しかけてくるのも珍しいと思うけど」

「いや休み時間で光上くんに話しかけるのは誰でも珍しいから。いつも寝てるし」

「休み時間だからね」

そう。彼は休み時間のほぼすべてを睡眠に費やすのだ。昼食を取るときと教室移動のとき、あとは体育の授業のために着替えるとき。この3パターン以外はすべて寝ている。

不真面目な生徒というわけでもない。彼からすればこれは必要な措置であり、そうしなければ授業に支障をきたすことなのだ。

「体力作りのためにランニングだっけ？ そのせいで学校にいる間眠くなるのって本末転倒だと思っただけだ」

「成績に影響は出てないからね。それでも夜も睡眠取ってるし、やっぱり必要なことなんだよ」

「半分頭回ってなくてそれなのズルいわ」

「いやだから起きてるって」

「焦点がウチに合ってるじゃないし！」

「あれ？」

光上は基本的に相手と目を合わせて話す。早坂もまた相手の目から情報を読み取るために相手の目を見て話す。お互いにそういう相手だと非常にやりやすいのだが、時折困る存在だっている。

早坂が一番相手にしたくないのは、生徒会で書記を務める藤原千花だ。天然娘である彼女の言動は読めず、裏工作を失敗させられることもしばしば。

次に困る相手がこの状態の光上だ。本人は頑なに認めないが、意識が半分しか覚醒してない彼は目の焦点が合わない。ひと月の間に一

度合えばいい方である。

(弱ってるかぐや様みたいになつてくれたらいいのに)

風邪などで弱った時の四宮は思考という概念が消えて欲のままに言葉を放つ。考えが筒抜けの状態だ。寝ぼけた人だつて普通はそれに近くなる。もしくは周りの言葉を素直に聞き入れる。

それなのに光上はそうならない。ボロを出さない。会話だつて噛み合う。誘導なんてできない。非常にやりにくい相手だ。

「それで……。えーつと早坂？　が俺に話しかけたのつてなんでだつけ？」

「ウチの名前に疑問持つなし！　いやー、光上くんが休み時間に起きてるのつて珍しいから、何かあつたのかなつて」

「なるほどね。……早坂つてそんなに俺のこと観察してんの？」

「は!?　してないし！　珍しいから話しかけただけだし！　みんなだつてそう思つてるし！」

あらぬ誤解が刷り込まれかけた。ギャルモードのテンションに任せての否定は逆に胡散臭さが出てくる。この時ばかりはギャルモードに後悔しかけたものの、「そうだよなく」つて光上が聞き入れたことで難を逃れた。

周囲からも早坂が被害を受けかけた、という認識をしてもらえたことで、クラスの人からも誤解を受けずに済んだ。同情の視線まではいらない。

「で、ええつと。起きてる理由は難しくくないよ。考え事してるだけだから」

「光上くんつて考えることあつたの？」

「ひどいなー。これでも考えることはあるんだよ」

「ふーん？」

ここで話を掘り下げるか終わらせるか。早坂に選択肢が生まれる。そもそも話しかけるつもりもなかったのだが、いつも一緒にいるグループでじゃんけんをして負けたから話しかけてる。

起きてる理由は判明した。じゃんけんに負けたことでやらないといけなかったことは終わった。ここで終わつて文句を言われても言



いくるめる自信がある。

聞かなくていいやつて判断しかけたその時、ぼそりと呟かれたのを早坂は聞き逃さなかった。

まさか光上からそんな内容が飛び出すとは思えず、目が丸く見開かれる。

「愛ってむずかしい」

愛。英語で言うところのLove。彼が言った愛はそれであって自分の名前じゃないことはわかってる。

「光上くん好きな子でもできたの!?!」

ただ、反応せずにはいられなかった。

自分の侍従が何をしてるのか意識を傾けていたかぐやもギョツとした。

なにせあの光上である。人間関係において必ず人と一定の距離を保つ人間だ。秀知院学園の理事長の息子であり、将来はその座に着くことが決まっている。その際に必要になるスキルを現在身につけ、磨いている最中だ。

それはパワーバランスを調整すること。ひいては人間関係のバランス調整だ。

現在は四大財閥の1つ、四宮家の長女である四宮かぐやが在籍している。それを筆頭に各界の重要ポストの子どもたちが在籍している。

親世代の発言力はそれぞれ大きい。干渉されることは滅多にないが、過去に何度か干渉しようとしてきた例もある。それでも秀知院学園は学校だ。中立を保たねばならない。それを保つのに必要なのは、全方位にゴマすりするか、全方位を黙らせるほどの人物が君臨するかだ。そして後者だからこそ、秀知院学園の理事長は務まるというものの。

光上晶はそれを身につけねばならない。

しかし、それは先のために必要なものではなく、現在も身につけないといけないものだ。

学校で築いたコネクションは将来に役立つ。見方を変えれば、ここで潰せば将来の敵が減るということ。

人の性格はそれぞれ。先の競争を考えない人もいるし、考えた結果潰しにかかる人もいる。

後者が増えれば学園は荒れるし、存在するだけでも学園生活に陰りが出る。光上はそれを起こさせず、なおかつ相手の反感を買わない方法で今の学園生活を陰ながら保っている。

そんな彼の行動を知っている人は少ないが、知っている者は口にする。彼は調整屋バランスサーだと。

もつとも、彼は授業中基本的にオフモードであり、意識がはつきりしている圭と会う早朝と放課後ですらオフモードなのだ。

何はともあれ、そうやって必ず人との距離感を調整する彼がだ。そんな彼が愛について考えている。これはもうニュースなのだ。早坂の声を聞いた人全員が驚愕して光上に視線を集める。

「光上に好きな人ができた!？」

「誰だ相手は誰だ!？」

「難しいいい!! 光上くんの間人間関係で候補なんて出ないわよ!」

「男路線かしら!？」

「それなら相手は会長!？」

「……なんかすごい方向に話が進んでるんだけど、ツツコまなくていいの?」

光上に交友関係と呼べるものがあるかは怪しい。「知り合いというよりかは仲良いけど、友達と呼べるかは微妙」というラインを保つからだ。もちろん相手からは友達と思われてる場合もある。

そんな中で、彼基準で友達と呼べる相手が生徒会会長の白銀御行なのだ。外部生でたゆまぬ努力を重ねる彼に光上は敬意を評し、初めて友達になりたいと思った経緯がある。そんなこともあり、周囲の人間が男で探して真っ先に浮かぶ相手が御行なのだ。既にカツプリング本が極秘裏に作られているのは一部の腐女子しか知らない。

秀知院学園は外部生を除けば幼稚舎からの付き合いの人たちが多い。早坂と光上を知り合ったのは小学生の頃で、以来ずっとクラスが一緒なのだが、それも珍しいことではないために特別な意識も働かない。

それはそれとして、あらぬ誤解が広がるのは面白いことではない。それなりの付き合いということもあり、止めなくていいのかと投げかける。

「そういえば日本ってまだ同性愛駄目なんだっけ」

「……」

（え、何言ってるのこの人）

クラスが静まり返った。

早坂もこれには絶句した。

かぐやは口から魂が抜けかけるもドブを見る目で睨みつけた。

（今日にでも消そうかしら）

そう簡単に消せる相手じゃないことは知っている。それでも殺らねばならぬ。己の恋愛成就のためにも。事件なんて揉み消せるし、証拠が残らない方法を取る。

（たしかに会長も石上くん以外でよく話しているのは彼よね。同年代だと圧倒的に。……会長はきつと傷ついてしまう（でも、それを利用して傷心状態の会長を私が癒せば！（駄目よそんな方法！もし会長に知られたら））

脳内で激しい葛藤が行われている。光上の発言から僅か0.3秒のことである。

そんなことが行われているとは露知らず、光上本人はきよろきよろと視線を動かす。周りを見て、全員が固まってるのを見て首を傾げる。四宮のドス黒い考えには気づかない。

「みんなって同性愛認めない派？俺はアリだと思うけど」

「戻ってくれ光上イイ!!」

「お前とは修学旅行で女の子について語り合いたいと思ってたのに!!」

「キマシタワー!!」

「会長が攻めかしら！いえあの人はきつと受けよね！」

「待って光上の誘い受けかもしれないわよ！」

「どつちもありじゃない？」

(これはもう……殺るしかないわね)

なんだか盛り上がりつつ他人事のように笑ってる光上を見る。絶句したものの、四宮家の侍従たる者冷静さを取り戻すのも早い。冷静になって光上をじっと見て気づく。かぐやが相当危ない思考に結論づけていることにも気づく。

(今は半分以上意識が飛んでる。かぐや様が動く前に片付けないと)意識が半分の状態の時は眠そうな状態。今は片目が完全に閉じている。これではまともな思考もできないだろう。

つまり、結論としては「好きな人」↓「会長」↓「同性愛」↓「同性愛はありかどうか」という流れ。

「みんな〜！ 光上くん寝ぼけてるだけみたいだよ〜！」

それなりの付き合いだ。それに光上はその立場上かぐや周りのことも知ってる。つまり、早坂が正体を隠して通っていることも知っている。知ってる上で、ギャルモードの早坂と普通に接するし、時には裏工作する早坂を周囲に援助している。

そのお返しとして、光上につきそうになったあらぬ誤解を解いておいた。

「やっぱそうなのか〜」

「安心した〜」

「ガツデム！ タワー崩れた……！」

(あらそうだったのね！ まったく私ったら早とちりしちゃいました)

反応もそれぞれ。ちよつとした騒動もこれで終わり。珍しく寝ぼけている状態を晒している光上には、後でお礼をもらおうとしよう。覚えてるかはさておき。

人騒がせな出来事だったが、クラス中がこれを機に恋話を始める。もしくは同性愛がどうかの論議が始まる。そのうち後者の話題が増えるだろうなって思いつつ、早坂はぼけ〜つとしている光上に話しかける。

なんで光上が愛について悩んでいるのかを聞いていないから。

「えつとなく。気になる人がいるんだわー」

寝ぼけているせいで間延びした話し方になっている。休み時間も残り少ないし、早く話してもらいたい。

「へ〜？ 誰だれ？ 毎日のランニングで会ってる子？」

早坂は光上がランニングで圭の新聞配達に同行していることを知ってる。元々光上は休み時間でも寝る人ではなかった。しかしある日からそれが必要なこととなり、放課後にそれを聞いた時「以前のコースから変更した」と聞き、その流れで圭の新聞配達に同行していると知ったのだ。

さすがにこの場でその名を出すのはやめておいた。御行にまで影響が出たら主人に何を言われるかわかりきってる。

「いやいや違うよ。さすがに中学生相手はないよー」

圭のあずかり知らぬところで可能性が閉ざされていく。面識がない早坂でもさすがに少し同情した。

「そうなの？ じゃあ誰？ 誰にも言わないから教えてほしいな〜」

「うーん、まあ早坂ならいつかー」

光上の早坂への評価は高い。四宮家の侍従を完璧にこなしていること、必要とあらば何人ものキャラを使い分けること。その他にもいくつかの評価点があり、表立って接さないものの早坂を信用していた。

早坂が光上の横へと移動し、ちよこんとしゃがみ込んで耳を傾ける。光上が顔を近づけ、周りには聞こえないように小さく囁いた。

くすぐりたいなと思った。

何よりも、聞かない方が良かったと思った。

過去の自分をちよびつと恨んだ。

なにせ、光上が口にした相手は――

「ハーサカさん」

自分別人だったのだから。

## 第2話

白銀圭には好きな人がいる。彼との出会いはまったくの偶然。ラニングコースの変更を検討し、視察がてら走つてみたら見事に迷子になり体力が尽きて身動きが取れなくなつていた光上を、新聞配達を終えて帰路についていた圭が発見したのだ。

その後いろいろなあつたものの、御行と仲がいいと知つた時は一瞬表情が能面になつていた。反抗期つて本当なんだなつてその時に光上は実感したのだという。

それはさておき、圭にとってのもつぱらの悩みの種が光上である。どこかの会長と副会長みたく、”どちらが相手に告らせるか”という勝負も始まらないし、絶対に向こうから告白してほしいという願望も今のところはない。そこまでのことはまだ考えられない。

彼女の悩みは、「いつもすつぴんでいること」である。

より正確に言うと、光上と会うときにいつもすつぴんでいることなのだ。

もちろんお洒落をしたいという欲がある。好きな人と会うのだからその欲は強くもなる。だが彼女たちはいつも早朝に会う。圭が新聞配達してる時に会うし、真面目にテキパキとこなすためには、それなりに自転車をこぎ、時には走らないといけない。つまり、化粧をしていたら終わつた時にはその化粧が崩れている危険性が高いのだ。

(そんな醜態なんて晒したくない。でも……お洒落はしたい)

恋する乙女。好きな人にはより良い自分を見せたいくなる。

(すつぴんのこと……悪く思われてたら嫌だな)

それまでは特に気にしていなかった。彼を好きになつた日からは、自分がすつぴんで会つていることを気にするようになった。

とはいえ彼女はまだ中学生。彼女も周りも化粧をしている生徒は珍しい方だ。その点を考慮すれば安心はできる。自分がおかしいなんてことはない。

だが、光上が通っているのは高等部だ。高等部ともなれば化粧に興

味を持ち、実際に軽くメイクをして通学する人もいる。2年生である光上もその環境に慣れているだろう。

(化粧してる人と比べられたら勝てっこないよ……)

自分の部屋の中で、机に置いてある鏡を見ながら髪を整える。今日もまた新聞配達バイトがある。今日も光上与会うのは確定事項だ。

光上のことは圭だつて可能な限り情報収集している。目立つようなことはあまりしていないが、理事長の息子という立場。まだ情報が集まりやすい。

ただし、集めた情報すべてが信じられるという内容でもない。いくつかはデマなんじゃないかと圭は考えてる。

曰く、友達がいない。

(そんなことはない。素敵な人だもの)

ニアピンだ。友達は君のお兄さんだけだ。

曰く、授業中に寝ながら内容を理解している。

(ありえない。授業中に寝るような人じゃない)

半分当たっている。耳が痛い。正確には意識が半覚醒なのだよ。

曰く、陰の番長をしている。

(これも尾ひれがつき過ぎ。人を欺くことは嫌いって言ってたから、そんな裏の人間みたいなことしない)

当たらずとも遠からず。一部の人がそう思っているだけのこと。

曰く、白銀御行が好き

(ぜええつつつたいたいじゃない!! ……ないよね?)

唯一の友人というだけだ。そこから発展したらそのもしもは起り得るが、現状その心配はない。

噂というものは、嘘と本当が混ざり合うことで効果的に広がる。『もしかしたらあり得る』なんてものは話題性が高い話だ。だからこそ、圭が集められる情報もそういったものが多くなり、100%信じられる話がなかなかない。

御行に聞けばおそらく一発で分かるだろう。そんなことをするつもりなど毛頭ないため、情報収集の進捗が芳しくないのだが。

ならば圭が交流を持つ先輩。藤原千花に聞いたらどうなのか。より正確な情報が集まるのではないか。

そう思ったこともあった。

『光上くん？ 全然知らないや！ ごめんね〜！』

頼りないなこの人。

率直にそんなことを思ってしまったことを、圭はよく覚えている。

「3歳差、か」

3歳差。大人にとっては大して気にすることでもないだろう。大学生でも、4年生と1年生が3歳差だ。そこでの交流は珍しいだろうし、交際も珍しいだろう。だが、ありえない話ではない。

だが高校生以外は違う。高校3年生だろうと、3歳年下の相手は中学3年生。属する場所が違う。たったそれだけのことなのに、犯罪チックな匂いが発生するのだ。

「あ、そろそろ出なきゃー！」

ふと時計を見ると家を出る時間が迫っていた。幸いにも考え事をしながらでも髪は整え終わってる。着替えも食事も済んでる。家を出る前にコップ1杯分の水分を補給し、口にリップクリームを塗る。

「行つてきます」

誰に向けたわけでもなく、習慣づいてるそれを言う。返事は聞こえてこない。父は間違いなく寝ているし、兄もおそらくはまだ寝てるのだろう。別にそれをどうとも思わない。兄がいつも夜遅くまで勉強していることは知ってるのだから。

玄関のドアを開ける。この時間は肌寒い。夏だったら涼しく感じるだろうけども、夏まではまだ少し期間がある。

「おはよう白銀さん」

「!? お、おはようございます。すみませんお待たせしてしまつてー！」「いやいや待つてないよ。さつきそこの自販機で飲み物買ったばかりだし」

前髪を気にしながら出てきたところを見られただろうか。声をかけられた瞬間ドキツとした。鼓動が早まり胸の音が煩く感じる。若干の焦りもある。



それでも、待たせたということはないのだろう。彼は優しい嘘ですら言わないのだから。彼が自販機で買ったのはスポーツドリンク。それが2本あって、そのうちの1本を渡される。ヒヤツとしていた。ついさつきまで自販機の中で冷やされていたものだ。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。それじゃあ行くっか」

「はい」

時間に多少の余裕はあるものの、立ち止まってゆっくり話せるわけでもない。早めに着いたら早速始めてもいいし、すぐに終われば学校に行くまでの時間が増やせる。そうすれば、光上と話せる時間も増やせるわけだ。

そこに気づいて圭がやる気を出し始める。その想いに気づいていない光上は、仕事熱心な子だなと少しズレたことを思っている。せめてもの救いは、それが光上にとって好印象なことか。

2人並んで歩くも、話題はいつも光上から提供される。黙って歩くこともしばしばあり、その時間も嫌な気はしない。

だけれども、圭だつて光上と話したいことはある。聞きたいことがある。

光上の情報を収集していて気づいたのは、彼の話を噂話でしか聞けないことだ。彼の好きなものが何か、得意分野は何か。そういつたことですら情報が入ってこない。結局本人に聞くしかない。

そう思ってから早1ヶ月。圭は未だに聞き出せていなかった。

(変な子って思われたりしないかな)

そんな不安が付き纏うのだ。彼女は自己分析がそれなりにできている。だから自分の気持ちも認めて受け止めている。それ故に自分で断言できるのだ。

『一度質問したら矢継ぎ早に次々と聞いてしまうことを』

初めはそんな拗らせることもなかった。ふと気になったただけだった。なかなか自分から聞き出せないことが災いし、その『ふと気になった』が積み重なる。その結果聞きたいことが膨らみ過ぎているのだ。

「あ、あの光上さん」

「どうしたの？」

それでも彼女は一步を踏み出せる。それも反抗期のおかげ。高等部の話を聞いたとき、「最近では会長と副会長が付き合ってるんじゃないかという噂が広がってるよ」と知った。根も葉もない噂だけどねと切られたことで、それが事実無根であると圭の中で処理されたわけだが、「会長はきつと恋したら奥手だろうね」と言われたことが引つかかっている。

(私はそんなことにはならない)

そう思ってから1ヶ月と10数日。いざ自分がその立場になったら悶々としている現状。兄みたいにはならないと何度も言い聞かせ、1ヶ月経つてようやく圭は切り出そうとしている。

「好きなことって、なんですか？」

言った。言えた。言えてしまった。

緊張からか。目を強く瞑りぎゅつと握り拳を作っている。

そんな表面とは裏腹に、圭の胸の内ではすでに歓喜の宴が始まっていた。レツツパアライイである。

まだ質問できただけなのに。

「んー、あんまり考えたことなかったな」

必要なことばかりしてきた。それが好きかどうかは二の次で。

そんな自分の過去を振り返り、逆に考えるとあっさり答えが見つかる。

「こういう時間を過ごすことが、好きなことかな」

「えっ」

必要なことばかりする。それは不必要ことをしないという言い方になるのだが、光上は必要なことを優先するだけであって、その不必要なこともする。そしてその時間を楽しめると自覚している。

だから、そのままそれが好きなことだと言えろと思ったのだ。

彼女の中ではそんな風には処理されない。当然だ。彼女は彼のことをそこまで知ってるわけじゃない。圧倒的に知らないことの方が多い。

だから「こういう時間が好き」||「白銀圭と過ごす時間が好き」に処理されてしまうのだ。

ぼんつとマジックみたく圭の顔が真っ赤に染まる。熱くなった顔をパタパタと手で扇ぐも特に効果はない。脳がすべて妄想へとフル回転してるせいだ。

(これは告白されたってことでいいのかな。そんな、心の準備なんてまだ……。で、でも、お返事しなきゃ……)

手で扇いでいても効果がない。真っ赤に染まった顔を見られるのも恥ずかしい。両手で顔を隠し、チラツと指の隙間から光上の様子を覗う。いつもの3倍カッコよく見えた。耐えられずにすぐに視線を逸らす。

(い、言えない……。！ 恥ずかしいよ……。光上さんは言ってくれたのに！)

恋する乙女。真相は残酷なことに違うのだ。

誤解を招く発言。本当に人間関係調整できてるのかお前と言われるレベルの失態。

そんなことになるのは、彼の調整の計算式に恋愛感情が含まれないせいだ。彼自身に恋愛経験がないことも要因。圭の気持ちに気づけていないのも要因だ。

その真相にたどり着けるわけもなく、彼女が葛藤している間に営業所に着く。ここに来れば彼女も切り替えができて、一旦返事のことを頭の隅に退けておく。配達分の新聞を受け取り、自転車に跨って出発。彼のランニングもスタートする。

「ペースはこれくらいでも大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」

今日はいつもより自転車をこぐペースが早くなってる。彼女はそれを自覚し、走っている光上のことを気にかけた。

初めて会った時のことは忘れようもないし、それがきっかけで光上のことも少しだけ知った。彼の毎朝のランニングは体力作りが目的ではなぜその目的が生まれたのか。

それは体の弱さに起因する。小学生の頃は簡単に体調を崩した。

その分休むことが多く、成績もあまりよくなかった。中等部に上がってからは、多少マシになったものの、やはりまだ体は弱かった。どうしたものかと考えた結果、早朝にランニングを始めることにしたのだ。

それが継続したおかげで、去年は精勤賞である。良い変化だ。

圭はそれを聞いたからこそ、ペースアップしてることに一抹の不安を抱いた。

「体力にそこそこの自信もついてきたからね。これくらいなら大丈夫」

「安心しました。しんどくなったら言ってくださいね」

「わかった」

「本当に言ってくださいね。変な意地は張らないでくださいよ？」

「い、イエスマム」

さらっと心のうちを読まれたことに頬を引きつらせた。女子は時折とんでもなく鋭くなる。圭のように純粋な子が相手だと、そのことが頭から抜け落ちてしまうこともしばしば。

この時、圭は見抜いていたわけではない。ただただ純粋に心配だったから、もしものことがないように念押ししただけである。その結果、光上もそうやって意地を張ることあるんだなって棚ぼたで知っただけだ。

知らない一面が垣間見えたことに、圭の鼓動が早くなる。

「さ、今日も頑張ろうか」

「はいー」

早まる鼓動のせいにして、いつもより早いペースで配達を終える。それについていった彼も息を切らし、いつもは報告を終えるのを立って待つところを、今日は花壇に腰掛けていた。

「す、すみません」

「ん？ いやいや。白銀さんが謝る理由なんてないよ。体力作りだった、さらに向上させようと思ったら次のステップにいくものだしね」

報告を終えて外に出てきた彼女と軽く話す。今日もまたタオルを受け取り、お礼を言ってから汗を拭う。いつもより汗をかいており、

彼のその姿を見ていると圭には何やらグツとくるものがあつた。

「さてと、ここにいるのもなんだし、帰ろつか」

「え……」

「白銀さんの家の近くで話でもしよう。家の近くのほうが何かと安心だし。どうかかな?」

「したいです。お話」

即答だつた。

空いた時間は彼と過ごす時間に使いたい。その気持ちを偶然にも先回りされ、彼女の要望が「相手から誘われる」という形で叶う。

バイトの疲れもどこへやら。羽毛が舞うように軽やかな足取りで、彼女は彼の横を歩く。そんな彼女の様子を見て、店長さんに褒めてもらえたのかなと、的はずれなことで勝手に納得した。

せつかくの空いた時間。何を話そうかなと考えて、彼女はすぐに気づいたことがあつた。

自分が勘違いしている可能性——などではなく。まだ一つしか質問していないことに。

「光上さんってなんで生徒会に入らなかつたんですか?」

「へ? 急にどうしたの?」

だから真つ先にこれを聞いた。前から気になっていたことを。

そんな質問をされるとも思つておらず、彼はきよとんと圭を見つめる。

「いえ。兄と仲がいいのでしたら、生徒会に入つていてもおかしくないと思つたので」

「あく、なるほどね」

生徒会長は立候補制であり、生徒たちからの投票によって決まる。しかし、会長以外の役職は会長からの推薦制だ。多くの場合ふたつ返事で了承するだろう。なにせ自分から声をかけるとなつた場合、たいていは仲がいい人が声をかけられるのだから。

御行と光上は、御行が入学してからの付き合いだ。正式に接点を持った時期を考慮すれば、現生徒会メンバーよりも数ヶ月長い付き合いになる。

生徒会に入らないかと声をかけられない方がおかしい。

「はっ！ 兄が何か失礼なことを……」

「あはは、それはないよ。失礼なことって言ったら、むしろ俺がしたのかな」

「へ？ そうなんですか？」

まったくそんなイメージが湧いてこない。きれいな瞳がありありとそれを物語り、彼はそれを読み取って苦笑する。

「失礼なことってというのは、生徒会の誘いを断ったことだよ」

「断ったんですか!? それはなぜですか？ やはり兄が何か」

「もう少しお兄さんを信用してあげて!？」

もちろん一定の信用はある。ただし、それを遥かに凌ぐほどに光上への評価が高いだけだ。

「そうじゃなくて。俺は生徒会に向いてないと思っただよ」

「そんなことはないと思いますけど」

「将来のことを考えたらね。たしかに生徒会に入っという方がよかったですと思うよ。この学園の生徒会でしか得られない経験があるし、それは俺の場合特に重要だ」

「でしたら——」

「それでもね。君のお兄さんを見ると、俺は向いてないなって痛感するんだよ」

「<sup>ひが</sup>僻みなんてない。後悔をしている様子もない。考え抜いて、自分が納得できる答えを出した。その結果生徒会メンバーになってないだ。」

真つ直ぐな目に圭もそれ以上は何も言えなくなる。本人が納得しているのだし、もう過ぎた話でもあるのだから。

(生徒会に入ってくれてたら……もっと会えるのに)

彼女のささやかな望みは、叶いそうになかった。

### 第3話

光上晶は常に眠たそうにしている。という印象を多くの人たちに持たれているが、それは2時間目の授業から終業時間までの間だけ、意識が半覚醒だからである。

これでも朝のHRと1時間目はバツチリと意識があり、その違いはノートを見れば明らかである。

「光上さんのノートってどうやってたらかうなるの」

「どうって？ 普通にノート取れてるだろ」

「あははははー！ これが普通なのは小学生までだし！」

「俺のノート小学生レベル!？」

放課後<sup>今現在</sup>。他に誰もいない空き教室で光上は早坂にノートを見られて笑われていた。

1時間目にとったノートは誰が見ても分かりやすく、それだけで授業内容が丸わかり。隙間時間を使ってるのか、短な考察のメモだって書かれている。これは家に帰ってからの復習時に利用され、さらなる理解を深めるのに大変役立つている。

ここを見れば、早坂の目からしてもさすがの一言に尽きる出来栄えだ。

(ここ以外が酷いんですよね)

ペラつとページをめくる。そこに書かれてるのは、本当に同一人物が書いたのかと疑う酷さの暗号たち。文字の原型を保っているものもあれば、草書体ですらない何かが綴られている箇所もある。

成績は優秀なのに、誰一人として彼にノートを見せてもらおうだなんて考えないのはそのせいだ。

去年度知り合った白銀御行は一度だけ頼んだことがある。自分では補いきれていない部分もあるのではと考え、照らし合わせるために協力してもらったのだ。それ以降は一度も頼んでいない。

「これノート取ってるって言えないと思うな」

「いやいや。読めるだろ」

「読めないし！　こんなの誰一人読めないし！　解説に時間かかるし！」

「えっ……解説とかする？」

「そのレベルだってば！　草書体までなら百歩譲ってセーフだけど！　何文字かすら分からないのあるし！　数学ですら数字じゃない何かが書かれてるし！」

「酷いこと言うなく。ぶっちゃけ俺が読めたらいいんだよ。誰かに貸すわけでもないわけで」

「そりゃあ誰だつてこれは借りたくないと思うなく」

齒に衣着せることなく、思ったことをそのままストレートに伝える。パラパラっと見てたノートも光上に返し、光上の正面の椅子に腰掛ける。鞆からタブレットを取り出し、生徒会室にいる主人の様子を確認。相変わらず藤原に場をかき乱されているようだ。

本来の仕事を始めるにあたり、ギャルモードも解除する。光上には正体を知られているのだ。隠す必要性が特にならない。さつきまでギャルモードだったのは、廊下を誰かが歩いてたせいだ。

「予習してていい？」

「始めたらどれくらい取り組む気ですか？」

「気が済むまで。短くても1時間はやるかな」

「では駄目です。帰ってからにしてください」

「やれやれ。仕方ない」

取り出していた教科書類を鞆にしまい、早坂に返されたノートもしまう。手持ち無沙汰になった彼は、チラッと早坂が持つタブレットの画面に視線を送った。隠しカメラがあるのはどうかと思うけど、設備面等々は校長の仕事。ひいては父親の範囲だ。放置してるのなら別に構わないということなんだろう。あつて困るものでもない。

視線をタブレットから早坂へと移す。鮮やかに輝く髪と清らかさを感じる瞳。クォーターなのに、ここまでフィンランドの血が出るのは珍しいんじゃないだろうか。

その視線に気づいた早坂が、顔を上げて小首を傾げる。

「どうかされました？」



「それはこっちのセリフだけどね」

その返事に、そうでしたねと短く返す。光上は部活にも委員会にも所属していない。授業が終われば図書室に行って調べものをするか、帰って自習するかだ。

今日は帰るつもりだったのだが、そこを早坂に呼び止められた。理由はまだ知らない。壊滅的なノートを見てみたい、なんて言っていたのも、周りを誤魔化すための言い訳だ。

「四宮家の早坂さんは何を探りたいのかな？」

「……」

読まれてることに驚きはしない。お互いに不干渉で過ごしているのに、わざわざ声をかけたのだから気づかれて当たり前。「四宮家の」とつけてきたのも、前置きはいらないと暗に示しているだけだ。

「探りたいというよりかは、確かめたいというのが目的ですね」

「? なにを?」

「先日にあなたが言ったことです」

『ハーサカさんが気になる』そう言ったことの真意を早坂は確かめなかった。早坂本人としては、それ自体を流そうとも考えてた。あの時の寝惚け具合からして、ちゃんとした思考をできていたとも思えない。

しかし、それはあくまで憶測。その時に言われたことを早坂は四宮に報告させられたし、その流れで真意を確かめるように言われたのだ。

『私たちは不干渉でいることが暗黙の了解となってますが、彼から動きがあるのだとしたらその真意を確かめなければなりません。早坂ではなくハーサカと言ったこと。思い過ごしならそれでいいのです……』

光上本人から聞いたのは早坂だけだ。周りの誰も知らないし、席が離れてる四宮の耳にも届いていない。だから直接聞いた早坂しか接触できないのだ。

「先日っていつ? 早坂さんと何か話したっけ?」

「つい最近のことですよ。あなたが珍しく休み時間に起きてた日で

す」

「休み時間に起きてた日っていうと………あ、白銀が同性愛者って話のときか！」

「そんな話にはなっていないませんでしたよ。……はあ、やはり記憶が混濁しているようですね」

「なんかごめん」

「まったくです」

ピンとこないものの、早坂に収穫のある話にならなかったことだけは伝わった。彼女の日頃の苦勞を知っている光上は、力になれなかったことを気にしてペこりと頭を下げる。その謝罪は少しズレているのだが。

早坂はやれやれと首を振って考える。光上晶という人間は嘘をつかない。相手を欺くこと、悪意のある騙し、裏切り、相手をはめること。そういったことを毛嫌いしてる人間だ。周りのことはある程度見逃すものの、本人は優しい嘘すらつくことがない。残酷なことでも現実を口にする。

そういう人間だと知ってるからこそ、彼が何か誤魔化そうとしていたり、隠そうとしていたり、なんてことは考えられない。

(本当に覚えてないんですね。これはこれで厄介なことには)

覚えていなかった。そんな結果報告だけでは主人が納得しない。たとえば本人が覚えていなくとも、「ハーサカさんが気になる」と言ったことに変わりはないのだから。その真意は特定しないとイケない。

骨が折れる調査任務が生まれてしまった。

「四宮さんからの仕事なんだろうね」

「……まあ、そうですね」

隠しても意味がない。だから素直に認める。

自分の苦勞など知らないまま、主人は会長たちと何やら楽しそうに遊んでる。これもいつものことか。

「四宮さんが俺に関することで知りたがることなんてないと思うけどな」

「かぐや様が警戒することなんて、多くは自分に害があるかどうかで

すよ」

「もしくは白銀か。……え、俺が白銀の友達なのが気に食わないとか言う?」

「さすがにそれはないと思いますよ。ただの友情であるなら」

「愛情は挟まらないから。というか、恋愛したことないからその辺りを疑われてもね」

見方によってはその発言も危ないですよ、という忠告は言いかけてやめた。本人にその気がないのだから、穿った見方をする必要なんてない。光上也御行と四宮のことは知っている。そこに介入する気なんてさらさらない。

「恋愛が分からない、というのはそれはそれで問題では?」

忠告よりも気になったことを口にした。調整屋<sup>バランス</sup>として、中学生までならまだ問題ないとしても。思春期真っ只中の高校生相手にそれは本業に支障が出そうだ。社会でも不倫だのなんだの人間関係のゴタゴタがあるというのに。

早坂のその指摘を受け、光上はポリポリと頬を指で搔きながら視線を逸らす。自分でもそこは思っていたらしい。

「さすがに鋭いね早坂は」

「知ってる人間なら誰でも気づくかと」

「そうなのかな。……幸いにもドンパチャつちやいそうな人たちには俺のことを既に知られてる。抑止力は機能してるんだ。三角関係とか略奪愛とか、それくらいのことなら介入する必要もないし。観察して学習させてもらってるよ」

なおその学習の進捗は悲しいほどによろしくない。

「それに、どこでも介入できるほど軽いフットワークでもないから」自嘲する彼の横顔を見て、案外人間らしい人だと思った。学校に順調に通える程度にはなっているものの、それも疲労と回復が釣り合っているから成り立っているだけ。そのバランスが崩壊すれば一気に体調が崩れてしばらく療養生活になる。

過去にそれが嵩んだ結果、彼が今もなお悔やむ事件には介入できなかった。その事を思い出すも、すぐに頭から弾き飛ばした。

「早坂みたいな生活してたら2日で入院だよ」

「2日も保つんですか？」

「……それくらいには体力ついてほしいな」

「試してみますか？」

「やめとく。今はもう倒れられない生活だから」

なんのことはさすがに分かった。彼にそう言わせる相手というのは限られている。片手で数えられる程度だし、毎朝のランニングのことは知ってる。

(会長の妹さんは中でも特別扱いですか)

異性にそう言わせられることに、圭へと軽い尊敬の念を抱く。それと同時に、そういうふうに思われてみたいとも思った。光上にはなく、いつか自分が恋できる相手に。

「そういえば、早坂ってネイルするんだな」

「ええまあ。ギャルとして学生生活を送っていますから、これくらいはしますよ」

「なるほどね。さすがプロ」

「それはどうも。仮にも女子のおしゃれに触れたんですから、可愛い一言でも言うべきですよ」

「たしかにこれは失礼だった。そのネイル、校則を気にしてるのもあるんだろうけど、控えめにしてて可愛らしいよ。早坂によく似合ってる」

「……ありがとうございます」

本当に言ってきたことに驚き半分、率直な褒め方に思うところが半分。

「早坂？　どうかした？」

「いえ、まさか本当に言ってくるとは思ってなかっただけです」

「あはは……、なんか安っぽい男みたいになっちゃったか」

それはそれとして、異性に褒めてもらえたことが思いの外嬉しかったりする。そんなチョロい女ではないと自分を律し、光上には悟らせないようにポーカーフェイスで振る舞う。

「ところで早坂」

「なんででしょうか？」

「帰ってもいいかな？」

「……そうですね。お止めする用事ももう終わりましたし」

「うん。それじゃあまた明日。何かあったら連絡でもちようだい」

「はい。また明日」

「以上が事の顛末です。彼の発言と性格からして、特別何かしようつてわけでもないと思われます」

「そう、ね。……それならそれで気になる発言なのだけど」

帰宅し、食事も入浴も済ませた後、早坂は主人たるかぐやの部屋で報告をしていた。この話が終わればまた会長との話を聞かされるわけで、今日の夜は長そうだ。

早坂の報告を受け、かぐやも概ね早坂の考えに賛同する。争いを好まないという性格なのだから、仕掛けてくるとも思えない。

そのせいで余計に発言が気になってくるわけだが。

「真意がわかるまで監視してちようだい」

「そう言うと思っていました」

「それと、光上くんへの探りは本格的にやる必要もないわ。気がかりではあるけれど、彼の性格はある程度信用できる。警戒程度で」

「それは助かりますね。正直あの人の相手は最低限か本腰入れるかの2択しかないですし」

「そうね。でも彼は下手に刺激する必要もないもの。……前みたいなのはもう遠慮したいし」

「私もそれは遠慮したいですね」

二人揃って渋い顔をする。彼はいつもオフモードだ。看過できない何かが起こった時のみスイッチが入り、発言力のある周囲すら黙らせるほどの才覚を惜しみなく発揮する。

それを見たことがある生徒はほんの一握り。そしてかぐやは一度

それを相手取ったことがある。誰が悪かったかと言うと、けしかけた校長だろう。

フランス校の生徒会副会長ベルトワーズ・ベツィーに白銀御行を口撃するように校長が指示。白銀がフランス語を聞き取れないことが幸いしてダメーゾ0だったものの、フランス語がわかる且つ白銀御行が大好きな四宮かぐやが介入。今度はベツィーがサンドバッグ状態となり、それに気づいた光上が介入。本気の光上との言葉の応酬が始まった。

御行が止めに入ったことでそれは終わり、互いに謝罪してその場は収まった。ちなみにその後校長は光上に説教されていた。親族だからこそ許せなかったらしい。

「彼のモットーは平和ですからね。そしてそれは自分の視線が届く範囲」

「そうね。会長が信頼するのもわかるわ。彼は生徒会の目が届きにくいところを見ているから」

光上は正義感を持って介入するわけじゃない。それを振りかざすことにもいい顔をしない。根底は誰よりも子どもだ。「みんなが笑える」状態を保ちたいという理想を抱いてるだけ。

「それはそうと早坂」

「なんですか？」

「その……ネイルって会長……じゃなくて、他の男の子にも好評かしら……」

「よくそれで誤魔化せてると思ってますね」

昔はこんなにあほじゃなかったのにな。なんてことを何度思ったことか。そんな悪態はさておき、おしやれなんてしないかぐやが興味を持った。これには食いつかざるを得ない。

「まあ……そうなんじゃないですかね」

男受けしない……とは光上のせいで言い切れない。お世辞とか言わない男が褒めたのだから。

一般的にはあまり男受けしない。そんな情報をかぐやが持っているわけがなく、おしやれさせたいという欲求を優先することにした。

「はあ。かぐや様も会長もいつまであするんだか」

自室へと戻り、寝る前にも見ている動物動画を再生する。今日はゴリラが動物園の強化ガラスにパンチしてる動画。ヒビを入れる威力は爽快だ。

それを見ながら思い返す。今後監視していく光上との会話を。

——恋愛を知らない

——学習してる（本人の中では）

そして——ハーサカさんが気になる

「……………え……………」

それはつまりそういうことなのだろうか。

確証なんて得られない。考えが正しければ、それは無自覚ということになるのだから。

誰かに好きになつてもらおう。

その事自体には喜びも感じられる。だが、ハーサカは早坂であつて早坂じゃない。

やはり「偽らなければ人に好きになつてもらえないんだ」とさらに強く思った。

重ねて言う。確証なんてない。早坂が現時点で持つ情報の中で、その可能性が浮上してきただけだ。

他人なら可能性の1つとして保留できた。

それが自分だから処理に戸惑う。

なにせ彼は、嘘が嫌いな人なのだから。

「ウチにどうしろって言うの……………」

愚痴とともに、体をベッドに投げ捨てた。

## 第4話

主人からの命令は、光上晶を監視すること。ただし事を構えたくはないから軽度のものでいい。探るのではなく、もはや観察の域でいい。

そう指示されたものの、どうしたものかと頭を悩ませた。四六時中の監視ではないし、学校にいる間もずっとというわけでもない。聞こえとしてはとても簡単に聞こえるが、実際にはそうも言っていられない。

何かの兆候があるのならそれを見逃すわけにはいかない。だが、観察と言える程度の監視でそれを見逃さないというのは至難の業。

「そんなわけで監視することにしました」

「どんなわけで？　というか監視することを本人に言うんだ……」

今日も今日とて早坂は空き教室へと呼び出した。二人で並んでタブレットを見つつ、会話を続ける。

「どうやろうにも気づかれまますから。正直言つて面倒なことにはしたくないですし。光上さんはわりとかぐや様を嫌ってますし」

「いや嫌ってないけど!？」

「？　そうなんですか？」

「え……嫌ってるように見えてる？」

「少なくとも仲悪いって印象ですね。あーでもご安心を。他の人たちは誰も気づいてませんから」

それならまだいいかと一安心。早坂だけが気づいたのも、二人の間に立てる人間であり、気を張っているからだ。現に御行は微塵もそんな印象を抱いてはいない。

「仲悪い、か。あの人に悪い印象とかは抱いてないんだけどね」

「それでしたら苦手意識でもあるのでは？　かぐや様もその意識があるようですし、お互いにそう思ってるのでしたら、ぎこちなさがあったても仕方ないかと」

「それを感じ取れるのは早坂ぐらいだし、無意識のままの方がいいの



かな」

「私からはなんとも。今のところお二人は接点も特にはないですし。将来のことを考えたら、改善するのも悪くないかと」

「将来ね。早坂は子どもほしい？」

「はっ。」

なんの脈絡もなしに突然の話題を振られる。「結婚願望ある？」とか「将来どうなりたい？」とかでもなく、いきなり子どもがほしいかの質問。何を考えてるのか読めない。光上の皮をかぶった藤原天敵なんじやなかろうか。力の抜けるような笑顔をされるとますますそう思ってしまう。

「確認ですけど、私たちは付き合ってますし許嫁でもありませんよ」  
「知ってる。将来のことを考えたらさ、先輩やら後輩やら同級生の人たちの子どもを見ることになるわけじゃん？ そのまま結婚しそうだなってカップルもいるし、数年後には結婚してそうだなって人たちもわりといる」

生徒会が仲立ちして成立した早熟カップルとか。

「早坂はどうなのかなって思ってたさ」

「話の流れからしたらかぐや様にどんな子が生まれるのか、という流れになりますよね普通」

「読めないところだからさ。今の体制を壊せるかで大きく変わる人生でしょ。あの人」

「……そうですね」

財閥の令嬢と一般家庭の男。誰の目から見ても釣り合わない。ラブロマンスなら十二分にあるだろう。学園生活を見ていたら、お似合いの二人だと誰もが言う。

ただし、それを家が認めるかは話が別だし、周囲の大人たちの反発も十分ありえる。認められなくても黙らせるだけの地位を確立するか。もしくは逆パターンで成立させるか。どうするかは二人次第で、どうなるかはまだ読めない。

「暗くなりそうな話をして息が詰まるから。それに、今日の前にいるのは四宮さんじゃなくて早坂だし」

「それならまず結婚願望があるかを聞きますよね」

「あるでしょ？ 早坂って結構そういうの憧れてるじゃん。カップルとか、デートとか」

「決めつけられても困ります」

「そっか。勘違いだったか。ごめんね」

あつさりと引く。座っていること、すぐ近くにタブレットがあることによつて、頭を下げるのも小さな動きだけになる。早坂は別段その事を気にしないし、あの二人を見てたら恋してみたくなるなぐらいのことは思つてる。だから光上が言つてることも掠つてはいるのだ。

そもそもなんで確信めてそんなことを言つてきたのか。少し考えてすぐに答えに至る。自分がいつもつるんでる子たち。彼女たちが情報源なんだろう。学園内での光上の情報網は広い。それぐらいのことは流れてくるのだ。

「そう言う光上さんはどうなんですか？」

「結婚願望？ できたらいいなーぐらいだよ」

「そうですか」

そこを掘り下げるわけでもなく、さらつと流してタブレットを見る。今日は四宮も藤原も部活に行つていて、今生徒会室にいるのは御行と石上の二人だけだ。会話からして、今年度の部費の調整をしているのだろう。

「……二人は欲しいですね」

ぼつりと呟いた。それが何かなんて聞かなくてもわかる。光上は少しだけ驚いて、すぐにふわつと微笑みながら「きょうだいは憧れるよね」と返す。

光上はひとりっ子だ。早坂もひとりっ子。ただし、早坂の場合は主人のかぐやと姉妹のように育っている。主人ではあるものの、妹同然に感じている。仮に結婚して子どもができるのなら、きょうだいがいるようにはしてあげたいと思つていた。

「話は戻りますけど」

「ん？」

「かぐや様に苦手意識があるかもって話です」

「あー、うん。考えてみたけど、正確には四宮家に対してかな」

そうだろうなと納得できた。彼の性格上、四宮家の方針というものは何一つ受け入れられない。中立という立場にいること、かぐやが学園生活をほぼ普通に送っていることで、対立構造が出来上がらないのだ。

そこは早坂からしてもプラスに働く。当主を毛嫌いしている早坂にとつて、四宮家の在り方に良い印象がない光上には仲間意識が働く。あくまでも若干のものではあるが。

なにせ、彼が嫌うものの1つに、自分が当て嵌まってしまうのだから。

(偽りばかりの私は、むしろ嫌われるはずなのですが)

チラツと彼を見ても嫌ってるような様子が見受けられない。彼の中の理屈というか、ルールというものがまだ分からない。

「どうかした?」

「いえ」

早坂の視線に気づき、何かあるのかと聞いてみる。早坂は短くそれを否定し、視線をタブレットへと戻した。生徒会室では絶賛石上へのイト祭りが始まっているようだ。部活動に励む男たちへの妬みが強い。

「あはははは! 石上くんは相変わらず面白いな」

「面白いで流せるのはあなたぐらいでは?」

「早坂は部活に入れるとしたら何に入りたい?」

「人の話聞いてませんね」

この振り回しっぷり誰かに似てるような気がする。誰でもいいやとその考えを消し飛ばし、自分が部活をしたらというもしもを考えてみる。

「特に希望はないですね」

パツとは出てこなかった。

「光上さんはどうですか?」

「体が脆いからなー。運動部とかは無理だし、文化部かな」

「そうでしょうけど、それならなぜ文化部に入っていないんですか?」

「どこかに属するってのがね」

「……あー」

入りたい部活はいくつかある。そう呟いてみるも、現実はどうもいかない。部活に入るとどうしても中立性がなくなってしまう。どこの誰でもない。ただの秀才院生という立場でないといけない。だから光上は部活動を始めることはないのだ。委員会も同様である。

「生徒会もある意味中立の立場ではあるんだけどな」

「断ったって話でしたね。かぐや様経由で聞きましたよ。あの人文句言ってみましたよ」

「あはは、だろうな」

断った理由も早坂は聞いている。生徒会に向いてないと言って断ったということ。

『四宮は弓道部だぞ』

『めちやめちや向いてるじゃないですか』

掘り下げようかと思っただけ、それよりも面白そうな話が始まりそう。早坂はタブレットへと意識を戻し、光上もそれに倣う。

弓道というのはその競技上、胸の前で弓を引くことになる。当然だが胸当てで胸の保護もする。

男子は何一つそこに不安要素なんてない。ただし、女子の場合は人によってはそうもいかない。

『——サラシとか巻く必要あるんですよ。でも四宮先輩のサイズならなんの心配もないじゃないですか。こんなんですし』

ケラケラと笑いながら胸の前でジェスチャーを始める石上。彼の辞書にデリカシーという言葉はないのだろうか。男だけの会話ならそんなものは必要なかったか。

石上はここでは止まらない。一度走り出した彼からはブレーキなんて機能が消されている。石上による弓道講座は続き、Dカップを超えたらどうしようもないという話にチェンジ。ターゲットはそのまま学園でも指折りの大きさの藤原へ。

『石上くん?』

『っ!!』

石上の弓道講座を聞いていたのは会長だけではなかった。四宮の

くんだりから四宮はいたし、藤原のくだりの時も藤原がバツチリ聞いている。生徒会室では、新聞を丁寧折り畳んで作られたハリセンで石上がしばかれています。

その一部始終を見ていた生徒が別室にいるわけで。その会話内容もすべて聞いている。その二人がいる空き教室では微妙な空気が漂っていた。

「この人なんでそんな事知ってるんですかね」

その沈黙を破ったのは早坂の方だった。声は低く棘があり、その目は画面の中にいる石上を蔑むものだった。

「妙な豆知識持ってるよな。ゲームで知ったのかな」

「世の中いろんなゲームがありますからね」

石上が生徒会室から退場したところで、早坂の視線も元に戻る。ストレスが溜まつてるのだらうかと思うものの、よその事情には踏み込まないのでその言葉を飲み込む。

（使用人の一人でどうこうとはならないだろうけど、うちの親はアレだしな）

四宮家の当主が嫌いだと公言してる父親を思い浮かべ、火種になるか怪しいものすら送らないように留める。生徒間のことを任せてもらっているのは、そういうことも事情に含まれていたりする。

光上家が噛み付いたところで、四宮家の財閥は潰れない。ただ損害は確実に出るし、それを敵対勢力が黙って見過ごすわけもないのだ。だから不干渉が暗黙の了解なのである。

早坂の視線を追ってみる。それは真下であり、より正確には胸元。光上はやらかしたと瞬時に悟った。

視線を逸して誤魔化す前に早坂の手が光上の頬を挟む。

「今何を見ました？ 何を見て何を失礼なことを思いました？」

「……いや……早坂なら弓道できるんじゃないかなって」

「その性格はこういう時に難儀しますね」

嘘をつけない性格。先程の石上の話のせいで、「早坂はDカップ以下だろ」と言ったも同然なことに。

ニタアと口角を上げた早坂は、空き教室内をぐるりと見渡す。誰の

ものかはわからないが、都合よく新聞が置かれていた。それを取りに行き、藤原が作ったのと同じハリセンを作り上げる。強度は藤原よりも高いが。

「それはさすがに俺死んじやうんだけど」

「大丈夫です。加減は間違えませんから」

「ほんと、ごめんなさい」

「今さら遅いですよ。セクハラ発言と同義です」

スパアンといい音が響きわたった。

一度で終わることなく。連続で音が鳴り響く。

叩かれる勢いに逆らうことなく、光上の頭があっちへ行ったりこっちへ行ったり。先程の石上の再来である。

「これくらいでいいでしょう」

「早坂……途中から楽しんでなかった……？」

「なんのことが分かりかねます」

「あ、そう……」

器用に少しずつ角度を変えられ、満遍なく頭をハリセンで叩かれた。意外だったのは、音の割には痛みが小さかったこと。見た目も痛そうだったのに。

光上のことを気遣った早坂なりの小さな優しさだった。

「ありがとう早坂」

「Mなんですか？」

「そんなことはないぞ？」

「目覚めかけないでくださいよ」

他人の性癖を開拓なんてしたくない。

引き気味にそう言うと、光上は笑ってまだ目覚めてないと言う。先のことなんてわからないから「まだ」がついてるとは理解できる。それでも不安と恐怖を感じずにはいられなかった。

「男子って藤原さんを見る目がたいてい厭らしいですよ。そんなに大きいのが好きなんですか。まあ所詮男なんて二言目にはセックスを言う生き物ですけど」

「その男子の前でよくそれを言えたな。恥じらいとかないのか」

「恥じらってほしかったですか？　そういうのが好みなんですね」  
「そういう話ではなく。男が盛ってるサルという認識には否定させてもらつとくぞ」

「胸の方は認めるんですね」

「そこは遺伝子レベルの誘惑だからね。その人を好きになるかの基準になるかは別として」

男はそんな単純な生き物ではないぞという主張だったものの、残念なことにもそこまでの説得力がない。光上個人ならある程度の信用があるものの、その前の話の文脈のせいで効果が薄れている。

しかも「ハーサカさんが気になる」発言。胸の大きさをかさ増ししてる姿の方が気になると言われているのだ。信用の薄さは透明度80%である。

「よく巨乳派か貧乳派かの話が白熱しますよね」

「早坂はどつからそんな話を仕入れちゃうのかな……」

「ちなみに光上さんはどっち派ですか？　会長は貧乳派ですね」

「断言しちゃつたよ」

かぐや様を好きになつたのだからそうでしょと目で語られ、主人に対して容赦ないなど心の中で呟く。お互いの信頼関係があつてこそだろう。そんな関係に憧れを抱いてしまう。

「巨乳派か貧乳派かと言われるてもな……。これ女子相手に言うのキツツいな」

「私は他言しませんからご安心を」

「そこは信じてるけどさー……。程よい大きさが好きかなあ。デカすぎてもちよつと……つてなるし。付き合うならつて話になると人によろとしか言えないけど」

「軽く逃げましたね」

「保険ぐらいかけさせてくれ……」

「いいですよ。十分楽しめましたから」

（いやこれどつちなの!?　ウチはかぐや様と書記ちゃんの間くらいだけどー！）

ただ単純に好みの話のはず。しかし、人間の心理というものは、好

きな人の特徴と合致するものを好きになりやすい。

この場合。ハーサカ<sup>早坂</sup>を好きになったから、それくらいの大きさが好みになったのか。それともたまたま合致してるだけなのか。判断に困る答えだ。なおパッドを入れたところで藤原には勝てない。

せめて照れとかがあればヒントになるのに、光上は照れることなくサラツと答えてしまってる。謎が深まる一方だ。

「この論争って途中からは違う意見が飛び出すよな」

「男の盛り話にはそこまで興味ないですよ」

「じゃあいいか」

「……あーでもかぐや様への助言に使えるかもしれません。聞くだけ聞きます」

「簡単な話だよ。違う部位の方がときめくってやつ」

「性癖ってやつですね。うなじとか腰のくびれとか」

「それもあるし、お尻とか脚とか。髪型の話になったりもするね」

「今さらながらよく女子の前でこの話ができますね」

「話を振ったの早坂なんだよなあ！」

椰揄いを交えつつ、早坂は光上から話を聞くのだった。

かぐやへの助言はどうしようかという話にもなり、特に着飾らない性格を考慮した結果、『御行が好き仕草を探し出して不意打ちでやらせよう』という結論に至るのだった。



## 第5話

毎朝のランニング。平日の睡眠学習。そして毎日の自主勉強。

毎日同じことの繰り返し。それを苦に思う人もいるだろうし、淡々と過ごしていく人もいるだろう。同じように見える日々には、僅かな変化をつけて楽しめる人もいる。

藤原千花はその中でも代表的な存在と言えよう。彼女は毎日を全力で過ごしているし、その天然さと底抜けに明るい笑顔から周囲をも楽しませることが出来る。放課後によく一緒にいる生徒会メンバーは、それを一番実感できてるだろう。

そんな人物とは反対に、光上晶は不器用だった。誰とでも一定の距離を作っていることと、休み時間を睡眠に費やしてしまうことから、『何でもない馬鹿げた会話』をする相手が限られている。放課後も勉強に使ってしまったのも一因か。

「つまりボツチなわけですか」

「誰がボツチか」

「え、ボツチ以外に言い方があるんですか？」

「いい切れ味をお持ちで」

最近の変化としては、不定期ではあるものの、放課後に早坂に呼ばれることだ。その目的は聞いているし、早坂の苦労も知っているから協力的に対応している。光上本人ですら自覚のないことへの探り。答えなんて見つからないだろうと、早坂の気持ちは後ろ向きだ。

今日は普段の空き教室ではなく、生徒会室に面する廊下で雑談している。夏が近づいてきており、窓から差し込む陽射しは日に日に鋭さを増していく。

「そーいや早坂。夜中のうちに学園に侵入したでしょ」

「……ストーカーですか？」

「失礼だな。夜は22時で夢の中だよ」

「かぐや様より早いことに驚きです」

早朝のランニングに備えてのことである。

「うちのシステムは、突破されたらされたで記録が残るんだよ」

「そんなシステム聞いてませんよ」

「教えるわけじゃないでしょ……。でもま、親にシステム1個追加してみたって言われたから俺が追加したやつだし。早坂が知らなかったのも当然だよ」

親から提案されたのは中学生の時。それが完成したのは今年の春のこと。まさしく最新鋭の防犯システムだ。そのシステムの導入には細心の注意を払い、極秘裏に行われた。導入された事自体を知っているのは、学校関係者を除けば提案者である光上と、今話を聞いた早坂ぐらいだ。

「それで、何か罰則でもあるんですか？」

「別がないよ。不法侵入ではあるけど、そこから発展して他の罪を犯したわけでもないし」

「甘いんですね。それで将来を生き抜けるとは思えませんよ」

「早坂は手厳しいな」

苦笑する光上を見てるとますますそう思う。財閥の競争は甘くないし、その傘下である企業も同様だ。そこ以外の企業であろうとも、競い合いは当然のようにある。付け入る隙を見せたらそれで終わり。一瞬たりとも気が抜けない世界。

否応なくその渦のど真ん中に飛び込むことが決まっているのに、ましてや魔の巣窟となり得る学園を治める立場になるのなら。その甘さは致命的だ。

強さによる赦しなら通用する。しかし、甘さによる赦しは通用しない。その事を分かっているはずもないのに。

「あなたの考え自体はいいと思いますよ。理想論ですし、どす黒い世界を垣間見てる私からしたら、綺麗事過ぎて気持ち悪いぐらいではありますけど」

「そこまで酷いか」

「かぐや様も苦虫を噛み潰したような顔してましたからね」

「四宮家とは相容れない考えだしな」

世の中はそんなに優しい世界じゃない。光あらば影がある。そこ

には必ず闇がある。誰もが手を取り合えるような世の中はあり得ない。そんなの洗脳しないと無理だ。

光上の理想を否定する材料はいくらでもある。この社会の存在自体が否定材料を山ほど抱えている。

それでもなおその考えを貫くのは、針の山を裸足で登るのと同じ。

「ですが」

「ん？」

それを知っていても、それでも諦める気なんてサラサラない。その目はブレることなく力強く前を見ている。早坂はそんな目を見ながら話す。

「実現すれば理想論ではありません。私は少しばかり楽しみにしてます」

「……ははっ」

「なんですか小馬鹿にしたように笑って」

「いやごめん。まさか早坂に応援されるとは思ってたから。誰よりも先に社会の暗い部分を痛感してるはずなのにさ。それでも応援してくれるんだ？」

「期待はそこまでしてませんけどね」

素っ気なく答えられる。それで十分だった。

敵を作るわけでもなく、かと言って味方を作るわけでもない生き方。早坂が言ったとおりのポツチ状態。その事についての自覚はもちろんある。他の生き方をしてみたいと思ったことだってある。

それでも自分で問答して決めた道だ。やり通そうと心に決めてる。それを応援してくれた。口先だけの応援だろう。

それだけのものでも嬉しいものだった。

「ありがとう早坂」

「お礼はいりませんよ」

なんだか心が軽くなる。何故だろうと少し考えてみると、納得できる答えが見つかった。

ここまで踏み込んだ話をしたのは、今日が初めてだからだ。事情を知っている人間。その道の厳しさを知っている人間。

その上で応援してくれる。これ以上のものはない。

『ビィー！ ビィー！』

「かぐや様？」

「今シユシユが鳴らなかつた？」

光上の言葉を無視して急いで生徒会室へと踏み込む。作戦実行中だったはずで、抜かりないはず。しかし緊急事態というものは想定を超えてくる。

（いったい何が——！）

「会長の頭が私の肩に！」

「……」

「うわ珍しい」

その程度のことと緊急事態用の連絡を寄越さないでくれ。というのを口にはせず、つきたくなるため息も控えて用件を聞いた。

今の状態はどう見てもラッキー展開を見せてつけられてるだけだ。見せつけられて楽しいものでもない。

「何人たりとも生徒会室に入れちゃ駄目よ！」

「……かしこまりました」

「四宮さん。寝込みを襲うなよ」

「襲いませんよ！」

「かぐや様にそんな度胸はないのでご安心を」

「何よ人をヘタレみたいに言つて！」

「じゃあできるんですか？」

「できるけどしないわよ！ 人としての品性が疑わしいじゃないそれ！」

人としてなんて話をよくその口で言えたなと思わなくはない。この時ばかりは早坂と光上の胸中が一致する。

これ以上話していて誰かが来ては任務失敗だ。邪魔者は早く退散しよう。

生徒会室のドアを閉め、ここに至れる二つの廊下を監視できる場所で待機。先程と同じように壁に凭れて光上と雑談。話し相手がいるのは暇つぶしになっていいなと思つてみたり。

「いつもこんな感じ?」

「そうですね。半年間あの調子です」

「あの二人半年前からなのか」

ドアの奥にいる二人の方を見て呟く。思い返してみたらたしかにその時期あたりから、御行の行動に小さな変化もあつたことに気づく。本当に恋愛が絡むと残念なまでに鈍る感性だ。どうやって二人のことを知ったかと言うと、御行からの相談が、恋愛に鈍感な光上にも分かるほどに分かりやすかつたからだ。

「つと、さつそく誰か来たな」

「あれは会計くんですね」

「忘れ物かな?」

リュックを背負って走ってくる石上。あの様子からして考えられるのは忘れ物が有力だ。きつちりしてることが多い分、こういう時のミスが目立って見える。

「四宮さん人を殺せるぐらいに機嫌悪かつたな」

タイミングのいい独り言。それを聞いた瞬間石上が華麗にUターンを決めて帰っていく。が、その足がピタリと止まって振り向いた。

「光上先輩が学校に残ってるのって珍しいですね。しかも生徒会室の前。会長に用事ですか?」

「そういうわけでもないよ。早坂に頼まれて不定期で放課後に残ってるだけ」

「早坂先輩?」

「それはウチのことだし。あ、別に付き合ってるとかじゃないから安心してほしいしー!」

「何に安心しろと」

うわあギャルだとはつきり顔で語る。言葉で表さないだけで本音は語るなんて器用だなと光上は思い、早坂はその反応に少しイラツとする。

「光上先輩の性格からしてなかなかない組み合わせに見えるんですけど」

「ははは、ほら俺交友関係がアレだから。……うん、ほんと、ね」

「なんかすみません。それで、お二人は何を？」

「光上くんの暗号に挑ませてもらってるだけだし」

「暗号……あー、前に会長も言っていましたね。僕も見させてもらっていいですか？」

「ウチはいいけど、会計くん大丈夫？」

「何がですか？」

「さっきドアが音なつてたし、四宮さんが——」

「すみません急用が入ったので帰ります」

来たときよりもさらに早く廊下を走っていく石上。さらつとついた嘘でここまで効果が出るとは。四宮と石上の関係はどうなっているのやら。光上が頭を悩ませていると、早坂が何か言いたげな様子で見えてきた。

「どしたし」

「真似しないでください。光上さんがいることで、難易度が上がってる気がします」

「放課後に図書室以外の校内にいるのは珍しい人間だからな」

「こんな弊害があるとは……。それもこれもかぐや様が——」

始まった愚痴もそこそこに。ここで一番厄介な人間が乱入する。

何を考えているのか。どういう思考をしているのか読めない人間。ど天然さをそのままに、思い立ったことを行動に移す珍種。対象Fと藤原だ。

「あれ？ 書記ちゃんじゃん！ どしたし〜」

「あ、早坂さん。光上くんと一緒なんですね。……光上くん!? どうしたんですか!?! 砕けた心を早坂さんと探してるのですか!?!」

「そんな異世界を冒険するようなことはしてないし、心も砕けてないよ」

「ほえ〜。珍しい組み合わせですね。でも光上くんみたいなボツチなら、たしかに早坂さんみたいに誰にでも愛想を振りまくフレンドリーな人と相性もいいかもしれません！ これはベストマッチですね！」

「藤原って悪意無く人を刺すよな」

「ほえ？」

天然であることと人柄の良さで見逃されているけども。藤原千花という少女は無意識で人の癪に障ることをしでかしてしまう少女だ。歩く起爆装置である。

藤原による被害を最小限に抑えた上で、早坂の任務を遂行する必要がある。ここは話を先に促すべきだ。

早坂に視線を送ると、彼女も同じことを思っていたようでコクリと頷く。共に行動することこそ少ないものの、連携には事欠かなかった。これもお互いが身を置く環境によるもののおかげ。

「書記ちゃんは生徒会に用事〜?」

「用事と言いますか。頭につけるリボンを探してまして」

「ついでるじゃん」

「昭和のポケかな」

「違いますよ! よく見てくださいこれはスペアです! 大きさがいつものやつより小さいですよ!」

「言われてみるとたしかに」

申告が無ければ全く気づけないぐらいの変化。これは藤原に彼氏ができた時、彼氏は相当苦労することになりそうだ。まだ見ぬ藤原の男に、いつか現れるであろう藤原の男に合掌した。

「二人ともなんで手を合わせてるんですか?」

「なんとなくだし。それより書記ちゃん。探すの手伝ってあげる!」

「本当ですか! ありがとうございます!」

行動を全く読めない藤原から目を離すのは得策ではない。幸いにも生徒会室に訪れる人は滅多にいない。警戒すべきは生徒会メンバーであり、石上は帰った。ならばこの場から離れてもリスクは限りなく低いと判断できる。

早坂の提案で、藤原が今日通った場所を順番に訪れることになった。親に黙ってポケGOをしていたことがここで判明。スマホまでは親も確認しないために、規制が多い藤原の唯一の抜け道なのだ。

「私に見てただけですよ!」

「そもそも校内でゲームは校則違反だし! 生徒会が校則破っているの!?!」

「……私は見てただけで、私が校則違反したわけではないので」「保身に走るなし!」

「まあその辺で。とりあえず探しに行こう」

「光上くんは話が早くて助かります」

「ウチ間違ったこと言つてないのに!」

「早坂八つ当たりで抓らないでくれ」

間に挟まれると損な役回りである。それはこれまでの経験からわかっていたことなのだが、自然と間に挟まってしまふ星の下に生まれ たのがこの男。小学生時代は体調を崩して休み、学校に行つてはトラブルの間に挟まれ、体調を崩して休むの地獄ループ。

彼が誰とでも距離を取る道を選んだのは、そんな時代を経験したことも関係するのかもしれない。

「書記ちゃんさすがに池の中には入つてないよね?」

「それはもちろんですよ。この周りをぐるぐる歩きましたけど」

「中に落ちてる可能性もあるのか……」

「はあー。仕方ないなっ!」

早坂は池に入ろうとしたところでグイッと後ろに引つ張られた。振り向いてその犯人を確かめると、思った通り光上だった。

「早坂は入つて探さなくていいよ。俺がやるから」

「おおー! 光上くんが男見せてます! これは10ポイントです!」

「体調崩すよ? やめといたほうがいいと思うな」

「これくらいなら大丈夫だから」

そう言つてズブズブと池の中の搜索を始める。光上は池に入つてから思った。今日体育ないから着替えがないということ。

保健室に行けば借りられるだろうし、帰る頃には乾いてる気がする。前向きな解決策を思い浮かべつつ、池の中を探してみる。結果から言えば見つかるなんてことはなく、光上の濡れ損なのだが。

「今生徒会室あたりにピカチ——」

「なにやっつてんの爺さん」

「君こそなんでズブ濡れなのボーイ」



お互いにツツコミどころがある。藤原はのほほんとそれを眺めるだけで、ツツコミ役と化した早坂はというと。

(疲れるわこれ)

ツツコミを投げ捨てることにした。

校長を生徒会室の方ではなく、体育館の方へと早坂が誘導。

藤原のリボンの捜索が再開され、低木の下にいかと藤原が四つん這いになった。光上は藤原に背を向けて反対側を捜索。その背中に早坂のジト目が突き刺さる。

「別に何も見てないぞ。回避しただけだ」

「ウチは何も言っていないし」

「……」

弁明が裏目に出た。

どう足掻いても逃げ道なんてないのだが。それもこれも秀知院学園の制服が悪い。多くの男にとっては役得だが。

早坂は藤原の方へと視線を戻し、スカートの内側にリボンがあることに気づく。減らなくてよかったはずの光上の名誉の一部が削られた。怪我の功名ですらない。

「こんな所にあつたー!」

藤原曰く、ニワトリの写真を取るときにリボンが食べられそうになり、服の内側へと避難させたのだ。

これまでの時間を返せと言わんばかりに早坂の視線が暗くなる。藤原はそんなことには一切気づかないのだが。藤原が気づいたのは、さつきから光上が視線を逸しているということだ。その事に首を傾げ、今の自分の状態を見る。

リボンを確認するためにスカートを持ち上げている。当然ながら普段隠れている部分が見えるわけで。

「み〜つが〜みくん?」

「藤原さん。俺は何も見てないよ。見ないようするために視線をそらしてるんだカラ」

「ふふっ、もちろん信じますよ〜」

「そ、そっつ〜」

「はい！ 信じますけど〜」

含みのある言い方。圧を感じる笑顔で光上に近づき、そつと肩に手を置いて体を近づける。自分の胸が当たってるのもお構いなし。いや、それすら利用している。

艶っぽい顔を浮かべて顔が近づけられる。光上は微動だにできない。

「光上くんのえっち」

「——っ!!」

そつと耳元で囁かれた。

今年一番の一撃である。

その場に完全に固まった光上をそのままに。藤原は丁寧なお辞儀とともにお礼を言つて去つていった。

その場に残っているのは、石像と化した光上といつも以上に感情が消えた早坂の二人。自動人形のような動きで光上へと向き直る。早坂は無表情ではあるが、目は無感情ではなく何か渦巻いていた。「最低ですね」

光上は何も言えずにその場に崩れ落ちた。

今年一番の一撃が僅か10秒で更新された瞬間だった。

## 第6話

日課となっているランニングは、圭のバイトがない日を除けば雨の日だつて行われる。カッパを着てのランニング。カッパの内側は熱が籠もるが、外側からは冷たい雨に打たれて冷え込む。

それによつて体調が崩れては元も子もないとして、圭は雨の日は付き添いがなくてもいいと言つたことがある。無理してつい来てきてもらつて倒れられたら。そんなもしものことを警戒し、何よりも光上のことを心配してのこと。

しかしそれは飲み込んでもらえず、雨だろうと雪だろうと光上はランニングをやめなかつた。日々のランニングでついた体力は、それぐらいのことであれば跳ね除けるようになったのだ。もちろん限度はある。限界点を理解しているからこそ、それでも大丈夫だと光上は判断している。

限度が来なくても崩れる場合はある。光上の場合だと体が冷え込んだり、体力を消耗し過ぎたりといった身体的な要因と、気に病むようなことに遭うといった精神的な要因が同時に降り掛かつた場合だ。

「光上さん大丈夫ですか？」

「なんだか今日は息が上がりやすい日みたい」

ランニングを終えた光上は、営業所前にある花壇に腰掛けていた。報告を終えて退勤した圭が駆け寄り、心配そうに眉を下げながらタオルで汗を拭つてあげている。いつもなら「自分でやるよ」と言うのに、今日はされるがままだった。

「汗も多いですよ」

「今日は暑いもんね。真夏日かな」

「早朝ですし。気温はまだ10度を超えたくらいだと思いますよ」

「あれ？」

大丈夫そうじゃなかつた。

圭はタオルを光上の首にかけ、スポーツドリンクのキャップを開けて手渡す。自分が飲んでいたものだが、そんなことを気にしている場

合じゃない。

ごくごくと圭にも聞こえる勢いで飲まれる。本人の自覚がなかっただけで、体は水分を求めていたようだ。スポーツドリンクに含まれている栄養も染み渡ることだろう。

「あ、ごめん。飲み干しちゃった」

「いいですよ。帰ったら飲み物ありますから」

「それならすぐに家に向かうか」

しっかりとした足取りで歩き始める彼の隣りを、圭は不安を抱えながら付き添って歩く。暑そうにしていることには変わりなく、定期的にタオルで汗を拭っている。どこからどう見ても体調を崩している。

(私……気づけなかった……)

きつと起きた時から体調は優れてなかったはず。それなのに圭を迎えに来て、新聞配達に合わせてランニング。いつも通りの様子を出し続けていた。圭は見事にそれに騙された。気づいたのは配達を終えた後。営業所に戻っている時に、息の上がり方や汗の量がいつもと違い過ぎてたから。

そこまですらないと気づけなかった。それを彼女は悔やんでいるものの、彼女に非はない。黙っていた光上が悪いのだから。

その光上だが、隠し事も極力しないように努める男だ。特に彼が仲良くしている相手には。

筆頭は御行になるものの、圭だつて彼の中で存在感が大きい。彼女に隠し事をしようとは思わない。

要は、光上本人ですら自分の調子に気づけていないのだ。鈍感なのではない。自覚できないほどに弱っているということだ。

「今日は学校を休まれてください」

「大丈夫。授業は聞いてるよ」

「光上さん……」

それも会話が噛み合わないレベルで。

ここままで弱っているのなら、会話に体力を使わせるべきじゃない。そう判断した圭は、家に着くまでの間話しかけることをやめた。彼も声をかけられなければ反応することはない。歩くことに集中してい

る。

「あの、(´)自宅までお送りします」

「え?」

圭がそう言ったのは、自宅のあるアパートまでたどり着いた時だった。塀に手を当てて体を支えている彼が、この後彼の自宅まで無事に行けるとは思えない。走って10分ほどの場所だと聞いている。今の状態からして3倍近くの時間がかかるはず。

そんな圭の気遣いだったが、彼がそれを受け入れるわけもなく。

「したらその後白銀さんが一人になっちゃう。俺が付き添ってた意味がなくなるよ」

「まずは(´)自分の心配をなさってください!」

「白銀さん……」

「私だって、登下校の時は一人でも大丈夫なんです。もう子どもじゃないです!」

「たしかに大人っぽいけど……っ」

「光上さん!」

視界がぐらついた。彼女が何か声をかけているけど、それを聞き取れない。返事をしてあげたいけど、体がまったく動かない。真っ暗な世界へと意識が遠のいた。

「光上さん!」

彼の体をなんとか受け止める。男女の体格差はあれど、光上は元々が弱いこともあって体格は平均より細め。そのおかげで中学生の女子でも支えることはできた。

そしてそれが限界だった。完全に意識がない人間の体は、起きてるときよりも断然重たい。しかも持ちにくい状態だと余計に重さを感じてしまう。せめて背負えたらよかったのに、今は正面から受け止めてるだけで手一杯。体の向きを180度変える余裕なんてない。

(どうしよう! どうしたら……!)

解決方法を考える。救急車を呼ぶのも手だ。というかそれが優先されるはず。しかし両手が塞がっていてそれどころじゃない。「今私光上さん抱き締めてる!」とか喜んでる場合でもない。普段ならニヤ

ついでしてしまうところだが、今はそんな余裕もない。

人手が必要だ。幸いにも家はすぐそこ。男手が欲しいし、家の中には父親と兄がいる。

圭は一瞬迷った。迷ったけども、自分のその葛藤よりも光上のことを優先した。

「助けてお兄い！」

「どうした圭ちゃん！ 何があった!!」

「うつわ出てくるの早っ。キツモ！」

「圭ちゃんが呼んだのに!? ん？ 光上!？」

「ほう。いつぞやの少年じゃないか」

「呼んでない人は出てこないで」

「しよぼん」

珍道中もそこそこに。御行が光上を担ぎ上げて家の中へ。圭は救急車を呼ぼうとしたが、その手を父親が止める。人を殺せるレベルの鋭い目で睨みつけるも、父親は動じなかった。経験の差が出ているのかもしれない。職業不定の強みか。

「こういう時ほど冷静に。救急車を呼ぶにしても、症状を確認しとかないとね」

「……うん」

普段は全く感じることもない大人らしさをこれでもかと発揮されたことにイラツとするも、言ってることは正しいから引き下がる。「楽しそうなイベントが来た」と顔に書いてあるのを圭は見逃さない。

家の中では光上を運んだ御行が、意識を失っている彼の体温を測っている。すでに冷えピタなどの準備もされており、こういう時の行動の確さと早さが光る。秀知院学園の生徒会長は伊達ではない。

「熱高いな。走った後にしても39℃超えはヤバイぞ」

「走った後という点を考慮してマイナスイ℃としても、高熱ではあるな。汗を一度流してもらいたいけど」

「意識がないから無理だろ。俺今日早めに学校行かないといけなし」

「安心するといい。ここは職業不定のパパに任せなさい」

「任せられるか!!」

兄妹揃つての激しいツツコミ。御行と言葉までも被つたことに圭のイライラ度が増していく。

「それよりも症状だ。倒れたとなるとやっぱ救急車を呼んだほうがいい気がするが」

「ちよつと待ってね」

「父さん何してんの?」

「触診。数年前に習った」

「いや怪しいな!?!」

「まあそう言うな。仕事になりそうなことだったから真面目に習得したんだぞ」

「そ、そうなのか……」

職業不定であっても父親は父親。子供たちを養つていくことが親の役目。そういう大事な部分は決してブレることなく、一瞬足りとも腐ることなく生きてきた。その口で言ったように、仕事になる可能性があるものは身に付ける。

真面目に動く父親の背中を見て、すぐに疑ってしまったことを御行は悔いた。なかなか人に誇れる父親とは言えないだろう。誇りだとは言えないだろう。茶目っ気な部分も含めて他人には知られたくない。それでも、やはりこの人は自分たちの親なんだ。

「これは……!」

「どうしたのパパ!」

「もう少し待て……」

真剣な顔から少しずつ思案顔になっていく。何かよくないことだろうかと圭は不安に駆り立てられた。

何か病気だろうか。もしかしたら手術しないといけないのか。不安になると嫌なことばかり考える。嫌な想像ばかりが膨らんでいく。

辛そうな妹の姿を見ても、何もしてやれない。自分の不甲斐なさが嫌になる。それがどうだ。恥とすら思ってしまったことがある父親の頼りがいのある背中。

「なあ父さ——」

「間違いない」

声をかけるも重ねられて消される。兄が何を言いかけたのか気になるものの、それよりも光上のことを優先。圭は何が分かったのか父親に聞いた。

「この子——いい体してる」

「……」

「……」

（あつぶねええええ!! この親父はやっぱり俺の知ってる親父だったわ!!）

「ランニングや水泳というのはバランス良く体を鍛えられるものでな。水泳はその競技の方法上、ランニングよりも肺が鍛えられるわけだが。それにしてもバランスのいい体だ。ところで御行。何か言いかけてなかったか?」

「何も言うことねえわ! たった今綺麗さっぱり消えたわ!」

「パパもう光上さんから離れて! 二度とこの人の体触らないで!」

「あーくそつ! 時間が……! 圭ちゃん。救急車は呼んでおくから後頼んでもいいか?」

「もちろん」

光上の体を触って楽しんでる父親を突き飛ばし、そのまま何度も踏みつけている圭に声をかける。御行ももちろん光上のことが心配ではあるが、今日は朝から生徒会関係でやることがある。会長である自分が休むわけにもいかない。

「まあ待て御行。彼は普通に風邪だ。このまま家で休ませてやればいい。彼の家と学校に一報を入れておいてやれ」

「嘘だったらパパを一生恨むから」

「怖っ」

ふざけたことをしでかした後だというのに。父親の言葉は力強く、その目の強さは確信を抱いてるものだった。御行も圭もそれが分かかってしまう。分かかってしまうから渋々了承し、御行は救急車を呼ばずに光上家へと連絡。学校への連絡は光上家から行うと言われ、それ



をお願いして電話を切った。

「それじゃあ俺は学校に行くから。父さん光上に変なことすんなよ！」

「俺はまだ妻に未練があるし、男趣味はないから安心しろ」

「そういう事じゃねえんだよ！ 圭ちゃんは……、中等部にも連絡入れとく。風邪ってことでいいか？」

「うん……。それでいいよ」

「わかった。風邪、うつらないように気をつけろよ」

「過保護」

いつもほどのキレはなく、圭は御行の方を一切見ずに光上のことを見ていた。その姿を見て御行もようやく圭の気持ちを理解し、同時に渦巻き始めたいくつかの感情を飲み込んで家を出るのだった。

(娘に春が来た。でもこれは駄目なやつ)

さすがに自粛する父なのだった。

「そんなわけで朝はドタバタしててな。さすがに焦ったものだよ。……いろいろと」

危うく父をカツコイイと思いかけたという複雑な思いが浮上した。

その話を聞いた生徒会の面々は各々違った反応をする。

「それは心配ですね……。光上くんが風邪を引くのも随分久しぶりですし」

藤原は純粹に心配するし。

「心配ではありませんけど、あの人って元々体が弱いって話ですよね？」

石上は心配が半分で、それも仕方ないのではという思いが半分。

「ここ数カ月とかは休み無しだったんですよ、彼」

四宮は特に何か思うわけでもなかった。強いて言うなら、意外だなと僅かに驚いてることか。

「前に休んだ時は入院するほどでしたし、さすがに心配で……」

「そうだったな。あの時期は……。今回もヤバイんじゃない!? ク

ソツ！ あの野郎!!」

「会長落ち着いてください！」

父親に騙された気がしてきて仕方がない。妹の想いに気づいてしまった以上、圭が悲しむことは避けたい。まだ認めてないけども。

突然荒ぶりだした御行を四宮が止める。誰だつて好きな人に止められたら大人しくなるしかないのだ。

御行が大人しくなると、話題を少しずらすことにする。頭を使ったことであれば、そのイラつきも散漫になると読んだのだ。

「私は原因が気になりますね」

「原因ですか？」

「ええ。彼は医療従事者並に健康に気をつけてる人です。さらに、あの程度の体力をもつようになったことで、ちよつとやそつとの事では体調を崩さなくなりました」

「それでも今回高熱が出た。何かあつたということですね？」

「ふむ……」

四宮の狙い通りに全員がその原因について考え出す。最大の狙いであつた御行も深い思考を始めた。

（あ、今の会長良い！）

邪な狙いもあつたようだ。

「病は気から、とも言ううし。それもあるかもしれんな」

「会長にしては珍しい意見ですね」

「いや何。元気が有り余ってる人ほど、微熱も平気な人がいる。反対に病気がちな人は気の弱い傾向がある。精神面を考慮するのも悪くないだろう」

「たしかに光上くんとか昔は気が弱かつたですからね」

「光上先輩が!? 想像できないんですけど!?」

「気が弱い……まあそう言えたかもしれませんがね」

一言でそう言えない事情もあるのだが、話が脱線するから流すことにした。何よりも、その手の話は本人がいない場所であるものじゃない。御行の存在は四宮にとつてもストッパーとして機能していた。

「両方で考えるか。外的要因と内的要因。風邪を引くことの典型例は

感染か、体が冷えることだったりするな」

「でも昨日は晴れでしたよ」

「クラス内で風邪をひいてる方はいませんでしたし。ゲリラ豪雨もありませんでした。濡れることなんてないのでは？」

「そうですよ」

(……………あれ？ 昨日光上くん……………池の中に……………)

藤原は笑顔とは裏腹に冷や汗をかいた。

「内的要因だと、シヨツクな出来事か」

「そういえば昨日は光上先輩校内にいましたね」

「図書室にか？」

「いえ。生徒会室前に。ギャルの先輩と一緒にいましたよ」

「早坂さんのことですね。私も昨日光上くんと会って、早坂さんと3人で私のリボンを探してもらったんですよ」

その発言を聞いた瞬間に、3人の視線が藤原に集まる。「犯人こいつじゃね？」という疑いがかけられた。しかしリボンを探してもらっただけ。普通に考えれば何かが起きるほうが考えられない。

(だが藤原書記に常識は通用しないから……………)

できれば疑いたくない。仲間が友人を陥れたなんて考えたくない。

「不幸なこととかがって連続して起こりやすいですよ。弱り目に祟り目と言いますか、泣きつ面蹴つたりと言いますか」

「石上会計。そのネタがここで通じるの俺だけなんだが」

「ぶぷー！ 石上くんそれ泣きつ面に蜂ですよー！」

「ネタだつて今会長が言ったでしょ」

普段正論で殴ってくる石上を、ここぞとばかりに藤原が襲撃する。

だがしかし！ へらへらと笑ってる藤原は冷や汗をダラダラと流していた！

(私昨日光上くんにありもしない罪を……………)

信じてるなんて言っておいて、揶揄い気味に彼をえっち呼ばわりした。その事を藤原は思い出したのだ。

(私のせいでは……………)

この話は生徒会メンバーだけが聞いているものじゃない。

四宮かぐやの侍従である彼女もまた、ワイヤレスイヤホン越しに話の一部始終を聞いていた。今もなお話は聞こえてくるものの、半分ほどは聞き逃している。

背中を壁に預け、薄明かりの虚空を見つめる。

そこに見えるのは――

(これ……ウチのせいだ)

## 第7話

ごろんと寝返りを打った時に目が覚めた。やけに重たい瞼を押し上げ天井を見上げる。知ってる天井ではない。自室ではないし、病院の天井というわけでもない。

「げほっ、げほっ！」

どこだろうと頭を働かせる余裕もない。何度か咳き込み胸を抑える。咳が止まっても手の位置はそのままに。自分の鼓動を手で聞いている。ゆっくりと深呼吸して息を整え、気持ちを落ち着かせる。

体がだるく、起き上がるのも億劫に感じる。なんとか体を横向きに変え、天井以外の場所へと視線を移す。やはり知らない部屋。見える範囲ではとても質素な部屋に思える。所々に控えめな華やかさが感じられた。

「光上さん目を覚まされたのですね」

「白銀さん？」

失礼なことに他人の部屋を観察していた。声は圭のもので、体を起こそうとすると肩を押さえられた。

「まだ横になっていてください。熱も引いてませんか」

「ここ、は？」

「私の自宅で私の部屋です。手狭ですけど」

「そんなことないよ」

ベッドを置ける余裕もない。ベッドがあつたらきつとさらに狭く感じただろうが、一人での生活が可能な大きさがある。光上は今布団に横になっていて、その額には冷えピタが貼られていた。これももう効力がなくなってきたようで、貼られているそれを圭が丁寧に剥がす。

「汗と一緒に拭きますので、ジツとしててください」

丁寧な口調ではあるものの、その声は有無を言わせない力強さがあった。普段の彼女からは考えられない様子。しかし、それは光上が見ている普段の彼女ということ。当然と言えば当然のことだが、圭は

好きな人という間のほとんどが緊張状態。自然に話せていると思えていたのは、彼女がそこを意識していたからだ。

中等部での彼女とは違う一面。光上からすれば、それが当たり前だった。それが今は一切出ていない。中等部での生活の様子と遜色がない。それでいて素の面倒見の良さが出ているだけだ。

「連続で貼っても嫌でしょうし、濡れタオルにしますね。氷枕があればよかったですけど、以前に破裂してしまっただけ」

「けほっ。破裂って」

「お恥ずかしい話です」

本当に恥ずかしい話なのだ。その内容は語りたくない。だから恥ずかしい話だと言って予防線を張っておく。こうすれば光上は踏み込むことがない。

ちなみに内容というのは、兄妹喧嘩の際に氷枕が犠牲になったという話である。

桶に張った氷水にタオルを沈め、しっかりと冷やしてから取り出して絞る。冷たさに眉を顰めたものの、これぐらいどうというわけでもない。

絞り終えたら光上の前髪をあげ、先程まで冷えピタが貼られていた場所へとタオルを置く。

「どうですか？」

「ひんやりしてて気持ちいいよ。ありがとう」

「よかったです。光上さんランニングの後倒れてしまって。私本当に焦ったんですよ」

「迷惑かけてるよね。ごめんね。風邪も感染すかもしれないから、申し訳ないけど白銀さんは部屋の外に」

「光上さんが寝付けたらそうします。ほら、マスクもしてあるので」

「……今日の白銀さんは、いつもとひと味違うね」

そう言われて、細く、息を呑んだ。

人の印象というものは大事だ。その人を表すものだ。第一印象はやはり外見だろう。服装や容姿。それで60%ほどが決まってしまうと言われている。残りが第二印象以降。これは性格面の話。話し

方や行動で決まり、それが相手の中で固定化されていく。

ここから離れた行為をしたときに「思ってたのと違う」「イメージが崩れた」となるのだ。それが良い方向か悪い方向かはそれぞれだが。

さて、光上が言ったのは果たしてどちらか。良い意味なのか、悪い意味なのか。日本人の多くは消極的だ。それは迷った時にマイナス面を先に思い浮かべてしまう。

圭は悩んだ。光上のことが心配で、できうる限りのことがしたい。そう思い、緊張を抑え込んで行動している。それが裏目に出てしまったのだろうか。

「うまく言えないけど、けほっ。なんか、魅力的だよ」  
「あ、ありがとうございます」

良い方向に転んだ。熱くなる顔を見られたくなくて、圭は光上に乗せているタオルを少し広げた。視界を覆う程度に。

「白銀さん？」  
「風邪の時は目の疲れも著しいですから」  
「なるほど」

うまく誤魔化した。これで熱くなってる今の顔を見られずに済む。思わずにやけてしまうのも隠さないでいい。圭は小さくガツツポーズをした。

彼女が言ったとおり、光上は目の疲れも感じていた。タオルで覆われる際に瞼を閉じ。ひんやりとした冷たさが、目の疲れを実感させてくれた。ひとつ引つかかったこともある。目が疲れてる時って冷やするのが正解だっただろうか。未だ思考は大して働かない。集中力が欠けている今ではそれを思い出せず、圭の気遣いを受け取ることにしたのだ。

「光上さん。今後はこういうのやめてください。体調が優れない時は、休んでほしいです」

「うん。……言い訳になるけど、今日は気づけなかったんだ。起きた時は大丈夫だと思ってたんだよ」

「……そうですか。では、お約束だけしましょう。今後はやらないって」

「そうだね」

光上の手を取り、その小指に自分の小指を絡める。光上の方からも、弱々しくだが絡められ、圭は思わず胸がドキッと高まった。ドクドクと強く脈を打つ鼓動。不思議とそれは苦しくなく、むしろ愛おしい。

「えっと、白銀さん？」

「っー」

名前を呼ばれてビクツと反応する。気づかぬうちに目を閉じていたようだ。視線を手元に移すと、小指同士を絡めてる手を。光上の手ごとそのまま胸に抱え込むように引き寄せていた。

「す、すみませんー」

「いや、俺の方こそごめん」

彼は今そこまで体に力が入らない状態だ。早く治すことを念頭に置いていて、圭と話してはいるもののタオルの下で目を瞑っている。そうして受け身の姿勢を取っていたわけだが、それが原因で彼女の成長途中の胸に手が当たってしまった。不可抗力だとしても、紳士として謝らないといけない。

しばらく無言の状態が続いたが、それを破ったのは彼女だった。今の沈黙が耐えられなかったらしい。音痴の兄とは違い、美しい音色で紡いでいく。

「ゆーびきーりげんまん。嘘ついたら針千本のーます。指きった」

「針千本は嫌だな」

「ふふっ、約束を破らなかつたらいいんですよ」

「それはたしかに。ところで白銀さん歌上手いんだね」

「そ、そうですね？ 自分ではよくわからないんですけど」

そんな事はなかった。圭は自分の歌の技能を自覚している。学校の授業科目にあること、音楽の成績が優秀であること、カラオケで高得点を出せるなど、いくつかの要因で客観的に認識できているのだ。友人からも歌う度に称賛されている。

「上手いよ。白銀さんの歌声は透きとおってるし、聴き入っちゃうほどに優しい。結構好きだなー」



(結婚したい!? 光上さんってば……。私まだ16歳にもなってないのに……!)

酷い聞き間違えだった。このポンコツ具合は兄である御行でも驚く。

早坂が見たら「かぐや様レベルの酷さ」と言いかねない程の妄想を圭は膨らませており、桃色の世界を作り出してしまっている。どういう家庭にしたいか、子どもは何人がいいかと、中学生の段階でやたらとリアルな将来設計が組み上げられていた。

そんなことがすぐ隣で起きているとは光上も想像だにしないだろう。勘違いも積み重なれば悲惨な展開になりかねないと言うのに。

「白銀さんの歌、何か聴かせてもらってもいいかな?」

「いいですよ。子守唄でいいですか?」

「この歳でそれはちよつと……」

「ではバラードにしますね」

「我儘を聞いてくれてありがとう」

「これくらい我儘に入りませんよ」

圭はおかしそうにくすりと笑う。彼女は光上の学校生活のことをほとんど知らない。漠然としか知らないし、家庭のことなんてもつとわからない。理事長の息子であるということ。家が走って10分ほどの場所にあるということ。それぐらいのことしか知らないのだ。

だから、光上晶という人間が、他の人よりも圧倒的に甘え下手であるなんて圭は知らない。光上も彼女のように、付きつきりでいてくれる人なんて知らない。無償の優しさというものに全く触れてこなかったのだから。

ただ、彼は親の愛を知らないわけでもない。

「おやすみさい。光上さん」

1曲歌い終える前に彼は寢息を立て始めた。重度の風邪はそれだけで体力を奪う。彼好みである彼女の音色は、それだけで睡眠導入剤となっていた。

タオルに手を置く。まだ冷えてはいる。寝始めたばかりだし、冷やし直して起こしても本末転倒だ。彼の目を隠してる部分を戻すだけ

に留めておいた。そうして頭になる彼の寝顔を、圭は慈しむように見つめる。

いつも世話になっている。兄の御行もそうかもしれない。努力家であることは普段の様子からよくわかっていた。こう言っては悪いが、せつかくの機会なのだから、今日はしつかりと休んでほしい。

(……はああああ。緊張したああ。私、変じゃなかったよね？ 看病できてたよね?)

光上が寝たことで、彼女もすっかり気が抜けた。好きな人の看病だ。緊張しないわけがない。それでも、彼は病人なのだ。余計な気を使わせてしまったては、無駄に体力が削られてしまう。それだけは何としても避けたかった。

そうして作り出された鋼の精神。なんとかボロを出さずにやり切ることができた。酷い聞き間違いはあったが。

光上の症状はまだ回復しきっていない。彼が次起きた時に、もう一度取り繕う必要がある。ただし、一度目のそれは不安があった。二度目は確信に変わる。彼女は無事にやり遂げるだろう。

(光上さんが私の部屋にいる。私、さつき髪触っちゃったし、手も触れちゃった！ しかも指絡めた！)

抑えていた感情が込み上げて来る。羞恥と喜び。二つの感情が一気に膨らんで悶える。部屋にあるクッションをこれでもかと抱き締めた。

なお、早朝に光上が倒れた際に、彼を抱きとめたことは完全に抜け落ちていく。

彼が起きないように気をつけながら、クッションを抱きかかえて部屋の空いてるスペースで右へ左へと転がる。それが少しばかり落ちて着いたところで、彼の隣へと座り直して深呼吸。首にそつと手を当てて熱を確認。まだ熱はありそうだ。

今日は一日彼の看病をできる。喜んでしまっそうで複雑な気分。そんな気持ちも、彼を見ていたら吹き飛ばわけだが。

ここでふと視線に気づいた。  
そつちを見ると

僅かな隙間から覗き込む父がいた。

「そんなに好きなのか」

「~~~~っ!!!」

すべての感情が羞恥に染まった。

叫びそうになつたのを何とか我慢し、クッションを全力で投げつける。僅かな隙間をクッションが通れるわけもなく、ブラインドカーテンに阻まれて床へと落ちていく。白銀兄妹の部屋は一つの洋室をブラインドカーテンで仕切ること二人分の部屋を確保しているのだ。扉側が御行で、窓側が圭である。

さて、投げたクッションはカーテンによって阻まれ、父に当たらなかつた。だが、ここで終わる圭じゃない。

クッションは父親の視界を遮るため。父の視界からクッションが視界から消えた代わりに、目の前には圭の姿が。感情は羞恥から怒りへ。その顔は無表情。その目だけがギラつき。ヤクザすら震え上がる庄を出す。

「パパでも許せないことってあるんだよ」

「ははは。怒ってる姿が妻に似てきたな」

カーテンを閉じようとする父を阻む。成人男性の力を上回るパワーを發揮し、父親がいる方へと体を乗り出す。光上への気遣いは忘れず、父親側に出たらリビングまで連れ出して洋室のドアを閉める。

「いつから見てたの?」

「タオル変えてるところ」

「それは最初から言うの。知らないの?」

「淡々と話すの怖いよ」

「知ったことじゃない」

父親を正座させ、その正面で腕を組んで見下ろす。こんな状況でも父親にはまだ余裕が感じられた。怖いと言いながらその目は真っ直ぐと彼女を見据えている。その姿は怖いと言いながらもホラーゲームを楽しんでる人と同じ。

「圭は歌上手いな。俺に似なくてよかった」

「お兄いは壊滅的だけどね。話逸らそうとしてない？」  
「してる」

「認めるんだ。ふーん？」

「説教って好きじゃない」

「好きな人なんていないでしょ」

事あるごとに話を逸らそうとする父。

それを一切許さない娘。

二人の攻防は、昼食を取るまでの間続いた。

## 第8話

本日3度目の起床。この部屋では2度目の起床。2度目ともなれば、「どこだここは」なんて戸惑うわけもなく、幾分かましになった自分の体調を確かめる。氷水が張ってある桶のすぐ側に体温計が置かれており、タオルを桶の中に入れたら体温計を取る。寝転んだ状態で体温計のスイッチを入れて計る。

体温計が鳴るまでの間は、今日の学校のことについて考えていた。予習はしてるものの、休んだ分の遅れは変わらない。誰かにノートを見せてもらいたいのだが、すぐに思い浮かぶ御行はクラスが違う。

(早坂に頼めば見せてくれるだろうけど)

頼んでもいいものかと頭を悩ませた。最近不定期で早坂と一緒に放課後を過ごしているが、それはあくまで早坂の仕事の関係だ。監視しないといけない彼女の立場を考慮し、大人しくそれに協力している。下手に自分から動いてしまうと、面倒な方向へと自体が進んでしまいかねない。主に親のせいだ。

さて困った。ノートを借りるという行為は、主に友人間で行われる行為だ。唯一の友人が他クラス。次点で協力を仰げそうな人物への接触は控えないといけない。

その次の候補がない。

(あれか？ 早坂にノートの写メ送ってもらえばいいのか?)

最も現実的な作戦だった。

だがしかし、彼は気づいていないことがある。彼は例外を除けば、誰が相手でも同じ距離感を保つ人間なのだが、これはあくまでも彼の主観であるということ。相手側がどう思っているかは話が別なのだ。

実際に、光上品という人間は、大半の人間から一定以上の好評を得ている。秀知院学園という箱庭で育った仲。体が弱い彼のことは周知の事実。協力を惜しまない人もクラスに多い。

「古典だとお前の方がノート取るの上手いよな」

「数Ⅲはあたしが担当するね」

「英語は僕が受け持つよ」

朝のSHRではこんな会話が繰り広げられ、放課後に纏めて光上にノートの写真を送ることが決められている。光上は白銀家にいるのだから、そんな事が起きているとは知る由もない。

『ピピピッ！ピピピッ！』

体温計が鳴った。何度まで熱が引いたか確認し、微妙な顔をする。

「37.8℃。まだ熱あるな」

彼の平熱は36.3℃。微妙に低い平熱と言える。その状態からプラス1.5℃。最初に比べれば良いペースで下がっているものの、まだまだ熱がある状態。

極力白銀家には迷惑をかけたくない。動けるようになったら自宅へと戻りたいものの、それはまだ叶いそうにない。

「今何時だろ」

寝転んだまま首を動かし、時計がどこにあるか探してみる。今の視点からでは見つかる場所に時計が無く、体を起こそうとしたところでタイミングよくブラインドカーテンが開いた。様子を見るようにそつと覗き込んできたのは、この部屋の主たる圭だった。彼女は光上が起きてることに気づくと、僅かに目を見開いた。

「起きてたんですね」

「ついさつき起きたところだけどね」

「熱は計りました？ 体温計が近くにあったと思うんですけど」

「うん計ったよ。37.8℃。まだ少し休む必要があるかな」

「ひとまずは、熱が少し下がったことと、ここで帰ると言われなかったことに一安心です」

「あはは……、無理はしないって約束したからね」

ほつと胸を撫で下ろす圭に、光上も苦笑いを浮かべた。約束がなければ自宅に帰ると言っていただろうと、自分でも思っているからだ。光上の行動に対しての圭の予測が、油断ならないほどに精度を増してきている。未だに勘違いしたままなのに。

「あ、飲み物お渡ししますね。それとお昼ご飯も持ってきます」

「やっぱりお昼の時間？」

「今は2時前ですけどね」

思いの外寝ていたようで、綺麗な笑顔とともに告げられた時間に言葉詰まらせる。いくら体が弱っているからと言って、他人の家でこれだけ寝られていることに驚いた。頭が回っておらず、緊張を感じて余裕もなかったからなのだが。

部屋を出た圭が、スポーツドリンクを片手に戻ってきた。先に水分を摂取してほしいのだ。未開封の新品なわけだが、これは家にあったのだろうか。もし買いに行っていたのだとしたら、申し訳ないと思う気持ちが強くなる。

「しっかり水分を取ってくださいね。お昼ご飯はお粥にします。しばらくお待ちください」

「何から何までごめんね」

「いいですよ。こういう時はお互い様ですから」

「……ありがとうございます」

「どういたしまして」

部屋と台所を行ったり来たりしている圭だったが、これはこれで彼女にとって都合のいい移動だった。

(光上さんが私の部屋にいるのが、自分の部屋なのにドキドキする……！)

部屋を使わせてもらっている光上<sup>病人</sup>。

様子を見るために部屋を訪れる圭<sup>主</sup>。

なぜか彼女の中では、光上の部屋を訪れている気分になっていたのだ。

中等部で過ごす自分とほぼ同じ状態を演じていて、2度目に抜かりはないと思っていた。しかし、その余裕が生まれたことによって、余計な妄想が彼女の演技を籠絡<sup>精神</sup>させようとしているわけだ。

「彼起きたのか」

「パパいたの？ 仕事は？」

最新<sup>Style</sup>「在宅勤務」というかお昼一緒に食べたじゃん」

「……ほんとだ」

「眼中にないパパ。これがパイヤ」

「しんで」

あまりにも寒いことを言われ、刺々しい言葉が飛び出す。兄に対しては何度か言っていることだが、この日とうとう父親にまで言ってしまった。その事に罪悪感を抱くも、ここでプライドが壁となって素直に謝れない。無言で光上のためのお粥を作る。

娘が反抗期に入ったことなど父も把握している。とうとう言われちゃったなぐらいの気持ちで、そこまでのダメージはない。じーつと横顔を覗き込み、娘の気持ちをある程度汲み取れているのも大きい。洗濯物も一緒には洗いたくないというお決まり通過儀礼だつて経験している。

「なにしてんのパパ」

「娘の恋路について少々」

「なっ！ こ、こいじつて！」

「彼が好きなのは見れば丸わかりだ」

「ーっ、パパが反対しても関係ないから」

「いやむしろ俺は全力で応援するけど」

その言葉にハッと驚き、父の方へと振り向く。相変わらず何を考えてるのか分からない顔だ。

圭は反対されることを警戒していた。身の丈に合わない恋だと自覚している。彼は秀知院学園の理事長の息子。将来その座に就くことが決まっている。それに対して彼女は一般人。一般人の中でも、父親の職業が不定の父子家庭。少しでも家庭を支えようと新聞配達のバイトを中学生ながらに行っている。

家の格式で言えば何一つ釣り合わない。身を滅ぼす恋だと言われて止められると思つてた。

「玉の輿じゃん」

絶句した。

たしかにそうではあるのだけど。客観的に見れば玉の輿を狙っている女ではあるけども。

父親がそこを理由に全力応援を宣言するのはどうなのだろうか。

感謝しかけた気持ちが消え失せる。今朝の兄と似たパターン。

「圭が本気で好きなのは伝わってる。娘の本気の恋を邪魔する理由な



んて親が持ち合わせるわけないだろ。諦めずに掴み取ればいい」  
「パパ……」

尊敬できるところが全然ない父親だけど、この時ばかりは父親の姿がカッコイイと思った。こういうところを母親は好きになったのかなど頭に過ぎる。

思わぬ後押しだった。そして、身内からの、家族からの後押しであるからこそとても心強い。すっと体の内側に一本の柱が現れた。心を支えてくれる柱。とても太く、しっかりと立っている。

「孫を見られるのが楽しみだな」

「どんだけ先の話?!」

やはり父は父だった。

出来上がったお粥を持って部屋へと入る。彼に渡していたスポーツドリンクは半分ほど減っており、ちゃんと水分を取っていることがよくわかった。

お盆に乗せたお粥を零さないように気をつけながら、彼の側で腰を下ろす。小さなテーブルでもあればよかったのだが、生憎とそれは部屋にない。圭は左腕の肘から先でお盆を支え、右手でスプーンを持つ。体を起こした光上は、彼女のその行動に疑問を浮かべた。

「白銀さん?」

「光上さんの熱はまだ高いですから。私が補助します」

「これはさすがに恥ずかしいというか、食べるくらいならできるとい  
うか」

「ご迷惑でしたか?」

シユンと眉を下げられる。その落ち込んだ様子を見せられると折れるしかなく、光上は圭にお願いする形となった。

(計画通り)

あざときを身に着けた圭だった。

彼からの許可を貰い、これで合法的に食べさせることができる。機嫌をよくした彼女はスプーンでお粥を掬い、彼の口へと運んでいく。

この時になって彼女は、これが仕掛ける側も恥ずかしい行為である

ことを認識した。

スプーンを持つ手が小さく震え、彼の口へと無事に運べた瞬間に思わず目を強く瞑る。スプーンを彼の口から退かさなければ彼も咀嚼できないというのに、彼女は羞恥に堪えていてそれどころじゃない。手で知らせてもいいのだろうか、彼女の片手はお盆を支えている。下手に刺激を与えるとたちまちお粥を溢してしまうだろう。そうして待つこと数十秒。ようやく圭はスプーンを退けてなかったことに気づき、謝りながら慌てて引っこ抜いた。その際にスプーンが歯を襲撃。痛みこそなかったものの、味どころの話でもなかった。

「すみません……。つ、次いきますね！」

「白銀さんこれそんな気合を入れることじゃないと思うな！」

やらかしはしたものの、これでも秀知院学園に通う才女。2度目からはスムーズに食べさせることができた。

「お味はどうですか？」

「んっ。正直言うと、緊張してて味がそこまで分からない」

「そ、そうですね」

「だから、もう少し食べたら慣れてわかると思う」

そう言われてまた圭に緊張が走る。お粥は彼女の手作りだ。簡単なもののだとしても、光上を想って作ったことに変わりない。その味の評価が気にならないわけがない。

光上は生活レベルが格段に違う。富裕層の人間だ。その舌が肥えてるのも当たり前。果たしてそんな人間に、ザ庶民である圭の手料理は響くのだろうか。

緊張を抑え、静かにお粥を差し出す。それを彼が食べ、軽く咀嚼してから嚙下する。光上はしっかりと味わおうと目を閉じて集中した。

「美味しい」

「ほんとう、ですか？」

「うん。これ白銀さんが作ったの？」

「はい。と言ってもお粥は簡単なものですし、料理と言うには少し……」

「ううん。そんなの関係ないよ。作ってくれてありがとう。本当に美

味しいよ」

「ありがとうございますー！」

我慢などできず。彼女は満開の花を咲かせた。

それは見る者も笑顔にさせるほど無邪気で。

見た者が視線を逸らせぬほど美しい花だった。

本日4度目の起床。白銀家では3度目の起床。

もう夕方になっていて、日もだいぶ傾いている。

まだだるさを感じるものの、体の調子も大分良くなった。これなら自力での帰宅もできる。そう思い、体を起こそうとしたところで、胸の上に何やら重さを感じる。頭を上げてそこを見ると、圭が凭れかかるように寝息を立てていた。

「もう少し寝させてやってくれ。朝から気苦労が続いてたんだ」

「もちろんそうします。……何かお礼を考えないといけませんね」

「何にするかは君のセンス次第だ」

「ハードル上げてきますね」

「そうとも言えるし、そうでもないとも言える」

いきなりのはぐらかし。御行から父親がどういう人かはある程度聞いていたし、その言葉の出处にも心当たりがあった。

「週刊誌読んでます?」

「あれわりと好きでね。仕事の時でも使える」

「相手がストレスでやられるのでやめてあげてください」

白銀父との話もそこそこに、可愛い寝顔を見せる圭に視線を移す。そして静かに寝息を立てている圭に、心から感謝した。今日は世話になりっぱなしだ。この華奢な少女に報いらねば。

部屋の壁にもたれかかり、腕を組んで話しかけてくる白銀父。そんな格好の理由はただ一つ。

——こんな感じの大人ってカッコよさげに見えるから

これだけである。

光上の反応も大したものではなかったために、早々にそれをやめるわけだが。彼が起きる30分ほど前からスタンバイしてたのは大人の秘密である。

「圭と仲良くしてくれてありがとう」

「いえ、感謝するのはこちらですよ。彼女と出会った時も助けられましたから」

「いや本当にな」

悪意があつて相手を翻弄するような言動を取っているわけじゃない。この父親は単純に楽しんでるだけだ。人付き合いの経験からそれが素なのだと理解し、今頃生徒会の仕事に追われているであろう御行の苦勞も察する。

そう考えていると、白銀父はおもむろにスマホを取り出して操作。それを終えた画面を光上に見えるように近寄った。

「よく撮れてると思わないか？ この写真」

「……………撮つてたんですか？」

「無音カメラは便利だよ」

「娘さんに怒られても知りませんよ！」

見せられた画面には、光上が圭に食べさせてもらつてる写真が映っていた。それも1枚ではない。パターンの違う写真がこれでもかとフォルダの中に保存されていた。

「つて、ここ白銀さんの部屋!？」

「すつごい今更だな。なんだ思春期か」

「この年の人はみんな思春期ですよ！ ……もしかして布団も？」

もしそうだったら圭になんて言おう。ぐるぐると悩みが渦巻き、いい答えが出てこない。彼女が普段使ってる布団を使つてしまっている。しかも高熱だったんだ。寝汗も相当かいている。そう思うと、間に布団があるとはいえ、彼女が上に凭れて寝ているのも申し訳ない。割合的には恥ずかしさと半々だ。

「安心しろ。その布団は圭のじゃない」

「あ、そうですか。安心しました」

「妻のだ」

「安心を返してもらっていいですかね!!」

「圭が起きるだろ。静かに」

妻が帰ってくる可能性は限りなく0に近い。それでも一応残せるものは残している。こんな感じで、来客者用に使えるくもないのだから。

そんな事よりも、と白銀父は話を区切る。光上に聞かないといけないことがあったのだ。圭が眠っているこの間に。

愛娘である圭のことをどう思っているか、ではない。

「君、何か病気抱えてるね?」

「……」

触診した時に気づいたこと。

それを問うておきたかった。

## 第9話

週が明けて月曜日。藤原千花はいつもと違う登校時間で学校に来ていた。ただの気まぐれでなければ、生徒会の仕事でもない。彼女はこの日、一日の始まりを良いものにするために登校している。学園の門の近くで立ち止まり、登校してくる他の生徒たちを眺める。いつもの緩い彼女はそこにはおらず、その目は目的の人物を見落とさないようにと鋭いものになっている。

そんな彼女とは門を挟んで反対側。こちらでも1人の少女がイヤホンを付けながら立っていた。早坂愛。四宮家に仕える侍従の1人であり、四宮かぐやを最も近くでサポートする少女だ。学園内ではその関係を隠しており、毎日主人の出発を見送ってから登校している。今日はその例外の日だ。いつもなら主人より遅く来るのを、今日は主人より早い時間に変更。一般人としての姿であるギャルモードでここに立っている。

この2人がここで待っている相手は共通の人物。示し合わせていないことは、2人が個々にその人物が登校してくるのを待っている姿を見れば分かる。見逃さないように門の左右で待ち構えているのではない。全くの偶然である。

2人の目的の人物は、先週末に高熱で倒れて白銀家で静養していた光上晶だ。生徒会メンバーとの会話で「これ私のせいだ」と2人共が思い、直接彼に謝ろうとしているのである。

SNSで先に謝罪はしている。彼が倒れた金曜日にメッセージを送った。しかし、それはそれとして直接謝りたいのだ。

金曜日の放課後は駄目だったのか。これは2人とも都合が悪かった。藤原は生徒会がある上に、家が離れている。遅い時間の訪問となってしまう、溺愛してくれる父が許さない。早坂の場合は四宮家の仕事優先される。そんな時間など取れない。何より、四宮家の人間だから彼の家にも行けない。

そもそも彼の体調が優れない時は家に行っても会えないのだが。

そんなわけで、週明けの月曜日から登校できると言った彼の言葉を信じ、こうして朝から待ち伏せしているのである。

「つて来ないし!!」

「来ないじゃないですか!!」

「あれ?」

門を挟んで反対側。自分と同じことを叫んでいる同志を発見。彼女たちはどちらからともなく歩み寄り、愚痴と心配を漏らしながら学園内へと入っていく。これ以上待つては遅刻になるのだ。

ここでの2人の失敗は、彼が何時に登校するのかを聞かなかったことである。

彼女たちは「早めに行つて待てば会えるだろう」と踏んでいた。実際、彼女たちが待ち始めた時間も決して遅くはなかった。早めに来る生徒たちを確認できるくらいには早い方だ。

しかし時期が悪い。

今週からテスト<sup>追い込みシーズン</sup>一週間前である。この時期は中等部と共通しており、圭のアルバイトもお休み。従つて彼のランニングコースと時間も変更され、空いた時間の分だけ早く学校に来て勉強するのである。自習室も兼ねている図書室は、この時期になると開く時間が早くなるのだ。利用する生徒は光上を含め少数派ではあるが。

それを早坂と藤原が知っているわけでもなく、教室の前で藤原と別れて教室内へ。時間もギリギリ。彼女が一番最後に教室に入った生徒だ。クラスメイトに挨拶をしつつ、自然さを振る舞いながら視線は彼の席へ。そこには男子と談笑している光上の姿が。

「いるし!!」

「うわっ! ど、どうしたの愛」

友人への返事も適当にして誤魔化す。チャイムを聞きながら自分の席に座り、教科書類を引き出しに入れていく。

毎週の週明けは体育館での朝礼。SHRもさらに短くなり、流れるように1限目の授業が始まる。彼の学校での一日は、出会ってからずっと同じクラスである早坂がよく知っている。朝の時間を逃せば、まともに会話ができるのも放課後まで待たないといけない。

それまでの間にある唯一の時間は、食事を取る昼休みだけ。

しかしこれにはリスクが伴う。それは、早坂と光上が一緒にいることが、周囲にとっては珍しいということ。奇天烈な藤原ならともかく、早坂が接触するとあらぬ誤解が生まれかねない。

(それくらい回避してみせますが)

あくまでそれは常人ならの話。四宮家の英才教育を受け、数々のミッションをこなせる早坂にとって、これくらいなら障害にもならない。

(書記ちゃんには抜け駆けみたいになっちゃうけど、いつも苦労させられてるし)

早坂の中では、藤原相手に貸しが大量にあるようなものなのだ。

昼休みになると彼は必ず購買に行く。彼が弁当を食べているところなど誰も見たことがない。そう、誰も一度も見えていない。

——たとえそれが学校行事の日であろうとも

体育祭であったとしても、彼は弁当を親からもらったことなどない。

なにせ彼の親はフランスにいるから。物理的に無理なのだ。どこでもドアかタイムマシンでもない無理なのだ。

「はい今日の晶の分」

「ありがとうおばちゃん。お金ここに置いとくね」

「はいよ〜」

(めっちゃ仲いいし!!)

こっそりと後を追ってみて思わぬ収穫があった。購買のおばちゃんは光上のことを下の名前で呼び、光上もおばちゃんとは呼ぶもののその声には柔らかさがある。その親しさは他の常連の生徒とは一線を画していた。

(しかも今日の分って。個別で用意されてるってこと?)

理事長の息子という立場を利用すればそれくらい容易いこと。しかしそんな事をするような人間じゃない。思わぬ収穫は、妙な疑問を増やしていく。

昼食を手に入れ、教室へ戻ろうとする彼を追う。このまま逃しては



次のチャンスは放課後だ。

教室から購買までの道程の中でも、生徒が少なくなる箇所がある。早坂はそこで光上に声をかけた。彼は驚いた様子もなく足を止めて振り返る。てつきり監視を強めたのかと思っていたぐらいだ。

「どうした？」

「先週のことを謝りたくて」

「それならもう謝られたし、俺の自己責任だって言ったじゃない」

「でも、ウチがやってたら光上くんは風邪なんて引かなかったし。あの後だって酷いこと言っちゃったし」

「たしかにあれは傷ついたけども」

早坂の中で罪悪感が膨らむ。ちよつとした悪ノリだった。それが高熱に繋がるなんて予想外で、「軽い気持ちで他者を傷つける浅慮の馬鹿」になってしまったことをとても悔いている。

「傷ついたとはいえ、それを引きずる気もない。俺としてはそこに固執せずに普段の調子に戻ってもらえた方がありがたい」

「それは……」

理解できない話じゃない。忘れられない傷があるのなら、それを感じないようにするのも手だ。彼は傷つきはしたものの、今では笑い話にしてもいいぐらいに赦している。

しかしそれは早坂にとってそう簡単に終わらせられることじゃない。早坂にとって罪悪感とは、そう簡単に拭える存在ではないのだから。

別口の罪悪感が連鎖的に早坂を蝕む。俯いて表情を隠しつつ、せめて比較的対処できそうな光上への罪悪感をどうかしようと思いを働かせる。

「……せめて、お詫びを受け取ってくれませんか？」

「お詫び？」

「はい。放課後に——」

「あ、それはもう無理だ。早坂に合わせて時間を取ることはできない」「え……」

明らかな拒絶。

彼からそんな言葉を向けられるだなんて思わなかった。中立を気にする彼は、その関係上誰かを拒むこともしない。それは敵対してる相手と認識した場合のみ。

つまり、この瞬間に判明したのは。

——早坂愛という人間を敵として認識しているということだ。

それに至り、胸の奥が刻まれる。心にグサリと棘が刺さったことを認知する。

(なんで……ウチは……)

光上晶という人間に好意を寄せたわけじゃない。彼はあくまで要警戒の観察対象。

それなのに、その拒絶で苦しくなる。

頭の中で難解パズルタイムアタックが始まる。光上が昼休みの間にまともな思考ができる時間だって限られている。昼食を取る時間を考慮すると残り2、3分ほど。

早坂愛から見た光上晶はどういう存在か。

要警戒対象。基本的には無害。仕掛けられなければ敵対しないほどに甘い人間。

早坂愛が四宮かぐやの侍従であることを知る数少ない人間。同世代でかぐやを除けば……いや、かぐやを含めても仕事の苦勞に一番理解のある人。

(あー、そういうこと……)

恋愛感情はそこに入っていない。早坂からはもちろん。光上からもない。

ただそこにあるのは『理解』で。事情を知ってなお早坂に合わせて接している。ここ最近で「放課後の暇な時間が減ったな」なんて思っていたが、あの時間は、あれはあれで心地良い時間だった。

それを今さら脳で理解して。

先に気づいていた心が痛くなったわけで。

あの時間はもう来ないということが、思いの外寂しいのだと思ってしまう。

それでも、自分の仕事に変更なんてない。方法が変わるだけで、彼

を監視する仕事は継続される。

胸に手を当て、鍵をかける。

「分かりました。それでは今後は一方的に監視する方向に変えますので」

「……………なんで？」

「あなたがそう選んだんでしょうが」

イラつきを我慢しない。周囲には他の生徒もおらず、仕事モードで会話を続ける。

絶妙に神経を逆撫でしてくる男だ。すでに手のひらの上というところか。

（そんな思い通りになんてさせて——）

「テスト期間だから無理だつて話だぞ」

「…………」

早坂はその場に固まった。敵を見るように睨んでいた目は丸くなくなった。

「意味不 説明 言葉足らず」

「この前倒れたろ？ それで会長の妹に看病してもらったりいろいろお世話になってな。何かお礼をしようと思ったら、放課後に勉強を見てほしいって頼まれたんだよ。それくらいでいいのならつて思つて、テスト終わるまで勉強見るわけ。だから放課後は予定埋まつてるんだ」

「…………ハ…………ハハ…………」

「ええつと、早坂？」

壊れた人形のように無表情で無規則に笑いを溢していく。そんな早坂に恐怖を感じるものの、直感的に自分がなんかやらかしたと理解。

「ごめん早坂」

「は？ いったい何に対しての謝罪ですか？ 形だけ謝つとけばいいとか思ってます？ そんなDV男がやりそんなことするんですか？」

形勢逆転！

これはいったいどちらがDVやりそんな人間かさっぱりわからない

い構図ではあるものの。いやむしろ相手の弱みを見つけた瞬間強気になつてる早坂がDVやりそうではあるものの。それを早坂は押し通すことにした。

四宮家の家庭環境に「クソ食らえ」と思つてる彼女がそんな事をしたいだなんて思うわけないのだが。それはそれとして、自分がとんだ勘違いをしてもものすつごい恥ずかしいから、それを悟らせないために強気に出てるのである。言わば虚勢を張つてるだけだった。彼女はDVなんて消えたらいいと思つてる。

だが残念なことに相手が悪い。

恋愛を除いた対人関係でのやり取りで、相手の内情を察する能力はこの学園でトップである。しかも今は意識がはっきりしてる状態。

「早坂が何か勘違いしたのを誤魔化そうとしている」ということは察してしまふのだ。さらにその細かなことは現状ではわかつていない。ある程度の見当ついているが。

「早坂を勘違いさせて傷つけたことに対して謝つてる」

「あつ……！」

早坂盛大なやらかし！

光上がどういふ人間か知つているのにそれが抜け落ちていた。「わからないんだ？」からの「じゃあ○○を」という流れにしたかったのに、見破られたことで即座に立てた計画がペアである。

見破られたことで早坂を羞恥心が襲い。見る方も恥ずかしくなる程に赤らんだ顔で光上を睨む。

勘違いしたことを見破られ。虚勢を張つたことも見破られた。

もう後がない早坂が取つた行動とは――

「光上くんにウチの心弄ばれたあああ!!」

「なんてこと言うんだ早坂お前!!」

社会的殺人  
最終手段だった。

この日、お昼を食べる時間が足りなくなつた光上は、寝ながら食べるという特技を獲得した。

## 第10話

秀知院学園中等部と高等部は歩いて5分程度の距離に位置する。放課後にOB訪問する生徒も珍しくなく、違う敷地にある中高の中では交流が多い部類に入るだろう。その多くは部活動などの課外活動での交流が多く、このテスト1週間前という時期での訪問は珍しい。

その珍しい行動を取っている中等部の生徒は、生徒会長の白銀御行の妹である白銀圭である。彼女がここに訪れる目的はただ一つ。光上に勉強を見てもらうためだ。

勉強を見てもらうという話になった際に、ではそれをどこで行うかという話にもなった。集中して勉強を行える環境が必要だ。そしてこれは人によつて条件が異なる。

例えば白銀御行。学年一位を取ってからその座に居続ける彼は、自室での勉強が基本だ。無音であるほどに集中力が増すタイプである。この点が圭にも見て取れるものだった。彼女もまた、静かである方が勉強に集中できる。全くの無音でなくても大丈夫なのだが、極力その状態に近づけたいのが本音。

その理想のポイントはどちらかの家だ。圭は普段の環境で勉強ができるし、光上はどこであれ勉強に支障が出ない。弱点としては乗り物での移動中には勉強ができないタイプというところだろうか。単純に乗り物酔いが酷いだけとも言える。

そんなわけで、理想論は白銀家。ただしこれには多大なリスクがある。

(パパがいつ帰ってくるか分からないのよね)

そう。父親の存在だ。白銀家で勉強するとすると、御行の部屋でも圭の部屋でも勉強できない。それぞれ一人分の机しかないのだから。そうなるとリビングしかないのだが、父親が帰ってきた瞬間その場を目撃される。邪魔はされないだろうが、何か愉しげに見てきそうだから嫌。

ならば光上家ならどうか。勉強する環境は簡単に用意できる。で

きるのだが、圭が緊張し過ぎて勉強にならない。そんな自分が想像できた彼女は、図書室での勉強を提案した。

秀知院学園に限らず、多くの学校は図書室が自習室としても併用される。しかしその利用率はまちまち。秀知院学園であれば、外部への受験を考えなければ普段のテストだけでいい。それなら自宅で勉強するという生徒が多く。図書室を利用する生徒は極端に少ない。集中できる環境が出来上がり、なおかつ相談もしやすい。

(それに、放課後に学校で光上さんと会える)

この点が彼女の中で大きな理由となっていたりする。ほぼ毎朝会うにしても、自転車での新聞配達をするために動きやすい格好をしている。ぶっちゃけたら圭の中であれば可愛くない姿なのだ。家計を考え、節制しているものの女の子。お洒落はしたい。だから新聞配達の時とは別に、外出用の服がある。本当ならそっちの姿を見てほしい。

しかしこれは中々叶わない。そこで、わりと気に入っている学園の制服だ。本当は無しなのだが、許容範囲でもある。学園内ならどちらも制服。おかしいことはない。

「光上さんの制服も見たいし」

思自分の欲求ったことをほつりと呟く。秀知院学園の制服なら見慣れた。中等部と高等部でデザインもそこまで変わらない。何より年中制服着てるような男が身近にいるのだ。

それでも、好きな人の制服姿は彼女の中で別の概念と化している。

「なに？ 光上探してんの？」

「えっ？」

「声に出てたけど」

「……………あああっ！」

顔を手で覆って悶える圭を見て、声をかけた高等部の女子生徒は申し訳無さに包まれる。意図せずして乙女の恋心を暴いてしまったのだ。彼女の好みと自分の好みが合わないからと言ってどうもこうも言わない。ただ同じ女子として同情はする。

「ごめん。お詫びと言っちゃあなんだが、光上を探すの手伝うよ」

「……いい、いえ。ここに迎えに来てくれるので大丈夫です。ありがとうございます」

「そうなのか。んー、君どっかで見たことあるような……」  
サバサバとしたその生徒は、チラッとだけ見えた圭の顔に引っかかりを感じた。過去のどこかで会ったのか。初めて見た感じがしないのだ。

腕を組んで彼女が考えている間に、圭もなんとか自分の気持ちを鎮めていく。こういう切り替えの早さは彼女の強みだった。何よりいつまでも醜態を晒すのはプライドが許さなかった。

圭が気持ちを落ち着かせたところで、顔を覆っていた手も離れる。それでもう一度女子生徒は圭の顔を見ることができ、記憶と照合していく。

「私たち初対面だと思っんですけど」

羞恥に悶ていても話はしつかり聞いていた。その言葉に女子生徒もコクリと頷く。記憶と照らし合わせた結果、彼女とは会っていない。

「白銀の妹さんかな？」

ただし、彼女とよく似た目をしている人物とはそこそこの付き合いがあった。圭の顔を見て引っかかったのもそのせいだ。

「兄をご存知なんですか？」

「ははは、ご存知も何も、生徒会長のあいつを知らない奴はこの高等部にはいないよ」

「あ、そうですよね」

「ちよつと嬉しそうだな」

「そんな事はありません」

（この子分かりやすい。そういやあいつも妹が反抗期とか言ってたっけ。可愛らしいもんじゃん）

もう少し探ってみたら面白い話も聞けるだろうか。そんなことを思ってみたものの、実際自分がそちら側だったらクソウザいなど思い直し、探りを入れることをやめる。それはそれとして、好感が持てる相手とはもう少し話してみたいものだ。

そう思っていると、驚くことに圭の方から話を切り出してきた。受け身だけじゃないことにも、その女子生徒は好感を抱く。

「私と兄って似てるんですか?」

「否定してほしそうな顔をしながらそれを聞くのか……」

どう答えるのが正解なのかと一瞬頭を悩ませる。しかし女子生徒を見る圭の目は真摯なもので、女子生徒はそれに応えることにした。お世辞なんて言わずにハッキリ言う。このやり方は彼女にとってとてもしつくりくるものだ。

「目元が似てる。目つき悪いとことか」

「……やっぱりそうなんですね」

「目つき悪いって言うておいてなんだが、それでどうこうってわけでもねえよ。それで判断する奴は外見しか見ない奴だからな。なあ光上?」

「いきなり話を振られてもな」

揶揄うように笑いながら彼女が振り返ると、そこには圭の待ち人がいた。兄と同じ制服。違いは光上が夏服を着ていること。普段見る兄の姿が見るだけで熱く感じてしまう分、夏服を着ている光上が爽やかに映る。御行の知らぬところでファインプレー。

「実際な話どう? 光上と会うためにわざわざ高等部まで来たこのかわいい後輩のこと」

「会うためって……。私は光上さんに勉強を見てもらっただけです」

「それが口実じゃなくて?」

「違います!」

「ま、いいけど」

「白銀さんはかわいい子だと思ってるよ」

「あっ!」

「あ、そいやこいつどストレートなんだった」

光上にかわいいと褒められ胸を抑える。その様子を見ながら、光上がストレートな物言いだったことを思い出した。時に残酷で、時に天国を見せる男。これまた面倒な男に惚れちゃったんだなと圭を若干心配した。



「ぎつきのつて目つきの話だっけ？ たしかに人によつてはそれで威圧されるかもしれないけど、この子の特徴ってだけでしょ。俺はそこをマイナスだとは思わないな」

「はあー。ま、そうだろうな。お前はそういう奴だよ」

「ところでなんでこんな話になつてるわけ？」

「ただの気まぐれだよ。んじや帰るから。その子の勉強ちゃんと見てやれよ」

「分かつてる。また明日」

ヒラヒラと手を振りながら帰つていく彼女を見送り、様子が元に戻つた圭と一緒に図書室へと向かう。自分の発言が原因だとは分かっているし、ストレート過ぎる物言いも考えものだなと反省。しかし癖となつて染み付いてしまつてる上に、嘘はつきたくない性分。解決策は今のところ思い浮かばない。

「あまり生徒さんも残つてませんね」

「自宅で勉強する生徒が多いからね。それを見越して図書室に来る人もいるけど、全体のごく僅かだよ」

「そこは中等部と似てますね」

「大半がこの学園でそのまま育つてるからね。こういう時の行動はあまり違いも出なくなるものだよ」

「そういうものですか」

外部の人間が学園内に入る場合は、事前のポイントメントも必要であり、警備員へ話を通し、校舎内に入る時に事務室の許可を取らないといけない。配達などの例外もあり、同じ秀知院学園の生徒もその例外となる。圭は来客者用の下駄箱に行き、光上は自分の下駄箱へ。靴を履き替えたら合流して移動を再開。

「先程の方とは仲がいいんですか？」

「仲がいいってほどじゃないな。腐れ縁つてやつ。あれくらいの感覚で接する人がほとんどだよ」

「そうですか」

少し素っ気ない気がしたが、彼女の様子を見る限り機嫌が悪いというわけでもない。むしろ何か隠したがって、そのために取り繕つ

ている様にも見える。それを暴くようなこともせず、圭を高等部の図書室に案内する。

図書室の中は上履きも脱がないといけな。これも他の学校と同じだろう。分かりやすくするためという理由で、圭は光上が置いた場所のすぐ隣に置いた。

「光上さんは成績が良いと聞いたんですけど、具体的にはどれくらいですか？」

「テストの成績は——」

「テストによつてバラバラだよ。光上くんは50位以内に入ることだけが目標だし」

「光上さん。こちらの方は？」

「早坂愛。同じクラスの子。なんで代わりに答えたのかは知らない」

「そうですか。初めまして早坂さん。中等部2年の白銀圭です」

「白銀……あ、会長の妹さんなんだ。よろしくね！」

早坂の乱入に戸惑ったものの、圭はすぐに挨拶を済ませた。早坂に差し出された手を握り、握手を交わす。

「私、光上さんにお勉強を見てもらうんですけど」

「奇遇だね。ウチもだし」

「え……？」

早く光上との勉強会を始めようとした圭だったものの、その目論見は早坂の言葉によつて壊される。二人での勉強のはずが、まさかの三人での勉強である。どういふことなのかと目で光上へと訴えかけた。

「これには理由がありました」

「ウチがお願いしたんだし。ちよつと前にいろいろあつてね」

「いろいろですか」

この人に何かしたのか。そもそもこの人とはどういう関係なのか。この人のことをどう思っているのか。

光上に問い質したい衝動に駆られる。しかしここでそれに身を任せるような彼女じゃない。ここは図書室だ。騒ぐようなことは許されない。何よりここで余裕を見せてこそ女の器を示せる。そこまですを瞬く間に考えた圭は、追及することなく、早速席に着こうと促す。

図書室の席は基本的に1テーブルにつき4人座れる。2人横並びになり、対面も同様。他の利用者は片手で数えられる程度。静かに教え合えば迷惑もかからない。

勉強を見ると言っても、それぞれ勉強ができる人間たちだ。早坂は意図的に同じ順位を取り続けているだけ。光上は50位以内になるように調整してるだけ。この3人の中で、一番真面目に勉強してるのは圭だろう。そのため、圭が分からないところがあればその都度光上が教えるという流れだ。

「俺が対面の方がいいか」

中等部の圭には教える立場。早坂が意図的に順位を下げてるとはいえ、勉強面は早坂より上。それなら光上が2人と向き合う位置に着くのが合理的だ。

その言葉に圭が僅かに反応し、それに気づいた早坂がフォローを入れる。御行と四宮の様子を見てきた早坂だ。圭の反応からすぐに好意を見破り、そのサポートに回る。自分が本来邪魔者であることは自覚してる。これくらいをお詫びとして支払おう。

「ウチが対面の方でいいよ。元々は妹ちゃんのための時間なんだし」

「早坂がそれでいいなら」

「それじゃお二人さん並んで座っちゃって〜」

「なんか楽しげだな」

そう言っただけの圭の横を通る際に、小声で応援していることを伝える。圭が勢いよく振り返るも、早坂は知らぬふりをして勉強会の準備を進めた。

一度始めたら全員が集中する。やはり圭が一番真面目に取り組み、光上は今回何位にするかを考えながら勉強量の調整。早坂は自分の勉強をしているフリをして、そんな2人を観察。

この展開は狙っていたことじゃない。昼休みにたまたま流れで知っただけ。そしてこれも仕事の一環。使えるものは使うのが四宮家。かくやが御行の外堀から埋めるためにも、妹という立場の圭は重要な要素だ。身内から切り崩せば喉元に刃を突き立てるも同然。俄然かくやが有利になる。

だがしかし、結局ここでも厄介になるのが光上晶という男。早坂の目からして、圭が光上を好きなのは明らか。先程の反応で確信も抱いた。対して光上は以前に中学生は恋愛対象として見てないと言っていた。つまり、いくら圭が好感を稼いでも、光上を落とすことができない。

手っ取り早いのは、光上の視野を広げさせること。3歳差は、たしかに若いうちは気にするだろう。中学生と高校生。はたまた高校生と大学生。犯罪臭が強い。それなのに、社会に出てしまえば何も珍しくない。芸能人なら祖父と孫ほどの年齢差でも結婚するほど。

(光上さんが将来を想定した場合、3歳差の壁なんてないも同然)

そうすれば圭と結びつくこともできる。そしてかぐやと御行がくつつけば、白銀家を間に挟むこととなり、光上家と四宮家の摩擦も薄れる。損する要素が見当たらない。

一番の懸念事項は、圭のサポートを本格的に始めてしまった場合、光上が気づいてしまうということ。早坂が勝手にしたとしても、圭の印象が悪くなる恐れがある。彼が連鎖的に考えないとしても、リスクがあるのなら控えるべきか。

(妹ちゃんからの相談に乗るとか、それぐらいならバレない)

女子トークとして成立させれば、光上也勘付くわけもない。この路線で行こう。

「光上。ちよつといいか？　ここなんだが」

「ん？　あーそこね。お前の席で教えるよ」

「悪い。ちよつと借りる」

「どうぞ〜」

タイミングよく光上が席から離れた。それを目で追っていた圭も手が止まり、早坂に見られていることに気づいて目を逸らした。

「光上くんが好きなんだ？」

「なんの話ですか。私はただ尊敬してるだけで」

「誰にも話さないし。ウチの知る限り光上くんはフリーで、他に光上くんを狙ってる子もないよ」

「え、そうなんですか」

圭が気にしていた情報だ。クラスメイトである早坂からの情報。信じていいだろう。

あっさり食いついてしまったことに、圭は遅れて口を手で隠す。まさしく今さらの行動で、早坂はニコニコと楽しそうに笑っていた。知られたことは仕方ないと割り切り、思考をフラットに戻す。

最大の懸念事項があつかりと消滅し、その事にほっと胸を撫で下ろした。そこから考えるのはこの先のこと。半年間進展のない兄の様にはなりたくない。

悩んだ結果。圭は素直に認めることにした。早坂という協情報屋力者を得るメリツトの方が大きい。その申し出を早坂はあっさり引き受けける。

(かぐや様もこの子くらいに強かになればいいのに)

「なんで手伝ってくれるんですか？ 初対面の私に」

「こつちにも事情はあるんだけど。やっぱし恋は叶ってほしいし。応援したくなるくらい妹ちゃんが純粹ってのも大きいし」

「純粹……ですか」

「悪い意味じゃないよ？ それは誰もが持てるような武器じゃない。妹ちゃんの強みだから」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

圭と御行は恋愛面でも考え方が似ていた。好きな人がどちらも格式の高い家。相手から明確に告らせたいと思っている。この点、圭は御行よりやりやすいだろう。光上は素直に言葉にしてくれる。1人の異性として見てもらえば、あとはゴールまでが早い。

冷静になつてみれば、自分が光上の言葉を勘違いしてそんな過去がいくつもある。とても曖昧だ。曖昧だからそれらは証拠として使えない。やはりハッキリと彼の口から言ってもらいたい。少なくとも彼から好感を得ていることは確かなのだから。

「あの、妹ちゃんではなく、名前で呼んでください」

「圭ちゃん？」

「圭でお願いします」

「わかった。じゃあウチのことも愛って呼んで欲しいし」

「愛………さん。ごめんなさい。目上の方を呼び捨てするのは……」

「あはは、だろうね。それで十分だし」

「LOVEな話はここですか!!!」

「藤原さん図書室では静かに」

話が纏まったタイミングで遅れてラブ探偵が突入してきた。探偵のコスプレはどこから持ってきたのか。藤原の登場は早坂が警戒していたことであり、早く話を纏めにかかったのも功を奏した。圭の決断の速さも要因として大きい。

生徒会の人間が何してんだと光上が静かに注意するも、藤原はそれどころじゃなかった。今日一日ずっと謝りたいと思っていた相手がようやく見つかったのだから。

「光上くーん!! ごめんなさいー!!」

「だから静かになって危なっ!」

「何で避けるんですか! 男の子なら女の子を受け止めてください!」

「身長差からして帽子のつばが喉に突き刺さるからですけど!? とうか藤原さんちよつと外行こうか」

涙を溢しながら何度も謝る藤原を、図書室で騒ぐなど怒るわけにもいかない。光上は彼女の手を引いて図書室の外へと連れ出した。

それを見ていた圭がムスツとする。

「千花姉えずるい。私まだ手を握ってもらったことないのに」

「頼めばしてくれると思うけど」

「……恥ずかしいです」

「乙女だね」

早坂の揶揄いを流した圭は、表情を真面目なものへと切り替える。その速さは早坂から見ても感心するほどだ。

「光上さんと千花姉えつてそこまで仲良くないんですか?」

「今のでそう見えたの?」

「はい。仲が悪いってわけでもなさそうなんですけど、なんだか良い

とも言えなさそうで」

この子の観察力は敵に回したら怖い。早坂はそれを正しく理解した。圭はまだ気づいていないようで、むしろ気づかないままのほうが、純粋な彼女にとっても為になるだろうと判断する。見たくないものまで見てしまう。そんな人生は辛いだろうから。

「あの2人は方向性の違いだよ」

「なんですかそのバンドにありそうな理由」

「いや実際そうとしか言えないし。仲が悪くなるほどじゃないけど、絶妙に噛み合わないのがあの2人なんだし」

どちらも嘘を嫌う性格。ただし藤原はゲームなどの遊びであれば嘘を許容する。自分も騙しにかかる。光上は他人のものは見逃すものの、自分はゲームであっても嘘をつかない。そんな些細な違いだけで、2人は微妙なズレのある関係なのだ。

もつとも、その些細な違いだけでそうなってしまう程に、2人は仲良くなっていたという過去があるという話なのだが。早坂はそれを黙っておくことにした。

「圭ちゃんこんにち殺法〜」

「こんにち殺法返し〜。どうしたの千花姉え？」

「えへへ、私も光上くんに勉強を見てもらうことにしました〜」

「え……」

ガチ困惑する圭なのだった。

## 第1話

地球温暖化。温室効果ガスやらオゾン層の破壊やら。そんな話が飛び出してから久しい現在。テレビで度々放送されていたのは何年前のことか。低燃費少女ハイジも過去のもの。孫の成長を見て「大きくなったね」とか会うたびに言う祖父母の様。体感速度の違いが如実に表れている。時の流れを早く感じるわけで、これはまさに時をかける少女。

時をかける少女はそんな話ではないのだが、全力で生きる姿を見ると応援したくなる。日本ではやはり野球人気が高い。夏の甲子園は夏の風物詩。それまでの彼らの苦労を知らずに、全国の舞台での全力プレイだけを見て泣き出す自称ファン。fanにでもなつて少しでも彼らを涼せばいいのでは。今年は中止決定。これにはクララも驚いて立ち上がる。

そんな話とはかく。数年前からファンアートがよく見られるようになった。SNSやサイトでの投稿は毎日のように誰かのものがされている。元号が変わった年には「令和ちゃん」が誕生したくらいだ。0歳児である令和ちゃんに温度調整は難しい。夏に増えるのは台風やゲリラ豪雨である。

ゲリラ豪雨って聞き馴染みがありすぎてもうゲリラ感ない。飴にちゃんを付けたがる大阪のおばちゃんを真似てゲリラちゃん。かわいい。本場のゲリラも驚愕の変化。ゲラになる。怖さはどこ行った。ら抜き言葉でゲリちゃん。何も可愛くない。人類の敵。実に汚い。

「ゲリラ豪雨って警報がすぐに出されますよね」

「解かれるのも早かったりするけどな」

放課後。校内に残っている生徒たちが、どうやって帰ろうかと頭を悩ませる。普通ならそうだが、秀知院学園の生徒にそれは然程適用されない。車で通学してる生徒は手段が変わらない。他の生徒も、家に連絡して車で迎えに来てもらえばいい。お金に余裕があるからタク



シーだって可能。

そのため、警報が出るほどの雨になろうが困る生徒はほとんどいないのだ。空き教室で外を眺める光上も、タブレットの画面を眺めてる早坂も困ってなかった。テスト期間が終わり、光上は早坂と放課後を以前のように過ごしていた。

「ですがここ数年ですと、集中豪雨が何件か見られます」

「川の堤防が決壊したり、土砂崩れ。洪水とかもあるか」

「そうですね。今日のは台風なんですけどね」

「なんでゲリラ豪雨の話したんだよ」

「暇ですから」

「俺が残されてる意味」

早坂が見ている画面では、気象予報士が今の雨について解説していた。その解説も特にめぼしい情報が流れるわけでもない。やれ風速がどうか。降水量がどうか。過去に何度も聞いている説明で、いつものことかと画面を切り替える。

生徒会室では2年生組の3人が雑談をしている。御行は言葉を交わしながら、その手を止めることなく仕事をしていた。四宮は御行のためのコーヒーを淹れ、藤原はひたすら話しかけている。この子はいったいいつ仕事をしているのだろうと思わなくもない。

「光上さんにしては珍しかったですね」

「テストのことか？」

「はい。程よく手を抜くのがあなたのやり方だと思っていたので。正直意外でしたよ」

じーっと見上げてくるその目に光上は苦笑した。感情を読ませないような顔。それとは裏腹に言葉は正直なものだ。

今回の期末テストの結果。上位3人に変動はなかった。御行が1位を守り抜き、四宮が苦渋の2位。四条がそれに次いで3位。この3人の順位は、御行が1位を取ってから変わることがない。変化があるのは4位以下。

光上は50位以内であることだけを目標とするため、常に順位が変動する。49位の時であれば、10位を取ることもある。最低限のモ

チベーションとそこに加わる何かで毎度変化する成績。それが光上のテスト結果。そして今回は4位である。しかも3位と点数は僅差。

光上が本気を出したのではとちよつとした騒ぎになるほど、今回のテスト結果は衝撃があったのだ。

「今回も適当にしようと思つてたんだけど」

「けど？」

「白銀さんに言われたからね」

『テストに全力を出してください』

その一言だけ。それだけで光上はやる気を出した。圭の勉強を見つつ、藤原が脱線しそうになったら制し、1人手を抜く早坂に勉強を促す。それがなかったら順位も上位3人の定説を崩したのではと早坂は考えている。それとは裏腹に、光上は上位3人にはどう足掻いても勝てないなと悟つたのだが。

「光上さんってそんなに単純な方でしたっけ？」

「自分でも驚いてるよ。まあ……あの目に弱いのは確かかな」

「あの子の目は不思議と力がありますからね」

（これ、案外脈なしってわけでもなさそうですね。圭にも有益な情報を思つたよりは教えていけそうです）

光上の言葉に同意しながら、圭への補助を有効的にやれそうだと分析する。主人のためになることでもあるが、早坂は純粹に圭のサポートをやるうとも思っていた。一般生徒のように振る舞い、ギャルというキャラを作つて学校生活を送っているものの、他人との繋がりがあるかと思われると首を傾げるしかない。

偽りの関係。偽物の友情。先輩後輩の関係もほとんどない。ただ、ギャルとして浸透した認識は、SNS等の繋がりを広くできた。情報収集に事欠かない。

だから、圭との関係は少し新鮮だった。これも利用してるだけなのに。それでも、後輩から頼られるというのは心地よかった。

「圭って中等部で人気あるみたいですよ」

「そうなのか。……まあ、言われてみれば想像もつくが」

「容姿端麗、学業優秀。生徒会に所属しているのもプラス点。性格も

好かれやすいものですし、家庭事情と彼女の取り組みもあって好感度高いそうです」

「納得の理由だな。というか情報集めたんだ？ 珍しい」

「彼女との約束もありますからね。周囲からの評価も把握するのは当たり前ですよ」

「約束？」

「そこは女子の秘密ですよ」

指を自分の口の前に立てる。光上には教えないという意味表示。光上も女子の秘密と言われたら踏み込むわけにもいかない。悪い企みというわけでもないのなら、探りを入れることもない。あの圭が直接関わっているのだから、そんな企みであるはずもない。

彼女が純粹だからその可能性を考えない。ということではなく、白銀圭の人格からしてそんなことはしないという信頼だ。

「そう言えば、圭も今回の成績良かったみたいですね」

「みたいだな」

「2位との差をつけて堂々の1位だそうです。褒めてあげました？」

「そりゃあもちろん。テスト期間中の頑張りも見てたわけだし、何も言わないなんて人としてどうかと思うし。そう言う早坂は？」

「もちろんお祝いのメッセージを送りましたよ。お互いにですけど」

「それは誰も同じだな」

勉強会をした4人は全員成績が順当に良くなっている。光上の場合は、今回本気で取り組んだこともあり、本来の実力を見せるという結果に。早坂も似たようなものだ。さすがにいきなり高順位を出すわけにもいかず、114位から100位ぴったりへの上昇。これも狙ったことである。藤原も前回から順位を5つ上げた。

藤原の場合、会長と副会長の攻防に巻き込まれ、勉強せずにテストに挑んでいただけ。元々は成績が悪いわけでもなく、授業もしっかり聞いている。今回のようにちゃんと勉強すれば、成績も元に戻っていくというもの。

「光上さんが会長とかぐや様に小言を言いに行ったのは、傍から見ても面白かったですよ」

「あのな……。はあ、1位の取り合いをする2人だけの駆け引きならいくらでもやればいいさ。でも、そこで周りの順位を下げてるなら話が別だ。鵜呑みにする藤原さんも純粹過ぎるんだけど」

「それもありますね。ゲームとかで駆け引きとかできてるはずなんですけど。友人をとことん疑わない人です」

「それが藤原さんの美点でもあるんだけどな」

その藤原は今何してるかと言うと、生徒会室で喚き散らしていた。彼女は雷が駄目らしい。先程から何度か雷がなり、その度に叫んでいた。その声の大きさに、早坂も眉をひそめて耳からイヤホンを外していた。

「雷が鳴ったときに臍へそを隠さないと取られるって迷信ですよね」

「取られはしないからな」

「お腹を出していると冷えて光上さんみたいに体調が崩れる。だから臍を隠させたって話ですし」

「俺はそこまで馬鹿じゃないぞ。たしか、一説には雷様が河童に変身して地上に降りる。河童は無防備な人の臍から体内に入って悪さをする。そんな話もあるらしいな」

「どうやって入るんですかね」

「そこは深く考えても答えは出ないだろ。昔話ってそういうの多いし」

タブレットから聞こえてくる会話では、藤原は雷の光がまず嫌らしい。そして後から鳴る雷も嫌いなんだとか。耳を塞いだらお臍を隠せなくなるでしよって御行が怒られていた。たしかにそうなのだが、藤原のこれは八方塞がりなんじゃないだろうか。

「書記ちゃんはいつでも面白いですね。私の仕事に関わる時は一番厄介な存在ですけど。はああー」

「深い溜め息だなー。そーいや、藤原さんはなにで帰るんだろうな」  
「タクシーじゃないですか？」

「それが無難か。早坂は四宮さんと車だろ？」

確認するように聞くと、早坂はこくりと無言で頷いた。

「俺も家に連絡したから迎えが来るし、白銀も連れて帰るか」

「そこは待つてください」

言うやいなや、スマホを早速取り出した光上を早坂が手で制す。学校に残っていて、家の方向も同じ。友人であり、車で送ってあげるのも自然な手段。ごくごく当たり前のことなのだが、今回ばかりは早坂も止めに入る。その手段を四宮かぐやが考えないわけがないのだから。

同性で友人。家の方向まで一緒となると、四宮よりも光上へお願いするほうがハードルが低い。2人が御行に提案してしまえば、四宮が選ばれないのも無理はない。

だったら光上が御行に提案するのを阻止すればいい。幸いにも、光上は御行と四宮の恋愛頭脳戦を知ってるのだから。

「かぐや様が会長をお送りすることを考えているはずですので」

「考えてるだろうけど、それを素直に言う人でもないでしょ」

「……そうですが、ここは手を引いてください」

数秒視線で応酬し、光上が折れる。あの2人に早くくつついてほしいと思ってるのは早坂で、その苦労の助けになるのなら折れる他ない。そう簡単にうまく行けば、半年間進展がないなんてことにはならないのだが。

「それよりも、圭の方が心配ですね」

「電話してみるか」

「それがいいかと」

御行とのトーク画面から圭とのトーク画面へと変える。通話ボタンを押し、圭が出るのを待ってる間は外の雨の強さを見る。風も強い。これでは傘などほとんど意味をなさない。電車で帰るにしても、学校から駅に行くまでの間と、駅から自宅までの間に雨に打たれる。可能ならそれを阻止したい。

『も、もしもし！』

「もしもし白銀さん。今大丈夫？」

『は、はい、大丈夫です。どうされたんですか？』

電話を出た時は動揺してる様子が窺えたのだが、それもすぐに落ち着きを取り戻していた。

「この雨でしょ？ もし白銀さんがまだ学校なら、うちの車で送って帰ろうかと思っただけけど、今どこ？」

『学校です。ちようどどうしようかと思いでいたのでありがたいです。でも、本当にいいんですか？』

「うん。じゃなかつたら誘ってないよ」

『ふふっ、それもそうですね。本当にありがとうございます』

「これぐらいどうってことないよ」

『あ、うちの兄はどうするか聞いてますか？』

反抗期とはいえ兄妹。嫌いなわけでもないのだから、御行のことだって心配する。

さて、嘘をつかない光上はどう話そうか迷った。早坂がアイコンタクトで内容をぼかすように言ってくる。光上が取れる手段としては、そこが限度だろう。

「他にツテがあるみたいで、そっちになりそうかな」

『そうですか。……はあ、まったく……』

せつかくの誘いを断ってどうするんだと愚痴る圭を、光上は乾いた笑いで返すしかなかった。予想としては、御行が高確率で雨に濡れて帰宅するはず。それを圭が嫌がる光景が浮かんでしまうのだ。

その後少し言葉を交えてから通話を切る。中等部に着けば光上から再度圭に連絡するという手はずだ。

「さてと、そんなわけで帰るよ」

「はい。お疲れ様でした」

「早坂もお疲れ……って、何その格好」

「カッパですよ。制服が濡れるのも嫌ですし。車の前がかぐや様を待つことになりますから」

「それ雨の中でだよな？」

「ええまあ。ですがお気になさらず、私は体が強いので」

そうだろうなと思った。早坂の欠席はいつも四宮が欠席する時だ。つまり看病のための欠席。それさえ無ければ早坂は皆勤賞を取れている。

だが、それとこれは別。台風が来ている中でそれはどうなのかと

思ってしまう。しかし光上家と四宮家は不干渉。冷戦のようなもので、小さかろうと火種になりそうなものは避けたいといけない。

そんなわけならば、できる範囲での行動を取ればいい。

「どうされました？」

「車の中に入ったらこれでも着とけ」

「パーカーですか」

「結構温かいやつ。あとこれカイロ」

「夏場ですよ」

「雨が強い日はいつも持つようにしててな」

渡すだけ渡したら、早坂が返す前に教室から出ていった。残された早坂は渡されたパーカーとカイロを見つめ、とりあえずパーカーをカバンの中にしまった。

校門で待つこと10数分。主人がやってきて、予想通り会長を車で送り届けることを画策していた。しかしその考えとは裏腹に、そして自分たちの予想通りに、会長は自転車で猛スピードで帰っていった。一応光上に連絡は入れておこう。

「？ 早坂そんなパーカーなんて持ってたの？」

「借り物ですよ。正確には押し付けられた、ですけどね」

「そのカイロも？」

「はい。かぐや様の分もありますよ」

「用意が いい のね」

「そういう人ですから」

本当に、とことん甘い人なんですよ。

心の中でそう呟いた。

## 第12話

秀知院学園内でのOB訪問は本当に珍しくもない。特に中高は校舍が近いために最もOB訪問が行われている。圭はテスト期間中に訪問していたがそれは異例。むしろテスト後の方が訪問する生徒が多くなる。部活動では夏の大会が目前になり、生徒会は資料作成での相談をする事が多い。

そんなわけで、今日もまた白銀圭は高等部へと足を運んでいた。以前は勉強を見てもらうのと、光上に会うことが目的。どちらかと言うと後者の方が目的だった。私欲のためだ。でもちゃんと成績が伸びてるのだから誰も口を出せない。

しかし今日は違う。今日は生徒会の仕事のために高等部を訪れている。目指す場所はもちろん生徒会室。場所は事前に調べており、ポイントメントこそ取っていないが、実の兄と姉と慕う相手がいる生徒会であるため、何とかなると踏んでいる。

(あわよくば光上さんと会いたかったけど、あの人今日残ってるのかな)

乙女らしい欲は抑えられているわけでもなかった。

圭は光上と連絡先を交換している。しかし、未だに圭から連絡することはほとんどない。ほぼ毎朝会っているため、翌日のバイトはどうのと直接言える。送ったことがあるのは、体調を崩したときくらいだ。その日に光上がお見舞いに来てくれたことを圭は鮮明に覚えている。大切な思い出の1つだ。

圭からの連絡が少ないのは、緊張のせいで必要なこと以外送れないからだ。雑談とかトーク画面のどこを見ても見当たらない。光上とのトーク画面はもはや業務連絡と変わらない。それはつまり、光上からも必要なこと以外メッセージが来ないということ。光上のその性分もあって、圭がなかなか雑談を送りづらいのもある。

そんなわけで、光上が今日学校に残っているのかどうかも圭は聞けていない。連絡すれば確認が取れるというのに、「迷惑だったらどう



しよう」と思って遠慮してるのだ。しかも朝に聞くのも忘れていた。朝のうちに「放課後に高等部に行きます」と言えていたら、光上も残っていただろうに。

(生徒会室はここで合ってるね)

考えている内に目的地へと着いた。コンコンと丁寧にドアをノックし、挨拶をしながら中に入る。生徒会室の中では、圭の憧れの先輩である四宮かぐやが立っていた。

「あら、可愛いお客様さん……」

(褒められたあ！ 帰ったらお兄いに自慢しよつと)

女子に対しての「かわいい」は男子に対しての「カッコイイ」に相当する。これは御行もこんなにダイレクトに言われたことなどないことだった。余裕で煽れることである。しかも本人も無意識そうに溢した言葉。それほどに評価が高いということだ。

「あの、会長の白銀御行は留守でしょうか？」

「会長に用事ですか？ 会長は部活連の予算案会議に出席していません。しばらくは戻ってこないかと」

「部活連の会議って、昔の外部入学の生徒会長が失礼を働いて日本に住むのが難しくなったっていう……」

四宮は圭と話をしながら、立ち話もなんだということ、圭を生徒会室のソファに座らせる。自分もその隣に座り、彼女の話を聞いてくすりと笑った。噂というのはどうしても話がねじ曲がる。時が経てば必ず話に尾ひれがつくものだ。圭が今言ったのも少し違う。

「光上さんはこの話は違うって言ってましたけど」

本当の内容を教えようとしたところで、四宮の笑顔がピシりと固まった。なぜ会長の妹と光上に関係があるのか。あの男はやはり敵か。早坂に指示を出そうか。

「な、なぜ光上くん？」

「あ、私光上さんと懇意にさせていただいてまして。兄と光上さんも友人関係ですし」

「あー、そうでしたね。それならたしかに繋がりがあっても……懇意？ 光上さんとお付き合いでも？」

(あの男中学生に手を出してるというの？ これを会長は知っているの？)

「お、お付き合いだなんてそんなっ！ そういう関係では……」

四宮の言葉に圭が狼狽える。この様子からして、付き合っていないにしても好意があることは簡単に分かった。光上本人の自覚がないだけで、わりと彼は人気があることを四宮は思い出す。特に後輩からの人気は顕著だ。分け隔てない接し方が要因だろうか。

「お気持ちには伝えたのですか？」

「ふえっ!? あ、……その……恥ずかしくて……」

(わかるううう!! 共感できますよ! ええよくわかりますとも!)

「それに、もし断られたらって思うと怖くて……」

(本当にそうよね! 会長は間違いなく私に惚れているけれども、もしもを考えると怖くなるのはよく分かります!)

「光上さんは、誰に対しても同じ対応ですし。そう思うと、仲良くしてもらってるのも、白銀御行の妹だからじゃないかって考えてしまうこともあって」

「そうですね。彼はそうすることを選んだ人間ですから。ただ、クラスメイトとして、何年も彼と同じこの学園で過ごした人間として言わせてもらいますと、彼は絶対<sup>絶対</sup>に人をそんな見方しません」

断言できる。光上晶の人となりを見てきた。衝突をしたこともあった。だからこそ言える。彼は必ず目の前の人と向き合うと。誰かの妹とか。誰かの娘とか関係ない。そんなもの全て取り払ってから相手を見る人間だ。

「ですから、彼はあなたを一人の人間としてちゃんと個別に見ているはずですよ」

「四宮副会長……。ありがとうございます。胸がスツキリしました」

「ふふっ、お役に立てたのでしたら何よりです」

(頼れる姉感出てましたよね今! 私今確実に頼れるお姉さんとして認識されましたよね!)

どこまで行ってもそこに還ってくる。圭と仲良くなれば、御行の外堀から埋められるわけで、気持ちはわからないでもない。いっそ、こ

の勢いのまま姉呼びをさせてみてもいいのではないだろうか。

圭のカップに紅茶を注ぎながら画策する。焦っては狙ってる雰囲気  
気が伝わってしまう。あくまでごく自然な流れとして話題を振らな  
いといけない。タイミングも逃してはならない。

「恋話の匂い!!」

藤原<sup>カオス</sup>千花出現。

生徒会室のドアを勢い良く開けて入ってきたのは、四宮かぐやに  
とって数少ない信用の足る人物。しかしそれなりの頻度で、こんな感  
じで無意識の妨害をされてしまうので、その度にどす黒い感情を出現  
させているのだが。

「あれ？ 圭ちゃんだ!」

「千花姉え!」

「どうしたの？ 遊びに来てくれたの?」

「ううん。今日はお仕事だよ」

(千花姉え??)

圭と手を取り合ってはしゃいでいる彼女を、ドブを見るような目で  
見つめる四宮。決して友人に対して向けるような視線じゃない。そ  
れを圭も藤原も気づいていないのは唯一の救いか。

「かぐやさんと何お話してたの?」

「え!!? えつと……」

「部活連の会議の話ですよ。どうやら噂に尾ひれがついてるようでし  
て、これから正しい情報をお伝えしようかと」

「あく。当時の生徒会長のお父さんの勤務先がカンボジアになったつ  
て話でしたね」

「それ飛ばされてますよね!? えー、お兄い大丈夫かな……」

(しまった。妹さんを不安にさせてしまった。ここは私がフオーローし  
なくては!)

「大丈夫ですよ。会長は失礼を働く方ではありませんし、何かあつて  
も私が対応しますから。四宮の名に掛けて」

「四宮副会長……」

(いい感じですよ。今自然に頼れる感じ出せてますよね!)

「圭ちゃん。それに今日は光上くんが同席してるし、何も怖いことは起きないよ」

「そうなんだ」

（藤原さあぁあん!! なんでここで彼の名前を出すんですか！ 私の印象が上書きされちゃいましたよ！）

光上がいるなら大丈夫。圭は光上の影響力を何一つ知らないのだが、好感度の高さがそのまま信頼度に変換されていた。光上が同席していると聞いただけで、ほっと胸を撫で下ろすほどだ。

それを見て四宮は嫉妬に震える。どうすれば彼よりも好感度を稼げるのかと頭をフル回転させて考え始める。恋してる状態で、好きな人以上に信頼を持てる相手はそうそういないということを、四宮は身を持って知っているはずなのに。四宮だってその相手はせいぜい早坂ぐらいで、それも長年の付き合いによる絆だ。

「それで、圭ちゃんのお仕事の用事って？」

「これなんだけど」

「計算は合ってるけどコンマの付け方に表記ゆれがある。あと——」

（いたの!?!）

「石上くんいたんだ〜」

四宮と藤原の思考が一致する。違いは言葉に出してるかどうかぐらいだ。そんな2人の反応をよそに、圭は仕事モードに。石上もそれに付き合っただバイスを送る。同じ会計同士。会話はとてもスムーズに行われ、石上の説明も的確で分かりやすかった。

教えてもらってからふと圭は思った。この人はいったいいつからいたんだろうと。じーつと見つめると、石上が気まずそうに目をそらす。石上は尊敬する会長の妹相手に緊張していた。失礼があったらどうしようとかガチで思ってた。

その失礼なことはもうしてるのだが。

「いつからここにいました?」

「……………妹さんがここに来る前からです」

「……………い、あつ…………」

「ごめんなさい。聞いてました。でもお似合いだと思います！ 応援

させてください！ できることなら何でもしますから！」

「マジ土下座キツイです」

「ぐはっ！ ……四宮先輩。死にたいので帰ります」

「駄目よ。いなさい」

「……」

会長なら帰らせてくれるのに、と涙を流す石上に、圭も罪悪感を抱いて謝罪する。兄への態度と似たように振る舞ってしまったのだと。

(会長いつもこれに耐えてるんだ……。僕は無理だな……)

圭に頭を下げさせたことに、彼女を気に入ってる女性陣が抗議。石上の精神がゴリゴリ削られるも、そんな2人を圭が止めてその場が収まる。

(この子天使なのでは……?)

石上の中で圭への尊敬心が芽生えた瞬間だった。

「何この状況」

「あ、光上くん。お疲れ様〜」

「へ？ 光上くん？ この時間ですと会議はまだ終わってませんよね？」

「まあな。でも俺の役割って序盤だけだし」

「姿見せるだけで効果ありますからね〜。会長の負担も減ったと思います」

「だといいけど」

光上が会議の場で行う役割は、姿を見せるだけである。白銀御行のバックには光上晶がいるぞと。それを示すだけで光上の仕事は終了だ。その後は見守るだけでもいいし、颯爽と帰ってもいい。光上はその場に残ることを選んだのだが、藤原から連絡が来てこちらに来たのである。

「白銀さんも来てたんだ。生徒会の仕事？」

「そうなんです。先程石上先輩にアドバイスを貰えました。とても親切で分かりやすかったです」

「それは何より。で、なんで石上泣いてんの？」

「妹さんの言葉が胸に染み込み過ぎまして……！」

(待つて！ 今もしかして私が一番印象薄いんじゃない!?)

「四宮さんとは話せた？ 憧れの先輩って前に言つてたけど」

(憧れいただきました！ これはもう私の独り勝ちですね!)

脳内高速手のひら返しドリルである。圭の発言に一喜一憂する四宮の様子を、男子2人は察したように見守っていた。

「学校で会うのはテスト期間以来か。わりと最近だけど」

「そうですね。ここに早坂さんがいれば揃うんですけど」

(あー。早坂も勉強会に混ざってたんでしたね。全員の成績が上がつたと聞きましたし、有意義な時間だったようですね)

「愛さんはバイトが忙しいって言つてたもんね」

(あ・い・さ・ん??)

「圭ちゃん早坂さんと仲良しになれたもんね」

「うん。いろいろと助けてもらえてるんだ」

(どういふことよ早坂! 私そこまでは聞いてないのだけど!?)

まさかの侍従の裏切り。脳内プランのすべてを先に行かれていた。これは帰りの車の中で問い詰めなければいけない。

そんな四宮とは別口で、心の中で怨嗟の叫びを発している人物がいる。そう。石上だ。

(鈍感系とかいらねえんすよ！ そんなの創作物の中だけの世界でリアルだとただウザいだけなんすよ！ このバァーカ!!)

激しいシャウトである。ただし、これを声に出さないだけの理性は石上に残っていた。彼と光上は接点こそ少ないものの、その少ない接点で信頼関係を築いた仲だ。本音はアレだが、悪く言えないのである。もつとも、それを言つて崩れるほどの浅い関係でもないのだが。何よりも、これを言つてしまえば圭への侮辱にもなる。それだけは避けたかった。

四宮と石上がそちらに思考が割かれている間に、話題はもうすぐ訪れる夏休みの話へ。藤原家は毎年の旅行に行つてるんだとか。この場では唯一の存在だった。

そこを羨むこともなく、圭は別のことに頭がいっぱいだ。

——誕生日である

8月1日。その日が圭の誕生日。夏休み真っ只中ということもあり、友達からはメッセージのみのお祝いが多い。毎年それでもいいと思っていた。中学生ながらに家庭のことは理解している。誕生日だからと特別なことはできない。

けど今年はそうならないでほしい。光上に祝ってもらいたい。欲を言えば誕生日デートとかしたい。

まずは光上の予定を聞かないといけない。困っている圭を助けたのは藤原だった。圭の様子に気づいたわけでもないのに。ファインプレーである。

「光上くんの夏休みのご予定はどうですか？」

「夏休み？ フランスにいるよ」

「え……フラン、ス……？」

あまりにも遠い。絶句している圭を見かねたのか。思考をフラットに戻した石上が何とか助け舟を出そうとして期限を聞く。しかしこれが裏目に出た。

「盆明けまで。詳細は毎年ズレるけど、時差も考えたら17日とか18日とかに日本に着くのかな」

誰が悪いわけでもない。

毎年夏休みに、光上は両親がいるフランスに行くことが決まっている。フランス校の生徒との交流もあったりする。

これは彼の恒例行事だ。

(無理にでも帰ってきてあげてくださいよ！ この鈍感先輩!!)  
重ねて言う。誰が悪いわけでもない。

ただ、帰宅した後。

圭がひっそりと涙を溢したただけだ。

## 第13話

1学期が無事に終わり、多くの者が待ち望む夏休みが始まる。1ヶ月強の間が休みなのだ。浮足立つ者たちが多いのも無理はない。夏といえば何か。イベントが盛り沢山だろう。海に行く者。塩っ気を嫌ってプールに行く者。藤原家のように旅行する者。キャンプする人たちも多い。夏祭りだつてある。夏の暑さをテンションで乗り切っているのでは、なんて疑いたくなるぐらい目白押しだ。

そんな者たちの心を砕く存在。それが夏休みの課題である。学校によって量にばらつきはあるものの、それを嬉々として取り組む者はいない。模範解答を手に入れてから丸写し、なんてことをする人もいるだろう。面倒だから分からないところは全て赤ペンで書くという恐ろしい手段を取る人も。

夏休みの課題をどう取り組むか。序盤で全て終わらせたり、毎日計画的にやつたり、提出日に間に合えばいいだろうって放置したり。性格がよく現れるものだ。

勉強を嫌う人にとって夏休みの課題とは、小さい子にとってのハンバーグの中のピーマンである。苦味なんて成長してから覚えてもいいじゃない。何はともあれ、夏休みの課題の量に絶望して打ちのめされる生徒もいる。部屋の中で埋葬されてそうだ。

それとは違う理由で、しかし同じように部屋の中でくたばっている人だっている。我らが生徒会長。白銀御行である。

(四宮と何もしてねえ……。連絡も取ってねえ……)

光上と早坂からしたら「やっぱりそうだったか」と言える状況だった。御行と四宮はお互いにプライドが邪魔をする。どちらかが素直に誘えばいいものの「そんなことをしたら(以下略)」という言い訳で誘えていない。「相手が誘ってきたら行ってやらないでもない。本音はめっちゃ嬉しい」という状態でお互いに待ちに入ってる。

直接顔を合わせる生徒会室内でならまだしも。1秒たりともお互いの顔を見ることがない家の中で、そんな事しても何も起きないの



は必至。駆け引きも何もないのだから。

そんな兄とはブラインドカーテンを挟んで反対側にいる少女。白銀圭。彼女もまた遺体の如き倒れっぷりで床に突っ伏していた。

——光上に会えないからである

夏休みの間、半分以上をフランスで過ごすという光上。彼は自分がいない間、圭の新聞配達のことを心配していた。しかし、圭が大丈夫だと言い切り、自分の気持ちを隠して光上の出発を促した。

もしもの時は110番。頭で分かっている、緊急時に入力する余裕はあるのか。

そこで光上は、ワンプッシュで110番に電話できる端末を作製。それを圭に渡してテイクオフ。その時は心配されたことに喜んだものの、ずっと音沙汰なしだと寂しさが勝るといふもの。

「萌葉は旅行だし……。愛さんはバイトが大変だし……」

夏休みらしいことを何もしていない。課題とバイト。あとは萌葉から送られてくるメッセージや写真を見て気を紛らわせるぐらい。

「今日……誕生日なんだけどな……」

本日の日付。8月1日である。白銀圭の誕生日。

今年もまた御行から勝手に1000円を財布の中に入れられていた。本人はバレていないと思ってるのだろう。家計簿をつけている圭が気づかないわけがないのに。すっかりしてるようで詰めが甘い。気怠い体。今日は何もやる気が出ない。スマホを操作して光上とのトーク画面へ。

誕生日のお祝いはメッセージで送られてきている。しかも0時丁度に。時差を計算した上でのメッセージ。これには彼女も喜んだものだ。向こうの時間ではまだ7月だっただろうに。日本時間でもつと遅い時間に、夜とかにメッセージが来ると思っていた。

お祝いされたことは本当に嬉しい。嬉しいからこそ、会えないことの寂しさに胸を締め付けられる。

どうしようもないほどに、欲求は次から次へと湧いてきてしまう。

「光上さんに、会いたい」

願わずにはいられない。零さずにはいられない。声に出さなきや、

どうにかなってしまいそうだった。

それでも、それは叶わない。

思い返せば、好きな人との誕生日ってどう過ごしていただろう。家計が厳しくて、誕生日ケーキなんて数年食べてない。過去に誕生日でケーキを食べたことはあっただろうか。母親がいた頃に、それはあったのだろうか。御行と父と離れた時、母親との生活で誕生日ケーキを食べただろうか。

思い出しても楽しい記憶じゃない。嬉しいはずの誕生日の記憶が、寂しい記憶ばかりだ。夏休み中の誕生日だ。友達と誕生日パーティーなんてしたことない。祝ってはもらえない。夏休み前、もしくは夏休み明けに誕生日プレゼントを貰えたりもする。少なくとも、彼女の大切な友達である萌葉は千花とともに、必ず贈ってくれる。

だけど、誕生日当日は別に特別なことも起きない。メッセージをもらえるだけ。祝って貰えるのはもちろん嬉しい。

だからそれ以上は求めないようにしてきた。期待してもそれが叶わなかったら辛いだけ。そこに期待すればするほど、楽しみにするほどに、叶わなかった時が虚しくなる。

そうやって過ごすようになってきた。誕生日もクリスマスも、特別な日を特別な日とは思わず、少しいつもと違う日として捉える。それに留めていた。

それでも、今年は期待してしまった。

光上と過ごせたりしないだろうか。

住む世界が違うという大前提を忘れて。

「光上さん……っ」

考えるな。なぜ会えないの？

考えるな。どうしてこうなるの？

考えるな。この寂しさはどうしたらいいの？

なんで私は――

思考が闇に落ちかけた時、家のインターホンが鳴る。気にせずに考え事を続けそうなものの、なんだかその気にもなれない。何か宅配頼んでたっけ。宅配なんてそもそもやらないような。怪しい宗教団体

の勧誘とかだつたら嫌だな。

何が来たのか。誰が来たのか気になる。部屋の構造上、御行の方が先に対応できる。圭がブラインドカーテンを開けると、やはりその部屋にいるはずの御行の姿はなく、部屋の外から話し声が聞こえてくる。何やら御行の声が大きい。やはり面倒な相手なのか。

気になって部屋のドアを少しだけ開ける。僅かな隙間から見えたのは。

(お兄い邪魔！)

対応している兄の背中だった。誰が来てるのかまったく見えない。仕方ないと諦め、ドアを完全に開けて部屋の外に出る。冷蔵庫に飲み物を取りに行くフリをして、誰が来たのかを横目に確認。

「え……」

目を疑った。足が止まり、呆然と玄関を見つめる。

「あ、白銀さんこんにちは。改めて誕生日おめでとう」

「え、あ……っ、ありがとうございます、ございます」

「それで、今日は白銀さんと——って、白銀さん？」

「圭ちゃん……」

その場の誰もが予想していなかった。その行動を取った圭本人も含めて。

つい先程まで『会いたい』という欲求が強かった彼女だ。そのタイミングでいざ光上が家に来た。理性は仕事をやめ、欲求が衝動となって心を突き動かし、体をも動かしただけ。

何も言わず、黙って光上の胸に飛び込んだ彼女は、小さく震えながら縋るように光上の服を掴んでいた。その表情は光上にも御行にも見えない。

「寂しかったです」

「……」

霞んで聞こえたその言葉に。なんて返せばいいのだろう。今の光上には、それに返せる言葉を持ち合わせていなかった。

彼が言葉に迷っている間に、圭の理性が徐々に仕事を再開する。状況を把握した圭は、耳まで赤くなつてその場に固まる。彼女からすれ

ば、「気がついたら光上さんの胸に飛び込んだ」である。混乱するの  
も無理はない。

「フランスにいるって聞いてたんだが。帰ってきてたのか？」

混乱してまともに話せない圭に代わり、御行が光上に疑問をぶつけ  
た。その話をした時、御行はその場にいなかったものの、会議の後に  
藤原から聞いていた。だから、この帰国については完全に予想外であ  
る。

この緊急帰国に関しては陰の功労者がいるのだが、それを知ってる  
のは言われた光上だけである。

「昨日の夜に羽田に着いてな。明日の朝にはまた飛行機でフランスに  
出発。今日のために無理言って帰ってきた」

「今日のためって。……圭ちゃん着替えてきたら？」

「あつ……！」

部屋着とは、完全に無防備な状態である。宅配自体頼まない白銀家  
にとつて、来客はまず考えられない。だから外に出る用事がない時  
は、とことんラフな格好になる。そんな状態を見られた圭は頬を赤ら  
め、慌てて部屋へと引っ込んだ。

「光上が帰ってきたのは、圭ちゃんのお祝いをしてくれるってことで  
いいんだよな？」

「合ってるぞ。世話になった人にお祝いくらいするし、あの子には今  
のところ今年で一番世話になってるから」

「……はあ。そんなことだろうとは思った」

圭の誕生日だから帰ってきた。ここに嘘などなく、圭を祝いたいと  
いう気持ちにも偽りない。そして、圭をラブの意味で好きだからとい  
う気持ちも、そこにはなかった。

御行は圭の恋路に明確に反対こそしないものの。あまりいい顔を  
するわけでもない。自分の恋愛より遥かに難易度が高いからだ。釣  
り合わないとかじゃない。圭が光上のことを正しく認識しているの  
かが怪しいのだ。

恋愛対象として見られていない。この点は彼女次第でなんとかな  
る。家柄なんかも光上は気にしない。問題は、圭の理解度がどこまで

進んでいて光上を好きになっているかだ。

「体は大丈夫なのか？ 時差ボケも相当キツイだろ」

「一晩あったから大丈夫。寝起きで壁に激突したくらいだ」

「大丈夫の意味を調べ直してこい」

「たしかにキツかったんだが、今安定してるのも事実だ。それに」  
「？」

「あの子の反応を見たらこのくらいはな。あそこまで喜ばれるとは思ってなかったし」

恋愛相談を受けることはある。一般的な考えを元に受け答えしている。しかし、その感情がいざ自分に向けられると途端に鈍る。その辺りの原因も御行は推測を立てているが、その解決の力になれそうにないことも同時に推測が立っているのだ。

ここまで一途な妹ならあるいは。そう思いはするも険しい道だ。もしもの保険のために立ち回るつもりでいる。

「光上」

「ん？」

「圭ちゃんの気持ちを裏切るなよ」

「いきなりどうした」

「圭ちゃんの全てに応えろなんて言わない。俺からの要求は1つだ。圭ちゃんの気持ちを裏切るな」

「……いまいちピンとこないんだが。そこは俺の課題か」

「ああ」

お互いに何度も腹を割って話した仲だ。冗談くらいなら時折交える。そして、真面目な話をする時はとことん真面目だ。

たとえば白銀御行のことを知らなかったとしても、彼の今の目を見れば本気で言っていることなんて一目瞭然。それだけ妹のことを大切にしている兄だと分かる。それと同じくらいに、御行は光上与えのままでいたいと思っていた。身内が彼に好意を抱かなければ、その心配もなくて済んだのだが。もしもの話をしても仕方がない。

「白銀は四宮と遊んだのか？」

「しのっ！ ええい声を抑えてくれ！ 妹に知られるだろ！」

「ん、それは悪かった。で？ 8月に入ったわけだし、1度くらい遊んでたりとか、遊びに行く予定とかあんだろ？」

「……………ないです」

「まじか。20日は花火大会だろ？ 石上もいるわけだし、2人きりにはなれないぞ」

「わかってはいるんだが……………！ 俺から誘ったら俺がどうしても四宮に会いたがってるって思われるじゃないか！」

「実際その通りじゃん」

御行の中でそれは駄目なことらしい。頼めばイチコロなのに。あくまでも向こうからの誘いじゃないと駄目。今御行と光上がしているようなやり取りを、早坂はほぼ毎日行っているわけで。苦労人だと脳内で並行処理する。

「時間は有限だぞ？ 激務に追われまくってる白銀なら、俺の体感速度よりも日々の流れが早いはずだ。あまり駆け引きも長くはできなくなる」

「そこはわかってるつもりだ。半年間何も進展がなく今日まで続いた。同じ轍を踏むつもりもない」

「ならいいけど。高校生の夏は人生で3回だけ。貴重な1回だ。1度くらいデートにでも行ってこいよ」

「今からデートに行く人間に言われると煽られてるとしか思えないな」

「誰がデート？」

きよとんと首を傾げる光上に、御行は頭が痛くなった。「よくもまあ自分のことを棚に上げて人にそれだけ言えたな」とか言つてやりたい。しかしそれはブーメランでしかないから言えず、少しばかりお節介なことでもすることにした。

素直に応援できない複雑な胸中ではある。それでも、これでは妹があまりにも不憫だ。

「男と女が2人で出かけたら？」

「それはデートって言われたりするな」

「光上がこれから出かける相手は？」

「白銀の妹だが？ ん？」

「気づいたか」

「いやいや待って待て。落ち着こうぜ会長。中学生には手を出さないぜ？」

そんな犯罪臭のする真似をするわけがない。

「だが周囲の目からそう映るし、状況証拠として十分だ」

「俺を通報する気か!？」

「しねえよ!? そうじゃなくてだな。……先を見据えて考えるのもいいんじゃないか?」

「先を、ね……」

将来は希望だ。希望は活力だ。それがあれば、苦しいことでも踏ん張れる。立ち止まりそうな足も踏み出せる。

先を考えて行動するのは、決して悪いことじゃない。

「光上さんお待たせしました!」

「ううん。そんな待つてないよ。白銀さんおしやれな服だね」

「そ、そうですか？ 似合ってます?」

不安そうに肘に手を添えながら、圭は光上に自分の服装について聞いた。声が段々萎んでいったものの、その声はしっかりと届いている。

「とても似合ってる。白銀さんの魅力が引き立てられてるよ」

「魅力だなんてそんな……。ありがとうございます」

(石上会計がこの場にいらなくてよかった)

目の前でイチヤつかれたら石上の精神状態が大変なことになる。片方が身内ということもあり、御行ですらゴリゴリくるものがあるのだ。石上にブレーキを踏ませなかったかもしれない。むしろガソリンを継ぎ足してる。

(それにしても、よくこんなにストレートに言えるな)

この男に羞恥心というものはないのか。そう思って光上を見た御行は気づいた。圭は恥ずかしそうに俯いてるから見えていないだけで、光上も自分で言いながら照れているということに。口元を拳で隠し、圭に気づかれぬように深呼吸している。

(やはり、そうなのか)

彼は恋愛感情を理解できないわけじゃない。触れてこなかっただけ。そこは問題視するものでもない。問題は、彼の本質だ。

2人で出かけていったのを見送りつつ、御行はどう動くのが正解か悩んだ。余談だが、結局四宮をデートに誘うことはできなかつた。夏の半数を失ったな。

代わりに、光上から貰った誕生日プレゼントに大喜びして帰ってきた妹の笑顔は見れたのだった。



## 第14話

落ち着きのない様子で何度も時計を確認する。まだ時間が来てないと分かれば鏡の前でおかしなところがないか確認。そうしようと思ったら兄が鏡の前で髪の様子を気にしていた。センスが壊滅的な兄が今さら弄ったところで改善はしない。

「変わらんで」

今さら弄っても仕方ない。いつも学校には寝癖を直さずに行っているんだから、普段と同じ様相で行けばいい。どうせ今日も制服を着ていくのだ。それならみんなが見慣れてる格好にしとけばいい。

「そういうものなのか」

「変えられるとこ変えたらむしろ変でしょ」

「たしかに女子が次の日坊主だったら焦るな」

「誰がそこまで言った」

納得の仕方がおかしい。それももう出家してんじやんとかつツコミたい。でも話を広げたくなんてない。何せ反抗期なのだから。ここは、変な納得ではあるものの、下手にイジらないほうがいいと判断し、納得したことを評価しておく。

御行を洗面所から追い出しドアを閉める。鏡の前に立ち、どこか跳ねてたりしないか確認。気になるところがあればその都度直していくつもりだ。

だが一向におかしな点は見つからない。当たり前である。彼女は普段から見た目を気にして整えている。それはもう毎朝の習慣となっており、今は昼の3時過ぎ。直す箇所は全て直されている。

何よりも、このチェックは本日7回目である。乱れてる箇所なんてあるわけがない。それでもここが気になる、とか何度も起きるわけ。彼女の身支度に終わりがあるのか疑わしい。

「大丈夫。圭ちゃんはバッチリだぞー」

「うっさいしねー」

「褒めただけなんだが……」

妹に自信を持ってほしかっただけなのに。年頃の女の子って難しいなと頭を悩ませながら洗面所のドアを閉める。圭がキレたのは、勝手にドアを開けられたことも要因だ。兄妹間でもデリカシーとプライバシーは大切。

改めて鏡を見直す。何回見ても。どれだけ目を凝らしても。鏡に映る自分の姿でおかしな点は見つからない。それなのに一切安心できない。

(あと1時間切ってる！)

現在は昼の3時過ぎ。光上が家に迎えに来てくれるのが4時。手荷物の準備は終わっているのだが、どうしても自分のことに不安になる。家計の事情があるため、服は極力買うのを控えている。その年のトレンドを抑え、最低限の服だけを買う。あとは組み合わせと着こなしでカバー。

今までそうやってきたし、それで通用していた。

だからといって、それが今回通用するとは限らない。

それが、好きな人の好みに合うかなんてわからない。

「服、やっぱりあっちの方がいいのかな」

鏡に映る姿を見ながら考える。これも前日から悩んで決めた服装だ。これなら大丈夫だと思ってる。だが、悩み過ぎた結果。無難な服に落ち着いてしまってるのではないだろうか。男ウケ云々以前に、人の波に埋もれる程度の無難なファッション。そう思うと変更したくなってきた。

何せ今日は8月20日。花火大会がある日。多くの女性たちが浴衣に身を包むはず。それは限られた日にしか見られない服で特別なもの。クラスの男子も女子の浴衣姿にときめかずにはいられないと話していた。

(光上さんもかな……)

光上だって1人の男。もしかしたら圭の浴衣姿を期待してるかもしれない。そこに考えが至ると泣きそうになってきた。

白銀家に浴衣なんてないのだから。

きつとお願いしたら買ってくれてただろう。しかしそれを圭本人

が良しとしない。自分のためだけなんて嫌だ。そこにお金を使ってほしくない。そのために父や兄がさらに苦労するなんて嫌だ。

だから圭はお願いなんてしない。プライドじゃない。家族を想つてのこと。

「圭ちゃん。光上があと30分くらいで来るって」

「わかってる」

リビングに出たら御行に声をかけられた。スマホを片手に言ってきたのだから、今光上とやり取りしてるのだろう。そのついでに、生徒会メンバーとやり取りしてるのかもしれない。

御行の方を見ることなく、短く返答して部屋に入る。ダンスの中からいくつか目ぼしい服を取り出し、どれがいいか悩む。どうしてこういう悩みは、直前になって膨らんでしまうのか。納得のいく服が見つからない。自信を持てる組み合わせがない。

そうして悩みが解決しないうちに、時間が来てしまった。

服を急ぎつつも丁寧に折り畳み、ダンスの中に戻したらハンドバッグを持ってリビングへ。しばらく待つとインターホンが鳴り、早る気持ちと不安を抱えながら玄関を開けた。

「お待たせ白銀さん」

「いえ。今日はありがとうございます」

「俺も誰かと花火を見たかったから。誘ってもらえて嬉しいよ」

「そうでしたか。光上さんからの誘いなら、何人も応じたと思いますけど」

「あはは、どうだろうね。俺は案外人を誘えない人間だから。その点白銀さんは年上でもこうして誘ってるし、素直に凄いよ」

「そんなことは……」

照れてしまい否定の言葉がうまく続かない。謙遜してるのは伝わら、光上はふわりと笑ってその場を流す。

できれば圭はすぐに出発したかった。御行が家にいるのもあるが、今日の服装には自信がない。花火大会当日にしては華やかさに欠けてしまうから。そんな彼女の想いは伝わらず、彼の視線が一度服装全体に行き届いたのを感じた。

「お世辞抜きにかわいいよ」

「……大袈裟に言わないでください。今日は、その……」

「大袈裟じゃない。嘘なんか言わない。たしかに服装で印象も変わるけれど、でも白銀さんの魅力が変わるわけじゃないから」

「あつ……。うう、……。ありがとうございます」

恥ずかしがる圭の様子から、光上は自分が今相当恥ずかしいことを言ったことに気づく。誤魔化すように頬をぽりぽりと掻き、視線は圭から外していた。

光上は今そこまで脳が回っていない。せいぜい60%の調子とあったところだ。理由は単純。時差ボケがまだ治っていないこと。日本時間の一昨日の夜に帰国。間に1日あったものの、それで完全に戻すということはできなかったのだ。

お互いに照れるという状況。外野の方が見ていてむず痒くなる雰囲気。

いつまでもこの場においては払拭できない。光上は圭に声をかけ、移動を開始することにした。圭もそれに賛同し、歩きながら別の話題を出すことで気を紛らわせる。

「秀知院って夏休みの課題多い方って聞いたんですけど、そうなんですか？」

話題を探した結果これ。勉強以外に話せることはないのかと自分を呪いたくなる。そんな圭の様子に気づくことなく、光上はしばらく考えた。彼はずっと秀知院学園という箱庭の中で過ごしてきた。外部のことはあまり知らない。世間的な一般常識は一応小学生時代に意地で習得した。

そんな彼の情報網だって当然秀知院学園を中心としたもの。これのメリットは各業界の情報を集められ、多角的な見方をできるようになること。デメリットは外部の情報が少ないことだ。

辛うじて、白銀御行を始めとした外部生から中学時代のことを聞いているものの。外部の高校の情報はなかなか得られない。

「多い方らしいよ。人からの又聞きではあるけど、そう聞いている」

「やっぱり多いんですね。千花姉たちどうやって終わらせてるんだ

ろ」

「あの家は旅行に行くことが多いからなー。でも、藤原さんはだいぶ集中力があるからね。取り組みだしたら止まらないだろうし、楽しみのためにすぐに片付けてそう」

「あー。たしかにそんなイメージがあります。……千花姉えのこと結構知ってるんですね？」

早坂からそれとなく聞いていたが、いざ本人が藤原のことを話すと説得力がある。それだけ相手を識っているということ。そこまで仲良くなつた藤原に嫉妬し、ジト目で光上を見た。

「長い付き合いだから」

光上はそう言つてその場をやり過ぎした。なんだかこの話題はヤバそう。今度は光上から話題を出す。夏休みに藤原姉妹と圭と四宮で、買い物に行くという話。光上の記憶が正しければ、それはつい最近の話のはず。光上の帰国も、丁度その日に重なつたのだから。

「キャンセルになつちやつたんです」

圭が心底残念そうに言う。見事に地雷を踏み抜いたようだ。あまりものハマリ具合にビッグボスもダンボールから飛び出す。

「四宮副会長が急遽本家に戻らないといけなくなつたそうで……。それで、四宮副会長だけ仲間外れは駄目だつてことになつて、予定を夏休み明けにズラす事になつたんです」

「なるほどね。みんな優しいね」

「はい。萌葉も千花姉えも四宮副会長が好きですから」

「それは白銀さんも同じでしょ？」

「っ、……そうですね」

一瞬目を見開いた。それは光上に見透かされていることに驚いたから。そのすぐ後に、圭は嬉しそうに微笑む。

（たしか今日は花火大会に生徒会メンバーで行くんだっけな。……四宮さんが本家に戻つたのは直近）

「光上さん？」

「そういえば、俺誰かと花火大会行くの今日が初めてだわ」

「え!?! そうなんですか!?!」

「うん」

「それは……光栄なような、申し訳ないような……」

「俺は白銀さんで行けるの嬉しいよ」

「……っ！ わ、私も、光上さんで行けるの嬉しいです」

お互いに照れさせ合いながら進んで行くと、同じ目的であろう人たちをちらほら見かけるようになる。男子は私服が多く、女子は浴衣姿が多い。男子で浴衣を着ているのは、風格からして家柄がそうである人と、彼女という人の2通りか。

(やつぱり……みんな浴衣着てる……)

見渡さなくても、浴衣を着ている人は目立つから目に止まりやすい。そしてそういう人たちは実際の数より多く感じてしまう。その分、余計に圭は場違い感が強まっていた。

「白銀さんも浴衣着てみる？」

「へ？ あ、いえいえ。私は大丈夫ですよ」

「本当にそうならいいけど、知り合いで呉服屋がいてね。実はこの近くだし、レンタルもできるんだけどどうかな？」

「いえ、私は……。それに時間も……って、もしかして」

圭はここで気づいた。なぜ16時に迎えに来たのか。花火は開始が19時。移動時間を考慮しても、3時間前は早い。光上は穴場を見つけており、場所取りに焦る必要もない。

つまり、圭がこれから浴衣を選び、それに着替える時間は十分余っている。光上は決して強制はしない。圭が浴衣に興味を示さなかつたら、この提案もしないつもりだった。白銀家に浴衣がないのは、御行からの情報提供である。

「本当にいいんですか？」

「もちろん。時間はあるし、気兼ねなく楽しんでもらいたいから」

「ご迷惑でなければ、お願いします」

「お願いされました。ついて来て」

進路を変更して呉服屋へ。光上家は情報網と同じように家同士の繋がりが広い。多種多様な世界にそれぞれ知り合いがいるのではな  
いか、というほどに広い。もつとも、光上本人での繋がりとなつたら

その限りでもないわけだが。少なくとも今から行く呉服屋は、本人での繋がりだ。

人の多さが少し減っただろうか。目的地へ向かう道からズレたところでそう感じる。と言っても日本の首都東京。減ったと感じるだけであって、今歩いてる通りも人は多い。

「ここだね」

光上がそう言って入ったのは、和風の内装が施されている店。呉服屋というだけあって、雰囲気を整えることに気をつけているのだ。

「おや坊っちゃんいらつしやい」

「坊っちゃんはやめてくださいって。高2になりましたよ」

「私からすれば変わらんからね。ふん、横にいるその子のために仕立てたらしいんだね?」

「さすがに話が早いですね。お願いします」

「白銀圭と申します」

「とてもかわいらしいお嬢さんだね。礼儀正しいし、いい彼女じゃないか」

「かのっ!？」

「白銀さんは彼女じゃないですよ」

2人の反応を見て呉服屋の主人は理解した。圭がこれから苦労する道が、普通の鈍感男で味わう苦労とは全く違うということも。

(口惜しいねえ。手助けしてやりたいけど)

そう簡単にそれができない理由もある。初対面ではあるものの、圭に少しばかり申し訳無さも抱いた。

せめてもの思いとして、この子にはしっかりと着飾ってもらおう。「どれを選んでもいいよ。その前にまずは大きさを。圭ちゃんこちらに上がりなさい。寸法を測るよ」

「はい。よろしくお願いします」

「坊っちゃんはどうするんだい。せっかくなんだから、2人とも浴衣にすると風情も出るよ」

「うーん、それもいいんですけどね。もしものためにこのままで」

そのもしもが何かまでは聞かなかった。圭は、誰かに絡まれたとき

用かなと考えた。

「この子を泣かせるんじゃないよ」

「あはは、それ友人にも言われましたよ」

「どうとう友人ができたのかい……！　あの坊っちゃんに！　ううっ！」

「泣くほど!」

この呉服屋はいわゆるお得意さんだ。幼少期から知ってる仲であり、この主人からすれば孫を見ているようなもの。初めて光上から「友人」という言葉が飛び出し、感極まつてきたのだ。

呉服屋の主人が圭と一緒に店の奥へ。異性なら光上也警戒するものの、主人はお婆さんだ。警戒の必要もない。

「ほうほう。坊っちゃんこの子モデル体型だよ！　スリーサイズは上から——」

「お婆さん!」

「ばっちゃん揶揄うのやめたげて!!」

前言撤回。油断もできない相手だった。

たしかに圭はモデルになってもおかしくない容姿をしているが、それを大声で言ってくるのは考えものだ。しかもスリーサイズを言うとするなんて。

寸法が終わり、彼女の体にあつた大きさが判明。その大きさの浴衣がずらりと並んでいるコーナーに案内される。圭は瞳をキラキラと輝かせながら一つずつ見始める。生地が同じ色でも柄が違う。実に細かく分かれており、ピンポイントに客の要求に応えられるのだ。

「いっぱいあって迷います」

「ゆっくりでいいよ」

「あの……光上さんならどうなのが好きですか?」

「ほう。攻めるね圭ちゃん」

主人が横槍を入れた瞬間、圭が恥ずかしさで俯いてしまう。余計なことはするなと言いたいのもの、今の横槍のおかげで、光上は圭が言いたいことを正しく理解できた。

「光上ならどれを着るか」ではなく、「どれが光上の好みに応えられ



る浴衣か」ということである。

圭が望むように、光上にだって好みはある。どの色が好きとか、どういう柄が好きとかもある。

「こう言うのは照れくさいんだけど。俺は白銀さんが一番着たいやつを見たのかな。白銀さんが笑ってるの好きだし」

「……」

(はよ結婚せえ)

言葉にはしなかった。それはまだ言えるものじゃない。

光上の言葉を受け、しばらくそれを脳内で反芻させた圭は、恥ずかしがりながらコクリと頷いた。一応候補は決めていたらしく、その中のどれにするかに悩む。悩み抜いた結果、彼女は一着の浴衣を手にした。主人がそれに合う帯を選び、圭を更衣室へと案内した。圭は浴衣の着付けが分からず、主人に手伝ってもらうことに。

「坊っちゃん！ 今ならこの子の体見れるよ！」

「見ないでください！ お婆さんも変なこと言わないでください！」

「見ないから安心して着付けして……」

ここでもまたひと悶着。その様子が聞こえた男性従業員が反応し、女性従業員からビンタ。あわや通報寸前まで発展していた。

それから待つこと十数分。更衣室から圭が出てきた。慣れていないせいで歩きづらそうにしているが、それも彼女ならすぐに慣れるだろう。歩くペースはもう少し落としたほうがいいのか。

「どうですか？」

藍色の生地に白の撫子の柄をあしらった浴衣。彼女の月白の髪がよく映えている。

いつもはストレートにおろしている髪も、今はシニヨンで纏めている。

「すごい綺麗だよ。本当に」

「ふふっ、よかったです。お婆さんもあります」

「いいんだよ。ほれ、早く行きなさい」

「まだお代が」

「いらないよ。坊っちゃんが連れてきた子だし、買うなら値引きする

けど、レンタルなら無料さ。坊っちゃんに鍵を渡しておくから、勝手に来て勝手に返していきな。セルフサービスってやつだよ」

「いやそれ違う」

しっしっしと手であしらわれて取り付く島もない。困った圭は光上へと視線で助けを求めた。しかし光上もお手上げだとジェスチャーで返し、圭は深々と頭を下げてお礼を言った。

「次来る時は買いに来ます」

「それはありがたいね。楽しみにしてるよ」

着替え等は店に保管してもらった。祭りが終わったらここに戻ってきて、光上が借りたスパアキーで店に入る。浴衣は店に返して撤収。鍵は後日という流れに決まった。

「それじゃあ改めて行こうか」

「はい！ お婆さんも本当にありがとうございます！」

「いい思い出を作るんだよく。あ、坊っちゃん。圭ちゃんは慣れてないんだから、転げないように手を握ってやりなさい」

「それもそうですね」

(お婆さん最後までありがとうございます!!)

目で感謝の言葉を送り、お婆さんからサムズアップが返ってくる。

圭の右手を光上の左手が包み込み、優しくもしっかりと握って店を出た。

時間も時間。目的地に近づくに連れて、開始時間が迫るに連れて人も多くなる。たしかにこの人の量なら、手を繋いでいないと逸れていくか。

途中から目的地は他の見物客とはズレてくる。光上が情報を網羅して見つけ出した穴場。そこに向かうのだ。そのため人の量もだんだんと気にならなくなってきた。

その最中に、光上のスマホに白銀御行から電話がかかってきた。

「もしもし？ どうした」

『お楽しみのところ済まないのだが、協力してほしいことができた』

「謝るのは俺にだけじゃないけど……。四宮がどうした？」

『さすがに目星をつけるのが早い……。ツイッターで四宮のアカウ

ントを見てくれ』

説明する時間も惜しいということ。察した光上は、圭にスマホを出してもらって四宮のアカウントを検索してもらおう。0フォローの0フォロー。投稿されてるのは1つだけ。

「光上さん……これって……」

「……白銀さん。君のお兄さんたちに任せてもたぶん解決する——」  
「手伝いましょう。光上さんもそのつもりなんですよ？ 私は大丈夫です。四宮副会長だけ花火が見られないだなんて、その方が私には辛いです」

手伝わなくても何とかなる。手伝っていたら、自分たちも花火を見られなくリスクが発生する。光上はそれでもいいかと聞こうとしたのに、圭がそれよりも先に協力を申しでた。その判断の速さに苦笑するしかない。

「ははっ。本当に、君は凄いい子だよ」

無償の優しき。誰もが持つようなことじゃない。かと言って彼女が特別な存在なわけじゃない。彼女の優しきが本物というだけだ。それはとても眩しいものだと思っただけ。

協力することを御行にも伝え、帰ったら彼女にお礼を言うように言っておく。それを横で聞いていた圭は、「別にいらぬのに」と呟いていた。

「さて、と」

「具体的にどうするんですか？」

「少し考えさせて。白銀たちも下手に動くな」

『しかしだな』

「最効率で最短で四宮さんと合流させる。だから今のポイントから動くな」

『っ、わかった』

「……ちなみに聞くけど今3人別行動してるとか言う？」

『……おう』

「ええ……。あ、先に言つとくが、俺が手伝えるのは合流するまでだぞ」

『わかっている。無理を頼んでいる立場だ。それだけでもありがたい』

一旦御行との通話を切り、3人を強制的にグループに放り込み、通話を開き直す。御行は即座に通話に入り、それを見て藤原と石上も続いた。四宮と合流させるためのプランを練ることを伝え、今の場所から動かないように言い含める。

通行人の邪魔にならない場所に移動し。思考を深める。速めて、精査し、別視点から検証。シミュレーションを何パターンか並行させ、1つのルートに絞り込む。

僅か1分でそれを導き出す。

「待たせた。そっちの動きについて今から伝える」

(四宮家。とことん面倒な一家だ)

## 第15話

四宮かぐやは生徒会メンバーが好きである。特に会長の白銀御行には、無自覚の恋心を抱いている。彼のためならどんな手段でも使ってしまうぐらいに。同級生の藤原千花は、四宮が合格を出した数少ない友人。中等部時代から話す仲であり、何度もお泊り会をしている。1つ後輩の石上優にはある程度の好感度があり、かわいい後輩だと思っている。

四宮かぐやは彼らと過ごす時間が好きだ。彼らと思い出を作りたい。

だから、花火大会に行けないと知った時には、ベッドのシーツを涙で濡らした。いつもならあらゆる手段を講じてでも突破しただろうに、シヨツクの大きさに弱ってしまったってその手段を取れていない。

そんな彼女がツイッターに投稿したのが『みんなと花火が見たい』である。果たしてこれは彼女が投稿したのか。それとも彼女のことを想った誰かが投稿したのか。

その真相はなんであれ、投稿は白銀御行に無事に捕捉された。それを受けて協力者を呼び、その人物の指示の下、万全の態勢で四宮を迎える準備が整っていた。

「あとはこれで……よしっと」

「あの。私たちは……私はどうしたらいいですか？」

その人物こと光上と一緒にいる白銀圭は、これからどうしたらいいのかと指示を仰ぐ。憧れである四宮かぐやのために、何かできることをしたい。その決意が彼女の瞳に灯っていた。自分はどうしたらいいのかと聞いているのも、光上はこれから個人で動くのだろうと予想したからだ。

その予想は見事に的中していた。光上はこれから最後の目的を達成するために行動しようとしているのだから。

ただ、圭が読み切れていなかったものも1つある。

それは、光上が圭を絶対に危険な目に遭わせたくないと考えている

ことだ。最終目標達成のためには、圭を同行させるわけにもいかない。かと言って、この場で彼女を一人きりにさせることもできない。もちろん。彼女がまずそれを納得しないというのもあるのだが。

「ひとまずは移動しようか。白銀さんを安全な場所に連れて行かないといけない」

「……私には何もさせてくれないのですか？ 私だって四宮副会長のお力になりたいんです！」

「うん。わかっている。わかっているけど、俺たちがそこに出る幕はないんだ」

申し訳なきように目を伏せながら言う。彼の中ではすでに配役が決まっていた。生徒会メンバーは3年生の2人を除いたあの4人で花火を見てもらう。四宮も圭のことを気に入っていて、目元や横顔が御行と似ていることもあって好感度が高い。サプライズでその場に混ざれば大喜びするだろう。

だが、それはもつと余裕がある時に。かぐやが四宮家に囚われずに動けるようになってから。圭はまだしも、光上がいるなら余計に動きに制限がかかる。いつそのこと、生徒会の誰かに圭を預ければ、四宮との合流もできただろう。しかし、その場合光上と花火を見ることができない。

圭と一緒に花火を見たい。口にこそ出していないが、光上のプランからはその意図が見え隠れしている。いや、本人すら自覚のない彼の小さなわがままだ。

それに気づいてない圭はどうにも納得ができなかった。自分だけ何もすることがない。自分だけは、全てが解決するまで待つだけ。そんな役割を「わかりました」と言って受け入れるわけがない。しかしそれは彼女の早合点。

「白銀さんには頼みたいことがある」

「何もするな、とかじゃなければいいですよ」

「あはは、そうじゃないから安心して。移動が終わったら白銀さんの役割が始まるよ」

パツと彼女の表情が明るくなった。彼も言い方が悪い。あれでは

何もすることがないと受け止めてしまうだけだ。「そこに出る幕はない」というのは、その場ですることがないということ。裏を返せば、違う場所でやることがあるということになる。

圭の手を繋ぎながら人の波を移動。はぐれないように気をつけながら、人の移動が少ない場所に出てそこから急ぎ足。

「きゃっ！」

「白銀さん！ 大丈夫？」

「すみません。まだ早くは歩けなくて……」

「こっちの方こそごめん。そこを考慮してなかった」

浴衣で歩くことには慣れたものの、急いで移動することに慣れたかと言えば話が別だ。まだそこまでできるようにはなっていない。

圭の速度に合わせていては時間が足りなくなる。それは何としても避けたい。御行たちは指示通りに動いてくれている。こちらがその足を引っ張ってはいけない。

「白銀さん。掴まってね」

「どういう……。っ!? え、あのっ！」

「本当にごめん。今は急いでる」

彼女に合わせていては間に合わない。ならば、彼女を抱えて移動すればいい。

大都会のど真ん中で。花火当日ということもあって人の多くなった場所で。浴衣姿の少女をお姫様だっこ。周りから注目されないわけがない。

集まる視線に圭は耐えられず、強く目を瞑って光上の胸に顔を埋める。

「すみません！ 急いでるんで退いてください！」

彼女にこの羞恥を耐えさせ続けるのも忍びない。光上は走りながら声を張って道を開けてもらう。圭の移動速度という問題だけでなく、注目を利用して道を開けてもらうことで移動時間も短縮。実に一石二鳥の手段だった。

欠点は、めちやくちや恥ずかしいという点のみ。

視線から逃げるように足を早めた。光上もまた耳が赤くなってい

るのは内緒である。

四宮かぐやの侍従たる早坂愛は、主人のことが好きだ。姉妹同然に育ってきており、彼女のことを妹のように思っている。それでいて少し友達にも近い感覚。なんとも言えない距離感が、この2人にとって自然なものだった。

かぐやのことが好きだから、かぐやの恋愛を応援したいと思っっている。自分の苦勞も減るから早よくつつけとか思っていたりもする。淡々としているだけで早坂だって人間。溜まるものもあるのだ。

それはさておき、彼女の今日のミッションは『四宮かぐやに生徒会メンバーと花火を見てもらうこと』である。これはかぐやから指示されたものじゃない。1人で着々と計画し、準備を整えていることだ。あとは絶賛ネガティブ思考中のかぐやに本調子へと戻ってもらおうだけ。

そんなわけで主人の部屋へと入り、浴衣のままベッドに突っ伏しているかぐやとご対面。

「何一つとしてうまくいかなかったもの！ 今から抜け出したってどうせ無意味よ！ もう皆と一生会えないんだわ！」

「いえ学校が始まったら嫌でも顔合わせますから」

弱り目に祟り目。一度調子が悪くなるとことん弱ってしまうかぐや。しかしそんなもの何回だっで見してきた。四宮かぐやに関することで、早坂愛の右に出る者はいない。

どう誘導すれば調子を取り戻せるか把握している。何よりも、これまでと違ってかぐやは御行に恋をしている。ここが一番のポイント。そこを突けば、これまでよりも簡単に調子を取り戻させることができる。

「今だって会長はかぐや様と同じ気持ち。会えない日が続いてる中、運命的にも出会うことができれば！ 今まで蓄積されていた欲望が？」



「一気に解放される……？」

「そうですよ。いい感じに調子が戻ってきましたね」

この人ここまでチョロくなかったのにな。という本音は心の中に仕舞い込む。調子が戻れば後は行動あるのみ。

しかしかぐやは少し躊躇った。今この屋敷の中に本家の人間が2人もいる。1人は超優秀でつよい。もう1人は何だか知らんけどこわい。これが最大の障害。

(光上さんが協力してくれたら、スムーズに行けたんでしようけど)

早坂はここまで準備する前に一回迷った。冷戦みたくなつてるとはいえ、光上家はあくまで中立の立場。今もそれは変わっておらず、どの勢力も不干渉を決めている。そこに協力を仰げば、穏便にかぐやを花火大会に行かせられたかもしれない。

そう思ったものの、早坂はそうはしなかった。本家の考えが直接下りているのかは知らないが、そこから来た使用人の意見はNO。かぐやを花火大会には行かせないと決めている。それを知った上で頼んでしまえば、それは四宮家に意見してるも同然。対立構造ができてしまう。

早坂はそんなことにはさせたくなかった。だから1人でここを乗り切る。

「準備なら整えております」

「えっ？」

やることは簡単。早坂がかぐやに変装し、テラスに出て花火を見ておく。使用人には後ろ姿だけ見せ、声も作ってしまえばまずバレない。かぐやは早坂がすでに仕掛けたロープを辿って屋敷の外へ。タクシーの手配も完了している。今頃運転手は一休みでもしてるだろう。

「ありがとう早坂」

「後のことはお任せを」

ロープはかぐやの部屋から屋敷の塀の側に植えられた木まで続いている。そこを早坂お手製の滑車を使って移動。持ち運び可能で滑車の移動中は収納されてるロープを掴めばいい。現代の忍と言って

もいのではないだろうか。

まさかそんな所から来るとは思っておらず、タバコで一休みしていた運転手は驚愕。急いでタバコを処理してかぐやをタクシーの中へ案内。

「四宮かぐやさんでお間違いないですね？」

「え、そうですねなぜ私の名前を？」

「あなたをここで待つように指示されていてね」

「なっ!!」

一気にかぐやの顔が青ざめる。本家の人間のほうが上手。せつかくの手段さえも確実に潰しにかかってきた。

(やっぱり……何をやっても駄目なのね……)

「花火を見に行きたいと聞いてるんだけど、合ってるかい？」

「……え」

「君のお友達も拾うように頼まれてるんだ。お忍びってワクワクするよねー!」

「あの……本家の人に言われたんじや……」

「本家? いやいや。私が頼まれたのは四宮家じゃないですよ。ひとまずここを離れましょう。合流地点を目指します」

かぐやの頭はパニックに陥った。タクシーは早坂が用意したものと見抜けたが、彼女が主人の名前を出すとも思えない。だからこの運転手のバックにいるのは早坂ではなく本家。そう考えるのが自然だった。

しかし実際はどうだ。この運転手は本家の人間が回した人物ではないのだと言う。全くの別口。混乱しているかぐやにはそれが分からなかった。

「こういうの一般人のおじさんからすると興奮してしまっただけ。曲かけてもいいかな?」

「え、ええ。安全運転でお願いしますね」

興奮してしまっただけは視野が狭まる。運転中にそれでは事故に繋がりにかからない。曲をかけることで、その興奮を抑えるのだろう。かぐやはまだ死にたくないの、運転手の要望に了承した。

——『Mission Impossible』

車内に流れたのはバリバリテンション上がる曲だった。

(えええええ!! なんぞ!? なんぞこんな激しい曲を!?)

このメガネ運転手大丈夫だろうか。かぐやの中では「花火間に合うかな」という不安と「事故に遭わないかな」という不安が同列で並んだ。とりあえずシートベルトを付けることにし、その両手でがっしりとシートベルトを掴む。

そうして怯えること10分ほど。目標地点に到達したらしく、車内からそこを見たかぐやは笑顔を咲かせた。

そこには御行と藤原と石上。会いたかった3人がいたのだから。

「ご迷惑をおかけしてすみません」

「構わない。それよりも先を急ごう。四宮になんとしてでも花火を見せるぞー!」

「おー! かぐやさん! 一緒に楽しみましょうね!」

「えっ、このタクシーなんでミッションインポッシブル流してるんすか」

石上が助手席へ。後部座席に2年生組。全員が乗り込んだのを確認したら運転手がミラー越しに御行を見て尋ねる。

「この後はどこを目指すのかな? 生憎とおじさんは君たちとの合流までしか聞いてなくてね。あとは君たちから場所を聞くことになってるんだ」

「そうだったんですか?」

「会長。浜松町の方は混んでましたし、どうしますか?」

この場所に来るまでの間に、石上はしっかりと交通状況を把握していた。今から向かっても間に合わない可能性が高い。最悪の場合花火を見られない。

不安にかられたかぐやと藤原も御行に視線を向ける。この子両手に花じゃん羨ましいという嫉妬の視線を運転手が向ける。

御行に迷いなどなかった。セカンドプランはすでにある。彼も御行がそれを知っていると見越して黙っていただけ。

「アクアラインだ！ 木更津は20時30分までやっている！ 光上のおかげで残り時間も多い！ 最低でも30分以上は見れるはずだ！」

「任せなさい。あ、飛ばすのは会社に内緒で頼むよ」

「この運転手なんて無駄にかっこいいんすか……」

「藤原さん。会長。シートベルトを着用することをオススメしますよ」

「なぜそこまで怯えている!?!」

「あ、だからかぐやさんシートベルトつけてたんですね！」

死んだ目で震えながらそう言ったかぐやに、藤原と御行は驚愕しながら急いでシートベルトを付けるのだった。

時は少し遡り。場所は四宮家別邸。長女四宮かぐやの部屋にあるテラスにて、彼女の変装している早坂は、ワイヤレスイヤホンから聞こえてくる主人の声を聞いていた。運転手がかぐやの名前を言ったときには焦ったものの、本家とは関わりがないと聞いて一安心。では誰が仕掛けたのか。

(まさか彼が? ……あまり考えられません)

一番に浮上してくるのは光上。だが彼がここまでするとは考えられない。一歩間違えれば対立構造になる。そんなリスクを犯すのだろうか。

テラスから真つ直ぐ見つめていたら、ビルの間隙から小さくだが火花を見ることができよう。かぐやは毎年ここから火花を見ていた。その小さな背中を見ながら、早坂はそれよりも後ろで見ていた。あまりにも小さい。テレビで見たほうが大きく見れる。

かぐやが羨ましがってるのは知っていた。だから、御行たちとの交流で、今日という日に火花を見ると決まった時、かぐやは心底喜んでいた。遠足前の子どものようにはいしゃいでいた。

早坂も嬉しかった。それだけの笑顔を見られたことが。それほど

楽しみにできることが。それだけ楽しくいられることが。早坂は羨ましかった。

「私も……誰かと見たいものですね」

ぼつりと呟く。誰からの返答もない。

本家の使用人が入ってきた。食事の準備ができたという。

早坂はかぐやの時間稼ぎのために、部屋から花火を見ると伝えた。それぐらいなら許される。だから疑われない。

今頃主人は花火を見られてるだろうか。ワイヤレスイヤホンから聞こえてくる会話は聞こえなくなった。改造したものなのに、それでも電波が届かなくなったようだ。そつと外し、1人でじーつと花火を見つめる。

花火が始まった。

遠くで、小さく光る。色鮮やかな光。近くで見たらどれほど大きいのだろう。

数秒遅れて音が聞こえてくる。腹の底に響く音。近くで聞いたらどれほど迫力があるのだろう。

それを見ていて気づかなかった。部屋の中に誰かがいることを。

「っ！ 誰ですか！」

「危ないな！」

振り返ると同時に手刀を放つ。そこにいた人物は体をのけ反ってそれを躲し、姿勢を戻して早坂に手を振った。その人物を見て早坂は驚愕する。こんな場所にいるだなんて信じられない。

「!? なんで……ここに？」

「俺はちやんと堂々と正面から入ったぞ？ 気づけないとは、さてはだいぶ浸<sup>ひた</sup>ってたな？」

「……、何しに来たんですか？ 圭と花火を見るって聞きましたよ？」  
「そうだな。その予定だったんだけど、そこに早坂を追加することにした」

何を言っている。こんな都合のいいことがあったたまるか。

これは自分の弱さが見せる幻覚か夢で。本当はもう今日が終わってるんじゃないか。

「なにしてんの?」

「頬を抓ってます。こんなものが現実なわけありません」

「酷いやつ。まあいいけど、とりあえずその似合わないウィッグは外そうぜ。つけてても風で飛ぶだろうし」

「どれだけの風を想定してるんですか……。あなたにバレてる時点で、もうこれに用はないですけど」

ウィッグを外し、適当に机の上に投げる。ウィッグがパサッと広がる。特に何か落ちた様子もなかった。

「今からどうするつもりですか? 間に合うとは思えませんよ」

「特等席があるんだよ。しっかり掴まってろよ」

「なにを——」

早坂が聞くよりも先に光上の左手が腰に回される。そのまま引き寄せられて焦った。何をしているのか問い質したいのに、非日常的な気になる音が近づいてきてそれどころじゃない。首をひねって空を見る。ヘリが高度を調整しながら近づいてきた。

「まさか……!」

「そういうこと。チャンスは一度だ。俺を信じろ」

「ですが私がここに残らねば!」

「四宮家と話つけた。帰ってくるまでにこここの使用人達にその話が来る。何も心配はいらないさ」

早坂の中で全てが繋がった。リスクを犯すわけがない光上が、タクシーに手を回しておくわけがない。逆に言えば、リスクがなければいくらでも手を打てる。

光上は真つ先に四宮家の本家に話をつけ、交渉の結果今回のことを黙認させることに成功したというわけだ。にわかには信じ難い話だが、現実はそのようになっていた。

「安い買い物みたいなもんだ」

「絶対安くないですよ、それ」

これが案外安い買い物。四宮家当主との交渉の末「四宮かぐやの学園生活の様子を写真で定期的に送る」という条件で許可を取ったのだから。

かぐや相手に写真をこっさり撮れるかは話が別だが。これを内密にすることも条件に盛り込まれていたりする。

ヘリが近づいてきた。ヘリの下には長いロープが垂れ下がっており、これからそれを掴んで移動する。本当にチャンスは一度だけ。

「怖がる相手がいらないんだ。欲に従おうぜ？」

「……」

まだ早坂は迷った。迷ったけど、小さく頷いた。頷いてしまった。自分でもすぐ後にハツとしたが、考え直すのもやめた。そんな時間はなく、それを言い訳にして行動に移す。

両腕を光上の首周りに回し、しっかりとしがみつく。

数秒後には早坂を抱えた光上がテラスから跳び、ロープを右手で掴む。掴んだ瞬間にロープが展開。機械仕掛けのそれは、すぐさま2人の足場を形成。

足場と言っても板が出たわけじゃない。足を引っ掛けられる棒が出現し、それを早坂と片足ずつ乗せて体を安定させる程度。落ちたらひとたまりもない。

2人が無事に掴まったことを確認し、ヘリの方で操作が行われる。ロープが自動で巻き上げられ、それによって2人もヘリに乗れるという流れだ。

「あなたは馬鹿です」

「そうか。自覚なかったわ」

四宮家と話をつけた。そこまでのしたのは、どう考えてもこれの為だ。早坂の変装により、本家から連絡が来るまでの間別邸では「かぐやが連れ去られた」と騒ぎになる。それを承知の上で行った行動。

早坂を放っておけば、タクシーに手を回すだけで終わったのに。いや、そうしなくても目的は達成できていた。これは明らかに余計なことだ。たかが使用人1人の為にここまでのことをするなんて。

「なぜこんなことを？」

「早坂がそれを望んだんだろ」

「なんの話ですか」

「気づかないでも思ったか？ 四宮さんのあのアカウント。誰も

フォローしてなくて、誰にもフォローされてない公開アカウント。あんな場所に四宮さんが心中を吐露するわけがない」

遠くで花火が上がる。そちらを見ることなく、腕の中に抱えている早坂を見ながら言葉を続けた。早坂の表情は見えないが。

「白銀を動かすためのツイート。だが、それなら直接連絡すればいい。連絡先を交換してなくても、俺を経由すればいい話だ。わざわざツイートにしたのは、早坂も花火を見たかったからだろうか？」

「……さあ。どうなんでしょうね」

風で靡く髪を気にしながら、もぞりと光上の腕の中で動く。顔を光上の首に埋めるように。絶対に顔を見られないように。

彼との密着を強めたのを。

夜風のせいにして。

「俺たちって似た者同士じゃん？　けど、俺は早坂ほど強くないから。だから早坂の苦悩は分かることはできない。それでも、力を貸すから」

「そうですか。……考えておきます」

「前向きに検討してくれ。早坂の頼みなら断らない」

「っ!!」

身体が強張る。この人が何をどこまで知っているのかわからない。わからないけれど、本気で言っていることはわかる。頼めば、四宮家でも相手取るだろう。

だけど、これ以上は駄目だ。今回だけにさせないと。でなければ確実に彼は先がなくなる。

「独りの限界が来たら頼ってくれ。早坂の思いに応えるから」

それに返事をすることはできなかった。

この甘い人間に何を期待しようというのか。何を背負わせようと言うのか。

たかが使用人1人のことで。

ロープの巻き上げが終わり、ヘリの中へと入る。2人が入るとヘリのドアもようやく閉められ。シートベルトをしていた圭が、それを外して2人に駆け寄った。



「愛さんお久しぶりです！ 浴衣姿すごいお綺麗です！」

「久しぶり〜。圭も綺麗だよ！ それにしてもへりなんて驚きだし！」

「そうですよね。私もびっくりしました。光上さんってこういう事もやっちゃう人なんですね」

「意外とね〜。ウチも忘れてたし。光上くんって身体が弱いけど、運動神経とか身体能力が悪いわけじゃないってのも忘れてた〜」

「カッコよかったですけどね。光上さん、無理しないって言いませんでしたっけ？」

そこで話題を振られた光上は、無理と無茶は別だと主張。分かっ  
てやるならどのみちアウトだと圭に叱られた。そんな2人に苦笑し  
ながらへりの外を見る。

大きな花火が見えた。

とても鮮やかで、大きな花火が。地上のどこからでも見ることで  
きない。空ミからしか見ることができない景色。

早坂と圭が食い入るようにそれを見つめ。光上も横から花火を眺  
める。普通の花火鑑賞とは程遠いが、これも悪くないだろう。

開始時間にこそ間に合わなかったが、お釣りが来る光景。

それを見て楽しむ彼の手をそっと握った。

## 第2部 第16話

夏休みが終わり、四宮家周りでちよつとしたドタバタがありはしたが、無事に2学期が幕を開ける。ここでややこしいのが、秀知院学園は三期制なのだが、選択授業だけ前期後期の二期制なのだ。生徒全員これには疑問を持つのだが、慣れとは恐ろしいもので、そういうものだと思え止める。

そんなことはさておき、この2学期というのはとてもイベントが多い。登校日数からして、最も長いのがこの2学期だ。

この時期は、体育祭に文化祭という二大行事の前に。毎年陰での攻防が起きる生徒会選挙がある。ちなみに2年生の修学旅行は3学期だ。

2学期は期間が長く感じられるものの、その行事の多さや2、3年生は進路のことで体感的にすぐ終わる。そんな2学期なのだが、開始時点でひとつの選択が迫られる。

その名の通り『選択授業』だ。書道、音楽、美術、情報の4分野。この中から1つ選ぶ。制約としては、同じ分野を選べるのは2回まで。それぐらいだ。趣味で選ぶ人もいれば、自分の進路のために選ぶ人もいる。

「光上さんはどれを選ぶんですか？」

ここで迷う人はたいてい、進路が確定している人。もしくは気になる異性がどれを選ぶかを考えている人だ。後者の人物の代表格が、生徒会長と副会長なのだが。

光上は前者である。進路は確定している。この秀知院学園の理事長という椅子に座ること。それは確定事項だ。その気になれば四宮家と交渉できる。その才覚は夏休みの間に露呈していた。よつぽどのがない限り、その座につけないなんてことにはならないだろう。

もつとも、光上と話をした雁庵は、彼の経験の少なさはもちろん。危うさ甘も感じ取っていた。

「どれにしようか悩んでるよ」

「ちなみにこれまでは何を選んでたんですか？」

早坂の記憶が正しければ、彼と選択授業が重なったことはない。それなりに話すようになった仲だ。興味は湧いてくる。

「1年の時は情報と音楽。前期は書道だったな。早坂は？」

「私は1年生の時に書道を2回。前期は音楽でしたね。かぐや様に合わせるので」

「それ選んでなくね？」

「私に選択権はありませんよ。学校と一緒に来ている意味がなくなりますから」

それは至極当然の話だった。早坂は四宮かぐやの侍従。クラスも当然ずっと同じであり、選択授業でも合わせる必要がある。ちなみに体育祭でもずっと同じ組だ。そこは別れても問題ない気がするが、念の為なのだろう。

「それって楽しいか？」

「楽しいかどうかは関係ありません」

光上の視線を受け流し、自らの視線はタブレットから天井へと移す。一本の蛍光灯だけ明かりが弱い。明日にでも新しいものに変えられるのだろう。音楽室なら防音対策の小さな穴たちがある。あれの奥に盗聴器とか仕込みやすそうだなとか思ったことも。

「私の仕事に楽しさは優先されませんか」

「難儀な仕事だなく」

「あなたも似たようなものでは？」

「はっはっは。俺はそこまでしんどい環境じゃないさ。少なくとも今はな」

将来のことを考えれば、どちらのほうが厳しい環境に身を置くのかわかりきっている。幼稚舎から大学までの一貫校である秀知院学園。それを一手に束ねる立場である理事長は、数多くの癖のある者たちを束ねる必要がある。そうした上で、外からの影響を跳ね除ける独立性

と中立性を保ち続ける。それが理事長の役目。

要は、秀知院学園という巨大船の舵取りだ。部下というパーツを束ねなければ船は沈む。目指す場所を示し、情勢を見ながら社会に必要な人材を育てる環境を整える。

早坂から見ても甘い人間である光上が、その環境でやっていけるとは信じにくい。

「理事長って立場さ。うちの親は二分してるんだよね」

「奥さんが補助している？」

「うん。というか、バランス感覚がずば抜けてるんだよ。うちの母親」  
距離の調整、綱の引つ張り合い。いわゆる『駆け引き』。その手腕は一目置かれている。未だにいろんな業界からスカウトされ、その動向を警戒されるほどに。

「では、光上さんが距離感の調整をするのも」

「母親の影響だな。あの人は俺が一人でやっていけるように叩き込んだかったみたいでさ」

分からなくもない話。早坂はそう納得しかけて首をひねった。本当にそうだろうか。たしかに、今は2人でやっているという理事長の仕事。それを1人で担えるのならその人材に任せればいい。しかし、理事長に秘書がいたっていいはず。光上家にそれぐらいの候補者はいないとおかしい。母親もどちらかと言えばそのポジションのはずだ。

「1人で限界まで挑むこと。それを突破し続けること。成長はその過程で、生涯それを続けなければならない。社会の闇と向き合うなら、それ相応の力が必要だつてな」

そう言われたら納得するしかない。初めから頼る術があったのなら、それに頼ることを癖付けてしまったら。それは早坂の知る社会では通用しない人材だ。簡単に首を切られて終わる。

秀知院学園の理事長になるのなら、それ相応の成長過程を用意されても道理か。四宮家との違いは、その教育方法ということになる。

「四宮家は帝王学だったか」

「そうですね。人の上に立つ者として教わりましたよ。私はかぐや様

ほどそれを叩き込まれてはいませんが。使用人にそれを教えてクレーダーでもされたら面倒なんでしょうね」

「四宮さん並に身につけてたらやるつもりだった？」

「どうでしょう。もしものことはあまり考えませんから」

特に自分のことでは。

四宮家の基本方針。それは別邸にも額縁に入れて飾られている。廊下にデカデカとあるそれを、早坂はいつも気に食わない顔で見ている。た。

「えいつ」

「むっ。なんですか」

光上はそんな早坂の額を軽く指で押し当てた。少し押し込まれたそれは、早坂が首に力を入れたらあつさり戻った。

「いや早坂が不機嫌そうだったからさ。気を紛らわそうかと」

「やり方が独特ですね」

「こういうのはやったことないからな。そういや、夏休みの間白銀は全く四宮さんと会ってなかったみたいだけど、早坂から見ると四宮さんの様子はどうだった？」

「露骨に話題をそらしますね」

うまくできなかつたことが気まづかつたのか。光上は夏休みの話を早坂に振った。何をしていたかなんて聞いても、仕事をしたという答えが返ってくるだけ。わかっている答えを聞くつもりもない。

「まあ乗ってあげますけど。予想してる通りだと思えますよ。会長から誘いがなくてベッドの上で屍になってました」

「やつぱさうなるのか。四宮さんたち似た者同士だな」

「まあその流れのおかげで、かぐや様はツイッターのアカウントを作ったわけですが」

そこで早坂は花火大会の日を思い出す。0フォロワーで0フォロワーだった四宮かぐやのアカウント。その初投稿の件。それを見た光上は、早坂に花火を見せるためだけに大掛かりなことをしたということ。

もちろん早坂の狙いだったかぐやの花火鑑賞も無事に達成。御行

に見蕩れてたせいで花火を全然見られなかったと聞いた時は、どうしてくれようかと思っていた。花火見ろよという思いと、惚気話かよという思いのせいで。

そういう早坂も主人には内緒で花火を見たわけで。しかも地上ではなく空から。初めて屋敷の外で見た花火。あまりにも大きく、絢爛で、豪華な思い出。

その事を思い出して、緩みそうな口元を隠した。

「花火綺麗だったよなく。打ち上げられる高さとはほぼ同じとか、なかなかいい体験だぜ？ 高層ビルから見るとも一味違うし」

「……はあ。光上さんもだいぶ楽しんでましたよね」

「そりゃあな。仲良い人と見るのは初めてだし、興奮くらいするさ」

「あんな熱い言葉を私に言うくらいですしね」

「ぐっ！ やめろ早坂。俺を羞恥で殺す気か！」

「新しい死に方ですね」

早坂の視線から逃れるように光上が横を向く。早坂はその頬をつんつんと突いて揶揄った。それを手で払われると、今度は別口から切り込む。

「で、残りの夏休みは寝込んでいたと」

「んっ!？」

どうしてわかったのだとはつきり顔に出る。ポーカーフェイスくらい身につけてほしいものだが、本人がそれを気にしてないはずがない。いずれ練習に付き合うことになるのかもしれない。もしくは、今だけわざとそうしてるのか。

そんな可能性を考えながら、呆れ顔で光上を見る。わからないと思われていたなら遺憾だ。その程度のこととは、光上のことをある程度知っていたら推測できる。

「あれだけの動きをしたんですから、当然反動もあつたでしょう。あの日はアドレナリンと気合で抑えていたようですが」

「四宮家の侍従は優秀で怖いな」

「褒め言葉として受け取りますね」

「どうぞ。……あーでも、白銀さんには内緒でお願い」

「あの子は気づいて黙ってそうですけどね」

そう言われてみると、光上もそんな気がしてきた。今朝に会った時も、少しばかりムスツとしていた印象が見受けられた。てつきり家で何かあったのかと光上は考えていたのだが、早坂の話を聞く限りあれは自分のことだったのではと思えて仕方がない。

「光上さんは女子に弱いですね」

「否定はできないな」

そうやって特に身もない話を広げていく。気が変わったらまた別の話題へ。光上と早坂の話はたいがいがそういう話ばかり。そうしている間に生徒会室で動きがあった。

「どうやら会長は美術を選んだようです」

「音楽とか選んだら落単だっただろうしな」

「そんなに酷いんですか？ 校歌を歌ってる時も普通だった印象があるのですが」

「ナマコの内蔵を耳に詰め込まれた感覚を味わえるぞ」

「味わいたくないですね。えー、じゃあ会長口パクで過ごしてたんですか」

「そうなるな。本人のコンプレックスの1つだし、内緒にしといてやってくれ」

広がれば被害者が減るのかもしれないが、口パクでやり過ごしてきた御行からしたら多大な損害でしかない。これまで恥を忍んで堪えてきたのだから。

こんな話を広げたところで、早坂にも四宮家にも得があるわけじゃない。授業以外だとカラオケぐらいでしか歌を直接聞く機会がない。特に接点を持っていない早坂が、その被害に遭うことも考えられない。

「白銀が美術選んだなら、四宮さんも美術か」

「そうなります。かぐや様の思惑を読んだんですか？」

「文字を書いているフリをしてたから」

「なんで気づけるんですかね」

「んじや、俺も美術にすつかな」

「勝手に話進めないでください」

早坂の苦言を聞きながら用紙に名前を書き込む。選択科目の欄には美術と書き、明日の提出のためにファイルに入れてカバンにしまふ。

そういう見方をする、なんともわかりやすい2人。あれだけ目の前で練り広げられて、それでも気づかない藤原の純粋さには笑いを通り越して感心する。

「そろそろ帰ってもいいか？」

「まあいいでしょう。お疲れ様でした」

「お疲れ。早坂もこういう時間はもつと肩の力抜けよく。今日は前よりも固かったぞ」

妙なところで鋭い。

それが何によるものなのか。そこまでは気づかれるわけにもいかない。早坂は小さくため息をついてから声を発した。

「あの花火の日以来ですからね。少し身構えてたのかもしれない」「意外だな」

「これでも一応女子ですからね」

いつぞやに藤原と四宮が話していた「ちよつと強引なのがいい」も、わからないものじゃないなと実感したのも事実。全く気にしてなかった、なんてことはないのだ。

「いきなり抱き寄せられてあれだけ密着させられたら、ねえ？」

「いやごめん。花火を見させようと張り切り過ぎちゃって」

「……。浴衣、どうでした？」

「ん？」

「仮にも女子が着飾ってたんですから。あの日、圭からしか聞いてませんし」

「ええ……」

あの日から10日以上経っているのに。それを今言わないといけないのか。渋い顔をするも、早坂の言うことも尤もだと思う。

その日のことを思い出すフリをしながら、帰る準備を整えていく。あの日のことはどれも詳細に覚えているのだ。忘れるわけがない。



「すごい、綺麗だったよ」

「つ……。光上さんって……。誰にでもそう言いそうですね」

「……ばーか」

「？」

「見惚れるぐらい綺麗だったっつーの」

照れくさそうに投げやりに言った光上は、早坂に背を向けて帰っていった。

そんな反応をされるとは思ってた彼女は、しばらく彼が出ていったドアを見つめる。

口元を手の甲で隠し、湧き上がりそうになるそれを抑え込む。何分間かそのままの状態が続く。気持ちを落ち着かせた彼女はスマホを操作しながら呟く。

「それは私早坂愛に言ったんですか？ それとも私ハルサカですか？」

そもそも彼は演じ分けていることに気づいてるのだろうか。そこすら怪しい。別人と思ってるのかもしれない。

そこを考えながら、本家から届いたメールを再確認。

何度見てもその文字が変わるわけがなく。

どれだけ願ってもこの新たな任務は変更されない。

『光上晶を籠絡せよ』

その任務の方法はいかにも単純。その愚かな内容に、雁庵が関わっているとはいえない。どちらにせよ、下賤なやり方だと早坂は思った。

実際には雁庵が関わっている。電話で光上と話し、「荒削りではあるが使える人材だ」と判断した。使える手駒を増やすのは上に立つ者の自然な思考。方法は他に任せ、彼を四宮家に取り込むことだけを指示。

指示された者は、最も効率的な手段を考えた。そして1つの事実に着目する。彼は早坂のために動いた。ならば早坂を使えばいい。高校生らしく青春的な方法で、早坂が光上を取り込めばいい。

早坂が成功しようと失敗しようと関係ないのだ。早坂愛を利用する。ただそれだけで光上晶に王手をかけられる。

そんな思惑など知らず、早坂は今後の行動を考える。可能な限りの被害を減らす方法を。

早坂愛 自分の心を殺し。ハルサカ 自分を殺し。隠し 白銀圭 友情を殺す。裏切る

これから歩むその道で。

すべてをやり遂げたその先で。

彼女に残るものは――。

## 第17話

9月9日。それは我らが生徒会長こと白銀御行の誕生日である。白銀家では、誕生日だからといって特別なことをするわけでもない。主に家計のせいだ。

それが当たり前となつて数年。本人も「言われてみれば誕生日だったな」ぐらいの認識。1年ある中での1日。他の日と何も変わらな。しかし、それは本人の認識がそうなかただけであつて、周りの人間はそういうわけでもない。

特に御行が好きな四宮かぐやにとつて。

「リサーチするわ」

「どうやってですか？」

「幸いにも明日は会長の妹さんと買い物に出かけるのだから。その時に話を持っていけばいいのよ」

「さうつと書記ちゃんたちを省くのはどうかと」

中学時代からの数少ない大切な友人をカウントしない四宮。こんな扱いを受けているとは知らず、今も心から「かぐやさん大好きです！」と言う藤原はある意味幸せ者だ。もつとも、本人はそれを知つても意見を変えることはないのだが。

そのことを思考から外し、計画段階だとまだまともな思考をする主人に補足事項を入れておく。本人が知っていたら余計な補足だが、念の為に必要だろう。

「明日のそれって光上さんも来ますよ」

「なんで!？」

案の定知らなかったようだ。

それもそのはず。明日の買い物計画者は藤原萌葉。四宮と直接やり取りするのは千花の方で、萌葉から千花に回らない情報は四宮にも届かない。そしてこれは圭も知らなかったりする。

「週末の予定を聞いたら明日買い物に出かけると言っていたので」「それがなんで私達と同じだと分かるのよ!」

「誰と行くか聞いたら書記ちゃんの妹さんに誘われたって言っていたので」

「そこに繋がりがあったの!？」

「みたいですね。まあ、書記ちゃんと光上さんって小学生の間仲良かったですから」

妹の萌葉ともその繋がりののだろうかとうと早坂は考える。ちょうど千花と圭が知り合ったパターンと同じだ。

光上と千花がまだ波長が合っていた頃。つまり小学生の間に、光上は妹の萌葉と出会っている。言ってしまうえば小学生の間だけの付き合いだったのだが、今回お呼ばれしたのである。

「あの子のことですし、碌なことを考えてなさそうですね」

「かぐや様じゃないんですから」

「どういう意味よ」

「いえ。単純に圭の反応を見て楽しむ程度の考えだと思えますよ」

「いい趣味とは言えないわ」

「よく他人に言えるなー」

人のふり見て我がふり直せって言葉を知らないのだろうか。そんなことを言っただけで簡単に変わるわけでもなく、それを常に出してるわけでもない。一般的には褒められたことではないのだろうが、これも彼女の特徴の一つ。そしてそれは四宮家の人間である証でもある。

「早坂はだめよ」

「行きませんよ」

これ以上人が増えては纏まりというものがなくなる。何よりも、四宮が圭と話せる時間が減ってしまう。目的遂行のための障害は極力取り払っておきたい。

「私がいなくても、光上さんがいる時点でどうかと思いますけどね」

「なんて厄介な男なのかしら」

「まあそこは利用すればいいんじゃないですか？」

「利用? ……そうですね。そう考えればこれ以上ない適任者よね」

光上がいれば、たしかに圭と2人だけになる状況というのはなかなか作れない。しかし、そこ以外に目を向ければ障害どころか補助装置

となる。光上を仲介すれば圭と仲良くなれる。もう一つの目的である「御行への誕生日プレゼント」。それに参考できる意見を圭から入手するのもやりやすい。

納得しきれないものはあるが、背に腹は代えられない。

そうして訪れたお出かけの日。ウィンドウショッピングを楽しみながら秋物の服は買っちゃいましようの日。買い揃えたらウィンドウショッピングじゃないよという千花のツッコミは萌葉に届かない。

集合場所にいるのは女性陣の4人。光上が来ることを知ってるのは、誘った萌葉と早坂から聞いた四宮のみ。千花と圭は知らない。

（集合時間にはまだ余裕がありますし、来ないということはないでしょうけど）

時計をチラッと確認。あと10分弱の時間がある。彼が遅刻しているというわけでもないのだが、女性を待たせるのはいただけないと四宮は心中で呟く。御行ならこうはならないと比較し、相対的に御行の評価が自動で上がった。

「萌葉。みんな揃ってるんだし移動しない?」

「そだね〜」

（えええ!? 光上くんは!? 彼も呼んだんじゃなかったの!?)

まさかの移動開始。集合場所から離れてもいいものかと頭を悩ませる四宮。それを知る由もなく、千花は自然に圭の隣りを取って先を歩き出した。自ずと四宮の隣りは萌葉となり、千花と圭の背中を見ながら歩くことに。

（困りましたね。私の予定が崩れましたよ。しかも藤原さん。ちゃっかり妹さんの隣りをキープしちゃって!）

「圭ちゃん可愛いですよね〜」

「え、ええ。そうですね」

何度も藤原家に行ったことがある四宮は、三女である萌葉とも知り合いである。しかし萌葉は千花とはまた違った方向でズレており、四宮はその点に少しばかり苦手意識を持っていた。

萌葉曰く、白銀圭は男女問わず人気がある。プライドは高いもの

の、曲がったことを嫌う性格で努力家でもあることが理由のようだ。「徹底的に汚したくなるというかく、一生牢に閉じ込めたくなくなっちゃう感じ〜」

(こういう怖いところが苦手なのよね……)

「そんなことしたら、お兄さんである会長が怒りますよ」

「つまり閉じ込めちゃえば会長から会いに来てくれる……？ なるほど」

「どう聞き取ればそうなるんですか……!」

「あはは！ でも、きつと会長より先に圭ちゃんを助けてくれる人いますよ」

四宮は思考した。萌葉は特定の誰かについて言っているのか。それともそれを知るために探りを入れてきているのか。

閃光の如き速さの思考。四宮は後者だと判断した。

「白銀さんはそういう方を待ち望むタイプなの？」

「うーん。少なからず誰でもそれはあると思うけど、けーちゃんはそこまでじゃないですかね。気になる異性はいるみたいなんですけど」  
「そうだったのね。あなたでも教えてもらえないのは、彼女の持ち前のプライドかしら」

「あとは荒らされたくないからじゃないですかね!」

(自覚はあるのね)

藤原千花 藤原萌葉

あの姉にしてこの妹あり。恋愛話が大好きでありながら確実に地雷を踏み抜くタイプ。しっかりと自覚した上で地雷原に足を踏み入れたがる萌葉の方が、幾分か質が悪いと言える。絶対にそうするわけでもないから、他人から嫌われることも滅多にないのだが。

萌葉に應對しながら情報を整理する。高等部に訪れた際には、緊張のせいからか光上への好意を隠せていなかった。そのため、千花は怪しいものの、生徒会メンバーにはその事を知られている。

しかし、どうやら中等部の方では知られていないらしい。圭が隠したがっているのなら、ポロッとその事を言うわけにもいかない。

(というか、知らない上で光上くんを誘っていたのね)

てつきり知っていた上でやっているのかと思いきや、そうでもな

かっいたらしい。

萌葉が光上を誘ったのは、なんとなく久しぶりに会いたかったのと、持ち前の情報網で圭の好きな人を知ってないかなという期待だ。

「私も誰かに恋してみたいな〜」

「そんな軽い気持ちでするものとも思えないのだけど」

「まだ好きな人いませんから！ できたら気持ちも変わると思いますが」

わからないでもない。白銀御行に出会った当初と現在。四宮は多大な影響を受け、変化している。恋愛に対する考えも、冷めたものから甘酸っぱいものへ。

実験があるからこそ、その考えを否定できない。しかし、現在進行形であることを知られたくもない。

「そういうものかしら」

「きつとそうですよ〜！」

曖昧な返事でその場を濁して乗り切るのだった。

ずっと萌葉の相手をしていたら身の危険を感じる。四宮は可及的速やかにこのポジションを離脱し、圭の隣りを確保したかった。

それはなかなか達成できず、いくつかの店に入った時も、お昼を食べている時も、圭の隣りを確保できない。このままでは、今日の目的のどちらも達成できない。

「そろそろかな〜」

「？ 萌葉何かあるの？」

そんな時だった。喫茶店で談笑している途中で、萌葉がスマホを確認しながら思わしげに発言。それに千花が反応し、何について言っているのか聞く。

萌葉がニヤリと笑った。四宮は直感的にそれが何かを理解した。圭はその笑みを見て焦った。なにせ、萌葉は圭を一瞥しながら笑ったのだから。

「お客様。1名様でよろしいでしょうか？」

「いえ、中に知り合いが」

「きたきた〜！ 光上さんこっち〜！」

「店内で大声出すのはどうかと思うんだけど……。助かったけどさ」  
座席から立ち上がり、腕をブンブン振りながら萌葉が呼ぶ。せっかの喫茶店の空気が壊され、光上は周囲の客と店員に申し訳なさそうにしながらそこへ行く。

四宮は笑顔を引きつらせた。さすがにこのやり方は引く。千花は聞いていなかったことに憤慨し、萌葉に説明を求めた。ただ、圭だけは反応がなかった。と言うよりも、反応ができなかった。唾然と見つめるしかできない。

「……もしかして、俺が来ることみんなに言っただけなの？」

「この方がサプライズ感あるじゃないですか！ ささっ、座って座って」

「うちの萌葉がすみません」

「いや、俺も女子会を邪魔してごめん」

ペこりと謝罪する千花に、光上も謝罪を返した。女子4人で遊んでるなんて光上も聞いてなかった。完全に萌葉の手のひらで遊ばれている。

萌葉が奥に詰め、圭も横にズレる。そうして空いたスペースに光上が座り、飲み物だけを注文。ここで長居する予定もないが、来たのだから何か注文していいないと気まずい。

「なんだっただらそこそこに帰るけども」

そう言った瞬間圭の肩がピクツと震えた。それに気づいたのは四宮ぐらいか。

圭は萌葉には見えないように、右手を軽く動かして光上の服の裾を小さく摘んだ。来たことに驚きもしたし、光上が来ると想定していい服装でいることに焦りもした。それはそれとして、せっかく来たのなら一緒にいたい。

「せっかくですし、光上くんもこの後ご一緒しましょう。この機会に親交を深めるのも悪くないですし」

「そうですよ。呼んどいてさよならなんて私が認められません！

遊ぶのも初等部以来じゃないですか」

「みんながいいなら同行させてもらおうけど」



「男の子は荷物持ちつて相場で決まっていますからね！」

「おい藤原ちゃん」

萌葉だつてなんの悪びれもないわけじゃない。この場はジョークでやり過ぎし、店を出て2人になったタイミングでちゃんと謝罪もした。発言が時折怖いものなだけで、とてもいい子なのである。

ちなみに、光上からは藤原ちゃんと呼ばれており、千花との呼称の差別化はそこだったりする。

喫茶店を出た後は主目的である服屋へ突入。秋物の服を今年の特レンドに合わせながら購入していく。もつとも、藤原姉妹は財による暴力を発揮するわけだが。一応選んでは本人談である。

「新聞配達450軒分……」

「新聞がどうかしたの？」

「う、ううん」

そんな姉妹とは正反対なのが圭である。秋物の服を買いたい。買いたいのだが、厳選に厳選を重ね、その上で購入するかどうかを決める。家庭事情により、彼女が服を購入することはなかなかない。

「白銀さん。何着かなら代わりに払うよ？」

「いえ！ それは申し訳ないです」

「日頃頑張ってるし、その報いって思ってもらえたらいいんだけど」  
「頑張り、お給料という形で還ってきてますから」

誰かに奢ってもらおう。そういう行為を圭が素直に受け入れられるわけもなく、光上もそこを押し切ろうなどとは思わない。圭が許容できるのは、せいぜいが誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントぐらいか。バレンタインデーは頑張るからホワイトデーも期待したい、とかは画策してる。

「光上さくん。私これから試着するのでどれがいいか教えてください  
！」

「主観になるけどいいの？」

「男性の意見がほしただけなので、主観でいいですよ」

「なるほど。それくらいなら」

「けーちゃんも一緒にやる？」

光上の承諾を取れたところで、萌葉は圭に声をかけた。

「私は今日買わないからいいよ」

嘘である。彼女はめっちゃくちや光上の意見がほしい。

これほどまでに光上が好むファッションを知る機会などない。大いに今後の参考になる案件だ。しかし、お財布事情から今日は買わないと決めたのは事実。光上は奢ってくれるだろうが、それは彼女のプライドが許さない。

何よりも、光上相手にひたすらファッションショーをするのは、結構恥ずかしいと思ったのだ。

「そう？　じゃあ光上さん借りるね」

「光上くん。私のも見てくださいね」

「それぐらいならいくらでもするよ」

それが1時間近く続くとは、この時藤原姉妹以外は思ってたなかった。

光上が他の女子と仲良くするのはまだ許容できる。彼のその接し方は好きな方だ。それも彼の優しさに由来するのだから。

しかし、それとは別に。彼の好みが自分より先に他の女子に徹底的に知られるのは面白くない。めっちゃ嫉妬する。それでも、一度断ってしまった以上、今さら試着だけするのも圭のプライドが許さない。しかも試着だけして何も買わないとか圭にはできない。

そんなわけで、圭は店から出ることにした。あのままあそこについても精神的によろしくない。

店の外にあるベンチに四宮かぐやは腰掛けていた。彼女はいつも使用人たちが服を買う。そのため自分で服を選ぶという経験がなく、それが転じてトレンドへの疎さに繋がる。どれがいいのかさっぱりわからないのだ。

「あの……」

「はいっ！　どうされました妹さん？」

「妹さん？」

妹さんと呼ばれたことに引っかけかきを感じる。四宮の言い分は、「白銀さん」だと会長と被るからだとか。光上はその呼び方だという

ことを四宮は言ってから思い出した。

「圭でいいですよ」

「では、圭さん」

「圭」

「圭ちゃん」

「圭」

「……………圭」

「はい」

実は彼女、強引にやることもできるのである。肝が座っているのも兄妹揃って同じこと。

そこでふと疑問に思う。こうやって年上の人相手でも強引にいけるのなら。光上相手にも呼称を改めさせないのかと。

そこを問われた圭は、気恥ずかしそうに顔を伏せる。

「だって……………恥ずかしい……………」

(きやわわわわ!!)

「もし、光上さんに呼ばれたらって思うと……………想像するだけで……………」

(私の場合ですと会長に……………っ!!)

2人揃ってそれぞれの相手から名前を呼ばれた時を想像し、それだけのことで頬を朱に染める。

その思考から外れようとしながら、四宮は手でパタパタと扇ぐ。効果はイマイチだが、こういうのは気持ちの問題だ。そんな四宮の考えとは裏腹に、圭はこの話題を続けた。

「……………私、一度断ってるんです」

「何をですか？」

「名前で呼ばれること」

「え……………」

熱くなっていた顔がすぐに戻った。それは欠片も予想していなかったこと。圭が断ったのは、さつき言ったとおり恥ずかしさのせいだろうか。その予想も外れた。

「光上さんは知り合ってから、名前の呼び方に悩んでみたいなんです。それで、兄に相談したみたいで……………」

「それで会長が下の名前で呼ぶように言ったのですか？」

「そうみたいです。兄と同じ呼び方なら、親しみやすいんじゃないかって」

つまり「圭ちゃん」呼びである。光上がそこに躊躇うことなく、それでいけるのならと試してみたらしい。しかしその頃の圭は、まだ光上に恋していない時期。兄の友達にまで子供扱いされてると感じ、下の名前で呼ばれることを拒んだのだ。

それ以降すっかり「白銀さん」呼び。御行に対しては「白銀」であるため、一応差別化ができていくわけだ。

「拒んだのに、今さらお願いするのも虫のいい話ですし……」

「彼は気にしないと思いますけど」

「それはそれで気にしてほしいんです。私のことで悩んでほしい」

「わからなくはないわね」

そうして話していると、2人の前で小さい子が転びかけた。圭が咄嗟に助けに入り、膝を少し擦りむいた少女に応急処置。買ったばかりのハンカチも、「これが一番いい使い道」として傷を覆うために巻いてあげたのだった。

「白銀さんも少し擦ってるね」

「え——」

「じつとして」

いつの間にやら光上がこっちに来ていた。少女を助けた際に、圭も頬を少し擦っている。光上は圭と同じやり方でそこを優しく拭き、ハンカチを圭に渡した。さすがに頬にハンカチは巻けない。少しの間押さえることに使うぐらいか。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。それじゃあ俺は——」

「ハアハア……！ ミツガミくん。まだですよ。まだ試着は残ってますヨ」

「これの対処があるんで」

「藤原さん……」

完全に正気を失った千花に連行されていく光上。深い部分では合

わないだけで、こうして遊ぶ分には何も問題ないと気づいた千花は、初めてできた男友達と再び遊べることにテンションが狂った。理性など消し飛んでいた。萌葉でも引いた。

「そっか。あんな感じに強引に行けば」

「その道に落ちては駄目よ!？」

そんな千花を参考にしようとした圭を必死に止めるかぐやなのだった。

ここで今日の目的を思い出し、光上のおかげで藤原姉妹も気にしないでいいという最高の環境であることも気づいた。心の中で光上を褒め、さっそく質問開始。自然な流れになるように前振りを入れることも忘れない。

「クリスマスとかどう過ごされてるんですか?」

「クリスマス……。うちは特に何も。父親から図書カード2000円分貰うぐらいで」

(そうでした!! 私なんてことを聞いてしまってるのよ!! で、でも圭には光上くんがいるのだし)

「せっかくですし、今年は光上くんと過ごすのもいいんじゃないかしら?」

「光上さん……日本にいるんですかね。夏休みだっってほとんどフランスでしたし」

「お願いしてみたら、案外残ってくれるかもしれませんよ?」

「……考えてみます」

「2人きりじゃなくていいのなら、藤原さんを巻き込んでもいいのよ。クリスマスパーティーって言えば、彼女が必ず食いつきます」

確信が持てる話だった。最終手段はそれでいこうと圭の中でも方針が決まる。さて、この流れで四宮は誕生日の話へと変えていく。クリスマスプレゼントの話から、誕生日プレゼントの話へ。

しかし、ここで1つの誤算。圭が反抗期であることを知らないのだ。そのまま圭の愚痴が始まり、家の中での御行の印象が崩れていく四宮。ところがどっこい。途中からいい話に変わり、その勢いそのままに光上の話へ。

「光上さん、誕生日に合わせて帰ってきてくれたんです。誕生日プレゼントも貰えて、半日でしたけど、一緒にいられて。それが本当に嬉しかったんです」

（あれ？ いつの間に惚気話に？ 会長の話はもう終わり？）

「その後もヒートアップしていく圭の話を、四宮は笑顔を固めて聞き続けるのだった。」

「彼がその日に帰ってきたのは、そうさせた影の功労者がいることを誰も知らない。」

## 第18話

白銀御行は秀知院学園高等部の生徒会長である。高等部にて彼を知らない者はおらず、一般入試枠から入って生徒会長になった人物として、中等部にもその話が回ってくるほどの話題性の持ち主。

テストにて、かの四宮かぐやを抑えての1位を取り、それ以降その座を保ち続けている彼は、他の誰もが真似出来ないほどに努力を積み重ねる男だ。日々努力を続け、元外部生という風当たりを物ともせず先頭に立つ。それが白銀御行という人物なのだ。

そんな彼は娯楽を軽んじる人物でもない。自らが生徒会会計にスカウトした後輩の石上優。彼の影響もあつて漫画を読むこともあるし、ゲームをすることもある。勉強一筋のように見えて、周囲との歩み寄りも忘れない。その点がまた、彼の支持率の支えともなっている。

本日、白銀御行は本屋へと足を運んでいた。漫画コーナーや小説類には目もくれず、石上に教えてもらった漫画だけは視界に入るもののその誘惑を断ち切り、彼が足を止めた場所は参考書コーナー。日々のほとんどが勉強の彼にとって、本屋もまた勉強のための場所。図書館も同様だ。

さて、この本屋はある理由によって学生たちに人気の本屋だ。それは、本屋の中にカフェがあること。買ってすぐに本を読むことができ、静かな環境から勉強も可能。勉強の鬼である御行からしても、なかなか良い場所と言える。

しかし、彼は今この瞬間だけはこの場所を良い場所とは言えなかった。

「あれ？ 白銀くんだろ。久しぶりだね！」

「えーっと、たしか四宮のところの。スミシー・A・ハーサカさんだったか」

「あつ、覚えててくれたんだ！ 嬉しいな」

「まあ……」

(前は四宮のことで頭がいっぱいだったが、彼女の名前何か引つかかるんだよな)

それが何なのかイマイチ思い出せない。あと少しで思い出させようなのに。そのむず痒さを感じながら、御行はハーサカと話を続ける。

「前と印象が違うな」

「そりゃあ今はオフだもん。ずっと肩肘張ってたら疲れちゃうよ」

「はは、たしかにそうだよな。俺の友人も使用人は大変だって……あつ」

「どうしたの?」

「いや……」

(ハーサカってあのハーサカか! いや待て!もしかしたら別人かもしれないし……!)

今日の前にいるスミシー・A・ハーサカが、光上から聞いていたハーサカであったとするならば。今この瞬間はあまりよくない状況なのかもしれない。

頼むから違う人であってくれという願いをしながら、光上から聞いたハーサカの外見的特徴を思い出す。

北欧の特徴である金髪と澄んだ青い瞳。肩甲骨あたりまでの長さの髪。一部は短く三つ編みにしていて、性格は明るく距離感が近い。

(いやこの子そのハーサカっぽいぞ!)

否定のための材料探しが、確定情報を集めているだけのものだった。

光上と御行はそれなりに話す中だ。2年生になってからは頻度こそ減ったが、1年生の頃は今よりも会って話すことが多かった。その話は勉強面であったり、相談事だったり真面目な話が多かったのだが、雑談だつてもちろんしていた。

その内の1つが、「気になる相手はいるか」というもの。これの話をしたときに、御行は光上に四宮のことをバレたのだが、反対に収穫もあつた。

「気になる人か。いないわけじゃないけど」



「おつ、誰なんだ？俺は言ったんだから教えてくれよ」

「お前の場合自滅じゃん……。まあ……。白銀なら教えるか」

「誓って他言はしない」

「そこは信用してるさ。……。スミシー・A・ハーサカ。俺が気になってる人の名前だ」

「スミシー……。その人この学園にいたか？」

「いない。少し前に機会があつて知り合つたんだよ」

たしかそんな流れで聞いた。それを御行は今になって思い出す。あの光上が気になると言つた相手。それはひと目見てみたいものだと思つていたのだが、実際にこうして会つてみると後ろめたさがある。

いや何もしていないというか、ただ出会つただけなのに。これもすぐに別れたら何も問題はないわけで。

「かぐや様から聞いてたけど、白銀くん本当に勉強熱心なんだね」

「ん？ ああまあ……」

「それに比べて私は俗っぽいっていうか……。参考書の1つでも買えばよかった。恥ずかしいな」

「いやそんなことはないと思うが。PCが好きなんですか？」

（つて！俺の方から話振つてどうする！）

だがしかし。御行にそんな対応は難しかった。ほぼ初対面に等しい相手にそれは失礼過ぎる。相手になんの落ち度もないのにそんなことはできない。他にも、ハーサカの話術によって誘導されているものもあるが。

「ノートパソコンが欲しいんだけど、どれがいいかわからなくて……」

ダウト。彼女はその手の分野の知識が豊富である。パソコンも仕事の合間に自作するし、シュシュやベレー帽も改造している。

「そうだ！ こういうのつて男の子の方が詳しいし、白銀くんが選んでよー」

「いや俺も詳しくはないんだが……」

「それよりも私よりはマシだし、ここはカフェがあるからちよつとだけ教えてほしいな」

「……まあ、少しの間なら」

「やった！」

（いや何してんだ俺!? 何も良くないだろ!）

人は頼られることに弱い生き物である。教えるという立場はどうしても心地が良い。最近できないことが露見してきて、その度に藤原に教えこまれてる御行は、教える側になれる立場に飢えてきてたのかもしれない。

男女がカフェで2人きり。制服でのそれとなると、周囲からは「放課後デート」として映る。事実無根なわけで、御行には好きな人が別にいるのだから、これは全く当てはまらない。それなのに、友人の気になってる相手と2人になってしまっていることに、御行は何とも言えぬ罪悪感に襲われていた。

（いや落ち着け。こういう時こそ冷静にだ。光上からあまりハーサカさんの話を聞かないし、もしかしたらなかなか会えていないのかもしれない。それなら!）

この機会にハーサカのことを知り、それを光上に教えてあげる。御行はその方向で行くことにした。四宮回りでは世話になってばかりなのだ。ここらで借りの1つでも返していこう。

この時、相手が光上でよかったと御行は思っていた。もし、彼女に飢えている某クラスメイトが相手だったら「なんでお前がそこまで知ってんだよ!!」とか言われかねない。その点光上は安心だ。情報として取り入れてくれる。

カフェでコーヒーを注文し、ハーサカと席に着くまでの間にそこまでのことを決める。かと言ってガツガツいくのもおかしな話。今回は彼女の方から声をかけてきたのだ。それに答えていきながら、あくまで自然な流れで聞ける範囲を聞こう。

まずは彼女の制服について触れる。フィリス女学園の制服で、ハーサカはそこに通う2年生。つまり御行と同じ年で、四宮家へはOBの紹介でバイトとして行っているのだとか。

「あれバイトなんだ……」

そんなバイトがあるか。それなりの富裕層ならそう思うだろう。

しかし御行は富裕層の常識なんて知らない。そういうパターンの使  
用人もいるのかと納得している。バイトの経緯をOBの紹介と言っ  
ているのも大きい。

「バイト代が貯まったし、今までは親のパソコンだったけど自分のパ  
ソコンを買いたくなって思ってた」

(親思いのいい子じゃないか。わかる。負担はかけたくないよな)

御行はハーサカの話すことを鵜呑みしていた。今も「これは光上に  
とつてもポイント高い話じゃないか？」と収穫のある話に内心喜んで  
いた。

ハーサカ側には、御行のことならそれなりに情報がある。その情報  
を元に、共感を得やすい話を作っておいた。嘘っぽさなんて演技で隠  
せるため、怪しまれることもないのだ。すべて計算づく。ハーサカは  
本気でプランを練っていた。

「パソコンでどんな事をしたいんだ？」

「レポート作成に使いたいけど……。あ！動物の動画とかみたいか  
な！子猫とかテレビで見ててかわいいっていつも思うし！」

「猫っていいよな」

「白銀くんも好きなんだ？」

「犬と猫なら断然猫派四宮だからな」

心の声が脆に出ていたことには動揺したが、変なことを言ってるわ  
けでもないからそのまま続ける。将来猫を飼ってみたいとか、猫を飼  
う時に何が必要かとか話が脱線。一周回って2人で「猫はかわいい」  
という結論に至ったところで、パソコンの話へと戻っていく。

「動画を見るくらいならしたいのPCでできるはずだ。CDの読み  
込みとかなら変わるかもしれんが」

「なるほどね。そこは気にしてないし、デザインとか軽さにしよつ  
かな」

「重たいと持ち運びに苦労するもんな」

「うん。持ち運びは楽にしたいよ。教科書とかも全部電子版になれ  
ばいいのよ」

「そこは俺は紙媒体派だな」

その流れで書籍類は電子派か紙媒体派かの話に。御行は電子版のメリットを認めるものの、紙媒体で読む方が好きだということ、目が疲れないという点を推していた。ハーサカは持ち運び以外特に拘りはないようで、どっちもそれぞれいいよねってスタンスらしい。討論にはならなかった。

話は発展ではなく転化して、御行がハーサカの勉強を見る流れに。ハーサカの疑問点を御行が丁寧に教えていた。

(やっぱ教えるのって楽しいな)

最近味わつていなかった感覚に喜んでもいた。兄妹なら教えることがあるように思えるが、圭が反抗期であることと、1人で勉強できるがために教えることはない。光上もそれは教えながら実感していたことだ。

「ここまで理解してるなら教えることもないと思うが……。フィリスでもトップレベルじゃないか?」

「いやーいっぱいいいだよ。1日10時間は勉強してるもん」

(10時間!? お前も同じ道茨の道を歩む同志なのか!)

思わぬところで仲間を発見。その苦労について語り合いたい気持ちもあるが、ハーサカは女子だ。この道を進んでいることへの心配が勝る。

「それを続けていると健康に——」

「すう。すう……」

気遣いの言葉が届く前に、ハーサカは眠りについた。しかも寝顔を御行に見せるやり方で。

(これ光上には言えねえ!!)

たいていの男子なら女子の寝顔はご褒美だろう。しかし御行は事情が異なる。彼女のこんな無防備な姿を見てしまったことに焦りしか感じない。

ハーサカが起きるまでの間、気持ちを落ち着かせるのも兼ねて読書始める。時間は有効に使うのが御行だ。1分だろうと無駄にするようなことはしたくない。

そうして3時間経った頃、ハーサカは目を覚めた。もちろん寝たフ

りではあったのだが、これも作戦の内。

「あれ？ 私寝ちゃった!? うわぁ……恥ずかしい……」

「一応起こそうとはしたんだが……」

「私のこと置いて帰ってもよかったのに」

「いや無防備な女の子を放っては帰れんだろ。勉強疲れは努力の証だ」

(仮にそんなことしたら光上がさすがに怒りそうなんだよな！)

「白銀くん……」

御行の心の中での叫びなど関係なく、ハーサカは恋に落ちたつぽい乙女の顔を浮かべる。その顔に動揺しない者など存在しない。たとえ好きな人がいようとも、小さな波紋ぐらいは心に発生する。

そして、告白というのは相手に本物だと思わせるほどに断られにくい。ハーサカは意図的にその状況を作り上げていた。

「ねえ、白銀くん。試しに私と付き合ってみない？」

さらにここで概念を希薄化させる。「お試し」という言葉ほどハードルの低いものはない。初めてやるゲームだって、体験プレイのあるゲームがあればそつちに手が伸びる。体験授業も同じ、習い事もそう。「お試し」とは人の警戒を薄めるのだ。

「もちろん私たち知り合って間もないし、友達9割彼女1割って感じで。海外だとお試しデート期間があつて、それでお互いを知つてから付き合うか決めるって言うし」

さらにここでハードルを下げにかかる。日本では珍しいことだろうとも、海外なら当たり前だというデータを示す。彼女の容姿と名前から、そつちの文化に慣れていると思わせることも可能。ハーサカは手を緩める気などサラサラなかった。四宮かぐやに男を落とせることを示すために。

「ごめん。俺好きな女の子がいるんだ。だから付き合えない」

「……そうですか」

「それに、君は俺よりも相応しい人がいるはずだから」

「……。あなたの恋が実ることを願ってます」

御行が言ったことには触れず、荷物を纏めて店を出る。ある程度歩いたところで、後ろから四宮に声をかけられた。

「ほれ見た事ですか。会長はやっぱり手強いでしょう？ 早坂に落とすことなんてできるわけ——」

「言つてないし」

「へ？」

「誰も1日で落とせるなんて言つてないし！ そもそもかぐや様がやれつて言うからやっただけだし！ こんなやりたくなかったし！」

悔しさの爆発。地団駄を踏んでまくし立てる早坂に、四宮も言葉を失った。本気で言つてることがわかるから。

「ご、ごめんなさい……」

だから謝るしかなかった。

「それに……」

「それに？」

さて、早坂の胸中には戸惑いもある。落としに行くこと自体は本気だったが、気持ちは遊び感覚。

それなのに、付き合ってみないかと聞いたその瞬間。胸に小さな痛みが走ったのはなぜなのか。

それを思い出し、今出そうになった言葉を寸前で留める。

「……かぐや様より迫れたことには変わりはありませんので」

「どういうことよー！」

時間がさらに流れて、御行は家の前で光上に電話していた。今日のことを報告していたのだ。内容を選んではいるが。

「とまあ、わかったことはこんな所だな」

『ありがたいっっちゃありがたいけど。四宮さんがいながら他の女子と数時間で仲良くなり過ぎじゃない？』

「んぐっ！ その点は言わないでくれないか……！」

『俺はそこまで関係ないからいいけど。……白銀。お前から見てハ』

サカさんの印象はどうだった？」

「ふむ」

「なんだかんだ気になるのか。光上にも思春期の男子らしいところがあるもんだ。そう思いながら御行は率直に印象を伝えていく。」

「日本よりも海外での感覚が強いのだろう。距離感の近さもそれに由来してると見ている」

『そういうことじゃないんだが……。とりあえず白銀が隠したがってることについては触れないでおく』

「……はい」

(これ、バレてんじゃないかね?)

## 第19話

秋といえれば何を浮かべるか。運動の秋。食欲の秋。勉強の秋。秋さえつけとけば風情がある気がしてくるのは日本語の魔力か。日本語ってここまで単純だっただろうか。「漢字は力強く、ひらがなは柔らかい印象を与える」とされているように、文字には力があると言えるのだろう。

漢字はともかくとして、秋に対する印象は何か。春ならば出会いと別れの季節。夏は開放的で、冬は幻想的か。それでは秋はどうなのか。秋は葉の色が移りゆく季節。真っ赤に染まる紅葉や黄金色のイチヨウ。どこか儂げな印象がある。

というよりも、秋ほど自然環境に目が移りやすいのではないだろうか。紅葉やイチヨウもそうだが、山の幸は秋に実る。地上だけでなく空でも、秋となれば中秋の名月こと十五夜だ。十五夜に月見をする人も多い。この時ばかりは月に代わってお仕置きする例のあの人も団子食べてる。名前を言っただけはいけないあの人も喉に詰まらせる。

さて、生徒会長こと白銀御行は大の天体好き少年である。将来は天文学の博士になりたいと思っただけなら宇宙そらが大好きだ。

「月見するぞー!!」

だから理性が弾き飛び、『生徒会長白銀御行』から『夢見る少年白銀御行』にジョブチェンジぐらいする。その変わりように四宮も藤原も戸惑うものの、石上は月見に賛成だった。

「生徒会の任期ももう終わりますからね。無茶できるのも、思い出されるのもこれが最後でしょうし」

「そう……ですね」

「そういうことなら、私も賛成です！ 楽しそうですね！ 月見団子も用意しましょうー!」

「藤原先輩。太りますよ」

「なんでそんな事言うの!?!」

お団子を軽く食べるぐらいなら大丈夫。いや、夜食自体がよくな



い。そんなやり取りを横目に、四宮は会長席へと目を向ける。こんなに子供っぽい御行を見るのは初めてだ。微笑ましく思える。

「つていない！ 会長はどこへ!？」

「あれ？ 本当だ、いないですね。お手洗いでしようか？」

「その可能性も考えられますが、許可取りに行ってるんじゃないですか？ 準備はされてますけど、許可を貰ったとは言ってなかったですし」

「そうですね。許可は降りるでしょうけど、私も一応校長室に行ってみます。2人はここで待っていてください」

「分かりました。会長が先に戻ってきたら電話しますね」

「ええ。お願いします」

生徒会室から校長室へと向かった四宮だったが、ここに1つ盲点があった。「あの校長が校長室でじつとしてるわけがない」ということである。校内を散策してポケモンを集めている校長だ。授業中でも特に仕事がなければ歩き回っている。

そんなわけで、四宮は無人の校長室を目指しているわけである。

では御行はどこへ行ったのか。これは石上の推測が当たっている。月見をするために、夜間でも学校に出入りできるように許可申請を出しに行っているのだ。問題はその相手。学校の最高責任者は基本的に校長である。幼稚舎から大学まで、それぞれの敷地はそれぞれの長が管轄する。その上に学園全体を纏める学園長がおり、さらにその上に、学園の運営を担う理事会を纏める理事長がいるわけだ。

「月見をしたい。許可をくれ」

「友達に立場を利用される日が来るとは思ってたなかった」

御行は光上に連絡を取り、校内に残っていることが判明すると早速その場に訪れていた。もちろん月見をするために。

探しくい校長より、連絡が取りやすい理事長の息子に許可を求めらるほうが楽だ。しかもあの校長と光上は親族。手早く許可を取りたかったら光上に頼む方が断然気が楽であり、あっさりとして許可を取れる。

「今夜はきれいに晴れるようだな！ 月はもちろんのことだが天体観

測も同時にできそうなんだ！　これはもうやるしかないだろ！」

「わかったから落ち着け」

「むっ、すまない。ここまで条件のいい日は近年なかったのな」

「曇ることが多いからな」

いくら光上が理事長の息子とはいえ、許可証類を持ち歩いているわけもない。それらは職員室だったり、校長室だったり、はたまた事務室に置いてあったりする。現在地は図書室の近くで、ここから近いのは職員室だ。だが、いちいち説明するのも面倒があったりする。理事長の息子だろうと、立場を乱用できないようになっていくわけ。結局教師に申請しないとイケない。

これをショートカットできるのが、校長への電話である。

『モシモシ。どうされましたボーイ』

「生徒会が今夜月見するらしいから、許可証出しといて」

『ホウ。それは実に美シイ事で。青春とはかくあるべきデスな。これぞまさしくワンナイトラブ』

「使い方間違ってるぞ」

わざとなのか天然なのかイマイチ読めない。ひとまず間違ってることだけを指摘しておいて、校長室に戻るようにも言ってお話を切った。

「校長室行って許可証貰ってこい」

「すまない。助かった」

「これぐらい構わんけど。夜間の校内は気をつけろよ」

「どういうことだ？」

「正門と生徒会室と屋上の間での最短ルートはセキュリティ外させるけど、それ以外は稼働するから。間違っただけを通ったら捕まるぞ」

「……肝に銘じておく」

仮に間違えたとして、その後パニックに陥ったら最悪だ。その勢いでセキュリティに引っかかり続けると、ミンチコースになりかねない。それは言っただけは楽しみに水を差してしまうし、セキュリティのレベルも下げさせる予定だ。

不安なのは藤原だが、そこは御行たちに制御されることを願うしか

ない。一応自分からも言っておくかと考え、メッセージを入れるのだった。

「そうだったんですか。兄がご迷惑をかけてすみません」

「あはは、迷惑とは思ってないよ。来年はこうもいかないだろうし」  
「……そうですね」

御行から月見をすると聞いた圭は、その旨を父親にもそのまま伝える。晩御飯をどうするかとか、些細なことでも重要だったりするのだ。しかし仕事から早く帰ってきていた父。既に3人分の準備をしてしまっていた。御行の分が余ってしまう。

そこで白羽の矢が立ったのが光上だ。ちゃっかり連絡先を交換していた父に圭は驚愕し、パニックになっている間に話が進む。せつかくのお誘いだからと光上が承諾して晩御飯を食べに来ていた。

「うちの御行とは仲良くしてくれているんだってね」

「そうですね。クラスは違いますが」

「ふむ。同じクラスだったら御行の様子も聞けたんだが……」

「生徒会で書記をしている子なら同じクラスですよ」

「あー。圭が千花姉えって呼んでる巨乳の子ね」

「パパ他人の娘をなんて覚え方してるの!」

圭の肩パンが父親を襲う。食事中ではあったが、実の親の口からあんな発言が出たのだ。これは不可抗力である。原因はどう考えても父親にあるのだから。

「そちらさんにも一度はご挨拶しておきたいところだが……」

「しなくていいから!」

「しかしだな。娘が何度も泊まりに行ってるんだ。一言ぐらい挨拶をするのが常識だろう」

「よくその口で常識を語れたね!」

「ところで圭。彼の前だがいいのか?」

「ふあっ……!! ううっ……!!」

父親に完全にペースを崩された。家の中というのも要因だ。いつも気を抜いている家で、ボロを出さずにい続けるという方が無理な

話。せめて2人とかなら耐えられたが、父親爆弾がいるのである。起爆させないように火消しに回るのが手いっぱい。その結果、外では見せない様子を晒してしまっている。

白銀兄妹は、いつそ父親という存在自体誰にも知られたくないとすら思っているのだが。光上にはもう知られてる。それなら、極力変なことを言わせないように立ち回るしかない。しかし家での自分の様子を見せるのは恥ずかしい。

その恥ずかしい姿を、たった今完全に光上に晒してしまった。

羞恥に震える彼女は、今すぐにでも部屋に閉じこもりたかった。しかし食事中であることと、光上が来客していることもありそれはできない。目尻に涙を溜めながら必死に堪えていた。

「俺はむしろ、違った一面を知れてよかったと思ってるよ」

「……そう言われても……」

「親子で自然に接せられるのは良いことだと思っから。仲がいい証だよ」

「あつ……」

光上の両親はフランスにいる。それは彼が初等部に入学する年からそうだった。夏休みはフランスに滞在するもの、こうした何気ない日常での親子関係は尊く見える。彼は父子家庭であっても、白銀家が純粹に良い家族だと思った。

「ハッ！ それなら俺をパパと呼ぶか」

「名案思いついたみたいだな調子で何言ってるの!？」

「パパはちよつと……。せめてお義父さんですかね」

「光上さん乗らないでください！ この人を調子に乗らせないで！」

「気が合いそうだな晶くん。せつかくだ、圭の指のサイズを教えておこう」

「何を教えようとしてるの!? とうかなんで知ってるの！ キモいし!!」

「あははは、楽しい家族だね」

「もー！ 私は疲れますよ……」

ぶくつと頬を膨らませ、光上からも父親からも視線を逸した。圭は

これ以上振り回されたくないとして、黙々と食事を取り始める。今は口煩い兄もいない。晩御飯と一緒にジュースを飲んでも文句を言わない。

箸を進めながらチラツと光上の様子を見る。今も父親との会話を続けているが、さつきまでのようなおかしな会話はない。なんなら漫画の話をしていて、すっかり打ち解けていた。光上がここにいることへの違和感があまり仕事をしない。あっさりこの場に溶け込んでいる。

圭はそれに安心した。もし居心地を悪く感じられたらと、嫌な想像もしていたから。

本当は、この状態がある意味怖いものだというのに。

「今頃御行は月見を楽しんでいるか。その程度の息抜きは必要だな」

「あれが骨の髄にまで染み込んでたら……、社会人になった時が心配ですね」

「そうかな？ 御行は愚かなことはしない。必要だから全力でやる。そこを分けられる見識は持っているさ」

「……意外と見てらっしゃる」

「さては失礼な認識をしていたな？」

「いえいえ」

愉快的父親だと思いはするも、残念な父親だとは思っていないかった。単純に、聞いている限りでは、子への理解をどこまで持っているか推測できていなかったただけだ。おそらく、実の子である御行にも、この場にいる圭にも、想像できないほどの理解をこの父親は持っている。

不思議と感銘を受けた晩御飯の後。せつかくの名月なのだからと光上と圭は外に出ていた。外と言っても家から近い公園。2人はそこにあるベンチに並んで腰掛けていた。

周囲の街明かりこそあるが、月を見る程度なら申し分ない。星も有名な星座あたりならすぐに発見できる程度に見えている。4等星あたりから怪しそうだ。

「見ようと思えば案外見られるものですね」

「星座の星は明るいものばかりだからね」

「夜空いっぱい星は、都会から離れないと駄目ですよ」

「うん。でも、見てみたいね。北極圏だとオーロラとか見られるし」

「オーロラですか。光上さんはしっかり防寒対策しないと駄目ですよ？」

「はは、それもそうだ」

星空を眺め、あまり詳しくない天体の知識をお互いに出しながら星座を見つけていく。お互いに宇宙へと指を伸ばし、その指先の星を見るために顔を近づける。自然と2人の距離は無くなっていく。

光上はそれに気づかず宇宙を見つめ。先に気づいた圭は、早まる鼓動を感じながら意を決した。

「白銀さん？」

「こ、こうしたら……温かい……ですよ？」

光上の右腕を絡める。両手で抱きしめるように絡め、自ずと体同士もぴたつとくっつく。顔から火が出るほど熱い。段々と秋も深まっ  
ていつているものの、この夜風では冷めることもなさそうだ。

「そう、だね」

なんとか言葉を紡いだ。圭が大胆なことをするとは思っていなかったため、思考が止まりかけていた。

右腕はピクリとも動かさない。それでも、手は動かせる。

そつと彼女の左手と絡めた。これには彼女も目を丸める。

「こうしたら、もう少し温まるかな？」

「……はい」

せつかくの名月だったのだが、お互いにそれを見る余裕をなくした。

それから10分は経過した頃。圭は光上にお願いがあったことを思い出した。彼女にとっては大事なお願い。

いくら光上でも、それを受けてくれるかは怪しいお願い。

彼女は、照れて逸らしそうになる視線をなんとか堪えながら、光上の目を真っ直ぐ見つめる。

「生徒会……終わりますよね」

「うん。中等部も同じ時期だったね」

「はい。……それで……、私は内部進学なので、来期も生徒会に入ります」

「そっか。決めてるんだ？」

「お誘いを頂いてて……。内申にも加点されますから」

「いい判断だと思うよ」

悪くない判断だ。秀知院学園での生徒会経験は、他の学校とは全く異なる。はつきり言って箔が付く。中等部であれ、2期連続ともなればそれは確かな実力の裏付けだ。圭はその能力だけでなく、人気もあつて候補者たちから声をかけられている。

要は、誰が生徒会長になろうと、圭が生徒会に入るのは確定だ。ちなみに、「生徒会長になつたらデート権確保」という、圭本人が知らない案件もあつたりする。

それはさておき、この話は圭のお願いのための前置きだ。

圭の淡い期待は、今であろうと消えてはいない。

「光上さんも、来期の生徒会に入ってください……！」

「え……。ごめん、それは――」

「私の我儘なのはわかってます！ 光上さんのポリシーにそぐわないことも！ ですが……それでも……！ わたしは……光上さんともつと一緒にいたい……！」

「白銀さん……」

「お互いに生徒会に入ったら……、放課後も会えるから……だから……！」

ドキドキなお月見からも日が経ったある日。

光上は放課後に校舎内に残っていた。それは例のごとく早坂の仕事関係……ではなく、定期的な図書館での調べ物でもない。

彼は部活に属さない。委員会にも属さない。任期が終わった生徒会にも属していなかった。

彼は常に宙ぶらりんの状態で。だからこそ全方面に均等に目が行き届く。

しかし、これによって去年のこの時期は身動きが取れなかった。

裏の攻防がある生徒会選挙期間。

御行の大立ち回りは何も問題ない。本人の苦勞がやたらと大変そうだっただけだ。問題はその裏。御行すら知らない裏工作。それを光上は見逃すしかなかった。

なにせこの期間は特別。そういうことも立候補者陣営の能力と見なされるのだから。それを潰しに回れるのが、他の立候補者陣営。

もしくは——選挙管理委員会である。

管理委員会もまた「それを潰せるかは管理委員会の実力次第」とされる。つまり、この影響力が弱いほど、裏での攻防がエスカレートするわけだ。

「君が来てくれたことに感謝するよ。光上くん」

「いえ。今回は見逃せないだけですから」

【選挙期間——開幕】



## 第20話

その話は瞬く間に秀知院学園の高等部の間に広まった。

誰からも一目置かれながらも、表向きには不動を保っていた男。光上晶が選挙管理委員会に臨時で参加。

この情報に誰もが浮き足立ったが、「入ったところで何かあるっけ？」と首を傾げる生徒が大多数だ。それもそうだろう。誰もがわかつてるような駆け引きでは、裏工作とは言えない。多くの生徒は、表向きの活動とその人物への好感度から投票するだけ。見える苦労も攻防も、大変そうだなと漠然と思う程度だ。

せいぜい「光上が選挙管理委員会入ったなら、今年は真面目に演説聞かないとなあ」ぐらいの認識である。あの時間を面倒に感じる生徒にとつて、光上の参加は印象がマイナスにすらなる。あるいは「今年は何かわ変わるかもしれない」という期待か。

どちらにせよ、一般生徒たちはそれぐらいの認識なのだ。それと打って変わって、光上の参加に渋い顔をする生徒もいる。会長立候補者たちの裏仕事を担当する者たちだ。そのうちの1人、四宮かぐやは己の侍従である早坂愛と、その事について校舎内のある渡り廊下で話していた。

「あなたは どう見てるかしら？」

「どうとは？ 漠然としてますね」

「所感でいいのよ。あなたの考えを話してちょうだい。彼のことに ついては、私より近い位置で見てきたでしょ」

「彼のあれが演技でなければ、ですけどね」

「彼ってそんなことするの？」

早坂のその懸念に、四宮は眉をひそめた。光上晶は偽ることを嫌う人間だ。思ったことは正直に伝えるし、他人の嘘に敏感な方だ。思惑を混ぜた会話をすると、その裏側も感知してくる。

とにかく、彼と接する時に嘘偽りを混ぜることはタブーとまで言える。反対に、精神的に弱っていて、言語化できないけど「わかってほ

しい」という思いがある人にとって、彼ほどの適任者もないわけだが。

「誰に対してもフラット。敵を作らず、味方も作らない。それって、意図的にそうしないと駄目ですよね？」

「……見方を変えれば、誰に対しても偽ってる？ けれど……」

「はい。文字を見る限りではそういう見方が可能ですが、実際に会っている私たちからすればそれは間違っていると感じます。彼が正直に接しているのは誰もが知ること」

「今まで考えてなかったけど、考えるほど面倒な人なのね。光上くんって」

「まったくですよ」

彼は勝手に距離感を調整して接してくれる。個別で、その人にあつた距離を保つ。程よい距離の人間には、誰だって気楽に接することができるのだから。

相手のことは詳しく知らない。だけど話しやすいから友達のように感じられる。そんな絶妙な距離を保っているために、誰もが光上のことを考えない。表面的なことしか知らない。

現状では、そこを突破しているのが白銀御行のみで、知ったからこそそれを他言しない。

そこを恋愛のために突破したいのが白銀圭で、徐々に距離を詰めている。

そこを仕事のために突破したいのが早坂愛で、冷静に分析するほどにややこしく感じている。

「早坂が演技かを断定できないのなら、ひとまずそれは放置しましょうか。一番の問題は、彼が選挙管理委員会に入ったことよ」

「明らかに去年の選挙のせいなんですけどね。かぐや様張り切っちゃったから」

「し、仕方ないじゃない！ 私だって初めは大人しく会長の手伝いだけをするつもりだったのよ？」

「今はもう会長じゃないですよ」

「すぐに会長になるからいいのよ！」

断じて名前を呼ぶのが恥ずかしいわけじゃない。

名字だと余所余所しいし、けど名前呼びだなんて。とか考えているわけじゃない。違うったら違う。

肝心の御行はみんなを名字で呼んでるんだから、余所余所しいも何もないのだが。早坂は揶揄うのが楽しいからそこを指摘しないでいる。

「話を戻すわよ。去年は、あの生意気……少し礼を欠いた先輩がいたじゃない？」

「何も誤魔化せてませんよ」

「あの人たちが会長の邪魔をしたりデマを流したり、さらには私や藤原さんを困おうとしたから、仕方なく応戦しただけなのよ。これはむしろ正当防衛よ！ 自分たちの身を守るためだったの！」

「たしかに仕掛けてきたのは向こうからでしたけど。かぐや様……問題はその応戦の結果、相手が自主退学したことですよ。ノイローゼとかやり過ぎでしょ。そりや光上さんが重い腰を上げますよ」

「そこは相手の覚悟が足りてなかっただけで、私の問題じゃないわ」  
撃つていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだ。どこぞの世界一優しい嘘つきもそう言った。

つまり、四宮の言い分としては「やられたから防衛のために応戦した。これは正当防衛。攻防がエスカレートした結果、相手の度が過ぎてきたので、プチンときて本気で精神破壊にシフトチェンジした。それくらい耐えられる覚悟を持っていなかった相手に問題があり、そこまでのことをさせた相手の責任だ」ということになる。やり過ぎは正当防衛が成立しなくなるのだが、四宮家だから問題ない。

その言い分を光上が聞き入れないわけでもない。去年のことは光上も情報を精査して把握している。把握した上で、選挙管理委員会の抑止力としての働きが足りていないと判断したわけだ。

「そもそも、相手陣営の足を引っ張る行為なんて弱者のすることよ」

「かぐや様は違うと？」

「もちろん。四宮家の人間がそんなみみっちいこと……あの無能はさておいて、するわけないじゃない」

「これだからこの家族は」

「なににせよ。将を射んとする者はまず馬を射よ、なんてことはしないわ。馬を射る労力なんて使わない。初めから将を射ればいいだけ」  
今年も去年のような攻防なんてしない。仕掛けるなら初めから立候補者を潰しに行く。それが四宮かぐやが今年やろうとしていることだ。

「そう簡単にいきますかね」

「光上くんのこと？」

「はい。知ってますか？ 彼、今回は白銀元会長からの誘いを既に受けてるんですよ」

「……………はい？」

四宮は知らないことだった。なんなら光上との決着を、合法的に、お家関係なく着けられそうだと思っていたくらいだ。実は少し楽しみだったりしてた。四宮から見れば彼は存分に殴り会える数少ない相手だから。

しかし、ここで早坂からまさかの情報が飛び出した。好戦的な笑みを浮かべていた四宮が固まる。

「光上さん。白銀元会長が会長になったら、新生徒会の庶務になるんです」

「ええええええ!! 私聞いてないわよ!! とうか待つて!! 会長私より先に光上さんに声かけてたの!! なんで私にはまだ言ってくれてないの!?!」

驚愕からの嫉妬<sup>ジェラシー</sup>。

さつきまでの四宮家らしい顔はどこへやら。「氷の四宮かぐや」は引つ込み、「アホのかぐやちゃん」の比率が上がった。足元の床を何度も蹴りつける。今日の嫉妬の発散先は床のようだ。脳内では氷のかぐや姫もハンカチを引きちぎっている。

「かぐや様。これ相当キツイ手を打たれましたね」

「会長は私よりあの男の方が？ 同性愛者って説はまだ生きていたつていうの？ でも会長が私に惚れてるのは間違いないんだから。全員消せば会長の目に映る人間は私だけよね」

「さらつとアダムとイヴにならないでください。子どもたくさん産むつもりですか」

「会長は9人お望みよ！ 私三つ子までなら耐えられると思うの！」

「3×3とか考えないでくださいよ。誰でも身体持たないですから」

「名前を考えるのも大変ね。でもちゃんと1人1人意味を込めて決めてあげたいわね」

「そうですねー」

アホになった上に暴走し始めた。これを止めるための手段はいつたい何があつたか。それよりも面倒だなんて気持ちが強くなっている。この人このまま放置したい。

放置したいけれども、そうするわけにもいかないのがこの仕事の面倒なところ。馬鹿につける薬はない。

(……劇薬なら?)

1つの手段を思いついた。これなら正常な思考に戻ってくれるはず。

「あ、藤原さん」

「っ!? どこ!? 今の話聞かれてない!」

「嘘です。安心してください聞かれてないです」

「そ、そう。それならよかったわ……」

「私呼ばれました?」

「ひゃああっ!」

対象F出現。

安心した四宮の背後から出現した。これには早坂も驚いたものの、さつきまでの会話の内容から、藤原のセンサーに引つかかってもおかしくはないのかと分析する。生々しいのはあまり引つかからないはずなのに。他で恋愛話がなかったのだろうか。

「お二人は何の話されてたんですか?」

「ええっと……」

「白銀くんが光上くんを生徒会に誘ったって話だし。元副会長の四宮さんなら何か聞いているのかな。って気になったんだよね」

「あ〜! その話でしたか! たしかにびつくりですよね!」

「え、藤原さんも知ってたんですか!？」

「かぐやさんは知らなかったんですか？」

「うそ……私……何も聞いてな……」

「あ、でも私は圭ちゃんから聞いたので！ かぐやさんが知らないのも仕方ないですよ〜！」

(圭からも聞いてないわよ……。なんで藤原さんが……！)

それは親しみ度合いの違いなのだが、そこまで指摘しては死体蹴りになってしまう。真相としては、圭が四宮への連絡を緊張してできないだけなのだ。

四宮に追加ダメージが入りはしたが、話を光上の方へ戻すことは成功した。圭から話を聞いたという藤原が混ざったことで、むしろさらなる情報が入るかもしれない。

「藤原ちゃんは圭から何聞いたの？ ウチは生徒会に入ってたからかな、連絡来てないし」

「私もそこまでですよ？ みゆきくんが立候補するってことを話して、その流れで光上くんを勧誘するって言ったそうなんです」

「そういう流れなんだ〜」

「ご家族で学校の話をして、それでちょうど生徒会の話になったみたいですね。みゆきくんの中では、既に新メンバーの構想が出来上がってるみたいですね！」

「さすが元会長だし」

「私まだ声かけてもらってないんですけどね！」

四宮 かぐやは仲間を発見した  
藤原もまだ誘われていなかった。

この情報にパツと顔を明るくした四宮が、藤原の手を取ってその事について話し始める。旧メンバーよりも先に新メンバーに声をかけるのはどういふことか。これではまるで女を使い捨てる男のようじゃないか。

乙女たちの嫉妬はヒートアップ。

御行の風評被害が ヤリチンに昇格  
ランクアップ。

思考を捨てた早坂 お手上げ  
ハンスアップ。

「それなら白銀くんに直接抗議したらいいと思うし」

「なっ！ そんなことできるわけ——」

「それもそうですね！ 行きましようかぐやさん！」

「ええっ!? ちよっ、藤原さん！」

四宮の手を掴んで藤原は走り去っていく。まず御行がどこにいるのか把握しているのだろうか。きつとしていない。手当り次第に探すのだろう。校内中を走り回る羽目になる主人に合掌。ギャルモードからお仕事モードへと思考を切り替える。

「白銀さんが誘った。光上さんはそれを受けた。かぐや様は副会長の枠に収まるでしょうし……。どうやら光上さんは本気で裏工作の封鎖に乗り出したようですね」

白銀御行と光上晶は友人だ。光上と四宮が激突すれば、一番苦しむのは他でもない御行。光上も四宮もそれを踏まえてぶつかるとのことではない。つまり、四宮は直接的に行動することができない。本気で動く光上の嗅覚は侮れない。

「私がかぐや様のようなことはできませんし」

相手の精神を揺るがす。あくまでも平和的な交渉の末に、相手を辞退させるのが四宮かぐやのやり方。

それを考えうる限り最適の形で塞ぎに來られた。早坂が代わりに務められない役割だ。尤も、よっほど余計な出来事が起きない限り、白銀御行の人気は崩れない。敗北はありえない。その牙城を崩せる手段を、他の候補者は持っていないのだから。

直前の生徒会長という立場。それをこなしてみせた御行の実績は誰もが知っていて、誰にとつても新しい記憶だ。1年間やり切ったという事実。生徒たちの認識にも「白銀御行は会長に相応しい」と刷り込まれている。

光上を警戒する必要はあるものの、彼は抑止力としてそこにいるだけ。止めるまでが仕事。不安要素にはなり得ない。

「むしろ、不安要素は白銀元会長と、あなたですよ。かぐや様」

御行を確実に勝たせるための裏工作。今回は四宮がお願いしての出馬。四宮は何がなんでも御行を会長にさせる。裏工作をしなくても勝てる戦いなのに、主人はそれをしてしまうだろう。

その焦りが虎の子を起こさないことを願うばかりだ。



## 第21話

秀知院学園では数多くの部活動が存在する。日本で主流の部活動はもちろんのことながら、マイナーとされているものもあれば、TG部のように他では見ない部活も存在する。

その多様な部活動のうちの一つ、マスメディア部。おもしろ情報からゴシップまで何でもござれ。この部活動の対象となるネタは「書きたいと思ったこと」である。対処など不可能。彼女たちのパパラッチ力は学園随一。他にパパラッチなどいないから。

パパラッチとは言ったものの、彼女たちは礼節を弁えている。昨今すっかりと聞き馴染みある言葉となってしまうた残念なマスメディアこと「マスゴミ」。仕事ではなく趣味でやっている分、彼女たちのフットワークは軽く、物腰も柔らかい。無理のない範囲での取材を心がけ、相手と心地よいやり取りで終わらせるようにしている。

そんな彼女が今回行ったのは事前調査。調査内容はもちろん学生会選挙。立候補者は3名であり、現段階での支持率を割り出すもの。アンケート調査であり、回答を断る人も当然いる。ふざけて2人以上の名前を出す人もいたため、有効回答は絞られた。

その有効回答率は驚愕の11%!! 高等部の3学年合わせての11%である! その数は87名。3桁にもいかない悲しい結果。もう少し答えてほしいものだ。それでいいのか秀知院学園高等部。しかしこれが実状でもあるわけで、選挙への関心の薄さも表れている。「先輩ぶつちぎりじゃないですか」

「御行くんすごい人気ですね〜」

回答率こそ悲しいものの、この予測速報は情勢の参考にはなる。立候補者の1人である御行の支持率は脅威の50%超え。他2人を圧倒している結果である。選挙活動しなくても勝てるんじゃないだろうか。そう思える程の数値。

「いやあくまで予測だ。他の候補者の活動次第で大きく変わるだろう。油断はできない」

(いやこれ完全に勝ったろ！)

相変わらず面の皮が厚い御行だった。内心では勝利を確信している。

「潜在票が全部他に流れたら逆転負けだしな」

「怖いこと言うなよ！」

「光上くんこんにちははく」

「どうも、ご無沙汰してます」

「2人とも久しぶり。で、白銀はこれ見て油断してた」と

「油断なんてしてないって」

あくまで冷静なフリをする御行。彼の前にそんなもの無意味だと理解しているが、他2人相手だと話が別だ。その体裁を保つため、見栄を張り続けた。光上もその意図を汲んで話を合わせる。

「去年の予測速報を覆したのが白銀だもんな。そりゃあ油断なんてしないか」

「そんなこともあったな。あの時は必死で予測速報なんて見ていなかったが」

めっちゃ見てた。劣勢であることを知り、焦りに焦った。どうすれば票を集められるか考え、支持率の高かった過去の政治家たちの手法を調べ、短期間で身につけて実践。大立ち回りをすることにはなったが、それによって辛くも勝利を掴んだ。

それが去年の生徒会選挙のこと。四宮も四宮で、それに合わせて裏で動いていたわけだが、彼女にとっても苦い記憶である。

「当然ですけど、去年のみゅー先輩のことは知らないんで。そういう話新鮮で面白いっすわ」

「俺たちはそういう話をするタイプでもないからな」

「すごいや前生徒会メンバーはそのタイプばかりか。藤原さんは怪しいけど」

「私だって話していいことと駄目なことの区別はつきますよ」

「他人の恋話は？」

「聞きますけど言いふらしません！　そうする人のモラルを疑います」

「その場を爆撃する人がよく言えますね」

失礼ですねと腕を組んだところで石上からの横槍。その言葉は柔らかなボディに突き刺さった。可愛らしく頬を膨らませた藤原が石上に詰め寄り、石上は戸惑いながら後退していく。そのまま壁に追突し、藤原が壁ドンしているような状態に。石上、乙女顔になる。

「何を見させられてるんだ？」

「気にすることじゃない。考えたら負けの部類だ」

「慣れてるなあ。生徒会って本当に仕事してた？」

「常に忙しいわけでもないんでな」

仕事はしてた。忙しい時はその業務量に飲み込まれそうになりながら。

それはそれとして、忙しくない時期も存在するわけで、そういう時は息抜きもするわけだ。遊んでいたということに関しては否定しない。

「さて、他の候補者……本郷は同学年だし、さすがに多少は知ってるが。もう1人は1年生なのか」

「あ、僕に聞かれても答えられないですからね」

「なんの予防線だ？」

「ええつと、1年生の子は。伊井野ミコちゃんですね」

「伊井野!？」

「知ってんじゃない」

先程の予防線とはなんだったのか。他者との交流が、全くと言っていいほどなさそうな石上。そんな彼でもこの名前は知っている。伊井野ミコとは1年生の間では有名人なのだから。

「伊井野は成績で1位を取り続けている奴ですよ。まあ、有名なのは別の要因もあるんですけど」

「あの子も悪い子じゃないんだけどね」

「光上も知ってるのか」

「何度か話したことある仲だし」

「ちようどそこでビラ配ってます。僕が説明するより会ったほうがすぐ分かりますよ」

「ふむ……」

そんなわけで、御行たちはビラ配りをしている伊井野に声をかけに行った。敵情視察である。これは相手を知るために重要な行動。自分の競争相手がどういう人物なのか。それがわかっているのとわかっていないのでは、明確な競争心も出てこない。知らなければ、恐れるか過小評価するかだ。

「こんにちは伊井野さん。頑張ってるね」

「光上先輩。はい、選挙活動は大切な期間ですから」

「政治家の娘より政治家っぽいね」

「あはは光上くん。それは誰のことですか？」

藤原の指が光上の背中をグリグリと押し付けられる。この2人こういう仲だったつけなと首を傾げつつ、御行は伊井野に声をかけた。何やら上から目線なような気がしなくもない。

「え、この人1年生に対抗心抱いてる？」

「そんな引き気味に言ってやるな。実はちっちゃい男って見えてしまいうじゃないか」

「光上先輩それはやめたげてください」

「お前たちは俺の後ろで何を言っている!？」

御行でもこれは聞き流せなかったらしい。

片や地道に活動する候補者。片や珍道中を繰り広げる候補者。これは客観的に見たら後者の方がが悪い。御行たちのことだった。「ビラ配りか。たしかに政策を伝えるのに適してるね」

「やはり光上先輩はわかってくれるのですね！」

「光上くんの好感度高くないですか？」

「ふ、藤原先輩!？」

「私のことも知ってくれてるんだ」

「気づくのおっそ」

さつきから変なことをしていた者の1人なのに、伊井野の目には映っていないかったらしい。都合のいい視界だとか石上は思った。

「あの……もしよろしければ……。私が生徒会長になった暁には、藤原先輩が副会長になっていただけませんか！」

「ええー!!」

これには言われた藤原自身もびっくり。そのおかしな瞬間を目の当たりにした御行と石上も驚愕し、光上ですら驚いた。まさか、まさかの人事である。藤原の普段の様子を知っている人であれば、正気の沙汰とは思えない人事だ。

「なんでよりによつて藤原を選んだ!」

「この人のことを知ってたら絶対出てこないセリフですよそれ!」

「失礼つて言葉知ってますか2人とも?」

「いやいや藤原を副会長にするよりかは光上に交渉したほうがまだまともだぞ!」

「おっと、これは俺もまとも枠から外されてないか?」

歩く起爆装置と同じ部類に入れられたことに、光上は不服そうな顔をした。どちらかと言えば、御行の方がその部類に入るんじゃないかと言つてやりたい。話が逸れるから言わないでいるけども。

それよりも、仲間ですねと良い笑顔を向けてくる藤原に対応した。断じて同じ部類ではない。これほど不名誉なことがあつてたまるかと主張する。

「光上先輩には庶務をお願いしてるので」

「そうなんですか光上先輩!? 説明責任を果たしてください!」

「総理以外ではなかなか聞かないセリフを言われたな」

「話を逸らさないで!」

「逸らすつもりもないし。伊井野さんが言った通りだよ」

「光上だしなあ」

「みゆき君いきなり何納得してるんですか?」

「なに。俺は事前に聞いていたのでな」

元生徒会メンバーが、2期連続の会長を目指す御行に協力するのは自然なこと。会長を目指している伊井野の友人である大仏が、伊井野陣営にいるのも自然なこと。しかし、光上はいわば無所属だ。どこにも属さず、誰の敵にも味方にもならない。だからこそ、次期生徒会が決まるまで、自分の所属を決める必要もない。

誰が会長になろうとも生徒会に入れる。これまでの積み重ねと人

柄によって成立する手段。もちろん伊井野はそれを承諾済み。駄目元での勧誘だった。欲を言えば味方になってほしいものの、新生徒会に入ってもらえるなら十分な見返りだ。

「光上くんもなかなか手段取りますね〜」

「勧誘されたから応えただけ。来るもの拒まずだよ」

「くうう！ 光上先輩じゃなかったらプレイボーイとか言ってるに！」

「口に出てるぞ石上」

「まったく。貴方方は失礼なことばかり。そういう所にしか目が行かないんですか？」

「今言われるとグッとくるな……！」

伊井野は尊敬する先輩たちの評価が低いことに憤慨した。そこで、伊井野は最も尊敬する藤原千花のプレゼンを開始。彼女は優れた先輩なのだと言われ、石上に改めさせる。

伊井野曰く、藤原は過去のピアノコンテストで全国大会金賞の実績があり、3カ国語を話せるトリリンガル。それでいてレベルの高いこの秀知院学園で普通の成績を取る秀才。最後だけ褒めてないことは、伊井野本人の自覚がないようだ。

「藤原先輩は私が足元にも及ばない天才なんです！」

「会長……知ってました？」

「まあ、噂程度には」

「僕と同じ空っぽの人間だと思ってたのに……」

「私の人事はおかしくありません！ ねえ光上先輩！」

「え？ ……まあ……うん。そう、だね」

「あれ!? すっごい溜められた!？」

破天荒ぶりに目が行ってしまい、それでマイナス評価がついてしまうものの。藤原は仕事をやる時にはちゃんとこなせる。伊井野と藤原は、それはそれでバランスが取れるのではないかと考え、そういう生徒会もありだなと結論付ける。

しかし、一抹の不安が残るのも事実で、それがこの微妙な返しの原因となっていた。藤原千花の素は制御不能なのだから。

「と、とりあえずですね。予測速報ではあの票で劣勢ですが、理念は引けを取りません。今後の活動で覆してみせます。藤原先輩を取り入れるためにも！」

「絶対に負けません！」

「ナチュラルに寝返るなよ」

「藤原さんは尻軽だなあ」

「あ……」

裏切り。それは光上が嫌う行為である。藤原はノリで過ごしてる部分もあるため、これで完全に裏切ったとは言えない。しかし、それはそれで光上のセンサーに引つかかるわけで。藤原は伊井野から貰ったビラを片手に一目散に逃げ、光上も伊井野からビラを受け取ってから追いかけるのだった。

「お二人が新生徒会に入っただけなら……」

「ミコちゃんまずは地道な活動から頑張らないと」

伊井野が想像の世界に旅立つのを大仏がすぐさま止める。

それを見た御行は微妙な顔をするしかなかった。どうやら彼女は憧れる相手を過大評価してしまうようだ。

「僕としては、光上先輩が生徒会に入ることを決めてるのが意外ですね。あの人、どこかに所属するのを避けるじゃないですか」

「そうだな。生徒会は名目上中立ではあるが、生徒会という組織に所属することになるのも事実。光上が断る理由の半分がそこだ」

「半分？」

伊井野たちと別れ、御行と石上は廊下を歩きながら光上のことを話していた。石上が知ったのもつい先程のこと。さつきは驚きの連続で聞くタイミングを逃したため、今こうして話題に出している。

「もう半分は、光上曰く向いてないって話らしい」

「？ 向いてないことはないと思いますけどね」

「誰もがそう思うさ。俺もそう思った。光上を知るまではな」

「勿体ぶりますね。まあ、本人がいないところで踏み込んだ話をするのも気が引けますし。今は聞かないでおきますけど」

「そうしてくれると助かる」

石上は地雷を避けられるタイプだ。他の人よりも敏感にそれを察知できる。もつとも、相手が自覚していない地雷にはしっかりと踏み抜くこともある。今回は察知できる地雷。石上はそれを避けることにした。

「光上が勧誘を受けてくれた理由は、納得できるシンプルな話だったな。あいつ、誰の味方もしないようにしてるけど、好き嫌いはあるし」  
ロボットなんかじゃない。他の人と同じように感性だって存在する。こういう人間が好きで、こういう人間が嫌い。こういう人とはウマが合う。

誰にだってそれはあって、光上にも当然それがある。

「光上は、ひたむきに努力する人が好きなんだよ」

「あー。なるほど」

そうやって思い返す。光上を新生徒会メンバーとして勧誘した時のことを。

「去年断られておいてなんだが、無謀を承知で今回も来た。俺が会長になったら生徒会に入ってくれ！」

「いいぞ」

「簡単には承諾して……………え？　今なんて？」

「だから、生徒会の勧誘を受けるって」

「……………マジで!?　去年は頑なに拒んだのに!?　なんで!?!」

目を丸くする御行から視線を逸らし、頬を搔いてから意を固めたように向き直る。

「あの子の涙には勝てないからな一歩も引けない事情ができてな」

その顔は、御行がよく知る覚悟を決めた顔だった。



## 第22話

光上品という存在は抑止力になる。裏での駆け引きが得意な連中は、光上が選挙管理委員会に入ったことに嗤った。彼がいる中で、どういう裏の攻防が起きるのかを愉しく見届けるからだ。

はつきり言えば、四宮かぐやがどう動くのかの観察だ。去年と今年では候補者のタイプが大きく異なる。品行方正、曲がったことを許さない伊井野ミコ。一定の人気を持ちつつ、手堅く事を運ぶ本郷。そして、四宮かぐやを擁する前会長の白銀御行。

人のタイプを二分するのなら、この3人は表側<sup>光</sup>の人間だ。相手を徹底的に嵌めるようなことを画策することもない。見えやすいもので争い、大衆をどれだけ引き込めるかでの勝負。悪いことが大好きな連中をまず認識していない。いや、認識していても、そこを動かそうとはしない。

それは賢いやり方だ。一部の人間を引き込むより、その手のことを知らない多くの人間を引き込んだ方が票を集められる。多数決で決まる以上、「数」は絶対だ。

何よりも時間が足りない。前会長という印象により数歩リードしている白銀陣営ならともかく、自前の認知度から始まる他の陣営ではそこに割く余裕はない。協力者が多いならまだしも、伊井野も本郷も手伝ってくれる人員は限られる。

だから、その票を回収するのは実質的に四宮かぐやの独壇場だった。少数であろうと一定数。それを不確定な票ではなく、白銀御行が確実に獲得できる票にしない手はない。

だが、裏工作はそこで終わらない。今回は自分の発言が引き金となった白銀の出馬。なんとしても会長にさせなければ、四宮家の名折れ。一定数の確保ぐらいなら光上も見逃す。選挙活動の一環として、選挙管理委員会が手を出せない範囲だ。

四宮かぐやはそこからさらに手を打つ。将を討つ。

要は——候補者を狩る。

「お忙しい中お呼びして申し訳ありません。本郷さんにお話がありました」

「選挙に関わる話と言われたら断れないよ」

「さっつ、まずはお座りください」

まずは、比較的狩りやすい本郷に狙いを定めた。同学年であることから、伊井野より呼び出しやすいというものもある。他には、伊井野に関する情報集めがまだ終わっていないということも。

そんな事情はさておき、四宮は内心少し焦っていた。

今からやる交渉が、光上のセンサーに引つかからないわけがないのだから。

わかっけていて行こう。覚悟の上だ。光上がここに来るまでの間に、本郷という対抗馬を本人の意志で消し去る。

(足止め頼むわよ。早坂)

そう、結局手段としては彼女を頼るしかないのだ。四宮かぐやが学園内で最も信用できる人物。このやり方に眉一つ動かさず同意し、遂行してくれる侍従。

時は遡り、早坂は放課後にしつかりと光上を捕捉。同じクラスなのだから動向はいち早く察知できる。この選挙期間とは関係なく、夏休み前から何度も放課後を共に過ごしている。それと同じように誘い出せばいい。

「早坂は他にもやることあるんじゃないの？」

誘い出すこと自体はあつさり成功する。光上は可能な限り他人の誘いに応える人間だから。それに加え、相手が早坂であるとより確実性が増すのだが、それは周囲の誰も気づいてはいない。

誘いにあつさりと応じ、いつもと同じ空き教室で椅子に座る。普段は机に対して横を向き、二人の間にある机にタブレットを置くのだが、今日は向かい合うように座っている。生徒会の任期が終了しているのだ。タブレットで生徒会室の様子を見ても仕方がない。

しかも、これから四宮が本郷を呼び出すのだから、その場面を見さ

せるわけにもいかない。

「お気遣い感謝しますが、優先順位をつけているのでご安心を」

「安心ね。俺をここにいさせたい理由があるのに？」

「駄目ですか？」

「四宮さんが何かしようとしてるなら——」

「私があなたと一緒に居たいと思うのは、駄目ですか？」

「えっ……」

バレるのは当たり前。光上と対面した状態で、しかも今の時期に呼び出して怪しまれない方がおかしい。彼は甘い人間だけで、裏側を知らない人間ではない。光があれば必ず闇ができる。表裏一体のそれが、どこにだって存在することを知っている。

だから、四宮のことがバレることを前提に早坂は動かないといけない。光上に嘘など通用しないのだから、自分でも驚くほどの本心を言うしかない。

「花火。本当に嬉しかったんですよ？ 今でも感謝してます」

「それはやったかいたがあったというか……。掘り返されると照れくさいんだけどな」

「私だって思い出すと恥ずかしいですよ。ですが、あの日は私にとってそれだけ大きな出来事だったんです」

「そっか……。そう言われると俺も嬉しいもんだよ」

湧き出る温かな気持ちと、押し潰されそうになる罪悪感。それらが同時に胸の内から湧き出では抑え込む。彼に気づかれてはいけない。裏に何かあると気づかせることなく、自然な運びで迫らないといけない。

早坂の任務は長期戦。それは頭の片隅に残しておけばいい。幸いにも彼は恋愛が絡むと鈍くなる。ゆっくりと距離を詰めていけばまず気づかれない。

「改めて疑問に思うんですけど、なぜ私のためにあのようなことを？」

「たまたまツイートを目にしたからですか？」

「たしかにツイートがなければ、早坂と花火を見ることはなかったな。でもま、早坂のためにできることはしたいってのは、あの日だけのこ

とじゃない」

「……そうですか」

早坂はきつと覚えていない。光上は早坂の反応からそう受け取っていた。光上が早坂に力を貸す原点。そうする理由はどこから来ているのか。それは出会った頃へと遡る。初等部に入学し、1年生の間のある日に。

その話を掘り返し、覚えているかを聞くこともない。それは今する話ではないのだから。彼女が覚えていようとそうでなかりょうと関係ない。

「かぐや様を見ていると、羨ましくはなるんですよ」

「うん」

「生徒会で書記ちゃんや会計くんと楽しそうに話していて、会長と独特な恋愛の駆け引きをしていて。これがかぐや様の青春なんだなつて」

「早坂がよく一緒にいるあの女子2人は？」

「彼女たちとは……ええ。楽しめてますよ。楽しめてますが、後ろめたさもありますから」

早坂といつも一緒にいる2人組。彼女たちと過ごす時間は楽しい。それは間違いないことで、学園生活をそれなりに楽しめているのも、彼女たちのおかげだと思っている。だからこそ、偽装のための性格で接していて、偽りの顔で築き上げた関係に申し訳無きもあるのだ。

もっと冷酷でいらればよかったのか。もっと冷めきった心であれば、こんな思いはしなくて済んだのだろうか。

それは世間一般的に言えば間違った選択なのかもしれない。きつとそれが大衆の普通なのだ。

しかし、それは四宮の人間として正しい選択なのだろう。優しさも甘さも必要なく、すべてを利用し、すべてを思いのままに動かし、目標を達成し、何だつて手にする。四宮の人間なのだから、こちら側を選べた方が楽だったのかもしれない。

「早坂つて………不器用だよな」

「どこを見てそう言うんですか」

「だって優しいじゃん」

「意味がわかりません」

「その優しさがあるから、自分の行動に後ろめたさを感じるんだろ？  
捨てた方が楽だっただろうに、なまじ強いから保てる。それで苦しむ。ほら、不器用じゃん」

「まさかあなたがそう言うとは思いませんでしたよ。四宮家をよく思っていないあなたが」

普段と変わらない調子で話してくる光上に、早坂は僅かに苛ついた。同じ調子でそんなことを言ってくるとは思ってなかった。四宮家に染まればいいと言ってるのと同じ。それは——と同じで、早坂は瞳の奥に落胆した様子を映す。

「客観的で合理的な判断をしただけだよ。所属する場所に染まれば、そこで息苦しく感じることもなんてないんだから。けど、早坂はそうしないことを選び続けてるからさ。早坂のそういうところ好きだな」  
「……は？」

思考についていけない。今の流れから急に方向を変えられた。ヘアピンカーブどころじゃない。もはや反射。白髪少年にでも当たったのか。

「あ……。人としてって話だからな？」

「わかってますよ。それとも、勘違いしてほしかったですか？」

「いや求めてないっす」

「揶揄いがいがないですね」

「息するように揶揄おうとするなよ」

苦笑する彼に釣られ、早坂も頬が緩む。やはり彼とこうして駄弁っている時間が心地いい。何をどこまで見抜かれているかわからない不安はある。しかし彼はそのほぼ全てを見逃す。

今がライン上。半歩も踏み出せないギリギリの距離感。

それは彼も把握していて、踏み込んでこない。ろくな事にならないとわかっているから。そのラインの先は崖だ。踏み出せば落ちるだけ。

「あ、そうだ」

「？」

「ちよつとここで待ってて」

「どちらへ？」

「生徒会室」

「そうですか」

自然と見逃してしまった。

「ん？ 生徒会？」

このままでは駄目だと気づく。彼がドアを開けたところで早坂は慌てて席を立ち、その様子を尻目に彼は教室を飛び出す。早坂もすぐにそれに続いた。

廊下を走ってはいけない。走らずに素早く移動する手段。それは競歩。

「なんで競歩でそんな早いし！」

真似たところで追いつかない。歩幅の違いが決定打となってしまう。仕方なく早坂は走った。止めないと後で主人に怒られてしまう。教師に怒られる程度ならどうってことないが、主人からの回避はいい。明らかに面倒なのは目に見えている。

「早坂。パルクールって知ってるか？」

「欧米で流行ってるやつでしょ。それくらい知ってるし！」

「あれってあの町並みじゃないとできないよな」

「そりゃ向こうで生まれた遊びだし！ 日本では珍しいのも当然だし！」

「だよなー」

そう言つて光上は窓から外に出た。生徒会室がある棟は、校舎から少し離れている。校舎から直接行くことも可能だが、こうして一回外に出てから移動するのもおかしくない。窓から出ている点を除けば。

「ここ2階！ って、パルクルの前フリはそういうこと……」

帰宅してから筋肉痛やら何やらで苦しむだろうに、光上はそれを構いなしに進んでいく。しかも外なら走っても問題ない。

早坂は一瞬躊躇った。飛び降りる事自体は何も問題ない。それぐらいできる身体能力がある。問題は今の服装。制服である。秀知院

学園の制服はワンピースに近い。こんな服装で飛び降りたら大惨事である。

公開処刑

だが迷ったのも一瞬。光上をここで逃がすわけにもいかない。瞬時に周囲へと視線を飛ばす。人がいないことを確認すると、スカートを手で抑えながら飛び降りた。ついでに、手荒だが光上にドロップキックをかませるように狙いもつけて。

着地の衝撃も、光上を蹴った感触もなかった。光上の背を蹴る寸前に、視界が急に回る。見えていた光上の背も敷地の地面も見えない。代わりに見えるのは雲が多い青空と、呆れた様子の彼の顔。

「恥を捨ててまですることか？」

「……仕事は優先されますから」

冷ややかな視線から、ぷいっと横を向いて逃げる。誰が原因かと言えば、早坂から逃げる光上が原因なのだ。こんな恥ずかしい真似をしたことにも、彼に責任がある。光上からすれば、そこは自己責任だろと言いたい。

横を見て現状を把握。いま体は横たわってる状態に近いようだ。しかし妙に視線の位置が高い。地面から1mくらいだろうか。

膝裏と背中にあるのは、彼の腕のようだ。自分の肩に添えられてるのも、彼の手なわけだ。

「おろしてください」

「今後こういうことしないのなら」

「それは光上くん次第！ いいから早くおろして！」

「わかったから……」

早坂をおろし、生徒会室がある方向に視線を向ける。今起きていることは見逃せない。四宮のやり方を、彼は看過できない。

「早坂」

時間がない。これから早坂を振り切るのも難しい。ならば、そこに割く時間を無くすしかない。

彼の声の重さが変わる。その声に攻撃性が乗り、これまで早坂に向けたことのない視線を向ける。敵対的な視線を。

「できれば早坂とはやり合いたくない。だから、一度だけ言うぞ。俺

の邪魔をするな」

「っ……い」

なるほど抑止力。ただ1人の存在が他への牽制になる。四宮かぐやでも取りたくない手段を平気で取る連中が、一目置いて警戒するだけのことはある。四宮家を取り入れようと判断したのも、早坂はこの瞬間に正しく理解した。

これをデフォルトにさせたら、四宮家が欲しがると人材の様変わりする。

早坂だつてそういう世界を知っている。そちら側を行ったり来たりしてる。だからこそ余計に認識できてしまう。

以前にかぐやに向けたもの。あの時早坂は場に紛れていたが、光上に直接これを向けられたわけじゃない。悔つてはいなかったが、想定を超える重さだ。

「俺は努力する人が好きだ。直接的なことはしないけど、応援ぐらいはしてる。この学園の生徒会長になろうと本気で思ってる奴を、その意気込みを潰すのは見逃せないんだよ」

「……しかし……」

「早坂の立場も理解してるつもりだ。だから本郷と伊井野のことを調べてるのは見逃した。あの2人のことを知るくらいなら構わない」

早坂は冷や汗をかいた。彼を侮りなんてしない。しかし、実情を掴めていなかったのも事実。彼の本気がどういふもので、彼の情報網がどれほど広いのかも。

「本当にさ……君とは敵対したくないんだ。たとえば四宮家を敵に回したとしても」

「なんで……」

「……君が覚えていなくても、俺はあの日の約束を果たしたい」

急に圧が消えたことで早坂の呼吸が荒くなる。途中から呼吸すら忘れてしまっていた。相手を静かに圧迫する。彼が夏休みに、四宮家の別邸を正面から入り、早坂がいたかぐやの部屋に着いたのもこれかと理解する。

約束——彼が口にしたそれに、早坂も心当たりはある。だが、思い



至ったものであるという確証はない。あれは、約束と言えるのかすら怪しい曖昧なもの。

「じゃ、俺は生徒会室行くから。早坂を怒らないように、四宮さんにお願いしとくよ」

それを確かめることはできなかった。

## 第23話

競争するときの必勝法は何か。相手よりも速く、相手よりも効率的に進む手段か。

違う。競争相手を全員消すことだ。相手を土俵から落とせば独り勝ち。同じ土俵に立たせなければいい。

四宮家は、それを悪としない。その上で、それに頼るだけの行動もしない。同じ土俵に立つてくる者が相手でも、真正面から叩きのめせる強さを兼ね備えている。

相手を落とす過程は、言わばふるいだ。それにかけることで、相手をするに値する存在かを確かめる。もちろんそれは生易しいふるいではない。生半可な者はそれに耐えられない。

(本郷さんも、そちら側ですね)

四宮は確信していた。本郷もまた、それに耐えられない人間だと。たしかに一定の人望はある。ある程度のカリスマも備えている。しかしそれが、全員の代表になれるものかと言えばそうじゃない。社長会長にはなれない。よくて部長役員止まり。

この秀知院学園の生徒会の会長としては、歴代の面々に劣る。

(多少まいてはいますが、予定通り落とせそうです)

四宮は交渉してるだけ。こういうのもありますよと提案してるだけ。相手の人格を事細かに分析し、有効な手を打ってるだけ。体感としては、蛇がゆつくりと巻き付いてくるような恐怖か。圧による締め付けの光上とは違うタイプ。四宮家の子供の中でも、これはかぐやだけが与えられる恐怖だ。男女による違いなのだろうか。

あと一歩で相手を消せる。

その確信とともに、口を開こうとしたところでドアをノックされた。それも大きめに。

それによってこれまで作っていた空気が消されていく。本郷の緊張も幾分か解けた。

「生徒会役員じゃないのにここを使うのはどうなのかな」

ゆつくり振り返ると、そこにはやはり光上が立っていた。

(早坂は何をしているのかしら)

多少の苛立ちを覚える。もう少しで対抗馬を消せたというのに。光上の姿を見たことで、本郷の精神状態も回復した。これも光上のこれまでの積み重ねによる効果か。

「本郷さんと次期生徒会について話し合ってますして、それならこの場を使った方がより考えられますから」

「それが妨害でなければ邪魔しなかったんだけどね。本郷、そろそろ選挙活動再開したほうがいいんじゃないか？　時間は足りないんだから」

「そ、そうだな。ごめん四宮さん。俺はここで失礼するよ」

「ええ。本郷さん、考えておいてくださいね」

実に綺麗な笑顔。それがより本郷に恐怖を植え付ける。しかし出入り口に光上がいるわけで、すれ違いざまに光上は声をかけていた。出馬を取り下げさせられるかは五分五分だろう。

「四宮さん、こういうことする必要があるの？　はつきり言って、白銀の勝利はよっぽどのがない限り揺るがないのに」

「そのもしもを見逃す理由がありますか？　確率を上げるために手を打つ。当然のことでしょう」

嘘も誤魔化しも通用しない。目的の相手もいなくなったし、ぶつかる理由もないのだが。光上という人間をこの際に見逃してみても悪くない。

「私が頼んだことで会長に立候補してくれたから」という部分だけは、勘づかれないように気をつけながら。それ以外の部分なら本音で語るのもやむなし。

「そういう光上くんこそ、私を止める必要があるのですか？」

「会長という立場に挑もうとする人の邪魔は見逃せない」

「それはあなたの我儘エゴでしょう。選挙管理委員会という大義名分を得て、自分の望まない展開を消してるだけ。私と大差ないですよ」

「それはどうかな。選挙管理委員会に入ったのは、向こう側から頼まれたからだ。臨時で入るのは例外措置。そんなものを俺から持ちか

けるわけではない」

「その例外を呑んだことはあなたの意志のほうです。あなたらしくないと感じますが、承諾したのも去年のことを忘れられないから。違いますか？」

「違わない。四宮の予測は当たっている。去年の結果に文句なんてつけない。御行本人は堂々と立ち振る舞った。それに生徒たちが応援して当選した。そこは事実なのだから。」

「ただ、その影を見逃せないだけで。揉み消された何かを見逃せないだけ。そこに光上が納得できていない。だから、今年はそんなことをさせない。」

「中立を保つのがあなたのお家のやり方。今あなたがやっているのは敵対行為ですよ」

「中立を保つのは、周りを均等に見るため。パワーバランスを整えることが優先される」

「地力の差はそこに含まないのでですね」

「そこも本人の力量だからな。スタート地点で差がついていても、それはこれまでの行動に起因すること。介入するべきはそこじゃなくて、そこから相手を後ろに下げようとする行為だけ」

「なるほど……。融通が利かない人ですること」

「基本的に干渉しない。だから周囲を見られる。細かに観察し、その視野を広げ、より多くを見る。警戒すべき箇所も、事の前触れもいち早く感知できるように。」

「高め合いになるのなら放置する。学園という箱庭にいるからこそ、成長は何よりも優先されるべき事象。」

「妨害ならそこに止めに入る。それは成長を妨げるものであり、本来なら学園内で推奨されるものではない。」

「結局、あなたも私と同類じゃないですか。自分の思い通りにするために手を打つ。最悪の場合手段なんて選ばない」

「能動的か受動的かで大きく変わると思うがな」

「あなたが受動的と？ 早坂を退けておいてよく言えますね」

「……」

「早坂が取れる手段も限られています。大方、この件を見抜かれていることを前提に動いたはず。衝突を避けるやり方で」

実際に早坂の取った手段は、光上と雑談することだった。彼と何気ない話をするだけ。その時間を楽しむ。それが一番効果的だったわかった上で。

それを終わらせてここに来たのは光上だ。本人の意志だ。

「あなたは彼女のその気配りを振り切ってここに来た。どんな手段かは知りませんが、あまり褒められたものではないでしょう。そのどこが受動的だと?」

「……視点の違いだな。切り取り方一つで印象を変えてくるマスマEDIAと同じだ」

四宮が動いたから光上も動くことにした。早坂をけしかけてきたからそれを振り切った。そう考えれば受動的と言える。

2人とも主張を取り下げられるわけもない。平行線を辿るだけ。その点で見ても、相手にしたくないタイプだ。決着がつくまでに相当時間がかかる。だから四宮は、そこを流すことにして感じたことを率直に口にした。

「私の目からしても、そうとう面倒な人ですよ。光上くん」

「そこは素直に受け止めとく。他者視点ってのはありがたいから」

「その生き方が、あなたという個人に合っているのかも疑わしい」

「四宮さんからはそう見えるのか」

光上は意外そうに反応した。四宮からの人物像の評価を真摯に受け止めている。普通なら反感を買いそうなことなのに、光上はアドバイスとして受け取っていた。その様子に四宮は訝しむ。

それも仕方ない。今まで光上晶という人間を正しく認知したことはなかった。お互いの家のこともあり、面倒事を避けたいという双方の考えから、不干渉を貫いてきた。そのために、光上晶がどういう人間なのか、正しく真っ直ぐと見ていなかったように思える。

「ここに来た目的ももう達成してるし、他に話すことないなら退室するが?」

「自分勝手な人」

「四宮さんには言われたくないな。あーそうだ。早坂を怒らないでやってくれ」

「……そう。考えておきます」

「ん。四宮さん、次はない」

「私がそれを聞くとでも?」

牽制なんて意味がない。四宮家の人間を本気で止めたいのなら、それ相応の覚悟をして立ちほだからないといけない。次のターゲットは決まってるし、光上もそれを察してる。

挑発的な視線を向ける四宮を、しかし光上は力の抜ける笑みで返すだけ。これには四宮も毒気を抜かれた。

「伊井野さんを甘く見ないほうがいい」

「あら、彼女を買っているのですか?」

「あの子、見たとおりの頑張り屋だから」

「それ理由になってるかしら……」

なんでこういうところは甘いのだろう。それでよくこちら側に足を突っ込んで来られるなどか思ってしまう。呆れを通り越して感心しそうだ。

生徒会室から出ようとした光上が足を止めて振り返る。何か警戒している様子もなく、ぼんやりと会長の席を見ているだけ。四宮も首を傾げてどうしたのかと聞く。

「いや……。ここが居場所になってたんだなって」

「っ、なんの話ですか」

一瞬ドキツとする。御行と合法的にナチュラルに会える場所。四宮は生徒会という場所をそういう目で見ている部分もある。それがバレたのかと焦るが、下手な反応は墓穴を掘るだけ。努めてそれを隠す。

「みんなが集まれる場所。生徒会メンバーってある意味他とズレてる人たちだったし。ここがそれを補う場所になるんだなって思っただけ」

「あなたもその仲間入りすると、その失礼な分類に入るわけですが」「それは嫌な括りだな」

「本当に失礼ね！」

「言い換えたらなんだろう……。愛の巣？」

「どうやったらそうなるの！」

（そんなの私と会長が付き合ってるみたいじゃないですか！ 事実無根もいいところですよ！ ……これ、会長に切り出せるカードになるかしら）

四宮の思惑をよそに、なかなかいい表現ができないことに悩む光上。その悩みもそこそこに、早坂か圭にでも相談しよう決めて退室するのだった。圭にその話題を相談するのはよろしくないのだが。

結果から言えば、生徒会長に選ばれたのは白銀御行だった。前年の実績を提示した四宮の応援演説は、王道だからこそ確かな効果を発揮したようだ。それをひっくり返しかねない事態にはなったが。

選挙管理委員会は手を打っていた。毎年真面目に聞かない生徒が多いことを問題視し、どうすれば皆が話を聞くか会議。今年の立候補者も交え、案を出し合い、話し合いを重ねた結果討論を導入することに決定。立候補者が政策を発表し、他の2人がそれについて意見をぶつけていく。政策の細かな点も聞けるため、投票時に大きな参考となるのだ。

そのやり方を本番にサプライズで行った。知っていたのは選挙管理委員会と立候補者の3人のみ。応援演説を行う人にも知らせるべきでは、という意見も出たのだが、支障が出ないと判断して伏せることになった。隠された本音は、「それでまた裏工作されては対応が間に合わなくなる」というものではあった。

「光上先輩……。ありがとうございます！」

「お礼は他の委員会の人と、君を支えてくれてる大仏さんに言ってあげて」

「もちろんです！ ですが、司会進行を光上先輩がしてくださっていたのも、私には支えになったので」

「あはは、そう言われると照れくさいけどね。助けになれたのならよ

かった」

過去の失敗の連続から、伊井野は人前で話すことが苦手になっていた。それを克服できたとはまだ言えないが、司会進行を務めた光上のフオロート、御行と本郷の援護によりしつかりと政策を主張できた。どれだけ学園のことを考えていたのかも、同年代の1年生を始め、多くの生徒の心を打ったのは間違いない。

それでも勝てなかったわけだが。やはり厳しい政策が足を引っ張った要因か。

負けたことは悔しい。しかし、それはそれとしてお礼をちゃんと順番に言っていく。伊井野ミコという少女の性根の良さがよく表れていた。

「今回は随分と似合わないことばかりしましたね」

光上から伊井野が離れたところで、早坂がやってきた。前日の件もあり、光上は顔を合わせづらいなどか思っていたので、早坂から来てくれて助かっている。

「司会進行までやるとは思いませんでした。それも、伊井野さんのためですか？」

「どうだろ。俺じゃなくてもあの役はできた。選挙管理委員会の人たちは優秀だからね」

「自分から選んだのですか」

「うん。出しゃばっちゃった」

「……こちらへ来てください」

「え？」

早坂に手をグイッと引つ張られ、人がいない方へと連れられていく。前日のことがあるだけに、光上は警戒心を高めていった。

しかしそれは杞憂に終わる。誰もいない場所まで来たら、そこにあるベンチに腰掛ける。早坂の手を首に回され、そのまま強引に体を横にさせられた。頭に感じるのは、彼女の柔らかな太腿。

「は、早坂……？」

「臨時なのに、一番動き回っていたそうですね」

裏方だけでなく、表側も手伝っていた。慣れないことは疲れるもの



で、少しずつだけ蓄積したのも事実。こうして体を横にしてしまうと、それを感じて体が怠くなる。選挙管理委員会が一番疲れる仕事は、選挙当日に速攻で集計して張り出すという作業なのだ。

光上は彼女の方を見ようとすると、手で抑えられるせいでそれができない。渋々諦めた光上は大人しくなり、そんな彼の視界を彼女の手がそつと塞ぐ。

「圭が心配していましたよ。光上さんの疲れが溜まってると」

「あの子に見抜かれ過ぎて少し怖くなってきたんだが……」

「乙女を侮らないことですね」

乙女。あえてそう言ったのは、自分の任務の障害になるから。圭より先に光上を落とす必要がある。圭を援護できたら、乙女の前に「恋する」をつけたかもしれない。

彼にはちゃんと休んでもらおう。この先、どれだけ休む時間があるかはわからないのだから。

「なあ早坂」

「この前のことを謝るつもりでしたら、お詫びをいただかないと許せませんね」

「ぐっ……。そのお詫びって？」

気にしていたことを先読みされて呻く。そんなに単純だろうかと自分に若干自信を無くしつつ、お詫びの内容を聞いた。

「そうですね。言うことを一つ聞いてもらう。この辺りが定番ですね」

「そんな定番は知らんけど、それでいいならそうする」

「あっさり引き受けるんですね」

「お詫びなわけだしな」

「では、内容は後日お伝えします」

「考えてなかったのか」

「私の休みがいつになるかも分かりませんからね」

ブラックだなあと呟く彼の言葉を流す。もうそれには慣れたのだし、思うところはあっても楽しめる時間があるのも事実。なんとかやっつけていけちゃうと、人間それを耐えてしまえるらしい。

どんなお願いにしようかなと考えつつ、今の表情が見られないように彼の視界を塞ぐ手に力を入れた。

## 第24話

少女漫画。それは男子にとっては手を出しにくいジャンル。「友情・努力・勝利」に心を惹かれる男子たちにとって、恋愛を描く作品は手を出しにくい。少女受けを前提として作られている点も理由か。「イラストの雰囲気か」とか男子はよく言って敬遠しがちである。

しかし少女漫画だって数々の名作を打ち出している。その中には男受けもいい作品だって存在するわけで、現在白銀御行が読んで大号泣している作品もその一つである。

「ほら泣いちゃうでしょ!」

「泣いちゃう!!」

「めっちゃ恋愛したくなったでしょ!」

「めっちゃ恋愛したくなっちゃおう!!」

彼がその作品を読んだのは、妹の圭がリビングで読んで大号泣していたからである。彼も「漫画ごときで」なんて言ったのだが、それを聞いてカチンと来た圭に読んでから批評しろとガチギレされた。

たしかに内容を知らずに評価するのもおかしな話。圭がお風呂に行っている間にサクサクと読み進めた御行は、案の定泣き所でポロツポロに泣いたのである。「漫画を馬鹿にしてごめんなさい」とは彼の心からの謝罪だった。

ひとしきり泣いたところで気持ちを整理し、これは使えろと判断した。何に使うかと言えどもちろん、四宮かぐやとの恋愛頭脳戦である。これほどの名作だ。彼女にもぜひ読んでもらい、その効果を利用して少女漫画脳に染め上げさせる。その勢いで告白させられれば完璧。それが御行の作戦。

だが今回はそんな簡単に話が進まない。

(あれを光上さんに読んでもらったら……。もっと私を意識してくれるかな?)

お湯に浸かりながら圭も作戦を練っていた。早坂からの情報提供により、もっとアピールしなくてはと圭の積極性が増しているのだ。

光上は圭を恋愛対象外にしている。中学生という枠組みがあるせいだ。

しかし3歳差とは珍しいものでもない。大学生で言えば1年生と4年生。ぎりぎり同じ枠組みであり、社会人となればなんの気兼ねもない。つまり、障害となるのは枠組み。それを取り払えるほどに女性として見てもらえたら、もうゴールが近くなる。

そのためにあの漫画を使いたい。自分の行動だけでなく、多角的な刺激を光上に与えるのだ。

(私を見てくれてるけど、1人の女子としては……って感じだよ)

圭は着実に光上の分析を進められていた。早坂という強力な情報提供者だけでなく、四宮による太鼓判という後押し。男子の意見として、極々偶にだけ石上から聞くこともあり、クラスの男子の会話を聞いてみたりしている。気になれば聞いてみたりしているのだが、そのせいで圭は誤解を生んだりしている。

「中等部内で白銀さんの好きな人がいる」という噂が出来上がっていることを圭は知らない。半分だけ当たっていて耳が痛い、知らないことは時として本人を守るものだ。

お風呂から上がり、寝間着に着替えたらリビングへ。どうやって光上にあの漫画を渡そうかと頭を悩ませていたのだが、その思考も中断させられる。

「あれ?」

テーブルの上に置いてあったはずの漫画がない。さっきまで読んでいたのは御行だ。部屋に入ってみると、御行は勉強していた。邪魔をするのは少し気が引けるがそれどころではない。

「お兄い漫画どこ置いたの」

少し高圧的になってるのはご愛嬌。無音じゃないと集中しきれない御行は、圭に声をかけられたことで手を止めた。

「あーあれな。面白かったからぜひ生徒会のみんなにも勧めようと思ってる。少しの間貸してくれないか?」

「無理」

「えっ……」

借りられると思って組み立てていた御行の計画が崩れ去る。これでは四宮への仕掛けができない。なんとしても許可を貰わねばならないのだ。

まずは誠意を見せる必要がある。椅子に座った状態で肩越しに頼むのは、人に頼む態度ではなかった。そう思った御行は椅子から立ち上がり、綺麗な斜め45度で頭を下げる。

「四宮たちに勧めたいから貸してください」

「四宮副会長に？ ……………無理」

「な、なんで!? 理由を教えてください圭ちゃん!」

「私も貸したい人いるから。お兄いのじゃないんだから、私に優先権があるのは当たり前ですよ」

「うぐつ……………! しかしだな……………!」

御行はなんとしても明日学校に持って行きたかった。計画をすぐに動かしたいという欲求と、「名作って人に勧めたくなる」という誰にでも発生する欲求があるせいで。白状すれば、勧める時に語りたいたい気持ちもあるのだ。

しかしそれを圭に言うわけにもいかず、肝心なところをはぐらかしながら交渉するしかない。それでも圭が簡単に引き下がるわけがないのだ。圭だって自分の作戦のために、この漫画を光上に読んでもらいたい。自分の恋路を邪魔するんじゃないと、敵を見るような目で御行を睨む。

「四宮たちならすぐに読み終わる! 明日一日だけでいいんだ!」

石上は漫画を読み慣れているし、四宮は速読しても頭に入るタイプ。気に入ったものはガツツリ読み込むタイプでもあるのだが、そこは御行の知るところではない。藤原に関しては考えてもわからないからその場で対応するしかない。

「私が貸したい人もすぐ読み終わる人だから! お兄いが一日待てばいいでしょ!」

光上也読むのは早い方だ。作者の手法とかを読み解こうとし始めたら長いが、内容だけならすぐに終わる。仮に持ち帰ったとしても、その翌日の早朝に持ってきてもらえばいい。比較的貸し借りがしや

すい相手だと言えよう。

「なんでそんな急ぎなんだよ！」

「お兄いに言われたくないし！」

反抗期であることも相まって圭がヒートアップする。ガミガミと食らいつく圭に御行も反感を抱き、負の連鎖が始まってしまった。反抗期が進み過ぎて、こうやって兄弟喧嘩になることも珍しい。何分間も言葉をぶつけ合うのは圭が中等部に入学する以来か。

「千鳥足退勤byシラフ」

そんな最中に父親の帰宅。帰ってみれば息子と娘の喧嘩の音が耳に飛び込んでくる。いったい何年ぶりだろうかと思いつつ、面白そうだから話を聞くことにした。

「あつパパ聞いてよ！ 私漫画なのにお兄いが生徒会の人に貸そうとしてんの！ 私だつて貸したい人いるのに！」

「だから！ 明日のうちにみんな読み終えるから明日返せるんだつて！」

「ふむふむ……。ちなみに圭ちゃんが貸したい人つて誰？」

「誰だつていいでしょ！」

父親は悟った。これ、光上に貸したいだけなんじゃないのかと。証拠などないが胸のうちに確信を抱いている。面白センサーがバツチリ反応している。だがこれをどう料理しようか。すぐに答えを出しても面白い反応は見れそうだが、娘の必死の隠蔽を見たい気持ちもある。

「間を取つて俺が借りよう」

「ふざけんな!!」

「息ぴったりだな」

場をかき混ぜても被害しか発生しなさそうだ。藪はつついていて楽しいが、蛇に噛まれたくはない。一方的にコントロールして鑑賞するのが大人の楽しみ方だ。動物園とかそういう思考の行き着いた先だと思っている。

再びいがみ合う2人をよそに、紙袋の中に入れられている少女漫画を手取る。『今日はあまくちで』というタイトル。今時の子はこう

というのがいいのかと、認識のすり合わせのためにパラ読み開始。ついでにこの兄弟喧嘩にも終焉をもたらそう。

「晶くんこういうの読むかあ?」

「勧めたら読んでくれるもん!」

「父さんいつの間にか光上を下の名前で呼ぶようになったんだよ!」

「御行が月見してる間に。一緒に晩御飯食べたぞ」

「聞いてねえー!!」

息子と娘がそれぞれ違った反応を示す。御行は知らぬ間に友人と親の仲が深まっていることに戦慄し、圭は光上の人の良さを馬鹿にするなど機嫌を損ねた。機嫌を損ねたのだが、光上に貸すと言っていないのは遅れて気づいた。

一瞬で血の気が引き、震えながら父親の方に視線を移す。漫画に目を通していた父親と目が合い、ニヤリと笑われる。

「いやっ、ちがっ!!」

「いやあいいんじゃないか? こういうのを勧めるのも可愛らしいじゃないか」

「恥ずかしいからやめてえええ!!」

「ん? ああ。圭ちゃんも光上に勧めたかったのか。それならそう言ってくれたらよかったのに。どのみち生徒会で読ませられるし」

「そう言ってるな御行。圭だっておとし——」

「うっさいしね!!」

「ローリングぐっ!!」

「そばっとお!?」

羞恥に耐えきれなくなった結果、圭は父と兄にローリングゴバットを叩き込んだ。どこで覚えてきたのかは不明だが、2人を沈めこむには十分の威力を発揮していた。

光上は圭のお願いもあり、生徒会役員になった。将来を考えれば必要な経験であったのも事実。それが後押しとなったのである。そんなわけで、御行が四宮に漫画を読ませる過程で、光上にも読ませることは可能だった。御行と圭のどちらにも利点がある作戦だったと言えよう。

しかし乙女の心がそれを許さなかった。好きな人に恋愛漫画を読んでもらいたいなど、結ばれたいという想いが見え見えなのだ。そんな恥ずかしいことを兄に頼めるほど圭は大人じゃない。反抗期ということも然り、身内だからということも然り。

とはいえ、父親のせいで露見してしまった以上、その手を使わない手段はない。御行にひと芝居打たせて、みんなが読む流れを作りさえすれば光上も読んでくれる。漫画の効果は実体験中。光上にも影響があるに違いない。

(もし、うまくいったら……。お、お付き合いとか……。つつ!!)

想像が膨らみ胸が苦しくなる。自室に入った圭は布団に包まって悶えた。彼のことを考えれば考えるほど恋しくなる。この気持ちを叶えたい。伝えるだけじゃなくて、叶えたい。

「みつがみさん……」

スマホの画面を操作し、誕生日に彼と撮った写真を表示する。プリクラで撮った写真。知識としては知っていたようだが、彼はプリクラで実際に撮ったことはなかった。それを聞いた圭は一計を案じ、人が映れる範囲は狭いのだと説明した。デコることを前提とするため、その範囲を予め決められているのだと。

彼は嘘に敏感である。普通なら気づかれる。しかし圭に一切の悪意がなかったことと、恋愛が絡むと嘘に鈍感になることが功を奏した。そういうものなのかと光上は納得し、圭と肩を寄せて写真を撮ったのである。

「これが当たり前になってほしい……」

友達と撮る時よりも近い距離での写真。誰もが男女の関係なのだと思う写真。この距離を当たり前にしたい。

スマホを胸に抱えながら。いつの間にか圭は眠りについていた。

そして翌日。放課後に圭は高等部に足を運んでいた。光上に例の漫画を読んでもらうため。翌朝に御行と和睦し、光上にも読ませるという条件で貸し出した。迷うことなく生徒会室へと足を運ぶと、中に



は伊井野を除いたメンバーが勢揃い。御行の対面に光上が座っており、漫画を速読している。

「あ、圭ちゃんだ〜！ 遊びに来てくれたの〜？」

「うん。漫画読んでるみたいだけど」

「『今日あま』だよ！ 圭ちゃんは知ってる？」

「知ってるよ！ 兄さんに勧めたの私だし」

「さすが圭ちゃん〜！」

最初に気づいたのは藤原で、スキンシップを取りながら話しかける。圭もいつもの調子でそれに反応し、自然さを醸し出す。

(圭にすぐ抱きつくだなんて。なんて下賤な！)

四宮だけ闇の深い目をしているが、その四宮も含めて全員が圭の来客を受け入れている。御行は作戦を知っているし、光上は今朝のうちに高等部に来ることを聞いていた。というか、生徒会選挙前にあのように言われたのだ。どこかしらのタイミング来ることは予想していた。

「皆さんはご存知じゃないようですね」

「僕は先ほど読み終えましたよ。光上先輩はもうじきつてところです」

「四宮副会長は？」

「私は漫画をあまり読んでこなかったの——」

「そうですか……。私のオススメだったんですけど……」

「ですが。この漫画はどうか好評のようなので、ぜひ読ませてもらうかと〜！」

「本当ですか！ 読み終えたらぜひ教えてください！」

「ええもちろん！」

ちよろい女であった。御行を前にしては構えて駆け引きを行うというのに、圭が相手だとあっさりと言見を受け入れる。その軽さに御行も石上も驚いた。「あんだけ渋っていたのに」と。

「ふう。たしかにこれは面白い作品だな」

「おっ、光上也読み終わったか！ どうだった！」

「主人公とヒロインの魅せ方が上手いな。話の展開とか、関係の変化と心情の変化が——」

「そういうことじゃねえんすよ!! 誰が作り込みの評価を聞いてますか! 感想ですよ感想!! 語彙力崩壊させたらいいんすよ!」

「落ち着け石上! 気持ちはわからなくもないが!」

単純な味の評価を聞いているのに、この肉は何産だとか、どういう調理工程かの話をされてる気分だった。これには石上が反応する。もちろん多少わざとオーバーにしてる。圭がオススメの作品。光上を読み終えた場にその圭がいる。何かしら考えがあるのだと察しているのだ。

だからこそ、いの一番に反応した。鈍感系主人公など求めていないから。

石上はシャウトとは裏腹に、光上の話が他人に勧める時ならもってこいだなと思っっていたりする。

「語彙力崩壊したら感想なんて言えないだろ」

「正論腹立つなあ!」

「エンジンをかけるな石上! 一応先輩が相手だぞ!」

光上はその辺り気にしないタイプだ。毎年フランスに行つてそこから学校との交流もしているため、年齢の上下を気にしていない。日本と上下関係を息苦しく感じているぐらいだ。もちろん敬語は使っているが。

「もつとこう……あるでしょ! 2人の恋愛面とか! ヒロインの心情を想像したらとか!」

「ヒロインの気持ちはヒロインしかわからんぞ?」

「なんでそれで現文の成績が良いんだよ!!」

「ま、まあ成績の取り方はまた別だしな……。それに、光上の恋愛観が影響してるかもしれない」

「え、光上さん恋愛観なんて持ってたんですか?」

「四宮さんは俺をなんだと思ってるんだ」

漫画の感想から話は逸れるが、これはこれで圭からすれば収穫のある話。兄のファインプレーに心の中で感謝する。

光上の恋愛観を具体的に聞けるチャンス。あわよくば好みとか聞いておきたい。そうして膨らむ気持ちを抑えつつ、圭は視線を光上に

送る。その視線に期待が籠っていることは感じ取り、光上は困ったように苦笑した。

「恋愛観なんて言ってもなあ。全員で言う流れか？」

「あ！ それでしたら心理テストやりましょう！ 実は新しいやつが出てて、やりたいと思ってたんですよ。ミコちゃんも来たことだし、みんなでやると楽しいですよ！」

（藤原書記いいいい!!）

突然のことについていけずにぽかんとする伊井野と、期待を粉碎されたことにぽかんとする圭。そんな2人をよそに、藤原はいそいそとパソコンを起動する。これには四宮も焦る。自分が把握していない心理テストだと、核心部分を露呈しかねない。

だが止めるわけにもいかない。恋愛が絡んだ話で藤原の相手をするなど、爆弾処理と変わらないのである。いつ起爆するかわからない相手。わざわざ危険を犯すなど愚の骨頂。

「あつたあつた！ それじゃあ読み上げますね」

『あなたは子供です。今日は親と遊園地に来ています。途中で迷子になってしまいました。しばらくして親が見つけてくれました。それはどのアトラクションの近くだったでしょう？』

「選択肢がありますので、その中から選んでくださいね！」

『1、観覧車。2、ジェットコースター。3、お化け屋敷。4、メリーゴーランド』

その選択肢を真剣に考える人が3人。白銀兄妹と四宮である。話の流れからして、この心理テストは恋愛がテーマのもの。心理テストなのだからどれを選んでもいいのだが、3人にとってはどれかが正解なのである。

「遊園地か。行ったことないな」

「そうなんですか？ 一通り一般的なものは把握してるってお聞きましたけど」

「知識としてな。初等部に入学した時に親がフランス行ったから」

「そんな時期から!？」

「で、でもお仕事ですし、ご両親は光上先輩を大切に思ってたらしいや

「と思います！」

「あはは、伊井野さんそんなに気を遣わなくていいよ。親とは定期的  
に会ってるから」

伊井野の両親も仕事が忙しく、なかなか子供の学校行事を見に行け  
ていない。それでも伊井野は両親に誇りを持つているし、愛されてる  
と自覚している。だから、光上もきつとそうなのだど励まそうとし  
た。

光上はその優しさを受け止めながら朗らかに笑った。親と過ごす  
時間は一年の中で短いものの、その時間は充実しているものだ。光上  
もまた、親からの愛をもらっている。

「言われてみれば私も経験が無いですね……」

「そ、そうなのか？」

その話を聞いた四宮が反応し、御行が気まずそうに聞く。財閥のご  
令嬢。別邸に住んでいることから、察することはできるわけだ。

「でしたら生徒会メンバーで今度出かけませんか？ 都内だとドームシ  
ティありますし、千葉に行けばデイズニーありますし」

「私が言いたかったのにいい！ 石上くんのばかり！」

「ええ……」

「あんたそういう所が駄目なのよ」

「これは理不尽じゃ……」

心理テストから話が脱線していつている。生真面目な伊井野がそ  
れを指摘して話を戻した。空気を読んでいるのかどうか怪しいライ  
ンだが、光上と藤原からお礼を言われたので伊井野からすれば大成功  
である。

「みなさん選びました？ まだ悩んでる人はこの瞬間に直感で決めて  
ください。そして！ 自分の名前が書かれているこのマグネットを  
！ このホワイトボードに貼り付けます！」

「いつの間に用意したんだ？！」

「私の名前まで……！……！」

ホワイトボードには1から4までの数字が書かれており、ボードの  
端にそれぞれの名前が書かれたマグネット。圭の名前までちやつか

りと用意されていることに一同驚愕。

そんな面々にそれぞれのマグネットを手渡し、藤原はいの一番に貼り付ける。それに伊井野が続こうとしたところで止められた。

「誰かのを見て決めては心理テストになりませんからね！ みなさんには1人ずつ私に言ってもらいます。全員分聞いてから私が貼りますので！」

「なるほど。さすが藤原先輩です！」

「でしょ〜」

（くっ！ 藤原書記にしては抜かりない！）

（やってくれますね藤原さん！）

光明が見えたと思っただけで、すっかり塞がれた。今日の藤原は非常に手強い相手のようだ。

伊井野が藤原に言い、そこからは石上、光上、圭、御行、四宮の順番で答えた。全員分を聞いたところでマグネットを貼っていく。記憶違いも起きることなく貼れたあたり、藤原の本気度が垣間見えた。

「この心理テストで分かるのはズバリ！ あなたが心惹かれる性格のタイプです！」

「恋愛観からズレてませんか？」

「恋愛という括りで同じですよ」

「幅広いつすね」

平静を装っているものの、焦っている面子が半数ほど。白銀兄妹と四宮に加え、他の部屋で傍聴している早坂である。暇つぶしに勝手に参加しなければよかったと後悔。しかし結果は気になるのでイヤホンを外せずにいた。

「1番を選んだあなた！ 穏やかで誠実な人がタイプでしょう！」

「解説もある。結構しっかりしてるんですねこれ」

テンポよく読み上げられていき、それが4番まで続く。それぞれ表情を取り繕って反応しているが、『今日あま』を読んだほとんどのメンバーはそれどころじゃない。少女漫画脳に染まってしまっているのだ。

心理テストができて満足した藤原はホワイトボードを片付け、各々

も職務を始めたり恋愛頭脳戦を始めたり。『今日あま』を読んだ上に心理テストをやった圭は、光上の近くに行けずにいた。そんな彼女を藤原が後ろから抱きしめながら小声で話しかける。

「光上くんのタイプがわかったね〜」

「ち、千花姉え……。私は別に……」

「光上くんこういうの絶対正直に答えるからね。圭ちゃん可能性大きいよー!」

「あう……」

そう。圭の恋路に気づいている面々は、光上の回答と心理テストの答えを照らし合わせて思ったのだ。光上が回答したタイプって、だいたい圭に当てはまる性格じゃないかと。藤原は圭の恋に気づいていないが、光上の好みに一番近いのが圭だとわかり、2人がくつつかないかなくと期待しているだけである。

そうだったらいいな。けどもしかしたら思い込みかもしれない。そう思っていた圭にとって、この藤原の発言は大きい。

真っ赤に染まり上がった顔を光上に見られないように、圭は藤原にしがみつくのだった。

（あの女……。圭に何をしたの……。?）

四宮からドブを見る視線を注がれたのは言うまでもない。

（圭ちゃんかわいいい〜!）

それに藤原が気づかないのも、いつものことだった。

## 第25話

意図的に作られた暗がりの中。鮮やかな色たちによって照らされた幻想的なエリア。いくつもある円柱型の水槽の中では、それぞれの種類によってわけられたクラゲたちが漂っている。このエリアにかけられている曲が、彼らの動きをダンスへと変えていく。それらの動きはじっと見ていられるもので、人によってはここで多くの時間を費やしてしまうかもしれない。

ひとつひとつの水槽をゆっくりと見て歩く。週末ということもあり、他の客も多いのだが、彼らのようにここで時間をかける人は少数のようだ。

「クラゲって、海水浴とかで刺されたりってイメージが強いですけど、かわいらしい見た目の種類もいるんですね」

「数年前には大量繁殖で問題視されてたっけ。白銀さんが言うかわいらしいクラゲは、あまり見かけない種類だけど」

今日というこの日。光上と圭は水族館デートに来ていた。圭の誕生日の時のように、指摘されてデートだと気づいたものではなく、初めからデートであると認識しての今回。この幻想的な空間が作り出す雰囲気のせいかな。彼らはそつと手を繋ぎながら見て歩いている。

その速度は、鑑賞していることを考慮しても明らかに遅い。お互いに気を遣っているせいで、このエリアで時間をかけているのである。なかなか視線を合わせられないのも、意識し合っているから。

そもそも彼らがここにいるのは、高等部の生徒会での出来事がきっかけである。『今日あま』に多大な影響を受けた一部のメンバーが、少女漫画脳で駆け引きを始めたのだ。校長からの差し入れの中に、水族館のチケットが含まれていたのである。そのチケットの枚数は2枚。どうせなら全員分用意すればいいのに、とか光上は思いながら眺めていた。

水族館のチケットが現れたことで始まる恋愛頭脳戦ver. 少女

漫画脳。よくそんな恥ずかしいセリフを言えるなと思いつながら、光上は巻き込まれないように距離を取っていた。お前も大概だぞとツッコむ存在はその場にいなかった。

少女漫画の影響により、異性と水族館に行くことが大前提となる。少女漫画脳になったのは御行と石上と四宮。女子が1人であることから、御行と石上が競い合う形となる。

どういう駆け引きをしていくのか。成り行きを楽しんで見ていたものの、全く空気を読まず、少女漫画脳になっていなかった藤原が乱入。カオスが生み出されたせいなのか、決死の思いで四宮を水族館に誘った御行が断られるという結果になった。

「男2人でいきます?」

「使わないのは勿体無いしな」

少女漫画脳になっていた男同士で行くかと結論が付きそうになったところで、石上はその状態から脱することに成功。慌てて2人で行くのを中止しようと提案。

「石上にもフラレた……」

「すみません! そういう事じゃなくてですね!」

ダブルパンチにより、自尊心が削られた御行。石上が慌ててフォローを入れ、より良い使い道があるのだと話を持ちかけた。そんなものがあるのかと御行も食いつき、光上には聞こえないように部屋の外に出て2人で話し合う。

「これの使い道は自由じゃないですか」

「そうだな」

「四宮先輩には断られましたし、藤原先輩と伊井野は論外です」

「藤原はともかく伊井野はさすがに可哀想なんだが」

「残ってるのは僕らと光上先輩です」

「あ! そういうことか石上!」

「そういうことですよ会長!」

石上の狙いに察した御行が表情を明るくする。さすがは年下の友人だと感心した。エンジンがかかると大変だが、何度も相談させてもらっていたりする。



「俺たち3人で行けばいいんだよな！ 1人仲間外れにするのは悪いし！ いやあ俺は視野が狭かったぜ」

「違いますよ!!」

「えっ!？」

「男3人じゃなくて！ 光上先輩と妹さんに行ってもらうんすよ！」

「……………!!!! 天才か……………」

今度こそ御行は石上を心の底から称えた。誕生日の一件という功績を持つ石上は伊達ではないのだ。

御行は妹の恋路を心配するあまり、見守る姿勢を取ってばかりだった。時には兄として、使える手段を提供してもいいというのに。

感銘を受けたのはいいとして、問題はどうかやってそれを実現させるかだ。さつきまでの一部始終を見られている以上、光上に渡すと怪しまれる。しかし、圭に渡すとなると御行からになるわけで、それを受け取ってもらえる自信が御行にはなかった。自分でそう思っただけで、自分でいるのは、彼のプライドによって秘密にされている。

「現実的なのはやはり光上に渡す方か」

「僕らの予定が合わなかったってことにして渡しますか？」

「有効期限が地味に長いんだよなこれ……………」

「なんの話がされてるんですか？」

「伊井野……………」

伊井野 ミコ  
ワイルドカード登場。

彼女の出現に焦る2人。彼女が使えるかどうか目配せで会議。

まず、伊井野ミコは唯一白銀圭との接点がない。先日顔合わせをしたくらいだ。圭が光上に恋していることを知らない。たしかに伊井野なら切り込んでくれる。しかしそのためには圭のことを教えないといけない。それはリスキーだった。

「まさか……………また変なことを？」

2人の反応から伊井野は疑いを持った。彼女が抱いていた生徒会のイメージと現実がかけ離れ過ぎており、今日も何かおかしいことをしようとしているのではと考えてしまうのだ。

ここで御行が持ち前の頭のキレを発揮し、解決の一手を打ち込む。

「いや、実は校長からの差し入れにこの水族館のチケットが含まれていてな。残念なことに2枚しかないんだ」

「はあ？ それで？」

「これは本人のために内密にしておいてほしいのだが、実は光上のことを好きな子がいてな。せつかくだから光上とその子に行つてもらおうと思うんだ」

「それはいい考えだと思いますけど、それならなぜこんな場所にいるんですか？」

「あの光上にこの手の話を切り出しにくいからだよ！」

「あの人鈍感系人類なんだよ！」

「は？ 石上より腹立つ人間なんていないでしょ」

伊井野の中で光上の評価はとても高いのだ。生徒会のイメージこそ崩れているものの、自分と同じ新メンバーの光上はそこに含まれていない。相対的に評価が上がっていたりする。

その光上の浮いた話など聞いたことがない。その点もまた伊井野が高い評価をしている理由の1つなのだが、どうやら彼の周りはそのもいかないらしい。しかし伊井野だって鬼じゃない。光上なら清く正しい付き合いをすると確信している。光上のためになるのなら、そう思うと協力するのもやぶさかではないのだ。

「思えばもう頼れるのは伊井野ぐらいしかいないんだ！」

「そ、そうですか？ それなら私の方から言いますね！」

「こいつのチヨロさが怖い」

伊井野チヨロい女ミコ。頼られることにめっぽう弱いのである。

御行からチケットを受け取り、伊井野は毅然とした態度で生徒会室へと入る。その後ろから気まずそうに入ってくる御行と石上に、中にいた光上たちは首を傾げた。

「光上先輩！」

「ん？ どうしたの伊井野さん」

「光上先輩に好意を寄せてる方がいるそうなので、このチケットでその方と出かけてあげてください！」

「そんなストレートに言うか普通!?!」

「人選ミスだったか……！」

石上が発狂し、御行が絶望的な顔になる。それで圭のことがバレるわけでもないのだが、これはこれで悪手なのだ。光上の抱く恋愛観のせいだ。

色恋話に藤原が浮かれる。その相手はいつたい誰なのだとはしやぎ出した。どう收拾をつけるか焦った御行を、静観していた四宮が助けた。四宮も圭の恋を知っている者の1人。選挙戦時に垣間見た光上の面倒さから、これは良くないと察したのである。

甲高く響くように手を鳴らし、浮かれていた藤原さえも静かにさせる。全員の視線が四宮に集まったところで、彼女はにこりと微笑んだ。

「その方が誰かはこの際置いておきましょう。今の流れで誘われたと知れば、その方も複雑でしょうから」

「あ……。すみません、私ったら……」

「伊井野さんなりの援助だったのでしょうか。そのお気持ちは素晴らしいものですし、方法はこれから覚えましょうか」

「はい……」

「光上くん。せっかくですから、あなたがお誘いしたい相手を選んだらどうですか？ 例えば、普段お世話になってる方とか、いつも頑張ってる子とか」

「なるほど」

例を2つ示したものの、そのどちらもが圭のことを言っているのだと御行と石上は察した。彼女の機転にアイコンタクトでお礼を言う。「お節介を焼かせていただきますと、水族館には男女で行くほうが一般的ですよ。デートスポットでもありますから」

ダメ押しの一撃。先程の提示では、御行が選ばれる可能性が高かった。それを先に潰したのである。一般的なことのほとんどは知識として抑えている程度の光上。社会的にも中間な位置を測っておきたい彼にとって、一般的という言葉は有力に働く。

あとの問題としては、早坂が選ばれかねないことなのだが、万が一誘われたら断るように手早くメールを打っておいた。これで圭が誘

われるという未来が定まる。

「購買のおばちゃんか」

「圭ちゃんと行きなよ。ぶっ殺すよ?」

「はい」

圭の気持ちは気づいていないものの、2人はお似合いだと思っている藤原。ここで圭以外の選択肢を出すことを決して許す気はなかった。

こうして圭は水族館デートに誘われ、生徒会メンバーが尾行するこ  
とが決まったのだった。

「そろそろ次の場所行こっか」

「は、はい」

初々しいほどに2人は緊張していた。意図せずにデートが発生したことはあるものの、デートだと認識して誘い誘われ、待ち合わせをして出かけるのは初めてのことで。誘うのも誘われるのもお互いに初めてのことだ。2人とも服装をどうするか悩んだりした。

光上は使用人に相談したところ、使用人たちが大騒ぎ。全員での議論が始まり、白熱した結果選ばれた服装を光上は着ている。圭のことを考慮し、ブランド品を避けての組み合わせ。

反対に圭は、1人で何役かを分けながら作戦会議。それとなく萌葉や千花から、以前の買い物のことを聞いていたのも役に立った。

「次は2階になるみたいだね」

時間こそかかったものの、その分1階にいる海洋生物を見られたのも事実。入ってすぐの場所では、四季と生き物の調和をテーマにしたエリアがあった。その次にはカフェバーもあり、そこで2人は飲み物を購入している。ボトルで販売されているため、持ち歩きが可能なのだ。

エスカレーターで上がっている最中、2人の会話はなかった。いつもならその時間も気にならないのだが、今日は気まずく感じてしま  
う。

「白銀さんは水族館に来たことあるの?」

「えつと……小さい頃に。あまり覚えてないですけど」

「そうなんだ」

そこで途切れてしまう。手は繋がっているのに、どうにもいつものように波長を合わせられないでいる。エスカレーターから降りて数歩進むと、そこは円形のスタジアムになっていた。イルカショーがここで行われるようだが、次のショーが始まるまで時間がある。他の場所を見て回ってから戻ってくる方が良さそうだ。

他の人の邪魔にならないように壁際に寄る。一旦圭から手を放した。その事に圭の胸に棘が刺さった。彼と繋いでいた手が空を掴む。行き場をなくしてしまった。その手をだらりと下げそうになったところで、彼は自分の両手で頬を思いつきり挟むように叩いた。

「っ、ふうー」

「光上さん？」

「ごめん。調子狂ってた。せつかく水族館に来たのに、このままじゃ楽しんでもらえないし、それじゃ駄目だからさ」

気合い入れ直したというか。強引に気持ちを切り替えたようだ。決してヤケになったわけでもない。彼の緊張はなくなり、いつものような雰囲気が変わる。下がりかけていた圭の手に、自分の手を近づける。

「いいかな？」

「あ、はい。私からもお願いしたいくらいです」

「……ははっ。照れくさいな」

そう言いながらも、優しい笑顔とともに圭と手を繋ぐ。彼女の方からもしっかりと繋ぎ直された。仕切り直しだと言わんばかりに。彼女もまた、緊張が和らいだようだ。

「この隣りでもショーがあるみたいですよ」

「見に行こっか」

「はいー」

イルカショーと入れ替わるようにショーが行われているようだ。2つのショーを交互に。間に空き時間もあるようだが、せいぜい15分くらいのもの。今から見るショーはもう始まるらしく、開幕とほぼ

同時にそちらに入った。後ろの席しか空いていないが、見る分には十分だ。

こちらではアシカのショー。その前座として、ペンギンが登場していた。よちよちと歩いている様はなんとも愛らしい。

「かわいい……！」

「ほんとにね」

彼と繋いでいる手に力が入る。彼女がどれだけ興奮しているのか物語っていた。瞳を輝かせてペンギンを見ている彼女も可愛らしく、光上は自分が今どちらに対してかわいいと思っっているのかわからなくなっていた。

「ぎゃあああー。ペンギンさんかわいい!!」

遠くの女性や子供の興奮した声の中で、何やら聞き覚えのある声。具体的には生徒会で書記とかやってそうな声も聞こえてきた。圭はそれに気づいておらず、もしやと思っって書記を探し出した光上の胸をぽんぽんと叩きながら、ペンギンの動作について話しかける。

「ほら今跳ねました！ あの子かわいくないですか！」

「本当だ。たしかに愛くるしいね」

「ですよー！」

探し出すのは中断。今は圭との時間を優先だ。彼女が指差すペンギンに目をやる。ぴよこぴよこと階段を跳ね上がっている。登った先には滑り台があり、そこから水槽に滑り込んでいくらしい。既に何羽か滑っていつているが、彼女のお気に入りの子は今からのようだ。ものの数秒でお気に入りの子が決まるのは、女子の特徴だろうか。

「頑張っ……あと一段！」

応援がしつかり声に出てる。彼女のその姿に、彼もまた頬が緩まる。

彼女の推しが最上段まで上がった。その頑張りに彼女がまたも興奮。あとは滑るだけ。そこに近づいていくペンギンを彼女はじーつと見つめる。ペンギンは滑る寸前まで行ったところでプイツと背を向けた。滑る気分じゃないのだろうか。

見守っていた観客のほとんどが心でツツコんだであろう瞬間。そ

のペンギンが後ろ向きで滑り出した。慌てた様子からして、うつかりなのだろう。これはどうなんだと光上は隣りに座る彼女に目を向ける。

「ドジっ子なのもいいですねー！」

可愛さは正義だった。  
「なんの問題もないようだ。」

そこでようやく彼女の興奮状態も落ち着き、さっきまでの自分がプレイバックされて急に恥ずかしがる。空いている手で顔を隠しながら俯き、消え入りそうな声を絞り出した。

「忘れてください」

「白銀さんのそういう一面が見られてよかったよ」

「もうっ！ 光上さんのいじわる」

「そんなつもりはないんだけどな……」

「……じゃあ秘密にしてください」

「わかった」

恥ずかしがったり頬を膨らませたり。圭がころころと表情を変えるのも珍しい。それだけ圭が素直になれている証で、光上への好意の表れ。徐々に自分を出せていけている。そしてそれを受け入れてもらえている。そのことの喜びを圭は噛み締めていた。

「ペンギンで忘れてましたけど、アシカショーがあるんでしたね」

「忘れないであげて!？」

そう言いながら、アシカが芸をするたびに笑顔で拍手を送っている圭の純粹さに、光上もまた好感を抱くのだった。

アシカショーが終わると、今度はイルカショーがある。それが始まるまでの時間を、他を見て回りながら過ごすことに。時間からしてどこか1箇所が限度。それならばと2人が向かったのは、この水族館の目玉とも言える海中トンネル。長さ20メートルのトンネルで、頭上からは自然光が射し込む。

中を泳いでいるのはマンタやエイといった海洋生物。それ以外にも一部のサメが混ざっているようだ。左右だけでなく上も水槽の中。この仕様は年齢問わず人気が高い。2人も空いている場所で立ち止まり、雄大な景色に没入する。

「本当に海の中にいるみたいだね」

「すごいです……」

2人の視線の先からマンタが近づいてくる。トンネルに当たらないように泳いでいるが、スレスレを泳ぐことよくある。間近で見られるだけでなく、真下からも見る事ができる。その光景に目を奪われないわけがない。視線で追いかけているうちに、2人の体は向かい合う形に。マンタから目を離れたところでそれに気づいた。

「白銀さん？」

目が合ったら、圭は光上に半歩近づいていた。距離が近くなる。繋いでいない手が肩に添えられ、視線は真っ直ぐに向けられる。その瞳に映るのは、不安と覚悟。

「私……もつと光上さんに見てほしいです」

「それはどういう……。白銀さんのことは見てると思うんだけど」

「それは感じ取れています。きつと、光上さんは他の方を見るよりも私を見てくれています。でも……少し違うんです」

「違うってどういうこと？」

僅かに瞳が揺らいだ。少し瞳が潤んでいるのは気のせいだろうか。

彼女は小さく口を開き、一旦閉じてから意を決したようにもう一度開いた。その頬は僅かに上気している。

「女性として見てほしいんです」

「……それは」

「私のことを、もつと知ってほしい……。光上さんのことも……もつと知りたいです」

光上は同じ枠じゃない人を恋愛対象から外していた。特に年下の人はそうだ。これまでそうしてきたし、これからもそうするつもりでいる。それでは自分の想いは届かない。叶わない恋なんかには憧れない。惹かれない。この気持ちはそんな遊びじゃない。

ならばどうするか。枠組みという壁を取り払えばいい。壁を作ることで調整する距離感を狂わせる。自分の力だけでなく、彼自身からも崩させる。そうしてようやく始められるのだから。



粹組みという考え。先輩後輩という言葉。それは実に便利なもので、日本では1歳差でもその上下関係が生じる。そしてそれは距離を簡単に保てるものだ。言い訳にならないような言い訳ができる。

しかし、彼女にそれはもう当てはまらないのではないか。勇気を振り絞り、作っている壁を突破をしようとしている彼女には。

1人の女の子にここまで言わせてしまった。粹組みという言い訳は無礼というものではないか。

自分の信条を曲げるか。彼女の覚悟を踏み躪るか。

彼は後者を選べなかった。

それは、彼女が相手だったからなのかもしれない。

## 第26話

光上晶は恋愛関係に非常に疎い。これは彼がこれまでそういったものに触れなかったことが1つの要因だ。誰とでも一定の距離を保つため、そういった踏み込んだ話に触れる機会が少ない。恋愛をテーマにした作品にあまり触れていないのも要因。さらに言えば、彼の家庭にも要因が潜んでいるのだが、なんにせよ彼は恋愛に疎い。

しかしこれはそのままにしていいことではないと、彼だって以前から思っていた。御行と四宮を参考例として、恋愛を学ぼうと自ら打開策を打ち出している。早坂に言わせれば、参考例が悪いのだが。

さらに課題は別方面からも来た。これまで仲のいい後輩という距離で接していたと思っていた圭に、女性として見てほしいと言われたのだ。そこまで言われたら彼だって気づく。いくらなんでも察する。察した上で、たしかにそういう見方をしてこなかったことも自覚した。

御行の妹という認識から、白銀圭個人へと認識を改めるまでは非常に早かった。しかし、そこに男女のそれを一切挟んでこなかった。圭には好感を持っている。だが、女性としてどうかと聞かれたらまだ答えられない。光上はその見方をしてこなかったのだから。「仲はいいけど付き合えるかは別」なんてよくある話だ。その次のステップだと、「付き合うけど結婚したいかは別」だったりする。

女性としての圭を見ていく。そう言うのは簡単だが、では実際どうしたらいいのか。それがさっぱり分からない。女性的な魅力とはなんだろう。光上は頭を悩ませた。富裕層である光上と一般人である圭ではそこに認識の差が出るのではないか。圭が見てほしいものは具体的に何なのか。光上は面倒な方向に悩みを深めていつていた。

「彼女のことで相談したいことが」

そんな彼にとつて渡りに船だった。柏木の彼氏こと田沼翼が生徒会室に相談に来た。光上は戦力外だが、この場にはラブ探偵を自称する藤原と、絶賛恋愛頭脳戦中の御行、観察力や洞察力に長けた石上が

いる。彼らの分析もまた、光上にとって学びとなるのだ。その手にはメモ帳とペンが既に握られている。

「俺……彼女と喧嘩しちゃって……」

「つしやあザマアみろおお。そのまま振られる！」

「石上早い。それはもう少し事情を聞いてからの反応だ」

「喧嘩は別れのリーチなのか」

「光上それはメモるな！ 喧嘩してすぐに別れに繋がるとは限らん！」

自分の疎い分野について学びたいという光上の決意は、生徒会メンバーも耳にしている。本人の口から語られたためだ。その流れで水族館の件を聞かれたりしたが、恋愛の学習への協力関係を結ぶことで事なきを得ていた。圭は気づいていなかった。

「喧嘩の原因はなんですか？」

「それがわからなくて……。おこなのはわかるんですけど、喋ってくれたかと思えば……」

——私はどうして怒ってるかわかる？

「知らんがな」

「光上お前言われた時に絶対それ言うなよ！」

男が戦慄するワード。しかし恋愛が絡むとポンコツで地雷を踏む光上は、この場でも最悪の答えを呟いてしまった。仮に彼女ができて同じシチュエーションになったら、その瞬間に別れてもおかしくない。

女性は共感力やエピソード記憶が男子より秀でているとされている。共感されたいという気持ちが強いのだ。今の答えは明らか拒否となる。タブーである。

藤原から受けた解説をメモに書き込んでいく。恋愛に関心を示したまではないが、今のままでは圭が悲惨な目に遭う。生徒会メンバーは光上の教育を徹底しようという決意を固めた。

「ラインのアイコンを猫に変えたんですよ。そしたら怒ってしまっ  
て」

「えっ！ なんで!?!」

「それがわからなくて……」

猫が嫌いなのかと御行は考えたが、そういうわけでもないらしい。藤原は柏木が束縛の強い女の子なのではと分析したが、無意味に怒るような人ではないとのこと。

「石上。束縛が強いって例えばどんな人がいるわけ？」

「え、まあよく言われるのは、行動を制限したがる人ですね。他の女子と喋るなどか、SNSのアイコンはこれにしろとか。自分だけを見てほしいって欲が強い人ほどそうなります」

「自分だけを見てほしい……」

「……あつ！ 圭さんはそういう人ではないですよ！ ね、会長！」

「も、もちろんだ！ 勘違いするなよ光上！」

「それぐらいはわかってますけど？」

「腹立つなコイツ！」

「石上俺が許す！ 一発殴れ！」

藤原から受け取ったハリセンで光上は一発叩かれた。

相談から脱線したのだが、その正解を石上がゲームをしながら言い当てる。石上曰く、アイコンを変えたのがいけなかったらしい。前のアイコンは2人のツーショット。ラブラブアイコンだ。「付き合っていることを周りに隠そうとしているのおこ」となる。

共感は共有することで得られる。パールツクが嬉しい女子も少ない。

「光上くん。カバンにつけてるキーホルダーってこの前買ったやつですか？」

「うん。白銀さんと買ったやつ」

「絶対に外しちゃ駄目ですよ」

「そうみたいだな」

付き合う前にそういうことするのか。御行と石上は微妙な顔をしたが、首を突っ込まないことにした。

次の「何おこに対しておこ」は、柏木が風邪で休んだ時のことらしい。心配し、コンビニでいくつか買い揃えてからお見舞いに行ったのだが、門前払いされてしまったのだとか。

「柏木さんって難しい人だなー」

「これは難問だ……」

藤原は浮気説を提唱したが、その時に柏木の母親もいたため、それはないだろうと否定される。御行は妊娠説を提唱したが、翼曰く「ちゃんとしてる」からそれはないとのこと。清い付き合いなのかは各々の判断に任せられた。

「答えていいですか？」

「えっ、石上くんわかるの？」

答える前の確認作業として、彼女の部屋に入る前に待たされたりしないかと聞かれる。翼はいつも5分ほど待たされると答えると、石上は確信を抱いた。曰く、風邪を引いていてその日は片付ける元気がない。「急な来客は困るおこ」なのだそう。

「そうだったのか……。白銀さんに悪いことしてたんだ……」

「急に部屋に上がったことが？」

「前に倒れた時に白銀さんの部屋で看病された」

「シチュがおかしいでしょ！ 順番もへったくれもない！」

「そういえばそんなこともあったな。あとは圭ちゃんの誕生日にサプライズ帰国した時か」

それを聞いて石上がドキリと固まる。サプライズ帰国をさせた功労者石上。どうやら失礼なことにも加担してしまっていたようだ。

光上がサプライズ来客はNGだとメモ帳に書き込んだところで、御行が石上に疑問を抱く。

「お前女心わかってるのになんで彼女できないんだよ！」

「わからない方がモテるみたいなんで」

「こ、これあげます」

「いりませんよ。アホだと思われる呪いのアイテムでしょ」

そう言いながら結局石上は、藤原から渡された帽子を被る。律儀とどうか従順というか。四宮から後輩として可愛がられているだけのことはある。

そして飛び出す次のクエスチョン。柏木がファッション雑誌を読んでいる時に、どの子が好みかを聞かれたのだという。その雑誌に

載っているこの中から正直に選んだらおこになったのださうだ。

「そりゃ柏木さんを選ばなかったからだろ。さてはバカだな」

「光上くんそんな事を言われる日が来るとは……」

「光上先輩ならちゃんと言えられるんですか?」

「好みのファッションを選んだ上で、この服を着てる君って言う」

「あははく光上くん。それはキモいですよ」

「マジか……」

ならばどうすれば正解なのか。落ち込んで大人しくなった光上は、メモ帳を片手に右上に視線を向ける。「もう答え出たやん」と思っているが、現状では石上の答えが模範解答となっている。言わなければいけないらしい。

「光上先輩が言ったように、柏木先輩を選べば正解です。ただし、言うのはそこまで。余計なことは付け足さないのが身のためです」

「突き刺さるなあ」

「想像にはなりますが、そこで柏木先輩を選んだとして、冗談だと受け取られかねないでしょう。しかしそこで退いてはいけません。柏木先輩という選択肢以外を選べば怒る巧妙な罠です」

「選んでしまった場合は?」

「それならその女と付き合えばいいじゃんおこが起きます」

「自分から聞いた癖に!?!」

「理不尽!」

「そういうもんです」

女性は時として理不尽。新たに光上のメモが書き込まれる。しかしふと首を傾げる。これが圭に当てはまるのかと考えると、そうでもなさそうな気がするのだ。一応参考程度に頭の隅に置いておくとして、光上は思考を切り替える。

「じゃあこれは!?!」

つい最近、2人でゲームセンターに行った時のことらしい。ゲームで格好いいところを見せようと思い、対戦ゲームでポツコボコにして勝ったのださうだ。

「ポツコボコにしたからだろおが!!」

石上。ついに敬語が外れる。

「怒ってんのもそれが原因じゃねえの!!」

「言われてみればそうかも……」

「こいつただの馬鹿じゃねえか!!」

「落ち着け石上! これでも先輩なんだから!」

対戦ゲームをやる時は注意しようとメモを取る。ゲームにもあまり触れない光上が、圭とゲームをする日が来るのかはわからない。来たとして、平和なボードゲームかパーティーゲームだろうか。

圭のプライドの高さからして、負けず嫌いだろうけども手加減されたくないとか思いかねない。そこはまだ光上の知る由もないのだが。

「白銀の家ってゲームあんの?」

「ん? いやないぞ」

「うーん、あの子どういうゲームするんだろ」

「こればかりは俺もわからんな。それに、ゲーム以外にもいろいろと遊べるものはあるだろ」

「それはたしかに」

ついこの間水族館にも行ったのだ。今度は動物園など言ってもいいかもしれない。大きめの場所だとサファリパークもある。以前に生徒会で話題に上がったテーマパーク。そこに2人で行くのも無しではない。デイズニーは駄目。

いくらでもやりようはあるものだなと光上は頷く。しかし、それって付き合う前から行く場所でもないのでは。もちろん人それぞれにはなるのだが。

「男女の関係だと、ABCがありますよね」

「アダルトビッチチェンジ?」

「別れてるじゃないですか! そうじゃないですよ!」

「Aがキス、Bがペッティング、Cがエッチなことです」

「まったくABCではないが?」

「頭文字ではないので」

これは一般的に考えれば付き合ってからのことである。光上がこれを知らないことには誰も驚かない。翼もさつきまでの様子から察

していた。彼は今勉強中なのだ。

ちなみに近年では「H I J K」があるらしい。「Hエッチなこととして、I愛が生まれて、Jシユニアができて、K結婚する」だとか。こっちは完全に語呂合わせであり、俗に言う「できちゃった婚」である。つまり、田沼の血筋のことを言う。

「ペッティングがわからないって人も多いですが、Cの前段階です。言葉にしてしまえば、胸を触るとかそんなんですね」

「女子がいる前でそんな話する?」

「えつと……あの……」

「藤原さん退席したほうがいいんじゃない?」

「そ、そうします! 終わったら教えてくださいね光上くん!」

ラブ探偵千花つち。彼女は恋話が好きなのであって、そこから先の踏み込んだHな話が好きなわけではないのだ。父親の検閲もあり、免疫とか無いに等しい。ちなみに光上も免疫とかない。普通に耳が赤くなってる。しかしこれも勉強なのだと思って耐えているだけだ。

ついでに言えば、看病された時に胸に触れてしまったことを思い出しているだけだ。あれは自分の意志ではないのだが、B判定なのだろうか。聞くに聞けない内容だ。

「ABCの進み具合もそれぞれですからね。そういうのがあって程度に把握しとけばいいかと」

「参考例はそこにいるがな」

「え、いやー。さすがにその話はちよつとね」

「言いたくなければ言う必要はないが」

「AからCまでは間2ヶ月くらいかな」

「言うのかよ!」

「というかコイツ認めやがった!」

節度を持って清く正しいお付き合いをしているのではなく、しつかり避妊しているということだったらしい。御行がさつき作った翼への信頼はあっさりと崩れ去った。

「この話はオフレコですよ」

「清々しく開き直りやがって!」



「ちなみに光上くん。大人のキスはAとBの間、いわばA＋だよ」  
「おとなのきすつてなに？」

「がはっ！ 彼はなんて純粹なんだ……！」

「勝手に自滅しやがった！ トドメ刺してやろうか！」

「ブレーキ踏め石上!!」

光上の無知純粹ささにダメージを受けた翼。その彼にハリセンで追い打ちをかけようとする石上。それを羽交い締めにして止める生徒会室は完全にカオスな空間となっていた。

生徒会室に入ろうとして、小さく扉を開けたところで伊井野ミコは固まっている。まさかこの部屋でそんなディープな話が繰り広げられているとは。彼女もまた純粹な少女であり、免疫などほとんどない。顔を真っ赤にして固まり、それに気づいた光上が近づく。

「ひっ、あ、あの……私は何も聞いてないです……！」

「あ、やっぱりこれってその手の話なのか。1つ聞いてもいいかな？」

「……私に答えられることでしたら」

少し葛藤したものの、尊敬する先輩からの質問。できれば答えたいという思いが、伊井野の逃げ道を塞いだ。

「大人のキスつてなに？」

「はうっ！ ごめんなさいお答えできません！」

そう言つて伊井野が走り去り、光上は取り残された。彼の後方では未だにカオスが繰り広げられ、困った彼は最後の頼みの綱の場所に移動する。その人物の居場所はわかつているのだ。

いつもと同じ空き教室。そこは中庭にいる四宮を捕捉することも可能で、早坂は窓からその様子を見ていた。

そんな彼女の左右が後ろから伸びてきた手でそれぞれ塞がれた。驚いて振り返ると、そこにいるのは光上だった。彼だとわかった瞬間安心し、ほつと息をつく。光上が生徒会に入ってからというもの、あまり放課後に一緒にいることも少ない。彼の方から来たことが少し嬉しかった。

「どうされたんですか？ この手はなんですか？」

「もう頼みが早坂ぐらいしかいなくてな」

「どういふことですか」

あくまでフラットな調子で話す。弾みかける心を冷ます。この心は仕事の進捗の喜びなのか、それとも本心なのか。早坂は自分でもイマイチ掴めていない。いや、理解しないためにわざと目を逸らしている。

彼の真剣な眼差しにたじろぐ。選挙期間の時に見たあの目とは違う。敵対する人を見るあの眼差しとは。真っ直ぐなその目がなんだか眩しい。汚れを知らながらも輝きを失わない目。

「大人のキスを教えてほしい」

「……え、ええっ!?!」

被害は早坂にも及んだのだった。

結局光上は大人のキスが何なのか分からなかった。分からなくてもまあいいかと光上が割り切ったと知った時、早坂は光上をハリセンで叩いたとか。

## 第27話

光上と圭の関係に生徒会メンバーの注目が集まっている。伊井野は先日の水族館にて2人の状況を知ったし、藤原も確信を抱いた。

2人の状況は、御行と四宮にとってはいいカモフラージュとして作っていた。それとなく誤魔化すこともあるが、以前よりも恋愛頭脳戦がやりやすい。風通しがいいのだ。

「高等部の仕事なんだし手伝わなくても」

「いいんです。私がそうしたいので！」

今も圭は光上の隣りに座り、花のような笑みを浮かべながら彼の仕事を手伝っていた。光上の役職である庶務の仕事は幅広い。簡単に言えば、事務作業を担当する役職だ。言い方を荒くすれば雑務担当になる。あらゆる仕事を一手に引き受ける。

この生徒会では、会長や副会長とほぼ変わらない仕事内容。会長ならばその立場上、承認が必要なものを優先的に。副会長はそれに集中させるためのサポート。そのために庶務は、どちらかと言えば副会長の仕事に近いと言える。光上の場合、副会長や書記のサポートにまで手を伸ばしているが。

おかげで楽ちんですと藤原は喜び、四宮はそこまでしなくていいと言って極力彼に仕事を回さない。その状態を知った圭により、藤原の仕事量は元に戻されたわけだが。いや、ひよつとしたら、前より多いかもしれない。

「けど白銀さん、中等部の仕事もあるでしょう？」

「石上先輩と伊井野先輩のおかげで、だいぶ効率的に終わらせられるようになりましたから。本当にお二人には助けられています」

「いやあそれほどでも」

1年生であるため、後輩がいない2人にとっても圭の存在は大きかった。石上はその経歴から、伊井野は真面目過ぎる性格から、親しい後輩が全くいない。伊井野の正義感に憧れている後輩もいるにはいるが、近寄りがたいらしい。

ともかく、そんな2人にとって、先輩として頼られることはとても心地良いことなのだ。「頼りにされる」ということが魔力を帯び、2人の思考力を低下させる。具体的には、「もっと力になってあげたい」という欲求が生まれる。その結果、圭が持つてくる仕事を教えるついでに手伝ってしまうことも。

「圭さんと一緒に過ごさせるのは再来年度ですが、その時はぜひ生徒会に入ってください!」

「おいおい伊井野。会長になってる前提かよ」

「当然でしょ」

「その時はぜひ。応援してます!」

「はあっ! なんて素晴らしい子! 会長この子もらつていいですか!」

「いいわけないだろ! 何言ってるんだ君は!? 狂ったか!」

生徒会が発足してからの勧誘にはなるが、石上という前例がある。圭の入学を待ち、その席を開けておくことも可能ではあるのだ。受験勉強との両立も、伊井野ならやり切ってみせるだろう。今の彼女の頭の中は、「圭と一緒に生徒会をしたい」の一点に染まっているが。

さらに圭の純粋な応援でオーバークル。まとも枠なはずの伊井野がおかしな発言をしましてしまった。白銀圭、ある意味魔性の女なのかもしれない。中等部で人気が高いのも納得だ。

「皆さん、そろそろ一旦お茶にしませんか?」

「ん? ああ、時間もそれなりに経っていたか」

「ここで一区切りつけるのもいいかもな」

もちろん四宮だつて、全員の進捗を見ながら提案している。それぞれがキリのいいタイミングを見計らつたのこと。書類が整理され、テーブルの上が片付けられる。四宮が淹れたコーヒーが人数分配られた。

「かぐやさんもこっちで座りましょう」

「ではお邪魔しますね」

藤原の誘いに乗り、四宮もソファに腰掛けた。彼女は生徒会室の中で立っていることが多い。後輩である石上と伊井野にとって、その時

間はなかなか気まずかったりするのだ。先輩を差し置いて自分たちが座っていることが。しかし四宮相手に座るように勧めるのも難しく、藤原が救世主に感じられた。

(……俺一人だけ離れてる)

そんなことをすれば、会長席に座っている御行だけがハブられているような状況が出来上がる。しかし御行がその席にいるのも自然なこと、近しい状況もよくあったこと。違いとしては、四宮が御行の近くにいるか否かである。

だがここで御行が自らその事を指摘してはどうなるか。ぼっち状態が寂しいと取られるだろうが、少し見方を変えれば「四宮が近くにいないことが寂しい」となりかねない。藤原という災害は、うまく付き合えば強力な味方となるのだ。

(いや、石上か光上が指摘してくれれば!)

抜け道はそれしかない。伊井野は「会長は会長席に座るもの」と思っていて指摘することはない。藤原は絶賛会話を楽しんでいるし、さつき四宮しか誘わなかったことから、御行に声をかける可能性が低い。圭と四宮は絶対じゃない。消去法で男子しかないのだ。

「萌葉から聞いたんだけど、中等部の生徒会長が圭ちゃんとデートするって話があるとか」

「え、なにそれ」

「おやおやく? 光上くん嫉妬ですか?」

「そういうのではなく」

圭からそういう話を聞いていなかったから、純粹に驚いただけである。圭からはいろいろと中等部での話を聞いているのに、それについては聞かされていなかった。

(あの話題では光上は期待できんか……。というかデートってどういうこと圭ちゃん)

この話題には誰もが食いついた。光上に惚れているはずの圭が、中等部の生徒会長とデートをする。その真相が気にならないわけがない。伊井野と石上はそれぞれ少し異なる反応を示したか。

その話題を出された圭は見るからに不機嫌になったし、光上に失望

されないか不安そうにしていた。つまり地雷である。

「私の知らないところで勝手に決まった話だし」

「そうなんだ？」

「生徒会選挙の時に、会長になったら私とデートできるって話がどこからか出て、それをみんな真に受けたみたいで。私はそんな話知らないし、そんな気サラサラないのに……」

「本人の意志なく決まったことなど契約にもなりませんね！ そんなものは無効です！ もし言い出しにくければ、私が協力しますよ！」

「中等部のことに高等部が首を突っ込むのはどうかと思うぞ」

「うるさいわね薄情者」

「いや俺も許されないことだと思ってるけどな」

男女間で起きるこういう問題は、石上にとつての地雷である。気持ち的には、伊井野と同じで中等部に乗り込んであげたい。しかし、中等部のことに高等部が介入しづらいのも事実。トラブルも人の成長を促す一面があり、それぞれのトラブルはそれぞれで対処することがこの学園の基本方針。

それを決めている者の息子であるはずの光上は、そこを気に留めたことないが。とはいえ今回の場合、圭に好意を寄せられている光上が動くとき火に油を注ぐだけである。この件に関して、光上は何一つ直接的なことができない。彼にできることは、光上に失望されないかと怯えている圭の手を、そっと包んであげるくらいだ。

「相手がちゃんと話をわかってくれたらいいね」

「……はい」

「一度できた噂は手強いですけどね」

「石上くん！」

「現実の認識は大切ですよ藤原先輩。ちゃんとわかってないと、余計に痛い目に遭ってしまうのは圭さんなんですから」

「そうですね……」

話題を出したのは藤原だが、何も遊び半分で言ったわけじゃない。萌葉から話を聞き、いい案が思いつかなかったから、生徒会メンバーに頼ることにしたのだ。

「ただ、圭さんであればその噂を弱めていくことも可能なはずです」  
「どういうことですか？」

「人望ですよ。圭さんは1人じゃないですし、人気もある。ご友人と一緒に真相を広めていけば、そのデートの話も消せるはずですよ」

「より効果的なのは、影響力の強い人間を味方につけることですね、いわゆるカースト上位の人間です」

石上の話をもっともなことだろう。悪くない考えだと判断した四宮が、さらにアドバイスを送る。内心では、出処を確かめて必要な措置を取ろうと思ってる。

「みなさん……ありがとうございます」

「困ったことがありますたら、いつでも相談にいらしてください」

（私今頼れる先輩になれてるんじゃないかしら！）

すでに好感度は高いのに、まだ欲しがる四宮なのだった。

その話はこれで一旦終わり、違う話題が出てきてその話が盛り上がる。この場所の居心地の良さに、圭は目を細めた。勝手に決まったデートの件があるため、今の中等部の生徒会は少し気疲れしてしまうのだ。

しかしここはそうならない。何よりも光上がいることが大きい。圭の気持ちを知っているのは、この生徒会員と早坂と父親ぐらいのもの。一応周りにはまだ隠せている。隠せているのだが、圭は気持ちを抑える度合いを緩めることにしたし、ここにいる人には知られていくから遠慮もしない。

プライドが高い彼女はもちろん葛藤した。悩みに悩んだ結果、そのプライドのせいで実らない方が後悔すると思ったのだ。だから、多少プライドを捨てても彼にアピールする。

光上に握られている右手に視線を落とし、そのことに頬を緩めたら光上との距離をさり気なく縮める。肩と肩が触れ合う程度に寄り、そのまま彼に体を預ける。頭もこつんと彼の肩に当てて。

（生徒会室でなにを！……でも、これくらいならまだ……ううっ！）

それに気づいて葛藤する伊井野。生徒会室を神聖視する彼女に

とって、この場でイチヤつかれるのは物申したい。異性交友も取り締まるほどの真面目ちゃんだ。しかし、光上と圭が相手という点で伊井野が口を出せないでいた。2人なら清い付き合いをするという信頼もある。……伊井野は2人が付き合っていると思っっているようだ。

(あれ、いいわね)

斜め前でそれを見ている四宮は、自分も御行とやりたいか思っただ。しかしそれを正直に言うこともできず、どうすればいいか頭を悩ませる。ひとまず、コーヒーのおかわりでも御行に淹れに行こう。

ソファから立ち上がり、コーヒーポットを片手に御行の隣りへ。予想通り飲み干していたようだ。御行からのお礼を貰いつつコーヒーを注ぐ。

(私が立ってたらできないじゃない!!)

最近どうにも調子が悪いなど思いながらコーヒーポットを元に戻す。ソファに戻ろうとしたところで御行に声をかけられた。どうやら髪に糸くずがついていたらしい。それを取ってもらった瞬間、四宮は倒れた。

「四宮?！」

「かぐやさん!」

「石上は救急車を!」

「はい!」

「伊井野は保険医を呼んでくれ!」

「光上先輩がもう行きました!」

「早いな!」

廊下は走るものではないが、今は緊急事態だ。光上は保険医を呼びに行きながら、早坂に電話をかけた。

『はい』

「状況は見てたろ」

『ええ。病院の指定をお願いしてもいいですか?』

「どの病院だ」

そうして早坂に指定された病院に行くように光上が救急隊員に頼む。かぐやが四宮家の人間だと伝えれば確実にそこに行くし、念の為



に光上も救急車に乗り込む。早坂は先にタクシーで病院に到着していた。四宮は検査が行われ、その間に早坂と合流する。

「光上さんの体の弱さの印象が強くて忘れがちですけど、かぐや様も丈夫な方ではないんですよ」

「さらつと俺をデイスってない？」

「季節の変わり目にはよく体調を崩しますし」

「スルーですか」

生徒会室での様子を、早坂もタブレットで見っていた。見ていたからこそ、あのタイミングで倒れた主人が心配だった。何かの病気じやないかと考えてしまう。

「……これ最近の流行り？」

「いえ。昔からの流行りです」

「昔からの流行りってなんだよ」

生徒会室での様子を思い出し、圭がやっていたことを早坂が真似る。今なら、主人が倒れて心配だという言葉が使えるから。

圭が踏み込むようになったのは、良い傾向だと思ってる。早坂はそれを応援したい。その思いとは裏腹に、仕事面で考えれば早坂も同程度のことをする必要がある。いや、本気で取り組むなら、圭より先を歩まないといけない。

そのことで胸が痛む。圭への裏切りが辛い。そしてそれをまた言い訳にして、光上の腕にしがみつくように腕を絡めた。

「早坂」

「いけませんか？ 彼女でもできたんですか？」

「いや……いないけど……」

「では問題ないですね。……私もいろいろと疲れてるので」

そう言われては光上は拒むことができない。早坂の苦労を一番気にかけているから。少しでも休んでほしいと思っているから。これが気休めにでもなるのなら。そう思うと何も言えなくなるのだ。

もちろん早坂はそうなると踏んで行っている。これは仕事なのだ。と誰かに言い訳しながら。

そうして待っていると、四宮の検査が終わった。光上と早坂は呼ば

れ、四宮がいる診察室へと入る。担当医は医院長の田沼だった。世界でも有数の名医の一人である。

「光上くんか。大きくなったね」

「前に会ったのも10年は遡りますからね。その節はお世話になりました」

「思い出話もしたいところだけど、目の前の患者が優先だね」

「先生。私は何の病気なんでしょう？」

「四宮くん。君の病気は——恋の病だ」

「……そういう名前の心臓病があるんですか？」

「いや心臓は健康だよ」

この名医曰く、四宮かぐやはめっちゃドキドキした結果倒れて救急車で搬送されたとのことらしい。断じて恋などではないと言い張る四宮を諭すように、田沼は何度も恋だと断定する。

「心臓の病気なんです！　ここまで胸が苦しくなったのは人生で初めてなんです！」

「じゃあ初恋なんじゃないかな」

「違うって言うてるでしょ！」

頑なに認めない四宮。最近恋愛に対しての認識を高めつつある光上でも、四宮のそれが恋だと思っている。光上以上に四宮の気持ちかわかっている早坂といえ、羞恥に耐えられない様子だ。真っ赤になった顔を両手で隠している。

「大丈夫か早坂」

「大丈夫なんかじゃないですよ……。かぐや様、私外で待っててもいいですか？」

「何よ早坂まで！」

「私だつてこの病院使ってるのに……。最悪……。どんな顔してこれから来たらいんですか……」

「ちよつと外出てよっか」

声を震わせながら嘆く早坂の背中を押し、光上が早坂を廊下へと連れ出す。四宮が何か文句を言っているが、聞こえないことにした。

「早坂ってほんと苦労してんな」

「ここまでのは初めてですよ……！　ううう……」

「よしよし。なんだったら俺が行ってる病院紹介するぞ」

「真面目に検討します」

光上の胸に顔を埋める早坂の頭を、あやすようにそつと撫でる。絹のように柔らかな髪。優しい匂いが光上の鼻をくすぐる。それに耐えつつ、丁寧に入入れされている髪を崩さないように気をつけながら、彼女の気持ちが悪く落ち着くまで撫で続ける。

主人の醜態というのは、早坂にとって相当キツイものらしい。あれは恥をばら撒いてるようなものだし、光上でも同情するものだった。少し前までの自分がアレに近かったということは自覚していない。むしろ質の悪さは光上が上だというのに。

早坂をあやしながらふと思う。早坂は光上や四宮より何倍も一般の感覚に近い。普通というものを演じられるように、積極的に取り入れている。だから、当然恋愛面も知識として把握しているものが多い。それならば――

「早坂って誰かを好きになったことある？」

「……え？」

「早坂も恋したりするのかなって。早坂の求める彼氏像ってどんなのか知らないけどさ」

「……」

顔を上げると、純粋な眼差しと視線が交差する。他の意図などなく、早坂はどうなのだろうと聞きたいだけのようだ。

どう答えようか迷った。冷静さを取り戻していくと同時に、今の状況への恥ずかしさもこみあげて来る。早まる鼓動は何なのか。これは本当に自分の気持ちなのだろうか。

自信なんて持てない。仕事を進めるチャンスでもある。彼の視線を自分に向けさせるチャンス。圭への裏切り。胸が痛む。彼になら癒やされそうだ。それも演技か。仕事のためだ。この感情の根源はなんだ。苦しい。

思考が纏まらない。

「早坂？　大丈夫か？」

今自分はどんな顔をしているのだろう。どう見えているのだろう。彼は何に対して大丈夫かと聞いてきたのか。

打ち明けたら楽になるのだろうか。そんな事はできない。それをしてたら彼はきつとその身を犠牲にする。圭の心が傷つく。誰も幸せにならない。

きつと1番良い方法は彼に気づかれることなく圭に負けること。そうすれば、被害は一人だけに抑えられるのだから。

「……わかりません」

だから、この入り乱れた心のまま、悟られることなく正直に話したらいい。そうしたら、彼は何も気づかないんだから。

「人のことはともかく、自分のことって鈍くなるじゃないですか」

「耳が痛い話だ」

「ふふっ。そうですね。好きな人ができたら、光上さんには言うかもしれないです」

「信用されてんのかな？ 光栄なことだよ」

「その時は、私を助けてくださいね」

「ああ。早坂のためなら惜しまない」

そう言われると胸が軽くなる。彼がそうすると断言する相手が他に何人いるだろうか。生徒会メンバーでもそうはならない。きつと、他は白銀兄妹くらいだ。

それでもいい。彼との付き合いは、その2人よりずっと長いんだから。

ガラガラつと音を立てながら診察室の扉が開けられる。反射的に彼から離れて正解だった。中からご立腹な主人が出てきたのだから。

「早坂行くわよ！」

「え、どこにですか」

「違う機器で検査してもらおうのよ！」

「えっ……」

「こんなの心臓の病気以外あり得ないんだから！」

田沼と助手が先頭を歩き。その後ろを不機嫌な四宮が歩く。さらなる醜態を晒すことになる主人の後ろを、早坂は涙目になりながらつ

いていくしかなかった。

数十分後、再度光上に泣きつく早坂の姿があったとか。

## 第28話

学校行事の中でも人気なものもあれば、賛否が別れるものもある。特に賛否が別れる学校行事は、体育祭ではなからうか。主に体育会系と文科系の熱量の差が。別の言い方をすれば、陽キャと陰キャで明らかにモチベーションが異なる行事だろう。

体育祭は他のチームとの競い合い。生徒たちの視点ではそうなる。その分け方は学校によつて異なるもので、学年の枠を消して紅白で分けたり。学年の枠を超えた競い合いなどせず、それぞれの学年でクラス対抗にしたり。3学年でのぶつかり合いにしたり。やり方はいくつかある。

秀知院学園では紅白戦が採用されている。学年という枠を超えたわかりやすい分け方。もちろん生徒会でも紅白別れる結果になっている。

同じクラスである四宮と光上は白組。それ以外が紅組である。御行を応援したい四宮にとって、この別れ方は残酷なものだった。敵チームの応援など謀反に等しい。なんとかならないのかと光上に迫ったりしていた。なんともならなかった。

(藤原書記と四宮のおかげでソーラン節もなんとかできたな)

2年生全員によるソーラン節。生徒会長である御行は最前列で行うのだが、ついこの間まで壊滅的なものだった。必死の特訓によりなんとかモノにしており、ガチな体育会系のソーラン節と遜色ないキレを出している。

「いいぞ〜みゆき〜」

(なんかいた)

息子の行事に足を運ぶ親の鏡。親であることから、息子の壊滅的なセンスは知っている。それをこの出来にまで仕上げたのだ。相当特訓したのも察しているし、その努力は素直に賞賛できる。

『以上！ 2年生によるソーラン節でした！』

「しつかりしろ光上いい!!」

アナウンズと共に倒れる1名。彼の隣りにいた男子が素早くそれを支え、ガチムチな男が救護テントへと担いで行く。少しざわついたものの、「まあ光上だしな」ですぐに皆落ち着いていた。

「あれ親父いねえ!？」

そちらに気を取られた間に父親を見失う。御行にとつてそれは由々しき事態だ。野放しにして何か面倒なことを起こされても困る。必死に探し出してなんとか見つけた。救護テントに運ばれた光上の下に行っているようだ。父親のその行動を喜んでいいのか迷いつつ、被害が起きないように手を打ちに行く。

「ソーラン節で倒れるってなかなかだな晶くん」

「面目ないです」

「圭には黙っておいた方がいいんだろ？」

「そうしてもらえるとありがたいですね」

「青いなあ。だが、俺の口はともかく手は止まらないようだ」

「ちよっ!？」

「やめてやれよ父さん！」

圭にラインを送りそうになっていたその手を息子の御行が阻止した。父親からスマホを奪い、入力中だった文字を消す。警戒してここに来ておいて正解だったようだ。

「なんだ御行来たのか」

「二重で心配したからな。というかなんで来てるの」

「暇だから」

「このっ！」

「そう言うな。写真だつて撮ったんだぞ」

「へ、へえ?..」

父親らしいところもあるんだな。そう思い、少し照れくさく思いながら、父親が撮ったという写真を見させてもらう。そこには、活弁な様子で精一杯太鼓を叩いている藤原千花がいた。

「おいこら！　なんで他人んちの娘撮ってんだ！」

「ま、待ってくれ。彼は私の手伝いをしてくれていただけなんだ」

今度はカメラを奪おうとした御行を1人の男性が止めに入る。そ

の男性こそ藤原姉妹の父親にして政治家の藤原大地だ。御行は藤原父に挨拶し、圭がお世話になっていることにも言及する。圭も御行も礼儀正しいことに、藤原父は好印象なようだ。

「いい育て方をされたんですね」

「いえとんでもない」

(まったくな！)

「最近になってようやく毛が——」

「な、なあ父さん。うちの購買のコロッケは絶品だぞ」

「ほう？ 来る機会も少ないし、食べてみるか」

「親孝行な息子さんで」

「いえいえ」

そうやって話しているところに、白銀父と入れ替わるように千花と四宮がやってきた。四宮が千花に付き添っていると云った方が正しいか。ともあれ、自分の親が同級生と話しているのは、子供からしたら恥ずかしいのだ。2人は光上の様子を見るという目的もあるようだが。

「娘さんにはいつもお世話になってます」

「本当ですよ」

御行の特訓にこれまでどれほど苦労したことか。感情の消えた瞳になっっていることから、その苦労が伺える。

そういえばそんな苦労話を聞かされたなあと、光上は保険医から渡された飲み物を飲みながら千花の話を聞いている。圭がいる時は全くだが、それ以外の日はよく千花が絡むようになったのだ。初等部の頃の距離感に着実に近づいている。光上としては警戒してる点だ。

「光上くん大丈夫ですか？」

「少し休めば大丈夫。眠気があるぐらいだから」

「なるほど。いつもなら光上くん、この時間は半分寝ていますからね」  
「器用なことしてますね」

倒れた理由は眠気だった。今日は圭が気遣ってバイトを休みにし、その分光上の睡眠時間も増したのだが、体に染み付いているそれは簡単に治らない。圭と出かける時は抑え込めるようだが、彼女は今い



ないのでこのぎまである。

「光上くと会うのは初等部以来か。懐かしいね」

「お久しぶりです」

「どれ、仕留めよう」

「何言ってるのお父様!?!」

「すまない。ついあの頃を思い出してしまって」

何言っただこの人という困惑と、その頃に光上は何をしたんだという困惑が御行と四宮の中で生まれる。光上自身まったく身に覚えのないことで、事実としてほとんど一方的な理由である。しかし父親なら生じてしまう気持ちかもしれない。

「光上が何かご無礼を?」

「初等部の頃に娘がだね……」

——おとうさま! わたし大人になったらあきらくとけっこんする!」

「なんて言っただことを思い出してしまっ!!」

「い、いつの話してるのお父様!! 恥ずかしいからやめてよ!!」

「藤原さんにもそのような時期が……」

「苦労してたんだな光上……」

「どういうことですか会長!」

千花にそういうふうに言われていたとは光上も初耳である。千花が隠していたのだから誰も知らないのは当たり前なのだが、たった今父親のせいで大暴露されてしまっている。ちなみに小学2年生の時のことである。

千花のその気持ちは消えたのは、仲が深まった結果絶妙に合わないと感じいたから。

「あら? 藤原さん、光上くんのこと下の名前で呼んでいたの?」

「そうですよ。熟年離婚みたいな形で疎遠になってからは名字で呼んでますけど」

「戻してもいいのでは?」

「それもありませんね」

「私は認めないぞ!!」

「これが藤原家の検閲か」

騒ぎ過ぎたことを保険医に指摘され、御行たちが解散していく。一気に静かになると寂しさもあるのだが、体育祭という熱気がそれを霧散させていく。次の競技を見ている光上の目を、誰かの手が後ろから覆った。

「だーれだ？」

「早坂だろ」

「ええー。せつかく声変えたのに」

「それぐらいわかるよ。前に手の感触も知ったから」

「それは引くし」

手の感触で当てられるのはシンプルに引いた。そういうことができる人は他にもいるだろうが、いざやられる立場になると気持ち悪いなど思ってしまう。

光上の隣りに腰掛けた彼女は、他の女子たちと同様に体操着を少し捲りあげて括っていた。お腹が出ている状態である。袖も捲っているため、肩も出していた。可能な限り露出していると言っている。光上はその姿を一瞥した後、視線をグラウンドに向ける。

「その格好はどうかと思う」

「やーらしー」

「目が行っちゃやうもんならだつて」

「ウチの肌見て興奮でもしちゃう？」

「うん」

「へ？」

椰揄うつもりがカウンターパンチ。光上にそんな事を言われるとか思っていなかった早坂は、急に恥ずかしくなっていそいそと服装を元に戻していく。

「恥ずかしいなら、しなかったらいいのに」

「光上くんのせいだし。欲情されたら困るし」

「欲情はしないけども」

「ばか」

早坂は持ってきたタオルで光上の頭を簀巻にした。何を考えてい

るのやらと思いながら、光上はされるがままにそれを受ける。視界がタオルに覆われると体を倒された。いつぞやと同じように、早坂の脚を枕にして。

「なんでまた？」

「眠いでしょ？ 次に出る競技の時に起してあげるし。仮眠取ったらしいよ」

「いやいや、なんとか起きてられるから」

「昼休みに圭が来るの？ その時に写真見せるけど、本調子じゃない様子見せるの？」

「……ずるいやつ」

「お互い様だし」

おとなしくなった光上から、すぐに寝息が聞こえてくる。やはり無理に起きようとしていたようだ。頑張り方がズレてて、頼ることが下手だなど思いながら、彼の髪をくしゃつと撫でる。

彼を寝させるまでにはいい。けれども膝枕まではする必要などどこにもない。しかし口実は用意してある。これも仕事のため。少しでも身体的な接触をして、女性として意識してもらう。彼を落とすためにはまずそこが必要な過程になるから。そういう事にして、そうしてあげたかったという本音を塗りつぶしていく。

この仕事に自分の感情なんて邪魔だ。苦しいだけだから、麻痺させていけばいい。ただでさえ、主人に対しての罪悪感で潰れそうなのだから。こうしないと心がもたない。そうやって難しい調整をしながら、最終的に彼と圭が結ばれるように誘導する。自分は当て馬になればいい。

自分のような人間に、人並みの幸せなんてご褒美はないのだから。

その考えを再確認し、彼の頭をギュッと抱き締めた。

約束通り、光上が次に出る種目の招集の時には起こしてあげた。彼が次に出るのは借り物競争。昼休憩の直前に行われる競技だ。光上を起こした後は自分の席の方へと戻っていく。

「愛どこ行ってたのー？ 探したよ」

「ごめんごめん。ちよつちコンビニで涼んでた」

「ずるーい！ アイス買ってきてくれたらよかったのに！」

「あはは、それ全然考えてなかったし！」

「ええ〜！」

こうして演じているのも楽しい。これはこれで仕事の一環だけでも、四宮家の人間らしさから離れていられる。ノリだけで駄弁りながら、借り物競争の応援。主人である四宮は、何やら石上を連れてゴールしていた。お題は後輩とかだったのだろう。

「次は……、光上くんじゃん！」

「これは貰ったね！」

ほぼ全員から好印象を貰っている光上なら、どんなお題でも問題にならない。適当にお願ひして回れば、対象物を持つ誰かしらが協力するだろうし、人物であつても光上なら断られない。さらに身体能力も悪くない。1位でのゴールという予想は固かった。

早坂もそうなるだろうと思つてた。それとして、どんなお題を引くのかは興味がある。

ピストルの音と同時に一齐に駆け出した。素人にしては良いスタートで、光上はそこから加速していく。一番乗りでお題箱にたどり着き、すぐにそれを引いたところで動きが止まった。

「何引いたんだろ？」

「変なお題だったのかな？」

「カツラとか？」

「それはセンスないっしょ！」

隣りでワイワイと話が盛り上がっている。それを聞き流しながら、光上は何を引いたのか考える。何か困るお題なのだろうか。そう思った矢先に光上は動き出した。条件を満たすための見当でもつけていたのだろう。

「悪い早坂。来てくれ」

「え？」

一直線にこつちに来たかと思えばそんなことを言われる。周囲から黄色い声上がるけど、それは期待外れになるからやめておいてほ

しい。

「なんでウチ？ 生徒会の人で書記ちゃんとかいるじゃん」

「早坂じゃないと駄目なんだ」

「きやあああ！ これはもうワンチャンあるんじゃない？」

「愛行つちやいなよ！」

「いやいや絶対そんなじゃないし！」

「とか言って満更でもないんでしょ？」

「そういうのじゃないって！ ああもう！」

この場にいるほうがややこしくなりそうだ。そう判断し、ロープを跨いで彼がいる方に出る。勝負事には真剣だからか、早坂が出たらすぐにその手を取って走り出した。早坂もその手に引かれるようになっていく。

「2人の逃避行！」

「ラブロマンスよ!!」

そんな声が聞こえてくる。そんなんじゃないのに。周囲からはそう映るのだろうか。もういつそ、ノセられたってことにして、そういう事にしてしまおうか。そう考えると、なかなか悪くない気分だった。気を抜くと口角が上がりそうになる。

しかしそんな時間はすぐに終わる。シンデレラタイムは馬車の中だけだったようだ。ゴールしてしまえば、協力者は先に戻らないといけないから。

「お題はなんだったの？」

「ギャル」

「……面白くないし」

「早坂は何で選ばれたかったわけ？」

「そんなの言うわけないし！」

光上の頬をグイツと押して強引に視線を逸らさせる。光上が引いたお題の紙を持って、さっさとその場を後にした。

そんな借り物競争が終わると昼休憩に入る。来ていた保護者は弁当を食べるか、開放されている食堂に行くか。生徒たちも、教室に

戻ったり外で食べたりと自由時間になる。

光上は正門へと向かっていた。待ち合わせがあるからだ。そこで待っていると、白い制服に身を包んだ少女が駆け足でやってくる。

「お待たせしてすみません！」

「いやいや！ そんなに急がなくてもよかつたのに」

高等部へとやってきた少女は、中等部にいるはずの圭だった。秀知院学園は、幼稚舎から中等部までなら体育祭が週末に行われるが、高等部だけ平日に行われている。圭は授業を休んでも光上の応援をしようと思つたが、それこそ光上が困る行為だとわかつている。

だからこそ、妥協案として昼休みに高等部に来ることにしたのだ。光上は行事で弁当を持ってきたことがない。親と離れていることと、使用人達が作らないように言われていることが原因だ。だからいつも購買のおばちゃんが弁当を用意している。

それを知った圭が、光上に弁当を作ると宣言した。一度は断ろうとしたものの、彼女の決断は固い。結局光上が折れてお願いすることになったわけだ。

「どこで食べましょうか」

「変に注目浴びてもなんだし、生徒会室にしとこうかな」

「わ、私は注目を浴びても構いませんよ？」

「ええ……」

それで噂されてしまえば、外堀から埋めていくこともできそうだから。注目を浴びることの羞恥を耐える強かさ。積極性を手に入れた恋する乙女は手強い。

「噂とか立つのはちよつと、ね」

「光上さんは私との噂が嫌ですか？」

「そういうことじゃなくてだね」

「すみません、揶揄っちゃいました」

嬉しそうに笑われると、光上もどう返していいかわからなくなる。ひとまず、生徒会室へと移動することにした。

彼の隣りを歩く彼女は、とても嬉しそうに微笑んでいた。先程のやり取りだ。彼は、圭との噂が立つことが嫌だということを否定した。

少しは、女性としても受け入れてもらえているということ。それが何よりも嬉しいのだ。

生徒会室へと入り、圭は光上と並んで座ると、カバンの中から弁当箱を取り出す。光上の分と自分の分。光上の方が大きめの弁当箱だ。「プラスチック容器になってしまつてごめんなさい」「ううん。作つてもらつてるだけでもありがたいから」

家庭事情により、余分な弁当箱などない。しかも年頃の男子用となればなおさらだった。妥協案として使い捨て前提の弁当箱。しかしその分張り切つて作つているし、保冷剤で冷やしてもいる。

体育祭ということを考慮し、光上の弁当はスタミナがつくようにおかずが配慮されている。そこまで考えてくれていることに、申し訳無さすら感じるのだが、圭はそんな言葉を望んでいない。

「やつぱりここにいたし」

「愛さん」

「お邪魔してごめんね。ウチもいいかな？」

「もちろんです！」

一瞬圭の目が警戒する人のそれになつたことに早坂は冷や汗をかいた。完全にノーマークだったが、この子はこの子で恐ろしい子になりうる。早坂の擬態は圭のセンサーに引つかからなかったようだが。

早坂は2人の対面に座り、母親から受け取つた弁当を開けていく。見に来てくれなかったことには怒つたし若干泣きましたが、お弁当は作つてもらえたので許せるらしい。

「圭に何枚か写真送つたけど見た？」

「はい！ありがとうございます！」

「ソーラン節は2年生全員だから撮れなかったけど」

「そこは父が送つてくれたので大丈夫ですよ」

「それはよかつた」

「……その写真つてもしかして」

「そのままかです」

「そっかー」

自分の写真が撮られて圭に送られていたようだ。そうでもしない

と授業を抜け出していたかもしれないし、そう考えると許容はできた。撮るなどは言わないが、一言言っておいてほしかったりする。「ところで愛さん。この写真についてお聞きしたいのですが」

「あ……」

「ん？ げほっ!？」

つい先程の借り物競争の写真だった。どうやらツイッターにアップされていたらしい。ツイート内容は「愛の逃避行」。早坂の下の名前も絡めてのネーミングなのだろう。

「こ、これは借り物競争で、お題がギャルだったから」

「そうそう。それで私が頼まれただけで、全然ツイートの意味は当て嵌まらないし」

「そうでしたか。それなら良かったです」

安心した圭は、スマホをポケットに閉まって箸を進める。浮気現場を目撃されたような空気が出来上がりはしたものの、その後は終始良好な空気で食事が終わった。

「ごちそうさま」

「お粗末さまです」

「やっぱり白銀さんの味付け好きだな」

「本当ですか？ お口にあつてよかったです！」

「これは光上くん胃袋を掴まれたんじゃない？」

「否定できないかもな」

光上のその言葉を聞いて圭は小さくガツツポーズした。そこから圭がどのおかずがどうだったかを1つずつ聞いていく。今後活かすために聞いておきたいのだろう。光上も、作ってもらったお礼として、1つずつ味を思い出しながら答えていく。早坂はそのやり取りを対面から微笑ましく見守っていた。

高等部は体育祭ということ、昼休憩がいつもより長く取られているが、中等部は通常通りだ。お弁当の話もそこそこに、圭は2人に見送られながら中等部へと戻っていった。昼休みとはいえ、敷地を抜け出している事自体問題な気もするが、そこは光上の方からフォローを入れることになっている。裏技中の裏技だ。



「これ、付き合ってるも同然のことしてますからね？」

「……そうなるよな」

「気がないのでしたら、これほど残酷なこともないです。最低な男ですよ」

「わかってる。……自分の中で答えがはっきりと出ないんだ。あの子のことが嫌いじゃないのは確かなんだけど」

「……いくら圭でも、年内には答えがほしいはずですよ」

「それまでには出すよ。必ず」

早坂は少し意外に思った。答えを出せないままズルズルいきそうだと思っていたから。なし崩し的に決着が着くのかもしれないとは思ってた。しかし光上の目にはしっかりと力が籠っている。たしかな覚悟がそこにはあった。

光上のことを見直し、その目に惹かれそうになった心に鎖を縛り付けた。

午後からの競技も順調に進んだ。石上のトラウマが刺激される出来事があったものの、御行が動いたことで石上も前に進むことができた。藤原も、伊井野ですら石上を応援。

光上は、ただそれを見守るしかできなかった。

「何も知らずに幸せそうな女。真相を知ったらどんな顔をするかしら」

「かぐや様」

「わかってるわよ。あれが石上くんの守りたかった笑顔なんだから」

石上にとって巨大地雷であった少女が帰っていくのを、四宮と早坂は離れた場所から見ていた。自分に得のないやり方をする後輩が、不器用なその姿が、四宮にとって可愛らしい後輩として映る。その彼がその身を犠牲にして護ったのだから、自分が壊すわけにはいかない。

「光上くんが何もしなかったのは驚きね。彼、石上くんに引け目を感じているのに」

「感じているからこそでしょう。会計くんの一件は、光上さんが入院した直後に起きたことですから」

「中等部にまで影響を及ぼすんだから、彼の存在も大きいわね」

「自覚がある分、余計に責任を感じてたようですよ。事件前に警戒もしてたようですし、退院した時にはすべてが終わってましたから」

「ええ。彼が帰ってくる前に終わるようにしたのだから当然よ」

「……かぐや様」

「あら？」

光上が帰ってきたら、生徒会での調査にも協力しただろう。そうしたら必ず裏側にも目を走らせる。違った結末を導き出す。彼は甘いから、制裁も優しくなる。クズなことをした人物相手にそれでは四宮が納得できない。だから、早急に自分よりもエグいことを平然とできる人間たちに情報をリークして終わらせた。

光上にとつては、これまでで最も悔いている案件である。それを意図的にやったという主人の言葉に、早坂の胸の内がざわついた。それを四宮も感じ取り、口に手を当てながら不敵に笑う。

「あらあら。早坂あなた、彼に近づき過ぎたんじゃないかしら？」

「……なにを言ってる——」

「友人としては応援したいところですけど、やめておきなさい。その身を滅ぼすだけよ」

「っ………！ ……そんなの……言われなくてもわかってますよ………」

——この身はもう、すでに滅びに向かっているんですから

## 第29話

体育祭が終わると次の行事は文化祭なのだが、多少の期間は開けられる。秀知院学園の文化祭は、一般的に見て時期が遅い方だ。12月で冬休み前に行われる。それまでにあるイベントとしては三者面談なのだが、生徒会の仕事が増えるわけでもない。つまり、生徒会も少し余裕ができる時期なのである。

「白銀もカラオケ行こうぜ。生徒会も今の時期は落ち着いてるんだろ?」

「ああ。まあな。でも歌は得意じゃないんだよな」

「そこはメインじゃないから気にするな」

「どういうことだ?」

その男こと風間曰く、いくつかの高校の人たちが集まる交流会のよなものがあるらしい。しかし自分たちだけでは行きづらいため、御行にも来てほしいという誘いなのだ。

「光上は白銀が来るなら行くって行ってたしよ」

「そうなのか。まあいつも断ってばっかで悪いし、今日は参加させてもらおう」

「よっしや来た!」

「さすが白銀だ! 芋づるで光上も確保!」

せっかくの誘いであり、断る理由も特にならない。前回誘われた時は、生徒会選挙に向けて活動していたために断っていた。そういう事を踏まえても、今回は参加したいのだ。駅前のカラオケに4時に集合だと告げられ、その旨が光上にもラインで送られた。

御行もそれに参加するという話は廊下で行われており、その声は四宮にも届いていた。もちろんその隣りにいる早坂にも。

「いいんですか? かぐや様」

「いいも何も、会長がご学友と過ごされるだけじゃない。私は束縛しない女なのよ」

「付き合っていないのによくまあ。というか、交流会の方ですよ」

「？」

「あれたぶん合コンですよ」

「止めないと駄目じゃない!!」

束縛しない女はどこへ行った。

四宮の合コンへの偏見はとても酷かった。健全なままで終わるものもあるだろうに。早坂も説明が面倒だからその認識のままにさせておくことにした。

「お目付け役としてかぐや様も行かれては？」

「いやよ！ そんな性欲にまみれた男共の群れに私を放り込むの!?

この薄情者!!」

「……そうですね。すみません」

「どうかあなたはどうかなのよ」

「は？ 性欲に飢えてませんか？」

「ごめんなさい聞き方が悪かったわ！」

性欲まみれの群れに飛び込まなくていいのか、という酷い煽り方ですら聞こえるセリフ。それをぶつけられた事に早坂はイラつとしたが、そういう意図ではないらしい。

「光上くんも行くって流れになってたじゃない」

「会長も彼も気づいてなさそうですね。どちらもこの手のことに疎いですから」

「けどその場に行けば気づくわよ？ たぶん光上くんも……気づくわよね？ 仮に気づかないとしても、他の女次第ではそうも言っていないわ」

「そうは言いますけど、そうやって寄ってくる相手をあの人が好むとは思えませんよ。第一、圭がいますから」

「……それもそうね。それならいいのだけ……よくないわよ！ 会長の方が解決してないわ！」

早坂の光上への信頼の高さに何も思わないわけでもない。ひよつとしたら、早坂も気持ち芽生えてるのかもと邪推する。しかし早坂の口から圭の名前が出てきた。それならもう、隣りから焚き付けることもするべきではない。そもそもやめておいた方がいいと思ってい

るのだから。

「私がそんな集まりに行つたと本家に知られたら勘当ものだわ……」

「確かに」

「……あ、何も私が行く必要はないのよね」

そう言つて四宮は強い目で早坂に視線を送つた。嫌な予感がしたものの、主人の命令には逆らえない。こうして早坂の合コン参加が決まつた。

光上に頼めばどちらもその場に行かないで済んだということをし、合コンが始まつてから気づく2人なのだった。

「おい、こういう集まりとは聞いてないぞ」

「いいや言つたね。交流会みたいなものだつて」

「最近白けてたからよ。気晴らしくらいに楽しんでけ」

彼らなりに御行を気遣つてのことだった。御行を意識し過ぎた四宮が、御行を避けるようになってしまった。その事にシヨックを受けていた御行を彼らは気晴らしに誘つたのだ。

その件はもう解決していたり、本人たちのメインの目的は彼女を作ることだったりするのだが。それはお互いに知らない。

「ほらお前もあの子に声かけてみるよ」

「ハーフかな？ 超かわいい子」

「あの人……」

（ハーサカじゃねえか!! 光上が今日いるのに!? ハーサカに俺が声をかけろと!?!）

「ほらほら行つてこいよ!」

「Good Luck 白銀」

「ぐおっ!」

強めに背中を押され、躓きそうになるのをなんとか耐えたが机の足に自分の足が当たつてしまう。倒れそうになったところを手を壁に伸ばすことで耐えることに成功。

しかし御行の心は何一つ穏やかじゃなかった。位置悪く、ハーサカの顔の横に伸ばされてしまった手。いわゆる壁ドン状態。後ろから

突き刺さる視線。飲み物を片手に帰ってきた光上の視線だ。

(ヤバイ……。俺帰りたい……!)

「えつと……とりあえず姿勢戻したら?」

「あ、ああ。すまないハーサカ。わざとじゃないんだ」

「あれ? なんだ白銀知り合いだったのか」

「らしいぞ。数時間で仲良くなれた相手なんだとき。電話で言われた」

(棘がある!! わざとじゃないんだから許してくれ光上!!)

冷や汗をダラダラかきながら、御行はハーサカの斜め前の椅子に腰掛ける。その直後、状況に悪ノリしたハーサカによって追撃をかけられた。

「前に私をこつぴどくフツた人」

(事実だから言い逃れできねえええ!!)

気まずく感じた風祭は御行に一言断ってから違うテーブルに移動。それにより、御行がいるテーブルは、御行と光上とハーサカの3人だけになった。完全に針のむしろ。光上からの視線が特に突き刺さる。ロンギヌスのように。

「そこまでは知らなかったな。まあ言わないか」

「お、おう……」

「なんにしても……。ハーサカさんと会うのは久しぶりだな」

そう言いながら光上はハーサカの隣りに腰掛ける。それによってハーサカは御行と光上に挟まれる形に。彼女はそこを特に気にすることなく、早坂を隠してハーサカとして接した。

「そうだね。前に会ったのも1年半ぐらい前になっちゃうのかな?」

「それぐらいだな。俺が四宮家に行くことなんて基本的でないし」

「お家柄ってやつ? 私には想像もつかないけど」

「ドラマほどどろどろはしてないけど。面倒なことには変わらないよ」

摩擦なく会話が進んでいく2人に、御行はホッと息をついた。状況は何一つ変わっていないのだが、気持ちが少しだけ楽になったのも事

実。キリキリと傷んでいた胃も茶柱に喜びながら落ち着いている。

「光上くんがこういう所に来るのは意外かも」

「カラオケって聞いてたから。人数合わせのために呼ばれた気がする」

「あはは、よくある話だね!」

「そういうハーサカさんは?」

「いい加減に失恋から立ち直れって妹が」

(話を蒸し返されたツツ!!)

「またもや痛みだす御行の胃。茶柱も三節棍の如く分かれてしまった。これには御行の胃も涙目である。ピエン。」

「私は来たくなかったのに! だけど強引に……!」

「あ、ごめん。次俺の番だわ」

「……もう! 代わりに白銀くん聞いて!」

「お、おう」

マイクを持ち、立ち上がって歌う光上を気にしつつ、御行はハーサカ早坂の愚痴を聞く。妹と言って誤魔化しているが、その愚痴の内容はすべて四宮かぐやに向けてである。そんなことは御行の知るところでもなく、仲がいい姉妹なんだなと聞きながら思った。

それを聞きながらも、御行は光上の選曲にダメージを受けていた。光上の選曲自体はアップテンポで盛り上がりやすい曲。しかしその歌詞の内容は、作者が「敗北した時の心情を書いた」として知られている曲である。明らかに御行とハーサカの前回のことを意識していた。

「光上くんって歌上手いんだ」

「みたいだな」

愚痴もそこそこに、光上の歌声を聞いているハーサカに視線を向ける。その様子はとても純粹に見えて、以前に会った時の演じている感じが一切しなかった。

「なんというか、今の感じの方が親しみやすいな」

「え?」

「前は少し演じてる感じがあったから」

「演じない方が、いい？」

「まあ……」

「嘘よ。人は演じてないと愛してもらえない」

それは自然に飛び出たハーサカの本音で、ハーサカの根底にある考えだった。

「弱さも醜さも演技で包み隠さなければ愛されない。それは赤ん坊も本能でわかっていることです。ありのまま愛されるなんて絶対にない」

そう思っていた。四宮に仕えてからずっと。

「そんなことは……」

「だったら君は見せられるの？ 背伸びも虚勢もなく、弱さを全て隠さない本当の白銀御行を」

「……」

その問いかけに御行は答えられなかった。その沈黙にハーサカはくすりと笑う。やはり、彼の妹は強い女性だ。

演じないと愛されない。好きな人の好みに合わせないといけない。そう考えているハーサカに真つ向からNOを突き付けられる存在。

相手を信じ切るのは怖いこと。愛情は常に不安と隣り合わせ。切り離れたところで、すぐに絡みついてくる恐怖。そうだと言うのに、少しずつだが圭は自分を曝け出せている。怖さを抱えながら。それはもちろん、光上からの肯定があつてこそだが、それでも敬意を抱く。彼女のような人こそ報われるべきだ。

「そろそろ帰ったほうがいいんじゃない？」

自分の胸中を仕舞い込みながら、御行に帰るように促す。好きな人がいるのに、こういう場所にいるのは良くないと。御行はそれに同意したのだが、それはそれとして、光上を連れ帰った方がいいだろうと考えている。光上がこういう場にいるということを、圭に知られてはいけない気がする。仮に知られたとしても、早めに連れ帰れば許容範囲だろう。

光上が歌い終わる。御行は最低限のジェスチャーで伝え、光上もそれに頷いた。しかし光上が出るためにはハーサカも立つ必要がある、



そのまま彼女を部屋の外へと連れ出す。

「え？　なんで……？」

「ハーサカさん男が多い場所嫌でしょ？」

「あ、ありがと……」

「まあでも、白銀とハーサカは歌ってないし、少しくらい違う部屋で歌うか？」

「しかしだな光上」

「あ、そっか。このまま3人とも帰っちゃうと変な噂立てられちゃうもんね」

そういうものなのかと御行が納得する。そんな根も葉もない噂を立てられるのも癪というもの。そんなわけで、ハーサカが受付に行つて違う部屋が空いてないかを確認。その間に光上の携帯に電話がかかってきて、彼は一旦建物の外へ。他の部屋からの音漏れのせいで聞き取りにくいのだ。

「あれ？　光上くんは？」

「電話がかかってきてな。一旦外に出たよ。部屋番号を送つとけば後から合流するだろ」

「それもそうだねー」

改良してあるイヤモニから聞こえてくる主人の声に、御行に聞こえない程度の音量で返していく。「落とせるものなら落としてみる」と言ったのはそちらだと。それだけ言い返したら、イヤモニのスイッチを切つてポケットにしまう。

新しい部屋に入ったら、自分が着ていたコートをドアにかける。そこにある小窓の邪魔になるように。中が覗かれないように。

「白銀くん。演じない私の方がいいって言ったよね？　それは本当？」

「え、ああ……」

「じゃあ、本当の私を見せてあげる。だから、本当の君を見せてよ」

四宮かぐやは焦っていた。ハーサカからの通信が途絶えた上に、御

行を落とすという宣戦布告をされたのだから。

「早坂！ 早坂返事をして！」

彼女が今いる場所は、カラオケがある建物の屋上。変装のようであるうでないような微妙な服装でそこに立っていた。

「やっぱり四宮さんは近くにいたんだ」

「へ？ 光上くん？」

その場所に光上はたどり着いた。感情も読ませない表情で、いつもより引き締めた表情。考えを読み取らせてくれない。

今は相手にしている場合ではないのだが、彼の口ぶりからして四宮かぐやが近くにいると分かっていたようだ。四宮はそこが引つかかった。

「ハーサカさん、というか早坂か。彼女があの場合にいて四宮さんが近くにいないわけないもんな？」

「あなた……いつから早坂のことに気づいてたの？」

「初めてハーサカさんに会った時からだけど？ 四宮家って面倒だし、何かしら事情でもあるんだろうなって思って放置してただけ」

「それならあの発言は……ハーサカが気になるって発言はどういうこと？」

「あれ？ 誰にもその話してないはずなんだけど？」

「あなたが寝ぼけてた日よ！」

そんな日があったのかと振り返る。この日だろうなって見当は全くつかないのだが、そういえば早坂に発言について探られた日があったなと思いついた。その日より前のどこかなんだろう。

「四宮さんは気にならないの？」

「何がよ」

「早坂のこと」

「どういうこと？ 早坂の何が……ハッ！ あの子最近プレス動画見てないって言ってたわ！ それと何か関係が!？」

「ごめんなんの話？」

お互いに思っていることは違うようだ。光上は四宮がポンコツな推測してるなあと思い、四宮は四宮で光上のことに頭を痛めた。何が

言いたいのかさっぱりわからない。

「いや、四宮さんが知らないなら別にいいよ。それはそれで収穫だから」

「要領を掴めないわね……。って、こんなことしてる場合じゃないのよ！」

早坂の奇行を止めること。四宮かぐやは重大なミッションを思い出した。急いで屋上から階段で駆け下り、早坂と御行がいる部屋を探す。手当り次第に探すしかないが、才能がここで無駄遣いされた。外からのチラ見程度で中を把握。それを駆け足の速さで行っているのだ。それを続けること数分。ようやくその部屋を見つけ出した。

「早坂のコートね」

「探さなくても俺のスマホにライン来てるんだけど」

「あなたは黙っていて！」

「ええ……」

このまま四宮に付き合う必要もないのだが、成り行きに任せることにした。先程彼女の時間を奪ってしまったのだから、彼女のやりたいようにさせるのがいいだろう。あと見ていて面白い。

「どうやって阻止すれば……」

四宮が今危惧しているのは、この部屋で2人がやましいことを始めてしまわないかということ。合コンの流れで来てしまっているのだ。四宮の中では最も警戒すべき状況である。

鍵がかかっていない。中に入るか。しかしピンポイントに入ってしまうえば、ストーカー扱いされてしまう。ならばマスクとサングラスで素顔を隠せばいい。

「ストーカーじゃない!!」

「何一人でコントしてるの?」

「コントなんてしてないわよ!」

光上が入るのはいたって普通のことである。それで解決することなのだ。しかし四宮の脳内に、光上を頼るという選択肢はなかった。そうして考えた結果、秀知院学園最強の災害生物である藤原千花を呼び出すことに。

彼女が来るまでおそよ20分。それまでの間は何も起きないことを祈るしかない。しかしその願いも虚しく、扉越しにハーサカの悲鳴が届いていく。

(ああ……早坂……早坂あ……)

「あいつ何歌ってんだろ……」

四宮の脳内では、御行と早坂がイケナイことを始めたということになっている。

光上の脳内では、御行がノリノリで酷い歌唱をしていることになっている。正解者は光上だ。

歌い終わった御行が部屋の外に出る。物陰に隠れてそれをやり過ぎし、2人で部屋の中に。長椅子の上でハーサカが横たわっていた。少し服が乱れているので、四宮の誤解がさらに加速する。

「大丈夫じゃなさそうだねハーサカさん」

「あんなの無理いい……。下手だもん……」

「下手なの!?!」

グロッキー状態の早坂の側にしやがみこむ。なまじ耐久できてしまったせいで、余計に苦しんだようだ。

「光上くんの方がいい……」

「あはは、それは光栄だな」

「すでに経験済みだったの!?!」

いったいいつの間にと驚愕するも、早坂も光上もその相手をしていない。早坂はその余裕がなく、光上はハーサカを優先しているからだ。

「ちなみに白銀何歌った?」

「ラップ……」

「うわあ……チャレンジャーだな」

「あ、歌の話だったのね!」

「なんの話だと思ってたの?」

「な、何でもないわよ!」

見事に爆発する四宮に、早坂の冷ややかな視線が刺さった。

そうこうしている間に四宮が呼び出しておいた藤原が到着。光上

がいることに驚きを顔にした。

「白銀と来ててね」

「会長ですか？」

「……会長……歌……内臓……」

ガタガタと震え出す早坂<sup>ハイサカ</sup>を光上<sup>ハイサカ</sup>が抱き上げ、四宮に引き渡す。早坂<sup>ハイサカ</sup>のその様子を見て、藤原も察してガタガタと震え出した。

御行の歌は人の精神を破壊しかねない。これは被害者にしかわからないことだが。

「す、すみません……私、帰ります……」

「藤原さん気をつけて帰ってね」

「光上くんは……どうされるんですか？」

「一緒に来たし、白銀と帰るよ」

「そうですか。……ご武運を」

「カラオケですよね？」

被害を受けていない四宮には何一つ理解できないやり取りだった。

早坂愛が通信を切ったのは、主人に知られたくないため。小窓をコートで塞いだのは、本家の息がかかった人間を警戒してのこと。

準備が整ったところで、早坂愛はスミシー・A・ハーサカとして白銀御行に真相を話していた。四宮かぐやの周辺を探り、本家に報告するのが自分の仕事であると。生徒会のことも、その役員たちも。

「本当に面倒な一族だ……」

「そうなんですよ」

「……これを光上には話さないのか？」

「……話せませんよ。彼を巻き込んでしまうので」

何か感づいているかもしれない。しかし、本当にそうだったらもう彼は行動を起こしているはず。早坂のことになると、彼は四宮家を敵

に回すことも厭わないのだから。

現状では何も起きていない。だから彼は真相を知らない。そのまままでいてほしいとハーサカ<sup>早坂</sup>は思っている。その身を滅ぼす道なんて歩んでほしくない。

「光上家の立ち位置を改めて説明しますと、四大財閥の間に位置する一家です。財閥同士の直接の戦いが起きないように。いわば緩衝材なんですよ」

「それは……なんとも苦しい位置だな」

「ええ。元々はそうでした。今の代は力がついて緩衝材としては強過ぎるんですけど、まあその話はいいでしょう。四大財閥と光上家は持ちつ持たれつの関係です」

「間に入ってくれる存在だからか。財閥同士の接触はお互いにタダでは済まないから」

巨大過ぎる組織同士ともなると、小さな火種から次第に大きな炎へと替わりかねない。トカゲの尻尾切りで済む箇所ならともかく、そうでない部分だと必ず大きな損害を伴うことになる。それを避けるためにも、間に位置する光上家は四大財閥にとって必要な存在なのだ。

「ここからが問題なのですが、光上家と四宮家だけ関係があまり良くないんですよ。手を取り合う関係ではなく、睨み合ってる状態。冷戦です」

「そんな事になっていたのか……。それはさすがに知らなかったな」

「関係者しか気づかないというか、知らないことです。……この状態で、彼に私のことを話すわけにはいかないんですよ」

早坂は目を伏せ、気持ちを抑えるようにネックレスを握った。

「彼がこの事を知ったら、きっと四宮家に本気で敵対してしまいます。そんなことすれば、彼の将来は潰えてしまう。誰も幸せになれませんが、私は彼にそんな目に遭ってほしくないんです」

「……そうか」

それが彼女の心からの願いだった。

御行も、これは光上に話せないと思った。彼だって友人に将来が潰える道を歩んでほしくない。御行は光上を思う故に、彼に隠し事をす

る。

しかしその決意は意味がない。

——彼はもう知ってしまったのだから

### 第30話

高校卒業後の進路は、おそらく人生の中でも大きな選択の1つになるだろう。少なくとも、日本の社会ではそういうものだ。ここで就職を選ぶ人もいれば、進学を選ぶ人もいる。近年では進学率が9割を超えており、四年制大学に進む人が多い。かと言って、真面目にそこを選んだ人が何割いるかは不明だ。

日本は最終学歴で生涯の収入が変わるといふ現状があるのも理由になるだろう。高卒より大卒の方が給料がいい。専門学校や短大はその2つの間とされている。もちろん個々人の能力次第でいかようにも変わるが、平均的にはそうなのだ。

将来の収入が変わる。その時点でここの選択は大きいだろう。あとは、どれだけ自分の将来像を設定できているかだ。どんな大人になりたいのか。そのためにはどういう進路に進む必要があり、今すべきことは何なのか。細かなことが明確になってくる。

ちなみに、専門学校とかどう考えてもその究極系であり、その道のプロフェッショナルを育成する場のはずだ。それなのに大卒の素人より給料が低いとか謎である。フランスでは逆だというのに。

何はともあれ、進路は大切なのだ。そして、それを本人と親と教師で共有し合う場として、三者面談が行われる。

「他の先輩方はいないんですか？」

「三者面談だからな。俺は順番が最後の方だから、しばらくはここにいるつもりだ」

「光上先輩って面談必要なんですかね？」

「一応あるって聞いてるけどな。母親のほうが来るらしい」

「さすがに理事長が来たらあれですしね」

光上の親ってどんな人だろうとか思ったりする。初等部の時から両親とは離れて生活している。その点は四宮かぐやと共通している点であり、どちらの親も生徒会メンバーは会ったことがない。

「どんな人なんでしょう？」



「さあな。しかし興味本位で顔を見に行くのも失礼だろう」

「それはたしかに」

「あと、光上の順番は最後だからな。母親も到着がそれに合わせた時間になるそうだ」

「え、じゃああの人今何してんの？」

「……さあ？」

三者面談がある今日に向けて、生徒会は仕事を片付けている。今日やることは特になく、石上も伊井野もなんとなく生徒会室に来ているだけだ。そのおかげで御行は話し相手ができたわけだが。

「石上は進路考えてるのか？」

「社長になるかニートですかね」

「贅沢な選択だな！」

親の後をついで社長になるか、それとも親のすねを齧るニートになるか。石上には兄がおり、その兄が会社を継ぐ方向で話が進んでいるのだそう。だから石上は好きな道に進むことが可能なようだ。

「伊井野は法律関係か？」

「そうですね。でも細かくはまだ決められてなくて……」

進む学部は決めてある。しかし学科まではまだ絞れていない。今後の人生に関わる選択であるため、今から悩んでいる分後悔するような選択肢は取らないだろう。

「光上は内部進学だろうが、卒業後はわりかしみんなバラけるよな」

「学部学科で異なりますからね。それに、文系理系で内部か外部かが決まる傾向もありますから」

「藤原先輩がどうするか気になりますね」

「あの人は………進路考えてんのか不安だな」

「いやさすがに考えてるだろう」

それなら藤原はどんな進路を選ぶのか。そこを聞かれると御行も首を傾げてしまう。進路のことは考えているだろうけども、普段から何を考えているかわからないせいで予測がつかないのだ。

考えるだけ無駄だという結論に至る。御行のスマホの通知音が鳴り、メッセージを確認すると圭からだった。妹から連絡が来るとは

思っておらず、名前を見た時には喜んだものの、内容を見て渋い顔をする。

「どうされたんですか？」

「いや、妹から連絡が来たんだが、父親がこつちで変なことしないか不安だって」

「会長のお父様ってそういう人なんですか？」

「光上は愉快な人だと言ってたな……」

遠い目をする御行を見て2人も察する。あまり触れないでおいた方がいい話なのだ。しかし、圭からそれが来たということは、彼女が危惧していることが父親と光上の接触である。それを阻止できるとは御行は思っていないかった。

「うちの父と光上は仲がいい方だと思うし、被害は出ないと思うんだが」

「被害って……」

「そういえば、会長は光上先輩と圭さんの関係に微妙な反応でしたね」

「そうなんですか？ 私はお似合いだと思うんですけど」

「……俺もそう思うんだがな。不安要素はあるんだよ」

「光上先輩の恋愛観……でしたっけ」

「光上先輩に何か問題が？」

以前に石上は聞かないようにしようと思いき下がった。しかし今日は伊井野がいる。伊井野は純粋な疑問としてそこに足を踏み込んだ。御行が話さなければそれを知られることはない。しかし、光上与圭の様子からして、これはもう一人で抱えておける話でも無くなってきたと判断した。

「他言無用で頼む」

「もちろんです」

「……いいんですか？」

「ああ。今後のためにも2人には話しておく。四宮は気づいていてもおかしくはないし、藤原書記は感覚で察してそうだが」

初等部の時に、誰よりも光上の近くにまで距離を詰めた藤原千花。

ズレがあると気づき、そこから彼と距離を置いた。波長が合わないと判断していたのだが、波長が合わないその原因までは考えなかった。そこにまで唯一踏み込んだのが御行である。だから御行は彼の根底に何があるか知っている。知ったからこそ、圭にそれを話せないでいる。

「みんなの認識としての光上はどういう人間だ？」

「？ 誰にでも同じように接して、波風を立てないようにしている人ですかね」

「虚偽を嫌い、誠実さを好む人」

「まあそんなとこだな。それを踏まえて言うけど、光上は自分のことが嫌いだ」

「は？」

「どういふことかわからない。そんな様子の2人に、御行はそうなるだろうなって懐かしむ。それに気付いた時、自分のそんな反応だったから。」

「光上は嘘偽りが嫌いで、演技で騙すのとか嫌いだ。だからこそ、自分のことを嫌悪している」

「待ってください。光上先輩にそんな素振りなんて……！」

「……っ！ まさか……あの自分自身気づいてないんですか？」

「石上何言って……」

石上の推測を御行は頷くことで肯定する。光上品を表面的に知る程度ならそれでいい。そのままで済むほうがいいかもしれない。しかし、光上与仲良くなるうと、彼を知ろうとして踏み込むとなると、認識を改めないといけない。それまでの前提を大きく覆さないといけない。

光上は偽ることが嫌い。だから、そうしている自分が嫌い。しかしその事に自覚がない。実に面倒な状態なのだ。

「自分のことが嫌いで、でもそれに気づかないって。そんなことあるんですか!？」

「考え難いことだが、現に光上はそうなってる。しかし、考えてみてほしい。答えはみんなが知ってる通りなんだ」

「……誰に対しても一定の距離を保つ」

「そう。光上は、自分という自我にすら距離を置いている。だから気づけない」

——あるいは、気づかないフリをしているだけか。

光上は嘘が嫌いだ。だから、演じて生きている自分自身が嫌いだ。根底にある自我はそうなのだ。しかし、光上家の子供として生きていく彼は、そんな事を言っていられない。いや、それを否定するという発想すらなかった。

子供にとって、親は完璧な人だ。親の言うことが正しいのだと思いつく。そして光上の親は優れた人間だった。光上は両親が好きで、だからこそ両親の教育がおかしいとは思わない。教わった通りにする方が正しいのだと思う。

自分の家は周りとは違うと教わった。一般からズレている。全体的に見れば少数の富裕層に入るのだと教わった。学園の理事の家だから、富裕層の中でもまたズレていると教わった。つまり、自分の家はどの家とも絶対に異なる。他と違うことが正しい状態だと学習した。

そういう家に生まれた。そういう星の下に生まれた。

おかしいことが当たり前。違うことが当たり前。

だから、それを疑問に思うことが間違い。

客観的に見ておかしい自分こそ正しい状態なのだ。

教育、自我、思い込み、抑制。あらゆる方向から混ぜられながら、今の光上晶という人間が形成された。

さて、彼の根底にある自己嫌悪の自我というのは、本当に彼の本心なのだろうか。

——光上晶という個人人間は、本当にいるのだろうか

「……この事を、圭さんには……?」

「光上先輩の人物像が根底から崩れる話だぞ? できるわけがないだろ……」

「俺が光上のことを識った時、妹に話すか悩んだよ。悩んだけど、その間に妹は光上を好きになっていった。俺から話せるタイミングはもうないんだ」

「でしたらせめて光上さんに！」

「伊井野。もうやったんだよ」

「え？」

それには石上も驚いた。御行はただ乾いた笑みを浮かべるだけ。力が抜けたように。それは、苦勞が実らなかつたものと同じ。光上に気づかせることに失敗した証だった。

「俺にできることは、本当にもうないんだ」

寂しげにそう言った御行に、伊井野も石上も何も言えなくなった。しかし、御行が危惧していることはそれだけに収まらない。そこから生じた光上の恋愛観もまた、悩みの種なのだから。

「光上はな、そういう自分が人から好かれるわけがないって考えるんだよ」

自己嫌悪による自己否定。その考えもわからないわけではない。光上が恋愛から離れていたのも、そこに理由があるのかもしれない。あとは、愛がイコールで家族愛だけになっていることか。

そういつた光上の前提を、ゆつくりと覆していつているのが圭だった。一手間違えれば終わる。その綱渡りを、今のところ圭は順調に進んでいる。光上との相性の良さが要因となるのだろう。そして、そういう恋愛だからこそ、御行は素直に応援できないのだ。不安が大きいから。

生徒会室でそんな会話がされている間、件の光上はというと順番待ちしている四宮と早坂の側にいた。特に理由らしい理由はない。

「お父様は……さすがに来ないわよね」

「代わりの人を出すって話でしたよ」

「奈央さんかしら？」

「ママ？ ママは来ないですよ。娘に興味ない人ですから」  
「いやそれこそないでしょ」

すね気味にスマホを弄っている早坂の言葉を光上が否定する。早坂が何も言わずに視線だけ寄越すと、光上は呆れ気味に話を続けた。  
「愛つて名前をつけた娘をそんな風に思うわけない」

「……つけた後に気持ちが変わるとかあるじゃん」

「そうやってないことは、早坂が一番知つとかないと」

「彼の言う通りですよ。あなたの進路だつて気にかけてます」

「ママー」

態度の急変に四宮は引いていた。誰がどう見てもマザコンである。光上は光上で、娘の態度の急変を目の当たりにしても平然としている母親の方を気にした。おそらくは慣れなのだろうし、感情の起伏が少ないのだろうと考える。

早坂の母親こと奈央は、四宮に挨拶をした後に光上にも挨拶した。

「先日はいろいろとお世話になったようで」

「やりたくてやったことですから」

「ママ……」

「私個人としては、お礼を申し上げたいくらいですよ。夏休みや先日のテーマパークも娘が楽しそうに話してくれましたから」

「ちよつ、恥ずかしい話しないでよー」

早坂は花火のことも、先日にテーマパークに行ったことも話していたようだ。生徒会の面々と圭が行き、早坂は陰からの護衛。途中からその和に巻き込まれたのだが、本人はそれが楽しかったようだ。

娘はその事を知られたくなかったらしい。彼女が翻弄されているところはなかなか見られるものでもなく、四宮と光上はその様子を楽しんでいた。

彼女が必死に話題を逸らす。四宮の名代として来ただけなのかとか。晩御飯はどうなんだとか。奈央は今日一日休みらしく、一緒にご飯を食べられるのだとか。それに喜んだ彼女は、寿司が食べたいと要望する。

「一気に精神年齢低くなったな」

「マザコンなのよ」

「素を出せていいと思うけどな」

彼女の場合、常に気を張ってばかりなのだから。自分ではそこまで彼女のガス抜き役になれない。それを少しばかり寂しく思っている、白銀父が姿を現した。

「久しぶりだねかぐやちゃん。調子はどう？」

「え、ええ。健康です」

「そうじゃなくて、御行とはどうなの？ どこまで進んだ？」

めつちやグイグイ来た。気恥ずかしそうにしながら、顔も引きつらせつつ四宮は会話を続ける。好きな人の父親なのだ。下手に会話を終わらせることもできない。

「ちゅーぐらいした？」

「してません！」

「つまらんな。高校生は若さと勢いに任せてガンガン行けばいいのに。若さと過ちはワンセット。大丈夫、俺は学生結婚に理解のある方だ。圭は中学生だからガンガンいかれたら困るけどな」

「そんなことしませんよ」

「中2ではまだ体も未成熟だからな」

「俺を学生できちやった婚する一族と同じ風に扱わないでいただきたい」

ついでとばかりに矛先が光上に向けられる。圭と学生結婚しちやってもいいよと巻き込み、そういうことはしませんと真面目に返す。少しばかり休めそうだと四宮が息を抜くと、その瞬間に標的にされていた。戦場では気を抜いた者から死ぬのだ。

そうして盛り上がっている3人を、少し離れた位置から見ている早坂親子。母は白銀父のことを知らず、娘に誰なのか教えてもらう。

「かぐや様の好きな人の父親」

「なにそれお金払えるぐらい面白い話じゃない」

「ちなみに、かぐや様の好きな人の妹が好きな人は光上さん」

「その子が愛のライバルなのね」

「うん。……………へ？」

慌てて母親の方を見ると、おもちゃを手に入れた子供のように笑う姿が。みるみるうちに顔を赤く染めていく愛は、慌てて弁明を始める。

「今のは違っ……！ 私は別にそんなんじやなくて！ 仕事が！」

「あらあら。私は初めからそのつもりで言ったのだけど？」

「ううっ……。ママの意地悪……！」

「ふふっ、ごめんなさいね」

拗ねる娘をそつと撫でる。何歳になろうと娘は娘。かわいいものなのだ。だから、ちゃんと謝らないといけない。

「愛のその任務ね。ママも一枚噛んでるの」

「えっ!? なんで……」

「学生らしいこととしてほしくて。あなた、自覚なかったでしょうけど、昔から学校の話をしてくれる時に、必ず彼の名前が出てくるのよ」

「……それは……いろんな人と過ごしてるし……」

「そうね。でも、男の子の名前は彼だけだった。だから、彼と学生らしいこととして、青春して、そのついでに取り込めたらいいって思った。でも駄目ね。他に狙ってる子がいるなら」

チラツと彼の方を見る。四宮と一緒に、白銀父からの強襲に耐えている。聞こえてくる会話やその様子からして、圭と順調だという様子が窺えた。付き合っていないのだが。

「愛は優しいから。譲ってしまおうって思ってるでしょ？ 仕事のために奪い取るなんてできないから」

「……そんなことは……」

否定できない。なにせそれは嘘になる。大好きな母に嘘をついたくなかった。つまりそれが答えであり、四宮の仕事を諦めているという意味でもある。

「その事を本家の人に報告するつもりもないわ。一つだけ親として言わせてもらおうと、後悔しないやり方にしなさい。勢いも過ちも若さの特権で、恋は自分勝手にするものよ。そこから愛を育んだらいいの。あなたの名前も、そうしてほしくて付けたのだから」

「……うん」



「もうー！ 早坂助けて！」

「かしこまりました」

タイミングよく四宮から助けが求められる。その様子を楽しんでいる奈央がその声に応じた。その間に光上は白銀父から距離を取り、愛の隣りに移動している。

「どういう状況ですか？」

「四宮さんの親が来ないって知ったら、なら俺が代わりにやるかって言い出しちゃって」

「楽しそうですね」

「楽しい人だからな実際」

巻き込まれたら大変だが、傍から見ている分には楽しい。それは早坂親子も瞬間的に理解した。だから、奈央はそれに便乗して面白そうなことを提案する。

「かぐや様。この方にも同伴していただきましょう」

「ええ!？」

「使えるものを使うのが四宮のやり方ですから」

「ママいいの？」

「だって面白そうですね」

「性格悪いよママ……」

(それに、娘のライバルの親をもう少し見ておきたいですし)

遊び半分、子煩悩半分。四宮家の名代としての仕事という意識はもう捨てていた。同伴するだけで任務完了なのだから、そこに割く意識が無くても問題はないのだ。

四宮の順番が来ると、白銀父と早坂母が保護者として中に入っている。手を振って見送る光上と愛を、四宮は恨めしそうに見ながら教室に入ってしまった。それを確認すると、廊下に置かれている椅子に並んで座る。

「本当に行っちゃったなー」

「大人たちは自由ですね」

「限られた自由を一杯楽しんでるって印象だけだな」

「……そういうのは、受け入れられますか？」

「? そこに悪意なんてないし、あの2人も単に楽しんでるだけだし」  
じーっと見つめる早坂の視線を、不思議そうにきよとんとしながら受け止める。光上の言う通り、それは邪なものがない。常に制限の多い社会では息が詰まるから、そこから解放される僅かな時間自由は好きにしたい。至極真つ当な考えだ。

それが許されて、彼もそこに理解があるというのなら。  
自分もそれを享受してもいいのだろう。

「会うのは夏休み以来ね晶」

話を切り出す前に、一人の女性が声をかけてきた。視線を上げて確認するとそれが誰かすぐにわかった。顔立ちが似ている。彼の母親だ。

目が合った。その瞬間に背筋が凍った。何も威圧されてるわけでもない。敵意を向けられているわけでもない。ただ、目が合った瞬間に全てを見抜かれたような気がした。そうして理解する。この人は敵に回してはいけない類いの人間だと。

「母さんも元氣そうだなにより」

息子だから平気なのか、彼はいつもの調子で話している。彼が立ち上がり、手を引かれて自分も立ち上がらされた。視線を彼の親から外せずにしたのを、彼が強引に外してくれた。彼の優しい目を見ると落ち着く。ツンと額に押し当てられた指先が温かい。

「早坂の順番も来たし、教室行ってこいよ」

「はい。それではまた」

「うん。また明日」

愛を見送ると、母親と一緒に移動を開始する。立場のせいで他の生徒と少し異なるのだ。生徒会長である御行は校長と話す。留学の件もあるからだろう。理事長の子である光上もまた、普通の教員が相手とはならない。しかし校長は親戚であるため外され、教頭が面談相手となる。

応接室へ行き、そこで待っていた教頭と対面。教頭が淹れたお茶をもらったところで面談開始。しかし、普通の面談とは異なる。下手を打てば首が飛びかねないため、ほとんどの教員が萎縮してしまうから

だ。成績を開示し、母親の質問に答えるというやり方になる。

「……駄目ね」

「ご子息は成績を伸ばされておりますが……」

「それが駄目なのよ。調整ができてない。晶あなた、だいぶ腑抜けたわね」

成績の件は、テスト期間に圭と勉強するようになったからである。一応調整しているものの、安定して上位10以内に入るようになっていた。

「その辺りの話は帰ってからにするとして、来年度の話をお願いします」

「来年度？ 大学の話じゃなくて？」

「ええ。来年度からフランスに来なさい」

「……なんで？」

「ほ、本校の教育に何かご不満の点がありましたでしょうか？」

「いえ。質の高い教育を保っていたに感謝していますよ。この件は教育とは別です」

それではなぜ転校の話になるのか。教頭は光上に代わって聞いた。彼が今期の生徒会に入っているのもある。

「生徒会に？ ……まあいいでしょう。会長でないのなら不在でも問題ない話ですから。転校の理由は、晶も分かっているでしょ？」

「……卒業までは大丈夫じゃなかったの？」

どうやら光上本人がわかっていることのようにだ。何も知らない教頭だけ取り残される。しかし口を挟むこともできず、ただ見守るしかない。

「そうじゃなくなったから言ってるのよ。春休みに入ったらフランスに来て手術よ。わかっていると思うけど、術後に帰国するのも諦めなさい」

——あなたはもう日本に戻ることはないわ

## 第3部

### 第31話

秀知院学園の文化祭は、12月の冬休み前に行われる。テストが終わった後に行くため、生徒たちは思いっきり羽を伸ばして文化祭に取り組めるのだ。その本気度は完成度の高さに繋がり、「秀知院学園の文化祭はレベルが高い」という認識を周囲に与えていた。一般公開するため、周辺の学校から視察に来る者も多く、年々それらの学校の文化祭もレベルを上げていたりする。

例年では1日限りの文化祭。それを今年は2日間に分けて行うという大規模ぶり。2期連続で生徒会長を務める白銀御行の尽力により、その実現が叶えられた。日本に滞在している光上母は、2日間開催したいという御行の意見を聞いた時「面白いからOK」という気楽さで後押ししたとか。それが鶴の一声となり、教師陣の承認も取りやすかったとか。校長はもちろんノリノリである。

(今年は光上の母親も文化祭に来るのだろうか)

去年はいなかった。話を聞く限りでは、中等部の文化祭にも姿を現さなかったという。それは父親である理事長も同じ。両親ともに学校行事に来たことはない。フランスににいるから。

しかし、今年は母親の方が日本に来ている。いつまでの滞在なのかは不明だが、2日間開催にゴーサインを出したのだから、文化祭に来ると考えていた方が現実的だ。

(いやに緊張してくるな……)

2日間開催を決めた本人である以上、しっかりと成功させないといけない。しかも理事長の代理とも言える人がいるわけで。友人の母親であるというのも、妙なプレッシャーがかかった。

とはいえ、元より手を抜くつもりなどない。いつだって全力で取り組んできたし、そうすることしか知らない。必死に努力して仮面を被り続ける。そうすると決めて、それが白銀御行なのだとして認識してい

る。それに、今はもう1人じゃない。優秀な生徒会の仲間を始めとした学園の人たちがいる。失敗など考えられない。

そう思いながら夕飯の支度を始める。冷蔵庫の中身を確認し、今日の献立を決めた。必要な食材を取り出しつつ、リビングにいる圭に声をかけた。

「高校の文化祭の参考にしたいから、圭ちゃんこの見に行つていい？」

「え……。あー、うーん……」

「光上也誘うんだが」

「絶対連れてきて。むしろお兄い邪魔」

「邪魔はしないけどさ……」

食い気味に言われ、さらに邪魔者扱いされる。文化祭での告白に向け、イケイケモードになっていてよかった。少しだけいつもより心が強くなっている。私服という装甲にダンボールを追加することで強化された。ダメージマジおったまげ。略してマダオ。つまり紙装甲である。

「てつきり圭ちゃんがもう誘つてるかと思つてたけど」

「そりゃあ来てほしいけど、私から言わずに来てほしい」

「気持ちわかるけども」

「は？ 男でそれは女々しいから」

ダンボールが割かれた。悲しみのまま洗ったほうれん草を切っていく。

だかまあ、わかっちゃうのも仕方がない。この兄妹は感覚が似通っている点もあつたりするのだ。先日の水族館デートが印象的だったのだと御行は見抜いている。藤原の一言があつたとはいえ、圭からすれば「光上から誘つてくれたデート」である。その時の喜びは忘れられない。だから、また誘つてほしかったりするのだ。

兄が連れてくるのは妥協点である。「自分からは誘つてないけど来てくれた」という状況を作りたいから。

その状況を思い浮かべる。中等部に光上が足を運んでくれる。きつと会いに来てくれる。そこに兄がいるのは嬉しさ半減だが、中等

部ではまだ光上への好意が知られていない。兄の存在が、自分の心の制御に役立つだろう。仕方ないから同行を認めてあげよう。

「……お兄い制服で来ないでよ？」

脳内シミュレーションという名の妄想の結果。最悪の状況が浮かび上がってきた。私服で来るであろう光上の隣りで、高等部の学ランを着てくる兄。地獄でしかない。そんなんで来られたら縁を切りたいレベルで他人のフリをする。

「駄目なの？」

案の定この反応だ。このアンポンタン。朴念仁。童貞野郎めと罵倒の言葉が脳内を駆け回る。

「お兄いはこつちでも名前が通ってるの！ そんな格好で悪目立ちされたら嫌なの！」

「お年頃だなあ」

「ていうか！ 光上さんは私服で来るのにお兄いがそれで着たら浮くでしょ！ 100%目立つし浮くから！ どうぞネタにしてくださいって言ってるようなものだから！」

「そっか。光上にも私服で来るように頼まないとな」

「あの人を変な道に巻き込もうとしたの？ ギルティなんだけど？」

制服という道連れを凶っていた御行に圭の鋭い視線が突き刺さる。申し訳なきそうな顔をしながら、御行は圭に画面を見せつつ光上に私服で来るように頼んだ。これで制服での来訪という恥ずかしい事態を回避することに成功。それではもう一山越えよう。

「どういう格好で来るか試しに今着てみて」

兄のファッションセンスなど1ミリも信用していない。制服と並んで、いやこの私服のセンスの方が大きな課題か。このままでは公開処刑になると圭は予感していた。

「こんなんでどう？」

「死んで！」

「そこまで!？」

「その自動翻訳したような英文の服とか意味分かんない！ 中2男子

だよそんなの！」

「まあ実際中2の時に買った服だしな。というかそれ以降全然買っていないし」

買ったものといえば部屋着ぐらいだ。家庭事情を考え、妹にはお洒落してほしいという思いから、自分の服にお金を回さないことにしている。服が欲しくないわけではない。一度求めたら際限なく求めてしまいそうだから、ファッションから離れて生活しているのである。

もちろん四宮と私服デートとかしてみたい。だがあのレベルの人間の私服はお高いものだ。それに並び立てるような服など買えない。持っている服で一番高いのは制服であり、会長という立場を言い訳にしていつも制服で過ごしているのだ。

「ツツコミどころが多過ぎるんだけど、まずそのカバン何!? 登山でも行く気!?!」

「結構物が入るんだよ。ペットボトルも横につけられるし」

「出かける程度で機能求めないで！ 他にないの!?!」

「これしか持っていない」

「このっ……!!」

めっちゃ文句を言いたい。文句を言いたいのだが、兄はこういう生き物だからと我慢する。いちいち反応しては終わりが見えない。

圭は仕方なく自身のウエストポーチを御行に貸すことにした。ギリギリパンフレットも入れられる大きさで、今回のような軽いお出かけに適している。それを受け取った御行が、お礼を言いながらウエストポーチをつける。

「ウエストポーチをウエストにつけるなああ!!」

「なんで!?!」

回し蹴りが炸裂。これには御行も大混乱。ウエストにつけるからウエストポーチなんじゃないのかと文句を言いたい。しかし、圭が言うには今のトレンドはウエストポーチを肩にかけることらしい。それ以外の使用は世間から認められていないのだとか。

「少しは光上さんを見習ってほしいよ。あの人みたいにシンプルな組み合わせでいいの。それでその人が引き立てられるんだから」

「言われてみれば、光上はそういう服が多いか……」

「もつと周りを参考にして。そのつもりで見たら、町中はサンプルが動き回ってる状態なんだから」

「サンプルで」

言っていることはわかるが、ウエストポーチを肩にかけて使っている人なんているのだろうか。それは結局少数派じゃないかと疑ってしまう。しかしその疑いは自分の父親によって晴らされた。ウエストポーチは肩にかけるらしい。

やはり兄のファッションセンスは壊滅的。持っている服全てを出してもらい、その中から組み合わせでどうにかならないか確かめる。だが、どう組み合わせてもいいものは出来上がらないと判明。兄を連れて急いで買いに行くのだった。

「それで私服なわけね」

「そういうことだ。妹がお年頃だからな」

「いやまあ、一般客も来る中自分の兄だけ制服で来るとか避けたいでしょ」

「そういうものか」

「立場を変えてみれば、一般客も私服で来る中、父親がリクルートスーツで会いに来る感じ」

「それは嫌だなあ！　そうか、そういうことだったのか……」

たぶん御行の場合、あの父親だから余計に嫌だという思いもあるだろう。圭に共感しているようだから、そこは指摘しないでおくことにした。

中等部の正門から入り、パンフレットを受け取る。どのクラスがどこで何をしているのかも書かれており、その中から圭のクラスを探し出した。ついでにパンフレット全体にも目を通す。細かなところまで参考にするためだ。先日に行った北高のパンフレットもサンプルとして生徒会室に置いていたりする。

「北高との違いは？」

「項目はあまり変わらないな。デザインやページ数の細かな違い。ス



タンプラリーの有無といったところか」

「子供たちには人気だし、スタンプラリーは盛り込みたいところだな。T G部に意見を聞こう」

「……人選ミスじゃないか？」

「彼女たちほど校舎の隅から隅まで把握している生徒はいない」

「それはたしかにそうだが」

そこに所属する藤原千花が不安要素でしかなかった。他の部員も、彼女と波長が合う時点で不安要素なわけだが、生徒会での印象が強過ぎて他の2人への認識が甘くなっているようだ。

「北高の文化祭はどうだった？」

「思いの外楽しかったよ。リーズナブルというか、良心的な価格設定が多かったな」

「採算とれてるのかそれ？」

「さあ。うちみたいに寄付金を集めてるってわけでもないのだからなるほどね」

「俺は光上が藤原書記の誘いを断ったのが意外だったが」

本当は北高への視察という名目で、御行は四宮とデートに行きたかった。その思惑がうまく行かず、誰が行くかという話として誤魔化したのだが、そこで藤原が光上を誘ったのだ。

「去年ナンパされたって言ってたし、そんなところに翌年に行くのはな」

藤原は男子からの人気が高い。人柄を知るほど残念なところに行きがちだが、容姿は優れているのだ。去年は1人で北高の文化祭に行き、何度もナンパされたらしい。男がいれば大丈夫だろうと光上に声をかけたのだが、そんな場所には連れて行きたくないと思っただ。自身の可愛さを自覚しろと言って藤原を照れさせ、周囲からの冷やかな視線を浴びていたりもした。

「あの場に圭ちゃんがいなくてよかったな」

「でもほら、誰かしら言うべきことではあったでしょ。外部進学を希望してるらしいし、あのままで行くのは不安が大きい」

「それはたしかに。……藤原って外部進学希望なの!? 内部だと思っ

てたんだが！」

「お前がそれ言う？」

来年の今頃はスタンフォードにいる。それを知っているのは白銀家と校長、そして光上だけだ。いずれ皆知ることにはなるのだが、その衝撃は大きいものだろう。光上は自分のことを柵に上げながらそう言った。

光上の進路、来年度にはフランスにいくということはまだ誰も知らない。教頭と校長ぐらいいしか知らない。その話は伏せるように光上がお願しているし、周囲に話すタイミングも光上本人に任されている。その彼の進路を、この話の流れで聞こうとした御行だったが先手を打たれた。

「白銀さんのクラスのテントってあれかな？」

「え、ああ。たこ焼きをやるって言ってたし、間違いないだろう」

時刻は午後。昼のピークが過ぎた頃に2人は来ていた。視察が目的であること、極力圭の邪魔にならないことを目的としているからだ。

圭のクラスのテントに行くと、圭と萌葉とクラスメイトの女子が1人いた。今は3人で回しているのだろう。たこ焼きを焼く担当は圭で、きれいに丸いたこ焼きを作っている。

「来たぞ圭ちゃん」

「頑張ってるね白銀さん。藤原ちゃんも久しぶり」

「来たのね兄さん。光上さんもありがとうございます」

「晶くん久しぶり〜！」

「っ!？」

萌葉を除く全員がギョツとした。萌葉と光上の交互に視線を送り、圭はドブを見るような目で萌葉に視線を送る。四宮みたいなことになってた。

「光上……えっ、どういう……」

「俺も突然のことで驚いてるが？」

「うちの姉とまた仲良くなったって聞いたので、便乗しようかな〜って」

「なるほどね。それぐらいなら全然いいよ」

「私も下の名前でもいいですよ」

「考えとくね」

周囲への衝撃を無視して話が終わった。周りが固まっていることに2人とも首を傾げ、それを見た人たちは考えることをやめた。特に深い意味などないと悟ったから。ちなみに、萌葉は圭の反応を探るという目的もあつたりした。

「あれ？ 白銀さん……」

「？ なんででしょう？」

「この時間だけでも髪纏めた方がいいよ。気をつけてるとは思うけど、鉄板扱ってるんだし。きれいな髪に何かあつてからじゃ遅いよ」

「っ、そ、それもそうですよね。誰かヘアゴム余つてない？」

「1つだけならあるよ。白銀さんせつかくだし、光上先輩に纏めてもらつたら？」

「っ！」

クラスメイトによる見事なパス。正直に言えばすつごい嬉しいシチュエーション。恥ずかしさもあるし、髪は女の命でもあるが、光上になら髪を触られてもいいと思つている。なんなら光上の好みにしてもらいたい。

しかし、ここで素直にその反応をすると、光上に好意を寄せていることが周囲にバレてしまう。特に萌葉にはバレたくない。ここは我慢して、努めて面の皮を厚くしないといけない。

「何言ってるの。そんなの光上さんに迷惑じゃん」

「別に迷惑とは思わないよ。髪の結い方を全然知らないから、逆に白銀さんに迷惑かけちゃうかなつて思ってるぐらいで」

「結い方なら私が教えますよ！ ぜひ白銀さんを可愛く！」

「趣旨変わつてきてない？」

圭はいつも髪をストレートにおろしている。それが悪いわけでもなく、むしろ彼女の性格とも合っているベストアンサーと言える。しかし、たまには違う髪型の圭を見てみたい。クラスメイトは欲に忠実だった。

「あ、そうだ。うちの姉から中等部の生徒会の話を聞いたと思うんですけど」

「聞いたね。結局どうなったのかまでは聞いてないけど」

「けーちゃんが断って、相手が強引に迫ろうとしたので私が後ろから金テキしました」

「!？」

「なにそれ？」

萌葉のトンデモ発言に御行が若干引き、何をしたのかイマイチわかっていない光上は首を傾げる。流石にその説明を女子にさせるわけにはいかず、御行は後で教えると言って話の続きを促した。

「冗談なんですけどね」

「冗談かよ！」

「萌葉が現場を動画で撮ってくれて、それを証拠に生徒会長が退任になったんです」

「しかも白銀さんの半径5m以内にはいけないって処分になりました。退学にならなかったのは白銀さんの温情ですね」

それはそれで相当きつい罰なんじゃないかと思うが、その事件の詳細が中等部中に知れ渡ったわけでもないらしい。それなら生き地獄とまではならないか。

「解決したならよかった」

「すみません……相談してたのに報告してなくて」

「ううん。この手のことは言いにくいからね。それより、髪を纏めないと」

「そうでした！」

結局光上が圭の髪を纏めることになり、そのタイミングで数組の客がやってくる。御行の分もまだ受け渡しが終わっておらず、萌葉とクラスメイトの2人が対応。

「光上さん。シンプルにポニーテールでいいですよ」

「正直助かるけど、本当にいいの？」

「はい。一時的なものですし、2人の手伝いもありますから」  
「そっか」

素早く、それでいて丁寧に圭の髪を纏める。借りたヘアゴムでシンブルに纏め終わると、周囲に気づかれぬ程度に圭が後ろ向きのまま下がり、光上に背中を軽く預けた。ちよつとした充電だ。

「白銀さん。酷いことされなかつた？」

「はい。萌葉がタイミングよく出てきてくれたので」

「そつか。うん……それならよかつた」

もし手荒なことをされていたら、処遇を改めさせて追放させていただろう。それとは別に、個別でお話もしていた。その点を考慮しても、やはり萌葉が割って入ったタイミングは完璧だった。

隠すように、小さく圭と指を触れさせ合う。圭が手を繋ぎたがったが、それができる状況ではないため応じない。代わりにお誘いをする。

「白銀さん。高校の文化祭。よかつたら来てくれないかな？」

「っ！ 行きます。絶対」

「初日の方がシフト長くなったから、2日目の方でどう？」

「分かりました。楽しみにしてますね！」

「うん」

手早く話を済ませ、圭は機嫌を良くしながら仕事に戻っていく。彼女の姿を見ながら、悲しげに目を伏せた。

## 第32話

文化祭当日の朝。早朝の5時から最終確認が行われる。その時間に全員がいる必要はなく、高等部がその時間から開けられているというだけ。5時丁度に来る人もいれば、6時前に来る人もいるし、もつと後に来る人もいる。個々人で来たり、友人と合流してから来たり。その方法もバラバラだ。

御行は生徒会長であるという自負から5時丁度に学園に到着しており、光上も普段から早起きであるためにその時間に来る。他にも、早朝からテンションが高い人も来ていたり、楽しみ過ぎて寝られなかった人もいたり。

「光上くんおっはよう！」

「早坂？ この時間から来て大丈夫なのか？」

「ちゃんと許可取ってきてるし」

教室でクラスの出し物の最終確認をしている光上の下に、ギャルモードの早坂が来た。周囲に他の生徒はいないが、隣のクラスにはいる。これから往来も増えていくことを考えれば、初めからこちらのモードの方がいいのだ。

早坂は四宮かぐやのお付きの使用人である。別邸では他の使用人たちが仕切る立場にもあり、いつもなら四宮が登校した後、別の車で登校してくる。それが彼女の日常。そのことを言われたのだと思い、主人から許可を貰っていると説明。しかし光上はそのことを言うてるわけじゃなかったようだ。

「そうじゃなくて、睡眠ちゃんと取れてるか？」

「あはは、そっちの心配か。いつも早起きだから問題ないし」

「今日はさらに早起きだろ。ちよつとこつち来い」

「光上くんってば強引だし！」

「強引で結構」

早坂の手を引っ張り、教室内の空いているスペースに連れて行く。彼女の制服が汚れないように、不用な布を床に敷いて座らせた。自分

もその隣りに座る。ここからでも、目の行き届く範囲でのチェックはできる。

「寝なくてもいいけど、目を閉じて休んでろ」

「ええー。ウチも手伝いたいし！」

「働き過ぎなんだよ。前日までの準備、結構やってくれてたんだろ」

「……だから最後までちゃんとやりたいんだし」

「代わりにやらせてくれ。手伝えなかったお詫びだ」

「ばーか」

拗ねたように演じながら、スカートを押さえつつ膝を抱える。それが彼の気遣いだってことはわかっているけれど、可能な限りの青春はしたい。そう考えていると、もう一つの青春を少しだけ味わえることに気づいた。顔を隠しながらにやつと笑い、言われた通りに目を閉じる。そのまま体を横に傾け、彼の肩に頭を乗せた。

「……早坂？」

「枕がある方が落ち着くし」

「抱き枕抱いて寝るタイプ？」

「そこまでじゃないし」

言ったら彼は片腕くらい貸してくれるだろうか。きつとそうしてくれる。でも、ここは教室で、これからクラスメイトたちが来るんだ。そんな場面を見られたくない。みんなが来るまで、それまでの間の少しだけこうしていよう。これくらいなら、許されたっていいんだから。

目を閉じて肩に頭を乗せた早坂をチラツツと見る。いつもと同じように見えて、目元に軽くだが、他とは違う化粧が施されている。それがどういふものかは流石に知ってる。彼女は丈夫な体を持っているが、睡眠時間は本来削られていいものではない。彼女はこれも耐えられる。でも、傍から見ていると心配にはなるのだ。

スマホを取り出し、クラスのグループラインを開く。すでに到着していることと、クラスの最終確認はほとんど終わっていることを伝え、ゆつくり来たらしいと全体に伝えた。こうしておけば、しばらく教室に人は来ないだろう。他の場所を手伝いに行くか、普段入れない

時間帯の校舎を楽しむかだ。

「世話焼きだね」

「嫌だったか？」

「ううん。ありがとう」

彼なりの優しさ。そこに込められている感情は読み取れない。心配されてることがわかるだけ。

それでもいい。今この瞬間は、自分にだけ向けられている優しさなのだから。特別扱いと同じ。悪くない気分だ。せつかく彼が作ってくれた時間。決して長くはない時間だけど、満喫しよう。

それからおよそ30分後。2人きりで見られるところを見られたら、噂をたてられかねないとして、早坂に一旦教室の外に出てもらう。適当に5分ほど時間を潰してもらい、その後改めて教室に入ってもらおう。

「お忍びデートみたいですね」

「あいな……」

「冗談です。でも」

カバンを肩にかけたまま、ひよこつと軽い足取りで光上との距離を詰める。彼の口にそつと指を押し当てた。

「今日はエスコートしてくださいよ？」

早坂は楽しげに目を細め、彼の唇に押し当てている自分の指にそつと口を当てる。彼とは接触していない。これもこれで間接キスにはなるのだろうか。

これをやられるだなんて思っていなかった光上は、わかりやすく顔を赤くして狼狽する。そこまで反応されると早坂も照れくさくなり、ほんのりと頬を赤らめた。

「それではまた後で」

面白いぐらいに固まっている光上に背を向け、廊下まで歩み出。しばらく歩を進めたところでダッシュ。周りの生徒が驚いているけど関係ない。幸いにも風紀委員の巡回とはズレていて、面倒なことにもならない。顔を見られないようにひたすら走る。走って走って階



段を駆け上がり、屋上の手前の踊り場で蹲った。

「ああ……っ……！」

（超恥ずかしいし！ なんなのこれ！ ママ本当にこれでパパ落としたの!? どんなメンタルしてるの!?）

母直伝のやり方だったようだ。

羞恥で体が熱くなる。でも今はそれを冷ましていられるような精神状態ではない。先程とは理由は違えど、同じように膝を抱えて今度は顔を隠した。その間に呼び起こされるのは、先日に母と過ごした時間のこと。

三者面談の日に、奈央の気まぐれで光上を交えて夕飯を食べた。彼だって自分の母親と過ごすのは久々のはずなのに、彼は快く承諾してくれた。その日のおかげもあって、文化祭の初日に一緒に回るという話が作られたのだが、これも母親の提案ではあったりする。

ともあれ、その日の夜に母親と2人でいろいろと話した。途中から恋愛話に変わり、馴れ初めを聞くことに。そうして教わったのが、先程のやり取りである。

「指キスで終わっては駄目よ？ 本気で落とすならその後の駆け引きからが本番だから」

（無理だし!! あれに耐えながら駆け引きなんてできるわけないし!）

あそこまでやれば相手は必ず意識する。動揺しない人などいない。緊張と興奮。その状態のままの駆け引き。強引に女性として見てもらい、相手の思考を制限する。相手の視界を狭めさせる。そうすれば一気に距離を縮められる。それができる相手かの見極めが重要だが、可能な相手なら必勝の手段である。

というのが早坂奈央が考えた理論である。実践したとか嘘である。娘がマジでやったら面白いな。本当に落としてきたら、娘のことも仕事のことも叶って一石二鳥じゃん。とか考えている。

机上の空論を信じ込んで実践してしまった早坂愛。見事に自爆していた。

「どんな顔して戻ればいいのか……」

結局早坂が戻ろうと決心をつけるまで、40分の時間を要した。カバンを持ってきていたことが不幸中の幸いだ。クラスでやるのはコスプレ喫茶。早坂は四宮家に勤めていることを周囲に隠している。そこをについて、四宮家の使用人の服でいいかと判断したのだ。妥協も言う。

この場所なら他に誰も来ないため、一応の警戒を払いながら素早く仕事着に着替える。それに着替えてしまえば気持ちも切り替わるというもの。さつきまでの狼狽が嘘のように冷静になる。

(仕事着とか面白みに欠けますね……。光上さんの反応も薄いんでしょうね)

そんなことはなかった。思いつきり気にしていた。

しかし今更どうしようもない。早坂のように衣装がある人の方が稀。何人もが自作していたり、コスプレ服を取り扱っている店に交渉してレンタルしている。各々が自分の分を確保しているだけ。予備なんてものは存在しない。

光上の反応が薄いだらうと予想すると、落ち着きを取り戻すどころか感情が冷え込んだ。少し気が進まないものの、クラスには戻らないといけない。足を動かすのも億劫で、階段の手摺を滑って下りる。ちよつと楽しい。

「早坂先輩！ それは校則違反ではないですけどマナーが悪いですよ！」

「あ、監査ちゃんじゃん。朝から元気だね〜」

「やることが多いですからね！ 話を逸らさないてください！」

「向こうで会計くんがヘッドホンつけてゲームしてたよ」

「情報提供ありがとうございます！」

マナー違反程度なら注意して終わり。校則違反は断じて許されない。伊井野の中でしつかりと分けられていることだ。そして相手が石上。早坂がすぐに解放されるのも必然のことだった。朝から張り切ってるなと思いつつ、犠牲となった石上に心の中で合掌。

伊井野との会合は、早坂の気持ちのリセットに役立った。キャンプファイヤー実施のために尽力した彼女が、通常業務にも手を抜かない

でいる。文化祭を成功させるために彼女が動いているのだ。一般生徒は楽しむことでそれに応えることが筋というもの。

「愛ちゃんおはよく！　メイド服似合ってるじゃん！」

「ありがとうございます」

「ひゅー！　仕上がってる〜！　これなら予想通り光上さんとセットでいけるね！」

「……なんの話？」

「光上くんこつち来て〜」

男子たちとの会話を切り上げ、光上がこつちに来る。彼の服装に早坂は目を丸くした。

「光上くんは執事服なんだよね」

「使用人の予備の服を借りたからな」

「これ見た時に、愛ちゃんから事前に聞いてたメイド服とデザインが近くなって思ってた！　せっかくだから2人に役を作ることにしたの！」

知らない間に変な話が出来上がっていた。それも仕方のないこと。このクラスメイトが独断で決めたことだから。

彼女の話に興味が湧いたのか、他のクラスメイトたちもなんだなんだと視線を集めてくる。それに気分を良くしたのか、その子は椅子の上立ち上がってさらに注目を集める。上靴はちゃんと脱いでいた。「愛ちゃんと光上くんを！　使用人同士の恋人として売ってほしいと思います！」

「きやあああ！　有りよりの有りだわ！」

「あなた天才なの!?!」

「光上処す！」

「写真集出しましょう！」

女子からは大ウケ。男子からは光上に嫉妬の視線が注がれる。光上はそれを受け流していた。彼からすればその程度は気にも留めない程度らしい。

話が勝手に盛り上がるのは面白くない。早坂はやめさせるなら早い方がいいとして、光上に声をかけた。

「どうするんですか？ 止めるなら今のうちですよ」

「役だしなあ。店の売上に関わるなら別について感じ」

「絶対関係ないですよ」

「やっぱり？」

じゃあ中断させようと光上が判断した瞬間、早坂の内側でストップがかけられる。本当にやめさせていいのかと。役という免罪符があるのだから、良い思いをしたって罰は当たらないのではないかと。「？」

手は光上の服を摘んでいた。か弱く摘まれたそれは簡単に振り払える。しかし光上はそうはせずに、早坂の方へと振り返った。

「あの……文化祭ですし、やはり役ってだけなら有りかと。どのみち始まればお互い離れますし」

「早坂がそう言うならいいけどさ」

「それに、あそこまで盛り上がってるのを見ると止められないかと」

「テンション下げさせる方が悪手か」

ハンターハンターが再開した時の中年親父ぐらいの興奮状態になっている。これにはリアルネテロさんも勘違いして正拳突き動画を中断しかねない。まだ音は遅れていないのに。

どこからともなくカメラが用意され、光上と早坂を被写体とした写真撮影が始まる。本当に写真集でも出すつもりだろうか。

「じゃあまずはポット持って、一緒に仕事してる感じで！」

「わりと本格的だな！」

「何をしてるのですか光上さん。時間は迫ってますよ」

「意外とノリノリ！」

「カットカット！ 愛ちゃんそれは駄目！」

「と、言いますと？」

止められ方に光上は首を傾げた。写真であって動画ではないよなと。そんな光上を放置して、カメラマンは早坂に要望を出していく。2人は恋人設定であり、今は2人以外誰もいない状態という設定だそう。つまり、2人である時の話し方にならないといけない。

「ズバリ！ 名前で呼び合って！」

「名前ですか。……………え？」

「愛ちゃんは呼び捨てタイプじゃないだろうし、晶くんって呼んで。光上くんは呼び捨てにしてね」

「わかった」

「わかつちやうんですか!?!」

「時間がないって言ったのは愛だろ？」

「っ!! ……晶くんが言うなら。でも、恥ずかしい」

か細い声になる。視線を逸らし、恥じらいながら言うその姿にクラスメイトたちがKOされる。数名の女子がその反応によって倒れて保健室へと運ばれた。男子はトイレに行ったとか。

ティツシユを鼻に詰め込んだカメラマンが、目をギラギラと滾らせながらカメラを構える。その気迫に流石の光上と早坂も気圧され、様々なシチュエーションの撮影が始まる。初めはまともだったのに、段々とエスカレートしていく。

「光上くん! 壁ドン行こうか!」

「次は顎クイやって!」

壁ドンで数枚。その状態からの顎クイで十数枚。一眼レフでパシャパシャと激写されていく。こうなってくると2人とも思考が狂い始め、いつぞやの少女漫画脳が降臨。恋愛を学習し始めた光上も、その弊害で少女漫画脳が降臨してしまうようになったようだ。

「愛ちゃんの腰に手を回して! 引き寄せる感じ!」

「次は後ろからぎゅっと!」

少女漫画脳になってしまったがために、2人のその役としての完成度が増していく。演じている印象が強かったのに、今ではその雰囲気を感じられない。

「愛ちゃん寝転んで! 光上くんは押し倒した感じで!」

いつの間にか用意されていたシートの上に早坂が横になる。光上も言われた通りに押し倒した状態を作り出した。彼女の顔の横に左手を起き、右手は彼女の頬へ。お互いに目の前のその人しか映らなくなった。早坂の澄んだ瞳に吸い込まれるように顔を近づけ、彼女もまた受け入れるように目を閉じる。

「そこからのキスいっちゃおう!!」

「っ!?!」

光上は弾かれるように起き上がって数歩下がり、早坂も体を起こして口元を覆う。

「あちやあぁー。まあでも収穫は十分だしいつかな!」

「何も良くないし!」

冷静さを取り戻した早坂はそのカメラのデータを没収。あとは目撃者の記憶をどう消そうかと悩みながら周囲を確認。不思議なことに周囲にはカメラマン以外いなかった。

「みんなは?」

「鼻血でいなくなったり、倒れたり、吐血したり、トイレに駆け込んだりだよ」

どのタイミングでどれだけいなくなったのか分からないが、少なくとも最後のあれはカメラマンだけ。早坂は真っ黒な笑みを浮かべながらその子の肩に手を置いた。

「他言したら、赦さないからね?」

「愛ちゃん怖いよ……。あ、じゃあ口止め料としてデータ返して!」

「むっ!」

「誰にも見せないから、愛ちゃんにもデータは送るよ?」

「……!」

若干揺らいだ。あそこまでやったのだから、カメラにどう写っているのか知りたいのもあるし、写真が欲しかったりする。しかしリスクは大きいわけで、早坂は交渉を始めた。

「返すデータはウチが決める。全部はあげない」

「ワンシチュ毎に2枚か3枚貰えたら十分だよ」

交渉があっさりと成立した。

すべてが終わったタイミングで、クラスに人が少ないことを疑問に思いながら四宮が登場。大正時代の給仕服を着ており、大和撫子である四宮に見事に似合っていた。

「かぐや様お似合いですね!」

「そ、そうですか?」

「ええ。大変お似合いですよ」

「びつくりするわあ!!」

「愛ちゃんの完成度高いもんね〜」

カメラマンはけらけら笑いながら開店準備を始める。自分の暴走のせいで戦力が消し飛んだ。実は結構ヤバい状況である。光上はそれを察してすでに準備に取り掛かっている。

「あなたそれ仕事着よね?」

「メイド服ですね。お客様に非日常感を味わっていただくためです」

「私にとっては日常感満載なのだけど?」

「かぐやちゃんなにそれー! まじイミフ〜!」

「非日常感!!」

その服を着た早坂に、そんなノリで話されたのは初めてだった。四宮にとっての非日常感満載の瞬間である。

「楽しんでるとこ悪いけど、愛ちよつと手伝ってくれ」

「喜んでお手伝いしますよ。晶くん」

「……………。っ?!?!? どういうことなの!?! 誰か説明して!!」

四宮かぐや。今年で一番の非日常感を味わった瞬間である。

### 第33話

2年A組はお世辞にも良いスタートを切れたとは言えなかった。開催前の準備中に起きたハプニングにより、シフトに大きく穴が空いたからだ。鼻血が止まった女子の復帰があるものの、半数以上が尊死して保健室のベッドの上。男子たちは裏方の仕事として割り振られていたのだが、教室に戻って早坂の顔を見る度に教室の外へと飛び出していく。戦力外通告もいいところだ。

理想の状態としては、ベッドで昇天している女子たちが復帰し、早坂が仕事から外れる。そうすることで男子たちが使える状態となる。これで円滑に店を回す。ここまでできれば完璧なのだが、現状では厳しい。

今現在動ける男子は光上ただ1人であり、裏方の仕事をその身一つでこなしていた。早坂はそちらのヘルプに回ろうと思ったのだが、コスプレ喫茶という誘惑が客を集める。

「2名様ですね。こちらの席へどうぞ」

接客は女子の仕事。そしてその女子の数も少ない。早坂と四宮とカメラ女子<sup>すべての元凶</sup>。復帰した女子は今のところ1人だけ。5人いるのだが、客が来続けるため現状維持が手一杯。しかも1人は会計に回らないといけない。

この喫茶の救いとしては、メニューのほとんどが飲み物であり、軽食もおにぎりだけということ。接客する人がそれぞれの客席で淹れるため、裏方が飲み物を作ることはない。しかし、運営を円滑にするためには、常に新しいものを用意しておかないといけない。淹れるのは接客の仕事だが、逆に言えば接客と淹れることのみが仕事なのである。珈琲豆や茶葉の準備やおにぎりを作るのはすべて男子の仕事。今は光上の仕事だ。

「大丈夫ですか？」

新たな珈琲のセットを受け取りつつ、早坂は心配そうに尋ねた。彼もまた天才と称される領域にいる人間。オールマイティーなタイプ



であるため、仕事も効率的に回せている。しかし欠点は体が決して強くないこと。体力をつけているとはいえ、慣れない仕事は疲れが蓄積する。疲労を感じた時点でアウト。気にかけないわけがない。

「これぐらいならなんとか。お客さんが思ってたより長居するから、そのおかげで回せてる」

いつものように微笑みながら言う彼に、早坂は眉を下げた。それは裏を返すと、今が限度であり、回転率を上げられたら彼の無理が嵩むということ。今の時間帯は軽食がなかなか入らないが、12時前後は必ず入る。彼の負担が増えるのは時間の問題。

しかし客が滞在する時間を指定するわけにもいかない。本来なら、稼ぎのために回転率を上げないといけないのだから。

「ほら、愛も仕事戻って」

「っ、その呼び方のままなんですネ」

「あ、これ直していいの?」

「……駄目です。今日一日そのままだつてさつき聞きました」

「言ってること無茶苦茶じゃん……」

「晶くんが悪いんですよ」

ぷいっと顔を背け、ポーカーフェイスを作ってから客の下へと戻る。四宮家で長年働いてきた早坂の接客は、このコスプレ喫茶で間違はなくトップ。普通に生きていたら絶対に味わえないような時間が作り出され、それを受けた客はそれに浸って長居する。売上的には痛手だが、光上のことを思えば最良の手段だ。それに、その道のプロであるのだから、手を抜くこともない。

「素晴らしい接客ですねお嬢さん」

「ありがとうございます——ママ!?!」

「あら、今は私は1人の客で、あなたは店員よ」

「そうだけど……なんで。来るって聞いてないよ……」

「言っていないもの」

くすくすと笑う母親にどっと疲れを感じる。来てくれたことは嬉しい。いつも忙しそうにしている母親をおもてなしできるのも嬉しい。それでも事前に言っただけでよかったという思いがある。今浮かべ

ている笑顔からして、碌なことを考えてなさそうだ。

「店員が足りていなさそうね。主に裏方」

「ちよつといろいろあつて」

「ボイコット?」

「そういうのじゃないから安心して」

決してクラス崩壊をしたわけじゃない。何だ違うのかつて少し残念そうに肩を竦めないでほしいものだ。揶揄いの意味合いだとしても、性格が悪いと思う。早坂はさすが自分の母親だと思った。

「それで、どうでした?」

「どうって何が?」

「彼に仕掛けたんでしょ?」

「なっ!?!」

「あなた本当にやったのね」

本当に四宮家の人間かと言いたくなるほどわかりやすく動揺を見せる娘。青春してるなあと思いつつ、今そのことを根掘り葉掘り聞くのはやめておくことにした。店の邪魔になるし、他の客にも迷惑になる。

娘が淹れてくれたコーヒーを飲み、上達したことを褒める。これは間違いなく一流の腕前だ。照れを隠しながら喜ぶ娘に目を細め、ちらりと裏方の方を見る。変わらず1人で回せているが、ガス欠もするだろう。コーヒーを飲み干し、代金を払うために席を立ち、娘に耳打ちする。

「あの調子だと彼はもちませんよ」

「……わかつてる」

不安そうに彼を見る娘。彼女の頭を優しく一度だけ撫でたら会計して外に出た。

その様子を光上は仕事をしながら辛うじて見ていた。早坂の母親が来たこと、それを早坂が接客していたこと、今しがた帰ったこと。余裕があれば、先日夕飯に招待されたことを改めてお礼したかったのだが、残念ながらそれは叶わなかった。またの機会にしよう。

少し息をつく時間が生まれた。相変わらず1人だとしんどいが、ギ

リギリ保てている。そんな彼に、上品なハンカチがそつと差し出された。

「お使いください」

「ありがとうございます……なんで？」

「早坂であつてますよ」

「あ、はい。じゃなくてですね！ え!？」

「ママ何してるの!?! なんで仕事着あるの!?!」

「常在戦場よ」

四宮家の制服を着た早坂が2人。光上は目眩がしそうだった。目元がそつくりな2人が服装まで同じになると、とうとうややこしい。母親の方は見た目と年齢が合わない。実年齢より若く見えるため、早坂愛の姉だと言つても知らない人には通じてしまう。

「さしでがましいとは思いましたが、手が足りていないのも事実。しばしの間だけ手伝わせていただきます」

「ありがたいですけど、お客さんにそんなことをさせるわけにはいきませんよ」

「ただの使用人ですし、少しお話もしたかったので。今も仕事の合間に来ているだけです」

限られている時間を有効活用したい。次の機会にと考えても、早坂母は忙しい身。今来られているだけでも奇跡と言えるほどに。そのような人にそう言われてしまうと、光上は断れないのだ。これも娘から聞いた情報から、光上の性格を分析しての言動である。やはり熟練の大人相手には一歩劣るようだ。

そんな様子を四宮家の長女であるかぐやは、呆れた様子で見ている。顔は若干引きつっており、早坂奈央の行動に引いているようでもあった。実際引いてた。

かぐやだつて親には来てほしいと思つたりする。母親はすでにおらず、早坂の様子を見ては羨ましく思うことも。父親は健在だが、多忙であるため来ることはない。考えたくはないが、娘に興味があるのかすら疑わしい。本当に娘と思つているのかと不安にすらなる。それはそれとして、あの様子を見た今だと来てほしくないか思つたり

するのだが。

そんな四宮かぐやの目の前に。白銀父お義父さんが現れた。

「ひっ……………」

「その反応はショックだな。義理の娘になる子の様子を見に来たのに」

「義理の娘って……………！ な、何をおっしゃいますか！ 気が早いですよー！」

「おっ、前より気持ちが進展してる。ちゅーしたの？」

「してません!!」

「お互い奥手だな。気持ちってのはストレートにぶつけるものだぞ」

そうして始まる白銀父の恋愛講座。好きな人の父親の恋愛講座は、息子である御行に対して最も有効に働くのではないか。そう思ったかぐやは、他の接客をそっちのけに真剣に話を聞き始めた。

何してくれてるんだこの主人め、とか早坂が睨むもその鋭利な視線は届かない。乙女モードに突入した者は、オーラを纏ってその身を守るのだ。

「さて、今日はここまでにしておこう」

「もう少しお聞かせ願いたいのですが」

「この手の話はね、自分の頭では何もわからなくなった時に聞くものだよ。自分で考え、行動し、経験を重ねて持論を作る。君の人生なのだから、君のやり方で進みなさない」

「私のやり方で……………」

我が道を行く大人の代表格みたいな人物に言われると、妙に強い説得力がある。かぐやがしっかりと咀嚼し、こくりと頷いたのを確認。それが済んだところで、光上の方を見る。

「おや？ あれはこの前の、かぐやくんの母代わりの早坂さんか」

「え、ええ。どうやら遊びに来ていたようで。1時間もせずに帰られるとは思いますが」

「……………ふむ。なるほど」

顎に手を当てながら何か一人で納得する。真剣に考えている時の目が御行に似ており、やはり親子なのだと思わせられる。御行は父

親似で、圭は母親似である。

「私も手伝えばバランスが良くなるな」

「真剣にボケないでええ!!」

「真面目な提案だが？ 早坂さんが帰った後も彼が1人のままなら倒れるぞ」

「えっ？ そんな様子は……」

「男は女に見栄を張る生き物だからな。彼とは話もあるし」

その僅か5秒後。光上は大混乱に陥った。

ちなみに、後に訪れた御行の接客をしていたかぐやの後ろから、ひよっこりと父親が姿を現して盛大に咽たのは別の話である。

正午から午後1時というのは、たいていの飲食店でピークとされる時間帯である。飲み物提供のここではその時間に人の入りがマシとなり、それに合わせてか男子も女子も復帰してきた。何人かは文化祭を満喫していたようだが。

シフトよりも長い時間働いたことと、謎の助っ人が入ったとはいえ1人で裏を回していた光上は、男子たちの復帰により本日の仕事の終了を告げられる。女子の方も同様であり、早坂やかぐやも今日の仕事が終わった。

店の宣伝にもなるからという理由で、コスプレしたまま残りの時間を過ごすことに。執事服の光上とメイド服の早坂は、2人揃って昼食を取り、適当に文化祭を回っている。

「そのカチューシャは外さないの？」

「外しておきましょうか。目立ち過ぎても仕方がないですし」

カチューシャをカバンの中に入れる。残念そうな声が周囲から聞こえたが、その需要に応える必要もない。光上がつけてほしいと言えればつけるが、外すように提案したのが彼なのだ。今日はもうつける気がない。

さて、仕事をしているわけでもなく、今日は恋人設定なのだ。接し方を軽くしても問題ないだろう。

「ねえねえこれからどこ行く？」

「1年生のホラーのところ」

「会計くんたちのとこだっけ？」

「そう。せっかくだし、先輩たちの出し物には行っておきたいから」

「先輩らしいところあるんだ」

「酷い言われようだな」

実際、光上にそういう面があると知ったのは今回が初めてだ。これまで彼はどこにも属さなかったため、先輩後輩としての関係性が非常に薄かった。それが、生徒会に入ったことで変わったようだ。

1年生はA組とB組が合同でホラーハウスをやっている。その場所は上の階だ。人を避けながら廊下を進み、階段を登っていく。一般客も大勢入り、見事な賑わいを見せている。全体としては概ね成功と言えるだろう。

「——嫌よ！ 私怖いの手で……！」

「あれ？ 四宮さんと四条さん」

「愛と光上？ あー、使用人カップルの設定なんだっけ」

「話が広まってるのか……」

「正しく広まってるのでセーフかと」

そういう設定だ、というところまで含めて広まっているのなら、誤解が広まることにはならない。情報が捻れることなく広まっているのは一種の奇跡だが。

「そ、そうだわ！ 光上さんと眞妃さんで入ってもらいましょ！ 光

上くんホラーは大丈夫よね？」

「苦手ではない——」

「駄目です」

被せるように早坂が間に入る。自分のものだと主張するように彼の腕を掴んで。

「今日は私と彼が恋人の設定なんです。彼とここに入るのは私です」

「それはあくまで設定なんでしょ？」

苦手なホラー体験なんてしたくないかぐや。設定なんだから一時的に離れるぐらいいいだろうと迫る。

その設定を崩されたくない早坂。断固として譲る気はなかった。設定がなければ、彼と文化祭を回れないと思っているから。

「悪いね四宮さん。今日が終わるまではこのままなんだ。愛を優先させてもらおう」

「……あなたいつも早坂優先じゃない」

「おばさま観念して私の道連れになってちょうだい」

「はっ！ 嫌よ！ 私はこれをやりたくないの！」

駄々をこねるかぐや。四条と早坂が片腕ずつ抑え、中に連行していく。四条は道連れを作るため。早坂はさっきのことでもちよつとカチンときているため。光上はそれを見て苦笑しながら後をついていった。

中に入ってしまったかぐやも観念するしかない。ホラーが苦手な者同士、四条と手を握り合いながら進んでいく。その後ろを歩く早坂は、光上の腕に手を回していた。

「ホラー大丈夫だろ」

「ぼいことをしてたらだめ？」

「……ずるいやつ」

上目遣いで言われると何も言い返せなくなる。たしかに今は恋人設定があり、恋人つぼいことを拒む理由もない。先を歩いている柏木も彼氏の腕に抱きついていて。計算してやっていそうだが。

ホラーハウスは前半がお化け屋敷であり、後半は立体音響体験となっている。もちろん聞く音はホラー系のもの。前後半で分かれているのは、進捗に問題があったからなのだが、怪我の功名により大反響を生むホラーハウスが出来上がっている。

「中に入ったらこのヘッドホンとアイマスクをつけてください」

「なんの必要性があつて!?!」

立体音響体験だからである。四宮かぐや、リサーチ不足。

早坂が主人の醜態に恥ずかしがるかと思いきや、彼女は彼女でそれどころではないようだ。光上が先に中に入り、アイマスクとヘッドホンをつける。早坂も続いて中に入ったのだが、彼と密着してしまうことで今朝方のことを思い出していた。

(あの時と同じ……いや、今のほうが近いんじゃない……!)

ロッカーの扉が閉められていて中は暗い。薄明かりこそ入ってく

るが、その明度も演出のため下げられている。ほぼ何も見えない状態。彼はもう立体音響を聞く態勢に入っており、早坂はそれが少し気に食わなかった。

「なんなの……。私だけ意識しちゃって。馬鹿みたい」

そう言った瞬間、腰に手を回され、彼がヘッドホンとアイマスクを外して顔を近づけてた。突然のことにドキッと胸が高鳴り、速まる鼓動が彼に伝わっているのではないかと焦る。

「こちとら意識しないように気をつけてるだけなんだよ。今朝のあれがあつて、今はこれなんだし」

「……本当だ。心臓バクバクしてる」

「聞くなよ！　というかちゃんとアイマスクとヘッドホンつける。もう始まるはずだぞ」

「いい」

「なにが？」

「このままがいい。5分こうしてたい。恋人なんだもん」

そう言つて彼の背中に腕を回した。彼の胸に耳を押し当てて、そつと目を閉じる。

誰かとうとうしたのは何年ぶりだろうか。主人とはやらないし、恋人なんて今まで1人もいない。母親だつて忙しくてなかなか会えない。会えたとしても、自分の年齢を気にしてできない。だから、少なくとも6年以上はやってない。

いいじゃないか。

今日だけの設定で。

今日しか味わえない気持ちなんだから。

今日ぐらい。

夢見心地になつたつて。

光上はそれを受け止めながら、空いている手でヘッドホンを自分の耳に押し当てた。石上と伊井野にちゃんと感想を言えるようにするために。



「楽しかった〜」

「それはよかった」

「晶くんは？」

「俺も楽しめたよ」

「私が相手だったから？」

屋上のドアを開けた。いつもは閉まっているけれど、文化祭の日は特別に開放されている。一般客は皆帰り、生徒たちも疎らだ。帰ったりどこかの部屋でたむろしている。だから、この時間でこの場所に来る人は他にいない。

いつからか伝統となった宝玉のレリーフを横目に、早坂は光上に問いかける。だいぶ踏み込んだ問いかけ。恋人設定としてのそれなのか、個人としてのそれなのか。

「そう、だな。うん。愛と回れたから、今日を楽しめた」

「それを明日圭にも言ってみよう」

「……」

「あはは、意地悪だったね。私、今日のことはずっと忘れないと思う」  
母親が今日2人で回れるように彼に交渉し、成り行きで生まれた恋人設定のおかげで目一杯好きにできた。

明日のシフトの時もそれを言われそうではあるけど、明日は圭が来るから恋人設定を無くしておかないといけない。

胸を満たす高揚感と幸福感。そして生まれる焦り。それらが早坂の普段の思考を奪う。彼が今日起き続けているということを感じない。今の彼はすでに思考力が半分以下になっていることを。

あるいは、彼女の深層意識が気づかせないようにしているか。

今日だけの特別な設定で。

今日だけの特別な時間。

まだ、今日は終わってないから。

まだ——恋人でいられる。

「学校出るまではさ……。恋人ってことでもいいよね？」

「学校内で作られた設定だしな」

言質は取った。

絡めるように彼の首に両腕を回す。

「私の心臓をあなたに捧げてもいいのですか？」

——この学園には奉心伝説がある

「……ああ。受け止めるよ」

じんわりと心が満たされていくのを感じた。

この温かさを、きつと幸せと呼ぶのだろう。

泣きそうになるぐらい嬉しくて。

溢れんばかりの喜びが苦しい。

軽く背伸びをして。静かに瞳を閉じる。そうして——そっと口づ

けをした。

——哀しいかな

——光上晶は奉心伝説を知らない

——だから彼は勘違いする

## 第34話

秀知院学園高等部の文化祭は、奉心伝説があることから「奉心祭」とも呼ばれている。その伝説に則り、ハートを渡す行為は告白と同義になっており、学園中ではいたる所にハートが散りばめられている。ハートの風船だったり、石上が子安に渡したハートの巨大クッキーだったり。キーホルダーやシールなど、ハートにできるものならなんでもハートにしてしまえと言わんばかりに。

文化祭なのか、それともカップル製造期間なのかわからなくなってくるが、そういう空気というのは、普段勇気を出せない人の背中を押す。その場の空気というのは力強く。空気を読むことに敏感な日本人はその影響を受けやすい。

あえてそれを利用するという手段もある。白銀圭はそれを利用しようとして画策していた。彼女は2日目に行くことと光上と約束したため、初日は高等部に遊びに行っていない。律儀にそれを守り、代わりに情報収集に徹した。クラスメイトは何人も遊びに行っており、親友である萌葉も足を運んだ。

圭は彼女たちに連絡を取り、高等部の文化祭がどうだったかを聞いたのだ。その理由は「来年の文化祭の参考にするから」という、どこかの誰かが似たようなことを言っていたものだ。友人たちは言葉通りに受け取り、真面目だなあと思いながら教えたわけだが。

集めた情報で言うと、四宮かぐやのいるクラスがコスプレ喫茶をしていた。つまりそこに行けばコスプレした光上を見られる。

生徒会長のクラスはバルーンアートをしていて、レベルが高かった。兄に興味はないが、藤原に会いに行きたい気持ちはある。

1年生のクラス合同「立体音響ホラーハウス」は他校の文化祭では味わえないレベルだった。男女でも二人一組では入れたのに、途中から駄目になった。光上と一緒に入れないのなら優先度は低い。

オカルト研究部が本格的な占いをしていた。

他にもいろいろと情報を集められたが、集めた情報の中で一番圭の

心を惹いたのが、学園中にあつたというハートである。バルーンアートを行う2年B組が、大量に余ったハートのバルーンを配りまくったのである。主犯格は藤原だが、奉心祭らしくて良いと皆に好評だったのだ。

(ハートを渡せば告白と同じ、かあ)

萌葉が景品として取ったというハートのキーホルダー。萌葉自身も持っていて、余っているからと言われて渡された。そのキーホルダーを月明かりに翳しながら眺める。

少し早く鳴る鼓動。大きく高鳴る胸。

少し意識するだけでこれだ。

(わたしは……光上さんが好き)

顔が熱くなる。でも、嫌じゃない。

これが恋なんだ。

今まさに、恋愛してるんだ。

ハートを受け渡せば告白。でも、それだけで終わるのは寂しい。やっぱり言葉にしたい。大切なことは、言葉にしないと駄目だと思うから。

文化祭という特別な時間。特別な空気が彼女を勇気づける。

(明日、ちゃんと告白しよう)

そう思っていたのに、事件は秀知院学園高等部で起きていた。

圭は呆然としながら、受付の人に話を聞くことにした。

「あの、昨日友達がいったハートがあつたって言ってたんですけど、撤去されてしまったんですか？」

「あー、実はこれちよつとした事件が起きちゃってね」

「事件……ですか？」

「うん。一夜にして学園中のハートの風船が全て姿を消した。犯人はアルサーヌと名乗る謎の人物」

「ほらこれ。新聞部がコピーしてバラ撒いたやつなんだけど、犯行声明でしょ？」

「なるほど……」

受付の人から渡された用紙を見ながら圭は肩を落とした。期待していた空気感が消し飛んでしまっている。ハートに囲まれて好きな人と同じ時間を過ごし、気持ちが高まったところで告白する。この作戦が台無しとなってしまった。告白するための勇気が10減った。

圭のその様子を見て、受付の人たちも何かを察する。このままでは彼女が不憫だ。しかし持ち場を離れるわけにもいかない。

「会長に言ったら何か手を貸してくれるかも」

「会長いろんなことできちやうからね！」

「はあ。そうですか」

2人は目の前の少女がその会長の妹だとは気づいていない。今日好きな人に告白でもしそうな可愛らしい女の子としか認識していない。半分正解の半分間違い。会長の妹である圭は、その会長がいかに不器用で、いかに取り繕っているかをよく知っている。

だがまあそれをバラすつもりも毛頭ない。反抗期ではあるものの、兄のことが嫌いなわけじゃないのだ。彼が必死に作り上げている人物像を壊すなんてことはしない。

「……ハートの風船が無くなったのって。夜の間でしたっけ？」

「え、うん。朝来た時には全部無くなって、昨日の文化祭が終了した時にはあったから、その間が犯行時間だろうって」

「随分と張り切った怪盗さんですね」

「あはは、そう思ったら可愛いね〜！」

「ささっ、いろんなことやってるから、文化祭楽しんでいって〜！」

「はい！　ありがとうございます！」

圭が深々とお辞儀をし、それに倣って受付の2人もペコリと頭を下げる。初対面にして互いに好印象。文化祭というものは、初対面という壁すら取り払う力を持っているらしい。

校舎の方へと足を進め、途中で横にそれて足を止める。人の邪魔にならないか確認し、にこやかだった表情が無になる。スマホを取り出し、ラインを開く。送る相手はただ一人。昨日の夜に家を出ていった御行<sup>怪盗</sup>だ。

へ お兄い 三

今日

既読

9:50 ハートを盗んだ怪盗さん。見つけたら殺す

《left》 ちよつ!?怖いんだけど!なんで!? 9:51

《left》

返ってきたメッセージに既読だけつけて無視する。白銀圭。反抗期というものを含めても数年ぶりのガチギレだった。いや、ここまで殺意が湧き上がってきたのは人生で初めてだ。

光上から送られてきているメッセージを確認。シフト時間が送られてきており、彼の時間が終わる少し前に教室に行くことを伝えている。その時間までおよそ1時間。圭の中では、光上と回りたい場所と2人で行くには微妙な場所の2つがある。1時間をその後者に使うと思うていたのだが予定変更である。妹の人生を左右する大勝負の日に、とんでもない妨害をかけてきた兄を見つけ出さないといけない。

「まずはお兄いのクラスからかな。お兄いのことだから、どうせ真面目に他の仕事してそうだけど」

秀知院学園高等部は、敷地面積だけで言えば他校とそこまで変わらない。グラウンドが広かったり、校舎とは別の棟があるにはあるが、大きめの学校というレベルに収まる。探す場所はせいぜい校舎とその別棟ぐらい。広さだけで言えば困らない。

しかし今日は文化祭だ。大勢の人が行き来しており、兄も仕事で動き回っている。向こうは向こうでこちらを警戒しているはず。ならば先に手を打つべきなのは「協力者の作成」である。

一直線に2年B組まで足を運ぶ。バルーンアートは中学生以下に人気のようで、年齢層は低い。例外は高齢者だが、大方が孫にあげたとか。「ニコちゃんにあげよう」と言っている高齢者が多いのだが、最近の小さい子どもたちはその名前が流行りなのだろうか。

「いらつしやい。空いている席にご案内しますね」

「あ、すみません。実はお客さんとして来たわけじゃなくて」

「? では道に迷われたのですか?」

「迷っているのは兄の仕留め方です」

「え?」

「いえ。兄を探していました」

兄を探しているという圭をじーっと見つめる。その人物は大人の階段を登り続ける女こと柏木であり、結構察しのいい人として評判がいい。計算してやっていることもあるため、怖い一面もあつたりするのだが。

だがしかし、ガチギレモードの圭からは何も読み取れない。その事に柏木は驚きつつ、それを隠しながら話を聞くことにした。

「お兄さんの名前を教えてくださいませんか?」

「これは自己紹介が遅れて申し訳ありません。私、このクラスに所属していて、生徒会長をしている白銀御行の妹の白銀圭です」

「会長の……。ホントだわ! 面影があります!」

普段落ち着いている柏木が大声を出すと、クラスにいた人たちが反応する。会長の妹が来たという話がすぐさま広まり、手が空いている人たちは一目見ようと集まってくる。

これは嬉しい誤算だった。

「会長を探してるの?」

「あの人多忙だからなあ」

「……探してるのに、会おうとしてくれないんです」

「それは許されない!」

「妹さんが来てるのに会わないだなんて!」

「捜査隊を編成しろ!」

嘘は言っていない。本当の目的を話していないだけである。

圭が目を伏せながら言うのと2年B組に火が付いた。協力を惜しまない空気が出来上がる。しかしそこまでやられると迷惑をかけてしまうわけで、そこは抑えてもらうことにした。

「そこまではいいんです。お気持ちだけで。兄がクラスに戻ってきた

時に、教えてもらってもよろしいですか？」

「わかりました。では私と連絡先を交換しておきましょう。会長はシフトが短いですけど、私とは重なってますから、確実にセッティングできます」

「本当ですか！　お願いしますー！」

こうして圭は柏木とラインを交換し、御行捕縛網を作り上げること成功。逃げ場を確実に塞ぐことができた。しかし、光上の場所にも行くし、その後は彼と回るつもりだ。タイミング次第では逃してしまいかもしれない。

何よりも、それまでじっとしていられるほど冷静ではないのだ。

「すみません、また来ます」

「はい。また後で」

「またね」

他の客の迷惑になるため、早々に教室を後にする。クラスを味方につけた時点で勝率が跳ね上がった。しかし直接会うまでは何一つ安心できない。光上に会いに行くまでの時間を考慮しつつ、校舎内の搜索を再開。

隣のクラスは当然ながら光上がいるクラスで、チラツと覗き込むといういろいろなコスプレをした人たちが働いていた。ボーカロイドだったり猫耳だったり小悪魔だったり。統一性などない。コスプレという点のみが唯一の統一性ということか。なんにせよ、軽く覗いた程度では裏方で働いている光上の姿を見つけられない。

彼を一目だけでもみたい。彼と会いたい。

その欲求を約束の時間まで我慢だと自分に言い聞かせて抑える。廊下を歩いていると、他にもコスプレをした人を発見。文化祭だからおかしくもないと思ったが、その人物はよく知る人だった。というかこれはコスプレになるのだろうか。小首を傾げつつ声をかけた。

「何してるの？　千花姉え」

「圭ちゃん！　遊びに来てくれたの〜!?」

「うん！　来ちゃった！」

「そっかー。晶くんは教室にいるよ」



「クラスに行く時間は言ってるから、それまで時間潰してるの」  
「なるほどね〜」

「ところで千花姉え」

にここにこと笑顔を浮かべ合いながら、藤原の肩にそつと手を置く。  
2人の笑顔に和まされていた通行人たちも、その空気の変化を感じ取ってそそくさと足を早めた。

「なんで光上さんを下の名前で呼んでるの?」

「同じ生徒会に入ったし、また仲良くなれたから、昔みたいに戻そうかなって」

「へ〜?」

「晶くんには千花ちゃんって呼んでもらうつもりなんだけど——」

圭の笑顔が引きつる。その目に怒気が籠り始めた。

「なかなか呼んでくれないんだ〜」

「そうなんだ」

一気に霧散された。藤原は窮地を脱することに成功。

藤原は自分がそんなことになっていたとは気づく様子もなく、興奮した状態で圭に話を振った。今追いかけている怪盗のことだ。

「私が配ったハートが全部盗まれたの! これは私に対する挑戦状で、なんとしても捕まえたいんだ!」

「あれ千花姉えが配ってたんだ」

「そうなの!」

せつかくいっぱい作ったのにと話す藤原に相槌を打ちながら、圭は一計を案じる。制御不能なこの人なら、兄にとってのキラーになるのではないかと。

「私犯人に心当たりがあるよ」

「そうなの!?! でも教えないでね! これは私への挑戦状だから!」

「うん。でね、千花姉え。もし行き詰まったらヒントあげる。その代わり、千花姉えも私に協力して」

「圭ちゃん何か困ってるの?」

「兄さんが会おうとしてくれなくて」

「なんて酷い!! 見つけたら確保して連絡するね!!」

超高速で味方が出来上がった。あまりもの速さに圭は一瞬ほかんとし、次第にくすくすと笑った。こういう勢いの良さが、藤原千花という人物なのだ。

「ちなみに見つけたら何するの？」

「え？　ころす」

「……ん？」

「お兄いぜつつたいに許さない。泣いて謝ってきてても許さない」

「そ、そっかあゝ」

（会長何やつちやつたんですか!?　圭ちゃんにそんな事言われるなんて相当ですよ!?!）

藤原はこの日、勢いだけで生きてはとんでもない事に巻き込まれるということを学んだ。

## 第35話

藤原と一緒に回ることで、圭の機嫌も良くなった。なんてことにはならず、それはそれ、これはこれという風に感情をしつかり分けられていた。

光上がいる喫茶店に遊びに行く時間となり、怪盗を追いかけている藤原と別れる。明るく手を振って別れるも、その後からは沸々と兄への殺意が戻ってくる。

それを表に出すことなく、足は軽やかに2年A組へと向かい、待機列の最後尾に並んだ。昨日の時点で話題となり、その分今日は開店から人が並ぶようになったとか。文句なしの大繁盛である。

(迷惑にはならないかな)

客として行くのだから迷惑にはならない。しかし、仲のいい人の店に行くとなると、他の客と同じように入っても気を遣う。1人増えたぐらいでは誤差なのだが、迷惑じゃないかと思ってしまうものだ。

並んでいる間に兄への殺意がまた眠りにつき、代わりに光上に会うことへの喜びが出てくる。今日の彼女の感情の落差はジェットコースター並みに激しい。

「あら？ 圭来たのね」

「かぐやさん。はい、遊びに来ました。ご迷惑にならないければよいのですが……」

「ふふっ、なりませんよ。あなたもお客さんなんですから」

「ありがとうございます。あの……失礼かもしれませんが、そのお姿、とてもかわいいです」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。ありがとうございます圭」

秀知院学園が誇る大和撫子。見事な大正浪漫を現実にした四宮かぐやは、絶賛客寄せパンダとなっていた。ピーク時には中に入れられるのだが、今はまだ店の前で呼子の役割である。

この文化祭でしか見られない四宮の貴重な姿。誰もが似合ってるというその姿に、圭もまた目を奪われていた。思わぬ収穫に圭の喜び

がさらに高まり、ご機嫌な状態で入店。相席にはなったが、案内された席に座るとまた知り合いの姿が。

「愛さん？」

「はい。今日はメイドです」

「すごい……似合ってるどころか様になってます」

「恐縮です。長い時間をかけて仕上げましたので。お客様に非日常感を味わっていただくことが、私個人の目標です」

「ふふっ、味わえてます」

「マジ〜？ 嬉しいしー！」

「日常感!!」

2人で少し会話を楽しんだところで、メニュー表を圭に渡す。なんだか料金が割高な気がするのだが、接待料が込みのようだ。圭は内心で顔を引き攣らせつつ、コーヒーを注文した。兄のようなカフェイン中毒ではないが、カフェインが好きなのである。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「畏まりました。後の接客は光上さんに代わりましょうか」

「えっ!？」

「今日は裏方も余裕がありますからね。少しくらい彼が抜けても問題ないでしょう」

「で、でも……」

「とりあえず、話すだけ話しておきますね」

そう言つて早坂は光上の下へと歩いていく。圭は光上のコスプレが見られたらいいな程度に考えていたため、光上に接客されることは想定外。一気に緊張感がこみ上げてきた。

「あらあなた。その人のことが気になるの？」

「っ!？」

相席である。今の会話が対面の人に聞かれるのは当たり前。そして恋話というのは何歳になろうと興味が湧いてくるもの。サングラスをかけている女性は、上品に紅茶を飲みながら圭に話しかけた。仕事、雰囲気、服装。どこを見ても上流階級のそれで、圭の緊張は一瞬

で最高点に達した。

中等部だって富裕層が大勢いる。圭はその環境に慣れている。しかし、そこでは感じられないものが、今日の前にあった。失礼を働いてはいけない。自然とそう思わされる。

「そんなに緊張しなくていいのよ。恋話に興味を持ったおばさん程度に思ってちょうだい」

「おばさんだなんて。お綺麗で若々しいですよ」

「あら嬉しいわね。でも将来のあなたほどじゃないわよ」

心から思っていることがスラツと口に出る。思いの外話しやすい人で、向こうもお世辞を言ってこない。圭の緊張も少し和いだ。そして、この人物相手だと、信じられないほどにあっさり和本心が引き出されてしまっていた。

「それで、その彼ってどんな人？ あなたの目にはどう映って、あなたの心にはどう感じるの?」

「光上さんは……私を私として見てくださるんです」

「というの?」

「初等部はそうでもなかったんですけど、中等部に入ってから男子たちの見る目が変わって。彼女持ちはステータスで、それが当たり前ってブームがあったんですよ」

中等部に入って驚愕したことを覚えている。思春期に突入した男子たちの間でそれが起こっていた。入りたての1年生は先輩に憧れる生き物で、真似ようと躍起になる。彼女がいるいないで一種の階級が生まれたほどだ。

当然圭も他の女子たちと同様に男子から迫られるようになった。その時の男子たちの目を圭はよく覚えている。

「女子を装飾か何かにか見てなかったんです。うまいこと言いくるめようとしてきた人はいっぱいいました。それに引つかかった子もいました。それで、中等部が嫌になったんです。そんな時に光上さんと会ったんです」

「あら運命的ね」

「私も今ではそう思っちゃいます。倒れてたあの人と会ったので」

「すごい出会い方ね!」

ランニング中に倒れた光上を発見。兄を呼び、彼を助けるのを手伝ってもらった。2人が知り合いだったことには大変驚いたものだ。「光上さんは、私を個人として見てくれる。男子はみんなああなるって思ってた私の偏見を、光上さんは1人で壊してくれたんです。私に違う世界を見せてくれて、新しい風を吹き込んでくれるんです」

「つまり、彼が変えてくれたから好きになったと?」

それなら、それが光上じゃなかったら、その人を好きになつていたのか。女性は暗にそう聞いた。圭はそのことをしっかりと見抜き、穏やかな顔で首を横に振った。

「それも理由の1つというだけです」

——彼の笑顔を思い浮かべる

「嘘が嫌い、みんなの笑顔が好きなところ」

——彼の背中を思い浮かべる

「少し社会を知れば無理だと誰もが思うそれを、知っていながら目指す姿」

——時折見せる寂しげな表情を思い浮かべる

「いろんな人のことを気にかける優しさと甘さ」

——決心を固めている時の彼を思い浮かべる

「いざという時の真剣な様子。……挙げれば他にも出てきますが、いろんな一面があつて、それを引っくるめて好きなんです。出会いはあくまできつかけで、でもだから大切に綺麗びやかなんです」

そう締め括った彼女に、女性は柔和な笑みを浮かべた。圭の気持ちにどれほどのものか知れたから。甘酸っぱい青春でありながら、およそ中学生とは思えないほど地に足をつけた恋愛。それもまた、彼女が持つ強<sup>魅力</sup>みか。

「……私なんでこんな恥ずかしい話をつ……!」

「いえおばさん的には大変眩しくて素敵なお話だったわよ。サンングラスしてなかったら失明してたわ」

可愛らしく赤面する彼女に、やっぱりまだ子供な面もあるのだなど追い打ちをかける。耳を塞いでそれから逃れようとする圭にくすく

すと笑いながら、女性はレシートを持って席を立った。

「これは話を聞かせてもらったお礼よ」

「あっ——」

その手には圭の分のレシートもあった。圭が呼び止める間もなく女性は料金を払って退出。お金も丁度の料金を話を聞いている最中に用意していたようだ。

「大変お待たせしました」

入れ替わるように執事服に身を包んだ男子がやってくる。圭はさらに視線を移して固まった。石化したようにピシッと。

「ご注文はコーヒーでよろしかったですか？」

「……」

「お客様？」

「っ！ ふあい！ 合ってましゅ」

「……似合ってなかった？」

「そ、そんなことないです！ 似合ってましゅ！ あうっ……」

首をブンブンと勢い良く振って否定した圭だったが、動揺を隠し切れずに嚙んでしまい俯く。その反応を可愛いなと思う反面、やっぱり似合っていないのだろうかど勘違いして少し落ち込む。クラスでは好評だったのだが。

「お嬢様。コーヒーが入りましたよ」

「ううっ……。その口調やめてください……」

「仕事なんですけど……」

「仕事と私どっちが大事なんですか」

「え？」

「あ……、い、今のは忘れてくださいー！」

そう言っつて誤魔化すようにコーヒーを飲む。ちよつと苦い。牛乳を40mlくらい欲しい。しかしそれを言っつては子供のように思われてしまう。反抗期圭ちゃん。子供扱いはしてほしくないのだ。

「牛乳いる？」

「………ください」

光上相手には正直にならざるを得なかった。光上はそれを笑うこ

となく、ポーシヨンミルクを取り出して圭に渡す。圭はそれを一つ分だけ入れた。少し大人ぶっているのは乙女の秘密。

光上は戻ることなく圭の側に立っており、彼女はそれに小首を傾げた。他の席ではそういう風にはなっていない。マニユアルとは違うのではないかと。

「あの、戻らなくて大丈夫なんですか？」

「時間的に俺はもう上がりだからね。白銀さんの接客で最後なんだよ」

「そうなんですか？」

「あ、ゆっくりでいいからね？」

「ええ。光上さんもゆっくりしたらいいですよ」

「ん？」

ひよっこりと現れた早坂にグイグイ背中を押され、光上は圭の対面の席に座る。従業員がこれじゃまずいのではと危惧するが、早坂はその視線を受け付けない。持ってきたセットで光上の分のコーヒートを淹れる。その所作は洗練されており、まさしくプロの業。

「早坂のを見ると自分のレベルに凹むなあ」

「光上さんが淹れてくださったコーヒー美味しいですよ」

「ありがとうございます」

「光上さんも良い線いってますよ」

「早坂のは一流で、俺のはよくて二流だとは思うけどな」

「まあ否定はしません」

「いい性格してるよなほんと。そういうところ好きだけだよ」

「っ、正直過ぎるのも困りものですよ。誤解を生みますから」

光上は早坂の言葉に同意した。机の下では、光上のつま先を圭の足がちよんちよんと蹴っていたから。その後はしばらく2人で談笑し、教室を後にした。

さて、文化祭デートの始まりではあるのだが、今からどこに行くかだ。光上は2日目で圭は初日。圭が行きたいところを優先的に行くとうと話が決まる。

「二応考えてはいたんですけど、まずは——」



2年B組に行くことにした。教室の入り口から顔を出した柏木が圭を見つけて手招きしたからである。どうやら御行が教室の中にあるようだ。

「バルーンアートか」

「あ、いえ。兄に少し話があるだけです。別に欲しいわけではないです」

決して中学2年生にもなってバルーンアートがほしいわけじゃない。勘違いされたくないため、目的は別にあると説明。しかしこれが裏目に出る。普段から兄の愚痴を言っている少女が、兄に会いに来たと言っているのだ。光上も勘違いする。それはすぐに改められることにはなるが、現時点では2人のすれ違いも治りつつあるのかなとか思ってた。

「光上くんもご一緒ですか」

「はい。今日は光上さんにお誘い頂いたので」

「あらあら?」

「今は四宮さんの相手してるのか」

「露骨にそらしますね光上くん」

それはもう答えを言っているようなものではと柏木は苦笑した。しかし昨日のことは柏木だつて知ってる。そういう設定だったとはいえ、一時は早坂と恋人として過ごしたのだ。その事を思い出し、面倒な案件だなと思って首を突っ込まないように予防線を引く。

「かぐやちゃんが今良いところなんですよ」

「いいところ?」

柏木に誘導されるように視線をそちらに向ける。白銀が手にしているのは料金表。どうやら難易度に合わせて値段が変わるらしい。わかりやすい分け方だが、それなら教室の隅にある鯨はいいくらいになるのだろうか。高校生の文化祭のレベルではないが、さすがは秀知院学園といったところ。

それはさておき、料金表の一番下。ハートは値段ではなくハートのもので交換となっている。ハートを送り合う文化なんてあったかと光上は首を傾げた。

(……あー。ツイッターのいいねのあれか)

現代的で若者文化を取り入れている。さすがは生徒会長を擁する2年B組だなどと光上は勘違いしていた。

そんなことをしている間に、四宮が俯きながらそつと手をテーブルの上に差し出した。その手の下にあつたのは――

「そういうのまじでよくないと思うよ!!」

大金であつた。

四宮は突風の如く教室を飛び出し、反応が遅れて追いかけられなかつた御行が取り残される。

(かぐやちゃん。なんて初々しいの!)

柏木はその様子に悶え、四条はそういう事かと納得。圭はその大金に唾然としていた。

「白銀さーん?」

「はっ、すみません。少し驚いてまして」

「まああれは誰も予想しないから」

苦笑しながら圭と一緒に御行の席へ。御行も視線をこちらに向け、ギョツと驚いた様子でダラダラと汗をかき始めた。

「け、圭ちゃん……」

「お前なんでそんな顔を引き攣らせてるわけ?」

「え、いや……俺もよくわかつてはいないが……」

「兄さん。少し話があります。ここではなんですから、人目が気になる場所に移りましょう」

「はい……」

2人はどうやら仲が改善していくという話ではなさそうだ。むしろこれ悪化してるんじゃないかと光上は心配になった。しかし口を挟める雰囲気でもなく、2人の後をついていく。

移動した先は生徒会室。困つたらここみたいな安定感と安心感。もはや実家である。御行はソファに座らされ、対面に圭が座る。その隣りに光上が座つた。

「この怪盗騒ぎは兄さんの仕業だよね? 昨日の夜に家を出ていったもんね?」

確かめるように、それでいて高圧的に話しかける。その内容は間違っておらず、御行は喉を鳴らせながら頷いた。

光上はそこである程度察した。圭は消えた大量のハート風船のことに怒っているのだと。なぜそれで怒っているのかはわからないが、間に入ることにした。2人が喧嘩するところは見たくない。

「白銀さん少しいいかな？」

「……なんですか？」

圭の胸中は今見事に半々状態である。御行への殺意が50%。光上と一緒にいることの喜びが50%。なんとも落ち着かない胸中であるため、光上にも少し素っ気ない様子を出してしまった。

「ハートが消えたことは目を瞑ってあげてほしい。一世一代の仕掛けみたいだから」

「そんなの——！」

私だって——そう言いかけた口籠る。こんなタイミングで言いたいんじゃない。言い争うような場面で言ったら、ムードも何もないじゃないか。なし崩しの告白なんてしたくなかった。

光上は御行がやろうとしていることを知っている。盛大な仕掛けなのだ。御行は彼に許可を貰い、警備員にすら協力してもらった。必ず成功させるという意気込みが、これほどまでに大規模な準備を整えさせた。

「ごめん、圭ちゃん」

妹が何を言いかけたのか。御行はそれを察した。たしかに昨日と今日では学園の雰囲気が違う。昨日は大量のハートがあり、カップル誕生の後押しをするような空気が出来上がっていた。それが今日はどうだ。ただの規模の大きい文化祭に成り下がっている。

あの空気感を期待していた圭にとって、これほどの痛手はない。妹の大勝負の邪魔をしてしまった。その事に引け目を感じる。

だが、もう後戻りはできない。成功させるしかない。これは最低条件で、妹の方はもう光上に頼むしかなかった。

「白銀さん」

光上が体を横に向け、圭の両手を優しく握る。彼女も彼へと真っ直

ぐ視線を向けた。複雑な胸中を示すように、彼女は指先一つ動かさない。いつもなら握り返すのに、今は小さく震えている。

「その怒りその怒りの気持ちを忘れさせるね」

「……？」

「今から目一杯楽しんでもらう。嫌なことを忘れられるぐらいに、君を喜ばせてみせる」

真剣好きな表情な顔で言い切られた。圭は目を見開き、緩みそうになる口元を必死に装う。もう、彼にそう言われた時点で他のことがどうでも良くなった。兄に対しても、「うまくいけばいいね」ぐらいに気持ちが変わっている。

とはいえ、ここであっさり引き下がるのは癪だった。プライドがそれを許さなかった。

「本当に光上さんにできますか？」

挑発的な言い方になってしまう。だがその言葉に、期待が籠められているのも事実。彼はその言葉を受け、挑戦的な笑みを浮かべて頷いた。

「必ずやってみせる」

ああ。もうどうしようもないほどに、彼に溺れている。

その密かな熱意に火傷してしまいそう。

彼の手を愛おしく思いながら、ぎゅっと強く握り返す。

「よろしくお願いしますね」

花も恥じらう笑顔を。

——彼だけに向けた

### 第36話

圭にこの文化祭を最大限楽しんでもらう。

明確な目標ができたところで、光上は御行と別れ、圭と一緒に校舎へと戻った。彼の計画がうまく行くことを願いつつ、自分のことも考えるために思考を切り替えた。

圭に目一杯楽しんでもらう。その目的をいかに達成するか。実は確かなプランがあつて言ったことではない。

あの場を収めようと思ったこと。2人の喧嘩は見たくないこと。圭には笑っていてほしいこと。主にそういった気持ちがあつたため、咄嗟に言ったことだ。光上にしては珍しく計画性がない。

(白銀さんが喜んでくれるもの)

圭と会うことは多くても、一緒にどこか遊びに行くことは少ない。2人だけで遊んだのも、彼女の誕生日と先日の水族館ぐらい。それ以外だと誰かしらが一緒にいる。早坂だったり、生徒会の人間だったり。

その事を思い返しながら、彼女が楽しんでいた要因を考える。他にも人がいる時だと絞り込みが難しい。振り返るべき記憶は2人で出かけた時のものだろう。そうなると誕生日と水族館になる。しかし誕生日となるとその日そのものもが特別。白銀兄妹はその意識が薄いものの、その日を参考例にするのは避けたいところだ。そうなると水族館だけ。

(ペンギン? ペンギンをテーマにしてるところなんてあつたっけな……)

彼女があの日で一番興奮していた瞬間。それは間違いなくペンギンを見た時ではあつた。だからその分析はある意味間違っていない。だが正解とも言えない。その前段階としての大前提があるのだから。

光上は持っていたパンフレットに目を通す。どこでどんなことが行われているかを再確認するためだ。ペンギンは見当たらない。代

わりに目に止まったのは、この文化祭のスローガンである。

——『伝われ燃える想い ハートtoハート奉心祭』

(そのハートは白銀が回収したんだけどな)

奉心伝説を知らないために、スローガンの意味合いを理解していなかった。パンフレットから目を離し、校内新聞を見る。インタビューを受けた御行の記事が貼りだされていた。

『男らしくいく』

知らない人からしたら、何を言っているのかわからないだろう。意味深なその発言の真相は、協力した光上を除けば1人だけに伝わればいいもの。

(男らしく、か)

光上はあまりジエnder論が好きじゃない。しかし、すべてを頭から否定する気もない。御行のように、本人が口にしてる場合がそうだ。その人がそう在りたいと自分の目標を口にしてるだけ。

そしてそれがヒントになった。光上はアイデアロールに成功し、どうしたら楽しんでもらえるのかの答えを導き出す。自分も楽しみ、圭も楽しむという答えだ。

「お昼はまだだったよね。3年A組がやってるうどんバーガーが美味しいらしいんだけど、どうかな？」

「うどんバーガー、ですか？ あまり想像できないのですが」

「名前の通りだよ。バンズの間焼きうどんを挟んでるみたいなんだ」

「そのような食べ物もあるんですね。ぜひ食べてみたいです」

「決まりだね」

鉄板を扱うクラスはすべて校舎外に配置が振り分けられている。また校舎から出るのは二度手間だったものの、下駄箱の近くだったので大して億劫には感じない。

外は外で賑わっている。お昼時であり、食べ物をメインに据えているクラスが集中していることもあり、多くの人が集まっている。夏祭りの屋台と変わらない賑わいだ。

うどんバーガーを出しているクラスの配置は、立ち並ぶテントの真

ん中付近。最も人が密集する場所。光上は圭に視線を送ると、大丈夫だと視線で返される。

「俺の後ろをついてきて」

「わかりました」

「念の為、逸れないように手も繋いでおこう」

「この人の量だと、合流が大変ですもんね」

差し出された手に自分の手を重ねる。逸れないようにという言い分があるのだ。これぐらいおかしくないじゃない。

圭は文化祭中に手を繋ぐことはできないと思っていた。付き合っていないという事実。周囲の目を気にしてのことだ。光上に好意を寄せていることは秘密にしている。今日一緒に回っているのも、普段お世話になっていて、誘ってもらったからという言い訳がある。

だから、中等部の誰かに光上と手を繋いでいるところを見られたとしても、逸れないためのものだと言える。そうやって言い訳を用意しないといけないのは面倒だが、そこを突破してしまえば圧倒的にプラスだ。

「待機列は、こっちか」

人が多いと、いったいどの列がどこの店のものか分かりにくい。それを補うために、どのクラスも看板を用意して最後尾を教えてくださいている。目的の店の待機列を見つけ、人の波をなんとか抜けていく。

「なんとか着けたね。白銀さん大丈夫だった？」

「はい。光上さんのおかげで私は楽に通れました」

本当に楽に通れていた。光上は有名人の1人だ。本人がどう思うと、光上への反応は最終的に周囲が決める。生徒会に入ったことも関係し、光上は注目を浴びやすくなった。そんな彼がこの人波の中を通ると、可能な限り周りが道を開けるのだ。結果的に圭と手を繋いでいるところも見られたわけだが、そこは必要な代償だったとしか言えない。

列に並んでしまえば、ここから逸れるような心配もない。手を繋ぐ口実もなくなり、圭の方から手を離す。光上も圭の考えを察し、引き止めることなく手を離した。

「列はできてるけど、回転率良さそうだね」

「調理工程も簡単なようですね」

うどんバーガーの作り方は簡単だ。焼きうどんを作ればよくて、それを挟むバンズも軽く焼いて温めるだけ。焼きそばと同じ要領で一気に作ることができるため、ノンストップでの提供が可能なのだ。

列が進むにつれて焼きうどんの香ばしい匂いが漂ってくる。それを嗅いだ圭のお腹がかわいく鳴り、光上がくすりと笑う。顔を赤くした圭がお腹を抑えながら、光上を軽く叩いた。それを見ていた周囲の人間は和んだとか。

「買った人はすぐ横のところから裏手に回ることをオススメするよ！」

「その方が落ち着いて食べられそうですね。ありがとうございます」

3年生のオススメ通り、圭と2人でうどんバーガーを買ったら裏手に回る。食べ歩きしている人が多いが、端に止まって食べている人もいる。光上は後者を選択し、彼女と並んで食べる。

「！ 美味しい……！」

「B級グルメってこんな感じのやつのことを言うのかな」

「たぶんそうですね」

お腹が空いていたからか、圭はパクパクと食べ進めている。光上はそれを微笑ましく思いながら、自分のペースで食べ進めた。先に食べ終わった圭が、勢い良く食べてしまったことを恥じらったのは言うまでもない。

光上も食べ終わると、他の食べ物も食べに行こうという話になる。うどんバーガーだけではあまり満たされない。

「白銀さんちよつと待って」

「なんででしょう？」

「少しかけ口周りにソースがついてる」

「ふえっ……!?!」

急いでその汚れを取ろうとしたところで、圭は踏みとどまった。ここで一計を案じたのである。

「光上さん、取ってくれますか？」



「え……」

「自分では見えないので」

半歩光上に近づき、彼の肩に手を添えてそれを支えに背伸びする。瞳を閉じて口を差し出すように軽く上を向く。

彼女のその行動に光上は混乱した。昨日のこともあり、否が応でもそこを意識してしまう。小鳥のようなかわいらしい口。彼女は何を期待しているのか。

僅か数秒。しかしその短時間で激しく意識し、それを必死に抑え込んだ結果。光上はハンカチで圭の口周りを拭いた。ヘタレだった。圭も少し残念そうにしていた。

(でも、そういうのは付き合ってからだよ)

一応圭は理解を示しているつもりだった。

その後にくつつかの店を回り、ある程度お腹を満たしたら校舎へと戻る。グラウンドでもアトラクション系の出し物があるのだが、圭は運動するような服装をしていない。自ずと選択肢から外れる。校舎内であれば、的当てだったり、輪投げだったり、比較的簡単なものがあるのだ。

「あらあら?」

「あ、どうも」

「? お知り合いですか?」

2人が声をかけられたのは、オカ研の前。声をかけた人物はそのこの部長であり、光上とも顔見知り。しばしば情報交換する仲だったり。

「ご無沙汰しております。あわてんぼう先輩」

「私ほど落ち着いた人は稀だと思っただけ。私の名前は阿天坊よ」

「失礼噛みました」

「違う。わざとでしょ」

「かみまみた」

「わざとじゃないの!?!」

「女将は見た」

「爛れた関係を!?!」

なにしてんのこの2人って視線を圭が向ける。それを受けて軽く

咳払いし、いつの間にかこれやる仲間になったのだと説明。双方が本の影響を受けた結果である。仕掛け人は阿天坊なり。

「さて、せっかくだから入って行きなさいな。占ってあげますよ」「どうする?」

「せっかくのご厚意ですし、占ってもらいましょう」

「彼女は良い子ね」

部室の中へと案内し、阿天坊は占いのための席に着く。その対面に光上と圭が座る。

「阿天坊先輩はどのような占いをされる方なのですか?」

「この秘蔵のノートに蓄積された統計を元に占ってます。中身はお見せできないけどね」

「本格的ですね」

「じゃなかったらこんな事文化祭でしないわよ」

そう言いながらノートをパラパラと捲る。いったいどの辺りに何が書かれているかは不明。誰もそれを知らない。しかし阿天坊の情報量は確かなもので、占いに関しては一定の信頼がある。占いに関しては。

「白銀圭様。誕生日は8月1日で血液型はB型。カップは——」

「言わないでください!!」

「阿天坊さん。中学生相手にそれはないですよ」

「そうだったわね。ごめんなさいね、癖みたいなもので」

自分が集めた情報って言いたくなるのが人の心理。しかしプライバシーの侵害は良くない。その分別があるため、阿天坊は占いの時に普段の枷を外すようにしている。親友の萌葉を意識しているのか。圭は涙目になりながら胸元を隠した。そのピュアな反応に阿天坊はダメージを負う。

「光上様の誕生日は9月9日。救急車ね。私のターンよ」

「今大富豪してませんか」

「血液型はA型。フランス人のクォーター」

「そうだったんですか!?!」

「言ってなかったっけ? うちの母親が日本とフランスのハーフで、

父親は生粋の日本人だよ」

クオーターだからといってどうという話でもない。そこから話が広がるわけでもなく、驚いて終わる話。彼がクオーターであることを知っているのは、他だと四大財閥の人間と藤原ぐらいか。

「お二人の何を占いますか？」

「てつきり占う内容を決めてるのかと思いましたがよ」

「光上くんは思い浮かばないと。白銀さんはどうですか？」

「えつと……」

圭は恥ずかしそうにモジモジしながらチラチラと光上を横目に見る。できれば2人の関係性とか占ってほしい。恋占いとかしてほしい。しかしそれは阿天坊に光上を好きだと言わないといけないうわいで、圭はその事に迷っていた。

阿天坊はその様子から圭の気持ちを汲み取る。まだ圭は中学2年生。その中でも特に汚れを知らない部類の子なのだ。

「せっかく2人で来ていますし、関係性を占いませうか」

「関係性ですか？」

「相性を占う、と言ったほうがわかりやすいかしら？」

「ぜひお願いします！」

「ふふふつ、畏まりました」

圭の反応が可愛らしく、阿天坊はノリノリで占いを始める。いつもなら相手をイジリ倒すことも考えてノリノリになるのだが、今日は純粹に占ってあげたい気持ちが強い。

「白銀様は白百合ですね。穢れ無き純粹さをお持ちでいて、それでお自身のお心を強くお持ちです。プライドは高いですが、柔軟性も併せ持っております。自身が信じるままに歩めばよろしいかと。迷われても、あなたの周りには常に助けてくれる人がいます。気をつけることとしては、それを忘れないことですね」

「阿天坊さんが真面目に占ってる……」

「占いには本気ですからね？」

失礼な驚き方をしている光上の横で、圭は気恥ずかしそうに笑っていた。自分のことを分析されるとむず痒い。しかし悪い気分でもな

い。その結果もにゅもにゅしているのだ。

「光上様は……白いキャンバス。何者にも染まらないようにいて、何にでもなれる存在。皆誰しも初めはそうですが、今でもそれを保っているのは稀有です。ですが、だからこそ気をつけないといけません。保っているのはカバーがあるから。それがあるままでは、あなたは何にもなれません」

「……肝に銘じておきます」

「ま、お二人の相性自体はいいですよ。相互に補える関係です。共依存が怖いですが、そこはその時のあなた方次第」

「予想以上の本格さに驚いてます……!」

「白銀様も正直ですね」

その素直さは嫌いじゃなかった。皮肉なんて一切ない純粋な反応。そういう反応をする人ほど、占いがしやすかったりする。

「阿天坊先輩。この水晶玉は使われないのですか?」

「雰囲気出るから置いてるだけよ」

「占いの方法は人それぞれだし、こういうセッティングがあることで精度が上がったりするらしいからね」

「そういうこと。でも、できないわけでもないわよ。やってあげましょうか?」

「いいんですか?」

やってみてほしい。はつきりと圭の目にその思いが書かれており、阿天坊はこくりと頷いた。自分のノートを一旦横に置き、水晶玉を撫でながらころころ転がす。

「あなた方に文字が見えるようになりますよ」  
「文字?」

2人の視線が水晶玉に注がれる。阿天坊の手によって遮られていたが、その手が離されたことではつきりと水晶玉を見ることができ  
る。

『キスが見たい』

「あんたの願望じゃねえか!!」

「甘酸っぱさって毒よね」

「知らんわ！」

もう十分だろうと立ち上がり、圭を連れて退出しようとする。それを阿天坊は光上だけを呼び止めた。まだ揶揄おうとしてるのかと思いきやそういう様子が見受けられない。光上は圭に先に出るように頼み、1人だけ部屋に残る。

「あの子の前では控えてたけど、光上くん。あなたは虚ろな存在よ。会長は違った表現をしていたようだけど、そこは解釈の違いね」

「は？」

「根本的に人を信じられない。たとえばそれが、白銀さんだつたとしても」

「そんなことはないです」

「……いいわ。私の役回りを超えることはしたくないし、一言だけ追加して終わりにしましょう」

阿天坊は深くため息をつき、魔女帽子を指で突き上げながら光上の目を見抜く。

「今のままでは彼女を傷つけるだけよ。そうしたくないのなら、変わるこね」

真っ白いままのキャンバス。それは純粹であることを示しているのではない。圭の場合、そこに白色を塗って白百合が表れている。光上は何も塗っていない。芸術的な絵を保護するように、何も塗られていないキャンバスを保護している状態。それが今の光上だ。

その保護を外し、彼独自の色を出していかないといけない。誰かを想う人になりたいのなら。

その後も圭と一緒に文化祭を楽しみ、後夜祭であるところのキャンプファイヤーにも同行させた。本来なら生徒たちだけで楽しむもののだが、圭も秀知院学園の生徒ではある。そんな言い訳を考えつつ、引け目もあるから離れたところで見ている。

「すみません、キャンプファイヤーまでいさせてもらって」

「ううん。誘ったのは俺だから。白銀さんと見たかったし」

「っ！」

ストレートに伝えられることには慣れない。胸がきゅっと締め付

けられ、彼の顔を見られなくなる。彼の視線は、キャンプファイヤーの方へ、具体的にはそれを囲って楽しむ生徒たちに向けられている。自分を見てほしいと思いつつ、みんなが楽しんでいる様子を見守る彼も好きだなんて思ってしまう。それなりに独占欲もあるのかもしれない。

「？ 何か騒がしいですね。……空から何か降ってる？」

「始まったみたいだね」

「……まさか」

「うん。君のお兄さんはなかなか大立ち回りが好きらしい」

去年の生徒会選挙といい、この怪盗騒ぎといい。ここぞという時は派手なことをする性格なようだ。

兄が勝負に出るといいう大仕掛け。いったいどういうものをするのか、見届けやろうと圭は上から目線で成り行きを見ることにした。いろいろと絶望的なセンスがあるくせに、ロマンチストな面もあるんだ。相当なことをするに違いない。

それから待つこと10分ほど、またもや空から仕掛けが降ってきた。

今度はカードではない。一夜にして消えた大量のハートの風船だ。観測用バルーンが割れ、その中から大量のハートが降ってくる。そのハートはキャンプファイヤーの上昇気流によって落下速度が低下。自然風の助けもあり高さがほぼ停滞する。

それを最も味わえる場所は、この学園で一番高い所。つまり時計台の上。御行はそこにいるのだと圭はすぐに見破った。

(ふーん。お兄いにしては悪くないじゃん)

相変わらぬのロマンチスト。誰も考えないような、考えたとしても実践しないようなシチュエーション。しかし、だからこそそこに唯一性が生じる。白銀御行が、その人のためだけに用意した数分間だと。

正直に言えば彼女は嫉妬した。自分のそんなシチュエーションの中でやりたかったと。ロマンチストの極み。夢見過ぎだと言われるような状況。それ故に味わえる夢心地の時間。それを味わえないことに、それを好きな人とはできないことに嫉妬した。

——そして歯車が崩れる

その嫉妬によって、忘れられていた殺意が蘇る。悪感情は懐疑心に繋がり、後ろ向きな思考を呼び起こす。

「白銀さんに、伝えたいことがあるんだ」

そのタイミングで光上は話を切り出してしまった。

彼が立ち上がり、それに合わせて自分も立つ。向かい合い、先程まで逸らしていた視線を彼に向ける。

伝えたいこととはなんだろうか。

期待してもいいのだろうか。

そう思ったが、彼の気まずそうな雰囲気から違うのだと気づいてしまふ。

『悪い方向への思考』『疑念』『嫉妬』

悪感情に掻きまわれ、彼が話すことは自分にとって嬉しくないものだと思つていく。

『コスプレ喫茶のメイドと執事の人、恋人設定でやってたらしいよ』

——本当に設定？

——今から告げられることは、この気持ちが叶わないことなんじゃないの……？

呼び起こされるいくつかの記憶。

『お姉えって小学生の低学年くらいの頃に、光上さんと結婚したって言ってたみたいだよ。今は全くそのつもりないらしいけど』

——本当じゃないの？

——だって下の名前と呼んだ

『ハートが消えたことは目を瞑ってあげてほしい』

——私よりお兄いを優先したのはなんで？

——私はその程度ってことなの……？

「いや……」

——今までは合わせてくれてただけで

——もうそれはやめるって話なんじゃ……

『恋愛感情は永遠じゃないの』

そう言った母親に連れられて家から連れ出された。その言葉が脳

内を反芻する。

「白銀さん？　どうしたの？」

「いやっ!!」

「彼が伸ばした手を弾いた。」

弾いてしまった。

「あっ……」

それは心配してくれた彼への拒絶で。

彼の驚いた顔が胸に突き刺さる。

「うっ……ああっ！　あああっ！」

痛い。　痛い。　痛い。

耐えられない痛みが。

止めどなく溢れる涙が。

何もかもが耐えられなくて。　受け止められなくて。

——私はその場から逃げるように走り去った



## 第37話

三者面談があつた日。早坂愛の母親である奈央に招待され、親子の食事に邪魔させてもらった後、四宮家の車で帰宅した。

自分の母親も帰国したばかりで、夕飯はそつちを優先するべきではと思つたのだが、その母親が時差ボケにより睡眠を選択。夕飯は邪魔させてもらえばいいんじゃないとのこと、四宮の別邸まで足を運んでいた。光上家の使用人たちは、自分たちだけの食事となると自由にすることが許されている。その日は鍋パをしたらしい。

帰宅して風呂も済ませると、睡眠から一時的に起きた母親に呼び出された。時差ボケの影響なのか、日本時間の夜遅くなるに連れて目が覚めるらしい。

「面談の場では話さなかつたことを話すわよ」

「内容は？」

「晶が弛んできたことよ」

「自分ではそうとは思わないけど」

はつきり言つてしまえば感覚の違いでしかない。他の誰が聞いても首を傾げる内容。自分の小さな変化など、尚更本人には気づきにくいものだ。

「ストレートに聞くけど、気になる子でもできた？」

「気になる子つて言葉通りに取るなら、10年前からいるよ」

「じゃあその子以外に」

「どうだろ。距離感が掴めなくなった子ならいる」

突破してきた御行は、友人という枠組みに入れることで距離感を再調整できた。早坂とも一定の距離は保っている。

しかし、圭だけは別だった。御行の妹という時点で、元々距離を測りづらかつた相手だ。後輩という枠組みに入れたものの、学校で会うことがないために実感はイマイチ。ほぼ毎朝一緒にいる子、これも曖昧な言い方。

そして、再調整しようと距離を測り直す度に、彼女の位置は変わっ

ている。

「そう。じゃあその子が原因ね」

「……あの子に何かするなら母さんでも許さないよ」

「あらやだお熱い。別に何もしないけど」

「ならよかった」

高等部に入るまで友人らしい友人もおらず、好きな人の影すらチラつかせなかった息子だ。牽制の段階でそれだけ言えてしまうのなら、それだけ心を許せる相手というわけだ。

それができた事自体は喜ばしい。しかし素直には祝福できない。今後の展望を考えれば、能力次第ではその子と距離を取るべきなのだから。

「その子ってどんな子？」

「どうって、普通の子だよ。秀知院には入ってるけど、家としては一般層で裏工作とかとは無縁の子」

「それは困ったわね」

「なにが？」

「その子を巻き込みたくはないでしょ？」

「……どうということ？」

その場の空気が重いものに変わる。息子の恋話でも始まるのかと思いきや、全然そんなことはなかった。そもそも呼び出したのも、この話をするためだからだ。

「結論から言えば、四宮家とドンパチしちゃうかも」

「は？ なぜに？」

「相手の出方次第ではあるのだけど、情勢がね。面倒なことになってきたのよ」

「バランス崩壊でもするわけ？」

「そういうこと。今の四宮家は四大財閥の中でも頭一個抜きん出てるのよ。四皇で言えば白ひげみたいなものね」

「いきなりワンピース出すな」

わかりやすい例えではあった。懸賞金で言えば1人だけ抜きん出ていたのだから。

「雁庵は白ひげとしてもね。3人の子供たちがイマイチなのよね」

後継者争いをしていと言われている息子たち。雁庵としても、自分が退いた後の四宮家は、一番能力の高い人物にしたいはず。だが、光上の母にしてみれば、崩壊への序曲が始まっているようなものだという。

「四宮家はデカくなり過ぎた。でも今更方針を変えることなんてない。プライドが服着て生きてるような家なのだから」

「このままだと財閥同士の激突もあるわけ？」

「他の財閥は大人しいけど、四条家は四宮家との戦争の準備をしているのよね。賢いことに、雁庵が退けば攻め時だと判断してるみたい」「戦争しないって判断もできてほしいけどね」

「そこはまあまた今度で。今は四宮家の話よ」

四宮家のことを考えるだけでも億劫なのか、母親は憂さ晴らしをするようにダーツをブルに投げ込む。深く刺さり過ぎているように見えるが、気にしないでおこう。壁に穴が空いてて顔が青ざめるのは使用人だ。見つけるであろう誰かが不憫なだけ。

「未だに雁庵が現役の理由は、息子たちに任せられないから。自分が引退した後、巨大過ぎるお家をどの息子も背負い切れない。後継者争いもしちやってるから、下手に誰かが就いたとしても内側で争って弱体化ね」

「あそこって帝王学叩き込んでるんじゃないかなかった？」

「叩き込んだところで、雁庵と遜色ない才能を持っているかは別の話。実際優秀な面もあるのよ。息子のハゲとか。ただ、四宮家を背負えないってだけ」

「巨大国家の崩壊みたいなもんか」

「そういうこと。マケドニアやフランク然り。時のカリスマの死後は分裂したものよ」

四宮家もそうなりかねない。3人が手を組めばそれを阻止できるだろうが、絶対にそうならないと母親は考えている。雁庵がいることで四宮家は最盛期に達しているが、それもそう遠くないうちに終わる。今度は逆に四宮家が弱体化し、反対の意味でパワーバランスが崩

れてしまうのだ。

「それで、母さんはそれをどう整えようと考えてるわけ？」

「今の四宮家を凹ます」

「ドンパチする気満々じゃん……」

「面倒だから嫌だけど、あのプライド族は鼻をへし折らないと話聞かないでしょ」

「いや男衆はどうか知らんけど」

かぐやはまだ会話ができる方だ。少なくとも今のかぐやは。かつての「氷のかぐや姫」ならまた話が変わるが。そこに変化を与えた御行の存在は相当大きいものだ。

「最盛期の状態で凹ませれば四宮家も気持ち大人しくなる。息子たちの力量で背負える程度にまで叩く必要はあるけど」

「いやそれバランスが崩壊するんじゃないかね？」

「私としては財閥制度を消し飛ばしたいけど、そこまでの高望みはしません。パワーバランスを整えられればそれでOK」

目眩がしそうな話だった。あの四宮家と会話だけでバランス調整などできない。放置しては四大財閥のバランスが崩れてしまう。今のうちに叩くのは、それだけの力があると他の財閥に見せつけるため。

これは明らかに、情勢を一新することになる。これまでと同じ感覚で同じ位置にいるのは、難しくなるだろう。

「バランス崩壊は心配しなくていいわよ。はつきり言って、息子たちは財閥程度なら背負えるのよ」

「あー。他の財閥程度にまで下げるのはそのためか」

「そういうこと。四宮家を他の財閥と同等にまで弱めて、且つ内部崩壊させない。これからやらないといけないことはこれよ」

「めんどくさ」

「本当にね」

一切関わらずに放置していてもよさそうな案件だ。光上家は学園の理事が本来の仕事なのだから。しかし、財閥となるとそうもできない話。四大財閥からの寄付金は多い。その内の1つが消えるとなる

と、相当な痛手である。

そして、なまじ光上家は力を付けていた。対応できてしまうぐらいに。日本では理事長としてのみ知られているが、ヨーロッパではフランスを中心に着々とパイプを広げていたりするのだ。

「ま、そんなわけで。四宮家とは殺つちやうから。その子を巻き込みたくないなら手を打っておきなさい」

四宮家との衝突はほぼほぼ確定路線となった。経済界での戦争。それは本来市場での競争という形で行われているもの。しかし、裏ではそうならない。直接の潰し合い。交渉と吸収合併の繰り返し。弱みを見せたらそこから喰われる争い。

「ところで、それやるなら俺はフランスからまた戻ってくるんじゃないの?」

「ううん。四宮家の傘下が海外にも増えてきたから、そこを叩くよ。四宮家には大人しく国内で威張ってもらおう」

「あ、そう」

話はそれで終わりかと思いきや。母親はじつと息子を観察して釘を差すことにした。元々甘い部類だとは思っていたけれど、会わないうちにさらに酷くなっていると判断したから。

「晶。私達の立ち位置が、誰からも好かれるなんて思っちゃ駄目よ。どっちつかずで八方美人などこなんて、鬱陶しいだけなんだから」

「言い方よ」

「世の中の情報戦は、晶が思っている以上に激しいものよ。光上家と他の勢力の間にあるのは決して信頼関係じゃない。利害関係だけ。そもそも私達が築いたとして、信頼関係なんて簡単に壊れるものなんだから、そんな甘い幻想に酔わず、冷酷な現実を見なさい」

「……じゃあなんで母さんは父さんと結婚したのさ」

「こいつの子を生みたいと思ったからよ」

「ストロングスタイルだなあ」

その感覚は完全に女性のもの。男性である晶には理解できないものだったし、そこに恋愛感情が混ざっていたかも不明である。事實は1つだけ。自分が生まれたことだけ。

「今の晶は何もできないわよ。怖いなら遠ざけることね」

「……わかつてる」

「ならいいわ」

甘いのは知っている。早坂に何度も言われていることだから。

きっとこの手は何も掴めない。

そんな強い人間じゃないから。

だから――

(白銀さんとの関わりを続けたら……彼女を傷つけるだけ)

想う故に切り離すべきなんだ。

四宮家との衝突。だがそれはまだ少し先のことで、今はまだ構える必要もないこと。生徒会でかぐやと言葉を交わしても問題ない。放課後に早坂と雑談していても問題ない。少なくとも、日本にいる間はこれまで通りに過ごしていたらいい。

そうやって過ごしていた中、文化祭の準備期間に御行に呼び出された。2人だけで話がしたいと言われ、応接室を借りてそこで話すことに。

「なんだか身構えてしまうな」

「応接室って格別に備品が揃えられてるからな。そこら辺にあるやつでも3桁か」

「その後ろに万が付くわけか……。慣れない世界だ」

「純金の飾緒をぶら下げてるくせに」

「いつも重く感じてるからな?」

適当に言葉を交わし、程よく御行の緊張を解いていく。この場には2人しかいないのだから、場に慣れてしまえば御行も普段の調子が戻るわけだ。

「話というか、頼みたいことがあるんだ」

「文化祭で何か仕掛ける気か? 被害なくできることならいいぞ」

「軽いな!?! いやまあそれもあるんだが……。そうだな、先にその話に

するか」

「順番は任せる」

話があるのは御行からだけであり、光上は大抵のことなら承諾するつもりでいた。校長に頼めば文化祭の仕掛けも大手を振ってできるだろうに、一度光上に断りを入れる辺り、御行の人柄が出ている。

「文化祭の日に、四宮から何もなければ俺から告るつもりだ」

「ようやくか」

「これ以上伸ばすのも男らしくないと思っただけ」

「今更って感じ強いんだが。……で？ どう告白するわけ？」

「うちのクラスはバルーンアートをするのでな——」

大量にハートの風船を仕入れておけば、女子たちが膨らませると予想できる。主に藤原千花がそうするはず。それを2日目が始まる前に観測用バルーンの中に入れておき、告白するタイミングで放出させる。

「ロマンチスト」

「言われるとは思ったよ」

「友人として成功を祈るし、それぐらいなら警備員の方にも話を通しておくから。遠慮なくやればいい」

「すまない。助かる」

文化祭での懸念はそれぐらいだ。後は生徒会の1年生コンビを実行委員に派遣したり、校舎内で行える飲食店を伊井野の巡回ルートに被せたり、藤原を誘導するためのクイズを用意したり。完全に職権乱用による文化祭の私物化なのだが、そこに悪意自体はないため光上も口を挟まない。成功してほしいなと思うし、それがうまく行けば早坂の苦労も少しは楽になるのかなと思ってる。

さて、その話が済んだところでもう1つの話がある。光上に話す内容としては、こちらの方が本題だ。

「スタンフォード大に合格した」

「まじか。おめでどう」

「ありがとう。で、入学の時期のズレもあるから、飛び級で進学することになったんだが……」

「資金援助か？　するぞ」

「そうじゃなくて。……その……四宮と行きたい」

「四宮さんに話せ？」

それを話されても、光上は四宮かぐやじゃないのだから反応に困る。その話をちゃんと本人にして誘って、どうぞお二人でキャンパスライフを送ってくださいとしか言えない。

しかし、少し考えれば当然引つかかる問題があるわけで。光上はそれを御行が正しく認識しているのか確かめることにした。

「四宮本家が口を挟む可能性高いぞ？　彼女は別邸にこそ住んでいるが、本家からの制限がある。スタンフォードともなれば、四宮本家の目が行き届かない。四宮さんが承諾しても、本家が阻止する可能性が高い」

「……やっぱりそうだよな。もちろんそこは考えていた。だから光上に頼みたい」

「……お前……」

「勝手なのは重々承知だ。光上家と四宮家の話も聞いている。だが、頼めるのは光上しかいないのも事実なんだ……！」

御行が光上に頼みたいことは、「四宮家との仲介役になってくれ」ということである。スタンフォード大と秀知院学園は提携を結んでいる。フランス校から進学する生徒も一定数いる。だから、四宮家の目が届かなくても、光上家の目なら届くのだ。

光上家と四宮家の関係が改善すれば、それを理由にかぐやのスタンフォード大進学への摩擦が無くなることになる。

だが、光上家は四宮家と争うことになるのだ。四宮雁庵が退くまであと何年あるのかは不明だが、早期決戦が予想される。仮に仲介役ができたとしても、その後には衝突しては汚名を被ることになる。それは秀知院学園自体の評判に直接響くことを意味する。

「……俺の一任ではどうにもできない話だ。この話はすぐには返答できない」

「そこはもちろんわかっている。ダメ元での頼みではあるんだ。リスクがあるなら無かったことにしてくれて構わない。他の手も探して



はいるからな」

「すまん。最悪恋の逃避行でもしてくれ」

「ははは、最終そうなるかもな。笑えないが」

その場で答えられるわけがない。友人としては後押ししたいことだ。進路が関わっているなら尚更に。

家に従うか。

それとも友人を選ぶか。

後者を選べば、四宮家は交換条件として光上晶を取り込むのだろうが。

どちらにせよ、圭と付き合えば彼女を巻き込むことは確実。

光上は選択を迫られながら、1つの選択の決意を固めた。

## 第38話

文化祭の後、光上は体調を崩していた。2日連続でいつもの生活バランスを崩して過ごした。初日は珍事件により疲労度が増し、回復しきっていない状態で2日目に。圭と過ごすことで疲労は消えていたのだが、キャンプファイヤーの時のあの事が胸に突き刺さった。

あの時に圭の中で何があつたのか。どんな胸中でああなつてしまったのか。何もわからない。

わかっていることは、圭を泣かせてしまったこと。そして拒まれたことである。

何かすれ違いがあるのではないか。もう一度会って話そう。そう思っていたのだが、体調を崩して寝込んでしまっている。圭からも、しばらくは会いたくないとラインが送られており、先行きは真っ暗だった。

そもそも、会って話して何になる。予想とは違う展開だっただけで、どのみちこうなつたのではないか。

「へいへい息子〜！ いつまで寝てんのよー！」

息子がウジウジ考えている部屋に、勢い良く扉を開けて部屋の中に入ってくる母親。ベッドで横になっている息子を引きずり出し、床へと放り投げる。

「病人相手にいきなり何すんの!?!」

「あら元気じゃない。学校行きなさい」

「誰でもこうなるわー！」

「はい制服」

「会話になつてない……」

しかし、体自体は調子を戻してきているのも確かだ。授業を受けるくらいなら問題ないだろう。そう思い、制服を受け取ってじーっと母親を見つめる。母親もその視線を受けて頷き——椅子に座った。

「部屋から出ろよー！」

「思春期ね。母親相手に恥じらうこともないでしょうに。チエリー

ボーイ」

「うぜえ」

「失礼ね。私なりに元気付けに来たのよ」

「やり方が酷え」

「いいから着替えなさい。そして学校に行きなさい」

そんなやり取りがあったのが今朝のこと。

そうして学校に来た光上だったが、高等部内で圭との一件があったのだから、高等部に着けばそれを思い出すわけで。思い出したら気落ちするの当然の流れ。悶々と悩み続ける光上は、いつもなら寝ているような休み時間でも起きていた。

「光上くんが起きてる……」

「まだ体調が悪いんじゃない……」

普通とは逆の反応。しかしそれがこれまで光上が積み重ねきた結果である。周りの会話が耳に入っている様子もなく、ただ虚空を見つめているだけ。いや、それすら見ていないか。目が開いているだけだ。

光上のそんな調子を見るのは誰もが初めてである。ずっと同じクラスだった四宮と早坂も、彼のこんな様子を見たことはない。早坂は光上から話を聞こうかと迷った。

これまでなら話を聞くとすぐに決めていた。放課後にこっそり会うか、ケースは少ないが昼休みに話しかけることも。しかしこの時早坂は迷った。早坂も早坂で、文化祭での出来事を意識していた。

「光上大丈夫かー?」

光上の前の席に座っている男子が声をかけた。さすがに精気を失った人間が真後ろにいと、落ち着いて授業を受けられないのである。

声をかけても反応が返ってこない。光上の目の前で手を振ってみる。そうするとようやく反応があり、男子と光上の目が合った。そんな気がただけで、実際には合っていない。

「これ何本に見える?」

光上の視線上に合わせてピースする。

「ペンギン」

「駄目だこりゃ」

クラス全員がそう思った。

どう対処すればいいかもわからず、光上には悪いけど放置しようという結論に至った。

そうして訪れる放課後。テストも文化祭も終わっているため、本日は午前中だけである。光上は生徒会に顔を出した。担任からは帰るように言われたが、今の光上の耳に届いていなかったようだ。生徒会室に入ってみると、女性陣はまだ来ておらず、石上と御行の2人がいた。これから昼食を取るのだろう。

「あ、光上先輩。体調は大丈夫ですか？」

「墓つてオンラインで買えるかな？」

「駄目そうですね」

絶不調であることは明白で、石上は光上をソファに座らせる。背もたれにがつつりもたれかかるように。

それが済んだら自分も座り直し、石上はそこで配置をしくじつと痛感した。右隣には、最近睡眠不足で顔色が悪い御行。御行は自身の案件もあるが、妹の圭のことが気がかりなのである。光上と何かあったことはわかってても、その詮索ができない。光上は体調を崩している話を聞けないでいたし、登校してきたかと思えば、負の塊となっており、聞くに聞けない。

石上の左隣には、その病み上がりのはずが絶賛病んでいる光上。石上はまさに負のオーラによるサンドイッチ状態。オセロなら石上も闇落ちである。

「あら、光上くん来てたのね。てつきり帰ったのだと思っていたのだけど」

「うん、まあ……」

光上にとっても居場所となっている生徒会室。さらにその役員たち。この空気に囲まれることにより、光上は多少の回復ができていくようだ。その事に石上はほっと一安心。自分の昼食に手を伸ばす。

だがその隣で御行は身構えていた。光上は休んでいて知らないが、今の四宮はかつて「氷のかぐや姫」と呼ばれた四宮かぐやだ。性格が大きく変わっているような感覚に、御行は頭が追いついていない。

しかし、光上与違って察しが悪くない御行は、この日の四宮の意図を汲み取ることができた。

「お腹が空きましたね。使用人が帰省中だということを忘れていました」

お弁当分けてアピール！

最近寝付けないから、弁当を自分で作ったという御行。彼が作るのは当然一般的な弁当であり、四宮かぐやにとっては非日常の光景。御行自身が作ったのだから、それを食べれば御行の料理を食べるも同然。

特にタコさんウィンナーが欲しかった。それは御行が作ったものではないと指摘してはいけない。隠すことも時には優しさである。

「かぐやさんお腹空いてるんですか？ 私のお弁当分けてあげますよ」

ここで乱入してきた藤原千花。天然娘という災害は防ぎようがない。早坂に足止めを頼んでいなかったのが失敗だ。

「この卵焼きは砂糖がたっぷり使われていて美味しいですよ！」

「遠慮しておくわ。私甘いものは控えてるの」

「甘味は正義です！」

「千花ちゃん虫歯には気をつけなよ」

「もちろんですよ晶くん。……！ 晶くんが名前で呼んでくれたよ！」

これには一同驚愕である。藤原に後ろから抱きつかれている光上に視線が集まる。だが光上自身は自分が藤原のことを下の名前で呼んだという自覚がない。思考力が皆無となり、今もなぜ藤原が喜んでいるのかわからないでいる。

「話を戻しますよ藤原さん」

光上の発言に驚きはしたものの、虚ろな目を見てある程度察した四宮。話が中断されたことも癪であり、少し口調を強めて藤原に声をか

ける。

「自称ロカボガールを名乗っているのなら、もう少し食事を考えるべきじゃないかしら。麺類も入ってるし、春雨だつて糖質量多いじゃない。他の野菜も糖質量が多いものばかり。肉をたくさん食べたならローカーボつてわけじゃないのよ？ これじゃただの食いしん坊」  
「いやああ!! かぐやさんが石上くんみたいな言うー!!」

正論によるボディブロー。何も石上だけの特権ではないのだ。主な原因は殴りやすい藤原の言動である。

「ご飯は美味しく食べるのが一番でしょ！ ねえ！ 晶くん！」

「千花ちゃんはその栄養が胸に行ってるもんね」

「は？」

「晶くん、それはデリカシーないよ？ 女の子に嫌われるよ？」

「——っ!!」

胸の大きさにそれは関係ないだろと言いたかった四宮だが、光上の様子がおかしいことに気づいて口を閉じる。他の面々も再度光上に視線を集めた。女の子に嫌われると言われた瞬間、徐ろに肩をビクツと反応させたのだ。

やはり圭と何かあった。御行以外の全員がその確信を抱く。だがその内容を聞くことはできなかつた。

藤原が起爆したせいである。

その威力は凄まじかつた。光上は心に核弾頭を撃ち込まれた気分になった。いつものメンタルではないため、ガードも何も無い。ゴツドハンドクラッシュヤーのダイレクトアタック。ワールドブレイカーである。

「そ、だねっ………！」

「!？」

掠れた声が漏れ出た。その声は上擦ってもいた。彼の目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちていく。

これには全員が動揺し、意図せず爆撃してしまった藤原はおろおろと混乱する。

「ぐめ……。ちよつと出るわ……」

「あつ……」

涙を拭うことなく、フラフラとした足取りで生徒会室を出ていく光上。彼があそこまで弱っているのを誰も見たことがない。彼が弱さを見せた瞬間すら見たことがない。

いつも余裕を持つて生活している光上が、一切の余裕を無くしている。

「わ、私謝ってきますす!」

「探すの手伝います!」

「やめておきなさい」

「どうしてですか!?!」

光上を追いかけようとした藤原と伊井野を四宮が止めた。何故追いかけてさせてくれないのかと、藤原は目で訴えかける。自分のせいなのだから、謝らないといけないのに。

「今の彼の下に行く気? 追い打ちをかけるだけよ。精神状態が安定した時に謝るべきね」

「……でもっ……!」

「四宮の言う通りだ。2人とも、今はそつとしてやってくれ」

光上が、唯一友人だと公言している御行にそう言われると、藤原も伊井野も追いかけることを諦めるしかなかった。

藤原は零れそうになる涙を堪え、ぎゅつと下唇を噛み締めた。泣く資格なんてないのだと自分に言い聞かせて。

生徒会室の様子をもちろん早坂は見ている。いつもと同じ空き教室でタブレットを眺め、生徒会室内で起きたことに驚いている。早坂もまた、彼が泣くところなど見たことがない。

探しに行こうかと思っただが、御行と四宮が藤原たちを止めているのも見ていたため、気にかけるだけに留まる。圭と何があつたのかを、早坂も知らない。圭とのラインでのやり取りも、文化祭以降途絶えたままだった。だから早坂は、圭の方も気がかりだったりする。

「早坂……」

どうしようもないなと思っただら、彼の方からやって来た。表情

は見えないが、雰囲気は暗い。涙は止まっているものの、立ち直れているわけではないようだ。考えてみれば、朝からギリギリの状態だったのだろう。文化祭の日に何かがあり、その現場である学校に来る。圭がいなくても、思い起こされてしまうのも無理はない。

早坂が腰掛けている席の後ろに座り、机に突っ伏して顔を隠す。タブレットで生徒会での様子を見られていると知っているだろうに、醜態を見せたくないとするのは男のプライドか。

「圭と何かあったようですね」

「……っ。……うん」

正直、返事が来るとは思っていなかった。内容は話さないかもしれないが、反応が返ってくるだけでもありがたい。

早坂はイヤホンを外し、タブレットをスリープモードに変える。

「何があったかは、話してくれませんか？」

「……嫌われたかもしれない」

「何言ってるんですか？」

いやそれは絶対ないだろうと言いたかった。しかしその時の状況を知らないし、圭からの情報もない。今の早坂にできることは、話を聞きながら整理すること。彼の気持ちを少しでも落ち着かせることである。

「何度か周りに指摘されてたのにさ……、それが何か自覚できてないし。どのみち白銀さんを傷つけることにはなってたし。仕方ないのかなって」

「何やら重大なことが飛び出してきましたが、そこは話す気もないのでしょうかね」

「うん……。失言して今焦ってる」

「そうは見えませんが……。なんにせよ圭から話を聞かないことには、まだ結論付けることができません」

「会いたくないって言われた」

「……ええー」

本当に何をしたのだろうか。セクハラでもしたのだろうか。しかし光上に限ってそんな事はしないだろう。



早坂は光上への信頼を元に仮説を立てていく。嫌われたというのは光上の勘違いで、重大なすれ違いが起きているだけだと。圭からの情報がないことには、確信的な部分が見えてこないが。

半分だけでは真相が見えない。ならば、圭から話を聞ける人物を助つ人に呼ぶしかない。その人物を頭に思い浮かべ、大丈夫か不安になる。圭が相手なら変な展開にはならないと信じた。

この後の事を考えていると、光上のお腹が鳴った。彼はお昼を食べていないことを思い出し、早坂は弁当箱を取り出す。早坂もお昼はまだなのだ。

「分けてあげるので、一緒に食べましょう」

「いいよ。早坂のお弁当なんだし」

「また体調を崩しますよ。食べなさい」

光上の上体を起こさせ、机に伏せられないように弁当を自分たちの間に置く。光上はその弁当を見て首を傾げた。四宮家の人間らしくない弁当だ。もちろん早坂がそれを隠すためだと知っていても、それにしても違和感を抱いてしまう。

「時間があつたので自作しました。四宮家の使用人たるもの。並大抵のことはできないといけませんので。さすがに本職には負けますが」

「十分凄いなと思うけどな。俺なんて料理とかあんまできないし……」

「はいそうやってすぐに自分を卑下にしなしないでください」

「ごめん」

「気を取り直して、こちらからどうぞ」

個数のある具材はすべて偶数個ある。それを半分ずつに分けるのは容易く、弁当の定番である卵焼きを箸で摘んで差し出す。光上が渋ったため強引に口に入れ込んだ。光上は食べ物と粗末にせず、強く迫られたら大人しく口を開くため食べさせやすい。

光上の口に卵焼きを入れ、彼が咀嚼している間に自分の分を箸で摘む。そこで早坂は気づいた。同じ箸を使ってるなら間接キスと変わらないということに。顔に熱が帯びていくのを感じながら、光上へと顔を向ける。彼は気まずそうに視線を逸らした。先程渋っていたのは、これに気づいていたからか。

(でも、文化祭の時は……あ……っ!!)

早坂は「あの時に比べればマシ」と考えることで落ち着こうとし、文化祭での出来事を思い出して自爆。早坂は弁当を食べ終わるまで、終始暑そうにしつつ、圭への罪悪感に苛まれた。

## 第39話

クリスマススイヴ。今年はその日が週末であり、藤原千花の提案によつてクリスマスパーティーが開かれた。場所は藤原家の一室であり、参加者は白銀兄妹と藤原姉妹と四宮かぐやの5人。生徒会メンバーでやろうとしたのだが、石上と伊井野は3年生の子安の誘いでそちらに。

光上は安定のフランスである。夏休みの時とは違い、冬休みが終わる寸前まで向こうで過ごすらしい。国籍としては日本人なのだが、親がフランスにいるからこれも帰省ということになるのだろうか。主治医による精密検査のための渡仏でもあるのだが。そこまでの事情は藤原たちも聞いていない。

「会長、圭ちゃん、かぐやさんいらつしやいませ〜！」

「こちら、つまらないものですが」「いつもありがとうございます〜」

そうは言うが、これも社交辞令である。白銀兄妹とかぐやからそれぞれ受け取り、千花はそれを母親に渡しに行く。パーティーを行う部屋には萌葉が案内した。御行たち3人は、その部屋にあるこたつに入り、虚無顔になる。

「ふむ」

他人の部屋をジロジロと見るものではないと思いつつ、しかしこの部屋の異常性は無視できないとして御行は部屋の中をぐるりと見渡した。かぐやと圭は特に反応することなく、こたつの上に用意されている湯呑みにお茶を淹れて和みだす。藤原家に慣れている者の過ごし方だった。

壁にかけられている横断幕には「メリーニュー新年」その横には「初日の出」と縦書きに書かれたものがあり、ペットであるペスは狒犬に見立てた服を着させられている。しかしそこに書かれている文字は「赤鼻のトナカイ」だ。

部屋の中を一通り見渡し終えた頃、案内した後に姿を消した萌葉と

仮装を終えた千花が部屋に入ってくる。御行は驚きも通り越してまたもや虚無顔に。

「藤原書記」

「なんですか？」

「これはなんだ？」

「かどまつりです。門松とクリスマスツリーが一体化しました」

見事な一体化である。竹はそのままに、その背後をクリスマスツリーに変更。本来なら「謹賀新年」や「賀正」と書かれるべき箇所には「メリー賀正」。「迎春く冬」という文字も書かれており、まさに次の丸々1年を迎えようという大きな心が表されていた。

「これは？」

「ししまトナカイです」

獅子舞とトナカイの融合。わかりやすく言えば、獅子舞にトナカイの角が植え付けられている。それを着ているのは萌葉だった。

「お前は誰？」

「なまはげサンタです」

サンタの仮装をしたなまはげ。秋田県は男鹿市の文化の輸入である。悪い子はこの場にはいないが、頭の悪い子ならいる。今なまはげサンタをやっている子だが。

藤原家のクリスマスはまさしく何でもありのカオス空間と言えた。

「何故この家はクリスマスとお正月を混ぜる!!」

「会長の気持ちはわかります。私達もそう思っていました」

お面を外した藤原姉妹がうんうんと頷く。彼女たちも初めからこれで過ごしていたわけじゃない。

藤原家の長女豊美が、ある年にクリスマスツリーに門松の要素を加えた「かどまつり」を作成。そのテンションのままに「なまはげサンタ」や「ししまトナカイ」を作成。愛犬ペスをも巻き込んだのである。

改造はされたものの、捨てるという話にもならずに使いつけること数年。その光景に慣れてしまった結果、これが本来のクリスマスのあるべき姿だと思ふようになったのだという。

「勝手な文化を定着させるな！」

改造した本人は、自分の家のクリスマスはキモいと言って外に遊びに行っている。

御行は曖昧になっているかぐやとの関係を、今日ではつきりさせようと考えていた。しかしまさかの異文化交流により、ムードも何もない状態となってしまった。形は違えど、文化祭の時の圭と似た胸中である。藤原家を軽く恨みつつ、圭への申し訳無さが倍増していた。

「別にいいじゃない兄さん。こうしてゆつくりとみんなで年を越すのも悪くないよ」

「年越しまで1週間あるぞ!？」

「そうね。……光上さんもいないし……」

(自分で地雷を踏み抜かないでくれ……!!)

見るからに気持ちが悪んでいく圭に、どう対応しているのか頭を悩ませる。片や良い方向に関係が進んだ兄。片や関係が捻れてしまった妹。話を聞きたくても聞けない。それはかぐやも同じであり、萌葉も距離が近いが故に聞きづらい。そして千花は、光上で起爆したばかりである。

「私のお正月には本家ですし、こうして両方楽しめるのは逆にありがたいですね」

滞りかけた空気を変えたのはかぐやだった。話の流れを汲み、不自然さも無くした発言。圭への気遣いも今はノータッチの方が正解である。内心ではわざと無視したことを圭に謝り、光上には糾弾している。

「まあ、四宮がそう言うなら」

御行がそれに続き、話の流れを止めないように繋げていく。しかしこの話の流れはここで一旦止まってしまったため、新たな話題が必要だ。御行は千花にアイコンタクトを飛ばした。それを受けた千花は頷き、用意していたゲームを提案する。

「TG部の双六をやりましょうー!」

「あのクソゲーを!？」

「それは石上くんにダメ出し受けてたでしょ」

「ご安心を。これは石上くんのアドバイスを受けた改良版です！ 完成にはまだ遠いですし、テストプレイも必要なので、今日やつちやえば一石二鳥なんですよ！」

「私達はやったことないですし。姉様たちが作ったゲームやってみてください！」

萌葉はやりたいと要望し、圭も内容が気になる様子。改良版がどこまでマシンになったのか不明で不安も残るが、せっかくだからと御行とかぐやも承諾。TG部作成の双六の準備が始まる。

「カードがマスになってるんですよ」

「いろんなマスがある……。千花姉えたち発想が柔らかいね」

「えへへ、でしょ？」

「前は酷かったがな」

「ええ本当に」

「ですから改良してますって！」

マスの配置が終わり、それぞれに駒が手渡される。ルール自体は簡単。内容としても人生ゲームと同じだ。比較的持ち運びがしやすく、ルーレットの代わりにダイスを使うといった細かな違いがあるくらい。

「お金は完成版がまだないので、今日は皆さんスマホの電卓を使ってください」

「紙幣まで作るつもりなのか」

「もちろんですよ。妥協はしません」

その熱意を他のものに向けられないのかと思いつつ、素直な性格だから大抵のことは真面目に取り組んでいるのも知っている。御行はそこを突かずに順番決めのダイスを振った。1が出た。一番最後である。

「それでは私からですね」

最初はかぐやから。その後は萌葉、圭、千花、御行の順である。かぐやは4を出し、自分の駒を進める。

「ゾンビみたいなイラストね」

「ドツペルゲンガーマスですね！」

「存在しないはずのもう一人の自分、とかでしたっけ？」

「そうですね。ドッペルゲンガーに会うと死んじやいます」

「やっぱり酷いゲームじゃない！」

初手で1人死ぬ。クソゲーオブクソゲーである。死にゲーのようにリスボンでできるならともかく、人生ゲームにリスボンなどありはしない。人は蘇らないのだから。

「待ってください！ 即死は無しにしたんです！」

「元々は即死あつたんだ」

「さすが姉様」

「今後かぐやさんは、3以上を出さないといけません。2以下だとドッペルゲンガーに遭遇して死にます！」

「その死ぬ要素をなぜ捨てられなかったのかしら」

人生はいつ死ぬかわからないから、ゲームでもそれを取り入れようという話らしい。ドッペルゲンガーはフィクションだというのに、そこはゲームだからという理由で取り入れたようだ。謎の塩梅である。

「かぐやちゃんがいなくなっちゃったらライバルが減るな」

「私は死にませんので」

「双六ってそんなバチバチするもんだっけ？」

御行のことが好きな者同士が牽制し合う。このゲームには狙った相手を直接陥れる要素などないため、いったい何で戦うつもりなのかは不明だった。

しかし当人たちは狙っているものがある。かぐやは前回の経験から、結婚マスが存在することを知っている。萌葉もマスを一通り確認し、それがあることを発見している。つまり、そのマスを踏んで御行と結婚した方の勝ちなのだ。

「千花姉えこれは？」

「職業マスだね！ そのマスは、保育士さんだよ！」

「他人の子を預かる大変な仕事だよね。先進国で保育士が安月給なのって日本くらいらしいけど」

「じゃあ私はカナダの保育士ってことで」

「設定盛り込むなよ！」

「表示額の3倍の給料にしよっか!」

「いいのか!」

自由度が高過ぎる。このゲームを作ったのはTG部であり、その部員である千花にルールを委ねる部分が多い。ルールブックこそあるものの、シンプルな双六で製作者がいるのならと任せてしまいたくなる。それによって、圭に甘い判定が出たのだが。

「うわっ、会長また不運なマスばかりに」

「正月入ったらお祓いしてもらおうか」

「それでしたら紹介しますよ」

「いいのか? 助かる」

工場経営失敗による失業。既視感が強過ぎる失業の仕方に、御行と圭は苦い顔をした。このマスは違う理由での失業に変えてもらおうと心に決める。

そんなこともありながら、順調に進んでいくと近づいてくる結婚マス。持ち前のセンスで3以上を出してきたかぐやが、最もそのマスに近い。ダイスの形は四角く、転がし方によっては実質4分の1にできる。そうやってリスクを抑えてきたかぐや。結婚マスまであと4マス。

運命のダイスロール!

「……4ね」

「かぐやさんどう見ても3ですよ。不正は駄目ですよ」

「くっ……!!」

四宮かぐや——結婚ならず。

かぐやにはドツペルゲンガーがあるため、次のターンで1を出すという選択肢が取れない。結婚目前の死という不幸な結末になってしまう。まさにロミオとジュリエット。かぐやはそんな結末を望まない。御行が結婚マスに止まれば、そこに一番近いかぐやとの結婚が確定。可能性はまだあった。

そして御行もまた、それを狙っていた。

(俺が6を出せば四宮と結婚ができる!)

だがダイスを振る順番は決まっている。かぐやの次は萌葉。御行



は最後のなのだ。

「かぐやちゃん惜しかったね〜」

「あなたも止まれるとは限らないわよ」

「あはは！ 私こういう時って、生まれちゃうんだよね」

藤原萌葉——結婚マスに到着。

「結婚けっこう〜ん！ これは殿方と結婚ってことでいいんですね？

姉様」

「ううん。一番近い人だよ」

「……………へ？」

「萌葉はかぐやさんと結婚だね！ おめでとう！ ご祝儀あげるね  
！」

「いやいやいやい！！」

「同性と結婚ってどういうこと?!」

「藤原さんそれはおかしいわよ!」

「このゲームはLGBTへの理解も示してますので」

「私は異性愛者よ!」

萌葉とかぐやの猛抗議。しかしルールは絶対であり、製作者たる藤原千花もまた絶対である。御行もはや達観した様子で、ご祝儀の値段を千花に確認する。

「誰かと結ばれるのはいいい事なんですから。素直に受け取ってください  
い」

そしてここで圭からのコメント。かぐやと萌葉は居たたまれなくなり、ご祝儀を罰ゲーム感覚で受け取る。ご祝儀のはずなのに重く感じた。

ひと騒動が終わったところでゲームが再開。結局結婚した組み合わせは、かぐやと萌葉だけだった。千花は独身だろうとゲームを楽しみ、御行はかぐやと結婚できなかつたことを引きずる。圭にいたっては、結婚マスがある時点で胸の内がざわついていた。

「あ、かぐやさんと萌葉に子供ができましたね!」

「同性なのに!？」

「ゲームですから」

老後までのマスが用意されたTG部の人生ゲーム。萌葉とかぐやは離婚することなくゴールを果たし、かぐやの持ち前の運もあって大富豪に。千花や圭もそれなりの富豪となってゴールを果たす。

「横切るだけで1万円。ネットってすごい……」

「会長……どうやったならそこまで借金が膨らむんですか？」

「俺が聞きたい……」

白銀御行。一般男性の生涯年収の倍の借金額でゴール。

ゲームが終わると、圭は藤原家の庭に出てきていた。真冬の夜は冷えるが、その冷たさのおかげで冷静になれる。

人生ゲームは楽しかった。ハプニング要素も多々あり、波乱万丈な人生がゲーム内で広げられていたから。それなのに、それを楽しめない自分がいたのも事実だった。光上のことがずっと心に引っかかり、頭の中でずっと悩んでいる。

「けーいちゃん」

「……千花姉え」

顔を上げると、そこには後ろに手を組んでふわっと笑いかけてくる千花がいた。

「ごめんね。嫌な思いさせちゃって」

「え？」

悲しげに笑う彼女に戸惑った。千花はただゲームを提案しただけのはずなのに。

事實は違った。千花はわざと圭を刺激するために人生ゲームを行ったのだ。早坂から連絡を受け、クリスマスパーティーで圭から話を聞いてほしいと頼まれたから。直接聞いても言わないだろうから、回りくどいやり方で迫るようにも言われた。光上のこともあり、千花は躊躇ったが早坂の頼みを断れなかった。

だから人生ゲームを使うことにした。圭に揺さぶりをかけるために。思惑通りに圭は揺さぶられ、こうして1人で外に出てきている。話を聞くのも今しかない。

「晶くんと何かあったんでしょ？」

「ーっ!!」

「見てたらわかるもん。萌葉も心配してたし」

「……でも、千花姉えたちには関係ないから」

「お友達の心配をするのは当然でしょ？ 私、圭ちゃんのこと好きだもん」

真つ直ぐに向けられる好意。飾り気もなく素直な言葉。それが藤原千花という少女の強みだ。彼女は持ってきた上着を圭の肩にかけ、正面からぎゅつと優しく包み込む。

「圭ちゃんが悲しい時は私も悲しい。圭ちゃんが嬉しい時は私も嬉しい。圭ちゃんが困ってる時は力になりたい。お友達ってこういうものだと思うんだ」

「……千花姉えは……ずるい……」

「政治家の娘だからね」

御行に何度か教育をしているせい、千花には母性が芽生えていた。その温もりが圭の心のドアを開けていく。緩みそうになったその心を、しかし圭は頑なに閉めようとした。弱い自分なんて知られたくないから。

「誰にも話さないから。会長にも、晶くんにも」

「やだ……!」

「うーん。じゃあ私の予想を言うね」

圭にとって、母性もまたトリガーとなる。自分を連れて出ていった母親を思い出すから。あの時の悲しみが蘇ってくるから。しかし千花は圭にとって姉としての側面が強い。千花自身が母性に目覚めていても、圭からすれば微かに感じる程度で姉として感じる面のほうが大きいのだ。

だから千花を拒めない。光上の時のこともあり、余計に拒むことに抵抗を感じている。その間に千花は予想を話した。

「2人はたぶんすれ違ってるんだよ。圭ちゃんは晶くんのが好き。晶くんも、圭ちゃんのが好き。だから——」

「違う……!」

「なにが違うの?」

優しく問いかけた。首を強く振った圭を見つめ、話を遮った圭の言葉を待つ。

圭はやらかしたと焦った。話すつもりはないのに、千花の話を遮ってしまっている。自分から止めてしまったため、千花の問いかけから逃げるできない。

たとえどれだけ大人びていようとも。しつかりした少女で頭が良くても、彼女はまだ14歳の少女であることに変わりはない。その心はまだ未熟で、思考も直情的になりやすい。

圭はしばらく逡巡し、阿天坊に言われたことを思い出した。周りを頼れという話を。圭は観念したように細く息を吐く。躊躇いながら、いや怯えながら話を切り出す。肩も声も震わせて。

「光上さんは……、私のこと好き……なんじゃ………ないっ……」  
「なんでそう思うのかな？」

「だって……私よりお兄いを優先したから！ 文化祭の日だって！ 誰か恋人とデートしてたって聞いた！」

（文化祭って……。あ、早坂さああん!! あらぬ誤解が！ とんでもない誤解が起きてます！）

その誰かが早坂だとは知らないのがせめてもの救いだ。千花は自分の体温が下がったのを感じながら、圭の話を聞き続ける。

「伝えたいことあるって言われて……。良い話じゃないって雰囲気でわかって！ だから、それが怖くて……」

聞きたくなかったから。光上を拒んでしまった。その時の彼の顔を思い出し、胸に突き刺さって苦しくなる。呼吸が乱れていく。

「うん……。圭ちゃん、ゆっくり息を吸おつか」  
（晶くんはなんでこう……）

背中を一定の速さでぽんぽんと叩く。人の平常時の心臓のリズムで、圭の呼吸も少しずつ落ち着いていく。そうしたら悲しみだけが残り、圭は千花の胸に顔を埋めながら小さく肩を震わせる。

「大丈夫だよ圭ちゃん。晶くんは彼女はいないし、いい雰囲気の人はいないから」

そもそも光上相手に距離を詰められる人間など早々いない。未だ

に片手で数えられる程度の人数だけだ。

しかしそういう理屈の話では収まらない。恋愛は感情が主役なのだから。千花の話は半分も圭に届いていない。

「わたしっ、光上さんを拒んで……。どんな顔して会えばいいか、わかなくてっ！ 気づいたら……。会いたくないって、言っちゃってて……」

千花はあやすように圭の背中をぽんぽんと叩き続ける。相槌を打ちながら、すべてを吐き出させるように。

「ひどいことして。でも……。嫌われたくなくてっ！ どうしたらいいかわかんないの！」

「今はいっぱい泣いちゃえばいいよ。圭ちゃんは頑張ってきたんだもん……。だから不安でもあるのかな？」

千花の言葉に小さく頷く。千花は無理もないと思った。鈍感な相手に恋愛するのは、相当しんどい恋愛だ。どれだけ頑張ってもなかなか気づいてもらえなくて、光上のように恋愛に疎い人が相手だと、相手からの印象を受け取りづらい。女性として見てもらえていないのではないか。そんな不安が常に付き纏う。

圭はそこを言葉にできた。女性として見てほしいと。だから、光上が話そうとした内容が、「付き合うことはできない」という内容なんじゃないかと考えてしまった。

圭の気持ちを知れた。それを知った上で、千花は大丈夫だと圭に話しかける。

「晶くんは圭ちゃんを嫌いになつてないよ」

「……」

「私が言っても、会長が言ってもたぶん信じられないよね？ だから、晶くんが帰ってきたら、話をしてみよ？」

「……こわいよ……」

「うーん、じゃあ私が晶くんから話を聞いてみるから、圭ちゃんがそれを違う場所で聞くっていうのは？」

直接ではなく、間接的に光上の気持ちを知るといふ作戦。それでも、光上のそれを知るのが怖いという思いに変わりはなく、圭は首を

縦に振ることができなかつた。

「すぐには決めなくていいと思う。冬休みは始まったばかりだから」拒否ではなく迷い。知りたいけど怖いという葛藤。圭が揺らいでいるとわかつたから、千花は決断を先延ばしにした。

2人の関係が、それを機に前へ進めることを願いながら。

## 第40話

圭たちが日本でクリスマススイヴにクリスマスパーティー兼お正月を過ごしていた一方で、光上はフランスでクリスマス当日にクリスマスパーティーに参加していた。

秀知院学園のフランス校に子どもを通わせている政治家の1人が主催したパーティー。社交場と言ったほうが今回の雰囲気には当てはまっていそうだ。一級ホテルを貸し切りにしてのパーティー。その世界に慣れていない人が聞けば卒倒しそうなほどの豪華さ。参加者も出される食事も装飾も、何もかもが世俗を離れた上級もの。

(味噌汁飲みたい)

その会場で低アルコールの酒をちびちびと飲みながら、光上は日本の料理に思いを馳せていた。フランスの料理だって好きだ。文化が違うのだから、味が違うのも当たり前。日本では見ることもないような料理だって多い。それはそれで好きなのだが、今の彼の舌は日本の味噌汁を求めている。

(風にでも当たるか)

会場の東側にはテラスがあり、そこからセーヌ川越しにパリの街並みを見られる。視線を少し北にずらして行けばエッフェル塔があり、夜の街を静かに鑑賞するには申し分ない。近くに庭園があり、民家が比較的少ないのも静けさの要因だ。

光上はエッフェル塔には見向きもせず、手すりに手を置いて街を眺める。特に見たいものがあるわけでもなく、ただ東の果てには日本があるだけだ。

「お隣いいですか?」

「もちろんいいですよ」

「ありがとうございます」

当然だがここにいる人たちとの会話はすべてフランス語。光上も慣れた様子で言葉を返し、隣りに来た人を見て盛大に咽た。

「なっ!?! なんて豊実さんがここに!?!」

「やつほく。来ちゃった〜」

信じ難い事だが、ゆるふわトーンで話すその人物は、見間違えようもなく藤原豊実その人である。藤原家の長女にして、あの千花にすら「何考えてるかわからない」と言わせる怪物。そして、光上が生まれて初めて苦手意識を持った相手でもある。

「来ちゃった〜って、いやいや、えっ!?!」

「あははく。晶くん驚き過ぎだよ。そんなあり得ないって顔されるよ、お姉さん寂しいなあ〜」

「すみません。けど、いやどうやってここに?」

「飛行機で来たよ」

「そうでしょうけど!」

「あ、飛行機でホテルに来たわけではないからね?」

「それしたらテロですよ!」

光上が苦手意識を持っている理由は、豊実にやたらと遊ばれるからである。豊実と遊ぶのではなく、豊実に遊ばれる。ここがミソだ。千花が伊井野をおもちやのように扱っているのと同じく、豊実も光上をおもちやのように思っているのだ。過去にも「晶くん遊ぶのって楽しいね」と言われている。

それはさておき、光上が言いたかったことは移動手段の話ではない。この会場に入られた理由である。この会場は完全招待制であり、主催者からの招待券がないと入れない。警備体制も敷かれており、忍び込むのも不可能だ。

「お母様が外交官だからね〜。そのコネがあるんだ〜」

「このコネクションもあつたとは」

「私個人のコネもあるんだけどね。フランス校との交換留学とかやってたからその時に」

「意外とアグレッシブですね」

「私は私だからね〜」

社交場であるために、豊実もまたドレスに身を包んでいる。海外でも周囲の目を引くような美貌。出るところは出ており、それを恥じらうことなく堂々としている姿は、同性からの人気も高いとか。幾度と



なくモデルにならないかとスカウトされ、悉くを拒んでいる。

「モデルになるとおじさん達がヤリたがるじゃん？ それ込みで勧誘してるってのも見え見えだからね。キモいなくって断ってるの」

「ヤるってそんなっ……」

「照れちやつてる。晶くん可愛い」

頬が赤くなり、豊実から視線を逸らす。豊実はその反応を楽しみ、赤くなった光上の頬をつんつんと突いて遊ぶ。

「ほ、本題は何なんですか？ たしか毎年ご家族で過ごされてましたよね？」

「うーん。うちのクリスマスがキモいってのもあるんだけど」

「クリスマスがキモいってなんですか」

原因は自分にあるというのを、豊実清清しく棚に上げていた。

「千花に頼まれちゃって」

「藤原さ……千花ちゃんにですか？」

「あ、その呼び方懐かしい。ねえねえうちの千花もらってくれない？ あの子まだ処女だよ？」

「何言ってるんですか!? 俺と千花ちゃんはそういう関係じゃないですし、なりません！」

「そんな……! 処女に夢見るのが童貞なんじゃ……!」

「失礼だなこの人！ さてはお酒で酔ってますね!」

「ノンアルコールだよ」

「シラフでこれなの!」

ほんのりと色づいている頬は、メイクのそれか冬の夜による冷えのどちらかのようだ。

話が一向に進まず、光上は千花に何を頼まれたのか聞いた。多少の推測を立てつつ。

「ん。自分から振ったんだからちゃんと話してね？」

ハメられた。光上はそれを察した。圭は藤原家に何度も遊びに行っている。泊まることもしばしばある。千花とも仲が良く、豊実もまた圭のことを可愛がっている。

その圭に関わることで、光上に話を聞くためだけにフランスに来て

いる。先程までのやり取りも、光上が話さざるを得ない状況を作り出すための罫。巧みな話術によるものだ。

(これが棚ぼたってやつね)

豊実自身はそんな計算を一切していないが。なんかいい感じにハマられたなど自ら感心している。

「……文化祭の日に、白銀さんに話しておきたかったことがあったんです」

「白銀さんってどの？ 会長くん？ お父様？ お母様？ ペス？」

「ペスは藤原家のペットでしょ！ 圭さんです！」

「なんでさん？ ちゃんじゃないの？」

「その呼び方は過去に拒まれたので」

「なら仕方ないね。さん呼びでいいよ」

「なんでこんな許可をもらってるんだ……」

またもや脱線させられたが、気を取り直して話を再開する。あまり気乗りしない話だが、話さないといけない状況を作り出されたため逃れられない。

「圭さんに話そうとしたら、急に様子がおかしくなって。何かに怖がっているようで、心配して伸ばした手を弾かれてしまって。……涙を落しながら走り去った彼女を、動揺して追いかけられなかったんです」

「それはたぶん生理だよ」

「……こんなの初めてで」

「じゃあ初潮なんだね。圭ちゃんも焦っちゃったんだよ」

「くそっ！ 真面目に相談したらこれだよ！ だから嫌だったのに！」

そんな回答が飛び出してくるとは予想だにしなかった。話にならないとして立ち去ろうとした光上を呼び止める。もうふざけないと約束され、光上も渋々その場に残る。大人の女性の意見は貴重だと判断したから。あと、後日に何されるかわかったものじゃないから。

「思い当たる節は？」

「それがわからなくて……。彼女が会いたくないって言ってるので、

もう会わないほうがいいのかなって思ってます」

「うわっ、それは最低だよ晶くん」

「なんでですか？」

どうしたらいいか分からず。悩んだ結果の結論を否定された。光上は僅かに反感を抱きつつ、豊実に視線を向けた。いつものぽやとした雰囲気が残るものの、豊実は真面目な顔をしていた。

「だって、それってつまり晶くんの気持ちに紛い物だって証明してるだけじゃん」

「紛い物だなんてそんなこと——」

「ないってなんで言えるの？　だって、圭ちゃんから迫られたからそれに合わせてただけで、圭ちゃんが止まったらさようならしてるのに」

「……ッ！」

「晶くんは——本当に圭ちゃんのこと好き？」

何か言おうと口を開き、それでも言葉が何も出てこない。その事に光上は悲しげで悔しそうに顔を歪めた。

そんな様子を見て、豊実も光上のことを暴いていく。すり抜けていくように、あっさりとは彼の核心に迫る。光上が苦手意識を持つのも、豊実の方が上手で自在に距離を調整できるからか。それとも、何でも見透かしたように話してくるからか。

「好きだとして、圭ちゃんのどこなところが好きなのかな？　圭ちゃんに好かれた晶くんには見えないものがあつたはずだよね」

自分にしか見えない圭の姿。それが何かを考える。本来なら考えなくても出てくるはずのそれを、光上は考えた。考えた上で、圭の姿が霞んでいく。その事に自分の内側が冷えていくことを感じた。

「見えてないでしょう？」

圭に見てほしいと言われたのに。圭をちゃんと見ると決めたのに。何も見えていなかった。

「なんで見えてないかわかる？」

「……」

「難しいか。今回だけは全部教えちゃうね」

豊実は光上をテラスにある椅子に座らせ、その対面に自分も腰掛け  
た。華やかな令嬢としてではなく、1人の姉として光上与話す。少  
だけの人生の先輩として。

「晶くんは自分がないんだよ」

「俺にも意思はありますよ」

「本当かなく？　じゃあ晶くんは今どこに居るのかな？」

「え……」

にっこりと包み込むような笑顔で放たれた言葉なのに、光上には豊  
実の言葉が深く刺さった。その言葉の意味はわかっているのに。

「私には光上晶くんの居場所が映らないんだよね。そこに居るはず  
なのに、どこにもいない。そんな感じ」

阿天坊にも言われたことだ。虚ろであると。御行には、自己否定が  
根底にあると言われた。それらはいまいちピンと来ていない。だが、  
今ならそれらが光上に届いていく。

「ずっと受け手だったでしょ？　何かがあつてそれに反応する。ずつ  
とそうしてきたから、自分発信ができない」

現状を保つように生きてきた。自らバランスを崩すようなことを  
するわけもなく、だから受け身の姿勢が身についた。

「圭ちゃんのどこが好きか。理由なんて後付けでしかないけど、言葉  
にしないと伝わらないから。そこは必要なところなんだ」

「どこが好きか……」

「うん。圭ちゃんの仕草とか言動とか性格とか。なんでもいいけど、  
言葉にできるようにならないと駄目だよ」

「でも……考えても見えてこないんです……」

「晶くんは自分をわかってないもん。まずはそっち」

俯きそうになる光上の額を指で押す。しつとりとした指はぐーつ  
とゆつくり光上の視線を戻させた。光上与視線が合うと、豊実はにっ  
こりと微笑んで指を離す。

「自分って、どうやったらわかるんですか？」

「そんなの私に聞かれても困るよ」

「え……」

「私は晶くんじゃないもん。それは晶くんにはわからないこと」

豊実には中にスタッフに声をかけ、飲み物のおかわりを注文する。光上もそれに便乗して飲み物を頼んだ。

「じゃあ豊実さんは、どうやって自分を知ったんですか？」

「知りたい？ お姉さんのこと」

「揶揄わないでくださいよ」

豊実が頼んだワインが届けられる。ボトルを開けてもらい、グラスにワインが注がれる。ちゃっかり光上の分も。

「ワインは俺の年齢じゃ駄目ですよ!？」

「気にしない気にしない。ワインみたいなジュースだから」

「本当ですか？」

「匂いを嗅げばわかるよ」

半信半疑で匂いを嗅ぐ。たしかにアルコールは感じられず、飲んでみてもアルコールの味はしなかった。本当に見た目だけがワインのジュースだったようだ。

「それで、豊実さんはどうやって知ったんですか？」

「私はそれを考えたことないよ」

「え？」

「私は私だからね」

豊実はワイン風ジュースを飲み、夜景を一瞥してから光上に視線を戻す。どう話すか悩んでいたようにも見えた。

「晶くんはさ、何のために生きてるの？」

「いきなりなんですか」

「だって、子供は生まれることを選べないでしょ？ 男女がやって生

まれるわけだから」

「ドストレートに言いますね」

「生まれたこととか、育てられることとか、親に感謝することはあるよ？ でも、だからって親のために生きるのは違うと思うなく。もちろんそれを選んでやるならまだしも、晶くんは流されてるだけだよね？」

光上家のひとり息子として生まれた。将来は学園を理事する立場

に立つことが決まっている。これは、豊実が言うように用意された道だ。光上晶が立てた将来設計ではない。

「うちはそういう家じゃないから、晶くんとかかぐやちゃんの苦悩はわからないよ？ でも、あえて言わせてもらおうけど、そんな人生楽しいの？」

「——ッ！」

それは、かつて光上本人が早坂に言ったことと同じである。自由のない生活は楽しいのかと。光上自身は、納得していると早坂に言った。しかし豊実の目からすれば、そこに光上晶の意志がないのだ。

「二度きりの人生で、その命と体はその人のもの。なら自分が楽しんで幸せになれるように生きたらいいじゃん。私は胸を張って言うよ。私は私のために生きてるって」

誰かのために生きるんじゃない。親のために生きるんじゃない。この世に生を受けたのだから、自分が主役なのが当たり前。自分の人生を彩るために生きている。それが藤原豊実の考えで、千花や萌葉もそういう生き方をしている。

「誰かのために生きることとは否定しない。そこに本人の意志があるからね。だから、君の幸せはなーに？ 何がしたくて生きてるのかな？」

人生の目標とは何か。生き甲斐だと口を揃えて皆が言うだろう。では、なぜ人生の目標が生き甲斐となるのか。そこを考えた人はどれだけいるのか。

考えなくても、理解している人は理解している。それが当たり前のことだと思っている。自分の人生を彩るものが生き甲斐。幸せになれると信じて突き進み、充実感を得られるから、それが生き甲斐なのだ。

用意された道を歩くことが幸せなんじゃない。与えられた目標を達成するのが幸せなんじゃない。自分の頭で考えて、自分の意志で決めるから、それが幸せに繋がるのだ。

「冬休みの間はこっちにいるんでしょ？ フランスの子と交流しながら考えてみるのもいいんじゃないかな？」

そう締め括った豊実は、光上の手を引いて会場内へと戻る。会場内ではフォークダンスが始まっており、先程から何人かの男性の視線が豊実に向けられていた。ちやほやされるのは悪い気がしないが、フォークダンスともなるとボディタッチが増える。気のしれない相手にそれを許すほど、豊実は寛容じゃない。

「付き合ってもらおうね」

「……いいですよ」

わざわざフランスまで来てくれて、大きなアドバイスをされたばかりだ。これぐらいのことは付き合う。

絹のように綺麗な手と手を重ね、体を寄せ合う。社交場でのダンスは光上も一応経験がある。だが、女性を意識するようになってからは初めてだ。そして豊実は断然美人の部類であり、仕草が艶っぽいところもある。光上は珍しく緊張した。

「ふふっ、やっぱり晶くんか〜わい〜」

「そういうところが苦手です……」

「知ってるよ。これは圭ちゃんには内緒にしないとね」

「質が悪いですよ」

「自業自得だよ。あ、こっちで年越しするから、帰るまでよろしくね？」

「え?」

帰国するまで振り回されることが確定するのだった。

## 第41話

各々いろんなことがあつた冬休みが明けた。伊井野は腕が折れ、石上は罪悪感に苛まれ、片や生徒会長と副会長は正式に付き合い始めた。自分たちの周りの恋愛事情が大変なことになっており、その事に引け目を感じはするものの2人は付き合い始めた。青春とは刹那の時間であり、付き合いを始めることを責められるいわれもないので、御行とかぐやのメンタルが強かったなという話なただけだ。

光上はというと、生徒会室のソファでぐったりしていた。藤原豊実に振り回され、その回復が追いついていないのである。夢にまで侵蝕してきたらしい。

「圭ちゃん以外の誘惑に負けないようにしないとね」という名目で、デートの毎日。豊実の行きたいところに東奔西走。冬休みという期間内に2000キロ弱の移動をしていた。ホテルは同室にさせられ、わざとボディタッチが増やされ、光上の精神はゴリゴリと削られていたのだ。

「お姉様がすみません」

フランスでの滞在期間中に何をしていたか聞かされた藤原は、毎日デートしたと聞いて飲み物を吹き出した。萌葉ですら、それはやばいと血の気が引いていた。

そんな姉に代わって、藤原はソファに深く腰掛けている光上に謝罪。そのまま、冬休み前に泣かせたことも謝罪する。

「藤原さんが謝ることじゃないよ。俺がすっかりしてなかったせいだから」

藤原は光上の雰囲気、前と少し変わったことを感じ取った。冬休みの間にいろいろとあつたのだろう。あの姉に散々振り回されたのだから、よくわからない成長をしたのかもしれない。

「晶くん聞いてください」

「なにを？」

安心と若干の不安を抱えつつ、藤原は光上に話しかける。ソファに



もたれていた光上も、体を起こして話を聞く態勢になる。

「最近皆さんの私に対する態度が酷いんです」

「そうなの？」

死んだ魚の目で言った藤原の言葉を受け、光上は御行の方に視線を向ける。御行はしばらく唸り、否定する材料を見つけられずに肯定する。石上と四宮はいつものことなのでスルーし、藤原を一番尊敬している伊井野に目で問いかけた。

「私はまだ尊敬しています」

「まだ？」

「俺もそんなことはないと言いたいのだがな。ハゲヅラ被ってくる女はどうにも擁護できん」

「藤原さんそんなことしてたんだけ」

「かぐやさんの誕生日祝いにサプライズしたかったんですよ！」

「発想が飛び抜けてるね〜」

「えへへ〜。でしよ〜？」

「藤原先輩。それ褒められてないですからね？」

石上の指摘は届かなかつた。今も昔も変わらない接し方をしてい  
る光上の言葉を、都合のいい解釈で受け入れるほうが精神的によろし  
いからだ。

「それでは今からゲームします」

「前振り雑過ぎないか？」

「皆さん散々私をコケにしてくれましたからね。私の認識を改めても  
らいます」

「なにやるの？」

「愛してるゲームをやります！」

愛してるゲーム。ルールは簡単。要は相手に告白するように好意  
を伝え、相手が照れたり恥ずかしがったりしたら負けである。

「ミコちゃん……愛してる」

「!!」

「こんな感じで照れたら負けです」

元々伊井野は藤原のことを尊敬している。段々と現実を認識する

ようにはなつてきたが、未だに尊敬する先輩であることには変わりない。そして好意を向けられることに慣れていない伊井野が、こうして藤原に迫られたら照れるのも当然である。

「私と皆さんで勝負してもらいます」

「そんなんで照れるわけないでしょ」

「石上くんシットダウン！」

石上と藤原がソファに座って向かい合う。先にソファにいた光上は立ち上がり、伊井野の隣りに移動して見守ることに。

今日の藤原は自分が勝利者になるために本気である。石上のことを分析し、いつも必ず一線を引いてくれていることを指摘。苛つきよりも先に楽しさが来ることを伝え、それから「好きだよ」と締め括る。これには石上も照れて俯いた。

「はいドーン！ クソザコ極まれりー!!」

役者になれるのではないかと思わせるほどの態度の変容。石上の背後に移動し、全力で後ろから煽っている。その切り替えの早さに周囲は無言で見つめるしかない。

「どうしたんですか？ ウブちゃんちゆか？」

「そうやってすぐに調子に乗るところ改めた方がいいですよ」

「あららく負け惜しみ」

「人を弄ぶような嘘は嫌いなんです。ねえ？ 光上先輩」

「今のが嘘だったら、ね」

「え？」

「はい。今言ったことは本当ですよ」

ぽんと石上の肩に手を置いてそう言った藤原を、石上は照れながらも見直しかける。

「はいドーン！ 学習しませんね」

「しつかけええ!! いいんですか光上先輩！ これは許容範囲なんですか!？」

この手の話は光上の許容ラインぎりぎりのこと。だから助けを求めらるなら光上に言うのが最良の判断である。

「揶揄い過ぎてるわけでもないし、藤原さんはこういうの本音でしか

「言えないからね」

「あ、晶くん!？」

「だから、石上くんが一線引いて接してることは、本当に好きなんだと思うよ」

「なんでそういうこと言っちゃうんですかー!!」

石上と藤原に同時に勝利した光上。思わぬ横槍に藤原は猛抗議。光上の胸倉を掴んで激しく振る。体裁を一切保てていないその姿が、光上の分析が正しいと証明してしまっている。

「こうなったら晶くんと勝負です!」

「手当り次第じゃん」

「シヤラップ!」

光上に口を閉じさせ、一歩下がって距離を取る。こういうのは物理的な距離でも心理的に作用するもの。初めから近い位置ではなく、近づいて言うというやり方でも相手をドキリとさせられるものだ。

「この中だと、晶くんが一番長い付き合いですよね。かぐやさんとは中等部から仲良くさせてもらってますし」

「俺達は初等部の頃に知り合ったもんね」

「はい。晶くんは誰とでも距離を置いちゃいますけど、その癖して誰よりも優しくくて、心配性ですよ。何かあつたらその情報を集めて、丸く収められないか苦悩して。優柔不断なところもありますけど、それは誰も傷つけたくないから。そういう優しくって頑張り屋さんなところ、私は大好きですよ」

「うん。ありがとう」

「……あれ?」

全く動じない。にこやかに藤原の言葉を受け止めた光上に、御行と石上から賞賛の声がかけられる。しかし光上は内心では焦っていた。むず痒さに耐えるのに必死だった。それもまた、冬休みに豊実に鍛えられたおかげである。まさか感謝する日が来るとは思っていなかった。

光上が動じなかったことにきよとんとする藤原へ、今度は光上から仕掛けられる。

「人一倍他人思いなところがあって、いつも笑顔で話しかけてくれるよね。元気がもらえるその笑顔に助けられた人は、俺以外にもいると思うんだ。ありがとう。そういう千花ちゃんが好きだよ」

「……つ！　ず、ズルいです！　ここで名前で呼ぶなんて卑怯です！」

「あはは、ごめんね藤原さん」

「あー！　戻さないでくださいー！」

「すごいな。藤原が翻弄されてるぞ」

「まあ、今の彼のやり方はたしかにズルいですからね」

（会長にいつ名前で呼んでもらおうかしら）

自分が勝つために始めた愛してるゲーム。後輩2人には勝てたものの、同学年の光上に敗北。この流れなら回ってくるのかと御行は身構えたが、藤原の矛先は変わらず光上のままだ。

それもそのはず。この愛してるゲームは、本当の狙いが別にあるからだ。

「晶くん。圭ちゃんが相手ならどうですか？」

「……え」

（藤原書記の狙いは初めからそれか）

クリスマスイヴに圭に言ったこと。代わりに光上の気持ちを聞き出してみせるという約束。藤原はそれを切り出すために、それに近いゲームを用意してきたのである。その手法に、イヴの日に盗み聞きしていた御行と四宮は感心する。

「圭ちゃんのこと、好きですか？」

「……わからない。好きだとは思っただけど、どこがって聞かれたら答えられない」

「じゃあ、圭ちゃんが他の男の子と遊んでたら？」

「内容にもよるけどデートなら嫉妬する。というかめっちゃ嫌だな」

「ふふっ、それなら圭ちゃんのこと嫌いって線はないですね」

「それは絶対はない」

即答だった。圭のことが嫌いだななんてあり得ないと光上は言い切った。その事に、話を聞いている周囲の人間もほっとする。伊井野なんて安心しきってその場にふにやりと座り込んだ。一番心配して

いたらしい。

ひとまず、最悪のシナリオはまず無くなった。

「白銀さんと……一度会ってきちんと話がしたいと思ってるよ。でも——」

「なら善は急げですね！」

「はい？」

「2人とも臆病風に吹かれてるだけです」

光上の手を引っ張って生徒会室を飛び出す。向かう先はとある教室。拗れ続ける前に、早い段階で直してしまえばいい。2人の気持ちは、僅かなズレですれ違っているだけなのだから。

「圭ちゃんを正面から、しっかりと真っ直ぐに見てください」

「うん」

「圭ちゃんだって、まだ14歳の女の子なんです。心が未熟なのは当たり前です」

「うん」

「それでも、あの子の気持ちは一人前の女性のものなんです」

「そうだね。俺はそれを正しくはわかってなかった」

その教室は、光上にとっては見慣れた場所。早坂がいつも使っている空き教室。そこに到着するとすぐに、藤原はドアを開けて中に入った。

「書記ちゃん聞いてたプランと違うし」

「臨機応変に、ですよ」

「はあ。ウチらは退散しますか」

「ですね」

教室の中にいたのは、早坂と圭の2人だった。光上がそうしていたように、圭とタブレットで生徒会室の様子を見ていたようだ。

この作戦は藤原と早坂で立てたもの。クリスマスイヴに圭と話し合った内容を早坂と共有し、どういう流れなら光上から話を聞き出せるか会議。その会議の中で愛してるゲームが生まれ、これならいけると判断。圭には高等部に来てもらい、早坂とタブレットで様子を見てもらうという作戦だ。その日のうちに2人を会わせるとまでは決めて

いなかったが。

藤原と早坂が教室から出ていき、圭と光上の2人だけになる。およそ3週間ぶりの再会。圭は気まずそうに目を逸らしている。そんな圭の前に光上は移動し、深々と頭を下げた。

「ごめん。白銀さんを不安にさせて、泣かせちゃって。楽しんでもらうって言ったのに、本当にごめん」

「いえー！ あれは私が……！ ……ごめんなさい。どんな顔して会えばいいかわからなくて、光上さんに嫌われたんじゃないかって怖くなって……。それで会いたくないなんて言ってしまったんです……」

「いや全部俺に責任があるんだ！ 白銀さんに非なんてない！」

「そんなことはないんです！ 私に非はありますから！」

「なんでそこで強情なのさ！」

「光上さんには言われたくありません！」

圭も椅子から立ち上がり、光上に詰め寄って言い張る。責任の比重。その主張による口論。光上也下げていた頭を上げて彼女と言合い、そこでようやく目があつた。気の強さを表すようなツリ目と目つき。澄んだ瞳は美しく気高い彼女を表す。

久しぶりに目が合うと、おかしそうに互いに笑みが溢れる。藤原の言う通り臆病なんだ。怖くて踏み出せなくて、でも話してみたら思ってたよりは話せる。相手の気持ち伝わってくる。思っていたような険悪なことにはならなかった。口論もやめて、圭は気にしていたことを聞くことにした。

「……さっき言っていたことは、本当ですか？」

「うん。本当だよ。白銀さんを嫌いになんてならない」

「よかつ、た……。ずっと……。怖かったから……」

「本当にごめん。白銀さんから何度も距離を詰めてくれたのに、俺は動かなかつたから。そのせいでこんなことにさせてしまった」

豊美に指摘されてようやく自覚した。自分がどれだけ酷かったのかを。御行にも指摘されていたというのに。

自覚する。御行に言われた通り、自分を嫌っている。あやふやで、自分という柱がない。自己があまりにも小さい。だから、それを

これから変えていこうと思った。

「……我儘なお願いだけど、もう一度チャンスをください」

「……?」

「白銀さんの魅力を、俺にしかわからない白銀さんの良さをいくつも見つけてみせるから……。何よりも、君に相応しい男になってみせるから！ だから……。そうなれたら、もう一度君の隣りにいさせてください」

再度頭を下げる光上を、圭はほかんとしながら見つめた。何度もぱちぱちと瞬きをし、言われたことを反芻し、しつかりと咀嚼してくすくすと笑う。そうするしかないじゃないか。だって、隣りにいたいほど情があるとやっていて、もつと好きになると言っているのだ。こんな告白でしかない。

とはいえ、酷く都合のいい話でもある。第三者からすれば忌避されても仕方のない話。それでも、たとえどれだけ醜かろうと光上はそれを選んだ。自覚した上で、それでもと選んだのだ。自分の中で生じた数少ない気持ちをし、10年ぶりのそれを理解して。

圭は光上の頭を上げさせ、意地悪っぽく悩んでみせた。焦る彼がおもしろい。都合のいいことを言われているとわかっている。でも、彼のことは今でも好きなんだ。圭は自分にも責任があると思っている。全然曝け出せていない部分もあつて、そこが重要な部分なのだ。それを見せるのが怖い。それを話すのが怖い。だから、それを話す日を決める。

「条件をつけていいですか?」

「なんなりと。どんなことでもやってみせる」

「その時が来たら、光上さんから告白してください」

家の身分差もそれで解決できる。身分差などそもそも時代遅れではあるけれど、未だに富裕層の中では根強く残る。それを越えるためには、彼からの言葉を正式に貰うしかない。

「もちろんそうするよ」

「ありがとうございます。その時に私が光上さんの本気を受け取れたら許してあげます。私も何か贖罪を考えておきますけど」

「いやだから白銀さんに非はないんだって」

「それだと私が納得できません！」

「なんで！」

「……教えません。考えてください」

「難しいやつがきた……」

答えは「子供扱いされているようで嫌だから」である。反抗期に入った理由もそれだ。つまり、子供扱いは圭にとってタブーなのだ。しかし光上は年上として責任をすべて取りたいと考えている。なかなか答えにはたどり着けなさそうだ。

周囲の尽力もあり、こうして2人のすれ違いは元に戻ることができた。何歩か前進もしている。

だが、藤原が指摘したように、光上は優柔不断な部分がある。フランスへの移住の話も、四宮家とのことも話を切り出せていない。

圭にもまた、彼女の心の中に根付く残っている問題がある。

2人にはまだ、大きな壁が立ちはだかったままである。



## 第42話

秀知院学園高等部の校長は、わりと差し入れを生徒に出す。そのほとんどは生徒会に向けてのものであり、その方法は毎度バラバラ。生徒会の人間を捕まえられたらその人に渡すし、見当たらなかつたら適当に生徒に声をかけて届けてもらう。自分で探し出して差し入れを直接渡すという選択肢は取る気があまりない。ポケモンを集めたいから。

今回はボランティア部に所属する大人の女性こと柏木に白羽の矢が立った。彼女は生徒会室に遊びに行くこともしばしばあり、他の生徒よりも適任だと言える。

「校長から皆さんへ差し入れだそうです」

「さくらんぼのゼリー！ 食べましょ〜」

「柏木さんも一緒にいかがですか？」

「いいんですか？ ではご相伴与ります」

「8個入りか。白銀さんも食べよ」

「ありがとうございます」

前回の一件により、圭はなんとか以前と同じように遊びに来ている。はつきりとした告白ではないが、光上の気持ちも伝えられており、圭の心も上向きになれていた。これまでは圭が攻める側だったが、今は立場が逆転。受け手に回っていて、以前とは違う緊張感にはまだ慣れていないようだ。少しそわそわしているのもそのせい。光上の隣りを確実にキープしているが。

以前までなら手を重ねるぐらいのこともしていたのに、今はそれもしていない。これはどちらも我慢しているからだ。圭は光上からの告白待ち。光上は自分磨きの真っ最中。その間、以前のようなイチヤつきはしないようだ。伊井野はこの変化を喜びと心配のハイブリッドで見守っている。

全員にゼリーとスプーンが配られ、会話を交えながら味を堪能していく。圭と光上は2人だけ別の会話で世界を作り上げているが。

「この前聞き忘れてたけど、白銀さん夜ふかししてた？」

「あ、気づかれてましたか」

「眠そうにしてたからね。何かあったの？」

「実は……兄が長電話してたんです」

「!!」

「何時まで？」

「5時前まで」

「なっが!!」

その会話に四宮と御行が反応する。2人が反応したことには光上と柏木しか気づいておらず、どちらも2人が付き合っていることを知っている身。顔に似合わず甘酸っぱい青春してるなど面白がる。

そんな話題に食いついてくるのがラブ探偵千花つち。恋話っぽいものならセンサーが敏感に反応するのだ。そのはずなのに、今はティツシュを鼻に詰めている。

「藤原先輩が食いつかないなんて珍しいですね」

「いやちよつと……今回はタイプなので……」

「長電話が？」

「藤原先輩保健室に行きますか？」

「そこまでじゃないよ。ありがとうミコちゃん」

藤原の脳内では、長電話の相手がハーサカくんになっているのだ。御行とハーサカくんによる長電話。その妄想は勝手に2人の関係性を押し進めていた。

そんな藤原の様子には一切気づかず、圭は気恥ずかしそうにしながら光上をお願いする。

「今度、私たちもしませんか？」

「しません」

「むう……」

あっさりとは断られた。圭はむくれながら理由を聞く。私と電話したくないのかという思いも含めて。

「白銀さんの睡眠時間を削りたくない。まだ体が出来上がってないんだよっ。」

「また子供扱いですか」

「健康を気遣ってるの。夜中に起きることがそもそも体に悪いんだし、成長を妨げるよ」

「女子の成長期は男子より先に終わるんですよ」

「関係ないよ。美容にもよくないじゃん。白銀さん綺麗だし、体のケアも大切だから」

「っ、そ、そんなこと言って……」

「本当にそう思ってるからね」

「え、僕ら何を見させられてるんです?」

「石上。妬みは醜いわよ」

2人だけの世界を作り上げられ、その余波により石上のボルテージが上がっていく。御行は御行で、四宮に長電話させたことをアイコンタクトで謝り、四宮は同罪だと返す。罪は半分ずつ背負うようだ。

「この部屋は幸せオーラが充満してますね〜」

「そうみたいですな」

「柏木さん、藤原さんの感性がわかるの?」

「今のは共感できただけですよ」

「みなさん、さくらんぼの茎を口の中で結べますか?」

光上と圭の世界を鑑賞し続けてもいいのだが、それよりも遊び心が勝った。せつかく茎ありのさくらんぼがあるのだ。今日はこれで楽しもうという判断である。

「それができたらキスが上手いって話か」

「僕は口の中に入れたものを見せ合うのって行儀悪いと思いますけどね」

「石上くんは見るからに下手そうだもんね〜」

「やってやらアこのイモ女ア! 僕が結べたらそのサクランボーイって言葉を撤回してもらいますからね!」

「いいでしょう。その時にはサクランボーイって言ったことを謝罪しましょう」

「出てきてないけどな。そんな言葉」

石上が焚き付けられたことにより、今日の遊びが確定した。口の中

で茎を結ぶことができるのか。これはキスの上手さを問われているのとはほぼ同義であり、男石上にとつては流せない問題なのである。

この話に消極的なのは御行だ。そもそもその話に信憑性がないという点と、食べ物で遊ぶのはどうなのだという点が引つかかるらしい。茎が食べ物かは別として、食べ物がくつついていた部分だからグレーゾーンなのである。

「そもそもそこに相関性などあるのか？」

「あ、結べました」

(あるっぽい……!?)

大人の女性こと柏木が茎を結べたことにより、キスの上手さとの相関性がありそうだと思わされる。それに続くように他の面々も挑戦。柏木より短時間で成功したのが四宮。しかしはしたない乙女とは思われたくないため、結べたことだけを石上に確認させ、藤原に聞かれた時には解いていた。とんだテクニシャンである。さすがは初チューでディープをかました自称乙女。

「あれ？ みんな何やってんの？」

「今気づいたのか」

「茎を口の中で結べるか挑戦中なんです。これが難しくて……」

「へへ。白銀さんはやったことある？」

「萌葉が挑戦してるのを見たことはありません」

嘘である。以前に白銀圭も一緒に挑戦していた。昼休みに昼食を取った後に挑戦し、残り時間内に達成していた。流れるように嘘をついたのは、行儀の悪い人間だと思われたくないからだ。

「せっかくでふし、晶くんと圭ちゃんもやりまひよ」

「挑戦しながら喋るな」

「千花姉え結構苦戦してない？」

「前にやった時はできたの！ 今日舌のグリップ力が足りないの！」

「グリップ力なんて使わないでしょ」

「そうなの？」

「っ……、萌葉はそんなこと言ってなかったの」

しらを切る圭を光上は追及しなかった。誰にも踏み込んでほしくない話はある。藤原にデリカシーがないと指摘された光上は、より警戒心を高めるようになっていた。

「伊井野さん。柏木さんに教わって見たらどうですか？」

「そうですね」

「うーん、光上さんたちが一度挑戦してからにしますか」

「やらないと駄目なんだ」

「みたいですね」

あまり乗り気ではないが、やる流れとなつて光上と圭も茎を口の中に入れる。無駄に皆の注目が集まっているが、それを気にせずに挑戦。

「できた」

「早っ!？」

「光上くんはサクランボーイじゃなかったみたいですね!」

「何その超不名誉な称号」

30秒ほどで光上は成功し、その事に石上と御行が焦る。この2人、澄ました顔をしているが絶讃挑戦中なのである。光上もできなければ、女子が器用なだけだという言い訳ができるのに、1分も経たずに成功されたせいで退路が1つ消えた。

「私もできました」

光上から遅れること40秒ほどで、圭も結ぶことに成功。妹が成功したことで、御行の焦りは密かに増していく。前に結んだことがあるという事情を知っていれば、彼女が早く結べたことにも納得なのが。

「できてからしばらく待ってなかった?」

「そんなこと無いよ千花姉え」

「え、でもモゴモゴしてなかったよね?」

「そんな大胆に動かさなくても結べるよ?　ですよね柏木先輩」

「そうですね」

恥じらう圭を可愛らしく思いながら、柏木はくすくすと笑って肯定する。それはそれでテクニシャンだということは、圭のためにも言わ

ないでおいた。

2人の挑戦が終わったことにより始まる柏木講座。口での説明だけでなく、指を歯に当てたりと分かりやすさを重視した丁寧な説明。しかし仕草や口調のせいで茎の結び方の話なのか、それともキスの話なのか判断が難しくなっていた。

「あいたっ！ 自分の舌嚙んじやいました……」

「大丈夫ですか？」

「はい。でも、その勢いで茎を噛み切っちゃいました」

「うわっちゃん」

「人間相手だと大事故だな」

「うるさいわね。キスって結局気持ちの問題でしょ。キスの上手い下手なんて気にする人いるんですか！」

逆ギレする伊井野に、石上はやれやれと首を横に振る。その内心では焦りが消えていない。同性の光上が成功し、年下の圭も成功した。男としてのプライドが成功以外を認めないのである。

「あっ！ できましたー！」

ここでライバル藤原の達成。

「石上くんまだできないんですか〜！ 仕方ないですよ〜！ 石上

くんはチェリーボーイですもんね〜！」

「そこはサクランボーイってマイルドな言い回しにしとけよ」

「光上さん。チェリーボーイってなんですか？」

「俺の口からはなんとも。今度藤原ちゃんに教えてもらおうといいよ」

さすがに異性の口からその説明は躊躇われた。萌葉ならたぶん知ってるだろうと適当に押し付け、この場で圭にそういった知識を覚えさせるのは止めておく。圭はまた子供扱いされたのかと不服そうにするが、柏木のフォロワーも入って鎮まってもらおう。

「下らん。キスはテクニクよりも、相手の気持ちを汲んでできるかどうかだろう。気にするなら、その相手ができから上手くなればいい」

「会長……。経験者のように言いますね……」

「兄さん。よくそんな事を上から言えるわね」

「えっ、いや……。はははははっ。ごめんなさい」

「？ お二人の間で何かあったんですか？」

「別に何もありませんよ」

何かあったんだなと全員が察する。光上は当事者の一人でもあるため、冷や汗をかきながら見守り、他の面々は踏み込んではいけないと察してその話題には食いつかないように気をつけた。

「会長の言うとおりですよ。テクニクなんて二の次。肝心なのは、来てほしい時に来てくれるか。かけ引きによるじらしなんてのもいいですね」

「要は気持ちの問題です！ キスをしてほしい時はサインを出して！ 相手はそれを見逃さないようにすることです！ こねくり回すだけがキスの極意ではないんです！」

四宮の暴走を柏木がフォローし、経験者らしく語ることで未経験組を黙らせる。その話を光上は忘れないように記憶に刻み込み、圭はチラッと光上へと視線を上げた。

「ん？ どうかした？」

「あ、いえ……」

視線に気づいた光上と目が合う。すぐさま圭は視線をずらし、光上の口元へ。今聞いた柏木の話と、茎を30秒ほどで結んでみせた実績。彼ならきつとサインを見逃さないという信頼。

もし、サインを出したとして、深いキスをする事になったら。それは中学生の圭には刺激が強く、想像するだけで頭が蕩けてしまう。

熱い血潮。高まる鼓動。圭は彼の口元から目を離せぬまま、ばたりと気を失った。

「白銀さん!？」

「圭ちゃん!？」

意識を失った圭の体を光上が支えながら呼びかける。返事はなく、しんどそうにぐったりとしているだけ。動揺している光上や御行に変わって、普段から冷静な柏木が指示を出した。

「救急車を！」

「今呼んでます」

「保険医も！」

「ミコちゃんが行きました」

「……慣れてませんか？」

「3人目なので」

「生徒会室って呪われてるんですかね？」

「ええ……」

特に出番らしい出番もなく、達観した様子の上石と藤原に困惑。到着した救急車には、光上と御行も同乗した。

「白銀圭さん。診断結果を言いますね」

「はい……」

「恋の病です」

「はい？」

「いやもう3人目。今年度の流行りかな？」

「え……死にたい……」

「若い身空で死なないですよ。というか医者の前でそんな事言わないで」

恋の病ならこのお医者。世界でも有数の名医である田沼先生本日も出勤です。

四宮かぐやから始まり、こんな事ってあるのかと名医も驚いていたのに。2人目は白銀御行。そして3人目はその妹の白銀圭。「近年の恋の変化」とかで論文出せるかなとか思わなくはない。もつと症例がないと出せないが。

「だって！ 恋してることに自覚はあるんですよ!？」

「あるんだ。これまでの患者さんよりしつかりしてるね」

「私以外にこんな恥ずかしいことになってる人もいますね」「身近にね」

「私……ドキドキするのは別に初めてじゃないのに……」

「それならもつとその人を好きになったってことじゃないかな?」「もつと……」



そうなのかなと考え、そうなのだろうとすんなり納得した。今までは恋してただけだ。ほとんど一方的に、好きだから側にいようと必死になっていただけ。それが今は、しっかりと好意を向けられていることを実感できている。その事に胸が踊っているのは間違いない。けれど、その変化だけでこんな事になるのだろうか。

「何か不安なことがあるんじゃないかしら？」

悩んでいると、看護師にそう聞かれた。田沼先生は「また割り込まれた」って顔をしているが、女性陣は完全に田沼先生を無視。シリアスガールズトークが始まろうとしていた。

圭は話そうか悩み、葛藤した末に切り出した。また会うことがあるかわからない人だ。他にも多くの患者も見ている。いずれ忘れるだろうし、言いふらされる心配もない。病院という立場上、プライベートな話は相当厳しく管理されるはずだから。

「私は……あの人が凄い好き。誰よりも好きだって言い切れるほどに好きなんです」

誰にも負けない自信がある。たとえそれが、彼の親であろうとも。「最近、あの人からの好意もいっぱい感じられるようになって。それがすごく嬉しくて、幸せだなんて思えるんです。……でも……」

「でも？」

「好きって気持ちが強くなるほど。あの人からの好意を受け取るほどに……怖くなるんです」

「怖くなるの？」

「はい……。昔……母さんが私を連れて家を出た時……。『恋愛感情は永遠じゃない』って言ってたんです。それがずっと心に刺さってて、あの人との気持ちも……いつか母さんみたいに無くなるんじゃないかって怖くて……。だから、好きなのに！　いつか壊れそうだと思ってしまった！　怖くて！」

ベッドのシーツを掴む。シーツはぼろぼろと溢れる涙が染み込んでいき、その不安を受け止めていく。

「光上さんといいたけなのに……！　壊れてほしくない……。失いたくない……。ずっと一緒にいたい！」

心中を吐き出した圭を看護師はそつと撫でる。気持ちを落ち着かせるためではなく、彼女の中に溜まっているものを減らすために。

「きつと大丈夫よ」

「なんでそんな事言えるんですか……？ あの人のこと知らないのに！」

「少しだけなら知ってるわよ。昔この病院に来てたから」

「え……」

看護師は圭を撫で続けながら過去のことを話す。光上が一時期この病院に来ていた頃のこと。彼が初等部に入る前の頃だ。

「あの頃、すでにペルソナでも被ってたのね。淡々としていて、あまりにもできてた子だから、一種の精神病じゃないかって疑われてたのよ。両親と離れたのもその頃なのに、彼は一度も泣いたことがない。仕事だと理解して見送ったそうよ」

光上が日本に残ったのは、その時に彼が珍しく言った我儘によるものだ。日本に残りたいと言い、親も承諾して離れ離れになった。まだ幼い肉親と別れているあたり、彼の親もまた普通ではないのだが。

「何はともあれ、彼は感情の揺らぎがあまりにも小さい。恋愛感情とか消し飛んでそうだと個人的には思ってた。でも、今日それは間違いだと気づいたわ」

「……どういことですか？」

「あなたが気を失って、酷く取り乱してたのよ。混乱して、涙目になって。彼がそこまで思うのは、それだけあなたのことが大切だからじゃないかしら？」

「そう、でも……」

「恋愛感情は永遠じゃない。それはそうかもしれない」

そこを認めたことに圭は目を見開き、黙って見ていた田沼も焦る。トラウマを肯定するとか正気とは思えない。だが、もちろん看護師にも考えがあつてのこと。

「でもね、恋愛感情は昇華して変わるものよ」

「何に変わるって言うんですか」

「愛情よ。愛を育んで、いずれ結婚すればそれは家族愛になる。最も

美しいものになるのよ」

「そんなの……わかってます……」

頭では理解できる。理解できるが、心が追いつかない。その混濁が圭を苦しめているものだ。

「それは一人で解決するものじゃないでしょ?」

「っ!」

「家族は、1人だけでなれるものじゃないの。あなたが助けを求めなきゃいけない、1人だけよね」

これ以上話してもキャパシティを超える。今でも圭のぎりぎりのラインだ。父親が来たら帰っていいということを田沼が伝え、看護師と共に退室。

「うわっ。君たち聞いてたの? 聴診器って安売りしてんの?」

「フリマアプリで」

「そっか〜」

田沼たちは他の患者の所へと向かい、聴診器で聞いていた光上と御行は廊下の長椅子に腰掛ける。

「……母親の話は?」

「本当の事だ。……圭ちゃんは連れて行かれたつてのと、あの頃はまだ幼いのもあって、奥底にそれが眠ってたんだろう。気づけないとは兄失格だな」

「そうはならんだろ。ひとりっ子の俺にはピンとこないが、いい兄だとは思うぞ」

「ははっ、ありがとう。それで……どうするんだ?」

「やることは変わらない。あの子が今心から笑えないのなら、心から笑えるようにするだけだ。……難しい問題もあるんだがな」

決意がいまいち固まりきらない。ここまで相手のことがわかって渋るのは、なんとも光上らしくない。御行はそう感じ、何が気になっているのか聞くことにした。

「……そうだな。白銀には先に話しておく」

どこまで話すか。一瞬悩み、判断しかねているものも含めて素直に打ち明けようと考えた。御行の協力は必要になるだろうから。

「四宮家とのこともあるが。お前がスタンフォードに行くように、俺は春にはフランスに行く」

## 第43話

秀知院学園の修学旅行はその寄付金の額から海外に行くことが通年となっていた。どこに行くかも生徒会の提案が通りやすく、ここぞとばかりにすり寄ってきて要望を出していく生徒も多い。そこで、閃いちやった藤原千花の提案を飲み、投票制が採用された。どこを選ぶかも自由。選択肢の数は都市の数。実に膨大である。

その結果として、ものの見事に票がばらけた。アジアや欧米諸国。南アメリカ大陸の諸国だったりと国外はきれいにバラけていき、競り勝ったのが国内で京都旅行。これは民主主義を利用した巧妙な手腕だと、石上は珍しく藤原を素直に賞賛していた。

「フランスに行きたかったあ〜！」

当の本人は京都よりもフランスがよかつたらしいが。光上からすれば、慣れた場所に行つてもという渋い顔をせざるを得ないが、現実には京都である。これには光上も一安心。

そして彼個人の戦いが勃発する。

「酔った……」

「新幹線で!」

光上晶の弱点の1つは、乗り物である。彼は乗り物酔いが激しい。耐えられるのは、慣れている家の車と光上家の飛行機のみ。船は乗つて2分で酔うし、電車も3駅と持たない。悲劇的なまでに現代文明の乗り物に弱い。そして新幹線もまた、揺れが少ないから耐えられるのかと思いきや、横浜を過ぎたあたりで酔いがきたようだ。酔い止めを飲んでいゝるのに。

「吐き気は?」

「今はまだ大丈夫……」

「座るより立っての方がマシなんじゃないか? 疲れるだろうけど」

「そうしとく」

座席から立ち上がり、多少ふらつきながらも車両後方へと歩いていく。その途中で、今朝から様子のおかしい四宮と早坂の席を通り過ぎ

るが、そこには反応しなかった。2人だけの問題には首を突っ込むわけにもいかないからだ。

乗降口の側へと移動し、壁に背を預けながら外の景色を見る。見なによりはマシだから。トンネルの中に入ると景色も何も無いが、しばらくはトンネルもない。晴れている今日なら、富士山も綺麗に見えるものだろう。そう思いながら、ほとんど思考を停止してぼんやりと遠くを眺めていると、スマホに着信が入る。画面を見ると表示されている相手の名前は圭だった。

「もしもし。どうしたの?」

『光上さん。今大丈夫ですか?』

「うん。新幹線で移動中だからね。白銀さんの方こそ、大丈夫なの?」

『はい。休み時間なので、あまり時間はないですが』

「そうなんだ。それで、何か用かな?」

『お電話することが用事……じゃあ駄目ですか?』

「……。ううん。そんなことはないよ」

その愛らしい口実に頬が緩む。正直に言えば、彼女から電話してくれたことがとてつもなく嬉しい。修学旅行の日程は短く、夏休みや冬休みの方が会えない期間が長い。それでも、今となってはその短な期間でも会えないことを寂しく思っていた。だから、夜にでも少し電話をするつもりでいた。

それがどうだ。彼女の方が先に行動してきたではないか。また受け手側に回ってしまった事に申し訳無さを感じつつ、時間の許す限り話そうと決める。

「夜に電話しようと思ったから。ちよつとびっくりしただけ」

『それは……少し勿体無いことをしてしまいました』

「夜にも電話していいかな?」

『もちろんです! 8時以降でなら、光上さんの都合のいいお時間に出られますよ』

「そう? 食事の後に入浴って流れだったから、9時前後にはできると思う」

『楽しみに待ってます』

圭もまた、電話をしながら目を細める。彼とこうして繋がっていられることが嬉しい。無線電話という文明の利器がなければと思うと、気が気ではなかっただろう。上の空になっていたんじゃないかと自分でも思っていた。

こうしていないと安心できない。そんな理由もあって、自分に嫌気も差してしまいそうでもあった。

「白銀さん？」

『あ、はい。なんですか？』

「回った場所は写真で送るね」

『いいんですか？　ありがとうございます』

回った場所の話も、写真を見ながらならもっと楽しめるだろう。視覚的にも共有できるのはありがたい。できたら、他の女子と一緒にいるような写真は送ってほしくないのだが、男女別での班行動ならその心配もいらぬはず。予測不能の藤原千花がいるとしても、クラスが別なら大丈夫。クラスの壁を超えたとしても、光上より四宮の方に接近するはず。

そうやって懸念材料を1個ずつ消していく。可能性を消していかないと、安心できない。自分はこんなに独占欲が強かったのかと首を傾げる。それも、母親のあの言葉に起因するのだろうか。

『光上さん大丈夫ですか？』

「え、なにが？」

『いえ、お声が少し疲れてるようだったので』

「……はは、白銀さんは凄いな。実はちよつと乗り物酔いしててね。乗り物にはめっっぽう弱くて。新幹線でも酔うみたい」

『それは……お疲れ様です』

気を遣うことはできても、何をしてあげられるわけでもない。圭は光上に労いの言葉をかけることしかできない。

「白銀さんと話していると、楽になってきてるんだけどね」

『そんなことあります？』

「あるよ。白銀さんの声を聞いていると、すごい落ち着けるから」

『少しでもお役に立ててるなら嬉しいです。でも、そろそろ休み時間

も終わってしまうので……』

「うん。それじゃあまた後で。電話してきてくれてありがとう」

『どういたしまして。お体には気をつけながら、良い旅をしてください』

通話を切るのがもどかしい。もう少し話をしていたい。そんな欲求は、圭の邪魔にしかならない。圭は授業があるのだ。遅刻させるわけにもいかず、切るねと一言言ってから通話を切った。

「恋の匂いはここですか！　って、なんだ晶くんか」

「なんだって失礼だな」

うきうきしながら飛び出してきた藤原だったが、匂いの元が光上だとわかって落胆。分かりやすいまでに肩をがっくりと落とした。

「相手は圭ちゃんですよ？　それなら間に合ってます」

「そう言われるとすげえ複雑なんだけど……」

「いいじゃないですか。関係が良好そうで私は一安心ですよ」

「その節は本当にお世話になりました」

「えっへん！　ところで顔色が少し悪いようですけど」

「今さらそこか」

彼女の自由奔放さはいつものこと。真面目にそれに合わせようとしても身が持たないと知っている光上は、話半分程度に付き合うという手法を身に着けている。対藤原においてほぼ必須だ。

「ただの乗り物酔いだよ」

「あく。乗り物に弱かったですもんね。……新幹線でも酔うんですか？」

「みたいだね。今は少し楽だけど」

「愛の力は侮れませんね」

にやにやと楽しげに見られても、光上としては面白いことでもない。視線を藤原から窓の外へと移すと、あやすように頭を撫でられた。身長差があるため背伸び。しかも爪先立ちで。

「なにしてんの？」

「へそを曲げられたのであやしてます」

「そういうのは自分の子供ができた時にでもしてあげたら？」



「そうですね！ では会長にしてきます！」

「あいつは同い年だろ!？」

「私の子ですよ！ 私が育てたんです！」

「なに言ってるの!？」

「晶くんは知らないだけで——きやつ！」

バランスを崩した藤原が後ろへと転ける。彼女が頭を打たないようにすぐさま手を藤原の頭の後ろに回すも、転けたために自ずと姿勢は低くなり、光上も膝を付く。咄嗟のことで今度は光上が藤原をぶつかりそうになり、それを防ぐために反対の手は壁へ。実質壁ドン状況。

「——から、私の方から」

「かぐや様少し待っててください」

「なに？ どうかしたの？ ねえなんで私の視界を塞ぐの？」

「教育によろしくないものがありますので」

「どういうこと!？」

それを目撃する早坂。四宮の視界を片腕で塞ぎ、冷ややかな視線を藤原と光上に向ける。客観的に今の2人の状況を見れば、態勢を崩している藤原の頭の後ろへと手を回し、逃れられないようにしながら光上が壁ドン。強引に迫っていると言われても言い逃れはできない。

光上は冷や汗を流し、藤原は気まずそうに視線を泳がせる。早坂は空いている手で親指を立て、自分の首の前を横に一線し、親指を下に向けた。有罪判決である。

今すぐに弁明したい気持ちに駆られるが、四宮の視界は塞がれている。余計なことをすればバレてしまうため、藤原と光上は速やかに無言で立ち上がり、藤原が先に客席へ。光上は何事もなかったかのように視線を窓の外へ。

「もう大丈夫そうですね」

「本当に何なのよ……。あら、光上くんはここにいたのね」

「立ってるほうが楽だし、外を眺められるから」

「そう。今しがた早坂が言ってた何かがあったと思うのだけど。光上くんは見えてないかしら？」

「見てないな。俺の死角で何かあったのかな」

嘘は言っていない。自分の姿なんて見えないのだから、早坂が見たものは光上には見えていない。それに誤解を招く構図を見られただけであって、決してやましいことをしていたわけじゃない。光上はなんとかその場をやり過ぐすことに成功するのだった。

秀知院学園高等部の修学旅行のプログラムは、自由度が高く設定されている。宿はセキユリテイ重視の三星ホテルを用意し、京都駅からもそう遠くない。荷物をホテルに預けた後は、夕食の時間まで班毎の自由行動。どこまで行こうと時間内に帰ってこられればよし。安全対策はどのようなのだと言われるプログラムだが、秀知院学園の生徒に手を出して無事でいられるわけもなく、意外と安全だったりするのだ。

クラスの男子との自由行動。ここからが光上にとつての地獄の間。移動はタクシーか電車。どちらにしても酔うのである。そこを考慮されているのか、極力徒歩で回れる箇所をプランニングされており、それへの罪悪感が追い打ちをかける。

「光上生きてつかく？」

「わりとキツイ……。ホテル戻って休んでいいか？」

「無理させるのもなんだしな。タクシー呼んで——」

「歩いて帰る。死にたくない」

「そこまで限界だったか」

「明日に備えてゆっくり休んでろ」

そんなこんなで光上はリタイア。自由行動でリタイアなど稀有な例であり、ある種の伝説として秀知院学園で語り継がれることになったとか。それは数年先の話だが。

外の空気を吸いながらホテルへと向かい、途中で抹茶を堪能したり、見知らぬお婆さんの話し相手になったり。余分に時間がかかったものの、誰よりも早くホテルに到着。教師に体調が悪いことを話し、許可を貰って部屋のシャワーを浴びる。気持ちもさっぱりしたらジャージに着替えてベッドにダイブ。すぐさま寝息を立てた。

それから幾ばくかの時間が経ち、目が覚めると部屋の中に他の人の気配を感じる。クラスメイトが戻ってきたのかと思いきや違った。

「なんで部屋にいるの？ 早坂」

「心配して様子を見に来たのですが、いらぬ世話だったようですね」「言い方が悪かったな。ごめん、来てくれたのは嬉しいんだけどさ。本当は駄目なことじゃん？」

男子が女子の部屋に行く。あるいはその逆。どちらも風紀委員から厳しく言われていることだった。それでもちやつかり行くような田沼の男はいるのだが、なにせよあまり褒められたことでもない。「私が来た理由は変わりませんよ。今ハーブティーも出来上がりますから、一杯いかがですか？」

「貰うけども。四宮さんはいいの？ なんか朝からべつたりだったじゃん」

「ここに来ると伝えたら離れてくれましたよ。夕食も近いですし、活用できる空き時間も少ないですから」

「もうすぐその時間なわけか。え、じゃあルームメイトは何処へ？」

「気を遣ってくれたようですね。誤解はされてそうですが」

「後で解いとくか」

ベッドから起き上がり、部屋にある椅子に移動。淹れたハーブティーを光上に差し出したら、丸テーブルを挟んで反対側に早坂も座る。

寝起きで飲み物も欲しかったため、光上は早速それを飲んだ。半分ほど飲み、一旦カップをテーブルの上へ。

「相変わらず早坂が淹れる飲み物は美味しいね。四宮さんが羨ましいよ」

「味の良さが分かってくれる人は好きですよ」

「四宮さんって味音痴なの？」

「味音痴ではないですが、舌が肥えてしまっているのです」

「あらら。それはやり甲斐が物足りないね」

「本当に」

早坂と2人で話すのは冬休み前以来だったか。回らない頭でぼん

やりとそんな事を考える。圭との関係修復に、早坂も一枚噛んでいることは察している。その事のお礼をまだしていなかった。

「早坂。ありがとう」

「なんですか急に」

「早坂には結構助けられてるからさ。白銀さんのことも」

「……そんなことはないですよ」

「立場もあるだろうに。本当は俺も何かできたらいいんだけどさ」

「……いえ。……圭とはどうですか？」

「ん？ あー、夜に俺から電話することになってるよ」

「そうですか……。では、後で圭に謝らないといけませんね」

「なんで？ つ、ツ……！」

ぐらりと視界が揺らぐ。頭が突然鈍くなったような感覚に陥る。

突然？ —— そんなことはない。さっきからそうだった。

光上は寝起きが良い方だ。起きた直後から頭が冴えている状態。それがいつもの状態。それなのに、今日はそうなっていない。さっきから頭が回らないでいた。

「はやさか……なにをした……？」

「効果が出てきたようですね。安心してください。しばらく眠っていただくだけです」

「なん、で……」

「私のプランが崩れてしまいますから」

崩れ落ちそうになる体を、肘掛けに手を置くことでなんとか支える。霞んでは晴れる視界から、意地でも早坂が外れないように耐える。視界に映る彼女の表情は上手く見えない。

早坂は椅子から立ち上がり、光上の側に寄ると彼の頬を両手で挟み、そつと上を向かせる。落ちそうになる瞼を必死に耐え、その奥にある瞳は尚も力強く彼女を射抜く。その目がもう少し弱ければ……いや、なんにせよ彼女はこうしただろう。巻き込まれてほしくないから。

「何でも言うことを聞くって約束。残ってましたね」

彼の体が強張る。嫌な予感でもしたのだろう。それは当たって

る。

「私の事は忘れて圭と幸せになつてください」

「はや、さか」

彼の瞳を、顔立ちを、存在をその目に焼き付ける。目を閉じて、瞼の裏にはつきりと浮かぶことを確認したら、ゆつくりと顔を近づけた。

静かに柔らかく。慈しむように。愛おしみながら。

そっと口づけをする。

文化祭の時と同じように。

彼の頬へと。

「さようなら光上さん」

離れていく早坂へと手を伸ばす。

「あなたのことが好きでした」

その手は空を切り視界が暗転した。

## 第44話

その日のことは今も鮮明に覚えている。

彼女と初めて話した日のことだ。

初等部に入学して最初の席替えの時に隣の席になった。中等部からは席をくつつけないようになったが、初等部だけは男女で席を並べて授業を受けていた。

「初めまして。光上晶です！」

「知ってます。自己紹介は入学式の日に皆さんやりましたし」

「うん。でも君に直接言うのは初めてだから」

「はあ。早坂愛です。短い間ですがよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

呆れたように自己紹介をされた。それが早坂愛と初めて交した会話。

席替えはちよつとした引越しのようなもので、いくら秀知院学園の生徒だと言っても6歳とか7歳の子供に変わりはない。初めてやることは新鮮で、皆が浮足立っていた。

皆というのは言い過ぎか。隣の席になった早坂はそんな様子もなかった。彼女の主人である四宮かぐやでさえ、少し浮かれていたのに。後に「氷のかぐや姫」と呼ばれるようになる少女も、この時はただただの少女だった。名家の娘というだけで、他の子と変わっていないように見えた。

「早坂さんって字がきれいなんだね」

「そうですか？」

「お手本ぐらいにきれいだよ」

「ありがとうございます。もつと女の子らしくかわいい字を書けたらいいんですけどね」

早坂は自分のノートに視線を落とす。お手本通りに綺麗に書かれた字。あまりにもそつくりに書かれており、たしかにそこに女の子らしさを感じることはできない。綺麗な字であっても、早坂の個性を

感じられない字だ。

「早坂さんなら書けるよ」

「なんでそう思うんですか？」

「早坂さんかわいいから」

「……。そういうのは、むやみに言うことじゃないですよ」

「そっか、ごめんね。でも本当にそう思ってるよ」

面食いではないと思いたいが、少なくとも早坂相手にそう思っていたのは本心だろう。馬鹿正直に話すのは子供らしく、良くも悪くもそこからの成長<sup>変化</sup>は乏しかったわけだ。

早坂はこの時はまだギャルモードではなかった。入学したてなのだから、素を出せていない生徒も多い。素直な子どもばかりだとしても、緊張して固くなっている生徒がいるのも当たり前。早坂は、普通を演じるために自分をその枠に入れたのだろう。まだ素を出せていない普通の子として。

初等部に入学するにあたって、両親とは離れ離れになった。両親はフランスへ行き、自分は使用人たちと日本に残っている。日本に残りたいと我儘を言った。それが最初の我儘で、その後10年ほどは我儘を言っていない。

両親とは1年の中で少ない日数しか共に過ごせないが、教育自体は変わらない。母から教わったことを胸に、人との距離感の調整をするようになっていた。それが上手くできていたかは別として、意識していた分失敗と言えるほどの失態は犯さなかった。藤原千花を除けば。

「早坂さんってふだんは休み時間どうしてるの？」

「クラスの子とお喋りしてる人が多いですね」

2時間目と3時間目の間にある20分休み。この時間は適当にぶらついたり、図書室に行くことがほとんどなのだが、その日はお隣さんになった早坂との交流を選んだ。

どちらも席に座ったまま、体の向きだけ変えて向かい合う。なんだかお見合いしてるみたいだねと担任に言われた気がする。早坂と口を揃えてそれを否定したのに、もう仲良しだねって返された。会話が

成立していないと思いつつ、仲良しになったのかと2人で顔を見合わせ、首を傾げた。

昼休みもそうやって時間を費やし、5時間目の授業が終わればその日の授業も終わり。1年生のうちから5時間目の授業があるのは、政府の方針変更のせいだろう。押し付け授業は身にならないのに。

「ねえねえ早坂さん。ちょっといい?」

「なんですか?」

早坂愛は四宮かぐやのお付きの侍従。それを隠すために登校する時の車は別々だが、下校する時はタイミングを見計らって2人で同じ車に乗っている。リスクを抑えるためにも、2人は放課後にそれなりに時間を持て余す。だから、放課後に早坂に声をかけても特に問題はなかった。

他の生徒が帰っていく中、俺は早坂に聞きたいことがあった。まだ初日だけど、近くで見ている気になったことだから。それは他の生徒に聞かれてもいい内容とは思えず、早坂に後をついてきてもらって人気がないへと場所へと移る。

「ここならいいかな」

「人に聞かれたらはずかしいことでも言うんですか?」

「あはは、言わないよ。聞きたいことがあるだけだから」

「聞きたいこと?」

「うん。早坂さんさ、なんで泣いてるの?」

「え……? 泣いてませんが?」

「今はね。でも、泣いた人の目をしてる。学校来る前に何かあった?」  
驚いたことで剥れかけた仮面を、早坂はなんともないようにすぐに直す。一瞬の出来事で、見間違いだったと思わせるぐらいに。

「何もありませんよ。泣いてませんし。光上さんのもうそうでは?」

「そうかなあ? 聞いても教えてくれないのは、四宮家だから?」

「っ!」

「ごめんね。親がりじちよーしてるから、少しは知ってるんだ」

「少し……ですか」

その少しがいつたいたいどこまでなのか。それは確認しておいた方が



いい案件だ。しかし、それを聞いてしまえば、隠し事の大きさがバレかねない。早坂はリスク回避の方を優先するから、探ろうとはしなかった。わずか7歳にして、その判断もできるように教育されている。

「隠したい事があるんだね。じゃあそれは聞かない方がいいかー」

この時既に、隠し事や嘘に気づけるようになっていた。その度合いは相手との相性によってまちまちだが、早坂とは相性がよかったようだ。彼女からすれば嬉しくないことではあるだろう。

早坂がこの時から背負っているもの。何かあることだけは分かり、しかし彼女が望まないのならと踏み込まずにそれを黙ることを約束する。あっさりと言ったことに、きよとんとされたのも覚えている。

「知られたくないことなんでしょ？」

「そうですね……でも、なんでですか？」

「さびしそうだから」

「え？」

「早坂さん。ずっとさびしそうだから。早坂さんとは友だちになりたくなって」

「……むりですよ」

呆れてため息をつきながら肩をすくめる。それは今も何度か目にする仕草で、きつと彼女の素が出ている時なんだろう。この時はそこまで知るはずもなく、彼女のその様子に少しムツとした。

「なんでむりなのさ」

「私は四宮家の人間で、あなたは光上家の人間だからです」

「かんけーある？」

「大あります。ありよりのあります」

「それたぶん使い方がう」

「……わすれてください」

「いいよ」

カモフラージュのための一般人への擬態。そのために早坂は一般人レベルのことを貪欲に収集し、取り入れようとしていた。この時はまだ認識のズレもあって、極々たまにこうして間違えることもあつ

た。

「四宮家とあなたのお家はあまりなかよくないです」

「そんな話も聞いたような……?」

「なかよくないので、私たちもなかよくはできないんです」

「そつか。じゃあそれを気にしなくてもよくなったらさ。友だちになろうよ」

「……なんでそんなに友だちになりたがるんですか」

「? 友だちになりたいと思っただからだよ」

答えになっていないようで、それでもこれ以外の答えなんて持ち合わせていない。早坂と友だちになりたいと思っただけ。そう思った相手は早坂が初めてで、初めての友達作りを成功させたかったんだろう。早坂にそれが伝わることもなく、何か裏でもあるのではと怪しく思われた。

「友だちになったとして、何をするんですか」

「え、いっしょに遊ぶ」

「……他には?」

「困った時に助ける。旅行とかも行けたらいいね」

「なんで旅行なんですか」

「友だちってそういうことしないの?」

「するのは高校生とか大学生とか、大きくなってからでは?」

「じゃあ大きくなったらやろう!」

仮という前提で話をしていたはずなのに、友だちになったという感覚で話していた。早坂はまた呆れていて、それでも少しおかしそうにくすりと笑ってもいた。

「やっぱりかわいい!」

「は?」

「早坂さん、今みたいに笑ってるほうがかわいいよ!」

「そんなに言わないでください! むやみに言うことじゃないって言いましたよね!」

「うん。だから、早坂さんにしか言っていないよ」

「なっ!?!」

さも当然のように、あつけらかんと言ったら早坂は面食らっていた。精神年齢が高いから、他の同級生とは違う感覚で受け取っていたのかもしれない。その事は本人にしかわからないし、覚えているかも怪しい。

「もうっ！ とにかく、私と光上さんは友だちになれません！」

「その壁がなくなったらなれるよね？」

「……なくなるとも思えませんが、そうなるんじゃないですかね」

相手をするのも疲れたのか。早坂は投げやりにそう言っていて、それでもそれが嬉しかった。なんとなく、直感的に友達になりたいと思った相手。叶うかも怪しいレベルではあるが、その人と友だちになれそうだったから。

「約束だよ。お家を気にしなくてもよくなったら、友だちになろうね」

「はあ。覚えていたらそうしますか」

そうなることはない。確信じたものが早坂にはあったんだろう。話が終わったら早坂と別れて帰宅し、その頃はまだ存命だった祖父に学校であつたことを話した。祖母は自由人で、定期的に送られてくるはがきで生存確認していた。送られてくるたびに違う国のはがきが来るのも、1つの楽しみではあつた。

「そんでね、その子と友だちになろうねって約束したんだー」

「それ約束になつとるか？ まあ儂には関係ないが、四宮家の人間か  
〜」

「なれないものなの？」

「難しいじやろうな。お前の父は四宮家を毛嫌いしとるから」

「うーん。でもあの子とは友だちになりたいし、放っておけない感じ  
したから」

「それはまたどうして」

「あの子泣いてたし、いつもさみしそうだから」  
「ほう」

祖父はそれを聞いてしばらく目を瞑り、寝かけたところを抓って起こした。話の途中で寝ないでほしくて、祖父は朗らかに笑いながら謝っていた。軽い調子で、でも怒るほどのことでもなく、何やら溜め

ていたことを聞いた。

「覚えておけ晶。女の涙は裏切るな。そして、女の嘘を許すのが男の役目じゃ」

「うそを？　なんで？」

「嘘には2種類ある。相手をハメる嘘か。相手を想う嘘か」

「でも女の人みんなが相手を想ううそをつくかはわかんないよ？」

「晶が友達になりたい子は？　お前の目にはどう映る？　優しい子か？　それとも酷い子か？」

「早坂さんはやさしい人だと思うなー。……そっか、そういうことか」「わかればよし！」

祖父は親代わりのように接してくれた。どちらかと言えば、年の離れた友人のような距離感ではあったものの、時折教え込んでくれることもあった。忘れてしまったこともいくつかあるけれど、この時に教わったことは覚えている。これは特に覚えよう意識していたから。

それもあつたからかな。ハーサカとして振る舞う早坂と出会った時も、何も詮索せずにハーサカとしてこちらも接した。何年も同じクラスだったのに、初めましてと挨拶を交わして。

その日は四宮家主催のパーティーだった。学園の理事という立場で光上家も招待された。中立という名の敵。敵だらけの会場だったものの、両親は嬉々として参加。その場に同行させられて、ハーサカに会ったんだ。俺は大人たちの事情には絡む必要もなく、かぐやは来場者たちの挨拶に付き合わされていた。実質同年代が俺とハーサカの2人だけ。

「メイドって大変じゃない？」

「そうでもないですよ」

「今は他に誰も聞いてないし、気楽に行こうよ。別に言いふらさないし」

「うーん、それじゃあお言葉に甘えちゃおうかな。えっと、メイドの仕事はね、結構大変だよ。埃の一つでもあつたら即クビになるし。会場のセッティングとかも細かくて細かくて」

「体裁は格の表れってね」

自己顕示欲……はないだろうけども、プライドを示してはいるんだろう。その辺りがわりとフリーな光上家とは明らかに毛色が違う。

「お付きのメイドしてるんだけど、主人は淡々としてるし、風邪引いたら部屋を散らかすし、そのくせしてその事を覚えてないし」

「本当に大変だね。じゃあ今夜はそれを忘れたら？」

「そんなの無理だよ。パーティー中も、終わった後も仕事あるし」

「パーティー中は、忙しくはないでしょ？ こっちこっち」

ハーサカの手を引き、会場の外に移動。他の使用人も会場の中にいるから、廊下は誰もいない。警備員は建物の周りを囲っているだけ。会場の音は軽くだが漏れ聞こえていて、それを確認して領くとハーサカに頬を突かれた。

「説明してよもう。怒られるの私なのに」

「怒られないようには手を打つというか、怒られるのは俺だから安心して」

「どこに安心する要素あるのそれ！」

「ははは。それより、今はただのハーサカさんだよ」

「何する気なの？」

「今夜を楽しむだけ」

彼女と向き直り、手を差し伸べる。

「君の知らない世界を見せてあげる」

まるでナンパのような言い方だった。他に言い方はなかったのかと後から思ったりもした。それでも、その時彼女は目を丸くし、自然と笑みをこぼしながら手を重ねてくれた。

「いいよ。私をそこに連れて行ってみて」

会場から聞こえてくる微かな音楽をBGMに、彼女の柔らかな手を取りながら出かける。彼女は勝手知ったる建物内。けれど、だからこそ部外者視点での発見もあるんだ。そうやって、彼女に違った視点の世界を見せることにした。

そしてその時に疑問が生まれた。

目を覚ます。ホテルじゃない場所に移されたのはすぐに理解した。ここと似た雰囲気は知っている。白を基調とした内装。近くの病院にでも移されたんだろう。元々体は弱いから、疑われる心配もないわけだ。

点滴はされていて、残りの量を見てもあと3分の1はある。なんで点滴されてるのは知らないが、ひとまず現時刻を確認することが優先だ。

【13時】

まだ昼かと思いかけて、時間が遡ったのかと錯覚。そんなわけがないとすぐに否定して急いで日付を確認。しつかりと日付は変わっていた。相当に強力な薬で眠らされていたらしい。

「やってくれたな本当に」

ひよつとしたら、この点滴自体にも細工されているのかもしれない。だとしたら、今起きただけでもありがたい。

点滴の針を抜き、部屋の中を搜索。幸いにも靴と服があった。手早く着替えを済ませ、病院から抜け出そうとしたところで病室のドアが開かれた。

「あの娘にまんまと嵌められた男の寝顔でも見ようかと思ったが、存外詰めが甘いようだな」

「……2人で会うのは初めてだが」

その顔を見た瞬間に感情が冷めていく。年上だろうと関係ない。冷えきった視線をぶつけ、蔑む目を睨み返す。今はとことん気分が悪いのだ。

「お前に構ってる暇はねえんだよ。黄光<sup>元凶</sup>」

## 第45話

彼との出会いは覚えている。

初めての席替えをして、その時に改めて自己紹介をした人物こそ光上晶だ。

「よろしくねー!」

眩しいばかりの瞳をしていた。普通の生徒のように曇りなき目をしていて、それが私にだけ向けられていた。2人で話していたのだからそれは当たり前のことなのだけど、その輝いた目はとてもじゃないけれど直視しにくかった。

それと同時に、呆れるほどに脳天気な目をしているとも思った。そう思ったのは、彼も特殊な立ち位置にいるはずなのに、苦悩もなさそうに過ごしていたことへの嫉妬かもしれない。そんな調子で、将来の光上家を背負える人とも思えず、家の力は今代だけのものだろうとも思った。

「なんで泣いてるの?」

そう聞かれた時、酷く動揺した気がする。態度にこそ出さなかったはずだけど、一瞬崩れかけただろうし、彼はそれを見逃さなかったのだろう。毎朝鏡で確認していたし、他の誰にも気づかれなかったのに、彼にだけは気づかれた。

彼が特別な人間なのか、それとも彼にとって私が特別なのか。後者は高望みが過ぎること、その頃は彼を異質と感じていたはず。ずっとクラスが一緒だったのも、彼を目の届く位置に置いておくためだ。その頃から少しだけ警戒はしていた。ただ、近づいては暴かれ過ぎる気がして、距離を取っていたのも事実。それが変わったのが今年度というだけ。

四宮家の別邸へと帰り、その日はママがいたから私は仕事を終えてからママのいる部屋に行った。一緒に寝たいという思いと、ママと話したいという思い。純粹に、ママの隣にいる時間を増やしたかったから。

「今日はご機嫌ね」

「ママがいるから!」

「嬉しいわね。でも、それ以外にもあるんじゃないかしら? 学校で面白いことあった?」

「ママの言うおもしろいことはなかったけど、ヘンな子はいたよ」

「あらナンパ。やるじゃない」

「ナンパなのかな?」

ナンパではない。たぶん。

光上家のひとり息子と席が隣りになったこと。彼に言われたことを正直に話す。泣いたことだけは伏せた。これはママも知らないことだから。

「友だちになってほしいって言われたの」

「光上家のお坊っちゃんから? あらあら」

「お家のこともあるから、それはむりってことわったんだけど、お家が関係なくなったら友だちになれるねって言われて」

「間違つてはいないけれど、難しい話ね」

「だよね」

関係が良好になれば可能かもしれないが、現状では実現が難しい。関係が良好になることもまた現実味が無いこと。友達になることができるのであれば、光上家が飲み込まれるくらいしか考えられない。

「でも、その子と友達になれば素敵ね」

「どこが?」

「だって、そういうことを気にせずにつけてくれる子なのでしょ?

あなたにとつて、大切な人になるかもしれないじゃない」

「ママゆめ見すぎ。すぐにかわいいって言うような人だよ」

「愛以外に言つてた?」

「……それは聞いてないけど、どうせ言つてる」

そう言うママに引き寄せられて、クシヤと髪を撫でられた。わざと髪を崩されて、それをママ自身が直してくれる。その過程がよくわからなかったけど、ママに撫でられるのは好き。だからそれを大人しく受けてた。



「ヤキモチ?」

「ちがう!」

「でもかわいって言うてもらえたことは嬉しかったでしょ」

「うっ、それは……うれしかったけど……」

「自分を見てくれる人とは、良好な関係でいたいものね」

無理だろうと思いつつ、心のどこかではそうなれたらいいなと思っ  
てた。

彼の中で転機が訪れたのは、少なくとも私がそう感じたのは、彼が敬愛する祖父が亡くなった時だ。初等部の2年生の9月17日。その日に葬儀が行われて、私はママに連れられてそこに参列した。

現当主は別として、彼の祖父は周囲から敬意を表される程の名君と言われていた。四大財閥それぞれから本家の人間が参列し、この時ばかりは牽制のしあいも何もなかった。さすがに当主たちは用心して来なかったけれど、血筋の人たちは来ていた。四宮家からは長男の黄光様が。世話になったことがあるらしく、普通に悔やんでた。そんな感情あるんだと驚いたからよく覚えている。

その葬儀、正確には彼の祖父が亡くなった日が彼の大きなターニングポイント。葬儀の時の彼は、泣いていたわけでもなく、現実を受け止められずに呆けていたわけでもない。祖父の死を受け止め、話しかけてくる大人たちに対応していた。一分の隙もなく、学校で見る彼と違うと感じた。

「悲しくないの?」

「悲しいよ。でも、泣いてたら生き返るわけでもないし」

当時7歳の少年から出る言葉ではなかった。一般人と大差ないと感じていた彼からこの言葉が出てきて、私はゾツと背筋が寒くなった。

今の彼の基盤はこの時から浮上してきていた。元々は二面性だった。私と話していた彼と、ペルソナを被った彼。前者は祖父の影響によって保たれ、後者は親の教育によって育まれた。その前者が消えたことで、彼はもう後者しか残らなかった。そちらが素と思うぐらい

に、割合が増したんだろう。

けどこれは、今だからわかること。その時にはわからなかった。私の知る彼は消えたのだと思った。

でも、その認識はすぐに怪しいものとなった。

同じクラスなのだから、彼と話すことは当然偶にはある。

「？ 早坂さんどうかした？」

「……ううん。なんでもない」

「そっか。何かあったら言ってみてね」

「うん」

私と話す時だけ雰囲気が変わる。誰だって相手によって接し方は多少なりとも変わるものではある。それはいろんな生徒を観察していてわかったことだし、私自身役を変えてコロコロと話し方も変えている。

だけれど、彼は他の生徒たちと接する時の距離感があまり変わらないう。誰に対しても同じ。聞こえこそいいけれど、それは人間味が薄れるもの。違いに気づけたのは、目をよく見ていたからだと思う。誰もが気づかないことだったけれど、私はそこに気づけた。

彼の目は、私と話す時だけ出会った頃と遜色ない色をしていた。

それはきつと、友達になりたいという気持ちが残っていたからなのだろうか。

「光上にとって、早坂は楔だったんだろう」

「楔？」

「光上の祖父が亡くなってもその時の自我が消えなかったのは、その時の素の光上が早坂と友達になろうと思っただからだろうな。俺としては感謝したいところでもあるよ。それがなかったら、光上の人間性は消えていただろうから、友人になることもできなかつただろうし」

「私が……楔……」

そうなのだろうかと早坂は悩んだ。彼を裏切っているのに、そんな役割をしていたとは思えない。けれど、御行の言う通りそれだと納得

できる箇所もあるわけで、それが残っていたから、光上は恋もするわけなんだ。そこを圭が広げていった。凶らずも早坂は、狙い通りの当て馬をしてしまっていたわけか。

しかしそこを感傷する資格などない。自分で繋がりを断ち切って行動しているのだから。御行を巻き込んでしまっているが、他に頼れる人がいないのである。

「光上を頼ってほしかったがな……」

「それは無理だよ。彼を頼ったら、四宮家と光上家の戦争の引き金になる。ただでさえ今情勢は悪化してるんだから」

「冷戦は睨み合いだから冷戦と呼ばれるんじゃないか？」

「戦争はたぶん起きるよ。すぐなのか、何年後かはわからないけれど、四条家が準備してる。光上家がただ静観してるとも思えない」

「これだからデカイお家というやつは！」

情報戦は始まっており、光上家はカモフラージュに成功していた。四宮家と四条家の仲裁に入るといふふうには。そんな事情までは御行の知ったところでもなく、自分の頼みが友人を苦しめていることへの罪悪感の方が大きい。光上からはそこまでの話は聞いておらず、サポートは難しそうだと言えられているだけ。断言しなかったのは、本人がまだ迷っているから。

「とにかく、彼は巻き込めない」

「……それが早坂の気持ちだとしても、光上は納得しないぞ」

「だから手は打った。彼は約束を破らない」

自分のことは忘れてほしいと言っておいた。約束を反故にしない彼になら、これで抑止になる。

「なるほど。光上が気にかけるわけだ」

「どういうこと？」

「似てるんだよ。臆病で、嫌われ役を演じるくせに、嫌われることを恐れるあたりが」

「……」

やはり似ているのだろうか。夏休みのあの日、たしかに彼はそう言っていた。似た者同士だと。だからお互いに相手のことをわかり

やすいと思っていたのだろう。しかし早坂は、そっくりとまでは思わなかった。似た箇所があるのは領けるけれど、それが全てというわけでもない。

彼はこういう裏切りを選択しないから。そこが決定的に違おうと早坂は確信している。嫌われたくないけれど、こうすれば確実に嫌ってくれる。彼とは永遠に別れられる。その方がいいと思ひ、そのためにこの選択をした。

(光上絶対キレるだろうなあ)

御行が今一番怖いと思つてゐることは、早坂を狙つてゐる四宮家の追手ではない。早坂に騙し討ちという形で場外に追い出されている光上だ。

光上が大切な人だと判定している相手は少ない。好意を寄せてゐる圭と、唯一の友人である御行。そして特別な位置に早坂愛。この3人のことは他の何よりも優先する。その中でも、早坂だけ別枠なのだ。初めて友人になろうと思ひ、未だになれてゐない相手。光上の根底を繋ぎ止め続けた人物。

好意では圭が勝るとしても、特別な思ひとしては早坂が勝る。そんな相手からの騙し討ち。しかも御行を巻き込んでいる。ただの役満だった。

「(ト)は？」

「四宮家の私有地の山。かぐや様との思ひ出の場所」

四宮家の追手から逃げながら、かぐやとの合流地点へと到着した。念の為にここの場所を少し捻つて伝えてゐるが、彼女なら到着するだろうと信じてゐる。そして、四宮家の私有地であれば、光上が来ることもできない。そもそも、彼はこの場所も知らないのだから。

御行はこの時に、早坂の上着にGPSがつけられてゐることに気づいた。ここまでの逃走中、一度だけ四宮家の人間と接触してゐる。藤原の助けで逃れられたが、その時に付けられていたようだ。

「あつたなあこんな場所。虫が多くて鬱陶しいんだよ(ト)」

「っ！」

「逃げられると思つたか？ 鼠が」

「ぐっ」

四宮家の三男である雲鷹の部下により、御行と早坂は地面へと押さえつけられた。

後継者争いから外れているかぐやの一派は、情報だけが生命線である。それは派閥を無視した情報網であり、広さだけで言えば3人の兄のそれぞれの派閥に勝る。そのため、かぐやのお付きである早坂愛が持つ情報は、底知れない価値があると思われる。実際には大した情報も持っていないが、その事すら知られていないため、こうして身柄が狙われてしまうわけなのだ。

「光上の小僧と逃げてりやあ楽だったんだがな。あいつの居場所も吐いてもらうぞ」

「……私も知りませんよ」

「シラを切るのもいいが、今さら仲間面か？ 約10年裏切り続ける女が」

「……………は？」

「10年？ 裏切ってる？ 私が？ だって、出会ったときは何も……………」

「なんだ知らんのか。滑稽だな。なあそう思わねえか？ 小僧」

「お前ほどじゃないさ。無能」

「っ!？」

「光上!?! どうしてここに!?!」

「協力者のおかげだな」

「探す手間が省けたな」

早坂や御行を挟む形で雲鷹と向かい合う位置に光上が現れる。早坂はそれが信じられず、頭が理解を拒んでいた。ただ呆然と光上を見つめ、けれど怖くてその顔を見上げることはできない。

「さっきの話も拾っていたが、滑稽にも程があるぜ。小僧の楔を鼠がしていた？ そりやそうだろうよ。そいつはたしかに特別だからな」

雲鷹は愉快げに口を釣り上げた。あの事の真相を知っているのは、そう多くもない人数だけだ。中立性を保つ名君の死因は伏せられている。病ということとで処理されているが、健康体そのものの体だった

のだ。病による急死のわけがない。

「何を言っている。光上が誰を恨むというのだ！」

「お前は部外者だろ。割り込んで来るな、と言いたいところだが、今は気分が良い。ギャラリーとして扱ってやる」

「シヨーでもやるつもりか？」

「愉しいシヨーをやるのは、その2人だ」

雲鷹が指を差したのは、御行同様に押さえつけられている早坂と、冷めきった目をしている光上だ。その目をしてるのも無理はないと、事情を知っている雲鷹は思っている。信じたい相手が何度も裏切るのだから。

誰も信用していない？ 当然だ。祖父の死因が彼をそうさせたのだから。

「ここに来たのは裏切り者に一言言いに来たからだろ？ 言ってやれよ小僧」

——自分の祖父を殺したのは早坂愛の父親だつてな

## 第46話

病院を抜け出した光上は、秀知院学園の生徒を探しながら藤原に電話する。秀知院学園の生徒で見つけないのは、マスメディア部の紀かれんと巨瀬エリカ。この2人は単純に情報網が広いから。マス部は情報通の阿天坊や光上が得にくい情報をよく持っている。部の在り方によるものが大きいのだろう。

他にも見つけたい生徒はいる。火ノ口と駿河だ。この2人は早坂の友人であり、基本的に学校ではその3人セットで過ごしている。今回もグループが同じだった。何かしら情報を得られるかもしれない。『も、もしも晶くん。どうされたんですか?』

耳に当てていたスマホから藤原の声が聞こえてくる。信号を待つために足を止め、呼吸を整えながらその声の出し方に集中した。動揺を隠そうとしている声。何か知っているのだろうか。

『病院にいますよね?』

「抜け出した」

『ええっ!? なにしてるんですか!? だって倒れたんでしょ!』

「寝過ぎただけ。それより千花ちゃん。早坂がどこにいるか知らない? もしくは白銀」

『え、そう言われましても……。会長とはグループが違いますし、早坂さんはクラスも違うので。どこにいるかは私もわかりません』

嘘は言っていない。嘘が通じない相手だと藤原もわかっているから、話し方に工夫をしている。しかし、遊びの要素がないこのやり取り、藤原の性格で隠し事を隠し通せるわけでもない。

「じゃあ、2人は何してた?」

『え……』

信号が変わる。秀知院生が回りそうな場所に目星をつけ、そこへと向かう。最終的には早坂の下にたどり着くことができればいい。マス部の協力は必要だが、その前に火ノ口と駿河に会っておきたい。その前段階として、他の生徒たちから情報を集めたいのだ。

電話の向こうで藤原が迷っているのが伝わった。その時点で、早坂が御行と行動していることが推測できる。早坂がハーサカとして接触していた相手。カラオケで御行に事情を話していたのが功を奏している形だ。

そして、その時の会話を光上は聞いている。一人でドリンクバーに行っている途中で盗聴器を仕掛け、店員に話を通しておいて、早坂が部屋を借りる時にその部屋を案内するようにさせた。それを知らずに早坂はその部屋で、御行に事情を話していた。御行の立ち位置は、とても便利なものだからだろう。

「千花ちゃん」

『は、はい！』

緊張からか、藤原の声が上ずる。それも仕方がないこと。光上は目を覚ました時から完全にキレており、努めてそれを抑えようとはしているものの、漏れ出る怒気が藤原に伝わってしまったているから。耳を近づけて聞いていた彼女の友人たちも、肩を震わせて耳を離している。

「頼まれて黙ってるんだろうし、そこには怒らないよ。代わりに少しだけ協力して」

『協力ですか？』

「マス部の2人と、火ノ口さんと駿河さん。この4人を探すのを手伝って。これなら手伝える範囲だよな？」

『……そうですね。それなら大丈夫です』

「うん。ありがとう」

通話を切り、京都の町中を突っ走る。自由行動が基本なのだが、許されている行動範囲が広い。観光スポットこそ限られてくるものの、それらはたいいてい京都の町の外側。生徒たちがバラけやすい。もちろん町中にも観光箇所はあり、光上はまずその場所を目指していた。

「あれ？ おーい光上くん！」

「ん？」

目的地に近づいたところで、横の脇道から声をかけられる。そこにはいたのは田沼柏木カップルと、魂が抜けかけている四条真妃。彼女に



救いはないのだろうか。秀知院生を見つけられたことはよかつたものの、柏木と四条は求めていなかった。四宮家の案件だから、2人が何か察するのは当たり前。

しかし声をかけてきた田沼を無視するわけにもいかず、どうするかを一瞬悩み、別に知られても隠すだろうと踏んで3人の下に歩み寄る。

「病院に運ばれたって聞いてたんだけど。どうしてここに？」

「抜け出した」

「え!?! それ大丈夫なの!?!」

「揉み消すからいい」

「あら、光上がそういう手を使うだなんて珍しいわね」

田沼との会話に四条が割って入る。四条が言ったように、光上はこの手のやり方を好まない。そもそも脱走自体やろうとは思わない。つまり、それをしている時点でおかしい事が起きているとわかるわけだ。四条が癖で挑発的なことを言う前に、柏木が先行して光上に話を聞く。

「何かあったんですか？」

「いろいろとね。そういうえば、柏木さんと四条さんはマス部の2人と仲良かったよね? どこにいるか知らない?」

「あの2人はたしか……スクープがどうか言って暴走してるようですよ」

「このツイートね。2人と同じグループの子が写真撮ってツイートしてるわよ」

「じゃあ足跡は辿れるわけか。ありがとう」

マス部の2人に関しては、断然探しやすくなった。これは大きな前進だ。しかし、一向に手がかりがないのは、火ノ口と駿河の情報。これは四条たちも知らないようで、近くにはいないだろうとのこと。

次のポイントに向かおうとする光上を、四条が掴んでズルズルと引っ張る。田沼カップルから離れたところで、四条は光上に問い詰めた。

「愛のことで何かあったのね?」

「……どうしてそう思う?」

「あんたがそこまで行動するのは、あの子の事ぐらいしかないでしょ」  
「心外だな。他にもいるぞ」

「そうなの? まあでも、おば様の様子が露骨におかしかったから、何かあるって気づくのも当たり前よ」

「それもそうか。2人の関係を知ってる人からすればそうなるわけか。でも、四条さんはそのまま気づいてないふりをしてたほうがいい」

四条家と四宮家は一触即発状態。光上家の影響があり、狙い通りの海外での成長こそできていないものの、十分に張り合えるだけの力をつけている。対四宮家との戦争のために光上家と四条家は陰で手を結ぶことにしてある。正式にしてしまえば四宮家が感づくため、あくまで非公式だが。

ともかく、四宮家内部のちょっとした騒動に、四条家の人間が関わるべきではない。光上なりの配慮であり、四条真妃もそれを理解している。

「あんたはどうするつもりよ」

「過去10年分の精算を済ませる」

「……そう。中身は聞かないでおくけれど、せいぜい男を見せることね」

「ああ、そうする」

四条たちと別れ、次のポイントへと向かう。その最中に藤原から連絡が入り、火ノ口たちとのコンタクトに成功したことを言われた。連絡先が光上に送られ、藤原にお礼を言って通話を切る。今度スイーツでも奢ろうと決め、教えてもらった連絡先に電話。今どこにいるかを聞き、合流地点を決めてそこに移動。

「藤原ちゃんから光上くんが探してるって聞いたんだけど」

「何か用? というか病院は?」

「早坂がどこにいるか知ってる?」

「愛? なんて……はっ!」

「ま、まさか……!」

「おつと？ 話が拗れてきたな？」

時間を惜しみ、単刀直入に話を聞いたことがいけなかったのだろうか。しかしこの2人は早坂が四宮家の使用人であることを知らない。何が起きているのかは、目で見てわかっていることしかないのだ。

御行と2人でどこかに消えた早坂。昨晚の密会。早坂はもしかして白銀御行を狙っているのではと考えており、そこに光上の登場なのだ。三角関係だと解釈している。

「悪いことは言わない。諦めたほうがいいよ光上くん」

「そうそう。ケジメをつけたいなら話は別だけど」

「ケジメはつけるつもりだ。というか、2人がどこにいるか知ってるの？」

「2人？」

「白銀といるんだろ？」

「知ってて……!!」

「愛を取り合う2人……!! あの子モテモテね！」

「面倒だなあ」

ズレたまま話が進んでいくのは面倒だ。とはいえ修正するのも手間であり、必要な情報だけが欲しかった。特にこの2人からは。

「2人にとって早坂は友達？」

「え、当たり前じゃん」

「だからあの子の情報は売れないよ」

「それならよかった」

「なにが？」

「いや、早坂にもちゃんと抛り所があったんだなって。本人は臆病だから、気づけてないかもしれないけど」

「……待って。あの子に何か起きてるの？」

光上の雰囲気がいつもと違う。そう感じたようで、駿河は光上に問いかけた。早坂が仲のいい男子は光上くらいだと思っていたこともあり、御行と行動していることにも違和感自体はあった。けれど、そういう事もあるかと受け入れるようにしていた。

そうしていたのに、どうやらそれが間違이었다と気づいた。御行

のことが好きで共に行動しているのではなく、事情があつてそうしているだけなのではないかと。

「何があつたかは全部早坂の口から聞いたらしい。修学旅行中に聞けるかはわからないけれど、旅行明けには必ずそれを話させるから」

「……信じていいの？」

「好きにしたらいいよ。約束は破らないけど」

「そう。なら勝手に光上くんに愛のことを頼むわ」

「2人がどこにいるかは私たちもわからないの。でも、ウチの子のこ  
とをお願い」

「母親か」

「あ、あと一つお願いがあるんだ」

火ノ口の頼みを聞きそれを承諾。

今度はマス部の2人との合流だ。藤原が先に連絡を取り場所を決めた。紀と巨瀬の2人は先にそこに向かっており、光上の方が後から到着した。

「何やら大変そうですね。光上さん」

「いやお前のその状況に言いたいわ」

何があつたのかは知らないが、2人の顔は真っ白になっていた。ペ  
ンキでも顔面から浴びたのだろうか。トムとジェリー並の体験を京  
都でしたというのか。

答えはそうでもなく、舞妓体験をしていたらしい。顔だけ変えても  
意味がないだろうし、その顔のまま移動していたということに驚愕で  
ある。

「落とす時間がなかったんです!」

「それはごめん!」

原因は光上にあつた。仲介役は藤原であり、どう呼び出したかは不  
明である。

「緊急の用事って聞いたけど、どうしたの? とうか病院は?」

「白銀を探してるんだが、情報持っていないか?」

「会長ですか?」

「病院はスルーかい」

「結構急を要する事だね」

四宮かぐやの名前を出せば一発で協力を得られそうなのだが、早坂とかぐやの関係は伏せないといけないためその手段が取れない。次点で強力な餌となるのが御行なわけで、早坂と行動を共にしているのだから核心部分でもある。

光上の言葉に2人は顔を見合わせた。スクープの匂いを嗅ぎとつたからだ。しかしそれと同時に、あまり踏み込んではいけないと脳内センサーが反応している。何も聞かずに協力してもいいが、それは少し虫のいい話でもある。そのため巨瀬は交換条件を提示することにした。

「有益な情報を与えられるかはわからないけれど、見返りはほしいね」  
「エリカ？ 緊急のことなのですよ？」

「四宮かぐやとの食事をセツティング。それでどうだ？」

「何なりと命じてください！ 巨瀬エリカ協力致します！」

「エリカ！ 敬礼してないで鼻血を止めなさい！」

尊死しそうになっている巨瀬の介護を紀が始め、予想以上に簡単に釣れたことに光上は苦笑する。かぐやからすればあまり関係のない話。メリットもない。光上はその会のセツティングには骨が折れると思いつつ、小事だと自分の中で片付けた。

鼻にティッシュを詰め込んだところで、紀がメモ帳を取り出して最近の情報を光上に提示していく。彼女たちの情報網は侮れず、その実態はマス部の人間しか把握していない。

「目撃情報としましては、会長が昨晚A組の早坂さんとお話されていたとか」

「昨晚？」

「はい。女子の入浴の後ですね」

「……他には？」

「今日は朝から早坂さんが会長のいるグループに合流。かぐや様のグループはその尾行をされていました」

「それを紀さんたちが尾行してた」と

「否定はしません。ですが、早坂さんと会長は途中で突然走り出してグループから離れ、かぐや様もお知り合いの方とお話されて、そのままその方と行動されていました」

「特徴は？」

かぐやに話しかけ、その後ともに行動している。そうなれば相手は四宮家の人間。問題はどの位置の人かだ。

その情報を復活した巨瀬から教えてもらい、相手が早坂の母だと特定。それはマス部には伝えず、少しは早坂たちの場所を絞れることに感謝する。あとはどうにかするしかないかと行動に移ろうと考えたところで、紀から更なる追加情報が。

「聞いた話によりますと、会長と早坂さんはバイクで移動されているようです」

「バイク？」

「はい。少し荒いですが、この写真からして間違いないかと。お相手がかぐや様じゃないとか解釈違いにも程がありますが」

「いや早坂もその気はないと思うけども。……ナンバーが見える写真もあるな。ありがとう紀さん、巨瀬さん。これで後を追える」

「ねえ、これって物騒な案件だったりするわけ？」

巨瀬の少し踏み込んだ質問。紀は取り消させようとしたが、それを光上が止める。巨瀬はこれを探りたいわけじゃないとわかったからだ。巨瀬が知りたいのは、皆が楽しい修学旅行を最後まで送られるかどうか。そこだけだ。

「物騒な案件ではない。面倒なことではあるけどな」

「……知らない事として処理すればいいんだよね？」

「そうしといて」

「わかった。なんか知らんけど頑張れ」

そんな過程があつて光上は早坂たちの下にたどり着いた。御行が地元の人から借りたバイクを、京都市中の防犯カメラを精査することで捜索。場所を割り出して急行してきたというわけだ。その過程で雲鷹が乗ってきた車にも気づいたりしたが、完全におまけ扱いである。

雲鷹が放った言葉。早坂の父親が、光上の祖父の死因であるという話。そんな話など早坂は聞いていない。全く知らない。しかし、自分が子供だから伏せられていた可能性は十分高い。光上があの日から、違った目の色を放つようになったのも事実。符合するものはある。

光上は無言で雲鷹と早坂の下へと近づいていく。早坂は目を瞑り、草が踏みしめられる音が近づいてくることに震える。彼は怒っているだろうし、彼を裏切ったのも事実で、彼に嫌われているのも当たり前。それでも、その現実には堪えられそうにないほどに恐ろしい。突きつけられたくなかった。

「その手を離せ」

光上は早坂ではなく、早坂の髪を掴んでいる雲鷹に声をかけた。雲鷹が光上の言葉に従う理由もないため、挑発的な笑みを返すだけ。それを受けて光上は、雲鷹の意識の裏について距離を無くした。

「聞こえなかったか？ 早坂の髪を掴んでその手を離せと言ったんだ」

「ぐっ……いっ……いっ……」

早坂の髪を掴んでいる方の手首を握り締める。感情の爆発というもの、人間の理性を弾き飛ばす。怒りであれば暴力性が増す。相手を傷つけることへの躊躇いが無くなる。それと同時に、いつも以上に力が込められるというもの。

光上は相手の手首を掴んだ。人の骨は基本的に硬いものの、関節は骨がない。そこに指を食い込ませるように力を加え、早坂から手を離させる。

「小僧！」

「うるさいな。女の髪を掴むようなクズめ。立てるか？ 早坂」

「……」

「返事くらいはほしいね」  
「っ！」

視線を合わせようとしない早坂を引き上げ、逃れられないように右手を彼女の腰に回す。ここが目的地なのだから、逃げる気もないだろうが念の為だった。いや、これはこの後の意思表示にも繋がること

か。光上は雲鷹から距離を取るため、早坂を抱えながら数歩距離を取った。

「おいおい何の茶番だ？」

「俺はクズを楽しませるための道化じゃねえよ」

早坂のでこに一発デコピンを入れ、ぽんぽんと頭を撫でてからスマホを取り出す。雲鷹に投げやりに言葉を返しながら、電話を繋げた先は元凶<sup>黄光</sup>だ。声が周囲に聞こえるようにスピーカーにする。偶然にもそれにあつたタイミングで、早坂の元主人であるかぐやがこの場に到着する。

「役者は揃ったな」

『それは何よりだ』

「っ！ 大兄貴……!？」

「あんたの予測通り、切り離れた餌に見事に喰らいついたな。黄光」

電話の相手が黄光であると知った途端、雲鷹は身構え早坂は体を震わせた。今もまだ、あの男の手のひらの上で踊らされているのかと。

『君とは上手くやれそうだな。少年』

「アホ拔かせ。俺がいつからお前と手を組んだ」

『なに?』

「お前と合わせた話は、早坂愛を確保すること」

『そうだな。そしてその主人は——』

「捨てたんだろ? なら早坂に今主人はいない」

彼女の腰に右手に力が入る。それを感じ取り、早坂は困惑しながら光上の顔を見上げた。

嫌な予感がした。彼を四宮家から遠ざけたいという願いが崩れそうだと。

「早坂は俺が貰う」

『ほう?』

「なっ!？」

「ちよっ！ 早坂は私の侍従ですよ!？」

「それも解任されてんじゃない」

「おいおい。吐き気がするほど青臭い話じゃねえか。祖父を殺した男



の娘で、お前を裏切り、お前を騙して四宮家に取り込もうとしてた女を貰う？　一応籠絡の仕事はしてたようだな」

「……」

「どんなことをしてたのかは知らんが、仕事のために情を偽る。汚え溝鼠らしいことでもしてたか？」

「黙れ」

明確な怒気が籠った一言。早坂への言葉に対する明確な怒り。その言葉の重みに一瞬誰もが喉を詰まらせた。電話の向こうにいる黄光だけは、笑っているようだが。

「お前が早坂の何を知っている。顔面ダイナミック違法建築の分際で早坂のことを語るな」

「人の容姿を貶すなど親に習わなかったのか？　倫理観を疑うな」

「四宮の人間にだけは倫理観とか言われたくねえな！」

どっちもどっちである。倫理観の酷さで言えば、さすがに四宮家の方が軍配が上がるわけだが。

「全部水に流すつてのか？　随分めでたい頭してるじゃないか。鬱陶しい光上家もお前の代で終わりだな」

「方針の違いを理解できないのなら、程度が知れるってもんだぞ。それと、俺は別に早坂を怒れる立場じゃないしな。ただし御行テメエは駄目だ!!」

「なんで!？」

突然の巻き込みに御行がビクリと反応する。初めて下の名前で呼ばれたというのもあるが、まさかそれがこんなタイミングだとは思わない。光上のその急な方向転換に、四宮家の人間たちですらぽかんと置いて行かれた。

「早坂とタンデム<sup>2人乗り</sup>？　お前が頼られて逃避行？　しかも風呂上がりの

早坂と密会？　ぶっ殺すぞお前」

「えっ……お前が怒ってるのって……」

「お前への私怨が半分だわ！」

「ええええええ!!」

## 第47話

御行が光上にキレられている。

完全なる巻き込み事故の現場がここにあつた。

「待て待て光上！　ここは一回冷静に状況を整理しようじゃないか」

雲鷹の部下に押さえられていた御行だったが、全員が啞然としている間に体を起こした。部下も立ち直りが早く、とりあえず御行の行動を制限するも、その場に押しとどめるだけ。この場で一番関係がないはずなのに、たぶん一番光上の怒りを買っている彼に同情しなくもない。というか哀れでいた。あと説明がほしいのは同じ気持ち。

「さつき整理したろ。お前は風呂上がりの早坂と密会した」

「いや、あれはあのタイミングしかなかったというか。狙ってやったことじゃないし……」

「狙ってたら殺してるが？」

「怖いな!!」

「今日は早坂との逃避行ランデブー。彼女がいるくせになんだそれは！　1人攻めしたら次に行くってなんだ！　人生ギヤルゲーとでも思ってたのか！」

「いやこれは仕方ないだろ!？」

追手から逃げているのだから、そうなってしまふのは無理からぬこと。明らかに不可抗力である。

「バイクはまあいい。で、お前が後ろだったろ？　なに？　早坂のどこ触ったわけ？　ぶっ殺すぞ」

「殺意高すぎだろ！　バイクの後ろ掴んでたから！　早坂には触れてないから！」

「そうなの？」

「え……うん、うん」

突然話を振られて反応が単調になった。だがそれは正直なものであり、真実性が高くなる。早坂の証言もあり、早とちりだったかと光上は反省。映像を見た時にわかるはずなのに、この場所に急行するた

めそこまで細かくは見えていなかったようだ。

光上が一番腹を立てているというか、嫉妬していることは、自分ではなく御行を頼られたという一点なのだが。

『話がそれで——』

「うるさい」

「ええ……」

黄光との通話が切断され、その傍若無人ぶりに御行たちは啞然とした。怒っているにしても、今までの光上らしからぬ言動ばかりだ。ここまでの直情思考なタイプではなかったはずなのに。

その後も何度かけられてくる電話を、光上は尽く切断し、最終的には着信拒否にした。光上に電話しても無理だとわかると、黄光は早坂のスマホに電話をかける。それも光上が着信拒否にした。その場が静まり返り、黄光苦渋の決断。雲鷹のスマホに電話をかけた。

「これは切る流れか？」

「空気読んでくれよ？」

『まさか雲鷹に電話をする日が来るとは』

「俺も同感だぜ」

「出んなよ!!」

「空気を讀んだが？」

単純に付き合いの長さで負けた。全員が黄光に着信拒否する流れが出来上がるかと思いきや、雲鷹が情けをかけて電話に出たのである。ちよつとした貸しを作るためでもあった。プライドの高い人間ほど、小さな借りでも屈辱的なもの。黄光の腸は煮えくり返っている。

『別に取りするというのなら構わない。元より捨てたものではあるからな』

「ならお前電話かけてきた意味ないじゃん。ばいばい」

『光上晶。わかっているのか？ このタイミングでその宣言。雲鷹の横から掠め取るということは、四宮家への敵対行動に等しいぞ』

「そうですよ。だから、私のことを忘れてくださいって言ったのに。なんでも言う事聞くなって約束したじゃないですか！ 私はあなたが

こうしてしまうことを恐れて動いたのに……！」

「鼠が割り込むな——」

「今早坂が話してるでしょ！」

四宮かぐや。兄への右ストレートを決めた。光上はかぐやにサムズアップを送る。そのすぐ後に、雲鷹の部下がかぐやを手にかけようとしているのが視界に映った。

「このっ！ 雲鷹様に！」

「動くな」

たった一言。それだけでその部下は動きを止めた。首を絞められていると錯覚する光上の圧に、その部下は動きを封じられる。光上の怒りの半分は御行へのもと言っているが、その実大半は四宮家に向けてだ。早坂の人生を掌の上で踊らせた黄光と、解放されたばかりの早坂を捕えようとする雲鷹への。

早坂にとって大切な人である四宮かぐやへの危害。それを見逃すようなことなど光上はしない。光上のその威圧を受け、雲鷹は何もしないように部下に指示を出す。それを見て光上も早坂との話に戻った。

「約束を破った気はないよ」

「どこがですか！ 今ここにすることが約束を守っていない証拠でしょ！」

好きだから離れた。好きになったから、傷ついてほしくなくて遠ざけた。薬を盛って、残っていたお願いを使って。デートの誘いにも使えだし、なんなら付き合っしてほしいという願いにも使えた。けれど、自分のことよりも光上のことを優先した早坂にその選択は取れない。圭の気持ちも知ってたから。

だから、裏切って、嫌われ者になって、縁を切って。でも嫌われるのは嫌だから、自分のことを忘れてもらうことにしたのに。それなのに。

「どうしてあなたはいつもそうやって……。あなたを思う人の気持ちをわかってくれないの！」

「……ずっと、気になってたんだ」

感情を発露させ、光上の胸ぐらを掴む早坂を、彼はそつと撫でた。ある意味において、彼が早坂愛を見たのはこれで数度目だろう。少なくとも光上はそう解釈している。

「ハーサカとして過ごしてる時、結構楽しそうにしてた。演じてはいるけれど、楽しんでる姿は本当なんじゃないかって。早坂は、そういう過ごし方をしたいのになって」

御行から聞いたラップの話。ラップバトルでハーサカの本音を聞き出せたかもしれないと言われ、光上の予想は確信に変わった。友達と遊びたい。男友達も作りたい。そして、恋もしたい。

「文化祭の日だって、早坂は等身大だった」

「ハーサカが気になるって……そういうことだったんだ」

「俺はそれを言った記憶がないけど、そういうことだよ」

「いつから気づいていたの？」

「初めてハーサカと出会った時から。しのみ……かぐやさんへの隠し事は、出会った頃からだけど」

性格の悪さが似ている。かぐやは早坂のことをそう評している。

臆病さが似ている。御行は早坂と光上のことをそう評している。

根本の部分で言えば後者が近いのだろう。だから、光上は持ち前の観察力もあって気づいたのだろう。

「あの日、心臓を捧げると言って、俺はそれを受け止めるって言ったし」

「えっ、いやあれは……。な、なんで今その話するの!？」

「……光上お前奉心伝説知らないのか？ いや、正確にはその派生話の方が」

「派生なんてしてたのか？」

「……うわああ……っ！」

超恥ずかしい話を暴露され、しかもそれが光上に正しい意味では伝わっていなかったことが発覚。早坂愛。間違いなく今一番悲惨な目に遭っている女子である。かぐやはこの上ないレベルで同情した。

派生話なんて知らない。伝説は伝説として脳内処理して終わりとなつているため、光上はその話がラブロマンスとして語り継がれてい

ることを把握していない。それ故に、光上はあの時の早坂の言葉の意味を、SOSとして受け取ったのである。

その時点で、こうすることは決めていた。そして早坂が最後に取った行動。それが光上に最大の火をつけた。

「四宮家の早坂愛のことは忘れた。だから許すも許さないもない。俺は、ただの早坂愛と友達になりたい。それだけだよ」

「無茶苦茶な……。10年前の……。話ですよ？」

「それがどうした？ 家のことを気にしなくてよくなるのに、それだけの時間がかかったってだけの話だろ」

「だって」

「それに、あんな顔泣き顔で言われたらな。うちの祖父の教えに背きたくはないんだ」

それを待つていたとしても、たしかにどこの所属でもなくなった早坂愛に接触するには、このタイミングしかないのだとしても。早坂を捕らえようとしている雲鷹とは衝突するわけで。それはいわば明確な敵対になる。

「全部決めたことだから。決まってることもあるし、宣言はしてもいいって許可は貰ってる」

早坂から視線を外し、かぐやの右ストレートが効いて大人しくこちらの話を待つている雲鷹を見据える。この場にはいない黄光にも。

「光上家は四宮家と戦争する。日本ではなく、欧州が舞台になるけどな」

「っ！」

「そうかよ。ようやく目障りなのを潰せるな」

『宣戦布告を受諾した。もはや言葉はいらん』

「そういうこと。早くこの場から消えてくれ」

光上の宣戦布告に合わせ、光上家の人間が木の陰から姿を現している。数的有利は光上家にあり、雲鷹たちは完全に包囲された。しかし、この場でやるのは宣戦布告のみ。大人しく撤退するのであれば、光上家も手を出さない。

雲鷹はこの場から立ち去ることを決め、部下もそれに従う。黄光と

の通話を切ろうとしたところを光上が呼び止め、もう1つの宣言をした。

「爺様の死の真相は必ず暴く」

『それは楽しみだ』

それを最後に通話が切れ、雲鷹も立ち去る。それに合わせて光上家の人間達も撤退。その場に残るのは高校生組と、かぐやの足として車を運転していた早坂の母だけ。

「うちの祖父の死はいろいろと陰謀が渦巻いた結果でな。早坂の父親はスケープゴートにされただけだよ」

「そう、なんだ……。それはよかった……。けど！ 四宮家と対立つて――」

「それも家の方で決まっていたこと。今回のことがなくてもそうなたから、早坂のせいじゃない」

「……」

そう言われても素直に安心なんてできるわけがない。既定路線だったとしても、確実にその導火線に火を点けたのは今回の件になる。無関係なんかじゃない。

それに、今までの自分の苦悩が水の泡になってしまったことも、早坂をなんともやるせない気持ちにさせた。感情の処理が追いつかない。今は時間が必要で、それでもその時間を待つことなど許されない。まだ話は残っているのだから。

光上は早坂から手を離し、一歩下がって早坂と向き合った。早坂もいろんな感情を乱れさせながら、瞳を僅かに揺らがせて光上を見つめる。

「早坂の気持ちには応えられない。早坂のことは好きだし、女性としても魅力があると思うけれど、恋愛としては見れないから」

「……バツサリ言うんだね」

「そういう人間だって知ってるだろ？」

「うん。よく知ってる。だから、あなたが言いたいことも、私にはわかるよ」

「まごじび〜」

「フツておいて、それでも言うんでしょ？ 友達になつてほしいって」  
半目でじつとりと見つめられ、光上はバツが悪そうに頬を掻く。光上としては、早坂とずっと友達になりたかった。その関係になれるまでの待ち続け、その間に早坂に惚れられたのだ。間が悪いというか、盛大なすれ違いである。

酷い話だとは思う。けれど、早坂と友達になりたいという気持ちは残り続けているから、早坂のその言葉を否定なんてできない。

「……はあ。いいよ。友達になろう」

「……本当にいいのか？ 相当酷いことをしてるぞ？」

「ふふつ。まずは友達からつてこともあるから。スキがあれば狙おうかな」

「こつわ。肝に銘じておきます」

臆病なところは、光上に似たところがあるのだろう。けれども、性格の悪さはかぐやに似ており、母親譲りでもあるのだ。

2人は手を重ね合い、用事が終わった光上はそのまま帰ろうとしてかぐやに殴られた。

「何勝手に終わってるのよ！ 私と早坂の用事は終わってないわよ！」

「グーパンは痛いんだけど……」

「私にもいろいろと言いたいことはあるのよ！ 早坂にも！ 光上くんにも！」

「あ、そうだ早坂。火ノ口さんと駿河さんから伝言」  
「え？」

「修学旅行明けの1週間。放課後に遊ぶこと。それで隠し事してたことと、頼ってくれなかったことはチャラにしてあげるってさ。あの人たちは、早坂のこと友達だと思ってたみたいだよ」

「あ、そういうええあの2人はそうでしたね。会長と2人で会っていたことも、他の人に言わないようにしていましたよ」

「そうなん、ですか……？ ……！ あれっ？…なんで……」

雫が緩やかに頬を伝う。それは止まることなく、次から次へと溢れていき、かぐやはそつと早坂を抱き締める。臆病で、怖がり、泣き



虫な姉。かぐやもまた、この瞬間に使用人としてではなく、1人の身内として早坂を捉えていた。

友人とは思っていなかったことへの申し訳無さ。自分のことを大切にしてくれている2人への感謝と安堵。緊張の糸が切れた早坂は、声を抑えながら涙を流し続けた。

「いいのか？」

「お前は許していないが？」

「まだ!? いやそうじゃなくてだな」

涙が止まった早坂は、かぐやと共に棧橋に腰掛けて話をする。これまで裏切っていたこと。話せなかったこと。話したかったこと。胸の内にしまっていたことを、すべて曝け出すように。かぐやもまた話したいことを話し続けたいた。

それを御行と光上は、話が聞こえないように離れたところから見守りながら話をしていった。御行が言いたいこと、というよりは心配していることは、先程の宣戦布告の件だろう。想定より早い段階での宣言であることは、部外者である御行でもわかった。いや、友人だから気づけたことだ。

「宣言したところで、実際に始まるのはまだ先の話。まず俺が日本にいる間は何も無い」

「……そうか」

「御行には感謝もしてる。早坂と一緒にいてくれたおかげで、俺はまだ冷静に追跡できた」

「まだ？」

あれのどこがとか思わなくてもないが、たしかにこの場に来るのはかぐやより早かった。移動の段階まではきつと冷静だったんだろう。

「それより、呼び方変えたんだな」

「嫌なら戻す」

「そのままでもいいさ。意外だと思っただけから」

「心境の変化だよ」

「たしかに、心なしか雰囲気も変わってるな」

今までは静観しているだけの光上が、ここまでの行動を取った。早坂が中心人物というのもあるだろうが、それは今までの彼からは考えられない行動。中立で干渉を決め込んでいた家が動くというものもあるだろう。それでも、家からすれば早坂は関係ない。これは明確な光上晶個人の意志だ。

もう戻ることもできない。突き進むしかなくなった。ならば、覚悟を決めてできることを全力で行う。彼にはそれしかないのだから。

「光上くん」

「奈央さん。ご無沙汰してます」

「娘が迷惑をかけました」

「迷惑ではないですよ。俺がやりたくてやったことですから」

「そうですか。今後ともよろしくお願いしますね」

「こちらこそ」

そこには敵対者らしい張り詰めた緊張感など一切なかった。その事に違和感を覚えた御行は、一言断ってから会話に割って入る。

「2人は何の話？」

「早坂家と光上家の内通話ですよ」

「はい？」

「言ったろ？ 早坂を貰うって」

「そういう意味だったのかよ！」

あんなの誰だって勘違いする。光上はあえてそう言ったのかもしれないが、相当質が悪い。早坂愛もきつと勘違いしたことだろう。こういういた事が圭には及ばないように、一発殴ってもいいんじゃないかと御行は本気で思った。

「正しい選択だったとは言えるかは、今後次第だな」

早坂愛の所属がなくなつたわけだが、光上が他より優先する相手であることは今回で露呈した。わざわざ切り離れた人物を四宮家が利用するとも思えないが、他の家への警戒は必要だ。

早坂家との内通話も、四宮家との縁を切るという話でもない。光上家とは争わないというだけ。元々四宮家は国内で勢力を伸ばしている。海外に関してはすぐに手放しても軽傷で済むわけで、本命は四条

家との抗争になる。国内での戦争となり、もしもの時は光上家が早坂家の補助をするという話だ。

「私は二股もありだと思いますよ。うちの娘を愛人にしてもらっても」

「何言ってるんですか!?!」

「その気はないですから」

奈央は男子2人で遊ぶだけ遊んで、満足したところでこの場を立ち去っていった。車の準備でもするのだろう。娘とは話をしないのかと光上が一度呼び止めたが、今後その時間を作れるからいいのだそうだ。

男子2人となり、光上は御行に問い詰める。今日早坂と共にいたことの詳細を。御行も弁明を兼ねてそれを正直に話す。段々話はそれについて、ただの雑談に変わっていったのだが、そうしていると早坂とかぐやの話も区切りがついたようだ。

「四宮もういいのか?」

「ええ。話したいことはひとまず話せましたから。光上くんとの話は後日にします」

「光上はこの後どうするんだ。病院抜け出てきたんだろ」

「そっちは手を打ってあるし、適当に東京に帰るさ」

「その方が騒動自体は最小限にできるか……」

「千花ちゃんがどんな話にしてるかは知らんけど」

「うわっ、急に不安しなくなってきた」

御行はかぐやと共に、奈央の車に乗り込んで秀知院学園が借りているホテルへと戻っていった。藤原のせいでも、御行はとんでもない設定を盛られたというのは後から聞いた話である。

「早坂はこの後どうする?」

「……がいい」

「ん?」

「下の名前、で……呼んで」

名前を呼べば友達だってブレイカー娘も言っていた。運動音痴もなんのその。空を飛んだら関係ないと言わんばかりのエースオブ

エース。殴り合ってお友達理論からの名前呼び理論に金髪少女は妻となったのだ。

そこまでの飛躍はしないが、早坂は名前呼びを所望。友人と公言している御行のことも下の名前で呼ぶようになったわけで、早坂もそれが適用されたっていいのだ。緊張気味に上目遣いで頼まれ、光上は何か揺らぎかけたがそれを律する。

「……。わかった。愛、これでいいか？」

「っ、うん。あきら……はみんなのそこ戻らないんでしょ？」

「まあな」

「じゃあ、この後と明日付き合って」

「いいよ。京都観光しようか」

御行が地元の人から借りたバイクも返しに行かないといけない。場所を覚えている早坂が運転することとなり、光上は後ろへ。ヘルメットを装着して後ろに跨り、早坂のお腹の前へと手を回す。なんてことはせず、御行から聞いたようにバイクの後ろを掴んだ。このバイクは2人乗りがしやすいタイプで、掴むところがあるのが幸いか。

光上はこの時、御行の気持ちがよくわかった。相手の体に手を回すのとかめっちゃ恥ずかしい。お前それに似たことよくしてんじやんってツツコまれそうだが、どうやら感覚が違うらしい。

「正直言うとなね」

「うん」

「後ろ掴まれると重心がバラけるから、前を掴んでもらうほうが運転しやすい」

「……俺にどうしろと」

「お腹に手を回して。ぎゅって」

「いやいや何言っではるんですか？」

「晶なら……いいよ？」

「……」

光上は言われた通りにやり、心を無心にすることに集中するのだった。

翌日、圭からの着信やらメッセージやらを見ていなかったことへの

謝罪に軽く1時間を要したとか。

## 第48話

修学旅行も終わり、今日も今日とて早朝に目を覚ます。春はまだ少し先だが、何度も押し寄せてきていた寒波も最近は休み気味。南下してきたいた冬將軍も北への撤退の素振りを見せている。

早朝と言ってもまだ日は登っていない。夜の寒さに完全に冷やされた空気たち。冷感スプレーをかけられたような寒さ。これならゾンビにも気づかれぬ。

光上は体を起こし、グツと伸びをする。

「おはよう晶」

「ん。おはよう愛。……………なんでいんの!？」

「え、だって四宮家の人間じゃなくなったから、住む場所ないし」

「お金余ってるし、ひとり暮らし始めるとか言ってたなかつた？」

「有り余ってるけど、東京は物価高いし。晶だって、貰ってくれるって言うってたから」

「たしかに言ったけど!」

それは早坂家を吸収するという話であって、早坂愛個人を言っているのではない。愛が早坂の人間である以上、どのみち同じ話であり、愛もそれをわかっていて逆手に取っている。こつちの方が面白いから。

「お義母さんから許可は取ってるよ」

「さらつと義母にするな。まあ許可は出るだろうけども」

「寝取ってもいいって」

「なんの許可出してんだあのオバハン!」

きつとフランスでけられから笑いながら許可を出したのだろう。光上には母親が楽しんで承諾した姿がありありと想像できた。息子をなんだと思っているのだと問い詰めたところだが、まともな返しは来ないだろうと思っている。

なんだか頭が痛くなってくるのだが、まだ早坂には聞かないといけないことがある。住む場所がないというのなら、別に住み着いても

らって構わない。今聞かないといけないのは、なんでこの時間に早坂が部屋にいるのかだ。

「晶を起こそうかと。ランニング行くんでしょ？」

「合ってるけどさあ。愛がこの時間に起きる必要ないじゃん。使用人ってわけでもないし、ゆっくり寝てたらいいよ」

「二度寝はしようかなって思ってる。でも、ただ住むだけって申し訳ないし」

「気にしなくていいのに」

「気にするよ。晶は守ってくれてるんだから」

「そんな大層なことはしてない」

黄光は早坂に興味があるわけでもない。自ら切り捨てたのだから当然だ。雲鷹も早坂を取り込めないとわかって手を引いている。光上家の庇護下に入っているため、手出しをしようとしても一筋縄ではいかなかった。

そしてこれは、他の勢力からも守る形となっているのも事実だ。いくら隠そうとしたところで、裏事情を知っている者は知っている。真っ先に四宮家から切り離された早坂愛を、他の家が狙ってもおかしくはなかった。そこへの牽制にもなるのだ。

早坂はその事も含めて何か返せるものがあればと話している。しかし光上はその事に微妙な顔をするしかなかった。どのみち戦争にはなるのだ。一時の安寧の保証にしかなくなってないし、巻き込まれちゃうのも事実。本当なら、早坂がそれに巻き込まれないように手を打たなかったが、そこまでの力は光上晶にはない。

「安全を保証できるわけじゃないし」

「とか言っちゃって」

保証はできない。けれどその覚悟はある。はつきりとその目に書かれていて、早坂は小さく微笑んだ。ずっと守る側で、ずっと一人でやってきた。それが今はどうだ。頼りにしていい友達ができて、ちよつとしたお姫様扱いされて。嬉しくないわけがない。

早坂と話したいことはいろいろとありそうで、それなのになんだか話題が出てこない。今後話せる時間も増えるし、これからランニング

に行くのだから今はいいかと切り替えて着替えることに。

「ちよつ、何しようとしてんの!?!」

「何って、着替えだけど?」

徐ろに服を脱ぎ始めた光上を早坂が慌てて止めた。顔を横に逸らしつつ、待ったをかけるように両手を突き出して。その顔は赤くなっており、いかにも耐性がないことを表していた。

「私がいるのにそのまま着替える!?! 一言言ってほしいし!」

「……やっぱそれが普通だよな。うちの親がおかしいだけだよな」

「家族と友達を同列に扱うのがおかしいんだって!」

「同じ屋根の下で住んでたら家族感出てくるけどな」

「今それはいいの! 私を外に出るまで着替えは待って!」

「りよーかい」

いったいどんな思考をしてるんだと思いつつながら光上の部屋を出る。ドアをしつかりと閉め、そこに背中を預けて深呼吸。初めて見た彼の上半身は、バランス良く鍛えられていてスリムだけど引き締まっていた。何度かその胸に体を預けたことを思い出し、せつかく落ち着いてきた鼓動も再び高まる。フラレたけれど、彼のことを異性として見ていることに変わりはないのだ。

「愛。着替え終わったから部屋出たいんだけど」

「あ、ごめん」

ドアから離れると、中から運動着に着替えた彼が出てくる。ランニングするためのカジュアルな格好だが、上着も用意してあるようだ。体を冷やさないためのものだろう。

玄関へと向かいつつ、後ろを歩く早坂へと振り返る。その顔は少し不満そうで、早坂はそれがわからずきよとんと小首を傾げた。

「使用人じゃないんだから、後ろ歩かなくていいのに」

「……癖ついちゃってて」

「将来何をするのか知らないし、その癖を無くせとは言わないけど、隣を歩いてほしいかな」

「取り方によってはプロポーズ」

「違います」



「揶揄うのはいつも通りだなと言うと、それも癖だと返ってくる。なんとも言えない気持ちになり、黙り込んで早坂が隣に来るまで待った。横に並べば再び玄関へと足を進める。」

「軽食は食べないの？」

「玄関にラスクが用意されてるから、それを摘んでる」

「それお菓子じゃ……」

「戻ってきてから朝食だし、いつもそんなもん」

「……じゃあ、私が今度からサンドイッチ用意したら食べてくれる？」

「睡眠取ってほしいから駄目。使用人たちが誰もいないのもそれが理由」

「………晶のバカ」

「せつかくの好意を受け取ってくれない。可能な限りの恩返しのもりなのに。朝食を作るのも考えたが、それは料理人の仕事を奪うことになるからできない。可能なこととしたら昼食だろうか。」

「ならお昼ご飯。私がお弁当作るから食べて」

「嬉しさと申し訳無さが混同するんだが？ あと購買のおばちゃんがくれるし」

「交渉する」

「おばちゃんが納得して、愛が睡眠時間削らないなら」

「元から少ない方だし、今さらだから」

「駄目。7時間は確保」

「………過保護」

「なんとでも」

「7時間の睡眠を確保となると、早坂の生活時間は確実に変わる。約2時間ほどは増えるわけだ。体に染み付いた生活リズムを今から変えるのも難しいが、光上はそこを納得はしてくれないだろう。」

「睡眠時間を減らすのは体に悪いし、美容にも致命的じゃないの？」

「私はこの通りだけど」

「それでも、若い時の無理の積み重ねは後々ツケが回るって話だから。愛はゆつくり休んで」

「言われた生活リズムに慣れるまで時間かかりそう」

はあとわざとらしくため息をつきながら言う。早坂の言い分だつて光上にもわかる。慣れた生活のほうがいいんじゃないかと確かに思う。けれど、仕事をしなくてよくなったのだから、その分今まで削っていた時間を増やしてほしい。主に睡眠と余暇。

「あ、じゃあ慣れるまで一緒に寝るか」

「馬鹿なの!？」

その方が余計に寝られないということをおわかっていないようだ。しかも、フツた相手と一緒に寝るとか正気じゃない。それはもうイジメじゃないかと言いたい。

玄関に着き、靴を履いた光上が立ち上がって早坂の方へと振り返る。呆れた視線が突き刺さる。軽く睨んでいるのも地味に痛い、誰が考えても光上が悪い。言い逃れはできない。

「そーいや髪切ったんだつたな」

「京都で切ったし、付いて来てくれたじゃん。……前のほうが好き？」  
「印象は変わるけど、どうだろうな。その長さはちよつと懐かしさもあるし」

「伸ばす前に会ってるからね」

「うん。どっちも好きって言ったら怒る？」

「そう言うだろうなって思ってたって返す」

「ははっ、読まれてたか。愛のきれいな髪、好きだよ」

「……圭がいるのにそういうこと言っちゃうんだ？」

「嘘はつけない性分だから」

内心ではやらかしたと思っている。とはいえ、本心であることも事実だ。光上は早坂の髪が好きだし、早坂もその事に気づいていた。髪を切ると話した時に、少しだけ寂しそうにしたのを見逃さなかった。ちよつとそれで躊躇ったけれど、決めたことだからと自分に言い聞かせて美容室に行ったのである。

「それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そのやり取りが新鮮だった。光上はこの時間ならいつも一人で静かに家を出ている。使用人たちが眠っている時間。起きなくていい

と言っているから。

早坂にしても、この時間に人を見送ることはまずない。そして、使用人としてではなく、対等の友人として見送るのは新鮮だった。癖になりそうな感覚。けれど、今後はやらせてくれないのだろうと思い、少し残念。

彼を見送り、二度寝のために自室に戻ろうかと思ひ踏みとどまる。せっかくだから彼の部屋に行こう。男の子の部屋で物を漁る。ベタなことをやってみよう。何もなさそうだけど。

(光上家は、わりと質素な内装なんだ)

財力だって大きなものがあるだろうに、富裕層にしてはそこまで綺麗びやかさに欠ける。あえてそうしているのだろうし、その辺りも調整なのだろうか。

この屋敷は光上の祖父が内装を弄つたのだが、そういう事情は早坂の知るところではない。用意してもらった自分の部屋ではなく、光上の部屋へと入る。かぐやの部屋のように、珍しいものもなく面白くない部屋。ダーツができるくらいか。

「ベッドの下もエロ本の1つも無い。収穫なしか〜」

本棚に視線を向ける。参考書、図鑑、文庫本。いろいろと置いてある中で目立つのはアルバムだ。卒業アルバムでもない。光上自身のアルバム。それに興味が惹かれるのも仕方ないこと。早坂はそれを取り出し、光上の椅子に腰掛けてアルバムを開いた。

「かわいい」

最初はやはり赤子の頃の写真。小さい頃に出会ったとはいえ、もちろん知らない時期もあるし、出会った後も見てない部分が多い。パラパラとアルバムを見ていって楽しんだのも束の間。思っていたより写真が少ないことに気づいた。正確には、写真を取られている年齢か。初等部卒業よりも先に写真が途絶えていた。ふと思つたことを確認するため、もう一度最初から見直してからアルバムをしまう。

「これは……圭が見たらどう思うんだろ」

別に彼女の盗撮とかがあるわけじゃない。ここにあるのは光上晶の写真だ。彼自身がどう思っているのかは知らないし、勝手に見てる

から聞くわけにもいかない。

それに、問題があるわけでもない。ちよつと、光上家の根源みたいなものが見えた気がしたただけだ。

圭と合流し、毎度のように新聞配達のコースを付き添って走る。変わらない日常でも、なんだか以前とは違う感覚。こうして一緒に過ごす時間が好きなのだと思つたからか。

圭も仕事には慣れたものであれど、時間内で終わるように自転車を漕ぐ苦勞自体は変わらない。体力もついてしんどさがマシになつたぐらいだ。なんなら、筋肉がついて足が太くならないか心配している。スリムでありたいものだ。

「報告してきますので。体を冷やさないように気をつけてくださいね」

「ありがとう。上着持つてきてるから大丈夫だよ」

「すぐに戻りますから」

汗を拭いてから上着の袖に手を通す。暖かくして待つということを示せば、圭の懸念も和らぐというもの。それでも早く戻つてくるといふのは、心配されているのだろうかと思つて少し自信を無くしそうだ。

圭としては心配もあるけれど、それよりも早く戻つて光上と一緒にいたいだけである。光上はその可能性も考えたが、自惚れては恥ずかしいだけだと否定していた。思春期である。

（白銀さんを――）

早坂の気持ちもよくわかる。好きだから巻き込みたくない。好きだから遠ざける。それは自分もやろうとしたこと。けれど、圭の気持ちを知つたことで決意は更に固いものになつた。圭の隣にいるという断固たる決意。

そのためにも、彼女には話さないといけない。彼女の父親にも。光上家は四宮家とぶつかる。白銀圭を危険に晒す。御行はかぐやと一緒にいるため危険が少ない。四宮かぐやも光上品も守ろうとする人物。どちらからも守られるという点で最も安全な人物だ。

けれど、圭の場合は事情が異なる。光上と付き合ってしまったえば、四宮から最も狙われやすくなる。ただの一般人だから、明らかな弱点となる。守り抜くという誓いはできても保証はできない。けれど、この気持ちは腐ることのない光上の決意だ。

「光上さんどうかされました?」

考え事をしていて気づかなかった。本当にすぐに戻ってきた圭は、心配そうに眉を下げて光上の手をふわりと包み込んでいる。いつの間にか力拳を作っていた手を。その手は優しく、儂げな印象を受けるほどに柔らかい。彼女の手が汚れていない表れで、彼女の純白さを顕現している。

「怖い顔されてますよ」

「……そう?」

「はい。そう見えます」

「ちよつと考え事してて……」

どう誤魔化そうか考えた。そしてその思考を止める。いつまで彼女に隠すつもりだと。話さないといけないことじゃないか。フランスに行くまであと2ヶ月程度しかないのだ。

細く息を吐いた。圭はそれを、光上が寒がっていると思い、彼の手に息を吐いて温める。人の良さが出ているその行為が可愛らしく、心から愛おしさがこみあげて来る。

「ありがとうございます」

「どういたしました。帰りましょうか」

「そうだね」

彼女に包まれていた手は、そのまま彼女の手と繋がる。以前とは違う点は、指を絡めていることか。

ああ、心が温まる。たしかに冷えていたようだ。彼女の体温がとてもし温かい。女性は末端冷え性になりやすいはずなのに、彼女の手はとても温かった。

「修学旅行は途中で終わられてしまったそうですね」

「うん……いろいろあってね。でも、楽しめたよ」

「お土産も持ってきてくれましたもんね」

光上が東京に帰ってきた日。彼は真つ先に白銀家に向かい、電話をできなかったことを改めて謝罪しながらお土産を渡した。その時に説教されたことは記憶に新しい。電話をできなかったことじゃない。病院を抜け出したことだ。なぜそれを知られているのかと御行に視線を向けたが、犯人は御行ではなく藤原だった。

体調を崩して入院。翌日に脱走。体調に一切の不調はなかったという点を除けば、やらかしたとしか言えない客観的事実。真相を話すわけにもいかず、光上はただ謝り続けた。

「反省はしてないけど後悔してない。そんな顔されてましたけどね」「うぐっ……」

「別にいいんですよ？ 私は子供ですもんね。大人の事情とか言っって隠し事されても仕方ないですもんね」

「……ごめん」

謝るしかない。白銀家のあるアパートへと到着し、その敷地内で圭と向き合う。冷えのせいか、頬が上気している。その清澄な瞳は汚れがなく、戻るべき場所を示してくれる。

話してくれないのは別にいいと思った。自分の知らない世界があることぐらいはわかっている。光上はそっち側の人間で、それを知らないようにしてくれていることもわかる。けれど、理屈と感情は別物だ。わかってはいるけれど、共有したいという気持ちもある。その世界を知った上で、力になりたいと思う。そう思うことは、いけないことなのだろうか。

「白銀さん。放課後の予定は空いてるかな？」

「え、はい。生徒会もないですし、空いてますよ」

「よかったら、俺とデートしよう」

「行きます」

食いつくように言った。圭ははしたなかったと羞恥し、光上は気にしてないように微笑む。承諾されたことが嬉しかったから。

「大事な話もあるんだ」

ぎこちなかった歯車が回りだす。

2人の歯車は、噛み合うために近づきつつあった。

## 第49話

生徒会メンバーは昼休みを生徒会室で過ごすことも珍しくない。仕事如山積みになつている時など、放課後だけでは処理が追いつかなくなるからだ。主な理由はそこになるのだが、ただ昼食を取るだけという理由でも生徒会室を使うこともある。今日は後者であり、御行とかぐやは言葉を交わしながら生徒会室に向かう。周囲に隠さないといけないことだが、付き合い始めた2人が一緒に昼食を取りたくなるのも無理はないのだ。

「今日くらい早坂と過ごしてもいいんじゃないのか？」

「火ノ口さんや駿河さんの先約がありますから」

髪を切つた早坂が今朝四宮家の別邸に姿を現し、かぐやと一緒に学校に行こうと誘つた。使用人としてではなく、1人の友達として。それが早坂のしたいことで、かぐやも望んでいた形。かぐやはそれを言わなかったが、気持ち为重なつていたことが心底嬉しかったものだ。

御行はそこに気を遣つたのだが、かぐやの言うとおり先約がある。早坂の友人である2人は、これから1週間早坂を連れ回して遊ぶつもりだ。かぐやにその気が無くとも、四宮家に仕えることでその機会を今まで奪つていたのも事実。今は手を引くのが筋だと判断した。

「あ、かぐやと会長じゃん。お熱いし〜！」

「あれええ!?! 愛さん!?!」

「あははは! めっちゃ驚いてる。チョーおもしろーい！」

「四宮先輩と早坂先輩って仲いいんですね」

「修学旅行で距離がグツて縮まったからね〜」

生徒会室に入ると何故か居る早坂にかぐやと御行は啞然とした。かぐやは大きく口を開けて驚いている。御行は早坂の隣に座っている光上に視線を送り、説明を求めた。ちなみに石上は早坂と光上の対面に腰掛けている。

「昼はこっちで遊びたいんだと」

「なるほど」

シンプルな理由だった。いいリアクションをしているかぐやをケラケラ笑っている早坂にちらりと視線を向け、素で楽しんでいるだけと判断したら御行も石上の隣に移動する。かぐやには声をかけなかった。自分の隣に来るか早坂の隣か。好きにしてもらおうと思っただからだ。自分の隣を選んでもらった時には内心でガッツポーズしている。

「愛さんのお弁当は自作ですか？」

「ううん。ママが作ってくれたんだ。食材は光上家のだけど」

「そうでしたか。奈央さんが……………光上家？」

「え、どゆこと？」

「今は晶の家にいるから」

「この野郎……………」

「待て石上！ そのトイレットペーパーをどうする気だ！」

何故瞬間にトイレットペーパーが出てくるのかはわからないが、石上の手にかかれば簡単に召喚されるようだ。荒れる石上を御行が取り押さえ、代わりにかぐやの鋭利な視線が光上に向けられる。向けられた本人はケロツとしているが。

「住むとこないらしいし、うちの親が許可出したから」

「意外と事情が深そうな話ですね」

早坂が四宮家に仕えていたことを知らない石上にとっては、結構重たい話が出てきたなという感覚である。あまり触れない方がいいのだろうと思い、追及はやめることにした。ラッキースケベは許さないが。1男子としては、同年代女子と同じ屋根の下なんてそんな美味しいシチュを許す気はサラサラないが。

お昼を食べつつ、話題は別の話へ。2年生たちが修学旅行に行っている間に、藤原の妨害を警戒して日程を組み立てた石上と子安のデート。それがどうだったかを御行は聞きたいのだが、早坂がいるため話を切り出せない。石上は早坂に事情を知られていることを知らないから。

「そういえば光上先輩。誰かに横浜に遊びに行くって誘われませんでした？」



話題を切り出したのは石上。その内容に聞き覚えがあり過ぎる早坂とかぐやは一瞬動きが固まった。それに気づいたのは光上ぐらいか。

「誘われてないけど、なんで？」

「あ、いえ。誘われてないなら別に」

「そこで引くのか」

「もし誘われたら、行ってあげてください。その人きつと自分から誘うのとか苦手な人だと思うので」

石上は頑張る人のことを人一倍応援する。たとえ報われないのだとしても、その勇気と行動は賞賛されるべきだと思っている。だから、結末が決まっても、その勇気には応えてほしいと思った。

横浜のくだりに全く関係ない御行はひとまず静観することに。石上が横浜の件を知ったのは、子安とのデートプランをかぐやに相談したのがきっかけだ。かぐやは早坂に相談し、早坂から提案されたのが横浜デート。早坂の脳内シチュでは完璧なプランである。

で、そこになぜ光上が絡むのかと言えば、その頃に光上は横浜に行ってみたいと話していたからだ。生徒会の面々は聞いているし、かぐや経由で早坂も知った。つまり、早坂はその時「光上との横浜デートプラン」を作成し、そのままそれを提案。かぐや経由で石上が知り、「その人光上先輩のこと好きなのかな」と察したのである。

「まだ俺は何も聞いてないし、そうなんだろうな」

ちらりと隣に視線を向ける。ポーカーフェイスで誤魔化しているが、恥ずかしそうにしているのは見破れた。ここでバラすのも忍びなく、その話は保留に。

「ああそうだ。石上にもお土産買ってきたんだった」

「マジっすか!？」

「無難にお菓子にしちやっただけだ」

「いやこういうの貰えるの初めてなんで嬉しいっす!」

「はいこれ」

「おお……! おお?」

「ユーフォドロップス」

「よく見つけましたねえ!」

それを選んだ理由は、お土産にお菓子は無難だから失敗しない。石上相手ということを考慮し、アニメキャラ書かれてたらそれでいいだろうという失礼な思考である。見つけ出したのは一緒に行動していた早坂のおかげだったり。

「飴玉自体は普通のと変わらないらしいから安心して食えるぞ」

「ありがとうございます」

「光上に先を越されてしまったか」

「え、まさか会長も?」

「もちろんだ。四宮と考えて決めたからな」

「僕こんな幸せ味わっていいんですか? 明日死ぬのかな」

「会計くんネガティブ」

早坂がすかさず茶化し、苦笑しそうな空気を吹き飛ばす。コミユカの高さはさすがの一言である。

「あれ? 班って男女別ですし、会長と四宮先輩は別クラスですよね?」

「えっ、あつああ。そうなんだが、生徒会の後輩に向けてのお土産だからな。相談して一緒に考えてもらったんだよ」

「藤原さんとも選びたかったんですけどね」

「いやそれで正解ですよ」

「相変わらず藤原への評価酷いな」

ちなみに、藤原も2人と合流したのだが、そのタイミングがお土産を買った後だったために、藤原は個人でお土産を購入している。

「光上先輩は圭さんにも買ったんですか?」

「もちろん」

「そういえば今日妹の機嫌が良かったんだが、何かあったのか?」

「いや? 放課後デートに誘ったぐらいだけど?」

「そうか。……デート? まじで?」

「うん」

視線が光上に集まる。何も無い日に彼が圭をデートに誘うのは、これが初めてだと言える。圭の誕生日の時は、石上に言われての帰国。

二度目の水族館デートは藤原に言われて決まったこと。三度目は自分で誘っているが、文化祭というイベント日。特別な日でもなく、誰に言われたのでもない。自分からデートに誘っている。それは彼の成長とも言えよう。

「放課後は来ないけど、問題ないよな？」

「まあ仕事も特にないからな」

「コイバナしてました？」

「あれいつもより藤原先輩に勢いが無い！」

「藤原先輩不調ですか？」

他人の恋話ともなれば勢い良く駆けつけてきそうなのに、今日の藤原は勢いが無い。1000ccバイクから原チャに乗り換えてるかのよう。一緒に生徒会室に入ってきた伊井野は心配そうだ。

「いえだって晶くんの話とか聞いてもねえ？」

「光上くんに対してはそんななのね」

「純粹に応援して終わりですよ。進展とかは気になりますけど」

「光上がうちの妹を放課後デートに誘ったぐらいだな」

「へへ。事件じゃないですか!!」

「事件か!？」

光上から誘うという時点で事件らしい。驚きポイントなのだそう。失礼なことを言われている気もするが、これまでの行いのせいである。光上はそのリアクションを甘んじて受けた。

「放課後デートはどこに行かれるのですか？」

「伊井野それ聞か？」

「ふ、風紀委員としてよ！」

「俺って変なところ行くとか思われてる？」

「晶だから読めないんだろうね」

「そういうわけではないですよ！ 本当ですよ！」

「単に気になるって言えばよ」

「石上うるさい」

藤原よりも伊井野の方が食いついていた。ラブ探偵の助手だろうか。ワトソンならぬミコソンだろうか。ワトソンと違ってポンコツ

臭がするのは何故だろう。ミコソンも優秀な人のはずなのに。

「まあまあミコソンくん。こういうのは直接聞いても駄目ですよ」

「ミコソンって誰だ」

「そうなのですか？ 千花ムズ先輩」

「おい伊井野に悪影響出てるぞ」

「彼女の成長が心配になってきますね」

他人の恋話ほど興味深いものはない。しかし昼食を取った後の光上は眠そうに船を漕ぎ始めるもので。藤原はそれに気づいて伊井野を止めておいた。今聞いても確な情報は手に入らないから。

それには早坂も気づいていて光上に教室に戻るように誘う。それに大人しく従い、光上は弁当を片付けてソファから立ち上がった。段々と強くなる眠気を感じつつ、早坂と一緒に生徒会室を出る。光上はいつも教室で食べて寝るため、昼休みに生徒会室に来ること自体珍しい。今日は、早坂が誘ったために生徒会室に行ったのである。

「圭とデートするんだ」

「ん、まあね」

「スキがないというより、ちょっと焦ってるね」

「時間がないから」

「どういうこと？」

「……帰ったら愛にも話すよ」

フランスに行くことを早坂にまだ話していない。けれど、それは早坂にも話しておかないといけないことで、それより先に圭に話そうと決めている。その優先順位は間違えてはいけない。

「それより、横浜のことだけ」

「っ！ あ、あれは気にしないでいいのー！」

「行こっか」

「えっ？」

「せっかく考えてくれてたんでしょ？ デートってわけにはいかないけど、一緒に遊びに行くぐらいならね」

「……圭も誘う気？」

「愛の好きにしたらいいよ」

「晶のばーか」

男女で遊びに行けばそれはデートとして周囲に映るのに。一般的にデートと言われる状況を作っても構わないのだという。光上の気持ちは揺らぐが、圭にだけ向いているという証。見方によれば残酷な現実を突きつけられているだけ。けれど早坂はそうは受け取らない。その甘さについて、甘えてやろうと決めた。

左手につけてあるシユシユを触る。かぐやのお付きになってから日が浅い頃に、かぐやからプレゼントされた大切なシユシユ。前までは髪につけていたけれど、髪を切った今では髪につけられない。けれども大切なものだから、肌身放さず今も持っている。

「私をフツたこと、後悔させてあげる」

彼の前に躍り出て、挑戦的な笑みを浮かべて宣言した。

放課後になり、SHRが終わると光上は中等部へと足を運ぶ。生徒会室では石つばか石ミコかでのカップリング論争が始まろうとしていたが、光上の知るところではない。一役買うこともなく静観して終わるものだし、そもそもそんな事が起きてるとか思っていない。石つばはともかく、石ミコ要素あったんだレベルである。最近仲が少し良くなったなかで全然気づいていない。

早坂も友人たちと遊びに出かけた。時間に制限こそかけていないものの、夕飯の有無と帰る時間は奈央に伝えるように言っている。早坂母もちやつかり住み着いていた。

中等部に向かっていると、途中で反対側から圭が歩いてきていた。それもそうだろう。圭は光上との関係を隠している。周りに知られたくないのだ。恥ずかしいから。自慢しようとも思わない。恥ずかしさが勝つから。思春期である。

「白銀さん、お待たせ？」

「この場合はどうなんでしょう？」

くすくすと笑う様子は子リスのようで愛らしい。光上也釣られて笑みをこぼした。

「どこに行くのか決めてなかったですよね」

「白銀さん門限とかある？」

「特に言われてませんが、生徒会で遅くなっても8時には家に着いてます」

「なら目安はそこかな。普通のことしてみたいし、カラオケとかでもいいかな？」

「もちろんです」

これから向かう場所は決まった。ここから近い場所だと、中等部と高等部両方の生徒に知られる可能性が高くなる。圭はその事を懸念し、近くの店はやめておこうと提案。光上はそれを家に近いほうがいいと解釈した。双方の認識にズレはあるが、衝突することなく向かう場所が決まる。

光上はいつも車で登下校しているが、今日は圭と放課後デートをするため、迎えはいらないと伝えてある。使用人達に新たに追加されている仕事は、早坂愛の護衛だったりするのだが、早坂本人はその事を知らない。

白銀家は自転車でおよそ1時間の距離。歩いてその付近まで向かうのもおかしな話で、2人は電車を使うことに。秀知院学園の多くは富裕層。徒歩か送迎の車がほとんどであり、電車を利用する生徒は極わずか。案外他の生徒に知られる可能性は低いのだ。

「あの、1駅分歩きませんか？」

「え？ どうして？」

「その……他の方に見られるとちよつと……」

「そっか。じゃあ歩こうか」

「ありがとうございます」

特に断る理由もないためそれを承諾。他の生徒に見られたくないのならば光上はルートを変更した。秀知院生が通ろうとしない小道。身を守るために大通りを通るのは常識で、だから細々とした道は穴となる。日本は基本的に治安がいいものの、いつ何が起きるかはわからない。周囲をさり気なく警戒しつつ、圭と並んで道を歩く。

だからといって何が起きるわけでもなく、昼間からの酔っぱらいを

見かけたり、電柱にベロチューしてるやばい人がいたぐらいでとても平穏だった。圭には刺激が強いと思い、光上が圭の目を塞いで歩いたためカオス空間が生まれただけだ。とても平和である。マザーなテレサもにっこりだ。

1つ隣の駅に着き、切符を買って改札を通る。電車に乗る経験の少ない光上は、切符が勢い良く吸い込まれるあの瞬間が苦手だったりする。指まで吸い込まれそうな勢いまじ怖い。生爪とか持つて行かれそうだな。

「人も多いね」

「いつものことです」

帰宅ラッシュ。放課後の時間であればピークでもないのだが、人の移動が多過ぎる首都東京ではこの時間でも人の数は多めだ。他県によつてはまず見られない多さかもしれない。ともあれ、おしくらまんじゅうをするほどの人の数でもなく、ゆとりはある。他の人の邪魔にならないように、ドア付近では留まらず中の方へと進んだ。降りる時は少し大変かもしれない。

空いてる席を我先にと座っていく人を眺めるのは、人がゴミのようだと言えるぐらいなんだか上位者になった気分。2人ともそんなこととは思わないし、阪神地域のおばちゃんのがめつきにはドン引きだろう。あれまじやばい。

「光上さん。大丈夫ですか？」

「たぶん」

人の数に慣れずに気分が悪くなったのかと圭は心配したが、事實は違う。光上は電車酔いしていた。まだ発射して1分なのに。圭は光上が乗り物に弱いことを思い出した。この男、新幹線で酔うほどの雑魚さである。

途中で降りようかと思ったが、どのみち徒歩以外での移動となると変わらない。頑張ってもらうしかない。圭がいることで、酔いの気持ち悪さは幾分かマシになっているらしい。

「……白銀さん」

「なんですか？」

「話があるって今朝に言ったことなんだけど」

「話のタイミングは光上さんに任せますよ。私も前に進みたいですから、受け止めるつもりです」

「……そっか。ありがとう」

先に話しておくべきか、カラオケの後に話すべきなのか。迷ったものの、選択権は……いや選ぶ責任は光上にあるのだ。その甘えも許されない。自分の弱さはすぐには直らないと自嘲し、彼女の強さに救われる。

まずはカラオケを楽しもう。余韻は壊れてしまいかもしれないけれど、放課後デートを楽しむことを優先したいから。

それから数分で、目的の駅についた。



## 第50話

薄暗いカラオケの個室の中、光上と圭は好きなように歌っていた。どちらも好きな人に歌を聞かれるという緊張があり、固さが抜けるのに数曲は要していた。2人しかいないために順番はすぐに回ってくる。歌い続けられないといけないわけではないのだが、歌わないと勿体無いと思ってしまうのだ。

カラオケの薄暗さからムードが出来上がり、おっ始める人も中にはいるだろう。基本的に監視カメラがあるからやめておいた方がいい。監視カメラがないカラオケもあるらしいが、喘がず歌え。ここはカラオケだから。

光上と圭がそういうことをするわけもなく、順繰りに歌い続ける。圭は流行のものが多く、光上は有名所の曲を選びがちだった。

「光上さんもご存知の曲の方がいいですよね？」

「気にしなくていいよ。白銀さんが好きな歌を知っていききたいし」  
好きな人の好きなものを共有したい。こうなる気持ちは誰にでもあるだろう。光上も例外ではなかった。圭も好きな歌ものを知ってもらい、共有できることに喜びを感じた。

光上も圭も、カラオケに全然来ることがないため、レパートリーが少ないのがこのデートの失敗点だろうか。一旦歌い終わると、2人揃ってドリンクバーに向かう。休憩もあるが、歌う曲を迷っているのも理由だ。正確には詰まったと言ったほうが正しそうだが。

「これとこれを混ぜると美味しいですよ」

「チャレンジジャーだね」

「萌葉が飲んでました」

「白銀さんも飲んだんじゃないの？」

「……1回だけ」

行儀が悪いことだと思ったのだろうか。圭は知られたくなかったようだ。しかし自分から話題を振っている時点で墓穴を掘っている。1回だけ飲んだことを認め、少し苦々しそうに顔を逸らす。

光上はそれを行儀の悪いものだとは思わなかった。そういうことはあるものだとは知っているし、店によっては組み合わせを推奨している場所すらある。今回は圭に教えてもらったのもあり、光上が飲み物を2種類混ぜた。

「？ 美味しいんでしょう？」

味は圭自身が確かめている。それを疑う気もないし、美味しいと言ったあの言葉に嘘がないこともわかつている。

「光上さんがそういうのをするのが意外だと思ひまして」

「やったことないからね。試してみたくなくなったんだ」

「では私もこれにします」

光上が圭を真似、圭は自分を真似た光上を真似る。どちらも、相手がやったからという理由で飲み物を混ぜ合わせていた。

個室へと戻る。防音にはなっているはずだが、廊下を歩いている時に他の部屋からの声は聞こえていた。声からして近い年代の人たち。平日ということと、時間帯からしてサラリーマン世代はいないようだ。

「独特な味だけど、美味しいねこれ」

「そうなんですよ。萌葉に言われた時は疑いましたけど、これが結構いけるんです」

特製ドリンクの感想を言い合い、中等部の友達と遊ぶ時の話も聞く。あまりお金をかけないようにしているようだが、学生割引があることでそれなりに遊べてはいるらしい。今時だとお金をかけない遊びもないに等しいだろうが、節約しながらでもなんとかなるようだ。

「白銀さん。この曲知ってる？」

「これですか？」

機械を操作し、これから歌う曲を検索にかける。画面が見えるように圭が隣に移動し、画面を覗きこんだ。距離が縮まったことでふわつと薫る彼女の髪の毛の匂いは柔らかく、鼓動が早くなっているのに心が落ち着いていた。

「あ、これ知ってます……っよ」

パツと顔を上げたところで気づいた。光上との距離が近く、顔の距

離も10cmはなさそうだ。目と鼻の先とまではいかずとも、意識してしまふには十分過ぎた。

「す、すみませんー！」

「い、いや別に……」

どちらも赤らみながら視線をそらした。言葉もうまく出てこず、聞こえてくるのは己の鼓動だけ。

今までだって手を繋いだり、距離が近くなったことはあったのに。顔がここまで近づいたことはなかった。さっきまで意識してなかったわけじゃないが、これのせいで余計に意識してしまう。歌おうと思った曲はデュエットソングなのに、この調子では歌えそうにない。

「……白銀さん」

「は、はい」

「大事な話……今するね」

カラオケが終わってからにしようと思っていたが、続行できそうな空気ではなかった。ヤケになって歌うとそれこそ話をする空気も作れなさそうで。そう思った光上は、今切り出すことにした。高揚した頬はまだ引いていないが、それは圭も同じ。話を聞こうと目を合わせでは、恥ずかしそうに視線を逸してしまう。

それでもいいと思った。話ならちゃんと聞いてくれると信じているから。

「来年度にはフランスに行くことが決まったんだ」

「……………え？」

今何を言われたのか。言葉はわかるのに、その意味が理解できなかった。

「主治医が向こうにいてね。手術を受けることになったんだよ」

「手術……ですか？ え、でも……ランニングできてますし……」

「延命措置みたいなものだったんだよ。最低でも高校卒業までは日本にいたかったから、苦肉の策でしかなかったけど」

「……手術は……成功率はどれくらいですか？」

「高いよ。そこは安心してほしい。難しい手術だけど、主治医がそれのエキスパートだから」

はたして成功率が7割に及ばないものを、高い成功率だと言ってもいいのか。それは審議したいものであるが、光上の中では高いらしい。それとも、圭に安心してほしくてそう言ったのか。どちらにせよ、圭はその言葉を信じた。数値を言わなかったのに、高いという言葉の方に逃げたのに。

「……成功を信じます。光上さんが元気になられることを」  
信じているのだ。光上なら大丈夫だと。彼ならそういう苦難を乗り越えられると。

それと同時に理解する。文化祭の時に光上が話そうとしていたことは、この話だったのかと。もう1つ話があるということも見破り、努めて暗くならず話を聞く姿勢を保つ。彼だって話しにくいことだから。

「ありがとう。白銀さん」

光上もまた、圭がハリボテでも聞く姿勢を維持してくれていることに気づいた。叶うことなら全てが嘘で、日本で一緒にいられると言いたい。ずっと一緒にいられると。君のとなりにいると言いたい。

けれど現実はその許してくれない。光上は話さないといけない。もう1つの話、四宮家とのことを。

「それとね。……これも言いにくいことなんだけど、うちの家が四宮家との抗争を始めることになった。だから、その……」

「……………側にいたら、巻き込んでしまう」と

「……………そうだね」

圭は日本にいるし、四宮家だって日本にいる。四宮家と衝突するにしても、光上はフランスにいるのだ。彼と深い関係になったとして、それがバレれば自分の身が危ない。それぐらい圭にだってわかるし、最悪の場合兄と父にまで手が及ぶかもしれない。かぐやの影響で防げるのか怪しい部分だ。圭は知らないことだが、そのかぐやも御行と共にスタンフォード大に行こうとしている。危険性はむしろ圭が思っているより高い。

「私が……………光上さんの( )迷惑に——」

「ならないよー!」

「っ！」

重ねるように否定した。圭の存在が迷惑になるわけがない。そんなことはあり得ないと力強く言い切った。

圭の根底にある恐怖「恋愛感情は永遠じゃない」という話。それがあるから、圭はこの話をより深く重く受け止めた。自分の存在が邪魔になるから、光上は離れてしまおうと考えた。

「白銀さんが迷惑なわけがない」

「……なんで、そう言えるんですか？ 客観的に考えて、私はいなくなつたほうがいいじゃないですか。恋愛感情は永遠じゃないんですよ？」

「俺が白銀さんのことが好きだから」

「……っ！ そんなの……」

「この気持ちは変わらない。もちろん口だけで証明できることでもないし、すぐに簡単に証明できることでもない。だから、これからずっと証明し続ける。白銀圭のことが、誰よりも好きなんだと」

光上が見せる答えはそれだけだ。好きであり続けるといふ誓い。言葉にできることはそこまでで、後は実行し続けるだけ。

簡単なことではない。まだ未練があつて離婚届に判子を押していない白銀父のように、一方通行の感情になつてしまう可能性だってある。たとえ光上が好きであり続けられても、圭の気持ちはどうなるかは本人次第だから。

「怖いんです」

目を伏せて圭がぼそりと呟く。

「私も光上さんのことが好きで……。うちの両親だつて好き合つて結婚したはずなのに……。だから、もしかしたら、私も母親みたいになつちやうかもしれないって……」

怖いのは光上の関心が消えること。それと同じくらいに怖いのが、自分が親と同じ道を辿つてしまふかもしれないこと。

彼女の小さな手を包み込む。小鳥に触れるように優しく。大人びていようとも、気高くあろうとも、彼女は14歳の女の子だ。怖いものもある。不安に押し潰されそうにもなる。その小さく華奢な身体

は、ひと針で儂く崩れてしまいそうだ。

「途切れさせないよ」

何を言えば正解か。どう言っても効果覲面とはいかないか。

それでも言葉は必要だ。言葉に表し、実行に移す。結局のところ、できることはそれだけなのだから。

「白銀さんの気持ちが消えないように努力するから。自分を磨き続けて、白銀さんをずっと好きでいる。だから、白銀さんも信じてほしい」  
信じたい気持ちはあるのだろう。ただ不安があるから信じ切れる自信がない。彼女の瞳からそれを読み取る。

「白銀さんはずっと好きでいてくれた。恥ずかしいことにいつから好きでいてくれたのかはわからないんだけど、俺が気づいてない間も根強くそうあり続けてくれた」

今にしてみれば、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。一方通行の恋なんて綱渡り。恐怖の風に常に煽られているのに、彼女はそれを進んできたのだ。

「小さい頃に祖父が亡くなって、その一件で人間不信なところもあったんだよ。関係なく距離を詰めてきた人もいたし、壁を突破してきた人もいたけど」

藤原千花とか。白銀御行とか。

「白銀さんみたいに、壁を溶かしてきた人は初めてだよ」

彼女の瞳には、すべて見えていたのではないかと思えてしまう。全部見抜いて、その上で距離を詰めていたのかと。

「少し驚いたし、嬉しかったよ。そういう人もいるんだって。人に嫌われてもおかしくないような生き方してるからさ。白銀さんが、普通の世界を引き込んでくれる」

ただの恋愛よりは何倍も面倒だろう。普通の恋とは言えないかもしれない。けれども、普通の恋愛に近いものへと引き込まれた。

「白銀さんの純粋さが好き。困っている人をすぐに助ける優しきと行動力があるところが好き。努力を重ねる姿勢が好き。少しお茶目なところがあるのも好き。俺を見抜いてくれるのが好き。だから、ずっと側にいてほしい」

見上げてくる彼女の視線と交差する。お互いしか映さないこの瞬間が何よりも愛おしい。

「白銀圭さん。あなたのことが好きです。付き合ってください」

彼の言葉が嬉しかった。ずっと望んでいた言葉がようやく届いたのだから。その喜びに胸が痛む。悲しみなんてない。胸を満たす幸福感で、この胸が張り裂けそうなだけ。

その喜びが陰る。不安は常に付き纏うもの。たとえ願いが叶っても、その先にはずっと不安があるから。

「はい。喜んで」

それを振り切って言葉を絞り出した。頭の中で鳴る警告を無視して、今は目の前にある幸せに飛び込む。望んでいたのだから、勇気を出すしかないじゃないか。

背中に手を回され、ぎゅつと優しく引き寄せられる。大切そうに扱われ、それを受け入れながら彼の肩に手を置く。さっきと同じように距離が無くなり、顔と顔が近くなる。高鳴る鼓動が今は後押しに感じて、静かに瞳を閉じた。その僅か後に唇が重ねられた。

何秒そうしていたのか。長かったのか短かったのか。時間の感覚は消え去り、そっと離れて目を開く。気恥ずかしそうに微笑む彼が見えた。

「圭って……呼んでいいかな?」

「は、はい……。私も下の名前でもいいですか?」

「もちろん」

「えと、晶……さん」

「……ははっ、なんか照れくさいね」

「でも、好きです」

名前で呼び合うこと。これもやりたかったことで、より親密になれた気がする。『好き』という言葉も、言うだけで心がきゅつと絞められる。『好き』という言葉も好きだ。

「それでね圭。フランスに行く話なんだけど」

「うん……」

「一緒に行けないかな?」

「え？」

「フランス校の入学時期とかは日本に合わせられてる。授業の進捗もほぼ変わらない。それに、フランスに来てくれたら一緒にいられて、圭を守ることができる。だから、一緒に来てほしい」

「それは……。私だって一緒にいたい……。けど」

「わかってる。だいぶんが悪い話だ。もし駄目だったとしても、必ず帰ってくるから。その時は待っていてくれる？」

「晶さんと一緒にいたい……」

「それは……。俺もだよ」

弱々しく話す彼女を包み込む。気持ちは一緒だと。離れるのは辛いことで、待たせたくない。けれど、現実的なのはそちらなのだ。

大学生の息子となれば海外に1人飛び立たせられるだろう。しかし、まだ中学生の娘となれば話は別だ。たとえ光上と一緒にだろうと。圭1人で決められることでもなく、白銀父の許可は当然必要となる。

その後、時間になるまで適当にデュエットで歌い、圭を白銀家まで送り届けた。

そして翌日の放課後。圭と共に白銀家へ。生徒会の仕事はあったけれど、御行が事情を知っているため問題なし。翌日にこなせばいいとのことだ。

白銀父は職業不定で、いつどこで何をしているのかは子どもたちにもわからない。だから圭は前日の夜に、時間を指定して家にいるように伝えておいた。これで入れ違いになる心配はない。

「何度か来てるけど、一番緊張するなあ」

「大丈夫……ですよ」

「話し方は無理に変えようとしなくてもいいよ」

「ううん。だって……。付き合ってるから」

もじもじしながらそういった圭が可愛らしく、抱きしめたい衝動をなんとか抑えた。気持ちを切り替え、一度深呼吸する。圭に視線を向



けて頷くと、圭も頷いて家のドアを開けた。

「ただいま」

「おうおかえり。晶くんも久しぶりだな」

「ご無沙汰してます」

「さあそこそこに座りなさい。お茶もいれよう」

「いえお構いなく」

白銀家のリビングにあるテーブル。座る場所を指定するように座布団が敷かれており、光上は圭と横に並んで座った。お茶が置かれ、対面に座った白銀父にお礼を言う。

「あの、何かお仕事中でしたか？」

「ああこれのことか」

テーブルの上に置かれていたのはノートパソコン。仕事中だったなら申し訳ないと思ったのだが、どうやら少し違うらしい。

「娘を任せられるかリスナーに意見を求めようと思って」

「真面目にやってよ！　なんでそこで視聴者使おうとするの!?　真面目な話をしに来たのに！」

「え、お父さん娘さんをくださいって話じゃないのか？」

「合ってるけど！」

「どうとう付き合ったか。御行も彼女ができてるし、ますます面白くなってきたな」

「間違ってもネタにしないでよ！」

エンジンはすでにかかっていたらしい。待っている間に起動ぐらいはするか。

2人の会話の一部だが、光上はついていけない部分があった。迷ったがひとまずそれを聞くことに。

「視聴者というのは？」

「あ……」

「圭パパ実はユーチューバーデビューしてたんだ」

「……まじっすか」

「まじ。ほら」

ノートパソコンの画面が向けられた。そのチャンネルに映ってい

るのは間違いなく目の前にいる人物で、チャンネル登録者数もえげつない人数になっている。これは大物ユーチューバーと言えるのではなからうか。

「最近での一番の収入源これ」

「この数だとそうなるでしょうね」

隣で沈黙している圭が気がかりなのだが、今は触れないでいたほうがいいのだろうか。大変難しい選択である。

「娘が彼氏連れてきたとかやったら大反響だろうな。炎上もするだろうけど」

「え？　もしかして圭も出演してる？」

「お。父親の前で娘の名前呼びか。やるね」

「私は出演というか……」

「生配信の時にたまに後ろを通ってたりしてるね。その度に赤スパくるし、圭の人気は高いぞ」

成り立てではあるが、彼氏としてはなんとも言えない気持ちである。家族のチャンネルで出ているのだから、別に問題はないのだけれども。ネットという広い海に圭の姿が流れていると思うと苦い顔をするしかなかった。

「冗談かガチか。娘さんをくださいなんて言う人もいるしな」

「そういう人も湧くでしょうね」

「ははは。火がついてきたな」

「父さん。晶さんで遊ばないで」

「たった今、今年で一番ダメージ受けたわ」

娘が彼氏の名前を下の名前で呼ぶ。わかりきっていたことではあるものの、予想以上に結構キツイらしい。これはリスナーの中で死人が出るなど思い、ノートパソコンを閉じて机から下ろす。

「付き合うこともそのまま結婚も別に構わないが？　晶くんという人物にはそれなりに評価しているつもりだ」

「順番めちやくちやー！」

「それ以外でも話があるんだろう？　そちらを聞かせてもらおうと思ってるな」

予定していた話の順番も吹っ飛んだというか、主導権を完全に白銀父に握られた。思い返してみても、この男を相手に話の主導権を握れたことなどなかったのだが。それができるのも別居中の母親くらいではなからうか。

光上はフランスに行くことを話した。手術のために行かないといけないこと。術後のこともあり、どう足掻いても年単位でフランスにいくということ。四宮家との抗争もあり、圭と一緒にフランスに行きたいのだと。

「ほう。そういう話か」

さすがにこれは快諾なんてないと思っていた。予想通り白銀父はしばらく考える。そして重く口を開いた。

「駄目だ」

「パパ私は——」

「圭と付き合うのも結婚するのもいい。だが、それならなおさら今は共にいるべきじゃない」

光上晶という人間は評価している。しかし娘を危険な目に遭わせるのは話が別だ。光上家と四宮家の抗争がどうなるかもわからない。四宮家と四宮家がぶつかり、その結果どうなるかも。そんな時に圭と一緒にいるのは得策ではない。愚の骨頂である。

「今の君は高校生だ。しかも手術後はしばらく入院だろう。それでどう圭を守る？　ぶつかることが決まっている時点で争いは始まるんだ。今この瞬間もスキを見せるべきじゃない」

「それは……」

「何度も言うが、俺は2人の関係自体は反対しない。応援するさ。だからこそ、2人は関係を隠す必要がある。圭もフランスに行くべきじゃない。2人の関係を隠せば、目立った繋がりが無いということになり、圭の安全性がより増す」

至極当然の話だった。付き合っていることが知られなければ、圭は完全に対象外になる。抗争の外側にいる一般人と同じになるのだ。巻き込まれる可能性は激減する。守りたいのであれば、安全圏に離しておくべきだ。光上の場合ならなおさらに。

「圭が高校を卒業するまでにすべて片付けてきなさい。それができれば、君のことを信頼できる。そういうことが起きる世界でも圭は守られると信じられる。その時に正式に2人の交際を認めよう」

「……パパのバカ！」

「圭。これは——」

「わかってる！ けど……私は晶さんと一緒にいたいのに！」

「だが駄目だ。こればかりは認められん」

「……2年で帰ってきます」

圭の気持ちは痛いほどわかる。光上だつて圭と一緒にいたい。片時も離れたくない。いや、積もりに積もった感情の多さからして、圭の気持ちは誰にも推し量れないだろう。

それを考慮したとしても、圭の安全性を担保できないのなら、共にいるべきじゃないという意見を覆せない。大人の世界を知っている白銀父を納得させられる材料など持ち合わせていない。彼の目からすれば、光上晶もまだまだ子どもなのだから。

だから光上は宣言する。手術を受けたとして、動けない時期を考慮し、最短で決着をつけて帰ってこられる日数を。親の意見も知らない。これは自分の人生なのだから、自分の中での優先順位を間違えない。

「晶さん……？」

「どう考えても安全性を担保できるものを提示できない。確実性が高いのがそれしかないことも理解できてしまう。……だから、俺にできることは最短で帰ってくることだけ」

「圭もそれで納得しなさい」

「……できないよ……。そんなのできない！」

「話は終わりだ。俺は夕飯の具材でも買ってこるかな」

白銀父が出ていき、家の中には2人だけが残った。制服のスカートを強く握り締める圭に光上は謝罪しかできない。身勝手な感情で、彼女を振り回してしまったことを。

「ちがう……ちがう……！」

首を左右に振って否定する。

「パパが言ってることが正しいのもわかってる。その方がいいってわかってる。わかってるのに……！」

声が段々と湿っていき、圭の目の端からそっと涙が溢れる。光上は圭に声をかけようとすることも、次の瞬間には圭に押し倒されていた。光上の上に乗る彼女は軽く、印象よりも実像が小さいことをつい忘れがちだ。彼の頬にポタポタと雨が落ちてくる。上にいる彼女が降らす雨が。

「はやく……かえってきて」

「うん……」

「ぜったい、かえってきて」

「約束するよ。2年以内に帰ってくるから」

返事はなく口を塞がれた。柔らかなその感触は愛おしく、小さくついでに彼女に手を伸ばす。光に照らされて輝く髪も、清澄の如き瞳も愛おしい。

「大好きだよ」

同時に放たれた言葉だった。

空港のロビーで人を待つ。夜に輝く月の色をした美しい髪は腰にまで届き、汚れを知れど曇りなき瞳は蒼穹のようだ。

誰もが目を引くような美しさを備えたその少女は、モデルにスカウトされることもあったがそのすべてを断った。親の収入は決して安定したものではないけれど、モデルになると誰かのものになってしまう気がして首を縦に振れなかった。父親もその意見を尊重していた。

ロビーで到着する飛行機を確認し、時間を確かめる。今到着した飛行機に目的の人が乗っているはずだ。到着してすぐに人が出てくるわけでもなく、キャリーケースが出てくるのを待つ時間を考慮してもあと10分は待たせよう。今出てきている人も、違う飛行機から降り

てきた人たちだ。

頭ではそう分かっているつもりでも、今か今かと待っているため落ち着かない。何度も腕時計をちらちらと確認して、きよろきよろと出てくる人の中に彼がいなか探してしまおう。

「圭？」

後ろから声をかけられた。

ドキツとして振り返ると待っていた彼の姿がそこに。

「え？ あれ？」

予想外の場所から来られてガチ困惑。大人びた綺麗さを兼ね備えているのに、ぱちくりと子どもらしく反応する。それが妙にギャップに感じられて、彼はくすつと笑みを零した。

「家用ジェットで帰ってきたからね」

「それは聞いてない！ 時間しか聞いてない！」

「ああ、似た時間に到着する便があったのか」

「絶対わざとでしょ？」

「いやそんなことはないよ？」

どうだかと疑う彼女に、本当だよと返した。彼女にしてみれば、別にそんなことはどうでもいい。彼が帰ってきたことが嬉しいんだ。1年と8ヶ月12日ぶりの再会だから。

だから、我慢できなくなったのも仕方ない。

「晶さん！」

「つと」

彼に飛びつく。実に長かった年月。ぽつかりと空いてしまった穴を埋めるように、彼の首に腕を回して強く抱き締める。彼もそれを受け止めてくれて、そんな彼と唇を重ねた。

周りの目なんて知らない。自分の世界は彼が彩り、彼が全て。

彼もまた彼女を強く抱き締める。もう二度と離れたくないと言わんばかりに。タガが外れたように。

「おかえりなさい」

「ただいま圭」

愛に調整なんて効かないのだから。

断片

早坂愛プレゼンツ「横浜デート」〜理想と現実の狭間で〜

新年が明けて某日。冷気だけは立派に仕事をする東京の冬。雪が降ってるのは八王子。23区では降ってない。降ったとしてもすぐに溶けていく。東京23区で雪が積もることがあれば、それはきつと天気の子の仕業だろう。

厚着をするも電車の中は暖房が強くてサウナ状態。その極端な寒暖差にお腹を壊す人もいるだろう。毎日壊していたらご愁傷さまである。そうならなくても、汗をかいてしまう人も多い。電車の中では上着を脱いで、降りてから着直すなんてこともザラになる。すし詰め状態なら不可能だ。地獄は地の底ではなく首都圏にあった。

そんな地獄も時間帯によっては味わうことがないわけで、光上は酔いに耐えながら車窓から外を眺めて桜木町駅に到着する。集合時間の30分前。改札の外で待ち合わせなのだが、改札を通る前にばったりと早坂と合流してしまう。

「同じ電車だったのか」

「そんな気はしてたけどね」

顔を見合わせてはふわりと笑い合い、揃って改札を通る。デートの集合時でのドキドキ感は特になかった。

光上がこの時間に来たのは、酔いを冷ますためであることと、早坂より後には来たくないという意地だ。それに打って変わって、早坂は我慢がでしなかつたからである。光上より後に来て「ごめん待った？」とかやろうと妄想していたのだが、待ち切れずに別邸から出てきたのである。

早坂はおもむろに手袋を外し、それを汲み取った光上の方から手を伸ばす。冷えた空気の中、たしかな温度が手から伝わってくる。それを手放さないように指を絡め合い、肩が触れ合うほどに近づく。

「愛から誘ってくれて嬉しいよ」

「うあつ……」

「……まだ慣れないか」

「う、嬉しいんだよ？　でも、恥ずかしい……」

「かわいいやつ」

「もう！」

意地悪く笑われ、早坂は手を繋いでない方の手で光上の肩を叩く。けれどその頬は緩んでいて、早坂の気持ちが顔に出ていた。

早坂のことを知っている人からすれば、今の彼女を見て「誰!？」とか言うだろう。辛うじてかぐやだけが認識できるぐらいか。

早坂愛は、好きな人の前ではとことん甘くなる。マザコンである彼女が、母親と会えるだけで幼児化するのがその証拠だ。そして今は横浜市にいます。秀知院生などいない。彼女のことを知っているのは、今隣りにいる光上だけ。早坂は理性が半分消えている。

「慣れないなら呼び方戻すけど」

「それは駄目！　慣れるように、これからも呼んで」

「うん。わかった」

手を繋ぎながら早坂の選んだ道を通る。今日のデートは早坂のセツティングだ。いつも忙しくしている彼女のため、出かける時はいつも光上の方がセツティングするのだが、今回は早坂の方がしている。いつも任せていることへの申し訳無きもあるが、それだけじゃない。もう一つの理由の方が、どちらかと言えば大きい理由だ。

「だって、かぐやが妄想呼ばわりしてきたから」

「横浜デートを俺の方から言えてたらよかつたんだけどな」

「ううん。それは気遣ってくれてたからでしょ？　私は十分それが嬉しいよ」

「そう言ってもらえると俺も気持ち良かったが」

毎日の激務。それをこなしている早坂のことを考え、出かける時は近場になっている。都内から出ることもなく、片道も40分以内の範囲にしている。時には家で一緒に過ごすだけ、という日も作っているくらいだ。



それが裏目に出たのかと光上は考えたが、早坂はそうじゃないと否定する。一緒にいられるだけでいい。かぐやとの話はまた別だ。

横浜デートをするならこうしたい。そんなプランニングをして、早坂は脳内シチュエなら完璧である横浜デートを作成。それをかぐやに話したら、何を持って完璧だと言っているんだと引かれたのが事の発端である。そんな話になったのは、石上のデートの話からの派生だ。

「愛のプランが完璧だと証明するためか」

「ん。変な理由挟んでごめんね」

「謝ることじゃないだろ。愛が考えてくれてたつて思うと普通に嬉しいし」

「よかった」

安堵したように一瞬だけ頭を光上の肩に押し当てる。名前で呼ばれることに慣れるのはもう少し先か。照れ隠しも込めて押し当てたようだ。

2人が付き合い始めたのは最近のこと。けれど互いの思いはずっと前から通い合っていた。光上と早坂は付き合い合っているという話は中学時代から存在し、間違った認識が広まっていることをどうしようかと悩んだが放置していた。2人はそれが事実になればいいと思っていたから。

早坂の仕える四宮家と光上家の関係からして、2人が付き合うわけにはいかなかった。現代版ロミオとジュリエットに近い状態。

そんな状況が変わったのが最近のことである。早坂に送られた「四宮かぐやのお付きの解任」が、2人の間にあつた壁を全て吹き飛ばした。2人の関係の情報が学外に出ないように徹底封鎖したのが功を奏した。

「お付きの任務から外れた？　じゃあ正式に付き合いおう」

話を聞いた直後の光上の反応はこんなところである。早坂もそのメールが来たとき、寂しさと同時に喜びを感じた。障害が勝手に消えたから。

早坂の解任。こうなると早坂の身柄も危なくなる。控えている修学旅行は場所が京都。本家がある場所であり、本家に顔を出すことが

決まっている。光上は同行する気満々だが。早坂のためなら本気で全てを敵に回せるような男だから。

そんな物騒な話はさておき、そういう流れで2人は付き合えるようになったのだ。光上は早坂のことを下の名前で呼ぶようになり、早坂は呼ばれる度にむず痒さを感じる。恥ずかしさよりも幸福度が勝っているようだが。

そして早坂もまた、光上のことを下の名前で呼ぶようになったのだが、こちらはまだ慣れていない。

「今日のデートプランはどこまで考えてる?」

「夜まで」

「ははっ、完璧主義だな」

「長い?」

「いや。愛といると時間は忘れるからすぐだろ」

「すぐそうやって煽てる」

「そのつもりもないけど」

海に面している汽車道を通る。冬の空は雲が多いが、今は日が差し込んでいて心地よい。海風は塩気を運び、冷気も帯びているがこの2人の前では無力。その冷たさが2人の熱を程よく冷まし、デートの手伝いをしている状態。

「愛って雰囲気重視するよな」

「冷静に分析しないで……!」

御行程ではないにしても、早坂もまたロマンチストな面がある。臆病さを垣間見させる彼女が、自分の考えたプランを出してきた。それは理想を出しているのと同じ。その小さな勇気もまた、光上は可愛らしいものだと思う。

辺りは人気がほとんどなく、散歩している老人くらい。若者の姿はない。それもそのはずで、今日は平日だ。本当なら2人も学校にいないといけない。つまりおさぼりデートである。

光上が学校をサボった。信じ難い話だが、現実はこの有り様だ。もちろん学校が休みの日にしようという提案はした。週末に控える修学旅行が終わってからにしよう。

それを早坂が拒んだのだ。速やかに立証したかったから。

「汽車道を抜けたらどこに行く?」

「ハンマーヘッド。ハングリータイガーでご飯食べよ」

「まだ昼には早いけど……シエアして食べればいいか」

「元から量多いし、それがいいと思う」

人気のスポットと言えど、平日ともなれば人が少ない。少し寂しい気もするが、2人で思う存分満喫できるならそれでもいいかと光上は自分を納得させる。早坂のプランの詳細は聞いていないが、かぐやに馬鹿にされたとなると、相当理想を詰め込んだプランであると見抜いているのだ。

目的の店へと入り、店員に案内してもらって窓側の席に座る。港町ということもあり、ここもまた海に面している場所だ。海を眺められるこの景観は人気の理由の一つに挙げられる。

「どれ食べる?」

「ここはあきらみに選んでほしいかな」

「愛がそう言うならそうするけど、愛の意見も聞かせてほしいな」

「うん。いいよ」

向かい合って座っており、光上はメニューを早坂に見えやすいように置いた。最終的な判断が任されるのなら、参考意見として早坂にくつつか選んでもらいたいのだ。

早坂がページをめくっていく。どこを見てもガッツリとしか肉料理だ。主にステーキ。サイドメニューにサラダやスープ、ドリンクもあるがそちらはおまけ程度。光上は反対から見ながら、各料理の食べ物の量に苦笑した。これは分けないと食べ切れない。早坂も光上もそこまで多く食べられるわけじゃないから。

「その限定にするか」

「……バレた?」

「今の愛は分かりやすいよ」

「それは気を付けとかないといけないね」

「フォローし切れない部分はあるしな」

早坂が四宮かぐやの使用人であるということとか。学校内で伏せ

ている部分のフォローは、光上でもできない範囲だ。今は2人きりだから問題ないのだが、他の場所でも今のような調子なら困りものだ。店員を呼んで注文を済まし、待っている間に今後の予定を聞いておく。予定を把握している方が動きやすい。

「この後はワールドポーターズで映画見て、コスモワールドで遊んで、カップヌードルミュージアムでオリジナルカップヌードル作って、人力車で中華街に移動。ディナーはそこで済ませて、クルージングして、赤レンガでスケートして、最後は丘公園」

「ごめん。これは擁護しきれない」

「なんで!? 完璧なプランでしょ!？」

「平日でも全部満喫するのは厳しいぞ。時間配分考えてないでしょ」

「そんなことないし……。ちゃんとシミュレーションしたもん!」

まさかの恋人からのダメ出しに、早坂は拗ねてそっぽを向く。光上は困ったように苦笑し、妥協案を考えてから早坂の頬に手を伸ばした。視線を合わせさせ、今後の予定をすり合わせる。

「2回に分けよう」

「2回?」

「そう。今日行くところと次回行くところを決めよう。修学旅行の後の休日にまた来よう」

「……でも……」

「今日しか来れないわけじゃないんだから。1つ1つの場所で時間かけて、それぞれで思い出をいっぱい作ろう。そういうのじゃ駄目かな?」

「……駄目じゃないけど……」

それをするということは、自分のプランが駄目だったと認めることになる。かぐやには「やっぱり完璧じゃなかったじゃない」と言われるだろう。百歩、いや一万歩譲ってそれは耐えらるしよ。けれど早坂のこのプランに口を出している人物はもう1人いる。

「かぐやはこれ会計くんにも話してるから」

「石上に? あー、子安先輩とのデートプランを四宮さんに相談してこの流れになったのか」

「夢詰め込み過ぎって言った」

「実際そんな感じはするな」

「晶のばか」

光上は笑って流し、運ばれてきた料理を見て頭を悩ませる。この店限定のバーガーなのだが、なかなか大きく高さもある。どうやって食べるのが正解かわからない。

「けどさ愛」

「なに？」

一旦バーガーのことは頭から外し、拗ねた早坂への対応を優先する。早坂もバーガーをどう食べようか悩んでいたようで、素直に返事をしてくれた。

「愛の夢以上のものを叶えさせる自信が俺にはあるよ」  
「え」

「夢心地気分を味わせ続けてみせる。だから、四宮さんへの意地よりも、俺と過ごすことを選んでほしい」

「あ……。ごめん」

早坂は言われたことを理解し反省した。今は光上とのデート中。けれど頭の中では、かぐやと石上に自分のプランは完璧だと証明することを考えていた。恋人にデート中に他のことを考えられるのは、誰であれ面白くないだろう。立場が逆なら、早坂も一言言わせてもらっていた。

「愛のプランを完全に崩す気もないんだ。1日で横浜を満喫できるのって楽しいだろうし」

「うん……」

「だから、今日と次回は下見ってことにしよう」

「下見？ ってことは」

「そういう事。下見して、修正箇所を見つけ出して、3回目で実現させる」

早坂のプランを諦めさせる気は光上になかった。せつかく考えたものなら、より精度を高めて叶えればいい。そのために時間を費やすことも惜しまない。光上也また、早坂のプランにケチつけられたこと

に思うところがあるのだ。

光上の考えに賛同できた早坂は、今日のデートプランの変更を決めた。話が済んだところで、早めの昼食であるハンバーガーに手を付ける。ナイフとフォークも運ばれており、明らかに切って食べるものとわかる。ナイフとフォークは2人分用意されており、それぞれ反対側から食べていくことが可能だ。

「アメリカンサイズってやつかな」

「ほんと大つきいよね」

「必要だったら俺が半分以上は食べるから」

「ん。ありがとう」

早坂だって乙女の少女。カロリーも気にしている。綺麗な景観を見られるからと選んだ店だが、メニューを見ていてそのカロリーに絶句していた。

ハンバーガー以外にも、申し訳程度に添えられている野菜類。ポテトだけは量が多い。

「食べるのは大変だけど美味しいな」

「そう言ってもらえて安心した」

早坂が選んだ店だ。元より味に対しての疑いなどない。信頼による味の期待値。それを十分に満たしたということである。

メニュー次第では、食べさせようかと早坂は思っていたのだが、このハンバーガーではそれもできそうにない。ちよっぴり残念だが、美味しそうに食べてくれる恋人の顔を見られるだけでも満足だ。

昼食を済ませたらワールドポーターズへと移動。今日の予定は、映画鑑賞をし、コスモワールドで遊び、クルージングに行つて終了だ。中華街やカップヌードルミュージアム、赤レンガでのスケートは次回に持ち越しである。

平日の昼間だとやはり人は少ない。見たい映画を何の気兼ねもなく見られる状況。今上映してる作品は何かを見ながら、どれを見るか相談する。

「愛は観たい作品ある？」

「これとか観たいかな」

「ゾンビ好きだっけ？」

「かぐやみたいにすぐ惚気ける人物が真つ先に殺されそうじゃん？」

「理由が酷いな……。四宮さんに言いたいこととかあるんだろうけどさ」

「そりやあもちろんいっぱいあるよ。10年分」

「それを話せる場は用意する。それまで待つてて」

「うん」

修学旅行中か、あるいはその後か。早坂が解任の件を打ち明ければ、かぐやはどう動くのか。その辺りを頭の片隅に留めておき、今に思考のすべてを向ける。

光上が見たい映画は特になく、理由が理由だが早坂の選んだゾンビ映画を見ることに。30分後に上映が開始されるようで、それまでの間にグッズコーナーを見たり、公開予定の作品を見たり。時間が近づけば飲み物とポップコーンを買って入場する。

「そういえば、会長とかぐやも2人で映画に行ったことあったんだっけ」

「へー。あれだけ駆け引きしてたのに行けた日があったのか」

「うん。席は斜め会長の斜め後ろだったらしいけど」

「どうしてそうなった」

「チケットを別々に買ったらしくて」

「あー……なるほど」

その光景が簡単に想像できた。いかにもその2人らしい展開だ。光上と早坂はそんな事にはならず、ちゃんと隣に並んで座る。ポップコーンは早坂が抱え、光上に口を開けさせて食べさせる。さつきできなかったから今やるのだ。

「映画始まったらすすがに自分で食べるからな？」

「もちろんわかってるよ」

「ならいいや。それじゃ、愛もあーん」

「うえっ!?! う、あーん」

小鳥のように小さくを開け、今度は光上がポップコーンを食べさせる。早坂の口の開け方が小さかったため、食べさせるときに指先が唇

に触れた。

「やつぱ……今から自分で食べよ……」

「ははっ、そうするか」

唇に触れられたことで、早坂の頬が赤くなる。光上も照れ臭そうにしているが、早坂が俯いているため気づかれることはない。

2人が作り出す空気に、少し離れた席に座っていた老夫婦が微笑む。懐かしさと初々しさのコントラストがいいようだ。お年なのだから、映画の途中で心臓が止まらないように気をつけてほしいものだ。

映画が始まればそれまでの空気も徐々に霧散されていき、段々と映画の世界に引き込まれていく。それでもポップコーンを食べる手だけは止まらない。早坂の予想通り、かぐやに近いキャラ性の登場人物も素早くゾンビになっていた。前情報か何かで知っていて選んだのではと光上は訝しんだ。

そんな映画鑑賞も終われば、何やらスッキリした様子の早坂と一緒にコスモワールドへと移動。何やら修学旅行生っぽい集団もいるが、遊び放題と言えるような状況。

「前にテーマパーク行った時は生徒会のメンバーもいたけど、今は2人だし自由だな」

「どこから行く?」

「ひとまずは、アレ乗ってから決めよ」

「いいね」

どこから行くか悩むぐらいなら、とりあえず見えているものから乗ればいい。そんな気楽な考えのもと、ジェットコースターへと乗り込む。乗り物に壊滅的に弱い光上だが、車内特有の匂いもないこれなら乗り物酔いはしない。

「休憩しよ……」

「だと思った」

乗り物酔いはしないし、ジェットコースター自体は楽しめるのだが、最後の停車寸前の振動で調子を崩した。緩急に弱いらしい。自分で走る分には問題ないのに。



人目につかず、けれど日当たりのいい神ベンチを見つけてそこに座る。少し休めば回復すると光上は言っているが、これは次のアトラクションも考える必要がある。とりあえず、コーヒーカップ系の回るものは除外しよう。

「晶。横になつた方が楽じゃない?」

「座ってるだけで大丈夫」

「だよ。横になろつか」

「話聞いてた?」

首に腕を回され、強引に体を横にさせられる。頭に感じるのは、柔らかな質感のある早坂の脚。光上はじーっと早坂を見つめた。

「恥ずかしいならやらなきゃいいのに」

「晶にしかやらないからいいの」

「役得だけどさ……」

「晶だつて照れてるじゃん」

「愛のが感染ってるだけ」

頬を染める早坂に釣られて光上も耳を赤くする。これまでは、付き合っていないからと言ってこういうことはしてこなかった。あつたとして、行事の時に一時的に手を繋ぐ程度。デートだつて、実質的なデートだとしても遊びに行っているだけだと脳内で処理していた。早坂も、四宮家の使用人の体をなしていた。

すべては、本家に気づかれないようにするために。こうして付き合えるようにするために。

だから、恋人という意識を持って、男女の関係だと認識しての恋人らしいことは初めてなのだ。

「晶?」

膝の上で頬を緩めている光上に声をかける。

「いや、長かつたなつて」

「……そうだね」

出会つたのは10年前。初等部の1年生の時。初めは光上のことを警戒していた。底知れない人物だと。

仲良くなつたのは3年生の時。当時の担任の企画で、隣の席の人と

プレゼント交換をする事になったのがきっかけ。早坂は図書カードを渡した。担任と光上とかぐやに「渋い」と言われたのを覚えている。光上が早坂に渡したのは髪留め。それはまだ使用していないが、大事に取ってある。

——早坂さんに似合うと思つて

無邪気な笑顔と共にそう言われ、早坂は不覚にも心を動かされた。他の女子からの情報により、光上本人が買いに行き、2時間悩んで決めたことだと知った時には後悔した。自分が渡したものは、1分もかずに部屋にあつたものを選んだだけなのだから。

——謝られてもな……。あ、じゃあ今度一緒に本買いに行こう。早坂さんに選んでほしい

それから話す頻度が増えた。体育祭、自然学校、修学旅行。行事の度に同じグループになる。監視のためという名目に助けられた。

好意を伝えられたのは中等部の時。早坂は戸惑い、やがて静かに頷いた。けれど間に壁があるから付き合えない。その状態から5年経つて今に至る。

「愛とこうしていられるのが、幸せに思える」

「私も、ずっとこうしてたかった」

「膝枕？」

「違う！ わざとでしょー！」

「うん」

調子を戻した光上が体を起こし、立ち上がって早坂に手を差し出す。次のアトラクションに行こうと。早坂は手を重ね、指を絡めてから立ち上がった。こうすれば、離れなくて済む。

その後に戻ったアトラクションは、光上曰く優しいもので、調子を崩すことはなかった。日が傾いてくると、夕日を眺めながらコスモワールドを後にする。

夕食を済ませた頃にはすっかり日が沈み、横浜の夜景を見るためにクルーズ船に乗る。展望デッキに上がれば風を感じることができ、光上の酔いも軽減される。

定刻となつてクルーズ船が出港。ガイドにより、どこの光がどうい

うものかわかる。それを楽しむのもいいが、空を見上げれば星も見える。相変わらず雲が多いが、負けじと星の輝きが届いていた。

「星と夜景、どっちの方が好き？」

「難しい質問が来たな」

「深く考えないでいいよ」

「……近くにいる光かな」

「？」

きよとんとする彼女の腰に手を回して引き寄せる。突然のことに驚いた彼女は、思考を働かせて今の発言の意味を理解した。緩みそうな口元を隠すように、トンと頭を彼の胸に押し当てた。

「ズルい答え方」

「深く考えないでいいって言うから」

「そうだけど……まあいいや。ありがとう」

そう言ってくれたこと。これまでのこと。何よりも、こんな自分を好きになってくれたこと。いろいろな意味を込めての「ありがとう」。

夢のような時間だ。夢かもしれない。夢なら覚めないでほしいし、夢じゃないでほしい。

「解任されたこと……ちよつと怖いんだ」

「うん」

「助けてほしい」

「任せろ。必ず守るから、俺の側を離れるなよ」

「よろしくね」

彼の背中に手を回して、ぎゅつと抱き締める。彼の腕の中にと、守られていることを感じられる。彼の存在を感じられる。

髪をそつと撫でられた。それで伝わる。

顔を上げ、軽く背伸びをする。彼の瞳を瞼に焼き付けるようにそつと目を閉じた。

「今までも、これからも。ずっと好きだ」

その言葉の返事は唇で返した。

## 白銀圭を祝いたい

当たり前のように30度の気温を超える猛暑の日々。所によつては酷暑。40度を超える気温の場所もあるそう。

日本の都市部はアスファルトの大地。毎日降り注ぐ熱線が漆黒の大地に吸収され、それそのものが熱を発する。気温よりも体感温度は当然高くなる。アスファルトに近い位置にいる幼児たちや犬や猫といった動物たちは、成人が感じる温度よりも暑く感じている。ベビーカーも注意されたし。散歩は早朝か夜間に行かれたし。

そんな真夏の日。夏といえばこの月という代表格たる8月。その始まりの日は、白銀圭の誕生日である。圭は8月をクソ暑い毎日だと思っているし、特別な思い入れもなかったりする。暑さとは正反対のクールな少女だ。

しかし今現在。圭の心の内は全くクールじゃなかった。(メイクする時間なかった……。どうしよ、服も急いで着替えたし……)

光上の緊急<sup>サフライズ</sup>帰国によつて、圭の感情は大きく揺れ動いていた。予想だにできなかった光上の来客。誕生日という日に会えたことの喜び。誘ったわけでもなく、彼の方から来てくれた。その事自体は大変喜ばしいことで、彼女は頬が緩みながらも急いで着替えた。

そうして支度を整え、出かけたのはいいものの、夏の暑さによつて現実に引き戻されて思考は冷静なものに。落ち着いてくると今度は懸念が押し寄せる。おしやれをしたい年頃の少女が、好きな異性を前にすつぴんというのは本人が気にするもの。

(せつかく2人で出かけてるのに……。2人? 2人きり?)

男女が2人で出かける。世間的にこれはデートと呼ばれる。

「白銀さんお昼は食べた?」

「え? あ、まだです」

「ならまずはお昼を食べに行こうか。希望はある?」

「希望ですか……」

圭の考え事を光上の言葉が遮る。お昼ご飯はまだ食べていない。というよりは、今日はあまりにも活力が湧かないために、お昼ご飯を食べる気もなかった。そこまですわらないでおけたのも、質問にイエス、ノーで答えるだけだったからだろう。

そんな状態の彼女が、お昼の希望を聞かれても咄嗟に答えられるわけもなく、しばらく黙って考え込んだ。

(光上さんと行くならどこがいいんだろ)

彼女の悩みは、何を食いたいかではなく、彼とどこに行きたいかのようだ。

光上家と白銀家では生活水準が違う。白銀家は外食など全くと言っていいほど行かないし、光上家は高いレベルの食事に慣れている。舌が肥えているのだ。そんな生活をしている彼とどこに行くか。どういう店がいいのかも彼女には見当がつかない。

「思いつかない?」

「……すみません」

「誕生日なんだし、白銀さんが行きたい所に行こうと思ってるんだけど」

「そう言われましても……。そもそも外食に行くこと自体滅多にないので」

「そっか。……なら、俺が場所を指定してもいいかな?」

「はい。決めてもらえると助かります」

「わかった」

彼の中のファーストプランは、圭の希望に応えること。しかし彼女の性格を考えれば、遠慮するかもしれない。その点を考慮し、光上はセカンドプランを用意していた。

白銀家での誕生日がどういうものか。それは御行を通じて知っている。お祝いらしいお祝いもなく、御行の1000円がしれつと圭の財布に入っているのだ。それを聞いて不憫に思う者もいるだろう。哀れむ者もいるだろう。しかし、御行も圭も、そんな視線を貰いたくもないのだ。

光上はそこに理解を示し、純粹にこの特別な1日をどう過ごして貰

いたいか考えた。

「スイーツパラダイスに行こう」

「へ!」

その答えがこれである。尚、石上の助言によるところが大きい。

ケーキを食べてもらいたいと考え、「それならスイパラがありますよ」と教えてもらったのだ。光上に聞き馴染みなどなく、スイパラを「スイッチパラダイス」と連想し、スイッチを押したらケーキが出てくる画期的な店なのかと感動したとか。

「スイーツパラダイスって、スイパラっていうあれですか?」

「うんそれ。嫌なら他の案を出すけど」

「い、いえいえ! 光上さんがそういう場所の名前を出すのが、意外だと思ってしまうただけですから」

「そう思われても仕方ないよ。俺も行ったことはないし」

やっぱり行ったことはないのかと、驚きのあまり丸くなった目も落ち着いて元に戻った。それと同時に、認識の齟齬が起きてないか気になった。自分が連想するスイパラと、光上が連想するスイパラに違いがあるかもしれない。

光上はスマホを取り出し、何やら電話をし始めた。横でその会話を聞いてみるに、どうやら店の状況を確認しているらしい。夏休みだと集客率はぐっと高まる。待ち時間も発生するに違いない。できれば店内で待ちたいものだ。外は暑いから。

「どうやら大丈夫っぽいね」

「そうなんですか? 夏休みだからってつきり人が多いと思っただけですけど」

「意外となんとかなるみたいだね」

そういうこともあるのだろうか。圭は感嘆しながら光上の隣を歩く。これがデートであるなら、手を繋ぐのもおかしなことではない。けれど、付き合っているわけでもない。しかもこの暑さだ。手を繋げばさらに暑く感じるだろうし、汗も気になって手を繋ぐどころじゃない。

まずもって、手を繋ぎたいという要望を口にできないのだが。

結局手を繋ぐこともなく、目的の店に到着する。電話で確認したように混んでる様子は見受けられない。それもそうだろうと圭は思った。やはり認識の齟齬がある。彼女が思い浮かべていたスイパラではなかった。

「お二人様ですね。ご案内します」

スイパラと言えば、ビュッフェ形式を思い浮かべるだろう。ケーキを始めとした数多くのスイーツがあり、数種類の主食類が一応置かれている。そんな店を想像する。

その形式自体はあった。見た目こそは誰もが想像するスイパラだ。けれど、店の雰囲気が違う。店内にある上品さ。ここに来る客層。普通の生活をしていれば関わることもないもの。圭は場違いさを感じた。

「落ち着かない?」

「……はい」

「周りは気にしないでいいよ。白銀さんも、これには慣れてるはずだし」

「慣れてなんかいませんよ」

「そうかな? 秀知院では感じない?」

「あ……」

感じる場違いさ。どこか既視感のあるものだと思っていたが、なるほどたしかに秀知院で感じたことがあるものだ。違いは、それを向けてくる人たちの年齢というだけ。考えてみれば、こういう場に未成年が2人だけで来れば注目も集まるといったものだ。

わかってくると肩の力も抜けていく。ほっと息を吐いた圭を見て光上も微笑み、一緒に席を立てて食べ物を取りに行く。雰囲気や客層が違うだけで実情は変わらない。席からの注文にも対応しているが、自ら取りに行く人もそれなりにいる。

「遠慮なく取っていいよ。食べ放題だからね」

そう言われても、好きな異性の前で遠慮なく食べられるかと言えば、乙女の彼女には難しい。その気持ちを正しく察したわけではないが、光上は自身から先にケーキの一切れを4つほど皿に乗せた。これ

により、圭も光上に合わせるといふ名目で数種類のケーキを取れる。

「飲み物は何がいい？」

「自分で取りますよ」

「なら一緒に行こうか」

「はい！」

サププライズ帰国による衝撃。スイパラという意外な場所。しかも予想外に高級。数々の混乱があったものの、彼女は調子を取り戻せていた。こうなってくると、純粋に光上との食事も楽しめる。ドリンクコーナーに行き、自分が飲みたい飲み者を選ぶ。昼食ではあるがスイパラに来ているのだ。ジュースだって気兼ねなく飲める。

クールな面が鳴りを潜めていき、入れ替わるように年相応の爽やかな笑顔が引き出されていく。藤原姉妹の影響なのか、それとも彼女自身がそれをしたがる一面を持つのか。圭はジュースを混ぜてみた。

「それ混ぜると美味しいの？」

「っ！………お、美味しいって聞いたことがあつて」

「そうなんだ。俺もやってみるかな」

「え!? いや、光上さんはそうしなくても……!」

「こういうのって興味あるし、白銀さんも飲んだことないなら、2人で体験するのも悪くないかなって」

そう言われて圭は口をパクパクさせた。光上と同じことをできるのは嬉しいし、「2人で」というワードが気恥ずかしくもある。

照れ顔を見られないように顔を逸らし、席に戻ろうと促した。彼の前を歩き、椅子に座ったところで深呼吸。なんとかポーカーフェイスを作り上げる。

「それじゃあ食べよっか」

「そうですね」

「いただきます」

それぞれ取ってきたケーキを食べる——前にジュースを飲んだ。オレンジジュースとマンゴージュースを混ぜたそれは、聞こえを良くすればミックスジュースだ。

「面白い味だね」



「そ、そうですね」

圭は頬を引き攣らせた。幸いだったのは不味くないこと。どちら  
も果物のジュースで癖もないのが救いだ。しかし、美味しいかと言わ  
れたら素直に首を縦に振ることはできない。

決して不味くないが、素直に美味しいとも言えない絶妙な味。どち  
らの味も口の中にあり、混ぜ合わさった1つのジュースとは言えな  
かった。果汁の割合次第では、美味しいものになっていたのかもしれ  
ない。

(光上さんに変なの飲ませちゃった……)

「白銀さんありがとう」

「え?」

気まずそうにしているとお礼を言われた。なぜお礼を言われるの  
か圭にはさっぱりわからず、彼が気を遣ってくれたのだと思った。

「自分じゃこういう発想しないし、体験することもなかったから」

「お礼を言われることでは……。微妙な味のを飲ませてしまってます  
し」

「あはは、気にするほどのものじゃないよ。少なくとも俺はこういう  
のを知れてよかったと思ってるし。白銀さんも重く捉えないで今日  
を楽しもう?」

「光上さん……。はい、ありがとうございます」

放たれた言葉とともに差し出されたケーキの一切れ。お礼ととも  
に彼女はその小さな口を開け、差し出されたケーキを食べる。口の中  
に広がる甘さ。ケーキを食べた記憶は数少ないが、これが一番甘く感  
じる。

(光上さんはケーキ選びも上手だなあ。……………あれ?)

視線を下げる。自分の皿にあるケーキは減ってない。彼が選んだ  
ケーキと自分が選んだケーキは、同じものもあれば違うものもある。  
今口の中にあるのは、おそらく自分では選ばなかったケーキ。それは  
別にいい。彼の選ぶものはきつとどれも美味しいし、彼の好みを知れ  
るという点で喜ばしい限りだ。

それよりもだ。自分のフオークが汚れていない。ケーキを口に運

んでくれたのは彼のフォークで、彼はそれをそのまま当たり前のように使っている。自分のケーキを一口サイズに切り分け、それを今度は自分の口へ。

(か、間接キス……！)

四宮かぐやからすればこれは濃厚接触なのだろう。もはやセツ！とか言うかもしれない。

「あれ？ 白銀さん食べないの？ もしかして調子悪かった？ ごめんね気づけなくて……」

「い、いえ！ 体調は何も問題ないです」

「本当？ 顔が赤い気がするけど……熱中症とか怖いし、水分もちやんと取ってね。時間も気にしないでいいからゆっくり休んで」

「本当に大丈夫ですから」

心配そうにする光上だが、原因は誰がどう見てもこの男にあった。しかし圭はそれを口にできるわけもなく、自分の皿に乗っているケーキを一口サイズに切り分ける。

そこでふと一計が舞い降りた。彼のケーキを確認。それから自分のケーキを見て、彼が選んでないケーキも一口サイズに切り分けた。それをフォークで刺し、彼の方へと伸ばす。

「さっき一口いただきましたので、お返しに光上さんも一口どうぞ」

「えっ、気にしないでいいのに」

「……食べてくれませんか？」

「食べるよ。ありがとう白銀さん」

しゅんと悲しそうに目を伏せられては光上も断れない。反射的に食べるといい、圭が差し出してくれたケーキを食べる。その事に圭は嬉しそうに笑った。

「白銀さんが選んだケーキも美味しいね。絶妙に甘酸っぱくて食べやすい」

「それはよかったです。光上さんから先程いただいたケーキも美味しかったですよ。控えめな甘さでよかったです」

「お口にあったようでも何より。個人的に甘過ぎるのは苦手ですね。クリームが多いやつとかも遠慮しがちなんだ」

「そうなんです。覚えておきます」

「うん。……うん？」

「気にしないでください」

圭が覚える必要があるのかと考えたが、気にしないでくれと言われて思考を止めた。女性は詮索されたくない時がわりとあるという事を、光上は知っていたから。

追及もなくあっさり引き下がってくれるのはありがたい。圭はほっと内心で息をつき、自分のケーキにフォークを伸ばした。それをすぐに口に運び入れることもできず、じーつと見つめてしまう。

(これを食べたなら、光上さんと間接キス……)

光上に意識してほしくてやったことだが、自覚してやっているために当然圭もそれを意識してしまう。最初のは意識外のために事故。過失だ。けれど今回は圭から仕掛けたこと。故意である。恋するかからこのこれだ。微かに震える手を自力で抑え込む。

意を決してそれを口の中に入れた。

「……今気づいたけど、これ間接キスだよ」

「ごふっ！　ごふっけほっ！」

「ごめん。タイミング悪かった」

それを言われたせいで咽る。咳が収まり、絶妙ミックスジュースを飲んで、目尻に涙を溜めながら光上を睨んだ。わざとやったと思えないタイミングだから。

「言っておきますけど、先にしてきたのは光上さんですからね」

「白銀さんにケーキ食べてほしいってことしか頭になかったんだけど……これは言い訳にしかならないね」

「お気遣いは嬉しいですけどね。間接キスが嫌ってわけじゃないし」意識してしまい、睨むのもすぐにやめて視線を逸してしまう。だから圭は気づけない。光上もまた気恥ずかしそうにしていることを。彼にも一応男の意地はあるから、彼女に見られていたら取り繕っていたかもしれないが。

気を取り直し、その後は別々にケーキを取りに行くなんてことにもならず、終始揃って食べ物を取りに行き、タイミングを合わせて食事

した。

「あの、光上さん。お会計って」

「ん？ もちろん奢るよ」

「それは申し訳ないです。自分の分は払わせてください！」

誕生日だからという理由なら、圭も納得すると踏んでいたのだが、一筋縄ではいかなさそうさ。兄である御行自身、誕生日を特別な日だと思っていない節があった。妹の圭もそう思っていて不思議ではない。だから、特別じゃないから奢られる理由がないと捉えられるのである。

しかし光上は譲らなかつた。圭が今現在、誕生日をそういうふうに認識しているのなら、その意識を変えさせたい。光上は純粹な思いでそう心に決めた。

「白銀さん。今日は払わせてほしい」

「誕生日だからですか？」

「うん。君が生まれた日だから祝いたい。奢りとか好きじゃないのだとしても、白銀圭が生まれたこの日はそうさせてほしい」

「そんな大層に言われるようなことでは……」

「そんな事はないよ。俺は白銀さんに出会えたことが嬉しい。恩とかを抜きにしてもね。だから、今日は特別な日にしたいんだ」

「光上さん……」

これはもう告白されてるようなものじゃないだろうか。圭は胸を高鳴らせながら、むず痒そうにその言葉を受け止めた。好きな人にここまで言われたら、断るなんてできない。

特別な日というのは、どう過ごしたらいいのだろうか。祝ってもらうにしても、きつとご飯を奢って終わりにはならない。明確には言われていないが、まだ何かありそうさ。それなら、何か要望を出してもいいのだろうか。少しだけ、我儘を言ってもいいだろうか。圭は様子を窺うように光上を見つめる。

「どうかした？」

「あの……。いえ、やっぱり何もありません。ご馳走様です」

「……白銀さん。今日は我儘を言ってもいい日だよ。他の人は難しい

のかもしれないけれど、今一緒にいる俺はきつとそれを叶えられるから」

「でも……、本当にいいんですか？」

「うん。俺にできることなら」

光上にできることではない。光上にしかできないことだ。

圭は恥ずかしそうにしながらも、消え入りそうな声でお願いを言った。

「手を、繋ぎたいです」

「手？ それでいいならいくらでも」

「ありがとうございます」

会計を済ませ、店を出たところで手を繋ぐ。建物の中はもちろん冷房が効いていて、手を繋いでいても暑くない。

手を繋ぐ。たったそれだけの行為。けれどそれは圭にとって大きなもので、感情を隠さずに笑顔を咲かせた。

「実は白銀さんにプレゼントしたいものがあって、それを預けてる店に今から行くこうと思うんだけどいいかな？」

「もちろんです！ プレゼントまでいたただけてるだなんて」

「誕生日プレゼントは欠かせないからね」

「何から何までありますがどうございます」

「喜んでもらえるか緊張するよ」

貰えるだけでも嬉しい。親友の萌葉からは扱いに困るものがプレゼントされたりするが、光上ならそんな事はないと信じられる。その期待感を感じ取り、光上はハラハラしながら店へと向かった。

女性へのプレゼント。どういうものかいいのかは迷った。情報通であり女子であるマス部に相談し、店の商品を確認。フランスに間に考え抜き、時差を計算して店に電話を入れて確保した。それを今から圭に渡す。大勝負をする気分だった。

「光上です。預かってもらっていたものを受け取りに来たのですが」

「光上様ですね。少々お待ちください」

女性へのプレゼント。考えれば考えるほどわからなくなったが、無難なものでいいのだと教わった。定番とも言えるかもしれない。

光上が買ったのはアクセサリ。ネックレスだ。

圭のイメージを考えて決めたもの。完全なオーダーメイドともなると重いと考え、イメージに合わせる程度のオーダーメイドにしておいた。「お待たせしました。お会計はお済みになられてますので、商品の受け渡しだけになります」

「ありがとうございます」

「プレゼントですよ。彼女様にお似合いだと思いますよ」

「かのっ!？」

「そう言ってもらえると嬉しいですね」

「かの……え？ 光上さん、え？ え？」

「とりあえずお店出よっか」

彼女というワードを否定されなかったことで、圭は完全に混乱した。赤く染まった頬をそのままに、光上に手を引かれて店の外へ。場所を移動し、ひと目につきにくい場所のベンチに座る。放心気味の圭を座らせ、その隣に光上は腰を下ろしてプレゼントを渡した。

「ありがとうございます。……中を見ても？」

「うん。緊張するけど」

綺麗に梱包された箱を袋から取り出す。巻かれているリボンを丁寧に外し、箱を取り出してそれを開ける。中に入っていたのはネックレスで、月のレリーフがある。白銀の三日月があり、その三日月が蒼色の輝きを包んでいる。

「綺麗……。本当にこれを私に？」

「似合うと思って」

「嬉しいです。本当に。……つけていいですか？」

「もちろん」

「では、光上さん。つけてください」

「……わかった」

にこにこ心からの笑顔で言われると、それを拒む理由なんて見つからない。圭はそのきめ細かな髪を上げ、光上がネックレスをつけやすいようにする。そうすることでもいつも隠れているうなじが顕になり、その仕草を含めて光上は不意に胸を高鳴らせられた。

胸の音を無視し、可及的速やかにネックレスを圭につけた。それが終わると圭も髪を下ろし、自分の胸元にあるネックレスを見つめてから光上を覗き込むように見上げる。

「どうですか？」

「綺麗だよ白銀さん。中学生と思えないくらいに、大人っぽい」

「嬉しいような、普段子どもって見られてるのが悲しいような」

「ええ……。中学生は子どもだと思っただけだな……」

「むうう、光上さんもそう言うんですね。……でも、今は許してあげます」

「ありがとうございます？」

首を傾げた光上に圭はくすくすと笑い、彼の腕に自分の腕を絡めた。抱きついたと言ったほうが正しいか。彼女の控えめな胸が腕に当たり、高まっている心音も伝わってくる。光上もまた、どうしようもなく鼓動が速くなった。

「今日は特別な日、ですもんね？」

「う、うん」

「なら、甘えちゃいます」

「いいんじゃないかな。いつも頑張ってるし」

珍しく辿々しく答える光上に、圭はこういうのも効果的なのかと理解した。けれど今後は使えないとも思った。まず自分が持ちそうにないから。誕生日という特別感によって、自分を言い聞かせることでできてることなのだから。

それでも、今のこれは最大限に活用したい。次に繋げるために。

「光上さん」

「うん？」

「……花火大会。一緒に行きたいです」

デートの誘い。夏のデートの定番にしてビッグイベントと呼べるもの。

圭の鼓動はこれでもかと高鳴り、それが腕を通じて光上に伝わる。緊張しているのも、圭の腕の震えで伝わる。その澄んだ瞳に映るのは不安と期待。

「いいよ。一緒に行こう」  
それはすぐに歓喜へと染まるのだった。